經典部

第三卷

BL
1411
T8J3
1929
v.3

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂
國譯大藏經

LIBRA
MAY 31
LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO
BL
1411
T8J3
1929
V. 3

昭和新纂 國譯大藏經 經典部 第三卷

摩訶般若波羅蜜經第一 目次

卷第一

序品第一……一

奉鉢品第二……一五

習應品第三……一七

卷第二

往生品第四……二九

數度品第五……四四

舌相品第六……四五

三假品第七……四七

卷第三

勸學品第八……………………五五
集散品第九……………………五九
相行品第十……………………六九

卷第四

幻學品第十一……………………七八
句義品第十二……………………八七
金剛品第十三……………………九二
樂說品第十四……………………九五
辯才品第十五……………………九七
乘乘品第十六……………………一〇五

卷第五

莊嚴品第十七……………………一〇八
問乘品第十八……………………一一六

卷第六

廣乘品第十九……………………一二九

發趣品第二十……一四一
出到品第二十一……一五三
勝出品第二十二……一五八
等空品第二十三……一六三

卷第七

會宗品第二十四……一七五
十無品第二十五……一七六
無生品第二十六……一八八
問住品第二十七……一九八

卷第八

幻聽品第二十八……二〇九
散華品第二十九……二一三
三歎品第三十……二二一
滅淨品第三十一……二二五

卷第九

大明品第三十二……………………………………二三四
述成品第三十三……………………………………二四三
勸持品第三十四……………………………………二四四
遣異品第三十五……………………………………二四八
尊導品第三十六……………………………………二五一

卷第十

法稱品第三十七……………………………………二五九
法施品第三十八……………………………………二七一

卷第十一

隨喜品第三十九……………………………………二八四
照明品第四十………………………………………二九九
信毀品第四十一……………………………………三〇六

卷第十二

歎淨品第四十二……………………………………三一五
無作品第四十三……………………………………三二一

徧數品第四十四……三三五

卷第十三

聞持品第四十五……三三九
魔事品第四十六……三五六

卷第十四

兩過品第四十七……三六四
佛母品第四十八……三七四
問相品第四十九……三八一

卷第十五

成辦品第五十……三九〇
譬喩品第五十一……三九六
知識品第五十二……四〇二
趣智品第五十三……四一〇

卷第十六

大如品第五十四……四一四

不退品第五十五……四二九
卷第十七
堅固品第五十六……四三七
深奧品第五十七……四四五
夢行品第五十八……四五六
卷第十八
河天品第五十九……四六六
不證品第六十……四六八
夢誓品第六十一……四七四
卷第十九
魔愁品第六十二……四八九
等學品第六十三……四九三
淨願品第六十四……四九九
度空品第六十五……五〇六

摩訶般若波羅蜜經　第一

經典部
第三卷

【序品】通別兩序を明し佛略して宗を開く。
【王舍城】梵名ラージャグリハ(Rājagrha)中印度摩伽陀國の都城。
【耆闍崛山】梵名グリドフラクータパルヷタ(Grdhrakūtaparvata)鷲頭山或は靈鷲山と譯す。
【摩訶比丘僧】摩訶は大或は多、比丘は乞士と譯す。多くの聲聞比丘の意。
【阿羅漢】アルハン(Arhan)應供、殺賊等と譯す。
【諸漏】三界の欲色無色煩惱。
【心好解脫】煩惱修惑を離るるを心解脫、不退を得るを好解脫と云ふ。慧解脫は無明、見惑を離るることを云ふ。
【摩訶那伽】マハーナーガ(Mahānāga)大龍と譯す。

摩訶般若波羅蜜經　卷第一

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

序品第一

是の如く我聞けり。一時、佛、王舍城、耆闍崛山の中に住したまふ。摩訶比丘僧大數五千分と共なり。皆是れ阿羅漢なり、諸漏已に盡き、復煩惱無し、心好解脫を得、慧好解脫を得、心調ひ柔輭に、摩訶那伽、所作已に辦じ、擔を棄てて能く擔し、已利を逮得し、諸の有結を盡し正智已に解脫を得たり。唯阿難の學地に在て須陀洹を得たるのみ。復五百比丘尼優婆塞優婆夷等あり、皆聖諦を得たり。復菩薩摩訶薩あり、皆陀羅尼及び諸の三昧を得、空無相無作を行じ、已に等忍を得、無閡陀羅尼を得、悉く是れ五通あり、言は必ず信受せられ、復懈怠無し、已に利養名聞を捨てて、說法悕望する所なし、深法忍を度り、無畏力を得、諸の魔事を過ぎ、一切の業障悉く解脫することを得たり。巧く因緣法を說く、阿僧祇劫より以來大誓願を發し、顏色和悅常に先づ問訊す、語る所麤ならず大衆の中に於て畏るる所なし。無數億劫に說法巧出す。諸法は幻の如く燄の如く水中の月の如く虛空の如く響の如く揵闥婆城の如く夢の如く影の如く鏡中の像の如く化の如しと解了し、

五千羅漢の僕隷なるを云ふ。
【擔を棄て】羅漢重擔の五蘊を除く。
【能く捨し】佛法の大事を能く捨ず。
【有結】欲有、色有、無色有の三有、愛恚慢癡疑見取慳嫉の九結。
【正智】邪見によらず、佛を信じて解脫す。
【阿難】アーナンダ（Ananda）佛に常侍すること二十餘年多聞第一と稱せらる。佛の從弟にあたる。
【學地】羅漢に達せざるもの。
【須陀洹】スローターパンナ（Srotāpanna）預流、聲聞四果の第一。
【四諦】苦集滅道の四諦。
【菩薩摩訶薩】ボーディサットヴァ・マハーサットヴァ（Bodhisattva-Mahasattva）。佛道衆生、大勇心或は覺有情大

無閡無所畏を得て、悉く衆生心行の趣く所を知り、微妙の慧を以て之を度脫し、意に罣閡なく大忍成就し實の如く巧に度す。無量の諸佛國土を願受し、無量國土諸佛三昧常に現在前するを念ふ。能く無量の諸佛を請じ、能く種種の見纏及び諸の煩惱を斷ち、百千三昧に遊戲し出生す。諸の菩薩、是の如き等の種種の無量功德成就せり。其名を颰陀婆羅菩薩、羅那伽羅菩薩、導師菩薩、那羅達菩薩、星得菩薩、水天菩薩、主天菩薩、大意菩薩、益意菩薩、增意菩薩、不虛見菩薩、善進菩薩、勢勝菩薩、常勤菩薩、不捨精進菩薩、日藏菩薩、不缺意菩薩、觀世音菩薩、文殊師利菩薩、執寶印菩薩、常擧手菩薩、彌勒菩薩と曰ふ。是の如き等の無量百千萬億那由他の諸の菩薩摩訶薩、一切の菩薩皆是れ補處にして、尊位に紹ぐ者なり。

爾時世尊自ら師子座を敷き結跏趺坐して身を直くし、念を繋け前に在り、三昧王三昧に入りたまふ。一切の三昧悉く其中に入る。是時世尊三昧より安詳にして起ち、天眼を以て世界を觀視し、擧身微笑し、足下千輻相輪の中より六百萬億の光明を放ち、足の十指兩踝、兩踹、兩膝、兩髀、腰脊、腹脇、背臍、心胸、德字、肩臂、手の十指、項口、四十齒、鼻の兩孔、兩眼、兩耳、白毫相、肉髻より、各六百萬億の光明を放ちたまふ。是の諸の光より大光明を出し、徧く三千大千國土を照し、三千大千國土より徧く東方如恆河沙等の諸佛國土を照す、南西北方四維上下も亦復是の如し。若し衆生ありて斯光に遇ふ者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん、光明は東方如恆河沙等の諸佛國土に出過す。南西北方四維上下も亦

有情と譯す。成佛を願ふ大乘の行者精進不退なる者なり。

【陀羅尼】ダーラニー(Dhārani) 總持又は能持と譯す。種種の善法を集め持ちて散失せしめず、諸の惡法を捨離して生ぜざらしむること。

【三昧】サマーデイ(Samadhi) 等持と譯す。定を修すれば心を一境に安住せしめて動かざるが故に名づく。

【空無相無作】三三昧、三解脫門といふ。空は萬有の皆空なることを觀ず。無相は萬有に差別のすがたなしと觀ず。無作は前の二を根柢として、その上に欲求の思を離るること。

【等忍】一切衆生に於て等心等念等愛等利し八不中道等を得、善惡諸法に於て不二實相に入

復是の如し。爾時世尊、擧身の毛孔皆亦微笑して、諸の光を放ち、徧く三千大千國土を照し、復十方如恒河沙等の諸佛の國土に至る。若し衆生ありて此光に遇ふ者は必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。爾時世尊常光明を以て徧く三千大千國土を照し、亦東方如恒河沙等の諸佛の國土に至る。乃至十方も亦復是の如し。若し衆生ありて斯光に遇ふ者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。爾時世尊廣長の舌相を出して徧く三千大千國土を覆ひて熈怡微笑したまふ。其舌根より無量千萬億の光を放つ、是の一一の光化して千葉の金色の寶華と成る、是の諸の華の上に皆化佛有り、結跏趺坐して、六波羅蜜を說く。衆生聞く者必ず阿耨多羅三藐三菩提を得、復十方如恒河沙等の諸佛の國土に至るまで皆亦是の如し。爾時世尊故らに師子座に在り、師子遊戲三昧に入り、神通力を以て三千大千國土を感動し六種に震動す、東に踊り西に沒み、西に踊り東に沒み、南に踊り北に沒み、北に踊り南に沒み、邊に踊り中に沒み、中に踊り邊に沒む。地皆柔輭にして衆生をして和悅せしむ。是三千大千國土の中の地獄餓鬼畜生及び八難處、卽時に解脫し天上に生ずることを得、四天王天處より乃ち他化自在天處に至る。是の諸の天人自ら宿命を識り、皆大に歡喜し、佛所に來詣し頭面佛足を禮し、卻きて一面に住す。是の如く十方如恒河沙等の國土、地皆六種に震動し、一切の地獄餓鬼畜生及び八難處、卽時に解脫し天上に生ずることを得て第六天に齊る。爾時此三千大千國土の衆生、盲者視るを得、聾者聽くを得、瘂者能く言ひ、狂者正を得、亂者定るを得、裸者衣を得、飢渴者飽滿するを得、病者愈ゆるを得、形殘者具足するを得、一

る。

【無閡陀羅尼】諸陀羅尼中の最上、諸大菩薩の具するところ、說法教化の根本なり。

【五通】如意神足、天眼、天耳、他心智、宿命の五。

【深法忍】甚深の無上法忍、深く諸法の實相に入りて動轉せず、能く彼岸に到る。

【無畏力】佛菩薩の具する力の一。智慧うちにある故大衆の中にありて法を說くも少しも畏るゝ所なきをいふ。

【因緣法】十二緣起法門をいふ。

【阿僧祇劫】アサンキエーヤカルパ(Asankhyeya-Kalpa)。無央數劫と譯す。劫につきて大論五に譬喩を述ぶ。

【大誓願】菩薩の總願。度一切生、斷煩惱、成等正覺心なり。

切衆生皆等心を得、「相視ること父の如く母の如く兄の如く弟の如く姉の如く妹の如く、亦親族及び善知識の如し」。是時衆生等十善業道を行じ梵行を淨修し、諸の瑕穢なく恬然快樂、譬へば比丘第三禪に入り、皆好慧を得、戒を持ち自ら守り衆生を嬈らざるが如し。

爾時世尊、師子座の上に在りて坐したまふ。三千大千國土の中に於て、其德特尊に、光明色像威德巍巍たり、徧く十方如恆河沙等の諸佛の國土に至る、譬へば須彌山王の光色殊特にして、衆山の能く及ぶ者なきが如し。爾時世尊、常身を以て此三千大千國土の一切衆生に示す。是時、首陀會天、梵衆天、他化自在天、化樂天、兜率陀天、夜摩天、三十三天四天王天、及び三千大千國土の人と非人と、諸の天華、天瓔珞、天澤香、天末香、天靑蓮華、赤蓮華、白蓮華、紅蓮華、天樹葉香を以て、持て佛の所に詣る、是の諸の天華乃至天樹葉香を以て佛の上に散ず、散ずる所の寶華、此三千大千國土の上に於て、虛空の中に在り化して大臺と成る。是華臺の邊に諸の瓔珞を垂る、雜色の華蓋五色繽紛たり、是の諸の華蓋瓔珞、徧く三千大千國土に滿つ、是華蓋瓔珞を以て嚴飾するが故に、此三千大千國土皆金色と作る、及び十方如恆河沙等の諸佛の世界も及び皆亦是の如し。爾時、三千大千國土及び十方の衆生各々自ら念ふ、「佛獨り我が爲に法を說き餘人の爲にせず」と。爾時世尊、師子座に在りて熙怡微笑したまふ、光口より出て徧く三千大千國土を照す、此光を以ての故に、此の間三千大千國土の中の衆生、皆東方如恆河沙等の諸佛及び僧を見る。彼間如恆河沙等の國土の中の衆生、亦此間三千大千國土の中の釋迦牟尼佛及び諸の大衆を

【犍闥婆城】ガンダルヴ・ナガラ（Gandharva-Nagara）龍神が空中に現す城廓。一種の蜃氣樓。

【無閡無所畏】菩薩自智に於て一切處一切經等に無閡にして大衆中に畏れず。

【罣閡】怨親等の差別に閡げらるるを云ふ。

【大忍】等忍法忍進みて無生忍を得十方諸佛現前を見る。

【見】分別すること。二見、四見、五見、乃至六十二見等。

【纒】纒縛の義、煩惱のこと。

【遊戲出生】諸三昧を生じて出入自在なるをいふ。

【跋陀婆羅】バドラハーラ（Bhadrapala）賢護と譯す。賢劫千佛の一。

【闍那伽羅】ラトナーカラ（Ratnak

見る、南西北方四維上下も亦復是の如し。

是時東方如恆河沙等の諸佛の國土を過ぎ、其國の最邊に在る國を多寶と名け、佛を寶積と號す。今現に在して、諸の菩薩摩訶薩の爲に、般若波羅蜜を說きたまふ。彼國に菩薩有り、名けて普明と曰ふ。大光明を見、地大に動くを見、又佛身を見たてまつり、寶積佛の所に到り、佛に白して言さく「世尊、今何の因、何の緣ありて、此光明有り世間を照し、地大に震動し、及び佛身を見るや。」寶積佛普明に報へて言はく、「善男子、西方如恆河沙等の國を度りて、世界有り娑婆と名く、佛有り釋迦牟尼と號す、今現に在して諸の菩薩摩訶薩の爲に、般若波羅蜜を說かんと欲す、是れ其神力なり。」是時、普明菩薩寶積佛に白して言さく「世尊、我れ今往きて釋迦牟尼佛に見え、禮拜供養し、及び彼の諸の菩薩摩訶薩尊位に紹ぐ者、皆陀羅尼及び諸の三昧を得、諸の三昧に於て自在を得たるを見るべし。」佛普明に告げたまはく、「往かんと欲せば意に隨へ、宜しく是時を知るべし」と、爾時寶積佛、千葉金色の蓮華を以て普明菩薩に與へて、之に告げて曰はく「善男子、汝此華を以て、釋迦牟尼佛の上に散ぜよ、彼の娑婆世界の中に生ずる諸の菩薩勝ち難く及び難し。汝當に一心に以て彼の國に遊ぶべし。」爾時普明菩薩、寶積佛より千葉金色の蓮華を受け、無數の出家在家の菩薩及び諸の童男童女と倶に共に發引す。皆東方の諸佛を供養し恭敬し尊重し讚歎す。諸の華香瓔珞澤香末香塗香衣服幢蓋を持つて、釋迦牟尼佛の所に向ふ。到り已りて頭面佛足を禮し一面に立ちて佛に白して言さく「寶積如來問を致す、世尊、少

ara)。寶積、寶生と譯す。
【那羅達】ナーラーダッタ(Naradatta)。人授と譯す。
【觀世音】アヷローキテーシュヷラ(Avalokitesvara)の舊譯。新譯には觀自在といふ。
【文殊師利】マンジュシュリー(Mañjusri)。妙吉祥、妙德、妙首と譯す。
【彌勒】マイトレーヤ(Maitreya)慈氏と譯す。
【那由他】ナユタ(Navuta)數名、千萬億なり。
【補處】佛處を補ひ紹ぐをいふ。
【二】放光現瑞を述ぶ。一神力、二一切毛孔微笑、三常光一丈、四舌相遍覆、五師子三昧大千震動、六最勝身成德、七常身示現について。
【師子座】佛の坐し給ふ床座をいふ。
【結跏趺坐】坐相

惱少患起居輕利氣力安樂なりや不や、又此の千葉金色の蓮華を以て世尊に供養す。」爾時釋迦牟尼佛、是千葉金色の蓮華を受け、以て東方如恆河沙等の諸の國土の中の佛に散す。散ずる所の寶華、東方如恆河沙等の諸佛の國土に滿ち、一一の華の上に皆化菩薩有り、結跏趺坐して六波羅蜜を說く、此法を聞く者必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る、諸の出家在家の菩薩及び諸の童男童女、頭面釋迦牟尼佛の足を禮し、各供養の具を以て釋迦牟尼佛を供養し恭敬し尊重し讚歎す。是の諸の出家在家の菩薩及び諸の童男童女、各々善根福德力を以ての故に、釋迦牟尼佛、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀を供養することを得たり。

南方如恆河沙等の諸佛の國土を度り、其國の最邊に在る國を離一切憂と名け、佛を無憂德と號し、菩薩を離憂と名く。西方如恆河沙等の諸佛の國土を度り、其國の最邊に在る國を滅惡と名け、佛を寶山と號し、菩薩を儀意と名く。北方如恆河沙等の諸佛の國土を度り、其國の最邊に在る國を勝と名け、佛を勝王と號し、菩薩を德勝と名く。下方如恆河沙等の諸佛の國土を度り、其國の最邊に在る國を善と名け、佛を善德と號し、菩薩を華上と名く。上方如恆河沙等の諸佛の國土を度り、其國の最邊に在る國を喜と名け、佛を喜德と號し、菩薩を德喜と名く。是の如く一切皆東方の如し。

爾時、是三千大千國土皆成じて寶華と爲り、徧く地を覆ひ、繒幡蓋を懸け、香樹華樹皆悉く莊嚴せり、譬へば華積世界普華佛國の如し。妙德菩薩、善住意菩薩及び餘の大威神の諸の菩薩、皆彼に在りて住す。爾時佛、一切世界若は天世界若は魔世界若は梵世界若は

身直く心正しく、安穩疲れず。

【三昧王三昧】　佛三昧中の第一。

【安詳】　安靜庠序たり。

【千輻相輪】　三十二相の一。如來の御足の趺の下にある千の輻輪の文をいふ。

【德字】　胸の卍字相。

【四十齒】　三十二相の一として佛齒四十ありといふ。

【白毫相】　三十二相の一眉間に婉旋せる白玉の毫に名く。

【肉髻】　三十二相の一。佛の頂上の肉の高起して髻の如くなれるをいふ。

【阿耨多羅三藐三菩提】アヌッタラ・サムミヤクサンボーディ(Anuttara-Samyaksambodhi)無上正等正覺と譯す。佛の覺智をいふ。

【常光明】　三十二

沙門婆羅門、若は天若は乾闥婆人阿修羅等、及び諸の菩薩摩訶薩尊位に紹ぐ者、一切皆集まれるを知り、佛衆會已に集まれるを知りたまふ。

佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、一切種智を以て一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩云何が一切種智を以て一切法を知らんと欲する。』佛舍利弗に告げたまはく『菩薩摩訶薩不住法を以て般若波羅蜜の中に住すべし、無所捨法を以て檀那波羅蜜を具足すべし、施す者受くる者及び財物不可得の故に。罪不罪不可得の故に、尸羅波羅蜜を具足すべし。心動かざるが故に、羼提波羅蜜を具足すべし。身心精進懈怠せざるが故に、毘梨耶波羅蜜を具足すべし。不亂不味の故に禪那波羅蜜を具足すべし。一切法に於て著せざるが故に、般若波羅蜜を具足すべし。菩薩摩訶薩不住法を以て般若波羅蜜の中に住すべし。不生の故に、四念處、四正懃、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空三昧、無相三昧、無作三昧、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處、九相、脹相、壞相、血塗相、膿爛相、青相、噉相、散相、骨相、燒相、念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念入出息、念死、十想、無常想、苦想、無我想、食不淨想、一切世間不可樂想、死想、不淨想、斷想、離欲想、盡想、十一智、法智、比智、他心智、世智、苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智、如實智、三三昧、有覺有觀三昧、無覺有觀三昧、無覺無觀三昧、三根、未知欲知根、知根、知已根を具足すべし。舍利弗、菩薩摩訶薩徧く

佛の十力、四無所畏、四無閡智、十八不共法、大慈大悲を知らんと欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし。菩薩摩訶薩道慧を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし、道慧を以て道種慧を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし、道種慧を以て一切智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし、一切智を以て一切種智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし、一切種智を以て煩惱習を斷せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩菩薩の位に上らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。聲聞辟支佛地を過ぎ阿惟越致地に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩六神通に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切衆生の意の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩一切聲聞辟支佛の智慧に勝れんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。諸の陀羅尼門諸の三昧門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切聲聞辟支佛を求むる人の布施する時、隨喜心を以て其上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切聲聞辟支佛を求むる人の持戒する時、隨喜心を以て其上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切聲聞辟支佛を求むる人の三昧智慧解脫解脫知見に於て、隨喜心を以て其上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切聲聞辟支佛を求むる人の、諸の禪定解脫三昧に於て、隨喜心を以て其上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩、少施少戒少忍少進少禪少智を行じ、方便力廻向を以

相の一。釋迦佛身四邊一丈の光あり

【舌相】舌の形相證誠不虛を表す。

【六波羅蜜】施戒忍進定慧の六度、波羅蜜（パーラミターPāramitā）は到彼岸と譯す。

【師子遊戲三昧】師子の塊を搏つ如く自在なり。

【八難處】地獄等の三塗、在長壽天、在北倶盧洲、聾盲瘖瘂、邪見、生佛前佛後の難をいふ。

【四天王天】他化自在天等と共に六欲天なり。

【形殘者】醜陋壞殘毀せる者。

【等心】眞の等心は無我無欲なるも怨讐をも父母の如く視るをいふ。

【十善業道】身業道不殺、不盜、不邪淫の三、口業道不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語の四、意業道不瞋、不貪、不邪見の三。

【梵行】清淨なる行のこと。
【常身】佛の眞身
【首陀會】シュッダーヷーサ(Suddhavasa)淨居と譯す。阿那含聖者の住處とす。
【梵衆】ブラフマパーリシャドヤーフ(Brahmaparisadya三)。色界初禪天の第一。
【他化自在天】六欲天の一。その最高位にあるを以て第六天ともいふ。欲界の天主魔王の住所。
【化樂天】樂變化天ともいふ、六欲天の第五。
【兜率陀天】ツシタ(Tusita)。知足と譯す。欲界第四天。
【夜摩天】ヤーマ(Yama)。善時、或は時分と譯す、欲界第三天。
【三十三天】梵にトラーヤストリンシャーフ(Trayast

ての故に、無量無邊功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩世世の身體をして佛と相似ならしめんと欲し、三十二相八十隨形好を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩の家に生ぜんと欲し、童眞地を得んと欲し、諸佛を離れざるを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。諸の善根を以て諸佛を供養し恭敬し尊重し讚歎し、意に隨て成就せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切衆生の願ふ所の飮食衣服臥具塗香車乘房舍床榻燈燭等を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩如恆河沙等の諸佛の國土の衆生をして檀那波羅蜜に立ち、尸羅、羼提、毘梨耶、禪那、般若波羅蜜に立たしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一善根を佛福田の中に植ゑ、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで盡きざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩十方の諸佛をして其名を稱讚せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩一たび意を發し、十方如恆河沙等の諸佛の國土に到らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩一たび音を發し、十方如恆河沙等の諸佛の國土をして聲を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩諸佛の國土をして斷えざらしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、內空、外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、

rimśah）六欲天の第二。
【四天王天】六欲天の第一。佛法を護る四王の住所。
【天華】天より雨らす華。
【澤香】所在の地に塗るもの。
【末香】散敷する香。
【二】以下十方相見の大衆來會供養を明す。
【多寶】梵にラトナーワット(Ratnavat)といふ。
【寶積】梵にラトナーカラ(Ratnākara)といふ。
【普明】梵にサマンタラスミン(Samantarasmin)といふ。
【多陀阿伽度】タターガタ(Tathāgata)如來と譯す。
【阿羅訶】アルハン(Arahan)阿羅漢に同じ。應供と譯す。
【三藐三佛陀】サムミヤクサンブッ

性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩諸法の因緣、次第緣、緣緣、增上緣を知らんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩諸法の如、法性、實際を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜に住すべし。

(三)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩三千大千國土の大地諸山の微塵を數知せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩一毛を析きて百分と爲し、一分毛を以て盡く三千大千國土の中の大海江河池泉の諸水を擧げて、水の性を嬈さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。三千大千國土の中の諸火一時に皆然え、譬へば劫盡き燒くるが如き時、菩薩摩訶薩一たび吹きて滅せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。三千大千國土の中の諸の大風起り三千大千國土及び諸の須彌山を吹破せんと欲して、腐草を摧くが如くならんに、菩薩摩訶薩、一指を以て其風力を障へ起らざらしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩一たび結跏趺坐し、三千大千國土の虛空に遍滿せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩一毛を以て三千大千國土の中の諸の須彌山王を擧げ、他方無量阿僧祇の諸佛の國土に擲過し、衆生を嬈さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一食を以て十方各如恒河沙等の諸佛及び僧を供養せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一衣華香瓔珞末香塗香燒香燈燭幢幡華蓋等を以て、諸佛及び僧を供養せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩十方各如恒河沙等の

ダ(Samyaksanbuddha)。正徧智と譯す。佛のさとりのこと。
【離一切憂】梵にサルヴァショーカーヴァガタ(Sarvaśokavagata)といふ。
【離憂】梵にギガターショーカ(Vigataśoka)といふ。
【滅惡】梵にウパシャーンタ(Upaśanta)といふ。
【寶山】梵にラトナールチ(Ratnārcī)といふ。
【儀意】梵にチャーリトラマチ(Cāritramati)といふ。
【勝】梵にジャヤ(Jaya)といふ。
【勝王】梵にジャエンドラ(Jayendra)といふ。
【徳勝】梵にジャヤダッタ(Jayadatta)といふ。
【華積世界等】華嚴樹莊嚴の故に華の淨界を例とす。
【天世界】欲天色天無色天に通ずる

國土の中に衆生をして悉く戒三昧智慧解脱解脱知見を具せしめ、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果を得しめ、乃至無餘涅槃を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、布施する時是の如く分別すべし。是の如き布施は大果報を得、是の如き布施は、刹利大姓婆羅門大姓居士大家に生ずることを得、是の如き布施は四天王天處三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天に生ずることを得、是の布施に因りて初禪二禪三禪四禪無邊空處無邊識處無所有處非有想非無想處に入ることを得、是布施に因りて能く八聖道分を生ずることを得、是布施に因りて能く須陀洹道乃至佛道を得んとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ布施する時、慧方便力を以ての故に、能く檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足す。」舍利弗佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩云何が布施する時慧方便力を以ての故に、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足するや。」佛舍利弗に告げたまはく「施す人受くる人財物は得べからざるが故に能く檀那波羅蜜を具足す、罪不罪得べからざるが故に尸羅波羅蜜を具足す、心動ぜざるが故に羼提波羅蜜を具足す、身心精進懈怠せざるが故に毘梨耶波羅蜜を具足す、不亂不味の故に禪那波羅蜜を具足す、一切法不可得と知るが故に般若波羅蜜を具足す。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩過去未來現在の諸佛の功徳を得んと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩有爲無爲法の彼岸に到らんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩過去未來現在の諸法の如法相

も特に欲天。大論は之を四王忉利として次の天を夜摩兜率化樂愛身天とす。(大論十)

【魔】マーラ(Māra)他化自在天のこと。

【梵世】ブラフマローカ(Brahmaloka)。大梵天(マハーブラフマー Mahabrahma)に同じ

【沙門】桑門、沙門那等といふ。シュラマナ(Sramana)の音譯。勤息と譯す。出家して佛道を修むる者。

【婆羅門】ブラフマナ(Brahmana)。淨行と譯す。四姓の最高に位する宗教に携る階級。

【乾闥婆】ガンダルヴ(Gandharva)尋香と譯す。八部の一。

【阿修羅】アスラ(Asura)非天と譯す。八部の一。

【舍利弗】シャーリプトラ(Sariput

無生際を知らんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし、復次に舍利弗、菩薩摩訶薩一切聲聞辟支佛の前に在らんと欲し、諸佛に給侍せんと欲し、諸佛の內眷屬たらんと欲し、大眷屬たることを得んと欲し、菩薩の眷屬たることを得んと欲し、大施を淨報せんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩慳心破戒心瞋恚心懈怠心亂心癡心を起さざらんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩一切衆生をして布施福處持戒福處修定福處勸導福處に立たしめんと欲し、衆生をして財福法福處に立たしめんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩五眼を得んと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。何等をか五眼とす。肉眼天眼慧眼法眼佛眼なり。菩薩摩訶薩天眼を以て十方如恆河沙等の國土の中の諸佛を見たてまつらんと欲し、天耳を以て十方諸佛の所說の法を聞かんと欲し、諸佛の心を知らんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。十方諸佛の所說の法を聞き、聞き已りて乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで忘れざらんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩過去未來の諸佛の國土を見、及び現在の十方諸佛の國土を見んと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩十方諸佛の所說の十二部經、修多羅、祇夜、受記經、伽陀、憂陀那、因緣經、阿波陀那、如是語經、本生經、方廣經、未曾有經、論議經を聞かんと欲し、諸の聲聞等聞くと聞かざると、盡く誦して受持せんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし、十方如恆河沙等の世界の中の諸佛所說の法、已に說き今說き當に說くべきを聞き已りて、一切信持し自ら

三)。佛弟子中智慧第一。正宗分の對告衆たり。
【一切種智】一種の智を以て一切諸佛の道法にて了達し一切衆生の因種を知り、種種の法門を觀じて、諸の無明を破する智慧。
【一切法】蘊處界等種種に分類せらるる無量の法。
【不住法】法に有無生滅等定住する所なきなり。
【般若波羅蜜】プラジュニャーパーラミター(Prajñāpāramitā)。般若は智慧と譯す。六度の一。菩薩が一切の諸法を照了して一切通達無礙なるをいふ。
【無所捨法】法空無我を證得して施捨なく眞の施にて名く。
【檀那波羅蜜】ダーナパーラミター(Dānapāramitā)。檀那は施と譯す。

行じ、亦他人の爲に說かんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩過去の諸佛已に說き未來の諸佛當に說くべきを聞かんと欲し、聞き已りて自ら利し亦他人を利せんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。十方如恆河沙等の諸の世界の中間闇き處日月に照されざる處を、光明を持し普く照さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。十方如恆河沙等の世界の中佛名法名僧名有るなきところに、一切衆生をして皆正見を得て三寶の名を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。十方如恆河沙等の諸の世界の中の衆生をして、我が力を以ての故に、盲者視るを得聾者聽くを得狂者念を得裸者衣を得飢渴者飽滿を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩若し十方如恆河沙等の世界の中の衆生の諸の三惡趣に在る者をして、我が力を以ての故に、皆人身を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。十方如恆河沙等の世界の中の衆生をして、我が力を以ての故に、戒三昧智慧解脫解脫知見に立ち須陀洹果乃至阿耨多羅三藐三菩提を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩諸佛の威儀を學せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩象王の如き視觀を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩、是願を作し、我れ行く時地を離れ四指足地を蹈まざらしめ、我れ當に四天王天乃至阿迦尼吒天無量千萬億の諸天衆と共に圍繞し恭敬し、菩提樹下に至るべしとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。我れ當に菩提樹下に於て坐し、四天王天乃至阿迦尼吒天天衣を以て座と爲すべしとせば、當に般若波

六度の一。般若によりて無所捨たる故施波羅蜜なり。
【罪不罪不可得故】能持戒、所持戒不可得なれば罪不罪不可得なり。これ眞の戒度。
【尸羅波羅蜜】シーラパーラミター(Silaparamita)戒度と譯す。六度の一。身口意の惡を制すること。大論十三、十四に廣說す。
【羼提波羅蜜】クシャーンチパーラミター(Ksantiparamita)忍辱と譯す。六度の一。苦痛屈辱を忍びて、うらみを懷かざること。大論十四、十五。
【毘梨耶波羅蜜】ヸールヤパーラミター(Viryaparamita)精進度と譯す。六度の一。心を精一にして道に進むといふ義。大論十五、六。

羅蜜を學すべし。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、行住坐臥處悉く金剛たらしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩出家するの日卽ち阿耨多羅三藐三菩提を成じ、卽ち是日法輪を轉ず、法輪を轉ずる時、無量阿僧祇の衆生は遠塵離垢し、諸法の中法眼淨を得、無量阿僧祇の衆生は一切法を受けざるが故に、諸漏心解脫を得無量阿僧祇の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、無量阿僧祇の聲聞を以て僧と爲し、我れ一たび法を說く時、便ち座上に於て盡く阿羅漢を得しめんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。我れ當に無量阿僧祇の菩薩摩訶薩を以て僧と爲し、我れ一たび法を說く時、無量阿僧祇の菩薩皆阿惟越致を得べく、壽命無量光明具足を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。我れ阿耨多羅三藐三菩提を成する時世界の中婬欲瞋恚愚癡無く、亦三毒の名無く、一切衆生是の如き智慧ありて善施善戒善定善梵行善不嬈衆生を成就せしめんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。我れ般涅槃後法滅盡する無く、亦滅盡の名無からしめんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、十方如恒河沙等の世界の中の衆生、我が名を聞く者必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是の如き等の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。」

【不亂不味】麁細の亂なく愛着の味なし。

【禪那波羅蜜】デイヤーナパーラミター(Dhyanapāramitā) 定度と譯す。六度の一。俗縁を離れて繫縛を斷ち、慮を靜め心を明かにして眞正の理に達すること。大論十七。

【四念處】四念住ともいふ。身、受、心、法念住の稱。この四處に於いて不淨苦無常無我を觀ずるもの。

【四正勤】四正斷ともいふ。四善根位のうち。煖位にて修する行。已生未生の二惡を斷じ二善法を集むるために一心に精進すること。

【四如意足】四善根位の頂位にて修する行。欲、念、精進、思惟如意足この四事を以て意の如く所願を滿足

奉鉢品第二

佛舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、能く是功德を作せば、是時四天王皆大に歡喜し、意に念言すらく、「我等當に四鉢を以て上の菩薩に奉ること、前の天王の先佛に鉢を奉るが如くすべし」と。三十三天乃至他化自在天も亦皆歡喜し、意に念言すらく、「我等當に菩薩に給侍し供養し、阿修羅種を減損し諸天衆を增益すべし」と。三千大千國土の四天王天乃至阿迦尼吒天、皆大に歡喜し、意に念言すらく、「我等當に是菩薩に法輪を轉ぜんことを請ふべし」と。舍利弗、是菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、六波羅蜜を增益する時、諸の善男子善女人各々歡喜し、念言すらく、「我等當に是人の爲に父母妻子親族知識と作るべし」と。爾時、四天王天乃至阿迦尼吒天、皆大に歡喜し、各自ら念言すらく、「我等當に方便を作し、是菩薩をして婬欲を離れ、初發意より常に童眞と作らしめ、色欲と共會せしむるなかるべし」、若し五欲を受けば梵天に生ずることを障ふ、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。是を以ての故に、舍利弗、菩薩摩訶薩婬欲を斷つ出家は阿耨多羅三藐三菩提を得べし、斷たざるに非るなり。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩要らず當に父母妻子親族知識有るべきや。」佛舍利弗に告げたまはく、「或は菩薩あり父母妻子親族知識有り、或は菩薩有り初發心より婬欲を斷ち童眞の行を修し、乃至阿耨

するが故に。
【五根五力】信、進、念、定、慧の五つの根、根増長して傾壞されざるを力とす。
【七覺分】七覺支七菩提分ともいふ。擇法、精進、喜、輕安、捨、定、念の七。修道の時、その眞僞善惡を觀察覺了するに覺分と名く。
【八聖道分】正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八。
【空三昧】次の無相、無作の兩三昧とともに三三昧といふ。前說。
【四禪】覺觀喜樂を攝して初禪より第四禪となる。
【四無量】無限の慈悲喜捨。
【四無色定】空、識無所有、非有想非無想處定。
【八背捨】內有色外觀色、內無色外觀色、淨背捨身作

多羅三藐三菩提を得て、色欲を犯さず、或は菩薩有り、方便力の故に、五欲を受け已り、
出家して阿耨多羅三藐三菩提を得。譬へば幻師若くは幻師の弟子善く幻法を知り五欲を幻
作し中に於て共に相娛樂するが如し。汝が意に於て云何。是人此五欲に於て頗る實受あり
や不や。』舍利弗言はく。『不、世尊。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩方便力を以ての
故に五欲を化作す、中に於て樂を受け衆生を成就するも亦復是の如し。是菩薩摩訶薩欲に
染まず、種種の因緣をもつて五欲を毀呰す。欲を熾然と爲し、欲を穢惡と爲し、欲を毀壞
と爲し、欲を如怨と爲す。是故に舍利弗、當に知るべし、菩薩は衆生の爲の故に、五欲を
受く。』

(二)舍利弗佛に白して言さく、『菩薩摩訶薩云何が般若波羅蜜を行ずべきか。』佛舍利弗に告げた
まはく、『菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、菩薩を見ず、菩薩の字を見ず、般若波羅蜜を見
ず、亦我れ般若波羅蜜を行ずるを見ず、亦我れ般若波羅蜜を行ぜざるを見ず。何を以ての
故に、菩薩も菩薩の字も性空なり、空中には色も無く受想行識も無し、色を離れて亦空無
く、受想行識を離れて亦空無し。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色、受想行識は即ち是れ
空、空は即ち是れ識なり。何を以ての故に。舍利弗、但だ名字有るが故に菩提たりと謂ふ。
但だ名字有るが故に菩薩たりと謂ふ、但だ名字有るが故に空たりと謂ふ。所以は何ん、諸
法の實性は生無く滅無く垢無く淨無きが故に。菩薩摩訶薩是の如く行じて、亦生を見ず亦
滅を見ず亦垢を見ず亦淨を見ず。何を以ての故に。名字は是れ因緣和合の作法なり、但だ

證及び四無色定と滅受想定との八に內外の欲着を背捨す。大論廿一。

【八勝處】內有色相外觀色、內無色相外觀色の少多好醜と內無色相外觀の色の靑黃赤白との八に於て不淨觀を以て一切の貪を治す。

【九次第定】初禪乃至第四禪、四無色滅受想定。

【十一切處】靑黃赤白地水火風空識の十普遍を觀ず。

【九相】貪欲を滅し惑業を除く九種の不淨觀法。

【血塗相】死尸壞れて肉血塗漫す。

【噉相】鳥獸に噉食せらる。

【十想】九想の外他觀と異り自の內觀にして、この觀想が實行の基となりて遂に無漏道に入るなり。

【有覺有觀三昧】初めて色界初禪に

分別憶想假りに名を以て說く、是故に菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、一切の名字を見ず見ざるが故に著せず。」

習應品第三

(一)佛舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、是の如く思惟すべし。菩薩但だ名字有り、佛も亦但だ字有り、般若波羅蜜も亦但だ字有り、色も但だ字有り、受想行識も亦但だ字有るのみと。舍利弗、我の但だ字有るが如く一切我常に不可得なり、衆生の壽者命者生者養育衆數人者作者使作者起者使起者受者使受者知者見者、是一切皆不可得なり、不可得空の故に但だ名字を以て說くのみ。菩薩摩訶薩も亦是の如く般若波羅蜜を行じ、我を見ず衆生を見ず、乃至知者見者を見ず、所說の名字も亦見るべからず。菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を行ずることを作せば、佛の智慧を除き一切聲聞辟支佛の上に過ぎたり。不可得空を用ての故に。所以は何ん、是れ菩薩摩訶薩、諸の名字法、名字の所著する處亦不可得の故に。舍利弗、菩薩摩訶薩能く是の如く行ずるを般若波羅蜜を行ずと爲す。譬へば閻浮提に滿つる竹麻稻茅の如く、諸の比丘、其數是の如くにして、智慧舍利弗目揵連等の如くならんに、菩薩般若波羅蜜を行ずるの智慧に比せんと欲せば、百分一に及ばず、千分百千億分乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。何を以ての故に、菩薩摩訶薩、

入る時は覺觀ともに尚鮮かなる故。

【無覺有觀三昧】空、相無作に相應する心を以て定に入り、境進みてただ禪味の念のみありて覺知分別の心の滅したる時。

【無覺無觀三昧】前觀より更に定境進みて覺知分別の心も禪味の念も共に滅したる時。

【三根】廿二根中の知根にして無漏の信進念定慧喜樂捨意九根和合なり

【未知欲知根】見道の九根和合。

【知根】信解見得者修道の九根。

【知已根】無學者の九根。

【十力】處非處、業異熟、諸善解脫、根上下、種種勝解、種種界、遍趣行、天眼、宿命、漏盡の十智力。

【四無所畏】正智人漏盡障法出道を說くに怖畏なし。

智慧を用て一切衆生を度脫するが故に。舍利弗、閻浮提に滿つる舍利弗目揵連等の如くならんを置け。若し三千大千國土に滿つるもの舍利弗目揵連等の如くならんも、復是事を置け。若し十方如恆河沙等の國土に滿つるもの舍利弗目揵連等の智慧の如くならんも、菩薩般若波羅蜜を行ずるの智慧に比せんと欲せば、百分一に及ばず、千分百千億分乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、一日智慧を修せんに、一切聲聞辟支佛の上に出過す。」舍利弗佛に白して言さく、「世尊、聲聞の有ゆる智慧、若くは須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛の智慧、佛の智慧、是諸の衆智差別有る無く、相違背せざるべし、無生性空の故に。若は法相違背せざるべし、無生性空の故に。是法別異有る無くんば、云何が世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ一日智慧を修せんに、聲聞辟支佛の上に出過すと言ひたまふや。」佛舍利弗に告げたまはく、「汝が意に於て云何、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ一日智慧を修せば、心に我れ道慧を行じ一切衆生を益せんと念じ、當に一切種智を以て一切法を知り一切衆生を度すべし、諸の聲聞辟支佛の智慧に、是事有りとせんや不や。」舍利弗言さく、「不、世尊。」「舍利弗、汝が意に於て云何、諸の聲聞辟支佛頗る是念有り、我等當に阿耨多羅三藐三菩提を得、一切衆生を度し無餘涅槃を得しむべしとせんや不や。」舍利弗言さく、「不、世尊。」佛舍利弗に告げたまはく、「是因緣を以ての故に、當に知るべし諸の聲聞辟支佛の智慧菩薩摩訶薩の智慧に比せんと欲せば百分一に及ばず、千分百千億分乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。舍利弗、汝が意に於て云何、諸

【四無閡智】義法辭樂、說事滯らず。

【十八不共法】佛の有する十八種の獨特の法。身口意に失なく、無異想、無不定心、無不知已捨、欲、進、念、慧、解脫、解脫知見減ずるなく、身口意業智慧に隨ひ智慧三世を知るに無閡なり。大論廿六。

【大慈大悲】拔苦を慈、與樂を悲、佛眼究竟の故に大といふ。

【道慧】涅槃に趣くの道より乃至無量道を實相と知る。

【道種慧】諸道實相に即して重重差別を盡くるを知る。

【煩惱習】煩惱は三毒九十八使。習はその熏習の餘垢。

【聲聞】梵にシュラーヷカ(Śrāvaka)といふ。佛の教誨の聲をききて證る人といふ意。

【辟支佛】梵にプラティエーカブッ

の聲聞辟支佛頗る是念行り、我れ六波羅蜜を行じ、衆生を成就し、國土を莊嚴し、佛の十力四無所畏四無閡智十八不共法を具し、無量阿僧祇の衆生を度脫し、涅槃を得しめんとするや不や。」舍利弗言さく、『不、世尊。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は能く是念を作す、我當に六波羅蜜乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、無量阿僧祇の衆生を度脫し、涅槃を得しむべし、譬へば螢火蟲の是念を作さず、我が力能く閻浮提を照し普く大明ならしめんと。諸の阿羅漢辟支佛も亦是の如く、是念を作さず、我等六波羅蜜乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得、無量阿僧祇の衆生を度脫し、涅槃を得しむと。舍利弗、譬へば日出づる時光明徧く閻浮提を照し、明を蒙むらざる者無きが如く、菩薩摩訶薩も亦是の如く、六波羅蜜乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得、無量阿僧祇の衆生を度脫し涅槃を得しむ。』

(三)舍利弗佛に白して言さく、『云何が菩薩摩訶薩聲聞辟支佛地を過ぎ阿惟越致地に至り佛道を淨むるや。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩初發心より六波羅蜜を行じ、空無相無作の法に住し、能く一切聲聞辟支佛地を過ぎ阿惟越致地に住し佛道を淨む。』舍利弗佛に白して言さく、『菩薩摩訶薩何等の地に住し能く諸の聲聞辟支佛の爲に福田と作るや。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩初發意より六波羅蜜を行じ、乃ち道場に坐するに至るまで其中間に於て常に諸の聲聞辟支佛の爲に福田と作る。何を以ての故に。菩薩摩訶薩の因緣有るを以ての故に世間の諸の善法生ず。何等をか是れ善法とする、所謂十善道五

ダ(Pratyekabuddha)獨覺又は緣覺とも譯す。
【阿惟越致】アヴイヴルタイ(Avaivartai)不退轉と譯す。
【三昧等】戒定慧等の五分は三乘因果に通じて存するも佛の五分は實般若の故に完全なり
【禪定】四禪九次第定。
【解脫三昧】八背捨三解脫門慧解脫共解脫三三昧等をいふ。
【三十二相】應身佛の身に具へ給ふ三十二の相好。
【八十隨形好】三十二相に隨伴せる八十種の細相。
【童眞】梵にクマーラカ(Kumaraka)といふ。童男となり愛欲に染まず佛道を修む。
【內空等】十八空。內空は眼耳鼻舌身意の六內處空、外空とは六外處空、

戒八分成就齋四禪四無量心四無色定四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分盡く世に現はる。菩薩の因緣を以ての故に、六波羅蜜十八空、佛の十力四無所畏四無閡智十八不共法大慈大悲一切種智盡く世に現はる。菩薩の因緣を以ての故に、刹利大姓婆羅門大姓居士大家四天王天乃至非有想非無想天有り皆世に現はる、菩薩の因緣を以ての故に、須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛有り、皆世に現る。』舍利弗佛に白して言さく、『菩薩摩訶薩施福を淨畢すべきや不や。』佛言はく、『不、何を以ての故に。本より已に淨畢するが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩大施主と爲り何等をか施す。諸の善法を施す。何等をか善法とする、十善道五戒乃至十八不共法一切種智なり。是を以て施與す。』

(三)舍利弗佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩云何が般若波羅蜜を習應し般若波羅蜜と相應するや。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩色空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く、受想行識空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩眼空に習應す、是れを般若波羅蜜と相應すと名く。耳鼻舌身心空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。色空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。聲香味觸法空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。眼界空色界空眼識界空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。耳聲識鼻香識舌味識身觸識意法識界空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。苦空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。集滅道空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。無明空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。行識名色六

内外空とは内外十二處空、空空とは内空等の三空も空、大空とは十方相悉く空、第一義空とは諸法實相も亦空、有爲空とは五蘊等因緣和合に生ずる故に空、無爲空とは不生不滅虛空の如し、畢竟空とは有爲無爲畢竟餘有なき故に空、無始空とは過去第一とすべきなし、散空とは離散すれば空、性空とは法性空寂、自相空とは總別二相俱に空、諸法空とは一切法に有、實有とすべきなし、不可得空とは諸法實無にして不可得の故、無法空とは無法の有とすべきなし、有法空とは和合緣生の故に有の有とすべきなし、無法有法空とは有無兩法俱に不可得の故に空。

【因緣等】四緣。

入觸受愛取有生老死空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。一切諸法空若は有爲若は無爲に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩性空に習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、七空に習應す、所謂性空自相空諸法空無所得空無法空有法空無法有法空なり、是を般若波羅蜜と相應すと名く。『佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩七空に習應する時、色の若は相應若は不相應を見ず、受想行識の若は相應若は不相應を見ず、色の若は生相、若は滅相を見ず、受想行識の若は生相、若は滅相を見ず、色の若は垢相若は淨相を見ず、受想行識の若は垢相若は淨相を見ず、色と受と合するを見ず、受と想と合するを見ず、想と行と合するを見ず、行と識と合するを見ず。何を以ての故に。法と法と合する者有る無し、其性空の故に。舍利弗、色空中色有る無く、受想行識空中識有る無し。舍利弗色空の故に惱壞相無し、受空の故に受相無し、想空の故に知相無し、行空の故に作相無し、識空の故に覺相無し。何を以ての故に。舍利弗、色空に異らず、空色に異らず、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色、受想行識も亦是の如し。舍利弗、是諸法は空相、生にあらず滅にあらず、垢にあらず淨にあらず、增にあらず減にあらず、是れ空法、過去に非ず未來に非ず現在に非ず。是故に空中には色無く、受想行識無く、眼耳鼻舌身意無く、色聲香味觸法無く、眼界無く乃至意識界無く、亦無明無く、亦無明の盡くること無く、乃至亦老死無く亦老死の盡くること無く、苦集滅道無く、亦智無く亦得無く亦須陀洹無く須陀洹果無く、斯陀含無く斯陀

因縁は果を生ずる親しき原因、次第縁は前の心心所後の心心所と繼起次等す。縁縁は所縁の對境たる一切法。増上縁は色心萬法に通じ一切の結果に對し總て皆增上の用あるをいふ。

【如】時により處によりすべて變異なきこと。

【法性】實相、自性。

【實際】眞如實相の理性。

【三】善法の果報を求むるもの爲に大神力を讃歎す。

【須陀洹】スローターパンナ(Srotapanna)預流と譯す。入道の第一果。

【斯陀含】サクリダーガーミー(Sakrdagami)一來と譯す。第二果。

【阿那含】アナガーミー(Anagami)不還と譯し第三果

【阿羅漢】アラハン(Arahan)無學

含果無く、阿那含無く阿那含果無く、阿羅漢無く阿羅漢果無く、辟支佛無く辟支佛道無く佛無く亦佛道無し。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。舍利弗、是れ菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、般若波羅蜜の若は相應若は不相應を見ず、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜の若は相應若は不相應を見ず亦色の若は相應若は不相應を見ず、受想行識の若は相應若は不相應を見ず、眼乃至意、色乃至法、眼色識界乃至意法識界の若は相應若は不相應を見ず、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智の若は相應若は不相應を見ず。是の如く舍利弗、當に知るべし菩薩摩訶薩般若波羅蜜と相應す。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時空空と合せず、無相無相と合せず、無作無作と合せず。何を以ての故に。空相なく作なく、合と不合と有る無し。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時諸法自相空に入る、入り已て色合を作さず、不合を作さず、受想行識合を作さず、不合を作さず。色前際と合せず。何を以ての故に。前際を見ざるが故に。色後際と合せず、何を以ての故に、後際を見ざるが故に。色現在と合せず何を以ての故に。現在を見ざるが故に。受想行識も亦是の如し。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ず、前際後際と合せず後際前際と合せず、現在前際後際と合せず、前際後際亦現在と合せず、三際の名も空なるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ず。薩婆若過去

世と合せず、何を以ての故に。過去世見るべからず、何に況んや薩婆若過去世と合せんや。薩婆若未來世と合せず、何を以ての故に、未來世見るべからず、何に況んや薩婆若未來世と合せんや。薩婆若現在世と合せず、何を以ての故に、現在世見るべからず、何に況んや薩婆若現在世と合せんや。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、色薩婆若と合せず、色見るべからざるが故に。受想行識も亦是の如し。眼薩婆若と合せず、眼見るべからざるが故に。耳鼻舌身意も亦是の如し。色薩婆若と合せず、色見るべからざるが故に。聲香味觸法も亦是の如し。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、檀那波羅蜜薩婆若と合せず。檀那波羅蜜見るべからざるが故に、乃至般若波羅蜜も亦是の如し。四念處薩婆若と合せず、四念處見るべからざるが故に、乃至八聖道分も亦是の如し。佛の十力乃至十八不共法薩婆若と合せず、佛の十力乃至十八不共法見るべからざるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、佛薩婆若と合せず、薩婆若佛と合せず、菩提薩婆若と合せず、薩婆若菩提と合せず、何を以ての故に、佛は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ佛、菩提は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ菩提なればなり。舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、色有を習せず、

と譯し第四果なり。
【無餘涅槃】煩惱障を斷じて得たる涅槃。
【刹利】クシャトリヤ(Kṣatriya)王及武士の種族。
【慧方便力】煩惱を斷じ大悲を起し自ら隨喜して成佛に廻向する力。
【法相】法性と同じく實性の異名。
無生際は實際。
【內眷屬】佛に於ける阿難等。
【大眷屬】舍利弗目連等。
【慳心等】六度を障ふる六惡心。
【勸導福處】教化勸導を因緣とし福あらしむ。
【十二部經】九分と並び遺教の區分。
【修多羅】スートラ(Sūtra)契經と譯す。散文にて法相を說示せしもの。
【祇夜】ゲーヤ(Geya)應頌と譯す。前出の散文を重ねて韻文としたを

色無を習せず、受想行識も亦是の如し。色有常を習せず、色無常を習せず、受想行識も亦是の如し。色苦を習せず、色樂を習せず、受想行識も亦是の如し。色我を習せず、色非我を習せず、受想行識も亦是の如し。色寂滅を習せず、色不寂滅を習せず、受想行識も亦是の如し。色空を習せず、色非空を習せず、受想行識も亦是の如し。色有相を習せず、色無相を習せず、受想行識も亦是の如し。色有作を習せず、色無作を習せず、受想行識も亦是の如し。是れ菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、是念を作さず、我れ般若波羅蜜を行じ、般若波羅蜜を行ぜず、般若波羅蜜を行ずるに非ず、行ぜざるに非ず、舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、阿惟越致地を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、成就衆生を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、淨佛國土を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、佛の十力四無所畏四無閡智十八不共法を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、內空を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、外空內外空空空大空第一義空有爲空無爲空畢竟空無始空散空性空諸法空自相空不可得空無法空有法空無法有法空を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、如法性實際を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず。何を以ての故に、是れ菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、諸法相を壞せざるが故に是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、如意

るもの。

【受記經】ギャーカラナ(Vyakarana)佛が聖衆に其未來のことを說きて遙記し給ふ教說。

【伽陀】ガーター(Gatha)頌と譯す。唱歌するに作りし韻文。祇夜と區別し不重頌ともいふ。

【優陀那】ウダーナ(Udana)自說と譯す。佛意の儘を說けるもの、多く偈頌の形を以て寫さる。

【因緣經】ニダーナ(Nidana)經中、人の問へる因緣によりて說き、或は宿世の因緣等を說ける部分。

【阿波陀那】アヴダーナ(Avadana)譬喩と譯す。經中譬喩または寓言を以て教理を說明解釋せる部分。

【如是語經】イチヴリッタカ(Itivrttaka)玄奘は本事と譯す。菩薩の過

去因地に於て行ぜし種種の事を說きし部分。
【本生經】ジャータカ(Jātaka)佛が諸の菩薩等の過去生前の事又自らの過去を說くこと。
【方廣經】ヴァイプルヤ(Vaipulya)經中義豐に正理を說ける部分。
【未曾有經】アドブッタダルマ(Adbhutadharma)。經中不思議のことを說きたる部分。
【論議經】ウパデーシャ(Upadeśa)佛自ら法相を分別し論議し問答して理を辨じたるもの
【阿迦尼吒天】アカニシター(Akaniṣṭha) 色究竟天。色界天中の最上位
【菩提樹】梵にボーディドルマ(Bodhidruma)といふ一切諸佛成道の道場樹。
【遠塵離垢】物心の塵垢を離る。

神通を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、天耳を爲さざるが故に、他心智を爲さざるが故に、宿命智を爲さざるが故に、天眼を爲さざるが故に、漏盡神通を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、尙般若波羅蜜を見ず、何に況んや菩薩の神通を見んや。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く行ず、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、是念を作さず、我れ如意神通を以て、東方に飛到し、如恆河沙等の諸佛を供養し恭敬すと、南西北方四維上下も亦是の如し。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、是念を作さず、我れ天耳を以て、十方諸佛の所說の法を聞くと。是念を作さず、我れ他心智を以て、十方衆生の心の所念を知ると、是念を作さず、我れ宿命通を以て、十方衆生の宿命の所作を知ると、是念を作さず、我れ天眼を以て、十方衆生の此に死し彼に生ずるを見ると。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く行ず、是を般若波羅蜜と相應すと名く、亦能く無量阿僧祇の衆生を度す。舍利弗、菩薩摩訶薩能く是の如く般若波羅蜜を行ずれば、惡魔其便を得る能はず、世間の衆事欲する所、意に隨ふ。十方各如恆河沙等の諸佛皆悉く是菩薩を擁護して、聲聞辟支佛地に墮せざらしむ、四天王天乃至阿迦尼吒天、皆亦是菩薩を擁護して閡有らしめず。是菩薩、有らゆる重罪現世に輕く受く。何を以ての故に、是菩薩摩訶薩、普慈を用て衆生に加ふるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く行ず、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、疾く諸の陀羅尼門、諸の三昧門を得て

【法眼淨】諸法を觀ずる眼の開きて諸法の實相を知り衆生を濟度す。【三毒】貪瞋癡の三煩惱。【般涅槃】梵にパリニルヴーナ(Pari-nirvana)滅度と譯す。入滅のことと。【奉鉢品】天王鉢を奉り佛卽ち之を受け、般若の德相を述べ略開終る。【阿修羅】アスラ(Asura)非天と譯す。衆相山中又は大海の底にありて常に三十三天と戰ふ處の天趣。【幻師】奇術師。【一】般若の行要を説く。【字】名字差別。【習應品】以下別して宗義を論じ、別略開せる言意を顯す。菩薩方便を以て般若と相應することを習ひ、第一義門によりて智慧行を修す。【一】前多く法空

所生の處常に諸佛に値ふ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで終に見佛を離れず。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、是念を作さず、法法と若は合若は不合、若は等若は不等有りと。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩、是法餘法と、若は合若は不合、若は等若は不等を見ざればなり。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ず、是念を作さず、我れ當に疾く法性を得若は得ざるべしと。何を以ての故に、法性は得相に非ざるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、是念を作さず。法性諸法を分別すと、是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、是念を作さず、是法能く法性を得若は得ずと。何を以ての故に、是菩薩是法を用て能く法性を得若は得ざるを見ざればなり。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、法性空と合せず空法性と合せず、是の如く習應す、是を般若波羅蜜と相應すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、眼界空と合せず、空眼界と合せず、色界空と合せず、空色界と合せず、眼識界空と合せず、空眼識界と合せず、乃至意界空と合せず、空意界と合せず、法界空と合せず、空法界と合せず、意識界空と合せず、空意識界と合せず。是故に、舍利弗、是空相應を名

を說く故今衆生空法空を雜說し能觀者も空なるを示す【一切我】人法總てを我とするもの【壽者等】壽命を衆生の實體と考ふるなど皆誤りなりとの意。【舍利弗】舍利弗は智慧第一、目犍連（マウドガルヤーヤナMaudgalyāyana）は神通第一と稱せらる。【無餘涅槃】煩惱障を斷じて得たる涅槃。即ち灰身滅智したる處に顯るるものなるも實は身心共に全く解脫をえたるに名く。【二】淨佛道、即ち眞の淨佛國土成就衆生を明す。【八分成就齋】八關齋といふ。關は禁なり。五戒に不坐高廣床、不著花鬘瓔珞、不習歌舞戲樂の三戒を加ふ。【淨華】次第に布施して淨報を究む

けて第一相應と爲す。舍利弗、空行の菩薩摩訶薩聲聞辟支佛地に墮せず、能く佛土を淨め衆生を成就し、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得。舍利弗、諸の相應の中、般若波羅蜜相應を最第一と爲し、最尊最勝最妙上有ること無しと爲す。何を以ての故に、此菩薩摩訶薩、般若波羅蜜行じて相應すればなり。所謂空無相無作の故に、當に知るべし。是菩薩、受記の如く、若は受記に近づくに異り無し。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く相應する者、能く無量阿僧祇の衆生の爲に益を作す厚し。是菩薩摩訶薩、亦是念を作さず、我れ般若波羅蜜と相應す、諸佛當に我に記を授くべし、我れ當に受記に近づくべし、我れ當に佛土を淨むべし、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得て、當に法輪を轉ずべしと。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩、法の法性より出づる有るを見ず、亦法の般若波羅蜜を行ずる有るを見ず、亦法の諸佛に授記せらるる有るを見ず、亦法の阿耨多羅三藐三菩提を得る有るを見ざればなり。何を以ての故に、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、我相衆生相乃至知者見者相を生ぜざればなり。何を以ての故に。衆生畢竟不生不滅の故に、衆生生有る無く滅有る無く、若しは法に生有る無く滅相有る無し。云何が法の般若波羅蜜を行ずべき有らん。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩衆生を見ざるが故に、般若波羅蜜を行ずと爲す。衆生受けざるが故に、衆生空の故に、衆生不可得の故に、衆生離の故に、般若波羅蜜を行ずと爲す。舍利弗、菩薩摩訶薩、諸の相應の中に於て最第一の相應と爲す。所謂空相應なり。是空相應、餘の相應に勝る。菩薩摩訶薩是の如く空を習して能く大慈大悲を生ず、菩薩摩訶薩是の如く相應

を習し、慳心を生ぜず、犯戒心を生ぜず、瞋心を生ぜず、懈怠心を生ぜず、亂心を生ぜず無智心を生ぜず。』

【三】般若の修習相應を明す。
【一切諸法空】總じては十八空、別しては有爲無爲一切の三空。
【性空】一切の諸法は因緣和合に依りて生じ、その實性は空無なり。
【相應等】相應といひ不相應といひ生といひ滅といふ皆有爲の相にて假說なり。
【慴壞等】物質の破壞も、受知等の相も五蘊空なれば存すべからず。
【前際】過去
【後際】未來
【三際】前際、中際（現在）後際
【薩婆若】サルヷジュニャーナ（Sarvajñāna）一切智と譯す。諸佛の果上の智慧。
【成就衆生】衆生を救度し解脫せしむること。

摩訶般若波羅蜜經　卷第二

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

往生品第四

(一)舍利弗佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、能く是の如く相應を習する者、何處より終り此間に來生し、此間より終り何處に生ずべきか。』佛舍利弗に告げたまはく『是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、能く是の如く相應を習する者、或は他方佛國より此間に來生し、或は兜率天上より此間に來生し、或は人道の中より此間に來生す。舍利弗、他方佛國より來る者疾く般若波羅蜜と相應せり、般若波羅蜜と相應せるが故に、身を捨てて此間に來生し、諸の深妙の法皆現在前す、後還て般若波羅蜜と相應す、所生の處に在りて常に諸佛に値ふ。舍利弗、一生補處の菩薩有り、兜率天上より終り、是間に來生す、是菩薩六波羅蜜を失はず。所生の處に隨つて一切陀羅尼門諸三昧門疾く現在前す。舍利弗、菩薩人中命終り還て人中に生ずる者有り、阿惟越致たるを除き、是菩薩根鈍にして疾く般若波羅蜜と相應する能はず、諸の陀羅尼門、諸の三昧門疾く現在前する能はず。

(二)舍利弗、汝が問ふ所の菩薩摩訶薩般若波羅蜜と相應し、此間より終り、當に何處に生ず

【往生品】前品般若相應を說き衆生壽命なしとす。今この見地に住するものの生死往來の相を說く故に往生品といふ。

【一】般若行者此土に來生するものに三類を擧ぐ、他方佛土來、兜率天來と人道來是なり。

【兜率天】ツシタ(Tusita)妙足と譯す。六欲天の第四、外五天と異り浮逸心なく、五欲樂に於て喜足の心を生ずるが故に彌勒等の補處の菩薩の止住する所たり。故に今諸天より別說す。

【二】未來は當受相なれば廣く後世往生相を說く。

【長壽天】色界の第三無想天をいふ一生の壽命長きが故に。

【慈心等】慈悲喜捨の四無量心。

【賢劫】現在の劫の名。此の間に千佛出世すといふ。

【大梵王】色界十八天中の大梵天(マハーブラフマンMahabrahman)に住する天主。

べきかとは、舍利弗、是菩薩摩訶薩、一佛國より一佛國に至り、常に諸佛に値ひて終に諸佛を離れず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り方便を以てせずして初禪乃至第四禪に入り亦六波羅蜜を行ず、是菩薩摩訶薩、禪を得るが故に長壽天に生ず、彼の壽終るに隨ひて、是間に來生し、人身を得て諸佛に値遇す、是菩薩、諸根利ならず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初禪乃至第四禪に入り亦般若波羅蜜を行ず。方便を以てせざるが故に諸禪を捨てて欲界に生ずるに、是菩薩諸根亦鈍なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初禪乃至第四禪に入り、慈心乃至捨に入り、虛空處乃至非有想非無想處に入り、四念處乃至八聖道分を修し、佛の十力乃至大慈大悲を行ず、是菩薩、方便力を用て、禪に隨て生ぜず、無量心に隨て生ぜず、四無色定に隨て生ぜず、有ゆる佛處に在て中に於て生じ、常に般若波羅蜜行を離れず、是の如き菩薩賢劫の中に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初禪乃至第四禪に入り、慈心乃至捨に入り、虛空處乃至非有想非無想處に入り、方便力を以ての故に、禪に隨て生ぜず、還て欲界、若は刹利大姓婆羅門大姓居士大家に生ず、衆生を成就せんが爲の故なり、舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初禪乃至第四禪に入り、慈心乃至捨に入り、虛空處乃至非有想非無想處に入り、方便力を以ての故に、禪に隨て生ぜず、或は四天王天處に生じ、或は三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天に生じ、是中に於て衆生を成就し、亦佛土を淨め、常に諸佛に値ふ。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、初禪に入り、此間に命終りて梵天處に生じ、大梵王と作り、梵

【勸請】初轉法輪時に於ける梵天の勸請の類。

【梵行】清淨の行爲。

【神通遊戲】六神通を以て諸佛の國に遊び、衆生救濟を厭はず。

天處より一佛國に遊び一佛國に至る、有ゆる諸佛に在りて阿耨多羅三藐三菩提を得るも、未だ法輪を轉ぜざる者は勸請して轉ぜしむ。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、一生補處にして般若波羅蜜を行ず、方便力を以ての故に、初禪乃至第四禪に入り、慈心乃至捨に入り、虛空處乃至非有想非無想處に入り、四念處乃至八聖道分を修し、空三昧無相無作三昧に入り禪に隨て生ぜず、有佛の處に生じ諸の梵行を修す、若は兜率天上に生じ、其壽終るに隨て善根を具足し正念を失はず、無數の百千億萬の諸天に圍繞し恭敬せられて、此間に來生し、阿耨多羅三藐三菩提を得。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六神通を得て欲界色界無色界に生ぜず、一佛國より一佛國に至り、諸佛を供養し恭敬し尊重し讚歎す。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、神通に遊戲し一佛國より一佛國に至り、至る所の到處聲聞辟支佛乘有る無く、乃至二乘の名なし。舍利弗、菩薩摩訶薩神通に遊戲し一佛國より一佛國に至り至る所の到處其壽無量なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、神通に遊戲し、一國土より一國土に至り、至る所の到處佛法僧無き處有らば佛法僧の功德を讚ず、諸の衆生佛名法名僧名を聞くを用ての故に、此に於て命終り、諸佛の前に生ず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意の時初禪乃至第四禪を得、四無量心を得、四無色定を得、四念處乃至十八不共法を修す、是菩薩欲界色界無色界の中に生ぜず、常に衆生を益する有るの處に生ず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意の時六波羅蜜を行じ、菩薩の位に上り阿惟越致地を得。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意の時便ち阿耨多羅三藐三菩提を得て、法輪を轉じ、無量阿僧祇の衆

【餘法】遺教。

【一劫に滅ず】法住すること一劫に至らず。

【滅盡定】一切の心想すべて滅盡して寂靜となるの定

【超越定】諸佛菩薩が諸地を超過して自在に出入する定。

【智等】羅漢成就の八智等實は緣起無我無生に入らざるなし。故に菩薩の無上法忍といふ

【四諦を證せず】獨覺地に隨せざらんために四諦法を證せず。

生と與に餘を作すこと厚く、已て無餘涅槃に入る、是佛、般涅槃後餘法若は一劫に住し若は一劫に滅ず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意の時般若波羅蜜と相應し、無數百千億の菩薩と共に、一佛國より一佛國に至る、佛國土を淨めんが爲の故なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、四禪四無量心四無色定を得て、其中に遊戲し、初禪に入り、初禪より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて乃至四禪に入り、四禪より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて虛空處に入り、虛空處より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて乃至非有想非無想處に入り、非有想非無想處より起ちて滅盡定に入る。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に超越定に入る。舍利弗菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、四念處乃至十八不共法を修し、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を取らず、方便力を以て衆生を度することを爲すが故に、八聖道分を起す、是八聖道分を以て須陀洹果乃至辟支佛道を得しむ。「佛舍利弗に告げたまはく、「一切阿羅漢辟支佛の果及び智は是れ菩薩摩訶薩の無生法忍なり。舍利弗、是菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を行ず、當に知るべし、是れ阿惟越致地の中に住するなり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜に住し、兜率天道を莊嚴す當に知るべし、此れ賢劫中の菩薩なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、四禪乃至十八不共法を修し、未だ四諦を證せざれば、當に知るべし是れ菩薩の一生補處なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、無量阿僧祇劫に修行し阿耨多羅三藐三菩提を得たり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜に住し、常に勤めて精進し、

【三惡道】自己の惡業に引かれて往む惡趣。地獄、餓鬼畜生の三。【檀那】布施、前說。

【三乘法】聞思修の三慧により聲聞緣覺菩薩の道を以て解脫せしむ。【轉輪聖王】チカラヴルッチラージヤ(Chakravarti-Rāja) 須彌四洲を統領する王。三十二相を具へ、人壽無量歲より八萬歲の時までに出で、佛後出世せずといふ。

衆生を利益し無益の事を說かず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行じ常に勤めて精進し、衆生を利益し一佛國より一佛國に至り、衆生の三惡道を斷ず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜に住す、檀那を以て首と爲し一切衆生を安樂にす、飲食を須てば飲食を與へ衣服臥具瓔珞華香房舍燈燭人の須つ所に隨て盡く之を給與す。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時身を變ずる佛の如く、地獄の中の衆生の爲に法を說き、畜生餓鬼の中の衆生の爲に法を說く。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行ずる時、身を變ずる佛の如く、徧く十方如恆河沙等の諸佛國土に至り、衆生の爲に法を說く。亦諸佛を供養し、及び佛國土を淨め、諸佛の說法を聞き、十方淨妙の國相を觀採して、已に自ら殊勝の國土を起す、其中の菩薩摩訶薩皆是れ一生補處なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行ずる時、三十二相諸根淨利を成就す、諸根淨利なるが故に衆人愛敬す、愛敬するを以ての故に漸く三乘の法を以て之を度脫す。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、身清淨口清淨を學すべし。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行ずる時、諸根淨を得、是淨根を以て自ら高うせず、亦他を下さず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發心より檀那波羅蜜尸羅波羅蜜に住し、乃ち阿惟越致地に至るまで終に三惡道に墮せず。舍利弗菩薩摩訶薩有り、初發心より乃ち阿惟越致地に至るまで常に十善行を捨てず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀那波羅蜜尸羅波羅蜜の中に住し、轉輪聖王と作り衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀那波羅蜜尸羅波羅蜜に住し無量

【法等】法義を明白にして自他を照らすの意。
【三】業等の所得あるは不淨、不可得なるは清淨なるを問決す。
【慳心】以下六蔽心。眞心を覆ふ六種の惡心。
【麁業】身口業、瞋恚邪見等の罪業。

千萬世轉輪聖王と作り、無量百千の諸佛に値遇し供養し恭敬し尊重し讃歎す。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、常に衆生の爲に法を以て照明し亦以て自ら照す、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで終に照明を離れず。舍利弗、此菩薩摩訶薩佛法の中に於て已に尊重を得たり。舍利弗、是を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、身口意の不淨をして安起せしめず。』

(三)舍利弗佛に白して言さく『世尊、如何が菩薩の身業不淨口業不淨意業不淨なるや。』佛舍利弗に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩是念を爲す、是れ身是れ口是れ意と、是の如き相作の緣を取る、舍利弗、是を身口意不淨と名く。舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、身を得ず口を得ず意を得ず。舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、若は身を得、若は口を得若は意を得、是の身口意を得たるを用ての故に、能く慳心犯戒心瞋心懈心亂心愚心を生ず。當に知るべし、是菩薩、六波羅蜜を行ずる時、身口意の麁業を除く能はず。』舍利弗佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩云何が身口意の麁業を除かんや。』佛舍利弗に告げたまはく『若し菩薩摩訶薩身口意を得ずば、是の如き菩薩摩訶薩能く身口意の麁業を除かん。復次に舍利弗、若し菩薩摩訶薩初發意より十善道を行じ、聲聞心を生ぜず辟支佛心を生ぜずば、是の如き菩薩摩訶薩能く身口意の麁業を除かん。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行じ佛道を淨むる時、檀那波羅蜜尸羅波羅蜜羼提波羅蜜毘梨耶波羅蜜禪那波羅蜜を行ぜば、是を菩薩摩訶薩身口意の麁業を除くと名く。』舍利弗佛に白して言さ

【諸法不可得】法として實有ならず體も相も固取すべきなし。

く「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の佛道なりや。」佛舍利弗に告げたまはく「佛道とは若し菩薩摩訶薩身を得ず口を得ず意を得ず、檀那波羅蜜を得ず、尸羅波羅蜜を得ず、羼提波羅蜜を得ず、毘梨耶波羅蜜を得ず、禪那波羅蜜を得ず、般若波羅蜜を得ず、聲聞を得ず辟支佛を得ず菩薩を得ず佛を得ず。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の佛道と名く。所謂一切諸法不可得の故に、舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行ずる時能く壞する者無し。」舍利弗佛に白して言さく「世尊、云何が菩薩摩訶薩六波羅蜜を行ずる時能く壞する者無きや。」佛舍利弗に告げたまはく「若し菩薩摩訶薩六波羅蜜を行ずる時、色乃至識有るを念はず、眼乃至意有るを念はず、色乃至法有るを念はず、眼界乃至意識界有るを念はず、四念處乃至八聖道分有るを念はず、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜有るを念はず、佛の十力乃至十八不共法有るを念はず、須陀洹果乃至阿羅漢果有るを念はず、辟支佛乃至阿耨多羅三藐三菩提有るを念はず。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く六波羅蜜を行じ增益し能く壞する者無し。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜の中に住し智慧を具足す、是智慧を用て常に惡道に墮せず、弊惡の人の中に生れず、貧窮人と作らず、受くる所の身體人天阿修羅の憎惡する所と爲らず。」舍利弗佛に白して言さく「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の智慧なるや。」佛舍利弗に告げたまはく「菩薩摩訶薩是智慧の成就せるを用て、十方如恆河沙等の諸佛を見、法を聽き僧を見、亦嚴淨の佛土を見る、菩薩摩訶薩是智慧を以て、佛の想を作さず、菩薩の想を作さず、聲聞辟支佛の想を作さず、我の想を作さず、佛國の想を作さず、是智慧を用て檀那

【四】五眼清淨を辨ず。

【一閻浮提】一天下の意。

【小千國土】欲界と色界第一禪天とを一世界といひ、其の千倍を小千世界といふ。

【中千國土】小千國土の千倍。

【三千大千國土】中千の千を大千、即ち三千世界なり。

【肉眼淨】肉眼とは肉身に具有する常の眼のこと。遠く見得ず、闇に見得ざるもの。この肉眼の清徹自在なるを淨といふ。

【天眼淨】禪定によりてうる眼。天中の淨色を體となし、明了自由にして能く三千界乃至十方を見る。

【慧眼淨】諸法の空をみる智慧の眼故に實相無我平等を見、一法として正見せざるなし。

波羅蜜を行じ、亦檀那波羅蜜を得ず、乃至般若波羅蜜を行じ、亦般若波羅蜜を得ず、四念處を行じ亦四念處を得ず、乃至十八不共法を行じ、亦十八不共法を得ず、舍利弗、是を菩薩摩訶薩の智慧と名く、是智慧を用て能く一切法を具足すれども亦一切法を得ず。」

(四)舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、五眼肉眼天眼慧眼法眼佛眼を淨む。』舍利弗佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩肉眼淨なるや。』佛舍利弗に告げたまはく『菩薩有り肉眼百由旬を見る、菩薩有り肉眼二百由旬を見る、菩薩有り肉眼一閻浮提を見る、菩薩有り肉眼二天下三天下四天下を見る、菩薩有り肉眼小千國土を見る、菩薩有り肉眼中千國土を見る、菩薩有り肉眼三千大千國土を見る。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の肉眼淨と爲す。』舍利弗佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩の天眼淨なるや。』佛舍利弗に告げたまはく『菩薩摩訶薩有り天眼一切四天王天の所見を見、三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天の所見を見、梵天王の所見乃至阿迦尼吒天の所見を見る。菩薩天眼の所見とは四天王天乃至阿迦尼吒天の知らず見ざる所なり。舍利弗、是菩薩摩訶薩の天眼とは十方如恆河沙等の諸の國土の中の衆生の此に死し彼に生ずるを見る。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の天眼淨と爲す。』舍利弗佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩慧眼淨なるや。』佛舍利弗に告げたまはく『慧眼の菩薩、是念を作さず、有法若は有爲若は無爲、若は世間若は出世間、若は有漏若は無漏なるありと。是慧眼の菩薩、亦法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無し。舍利弗、是を菩薩摩

訶薩の慧眼淨と名く。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩法眼淨なるや。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩法眼を以て、是人隨信行、是人隨法行、是人無相行、是人空解脱門を行じ、是人無相解脱門を行じ、是人無作解脱門を行ずるを知り、五根を得。五根を得るが故に無間三昧を得、無間三昧を得るが故に解脱智を得、解脱智を得るが故に三結我見疑戒取を斷ず、是人を須陀洹と名く。是人思惟道を得、婬恚癡を薄くし、當に斯陀含を得べし、思惟道を增進し、婬恚癡を斷じ、阿那含を得、思惟道を增進し、色染無色染無明慢掉を斷じ、阿羅漢を得。是人、空無相無作解脱門を行じ、五根を得、五根を得るが故に無間三昧を得、無間三昧を得るが故に解脱智を得、解脱智を得るが故に、有ゆる集法皆是れ滅法なりと知り、辟支佛と作る、是を菩薩摩訶薩の法眼淨と爲す。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩是菩薩初發意に檀那波羅蜜を行じ、乃至般若波羅蜜を行じ、信根精進根を成就し、善根純ら厚く方便力を用ての故に、衆生の爲に身を受くるを知る。若は刹利大姓に生じ、若は婆羅門大姓に生じ、若は居士大家に生じ、若は四天王天處乃至他化自在天處に生ず。是菩薩、其中に於て住し、衆生を成就し、其所樂に隨て皆之に給施す。亦佛國土を淨め、諸佛に値遇し供養し恭敬し尊重し讃歎し、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至りて、亦聲聞辟支佛地に墮せず、是を菩薩摩訶薩の法眼淨と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、是菩薩阿耨多羅三藐三菩提に於て退くを知り、是菩薩、阿耨多羅三藐三菩提に於て退かざるを知る。是菩薩、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを知り、是菩薩、未だ阿耨多羅

【法眼】一切諸法を觀ずる眼。
【隨信行】他の知識の教を聞信しその如く修行する。
【隨法行】他に依らず佛所說の法に隨順し修行する。
【無相行】見道十五心の間に無漏の正智を起し四諦の理を觀ずるに空觀無間にして滯なく四諦の理を觀じつつ、此相を空ず。
【空解脱門】以下三解脱門。
【五根】信進念定慧の五。一切の聖道は之にて成立す。
【無間三昧】無生の四諦を觀ずるを間斷せざること。
【解脱智】無間三昧を成じて得る斷結得果の智。
【三結】結は煩惱の異名。見諦にては十結を斷じて須陀洹を得るも、今我見疑戒取の三は根本の故に今是を擧ぐ。大論四十。

【我見疑戒取】我見は五蘊に我々所を見る。疑は三寶四諦を信ぜず。戒取は戒禁に對して謬見を起し、因に非るを正因と、正道に非るを正道と迷執する妄見。【思惟道】初果見諦後の修道上の罪障を斷伏すること。【解脱等】三毒或は貪瞋癡といふ。【色染等】色染は色界愛、無色染は無色界愛、無明は事理にくらき精神作用、慢は他人に對して心を高貴ならしむること、掉は心を浮きあがらしむる精神作用。【集法】四諦法或業。【滅法】涅槃の法。【記】受記即ち豫言。【最後身】肉體生活の最後を意味す【道場】成道の處【如金剛三昧】十地滿ずる最後心の三昧。

三藐三菩提の記を受けざるを知る。是菩薩、阿惟越致地に到るを知り、是菩薩、未だ阿惟越致地に到らざるを知る。是菩薩、神通を具足するを知り、是の菩薩未だ神通を具足せざるを知る。是菩薩、神通を具足するを以て、十方如恒河沙等の世界に飛到し、諸佛を見て供養し恭敬し尊重し讃歎するを知り、是菩薩、未だ神通を得ざると、當に神通を得べきとを知る。是菩薩、當に佛土を淨むべきと、佛土を淨めざるとを知る。是菩薩、衆生を成就せると、未だ衆生を成就せざると、是菩薩、諸佛に稱譽せらるると、稱譽せられざる所たると、是菩薩、諸佛に親近すると、諸佛に親近せざると、是菩薩、壽命有量なると、壽命無量なると、是菩薩、佛を得ん時比丘衆有量なると比丘衆無量なると、是菩薩、阿耨多羅三藐三菩提を得ん時菩薩を以て僧と爲すと菩薩を以て僧と爲さざると、是菩薩、當に苦行難行を修すべきと苦行難行を修せざるべきと、是菩薩、一生補處なると、未だ一生補處ならざると、是菩薩、最後身を受くると未だ最後身を受けざると、是菩薩、能く道場に坐すると、能く道場に坐せざると、是菩薩、魔有ると魔無きとを知る。是の如く舍利弗、是を菩薩摩訶薩の法眼淨と爲す。」舍利弗佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩佛眼淨なるや。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩有り、佛道を求むる心次第に如金剛三昧に入り、一切種智を得。爾時、十力四無所畏四無閡智十八不共法大慈大悲を成就す。此菩薩摩訶薩一切種智を用て、一切法の中、法として見ざる無く、法として聞かざるなく、法として知らざる無く、法として識らざる無し。舍利弗、是を菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提

【實語】語は假設なるも、語義相應を實語とせば只一切を攝し得べきは般若のみ。

【般若能生五眼】般若なくば世間眼のみなるも、之あつて始めて五眼を生じ、不退を得。

【五】神通自在を得るを說く。

【自性】本體、空離無生とは實有なきこと。

【薩婆若心】一切智。

【欲心】衆生の心相にして、欲は財色等を貪ること。

【瞋心】我を恣にするを妨ぐる瞋恚なり。

を得る時の佛眼淨と爲す。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩五眼を得んと欲せば當に六波羅蜜を學すべし。何を以ての故に、舍利弗、是六波羅蜜中、一切善法、若は聲聞法辟支佛法菩薩法佛法を攝す。舍利弗、若し實語有て能く一切善法を攝するは、般若波羅蜜是れなり。舍利弗、般若波羅蜜は能く五眼を生ず、菩薩五眼を學する者阿耨多羅三藐三菩提を得。

(五)舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、神通波羅蜜を修す。是神通波羅蜜を以て種種如意の事を受く、能く大地を動かし、一身を變じて無數の身と爲し、無數の身還て一身と爲る、隱顯自在、山壁樹木皆過ぐるに閡無く、空中を行くが如く、水を履む地の如く、虛を陵ゆる鳥の如く、地中に出沒する水を出入するが如く、身烟焔を出す大火聚の如く、身中水を出す雪山の水流の如し、日月大德威力當り難くして能く摩捫す、乃至梵天まで身自在を得るも、亦是如意神通に著せず、神通の事及び已身皆不可得なり。自性空の故に、自性離の故に、自性無生の故に、是念を作さず、我れ如意神通を得たりと、薩婆若心たるを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、如意神通智證を得。是菩薩、天耳淨くして人耳に過ぐるを以て、二種の聲天聲人聲を聞くも、亦是天耳神通に著せず、天耳と聲と及び已身皆不可得なり。自性空の故に、自性離の故に自性無生の故に、是念を作さず、我れ是天耳有りと、薩婆若心たるを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、天耳神通智證を得。是菩薩、如實に他の衆生心を知る、若し欲心は如實に欲心と知り、離欲心は如實に離欲心と知る、瞋心は如實に瞋心と知り、離瞋

心は如實に離瞋心と知る、癡心は如實に癡心と知り、離癡心は如實に離癡心と知る、渴愛心は如實に渴愛心と知り、無渴愛心は如實に無渴愛心と知る、有受心は如實に有受心と知り、無受心は如實に無受心と知る、攝心は如實に攝心と知り、散心は如實に散心と知る、小心は如實に小心と知り、大心は如實に大心と知る、定心は如實に定心と知り、亂心は如實に亂心と知る、解脫心は如實に解脫心と知り、不解脫心は如實に不解脫心と知る、有上心は如實に有上心と知り、無上心は如實に無上心と知る。亦是心に著せず。何を以ての故に、是心、心に非ず、相思議すべからざるが故に、自性空の故に、自性離の故に、自性無生の故に、是念を作さず、我れ他心智證を得たりと。薩婆若心たるを除く。是の如く舍利弗、菩薩、摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、他心神通智證を得。是菩薩、宿命智證通を以て、一心乃至百心を念じ、一日乃至百日を念じ、一月乃至百月を念じ、一歲乃至百歲を念じ、一劫乃至百劫、無數百劫、無數千劫、無數百千劫、乃至無數百千萬億劫世を念ず。我は是處、是の如き性、是の如き名字、是の如き生、是の如き食、是の如き久住、是の如き壽限、是の如き長壽、是の如き苦樂を受く。我れ是中に死し、彼處に生じ、彼處に生じ、彼處に死し是處に生ず、相有り因緣有り、亦是宿命神通に著せず、宿命神通の事及び己身皆不可得なり。自性空の故に、自性離の故に、自性無生の故に、是念を作さず、我に是宿命神通有りと、薩婆若心たるを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、宿命神通智證を得。是菩薩、天眼を以て衆生の死時生時、端正醜陋惡處好

【癡心】事物の道理を知らざる無知の心。
【渴愛心】貪欲の心。
【有受心】三界の諸法に接して苦樂を感ずる心。
【攝心】散亂心を攝する心。
【小心】自己についてのみ見る心。
【生】胎卵濕化の四生を通じていふ。
【食】段觸思識の四食。
【隨業因緣】果體に伴ふ報相は多業の因緣によるとす。その諸業の關係をいふ。

【六八】六波羅蜜淨を說く。般若に住し空不可得の故六度たり。

處、若は大若は小を見、衆生の隨業因緣を知る、是の諸の衆生の身惡業成就し、口惡業成就し、意惡業成就するが故に、賢聖人を謗毀し邪見の因緣を受くるが故に、身壞して惡道に墮し、地獄の中に生ず。是の諸の衆生身善業成就し口善業成就し意善業成就し、賢聖人を謗毀せず正見の因緣を受くるが故に、命終りて善道に入り天上に生ず、亦是天眼通に著せず、天眼通の事及び己身皆不可得なり。自性空の故に、自性離の故に、自性無生の故に、是念を作さず、我に是天眼神通有りと、薩婆若心たるを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、天眼神通智證を得。亦十方如恆河沙等の世界の中の衆生の生死、乃至天上に生るるを見る。四神通も亦是の如し。是菩薩摩訶薩、漏盡神通あり、漏盡神通を得ると雖ども、聲聞辟支佛地に墮せず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る、亦異法に依らず、亦是漏盡神通に著せず、漏盡神通の事及び己身皆不可得なり。自性空の故に、自性離の故に、自性無生の故に、是念を作さず、我れ漏盡神通を得たりと、薩婆若心たるを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、漏盡神通智證を得。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、神通波羅蜜を具足す、神通波羅蜜を具足し已りて阿耨多羅三藐三菩提を增益す。

(六)舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時檀那波羅蜜淨薩婆若道に住す、畢竟空にして慳心を生ぜざるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、尸羅波羅蜜淨薩婆若道に住す、畢竟空にして罪不罪著せざるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、

【不來不去】空に去來なしの義。

般若波羅蜜を行ずる時、羼提波羅蜜淨薩婆若道に住す、畢竟空にして瞋ならざるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、毘梨耶波羅蜜淨薩婆若道に住す、畢竟空にして身心精進に懈怠せざるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、禪那波羅蜜淨薩婆若道に住す。畢竟空にして不亂不味の故に。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、般若波羅蜜淨薩婆若道に住す、畢竟空にして癡心を生ぜざるが故に。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、六波羅蜜淨薩婆若道に住す、畢竟空の故に、來ならず去ならざるが故に、施ならず受ならざるが故に、戒に非ず犯に非ざるが故に、忍に非ず瞋に非ざるが故に、進ならず怠ならざるが故に、定ならず亂ならざるが故に、智ならず愚ならざるが故に。爾時、菩薩摩訶薩、布施不布施持戒犯戒、忍辱瞋恚、精進懈怠、定心亂心、智慧愚癡を分別せず、毀害輕慢恭敬を分別せず。何を以ての故に、舍利弗、無生法中毀を受くる者有ること無く、害を受くる者有ること無く、輕慢恭敬を受くる者有ること無ければなり。舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずれば是の如き、諸の功德を得、聲聞辟支佛の得る有る無き所なり、是功德具足し、衆生を成就し、佛國土を淨め、一切種智を得。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、一切衆生の中に等心を生ず、一切衆生の中に等心を生じ已りて一切諸法等しきを得、一切諸法等しきを得已りて、一切衆生を諸法等の中に立つ。是菩薩摩訶薩、現世に十方諸佛の愛念する所と爲り亦一切菩薩一切聲

【七】得益受記を明す。
【慧命】上座の敬稱。
【當に佛と作るべし】成佛の授記なり。
【阿閦】アクショービヤ(Akṣobhya)不動と譯す。東方阿閦佛國に住す。
【彌勒佛法】當來彌勒佛の教法。
【四部衆】比丘比丘尼優婆塞優婆夷。
【莊嚴王佛】梵にヴューハラージヤ(Vyuharaja)といふ。

聞辟支佛の愛念する所と爲る。是菩薩、所生の處に在りて眼終に不愛色を見ず、乃至意不愛法を覺らず。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を滅ぜず。』

(七)是般若波羅蜜品を說く時、三百の比丘座より起ち、著くる所の衣を以て佛に上り、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。佛、爾時微笑し、種種の色光口の中より出づ。爾時、慧命阿難座より起ち、衣服を整へ、合掌し右膝を地に著け佛に白して言さく、『佛何の因緣ありてか微笑したまへる。』佛阿難に告げたまはく、『是三百の比丘、是より以後六十一劫當に佛と作るべく、皆號して大相と名く、是三百の比丘、此身を捨て、當に阿閦佛國に生ずべし。及び六萬の欲天子、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、彌勒佛法の中に於て出家し佛道を行ず。是時、佛の威神の故に、此間の四部衆、十方面に各千佛を見る。是十方國土、嚴淨にして、此娑婆國土の及ぶ能はざる所なり。』爾時、十千人願を作す、『我等淨願行を修し、淨願行を修するが故に、當に彼の佛世界に生ずべし。』爾時、佛是善男子の深心を知りて佛微笑し種種の光口の中より出づ。阿難衣服を整へ、合掌して佛に白さく、『佛何の因緣ありてか微笑したまへる。』佛阿難に告げたまはく、『汝是十千人を見たりや不や。』阿難言さく、『見たり。』佛言はく、『是十千人、此に於て壽終り當に彼世界に生ずべし、終に諸佛を離れず、後當に佛と作りて、皆莊嚴王佛と號すべし。』

歎度品第五

爾時、慧命舍利弗、慧命大目揵連、慧命須菩提、慧命摩訶迦葉是の如き等の諸多の知識比丘、及び諸の菩薩摩訶薩、諸の優婆塞優婆夷、座より起ち合掌して佛に白して言さく『世尊、摩訶波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。尊波羅蜜、第一波羅蜜、勝波羅蜜、妙波羅蜜、無上波羅蜜、無等波羅蜜、無等等波羅蜜、如虚空波羅蜜は、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。世尊、自相空波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。世尊、自性空波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。諸法空波羅蜜、無法有法空波羅蜜、開一切功德波羅蜜、成就一切功德波羅蜜、不可壞波羅蜜は是れ諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。諸の菩薩摩訶薩、是般若波羅蜜無等等布施を行じ、無等等檀那波羅蜜を具足し、無等等身を得、無等等法を得、所謂阿耨多羅三藐三菩提なり。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜も亦是の如し。世尊、本亦復此般若波羅蜜を行じ、無等等六波羅蜜を具足し、無等等法を得、無等等色を得、無等等受想行識を得、佛の無等等法輪を轉じ給ふ。過去の佛も亦是の如く、此般若波羅蜜を行じ、無等等布施を具足し、乃至無等等法輪を轉ぜり。未來世の佛も亦、此般若波羅蜜を行じ、當に無等等布施を作すべく、乃至無等等法輪を轉すべし。是を以ての故に、世尊、菩薩摩訶薩一切を彼岸に度さ

【歎度品】衆聖佛説を聞き歡喜領解稱歎して佛命を證成す。

【大目揵連】マハーマウドガルヤーヤナ(Mahamaudgalyayana)神通第一の佛弟子。

【須菩提】スブーテイ(Subhuti)善吉と譯す。佛弟子中解空第一とし、般若の正機なり。

【摩訶迦葉】マハーカーシヤパ(Mahakasyapa)大飮光と譯す。頭陀第一として、滅後付法の第一上座とせられ、第一結集の際、自ら論議誦出をなせりと傳ふ。

【摩訶波羅蜜】マハーパーラミター(Mahaparamita)大度と譯す。佛道は最大にして般若よく之を顯はす。

【尊】一切法中第一たるを云ふ。

【第一】五度を導くをいふ。

【深】五変及ばず。
【妙】常情及ばず。
【無等等】佛のこと、佛を衆生に比して等しき者なく、而も諸佛所證の法身は彼此相等しき故、今般若能く佛を生ずるに名く。
【如虚空】般若清淨の故に論破せられざるを云ふ。
【自相空】諸法の總相よりいふも空、別相よりいふも亦空なること。
【自性空】諸法は衆縁の假和合にして自性なし。これ般若の空なり。
【無等等色】佛の五蘊は般若によりて無等等なり。
【摩尼】マニ(Maṇi)無垢、如意珠。寶珠の名。
【離欲樂】解脱涅槃の樂。
【舌相品】第二段の起説にして、放光、衆集、現瑞、衆悟、授記を明す。

んと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。世尊、是般若波羅蜜を行ずる菩薩摩訶薩をば一切世間、天及び人阿修羅、當に禮敬供養すべきや。』佛、衆の弟子及び諸の菩薩摩訶薩に告げたまはく『是の如く是の如し、諸の善男子是般若波羅蜜を行ずる者をば、一切世間天及び人阿修羅當に禮を作し恭敬供養すべし。何を以ての故に、菩薩來るに因るが故に人道天道、刹利大姓、婆羅門大姓、居士大家、轉輪聖王、四天王天乃至阿迦尼吒天を出生し、須陀洹乃至阿羅漢辟支佛諸佛を出生すればなり。菩薩來るに由るが故に、世間便ち飲食衣服臥具房舍燈燭摩尼眞珠頗梨瑠璃珊瑚金銀等諸の寶物有りて生ずればなり。舍利弗、世間有ゆる樂具、若は人中若は天上、若は離欲樂、此の一切樂具皆菩薩有るに由る。何を以ての故に、舍利弗、菩薩摩訶薩菩薩道を行ずる時、六波羅蜜に住し、自ら布施を行じ亦布施を以て衆生を成就し、乃至自ら般若波羅蜜を行じ、亦般若波羅蜜を以て衆生を成就すればな。り舍利弗、是故に菩薩摩訶薩は一切衆生を安樂にせんが爲の故に、世に出現す。』

舌相品第六

爾時、世尊舌相を出して、徧く三千大千世界を覆ふ。其舌相より無數無量の色を出す。光明、普く十方如恒河沙等の諸佛の世界を照す。是時、東方如恒河沙等の世界の中の無量無數の諸の菩薩、是大光明を見、各々其佛に白して言さく『世尊、是れ誰の力の故に、

是大光明有りて普く諸佛の世界を照すや。「諸佛諸菩薩に告げて言はく、『諸の善男子、西方に世界有り、娑婆と名く、是中に佛有り、釋迦牟尼と名く。是れ其舌相より大光明を出し、普く東方如恆河沙等の諸佛の世界を照す。南西北方四維上下も亦是の如し。諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說くが故なり』と。是時、諸の菩薩、各其佛に白して言さく『我れ往きて、釋迦牟尼佛及び諸の菩薩摩訶薩に供養せんと欲し、并に般若波羅蜜を聽かんと欲す』と。諸佛、諸の菩薩に告げたまはく、『善男子、汝自ら時を知る』と。是時、諸の菩薩摩訶薩、諸の供養の具、無量の華蓋幢幡瓔珞衆香金銀寶華を持ちて、娑婆世界に向つて、釋迦牟尼佛の所に至る。爾時、四天王諸天乃至阿迦尼吒諸天、各天上の天香末香澤香天樹香葉香、天の種種の蓮華青赤紅白を持つて、釋迦牟尼佛の所に向ふ。是諸の菩薩摩訶薩及び諸天、散ずる所の諸華、三千大千世界の虛空の中に於て、化して四柱の大寶臺と成る。種種の異色、莊嚴分明なり。是時、釋迦牟尼佛の衆中、十萬億人有り、皆座より起ちて合掌し佛に白して言さく、『世尊、我等未來世の中に於て、亦當に是の如きの法を得ること、今の釋迦牟尼佛弟子、侍從し、大衆に說法するが如く、亦爾るべきや。』是時、佛、善男子の至心に一切諸法に於て、生ぜず滅せず出ず作さずして、是法忍を得るを知り、佛便ち微笑し種種の色光口の中より出づ。阿難佛に白して言さく、『世尊、何の因緣の故に微笑したまへるや。』佛阿難に告げたまはく、『是衆中十萬億人、諸法の中に於て無生忍を得、此諸人、未來世に於て、六十八億劫を過ぎて當に佛と作るべし。劫を

【娑婆】サハーローカダーッ(Sahālokadhātu)堪忍世界と譯す。內外の苦に堪へ忍ばざるべからざる國土の義、即ちこの世界のこと。

【釋迦牟尼】シャーキャムニ(Śākyamuni)能仁寂默と譯す。

【時を知る】適當の意。

【不生等】諸法の生滅起作の不可得なるを明にす。即ち無生法忍なり。

華積と名け、佛を皆覺華と號す』と。

三假品第七

爾時佛慧命須菩提に告げたまはく、『汝當に諸の菩薩摩訶薩に般若波羅蜜を教ふること、諸の菩薩摩訶薩の成就すべき所の般若波羅蜜の如くすべし。』即時に諸の菩薩摩訶薩及び聲聞大弟子諸天等此念を作さく、『慧命須菩提自ら智慧力を以て、當に諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說くべきや』と。是佛力の爲に、慧命須菩提諸の菩薩摩訶薩大弟子諸天の心の所念を知り、慧命舍利弗に語らく。『諸の佛弟子の說く所の法、教授する所皆是れ佛力なり。佛の說く所の法と法相と相違背せず、是善男子、是法を學び、此法を證するを得、佛說は燈の如し。舍利弗、一切の聲聞辟支佛實に是の力無くして、能く菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說かんや。』爾時、慧命須菩提、佛に白して言さく、『世尊、說く所の菩薩、菩薩の字、何等の法を菩薩と名くるや。世尊、我等是法を菩薩と名くるを見ず。云何が菩薩に般若波羅蜜を教へんや。』佛須菩提に告げたまはく、『般若波羅蜜亦但だ名字のみ有り、名けて般若波羅蜜と爲す。菩薩と菩薩の字も亦但だ名字のみ有り、是名字內に在らず外に在らず中間に在らず。須菩提、譬へば我の名を說くが如き、和合の故に有り、是の我の名不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故に說くのみ。衆生壽者命者生

【三假品】以下は正しく須菩提をして般若を說かしむるものにして、名受法の三、皆悉く假說なるを說くなり。
【法と法相】法の體と作用卽ち法體は無我、法相は無生滅なり。
【力無く】弟子の般若を說く皆佛の慈光に照さるるに依る。
【菩薩、菩薩の字】菩薩と名けらるゝものと菩薩についての說明。
【名字のみ】實法なく衆緣の和合に假りに名くるのみ。
【內にあらず等】佛教のいふ離邊處中を顯はす。
【我の名を說くが如き等】一切衆生皆和合假說なることの說明。

【身】五蘊假和合の例として說く。

【眼界】十八界の假名を示す。

【內身等】內身內體外物草木の假名を說く。

【髀蹲】髀は股、蹲はかかと。

者養育者衆數人、作者使作者、起者使起者、受者使受者、知者見者等の如きも、和合法の故に有り、是の諸の名不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故に說くのみ、般若波羅蜜と菩薩と、菩薩の字も亦是の如し、皆和合の故に有り、是れ亦不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故に說くのみ。須菩提、譬へば身の和合の故に有るも、是れ亦不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故にのみ說くが如し。須菩提、譬へば色受想行識も亦和合の故に有るも、是れ亦不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故にのみ說くが如し。須菩提般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如し、皆是れ和合の故に有り、是れ亦不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故に說くのみ、須菩提、譬へば眼の和合の故に有るも、是れ亦不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故にのみ說くが如し、是眼內に在らず外に在らず、耳鼻舌身意和合の故に有り、是れ亦不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故に說くのみ。色乃至法も亦是の如し。眼界和合の故に有り、是れ亦不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故に說くのみ。乃至意識界も亦是の如し、須菩提、般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如し、皆和合の故に有り、是れ亦不生不滅なり、但だ世間の名字を以ての故に說くのみ。是名字內に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提、譬へば內身名けて頭と爲すも但だ名字のみ有るが如し、項肩臂脊脇髀蹲脚皆是れ和合の故に有り、是法及び名字も亦不生不滅なり、但だ名字を以ての故に說くのみ、是名字亦內に在らず、亦外に在らず、中間に在らず。須菩提、般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如し、皆和合の故に有り、

【名、受、法】三假施設といふ。之を習學して般若に入る。

【一】色等の名字常無常等の憶想分別を遮し無著を明し不著の故に菩薩成就するを說く。

【無我、空等】我相妄ならば無我無相も施設のみ。

【眼色等】眼乃至意は內六處、色乃至法は外六處、眼識乃至意識は六識身、眼觸乃至意觸は六觸身、眼觸因緣生受乃至意觸因緣生受は六受身なり。

但だ名字を以ての故に說くのみ。是れ亦不生不滅なり、內に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提、譬へば外物草木枝葉莖節の如き、是の如きの一切但だ名字を以ての故に說くのみ。是法及び名字も亦不生不滅なり、內に非ず、外に非ず、中間に住するに非ず。須菩提、般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如し、皆和合の故に有り、是法及び名字も亦不生不滅なり、內に非ず、外に非ず、中間に住するに非ず。須菩提、譬へば過去の諸佛の名の如き和合の故に有り、是れ亦不生不滅なり、但だ名字を以ての故に說くのみ、是れ亦內に非ず、外に非ず、中間に住するに非ず。般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如し。須菩提、譬へば夢、響、影、幻、燄、佛の化する所の如き皆是れ和合の故に有り、但だ名字を以て說くのみ、是法及び名字、不生不滅なり、內に非ず外に非ず、中間に住するに非ず。般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如し。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ず。名は假の施設、受は假の施設、法は假の施設なりと、是の如く當に學すべし。

復次に須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色の名字是れ常なるを見ず、受想行識の名字是れ常なるを見ず、色の名字無常なるを見ず、受想行識の名字無常なるを見ず、色の名字樂なるを見ず、色の名字苦なるを見ず、色の名字我なるを見ず、色の名字無我なるを見ず、色の名字空なるを見ず、色の名字無相なるを見ず、色の名字無作なるを見ず、色の名字寂滅なるを見ず、色の名字垢なるを見ず、色の名字淨なるを見ず、色の名字生なるを見ず、色の名字滅なるを見ず、色の名字內なるを見ず、色の名字外なるを見ず、色の名

【有爲】因緣によりて生じたる諸現象。
【無爲】本來常住にして何ものにも造作せられざる法。
【分別】諸法に憶想して一定法を見んとすること。
【不壞法】空不可得の實相。
【諸法實相】萬物そのままの相を絕對と相對の二面と見るも二面全く相卽して緣起如實の相なるをいふ。
【苦等】樂、不苦不樂と共に三受といふ。
【肉眼等】五眼なり。
【智波羅蜜】漏盡智、如如智、一切智。
【神通波羅蜜】六神通。
【內空等】十八空。

字中間住なるを見ず、受想行識も亦是の如し。眼色眼識眼觸眼觸因緣生の諸受、乃至意法意識意觸、意觸因緣生の諸受亦是の如し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ず。般若波羅蜜の字、菩薩、菩薩の字、有爲性の中にも亦見ず、無爲性の中にも亦見ず。菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、是法皆分別を作さず。是菩薩、般若波羅蜜を行じ、不壞法の中に住し、四念處を修する時、般若波羅蜜を見ず。般若波羅蜜の字を見ず、菩薩を見ず、菩薩の字を見ず、乃至十八不共法を修する時、般若波羅蜜を見ず、般若波羅蜜の字を見ず、菩薩を見ず、菩薩の字を見ず。菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を行ずる時、但だ諸法實相を知る。諸法實相とは無垢無淨なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、當に是知を作すべし、名字は假の施設なりと。假の名字と知り已りて、色に著せず、受想行識に著せず、眼乃至意に著せず、色乃至法に著せず、眼識に著せず、乃至意識に著せず、眼觸に著せず、乃至意觸に著せず、眼觸因緣生の受若は苦若は樂若は不苦不樂に著せず、乃至意觸因緣生の受若は苦若は樂若は不苦不樂に著せず、有爲性に著せず、無爲性に著せず、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜に著せず、三十二相に著せず、菩薩身に著せず、菩薩の肉眼に著せず、乃至佛眼に著せず、智波羅蜜に著せず、神通波羅蜜に著せず。內空に著せず、乃至無法有法空に著せず、成就衆生に著せず、淨佛國土に著せず、方便法に著せず、何を以ての故に、是諸法著する者無し、著する法無し、著する處無し、皆無の故に。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、

【菩薩の位】無上法忍の位。

【二】法の定んで菩薩なるものなく諸法和合の假說なるを說く。

【地種等】六大についていふ。

【無明等】十二因緣についていふ。

【色如の相】ものをものたらしむる相。

一切法に著せず。便ち檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜般若波羅蜜を增益し菩薩の位に入り、阿惟越致地を得、菩薩の神通を具足し、一佛國に遊び、一佛國に至り、衆生を成就し、諸佛を恭敬し尊重し讚歎し佛國土を淨むるを爲し諸佛を見て供養を爲す。供養の具善根成就するが故に意に隨て悉く得、亦諸佛所說の法を聞く、聞き已りて乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至り、終に妄失せず、諸の陀羅尼門、諸の三昧門を得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、當に知るべし諸法の名は假の施設なりと。

(二)須菩提、汝が意に於て云何、色是れ菩薩なりや不や、受想行識是れ菩薩なりや不や『不、世尊』『眼耳鼻舌身意是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『色聲香味觸法是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『眼識乃至意識是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『須菩提、汝が意に於て云何、地種是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『水火風空識種是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『須菩提の意に於て云何、無明是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『乃至老病死是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『須菩提の意に於て云何、色を離れ、受想行識を離れ、乃至老死を離るる是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『須菩提、汝が意に於て云何、色如の相是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『乃至老死如の相是れ菩薩なりや不や』『不、世尊』『色如の相を離れ、乃至老死如の相を離るる是れ菩薩なりや不や』『不、世尊。』佛須菩提に告げたまはく『汝何等の義を觀て色菩薩に非ず、乃至老死菩薩に非ず、色を離るる菩薩に非ず、乃至老死を離るる菩薩に非ず、色如の相菩薩に非ず、乃至老死如の相菩薩に非ず、色如の相を離るる菩薩に非ず、

【衆生畢竟不可得】衆生に名くる別法あることなく、畢竟空なり。

【善哉】衆生空に達するを許す。

乃至老死如の相を離るる菩薩に非ずと言ふや』須菩提言さく、『世尊、衆生畢竟不可得なり、何に況んや是れ菩薩なるべけんや。色不可得なり、何に況んや色と色を離るると、色如と色如を離るると、是れ菩薩ならんや。乃至老死不可得なり、何に況んや老死と老死を離るると、老死如と老死如を離るると、是れ菩薩ならんや。』佛須菩提に告げたまはく、『善い哉善い哉、是の如く須菩提、菩薩摩訶薩衆生不可得の故に、般若波羅蜜も亦不可得なり。當に是學を作すべし。』須菩提の意に於て云何、色是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『須菩提の意に於て云何、色の常是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の常是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の無常是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の無常是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』色の樂是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の樂是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の苦是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の苦是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の我是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の我是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の非我是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の非我是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『須菩提の意に於て云何、色の空是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の空是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の非空是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の非空是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の相是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の相是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の無

【三】菩薩の定で菩薩たるべきものなき如く諸法自性なく畢竟空なるを明す。

相是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の無相是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の作是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の作是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『色の無作是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊』『受想行識の無作是れ菩薩の義なりや不や』『不、世尊、乃至老死も亦是の如し。』佛須菩提に告げたまはく『汝何等の義を觀て色菩薩の義に非ず、受想行識菩薩の義に非ず、乃至色受想行識の無作菩薩の義に非ず、乃至老死も亦是の如しと言ふや。』須菩提佛に白して言さく『世尊、色は畢竟不可得なり、何に況んや色是れ菩薩の義ならんや、受想行識も亦是の如し。世尊、色の常畢竟不可得なり、何に況んや色の無常是れ菩薩の義ならんや、乃至識も亦是の如し。世尊、色の樂畢竟不可得なり、何に況んや色の苦是れ菩薩の義ならんや、乃至識も亦是の如し。世尊、色の我畢竟不可得なり、何に況んや色の非我是れ菩薩の義ならんや、乃至識も亦是の如し。世尊、色の有畢竟不可得なり、何に況んや色の空是れ菩薩の義ならんや、乃至識も亦是の如し。世尊、色の相畢竟不可得なり、何に況んや色の無相是れ菩薩の義ならんや、乃至識も亦是の如し。世尊、色の作畢竟不可得なり、何に況んや色の無作是れ菩薩の義ならんや、乃至識も亦是の如し』と。佛須菩提に告げたまはく『善い哉善い哉、是の如く須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、色の義不可得なり、受想行識の義不可得なり、乃至無作の義不可得なるは、當に是般若波羅蜜を學すと作すべし。

(三)須菩提、汝言はく『我れ是法、菩薩と名くるを見ず』と。須菩提、諸法諸法を見ず、諸法法性

【佛法】十力乃至十八不共法等。
【佛道】般若相應の成佛の願行。
【心心數法】心識が外境を認識する時、その總相を認取するを心王といひ、之に從屬して起り、別相を認取する精神作用を心所といふ。

を見ず、法性諸法を見ず、法性地種を見ず、地種法性を見ず、乃至識種法性を見ず、法性識種を見ず、法性眼色眼識の性を見ず、眼色眼識の性法性を見ず、乃至法性意法意識の性を見ず、意法意識の性法性を見ず。須菩提、有爲性無爲性を見ず、無爲性有爲性を見ず。何を以ての故に。有爲を離れて無爲を說くべからず、無爲を離れて有爲を說くべからず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、諸法に於て見る所無し。是時、驚かず、畏れず、怖かず、心亦沒せず悔いず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩、色受想行識を見ざるが故に、眼乃至意を見ず、色乃至法を見ず、婬怒癡を見ず、無明乃至老死を見ず、我乃至知者見者を見ず、欲界色界無色界を見ず、聲聞心辟支佛心を見ず、菩薩を見ず、菩薩法を見ず、佛を見ず、佛法を見ず、佛道を見ず、是菩薩一切法を見ざるが故に、驚かず、畏れず、怖かず、沒せず、悔いざるなり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊何の因緣の故に、是菩薩、心沒せず悔いざるや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩一切の心心數法得べからず見るべからず、是を以ての故に菩薩摩訶薩心沒せず悔いざるなり。』『世尊、云何が菩薩心驚かず畏れず怖かざるや』佛須菩提に告げたまはく、『是菩薩の意及び意識得べからず、見るべからず、是を以ての故に驚かず畏れず怖かざるなり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩一切法得べからざるが故に、般若波羅蜜を行ずべし。須菩提、菩薩摩訶薩一切行處に般若波羅蜜を得ず、菩薩を得ず、菩薩の名を得ず、亦菩薩の心を得ず、卽ち是れ菩薩摩訶薩に敎ふるなり。』

【勸學品】廣く三乘をして般若を學すべき事を勸む。
【一】知法斷惑得三昧等の般若智學によるを說く。
【身見】五蘊假和合の身體に我ありと執し、また假有の一切諸法について我所有との偏見をいだくを云ふ。
【戒取】非因を因と計す。
身見乃至瞋恚を五下分結といふ。これ等の煩惱は、衆生を欲界に結びつけて解脫せしめざる故にいふ。
【色愛】色愛乃至無明を五上分結といふ。之等の煩惱は衆生を上二界に結びつけて解脫せしめざる故にいふ。
【結使】結は心身を纏縛すること、使は身心を驅使することにして煩惱の異名なり。
【纏】纏縛の義で煩惱のこと。

摩訶般若波羅蜜經　卷第三

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

勸學品第八

(一)爾時、須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩色を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。乃至識を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。眼乃至意を知らんと欲し、色乃至法を知らんと欲し、眼識乃至意識を知らんと欲し、眼觸乃至意觸を知らんと欲し、眼觸因緣生の受乃至意觸因緣生の受を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。婬怒癡を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩、身見戒取疑婬欲瞋恚色愛無色愛掉慢無明等の一切の結使及び纏を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。四縛四結四顚倒を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。十善道を知らんと欲し、四禪を知らんと欲し、四無量心四無色定四念處乃至十八不共法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩覺意三昧に入らんと欲せば、當に般若波羅蜜

【四縛四結】衆生を結縛して生死に流轉せしむる貪瞋戒取見取なり。
【四顚倒】正理を顚倒したる四種の見解。常樂我淨に執するもの。
【覺意三昧】非行非座三昧のこと。心の所向に隨ひ、みな覺識明了なる故に名づく。
【超越三昧】諸佛菩薩が諸地を超越して自在に出入する三昧。
【師子遊戲】師子の何者にも畏れず自在なるにいふ。
【師子奮迅】師子の勢の熾んなること。
【首楞嚴三昧】シユーランガマ、サマーディ(Śuraṅgama-Samādhi)勇健定と譯す。分別して諸三昧の行相の多少淺深を知り得諸三昧については更に第十品に廣說す。

を學すべし。六神通九次第定超越三昧に入らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。師子遊戲三昧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。師子奮迅三昧を得んと欲し、一切陀羅尼門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩首楞嚴三昧、寶印三昧、妙月三昧、月幢相三昧、一切法印三昧、觀印三昧、畢法性三昧、畢住相三昧、如金剛三昧、入一切法門三昧、三昧王三昧、王印三昧、淨力三昧、高出三昧、畢入一切辯才三昧入諸法名三昧、觀十方三昧、諸陀羅尼門印三昧、一切法不忘三昧、攝一切法聚印三昧、虛空住三昧、三分清淨三昧、不退神通三昧、出鉢三昧、諸三昧幢相三昧を得んと欲し、是の如き等の諸の三昧門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に世尊、菩薩摩訶薩一切衆生の願を滿ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。是の如きの善根を具足し常に惡趣に墮せざるを得んと欲し、卑賤の家に生ぜざるを得んと欲し、聲聞辟支佛地の中に住せざるを得んと欲し、菩薩の頂に墮せざるを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。』

(三)爾時慧命舍利弗須菩提に問はく『云何が菩薩摩訶薩の頂に墮すると爲すや。』須菩提舍利弗に言はく『若し菩薩摩訶薩方便を以てせずして六波羅蜜を行じ、空無相無作三昧に入り、聲聞辟支佛地に墮せず、亦菩薩の位に入らず、是を菩薩摩訶薩法生ずるが故に、頂に墮すと名く。』舍利弗須菩提に問はく『云何が菩薩生と名くるや。』須菩提舍利弗に答へて言く『生を法愛と名く。』舍利弗言はく『何等か法愛なるや。』須菩提言はく『菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、色は是れ空なりとして念著を受く、受想行識是れ空なりとして念著を受く。舍利弗、

【頂】柔順忍と無生法忍との中間、頂に墮するを生といふ。

【二】般若に應ぜざる墮頂と法愛とを辨ず。

【方便を以てせず】度生の方便加行なき六度三解脱は頂に止る。これ般若と相違す。

【順道法愛】出世間に著するなり。

【熟】生と相違し實相に應ずるをいふ。

【三】不生卽ち法愛念著なき正見を述ぶ。

是を菩薩摩訶薩順道法愛生ずと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩色是れ無相なりとして念著を受く、受想行識是れ無相なりとして念著を受く、色是れ無作なりとして念著を受く、受想行識是れ無作なりとして念著を受く、色是れ寂滅なりとして念著を受く、受想行識是れ寂滅なりとして念著を受く、色是れ無常乃至識、色是れ苦乃至識、色是れ無我乃至識なりとして念著を受く、是を菩薩の順道法愛生ずと爲す。是れ苦應に知るべし、集應に斷ずべし、盡應に證すべし、道應に修すべし。是れ垢法、是れ淨法。是れ近くべく、是れ近くべからず。是れ菩薩の所應行、是れ菩薩の所應行に非ず。是れ菩薩道、是れ菩薩道に非ず。是れ菩薩學、是れ菩薩學に非ず。是れ菩薩の檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、是れ菩薩の檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜に非ず。是れ菩薩の方便、是れ菩薩の方便に非ず。是れ菩薩の熟、是れ菩薩の熟に非ず。舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、是諸法に念著を受く、是れ菩薩摩訶薩の順道法愛生ずと爲す。』

(三)舍利弗須菩提に問はく、『云何が菩薩摩訶薩無生と名くるや』須菩提言はく、『菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、內空中外空を見ず、外空中內空を見ず、外空中內外空を見ず、內外空中外空を見ず、內外空中空空を見ず、空空中內外空を見ず、空空中大空を見ず、大空中空空を見ず、大空中第一義空を見ず、第一義空中大空を見ず、第一義空中有爲空を見ず、有爲空中第一義空を見ず、有爲空中無爲空を見ず、無爲空中有爲空を見ず、無爲空中畢竟空を見ず、畢竟空中無爲空を見ず、畢竟空中無始空を見ず、無始空中畢竟空を見ず、無始空

【是心】菩提心。
【無等等心】佛に等しき心。
【大心】大悲方便一切に通ずる心。
【無心相心】心相清淨なるも倘無相心あるべしとの憶想所見なり。

中散空を見ず、散空中無始空を見ず、散空中性空を見ず、性空中散空を見ず、性空中諸法空を見ず、諸法空中性空を見ず、諸法空中自相空を見ず、自相空中諸法空を見ず、自相空中不可得空を見ず、不可得空中自相空を見ず、不可得空中無法空を見ず、無法空中不可得空を見ず、無法空中有法空を見ず、有法空中無法有法空を見ず、無法有法空中有法空を見ず。舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずれば、菩薩の位に入ることを得。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を學せんと欲せば是の如く學すべし。色受想行識を念ぜず、眼乃至意を念ぜず、色乃至法を念ぜず、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、乃至十八不共法を念ぜず。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずれば、是心念ずべからず高うすべからず、無等等心念ずべからず高うすべからず、大心念ずべからず高うすべからざることを得ん。何を以ての故に。是心心に非ず、心相常に淨きが故に。『舍利弗須菩提に語らく、『云何が心相常に清淨なりと名くるや。』須菩提言はく、『若し菩薩是心相婬怒癡と合せず離れず、諸纏流縛若は諸々の結使一切の煩惱と合せず離れず、聲聞辟支佛心と合せず離れずと知る。舍利弗、是を菩薩の心相常に淨しと名く。』舍利弗須菩提に語らく、『是無心相心有りや不や。』須菩提舍利弗に報へて言はく、『無心相の中心相無心相得べきこと有りや不や。』舍利弗言はく、『得べからず。』須菩提言はく、『若し得べからずば、是無心相心有りや不やを問ふべからず。』舍利弗復問はく、『何等か是れ無心相なるや。』須菩提言はく、『諸法壞せず、分別せず、是を無心相と名く。』舍

利弗復須菩提に問はく『但だ是心のみ壞せず分別せざるや、色も亦壞せず分別せずと知らば乃至佛道も亦壞せず分別せざるや。』須菩提言はく『若し能く心相壞せず分別せずと知らば是菩薩も亦能く色乃至佛道壞せず分別せずと知らん。』

(四)爾時、慧命舍利弗須菩提を讃じて言はく『善い哉善い哉、汝は眞に是れ佛子なり、佛口より生じ、法を見るより生じ、法化より生ず、法分を取り財分を取らず、法の中自ら身に證を得たることを信ずること佛の所說の如し、無諍三昧を得たる中汝は最第一なること實に佛の擧ぐる所の如し。須菩提、菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を學すべし。是中亦當に分別して知るべし。菩薩汝が說ところの如く行ずれば、則ち般若波羅蜜を離れず。須菩提、善男子善女人聲聞地を學せんと欲するも、亦當に般若波羅蜜を聞き持し誦し讀し、正憶念し說の如く行ずべし。辟支佛地を學せんと欲するも、亦當に般若波羅蜜を聞き持し誦し讀し、正憶念し說の如く行ずべし。菩薩地を學せんと欲するも、亦當に般若波羅蜜を聞き持し誦し讀し、正憶念し說の如く行ずべし。何を以ての故に、是般若波羅蜜の中廣く三乘を說く、是の中菩薩摩訶薩聲聞辟支佛當に學すべし。』

集散品第九

(一)爾時、慧命須菩提、佛に白して言さく『世尊、我れ是菩薩般若波羅蜜を行ずるを覺らず

【四】須菩提の善解を讃ず。

【佛子】佛は般若より生じて般若を說く、故に般若に通ずるは眞の佛子なり。

【佛口生】佛化によるものは佛の口より生じたるものなり。

【法分】覺道全分を信解す。

【財分を取る】得道せずして佛の供養のみを受くる者

【身證】神通等を得たること。

【佛の擧ぐるところ】中阿含等に須菩提を讃ずる文言あり。

【集散品】色の集散をえず、受想等の集散をえざるを說く。縁和して生ずるを集、離れて滅するを散といふ。

【一】集散をえず住不住にあらざるを說き、菩薩名字及び諸法を破す。

【悔】妄語の悔。即ち無我中に菩薩等といはば是妄語なり。

【字住せず】法中に名字あるも、法空ならば字も亦住處なし。

【無明盡】十二因緣の滅觀をいふ。

【念佛等】十念なり。

得ざるも、當に誰が爲に般若波羅蜜を說くべきや。世尊、我れ一切諸法の集散を得ず、若し我れ菩薩の爲に字を作り菩薩と言はば、或は當に悔い有るべし。世尊、是字住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是字所有無きが故に。是を以ての故に、是字住せず、亦住せざるにあらず。世尊、我れ色の集散乃至識の集散を得ず、若し得べからずば云何が當に名字を作るべき。世尊、是因緣を以ての故に、是字住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に、是字所有無きが故に。世尊、我れ亦眼の集散乃至意の集散を得ず、若し得べからずば云何が當に名字を作り、是れ菩薩と言ふべきや。世尊、是眼の名字乃至意の名字住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是名字所有無きが故に。是を以ての故に、是字住せず、亦住せざるにあらず。世尊、我れ色の集散乃至法の集散を得ず、若し得べからずば云何が當に名字を作り、是れ菩薩と言ふべきや。世尊、是色の字乃至法の字住せず亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是字所有無きが故に。是を以ての故に、是字住せず亦住せざるにあらず。眼識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因緣生の受乃至意觸因緣生の受も亦是の如し。世尊、我れ無明の集散を得ず、乃至老死の集散を得ず。世尊、我れ無明盡の集散を得ず、乃至老死盡の集散を得ず。世尊、我れ婬怒癡の集散を得ず、諸の邪見の集散も皆亦是の如し。世尊、我れ六波羅蜜の集散、四念處の集散、乃至八聖道分の集散、空無相無作の集散、四禪四無量心四無色定の集散、念佛念法念僧念戒念捨念天念善念入出息念身念死の集散を得ず、我れ亦佛の十力乃至十八不共法の集散を得ず。世尊、若

【五陰】五蘊（色受想行識）に同じ。蘊は新譯、陰は舊譯。陰は善法を陰蓋するの義。
【五受陰】五陰に同じ。
【離】諸法の名字を離るると自相を離るるとなり。
【寂滅】生滅ともになくなりて、無爲寂靜になりたる境界のこと。
【不生】一切法は實は生ずるにあらずとの意。
【不滅】無常滅ならざるをいふ。
【不示】法として示すものなきをいふ。
【無爲法】本來常住にして他の作用をうけざる法。
【諸法實相の集散】萬有そのままの相は不生不滅なれば又集散なきなり。
【二】異門相對して菩薩名字の說くところなきを述ぶ。

し我れ六波羅蜜乃至十八不共法の集散を得ずば、云何が當に字を作り、是れ菩薩と言ふべきや。世尊、是字住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是字所有無きが故に。是を以ての故に、是字住せず、亦住せざるにあらず。世尊、我れ夢の如き五陰の集散を得ず、我れ響の如く影の如く、燄の如く化の如き、五受陰の集散を得ざるも亦上說の如し。世尊、我れ離の集散を得ず、我れ寂滅不生不滅不示不垢不淨の集散を得ず。世尊、我れ如法性實際法相法位の集散を得ざるも亦上說の如し。我れ諸善不善法の集散を得ず、我れ有爲無爲法有漏無漏法の集散、過去未來現在法の集散、不過去不未來不現在法の集散を得ず。何等か是れ不過去不未來不現在なるや。所謂無爲法なり。世尊、我れ亦無爲法の集散を得ず。世尊、我れ亦佛の集散を得ず。世尊、我れ亦十方如恆河沙等の世界の諸佛及び菩薩聲聞の集散を得ず。世尊、若し我れ諸佛の集散を得ずば、云何が菩薩摩訶薩に般若波羅蜜を教ふべきや。世尊、是菩薩の字住せず亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是字所有無きが故に。是を以ての故に、是字住せず亦住せざるにあらず。世尊、我れ是諸法實相の集散を得ず、云何が當に菩薩の與に字を作り、是れ菩薩と言ふべき。世尊、是諸法の實相の名字住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是名字所有無きが故に。是を以ての故に、是名字住せず、亦住せざるにあらず。

(二)世尊、諸法は因緣和合にして假名の施設なり。所謂菩薩、是名字五陰の中に於て說くべからず、十二入十八界乃至十八不共法の中に說くべからず、和合法の中に於て亦說くべき

【假名施設】　三假品參照。

【戒三昧等】　五分法身なり。この五類によりて得るところの二乘の身に名く。是亦空なり。

【三】　前に不說について般若を說けるに對し、今は不住門を以て般若を述ぶ。

【色相空】　可見有對等の色相に實有なることなし。

【色空等】　色とは名くるものの色空なれば色とせず、色の體そのままが空なり。

無し。世尊、譬へば夢の諸法の中に於て說くべからざるが如く、響、影、焰、化も諸法の中に於て亦說くべからず。譬へば虛空と名くるも亦法の中に說くべき無きが如し。世尊、地水火風の名も亦法の中に說くべき無きが如く、戒三昧智慧解脫解脫知見の名も亦法の中に說くべき無し。須陀洹の名字乃至阿羅漢辟支佛の名字の如きも、亦法の中に說くべき無し、佛名法名の如きも、亦法の中に說くべき無し。所謂若は善若は不善、若は常若は無常、若は苦若は樂、若は我若は無我、若は寂滅若は離、若は有若は無と。世尊、我れ是義を以ての故に心に悔ゆ。一切諸法集散の相得べからず、云何が菩薩の爲に字を作り、是れ菩薩と言はんや。世尊、是字住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是字所有無きが故に。是を以ての故に、是字住せず亦住せざるにあらず。世尊、若し菩薩摩訶薩是般若波羅蜜は是の如きの相是の如きの義なりと說くことを作すを聞きて、心沒せず驚かず畏れず怖かずば、當に知るべし是菩薩必ず阿惟越致性の中に住すと。不住法に住するが故に。

(三)復次に世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、色の中に住すべからず、受想行識の中に住すべからず、眼耳鼻舌身意の中に住すべからず、色聲香味觸法の中に住すべからず、眼識乃至意識の中に住すべからず、眼觸乃至意觸の中に住すべからず、眼觸因緣生の受乃至意觸因緣生の受の中に住すべからず、地種水火風種空識種の中に住すべからず、無明乃至老死の中に住すべからず。何を以ての故に。世尊、色の色相空なり、受想行識の識相空なり。世尊、色空なれば名けて色と爲さず、空を離れて亦色無し、色は卽ち是れ空、

【一字門等】一字一語を一字門といひ二字一語を二字門といふ。

空は即ち是れ色なり。受想行識、識空なれば名けて識と爲さず、空を離れて亦識無し、識は即ち是れ空、空は即ち是れ識なり。乃至老死、老死の相空なり。世尊、老死空なれば老死と名けず、空を離れて亦老死無し、老死即ち是れ空、空即ち是れ老死なり。世尊、是因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、色の中に住すべからず、乃至老死の中に住すべからず。復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、四念處の中に住すべからず。何を以ての故に、四念處、四念處の相空なり、世尊、四念處空なれば四念處と名けず、空を離れて亦四念處無し、四念處即ち是れ空、空は即ち是れ四念處なり。乃至十八不共法も亦是の如し。世尊、是因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、四念處乃至十八不共法の中に住すべからず。復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、檀那波羅蜜の中に住すべからず、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜の中に住すべからず。何を以ての故に、檀那波羅蜜、檀那波羅蜜の相空なり、乃至般若波羅蜜、般若波羅蜜の相空なり。世尊、檀那波羅蜜空の故に、檀那波羅蜜と名けず、空を離れて亦檀那波羅蜜無し、檀那波羅蜜は、即ち是れ空、空は即ち是れ檀那波羅蜜なり。乃至般若波羅蜜も亦是の如し。世尊、是因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、六波羅蜜の中に住すべからず。復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、文字の中に住すべからず、一字門二字門是の如き、種種の字門の中に住すべからず。何を以ての故に。諸字、諸字の相空の故に、亦上

【四】無常等の聖行、如法性陀羅尼三昧等の中に住すべからざるをいふ。

【如】時により處によりてすべて變異なきこと、即ち諸法の本體なり。

【法性】諸法の體性。

【法相】萬有のすがた。

【實際】眞如實相の理性。

説の如し。復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、諸の神通中に住すべからず。何を以ての故に。諸の神通、諸の神通の相空なり、神通空なれば神通と名けず、空を離れて亦神通無し、神通は即ち是れ空、空は即ち是れ神通なり。世尊、是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、諸の神通の中に住すべからず。

(四)復次に世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、色是れ無常に住すべからず、受想行識是れ無常に住すべからず。何を以ての故に、無常無常の相空なり。世尊、無常空なれば無常と名けず、空を離れて亦無常無し、無常は即ち是れ空、空は即ち是れ無常なり。世尊、是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、色是れ無常に住すべからず。受想行識是れ無常に住すべからず、色是れ苦に住すべからず、受想行識是れ苦に住すべからず、色是れ無我に住すべからず、受想行識是れ無我に住すべからず、色是れ空に住すべからず、受想行識是れ空に住すべからず、色是れ寂滅に住すべからず、受想行識是れ寂滅に住すべからず、色是れ離に住すべからず、受想行識是れ離に住すべからず。亦上説の如し。復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、如の中に住すべからず。何を以ての故に、如如の相空なり。世尊、如相空なれば如と名けず、空を離れて亦如無し、如は即ち是れ空、空は即ち是れ如なり。世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、法性法相法位實際の中に住すべからず。何を以ての故に。實際、實際の相空なり。

【吾我心】自我に執する心。
【行】有我の諸業。
【受けず】般若を行ずといふも實の般若にあらず。
【色是不受】性常に空なれば色の色とすべきものなし。
【性空】一切諸法は因緣の假和合により生じたるものにして、其の實性は空無なり。

世尊、實際空のゆゑに實際と名けず、空を離れて亦實際無し、實際即ち是れ空、空即ち是れ實際なり。復次に世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、一切陀羅尼門の中に住すべからず、一切三昧門の中に住すべからず。何を以ての故に、陀羅尼門陀羅尼門の相空、三昧門三昧門の相空なり。世尊、陀羅尼門三昧門空のゆゑに陀羅尼門三昧門と名けず、空を離れて亦陀羅尼三昧門無し、陀羅尼三昧門即ち是れ空、空即ち是れ陀羅尼三昧門なり世尊、是因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、乃至陀羅尼三昧門の中に住すべからず。世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲し、方便無きを以ての故に、吾我心を以て、色の中に於て住するが如きは、是菩薩、色に行を作す。吾我心を以て受想行識の中に於て住す、是菩薩、識に行を作す。若し菩薩行を作す者は般若波羅蜜を受けず、亦般若波羅蜜を具足せず、般若波羅蜜を具足せざるが故に、薩婆若を成就することを得る能はず。世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲するが如く、方便無きが故に、吾我心を以て、十二入乃至陀羅尼三昧門の中に於て住す。是菩薩十二入を作し、乃至陀羅尼三昧門に行を作す。若し菩薩行を作す者は、般若波羅蜜を受けず、亦般若波羅蜜を具足せず、般若波羅蜜を具足せざるが故に、薩婆若を成就することを得る能はず。何を以ての故に、色は是れ不受、受想行識は是れ不受、色不受なれば則ち色に非ず、性空の故に、受想行識不受なれば則ち識に非ず、性空の故に。十二入是れ不受、乃至陀羅尼三昧門是れ不受、十二入不受なれば則ち十二入に非ず、乃至陀羅尼三昧門不受なれば則ち陀羅尼三昧門

に非ず、性空の故に。般若波羅蜜も亦不受、般若波羅蜜不受なれば則ち般若波羅蜜に非ず、性空の故に。是の如く菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、諸法の性空を觀るべし。是の如く觀ずれば心行處無し、是を菩薩摩訶薩の不受三昧と名く。廣大の用、聲聞辟支佛と共ならず。是薩婆若の慧も亦不受、內空の故に、外空內外空空空大空第一義空有爲空無爲空畢竟空無始空散空性空自相空諸法空不可得空無法空有法空無法有法空の故に。何を以ての故に、是薩婆若は相行を以て得べからず、相行垢有るが故に。何等か是れ垢相なりや。色相乃至諸陀羅尼三昧門の相、是を垢相と名く。是相若は受若は修によりて薩婆若を得べき者ならんや。

(五)先尼梵志一切智の中に於て終に信を生ぜず。云何が信と爲すや、般若波羅蜜を信じ、分別解知稱量思惟するに相法を以てせず、無相法を以てせず、是の如く先尼梵志相を取らず、信行の中に住す、性空の智を用て諸法相の中に入り、色を受けず、受想行識を受けず。何を以ての故に、諸法自相空の故に受くることを得べからず。是れ先尼梵志內觀得の故に是智慧を見るに非ず、外觀得の故に是智慧を見るに非ず、內外觀得の故に此智慧を見るに非ず、無智慧觀得の故に是智慧を見るにあらず。何を以ての故に、梵志是法を見ず。智者は法を知り處を知るが故に。此梵志內色の中に是智慧を見るに非ず、內受想行識の中に是智慧を見るに非ず、外色の中に是の智慧を見るに非ず、外受想行識の中に是智慧を見るに非ず、內外色の中に是智慧を見るに非ず、內外受想行識の中に是智慧を見るに非ず、亦色受

【行處】性空の故に心の行處たる五蘊等なし。

【不受三昧】菩薩の不受三昧は一切法に通ずることと聲聞等の諸法に限りあるの比ならず。

【相行】有相の諸業。

【五】先尼の例を擧げ無相般若を述ぶ。

【先尼】セーナニー(Senani)有軍と譯し、六師の一たる删婆若の舅にして佛に歸し諸法本來無我無所得を聞き得道す。

【梵志】ブラフマチャーリン(Brahmacārin)淨裔と譯す。婆羅門生活中師につきて就學する間。

【內色等】內色は六根外色は五境なり。

【一切智】六師皆自ら一切智を稱するを意味す。

【先尼梵志以下】佛の内外空無我を解して、六師の説を信ぜざりし先尼が佛の一切智を信ずるを得たり。

【六】先尼の所信の如く取捨相を離れて般若たるを示す。

【彼岸を度らず】波羅蜜を涅槃即世間に名く。

【不取涅槃】知の故に涅槃に住すべきも利他具足せざると大慈本願との故に滅せず。

【七】般若の體無所有を示す。

【何者か】般若の法體を問ふ。體は是れ諸法實相。分別を離れて不可得なり。

【何を以て】名義を問ふ。

【誰の般若】世諦には菩薩に屬す。

想行識の中を離れて、是智慧を見るにあらず、内外空の故に。先尼梵志此中に心一切智に於て信解することを得たり。是を以ての故に、梵志諸法の實相を信ず、一切法不可得の故に、是の如く信解し已らば法として受くべき無し、諸法相無く憶念する無きが故に。是梵志諸法に於て亦得る所無く、取無く捨無し、取捨得べからざるが故に。是梵志亦智慧を念ぜず、諸法相念無きが故に。

(六)世尊、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く、此れ彼岸を度らざるが故に。是菩薩色受想行識受けず、一切法受けざるが故に、乃至諸陀羅尼三昧門亦受けず、一切法受けざるが故に。是菩薩是中に於て亦涅槃を取らず、未だ四念處乃至八聖道分を具足せず、未だ十力乃至十八不共法を具足せざるが故に。何を以ての故に、是四念處四念處に非ず、乃至十八不共法十八不共法に非ず、是諸法法に非ず、亦非法に非ず。是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く、色受けず、乃至十八不共法受けざるが故に。

(七)復次に世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、應に是の如く思惟すべし。何者か是れ般若波羅蜜なる、何を以ての故に、般若波羅蜜と名くるや、是れ誰の般若波羅蜜なりや。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜば、是の如く念ぜよ、若し法所有無く不可得なるは是れ般若波羅蜜なり』と。爾時舍利弗、須菩提に問はく、『何等の法か所有無く不可得なる』と。須菩提言はく、『般若波羅蜜是れ法所有無く不可得、禪那波羅蜜毘梨耶波羅蜜羼提波羅蜜尸羅波羅蜜檀那波羅蜜、是れ法所有無く不可得なり。内空の故に、外空内外空空空、

【法所有なく】諸法一として有とすべきものなし。
【色法所有なし】色中に色の性も相もなし。
【所有なき是れ色の性】色性に性とすべきものなく無所有なり。

大空第一義空有爲空無爲空畢竟空無始空散空性空自相空諸法空不可得空無法空有法空無法有法空の故に。舍利弗、色法所有無く不可得、受想行識法所有無く不可得なり。內空法所有無く不可得、乃至無法有法空法所有無く不可得なり。舍利弗、四念處法所有無く不可得、乃至十八不共法所有無く不可得なり。舍利弗、諸神通法所有無く不可得、如如法所有無く不可得、法性法相法位法住實際法所有無く不可得なり。舍利弗、佛所有無く不可得、薩婆若法所有無く不可得、一切種智法所有無く不可得なり。內空乃至無法有法空の故に。舍利弗、若し菩薩摩訶薩是の如く思惟し、是の如く觀ずる時、心沒せず悔いず驚かず畏れず怖かず、當に知るべし是菩薩、般若波羅蜜行を離れずと。」舍利弗須菩提に問はく、「何の因緣の故に、當に菩薩般若波羅蜜行を離れずと知るべきや。」須菩提言はく、「色色の性を離れ、受想行識識の性を離れ、六波羅蜜六波羅蜜の性を離れ、乃至實際實際の性を離るるが故に。」舍利弗復須菩提に問はく、「云何が是れ色の性、云何が是れ受想行識の性、云何が是れ乃至實際の性なりや。」須菩提言はく、「所有無き是れ色の性、所有無き是れ受想行識の性、乃至所有無き是れ實際の性なり。舍利弗、是因緣を以ての故に、當に知るべし、色色の性を離れ、受想行識識の性を離れ、乃至實際實際の性を離るることを。舍利弗、色亦色の相を離れ、受想行識亦識の相を離れ、乃至實際亦實際の相を離れ、相亦相を離れ、性亦性を離る。」舍利弗須菩提に問はく、「菩薩摩訶薩若し是の如く學せば薩婆若を成就するを得るや。」須菩提言はく、「是の如し是の如し、舍利弗、若し菩薩摩訶薩是の如く學せば薩婆若

【生成就】有法についてこれあるも、無法の故に生成就せず。

【身清淨心清淨相清淨】諸法清淨にして心邪見を生ぜざる心清淨、その果報として身清淨をえ、三十二相等その身を莊嚴するこれ相淨なり。

【終に母人の腹中に生ぜず】三淨をえ、法性生身を受くる故に胞胎によらず。

【相行品】若し色等の行相を行ぜば方便善巧なし、ただ行相をなさざるのみをいひ、無相門を以て諸法を破す。

【一】諸法の取相皆行相たることを明す。

を成就するを得ん。何を以ての故に、諸法生ぜず成就せざるを以ての故に。』舍利弗須菩提に問はく、『何の因緣の故に、諸法生ぜず成就せざるや。』須菩提言はく、『色の色空是れ色の生成就得べからず、受想行識の識空是れ識の生成就得べからず、乃至實際の實際空是れ實際の生成就得べからざるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く學せば漸く薩婆若に近き、漸く身清淨、心清淨、相清淨を得、漸く身清淨、心清淨、相清淨を得るが故に、是菩薩染心を生ぜず、瞋心を生ぜず、癡心を生ぜず、憍慢心を生ぜず、慳貪心を生ぜず、邪見心を生ぜず。是菩薩染心を生ぜず、乃至邪見心を生ぜざるが故に、終に母人の腹中に生ぜずして、常に化生することを得て、一佛國より一佛國に至り、衆生を成就し、佛國土を淨め、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に諸佛を離れず。舍利弗、菩薩摩訶薩、當に是般若波羅蜜を行ずることを作すべく、當に是般若波羅蜜を學することを爲すべし。』

相行品第十

(一)爾時、須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、方便無くして、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、若は色を行じて行相と爲し、若は受想行識を行じて行相と爲し、若は色是れ常と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ常と行ずるを行相と爲し、若は色是れ無

【方便】根機未熟にして妙法を受用し能はざる者に、眞道に歸入すべき假の手段として敎ゆる淺近の法門。

【行】誤つて解すること。

【色と爲す】色性に實有をみるなり。

常と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ無常と行ずるを行相と爲し、若は色是れ樂と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ樂と行ずるを行相と爲し、若は色是れ苦と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ苦と行ずるを行相と爲し、若は色是れ有と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ有と行ずるを行相と爲し、若は色是れ空と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ空と行ずるを行相と爲し、若は色是れ我と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ我と行ずるを行相と爲し、若は色是れ無我と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ無我と行ずるを行相と爲し、若は色是れ離と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ離と行ずるを行相と爲し、若は色是れ寂滅と行ずるを行相と爲し、若は受想行識是れ寂滅と行ずるを行相と爲す。世尊、若し菩薩摩訶薩方便無くして、四念處を行ずるを行相と爲し、乃至十八不共法を行ずるを行相と爲す。世尊、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、是念を作す、我れ般若波羅蜜を行ずと、所得有る行亦是れ行相なり。世尊、若し菩薩摩訶薩是念を作し、能く是の如く行ぜば、是れ般若波羅蜜を修行せりとするも、亦是れ行相なり。當に知るべし是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるに方便無しと。須菩提舍利弗に語らく、「若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色を受念妄解し、若くは色の受念妄解を色と爲すが故に行を作し、若くは色と爲すが故に行を作して、生老病死憂悲苦惱及び後世の苦を離るることを得る能はず。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時方便無く、眼を受念妄解し、乃至意、色乃至法、眼識界乃至意識界、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受乃至

【方便有り】取著すべからざるに取著せず諸法の和合に自性なしとみること。

意觸因緣生の受、四念處乃至十八不共法の受念妄解を十八不共法と爲すが故に行を作し、若は行を作すが爲に、是菩薩、生、老、病死憂悲苦惱、及び後世の苦を離るることを得る能はず。是の如き菩薩尙聲聞、辟支佛地の證を得ること能はず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得んや。是處有ること無し。舍利弗、當に知るべし、是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるに方便無しと。『舍利弗須菩提に問はく『云何が當に知るべき、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに方便有りと。』『須菩提舍利弗に語らく『若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲する時、色を行ぜず、受想行識を行ぜず、色相を行ぜず、受想行識相を行ぜず、色受想行識常を行ぜず、色受想行識無常を行ぜず、色受想行識樂を行ぜず、色受想行識苦を行ぜず、色受想行識我を行ぜず、色受想行識無我を行ぜず、色受想行識空を行ぜず、色受想行識無相を行ぜず、色受想行識無作を行ぜず、色受想行識離を行ぜず、色受想行識寂滅を行ぜず。何を以ての故に。舍利弗、是れ色空色に非ずと爲す、空を離れて色無く、色を離れて空無し、色は卽ち是れ空、空は卽ち是れ色なり。受想行識空識に非ずと爲す、空を離れて識無く、識を離れて空無く、空は卽ち是れ識、識は卽ち是れ空なり。乃至十八不共法空十八不共法に非ずと爲す、空を離れて十八不共法無く、十八不共法を離れて空無し、空は卽ち是れ十八不共法、十八不共法は卽ち是れ空なり。是の如く舍利弗、當に知るべし是れ菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに方便有りと。是れ菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を行じ、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、行亦受けず、不行

亦受けず、行不行亦受けず、非行非不行亦受けず、不受亦受けず。』舍利弗須菩提に語らく、『菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、何の因緣の故に受けざるや。』須菩提言はく、『是れ般若波羅蜜の自性得べからざるが故に受けず。何を以ての故に、所有性無き是れ般若波羅蜜なればなり。舍利弗、是を以ての故に、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ず、行亦受けず、不行亦受けず、行不行亦受けず、非行非不行亦受けず、不受亦受けず。何を以ての故に。一切法性所有無く、諸法行に隨はず、諸法相を受けざるが故に。是を菩薩摩訶薩諸法無所受三昧と名く。廣大の用、聲聞辟支佛と共ならず。是菩薩摩訶薩是三昧を行じて離れずば、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ん』と。

〔二〕舍利弗言はく、『但だ是三昧を離れざるのみ、菩薩摩訶薩をして、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。更に餘の三昧有りや。』須菩提舍利弗に語つて言はく、『更に諸三昧有り、菩薩摩訶薩是三昧を行し、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ん。』舍利弗言はく、『何等の三昧か菩薩摩訶薩是を行じて、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得るや。』須菩提言はく、『諸の菩薩摩訶薩、三昧有り首楞嚴と名く、是三昧を行ぜば、菩薩摩訶薩をして疾く阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。寶印三昧、師子遊戲三昧、妙月三昧、月幢相三昧、出諸法印三昧、觀頂三昧、畢法性三昧、畢幢相三昧、金剛三昧、入法印三昧、三昧王安立三昧、王印三昧、放光三昧、力進三昧、出生三昧、必入辯才三昧、入名字三昧、觀方三昧、陀羅尼印三昧、不忘三昧、攝諸法海印三昧、徧覆虛空三昧、金剛輪三昧、寶斷三昧、能照耀三昧、不求三昧、

【無所受】不受三昧が空についていひしに對し、これは無相についていふ。

【二】諸三昧について述ぶ。

【首楞嚴三昧】シューランガマ・サマーディ(Surangama. samādhi)勇健定と譯す。分別して諸三昧の行相の多少淺深を知ること。

【佛心等】授記は如來の妙用なれば佛心に隨ふと云ふ。

昧、無處住三昧、無心三昧、淨燈三昧、無邊明三昧、能作明三昧、普徧明三昧、堅淨諸三昧三昧、無垢明三昧、作樂三昧、電光三昧、無盡三昧、威德三昧、離盡三昧、不動三昧、莊嚴三昧、日光三昧、月淨三昧、淨明三昧、能作明三昧、作行三昧、知相三昧、如金剛三昧、心住三昧、徧照三昧、安立三昧、寶頂三昧、妙法印三昧、法等三昧、生喜三昧、到法頂三昧、能散三昧、壞諸法處三昧、字等相三昧、離字三昧、斷緣三昧、不壞三昧、無種相三昧、無處行三昧、離暗三昧、無去三昧、不動三昧、度緣三昧、集諸德三昧、住無心三昧、妙淨華三昧、覺意三昧、無量辯三昧、無等等三昧、度諸法三昧、分別諸法三昧、散疑三昧、無住處三昧、一相三昧、生行三昧、一行三昧、不一行三昧、妙行三昧、達一切有底散三昧、入言語三昧、離音聲字語三昧、然炬三昧、淨相三昧、破相三昧、一切種妙足三昧、不喜苦樂三昧、不盡行三昧、多陀羅尼三昧、取諸邪正三昧、滅憎愛三昧、逆順三昧、淨光三昧、堅固三昧、滿月淨光三昧、大莊嚴三昧、能照一切世三昧、等三昧、無諍行三昧、無住處樂三昧、如住定三昧、壞身三昧、壞語如虛空三昧、離著如虛空不染三昧と名くる有り。舍利弗、是菩薩摩訶薩、是諸の三昧を行せば、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ん。復無量阿僧祇三昧門陀羅尼門有り。菩薩摩訶薩、是三昧門陀羅尼門を學せば、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ん。「慧命須菩提佛心に隨ひて言はく、「當に知るべし諸の菩薩摩訶薩、是三昧を行ずる者は、已に過去の諸佛の授記するところたり。今現在十方の諸佛も亦是菩薩に記を授く。是菩薩、是の諸の三昧を見ず、亦是三昧を念ぜず、亦我れ當

【不】三昧と般若と菩薩と三事異ならざる故に授記もなし。

【說けるが如く】中阿含四十三無諍經。

【此義】諸法空無所有、不著といふ須菩提の說あたれり。

【三】諸三昧を分別するを以て舍利弗これあるを般若を學すと思ふ。故に不可得なるを明す。

に是三昧に入るべく、我れ今、是三昧に入り、我已に是三昧に入れりと念ぜず、是菩薩摩訶薩、都て分別の念無きなり。』舍利弗須菩提に問はく、『菩薩摩訶薩此の諸の三昧に住し、已に過去の佛に從ひて記を受けたりや。』須菩提報へて言はく、『不、舍利弗、何を以ての故に。般若波羅蜜は諸の三昧に異ならず、諸の三昧は、般若波羅蜜に異ならず、菩薩は般若波羅蜜及び三昧に異ならず、般若波羅蜜及び三昧は、菩薩に異ならず、般若波羅蜜は即ち是れ三昧、三昧は即ち是れ般若波羅蜜、菩薩は即ち是れ般若波羅蜜及び三昧、般若波羅蜜及び三昧は、即ち是れ菩薩なればなり。』舍利弗須菩提に語らく、『若し三昧菩薩に異ならず、菩薩三昧に異ならず、三昧は即ち是れ菩薩、菩薩は即ち是れ三昧ならば、菩薩云何が一切諸法、是れ三昧と知るや。』須菩提言はく、『若し菩薩是三昧に入らば、是時是念を作さず、我れ是法を以て、是三昧に入れりと。是因緣を以ての故に、舍利弗、是菩薩諸の三昧に於て知らず念ぜざるなり』と。舍利弗言はく、『何を以ての故に、知らず念ぜざるや。』須菩提言はく、『諸の三昧所有無きが故に、是菩薩、知らず念ぜざるなり。』爾時、佛讃じて言はく、『善い哉善い哉、須菩提、我が說けるが如く、汝無諍三昧を行ずること第一なり。此義と相應せり。菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を學すべし。禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜、四念處乃至十八不共法も亦是の如く學すべし。』

(三)舍利弗佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩是の如く學するを般若波羅蜜を學すと爲すや。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩是の如く學するを般若波羅蜜を學すと爲す、是

【畢竟淨】諸法本来空不可得にして遂に清淨なり。

【苦諦等】苦集滅道の四諦の不可得をいふ。

【出でず等】因より起るに非ずこれ不出、縁より起るに非ずこれ不生。不出生なければ生相なく、無得無作なり。

【四】實相無所有の學たるを說く。

法得べからざるが故に。乃至檀那波羅蜜を學す、是法得べからざるが故に。四念處乃至十八不共法を學す、是法得べからざるが故に。」舍利弗佛に白して言さく『世尊、是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を學するも是法得べからざるや。」佛言はく『是菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を學せば、是法得べからず。」舍利弗言さく『世尊、何等の法か得べからざる。」佛言はく『我得べからず、乃至知者見者得べからず、畢竟淨の故に。五陰得べからず、十二入得べからず、十八界得べからず、畢竟淨の故に。無明得べからず、畢竟淨の故に。乃至老死得べからず、畢竟淨の故に。苦諦得べからず、畢竟淨の故に。集滅道諦得べからず、畢竟淨の故に。欲界得べからず、畢竟淨の故に。色界無色界得べからず、畢竟淨の故に。四念處得べからず、畢竟淨の故に。乃至十八不共法得べからず、畢竟淨の故に。六波羅蜜得べからず、畢竟淨の故に。須陀洹得べからず、畢竟淨の故に。斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛得べからず、畢竟淨の故に。菩薩得べからず、畢竟淨の故に。佛得べからず、畢竟淨の故に。」舍利弗佛に白して言さく『世尊、何等か是畢竟淨なるや。」佛言はく『出です生ぜず得る無く作す無き、是畢竟淨と名く。」

(四)舍利弗佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩若し是の如く學するを何等の法を學すと爲すや。」佛舍利弗に告げたまはく『菩薩摩訶薩是の如く諸法を學せば學する所無し。何を以ての故に。舍利弗、諸の法相凡人所著の如くならざればなり。」舍利弗佛に白して言さく『世

【無明】すべて事理にくらき精神作用。

【無明力渇愛】無所有と知らず愛著すること。

【如是學】凡夫所著の諸法分別するをいふ。

尊、諸法の實相云何が有なるや。」佛言はく、「諸法所有無し、是の如く有り、是の如く所有無し、是事知らざるを、名けて無明と爲す。」舍利弗佛に白して言さく、「世尊、何等か所有無く、是事知らざるを、名けて無明と爲すや。」佛舍利弗に告げたまはく、「色受想行識所有無し、內空乃至無法有法空の故に。四念處乃至十八不共法所有無し、內空乃至無法有法空の故に。是中に凡夫、無明力を以て渇愛するが故に、妄見分別して、是れ無明と說き、是凡夫二邊の縛する所と爲る。是人諸法所有無きを知らず見ずして、憶想分別し、色乃至十八不共法に著す。是人著するが故に、無所有法に於て、識知の見を作す。是れ凡人知らず見ず。」「何等か知らず見ざる。」「色を知らず見ず、乃至十八不共法も、亦知らず見ず。是を以ての故に、凡夫數に墮す、小兒の如し。是人出でず。」「何に於て出でざる。」「欲界を出でず、色界を出でず、無色界を出でず、聲聞辟支佛法の中を出でず。是人亦信ぜず。」「何等をか信ぜざる。」「色空を信ぜず、乃至十八不共法空を信ぜず。是人住せず。」「何等にか住せざる。」「檀那波羅蜜に住せず、乃至般若波羅蜜に住せず、阿惟越致地に住せず、乃至十八不共法に住せず。是因緣を以ての故に、名けて凡夫と爲す、小兒の如し。亦著者と名く。」「何等をか著と爲すや。」「色乃至識に著し、眼入乃至意入に著し、眼識界乃至意識界に著し、婬怒癡に著し、諸の邪見に著し、四念處に著し、乃至佛道に著す。」舍利弗佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩是の如き學を作すも、亦般若波羅蜜を學せずば、薩婆若を得ざるや。」佛舍利弗に語りたまはく、「菩薩摩訶薩是の如き學を作すも、亦般若波羅蜜

を學せずば、薩婆若を得ず。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、何を以ての故に、菩薩摩訶薩、亦般若波羅蜜を學せざれば薩婆若を得ざるや。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩方便無きが故に、想念分別し、般若波羅蜜に著し、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜乃至十八不共法一切種智に著し、想念分別し著す。是因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩是の如く學するも、亦般若波羅蜜を學せずば薩婆若を得ず。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩是の如く學するも、般若波羅蜜を學せずば薩婆若を得ざるや。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩是の如く學するも、亦般若波羅蜜を學せずば薩婆若を得ず。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩今云何が應に般若波羅蜜を學し、薩婆若を得べき。』佛舍利弗に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を學する時、般若波羅蜜を見ず。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を學せば薩婆若を得、不可得を以ての故に。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、云何が不可得と名くるや。』佛言はく、『諸法內空乃至無法有法空の故に。』

【幻學品】虛なる幻人が般若を學すると、菩薩が般若を學するとの二に差別ありやの疑問について辨ず。

【一】幻と諸法と異らざるを明す。

【幻人】術中に現はるゝ人、奇術師の梵にマーヤープルシャ(Māyapurusa)といふ。

摩訶般若波羅蜜經　卷第四

後秦龜玆國三藏鳩摩羅什譯す

幻學品第十一

(一)爾時、慧命須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し人有り、問ひて「幻人般若波羅蜜を學し、薩婆若を得べきや不や、幻人禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を學し、四念處乃至十八不共法及び一切種智を學し、薩婆若を得るや不や」と云ふに當りて、我れ當に如何が答ふべき。』佛須菩提に告げたまはく、『我れ還て汝に問ふ、汝の意に隨て我に答ふべし。須菩提、汝が意に於て云何、色と幻と異り有りや不や、受想行識と幻と、異り有りや不や。』須菩提言さく、『不世尊。』佛言はく、『汝が意に於て云何、眼と幻と異り有りや不や、乃至意と幻と異り有りや不や、色乃至法と幻と異り有りや不や、眼界乃至意識界と幻と、異り有りや不や、眼觸乃至意觸、眼觸因緣生の受、乃至意觸因緣生の受と幻と、異り有りや不や。』須菩提申さく、『不、世尊。』『汝が意に於て云何、四念處と幻と異り有りや不や、乃至八聖道分と幻と異り有りや不や。』『不、世尊。』『汝が意に於て云何、空無相無作と幻と異り有りや、不や。』『不、世尊。』『須菩提、汝が意に於て云何、檀那

【一】菩薩幻人別なきを說く。

【五受陰假名】五受陰假和合に名けて菩薩といへば、是幻人と異なるところなし。

波羅蜜と幻と異り有りや不や、乃至十八不共法と幻と異り有りや不や。』『不、世尊。』『須菩提、汝が意に於て云何、阿耨多羅三藐三菩提と幻と異り有りや不や。』『不、世尊。何を以ての故に、色は幻と異ならず、幻は色と異ならず、色は即ち是れ幻、幻は即ち是れ色なればなり。世尊、受想行識は幻と異ならず、幻は受想行識と異ならず、識は即ち是れ幻、幻は即ち是れ識なればなり。世尊、眼は幻と異ならず、幻は眼と異ならず、眼は即ち是れ幻、幻は即ち是れ眼、眼觸因緣生の受、乃至意觸因緣生の受も亦是の如し。世尊、四念處は幻と異ならず、幻は四念處と異ならず、四念處は即ち是れ幻、幻は即ち是れ四念處、乃至阿耨多羅三藐三菩提は幻と異ならず、幻は阿耨多羅三藐三菩提と異ならず、阿耨多羅三藐三菩提は即ち是れ幻、幻は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なればなり。』

〔一〕佛、須菩提に告げたまはく『汝が意に於て云何、幻に垢有り淨有りや不や。』『不、世尊。』『須菩提、汝が意に於て云何、幻に生有り滅有りや、不や。』『不、世尊。』『若し幻生せず滅せず、是法能く般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。』『不、世尊。』『汝が意に於て云何、五受陰假名、是れ菩薩なりや、不や。』『是の如し世尊。』『汝が意に於て云何、五受陰假名に生滅垢淨有りや、不や。』『不、世尊。』『汝が意に於て云何ん、若し法但だ名字のみ有り、身に非ず、身業に非ず、口に非ず、口業に非らず、意に非ず、意業に非ず、生にあらず、滅にあらず、垢にあらず、淨にあらず。是の如きの法、能く般若波羅蜜を學せば、薩婆若を得るや不や。』『不、世尊。』『菩薩摩訶薩、若し能く是の如く、般若波羅蜜

【三】菩薩般若を行ずるものなしと聞き疑ふものについて方便を明す。【新發大乘意】菩提心を發すも未だ法空に通ぜざるもの。

を學せば、當に薩般若を得べし、無所得を以ての故に。」須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩應に是の如く般若波羅蜜を學せば、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。幻人の如く學すればなり。何を以ての故に。世尊、當に知るべし、五陰は即ち是れ幻人、幻人は即ち是れ五陰なればなり。」佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、是五陰、般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」『不、世尊。何を以ての故に。是五陰の性、所有無し。所有無きの性も、亦得べからざればなり。」佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何。夢の如きの五陰、般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」『不、世尊、何を以ての故に、夢の性、所有無し、所有無きの性も亦得べからざればなり。」『汝が意に於て云何、響の如き、影の如き、焰の如き、化の如きの五陰、般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」『不、世尊、何を以ての故に、響影焰化の性、所有無し、所有無きの性も亦得べからざればなり、六情も亦是の如し。世尊、五陰は即ち是れ六情、六情は即ち是れ五陰。是の如きの法、皆內空の故に得べからず、乃至無法有法空の故に得べからざるなり。」

【三】須菩提佛に白して言さく、『世尊、新發大乘意菩薩、般若波羅蜜を說くを聞き、將に恐怖無かるべきや。」佛須菩提に告げたまはく、『若し新發大乘意菩薩、般若波羅蜜に於て方便無く、亦善知識を得ずんば、是菩薩、或は驚き、或は怖き、或は畏れん。」須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ方便なる。菩薩是方便を行ぜば、驚かず、畏れず、怖かざるや。」佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる

【檀那波羅蜜】財法二施中特にこゝにては法施を指す
【聲聞辟支佛心】智慧慈悲ともに淺き二乘自利の心。

心に、色無常相を觀じ是れ亦不可得なりとし、受想行識無常相を觀じ是亦不可得なりとす。須菩提、是を菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じて方便ありと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩薩婆若に應ずる心に、色の苦相を觀じ是れ亦不可得なりとす、受想行識も亦是の如し。薩婆若に應ずる心に、色無我の相を觀じ是れ亦不可得なりとす、受想行識も亦是の如し。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心に、色の空相を觀じ是れ亦不可得なりとす、受想行識も亦是の如し。色無相の相を觀じ是れ亦不可得なりとす。受想行識も亦是の如し。色無作の相を觀じ是れ亦不可得なりとす、乃至識も亦是の如し。色寂滅の相を觀じ、是れ亦不可得なりとす、乃至識も亦是の如し。色の離相を觀じ是れ亦不可得なりとす、乃至識も亦是の如し。是を菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じて方便ありと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、色無常の相を觀じ是れ亦不可得なりとし、色苦相、無我相、空相、無相相、無作相、寂滅相、離相を觀じ是れ亦不可得なりとす、受想行識も亦是の如し。是時、菩薩、是念を爲さく「我れ當に一切衆生の爲に、是の無常の法を說くも是れ亦不可得なるべく、一切衆生の爲めに苦相を說き、無我相、空相、無相相、無作相、寂滅相、離相を說くも是れ亦不可得なるべし」と。是を菩薩摩訶薩の檀那波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、聲聞辟支佛心を以てせず、色無常を觀ずるも亦不可得なり。聲聞辟支佛心を以てせず、識無常を觀ずるも亦不可得なり。聲聞辟支佛心を以てせず、色苦、無我、空、無相、無作、寂滅、離を觀ずるも亦不可得なり。受想行識も亦是の如し。是を菩薩摩

【忍欲樂】安忍し冀欲し願樂すること。

【色を空ずる】諸緣によりて色空なるに非ず、色本來空なり。

【四】善知識守護の緣を説く。

訶薩の尸羅波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、是の諸法の無常相、乃至離相に於て忍欲樂する、是を菩薩摩訶薩の羼提波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる心に、色無常相も亦不可得、乃至離相も亦不可得、受想行識も亦是の如しと觀ずるも、薩婆若に應ずる心に、捨てざる息まざる是を菩薩摩訶薩の毘梨耶波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、聲聞辟支佛意、及び餘の不善心を起さず、是を菩薩摩訶薩の禪那波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、是の如く思惟す。色を空ずるを以てせざるが故に、色空なり、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受想行識も亦是の如し。眼を空ずるを以ての故に、眼空ならず、眼は即ち是れ空、空は即ち是れ眼なり。乃至意觸因緣生の受も、受を空ずるを以ての故に、受空ならず、受は即ち是れ空、空は即ち是れ受なり。四念處を空ずるを以ての故に、四念處空ならず、四念處は即ち是れ空、空は即ち是れ四念處なり。乃至十八不共法を空ずるを以ての故に、十八不共法空ならず、十八不共法は即ち是れ空、空は即ち是れ十八不共法なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、驚かず、畏れず、怖かず。」

(四)須菩提佛に白して言さく「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の善知識に守護せらるるが故に、是般若波羅蜜を説くを聞きて、驚かず、畏れず、怖かざるや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の善知識とは、色の無常亦不可得なるを説き、是善根を持ち、聲聞辟支佛

【五】無方便惡知識を廣說す。
【惡知識】善知識の對、邪惡の法を說きて、人をして惡魔道に陷らしむるものをいふ。

道に向はしめず、但だ一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。受想行識の無常亦不可得なるを說き、是善根を持ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但だ一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。須菩提、菩薩摩訶薩、復善知識有り、色苦亦不可得と說き、受想行識苦亦不可得と說き、色無我受想行識無我亦不可得と說き、色空、無相、無作、寂滅、離亦不可得、受想行識空、無相、無作、寂滅、離亦不可得なるを說き、是善根を持ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但だ一切智に向はしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。須菩提、菩薩摩訶薩、復善知識有り、眼の無常、乃至離も亦不可得なるを說き、乃至意觸因緣生の受の無常、乃至離も亦不可得なるを說き、是善根を持ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但だ一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。須菩提、菩薩摩訶薩、復善知識有り、四念處の法を修するに、乃至離も亦不可得なるを說き、是善根を保ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但だ一切智に向はしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。乃至十八不共法を修し、一切智を修するも亦不可得なるを說き、是善根を持ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但だ一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。』

(五)須菩提佛に白して言さく『云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるとき、方便無く、惡知識に隨て、是般若波羅蜜を說くを聞き、驚き畏れ怖くや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、一切智を離れたる心に、般若波羅蜜を修し、是般若波羅蜜を得。是般若波

【魔】第六欲界天主にして佛行を妨ぐ。
【佛の形像】魔が假りに化作せるもの。
【聲聞經】小乘經のこと。
【修妬路】スートラ(Sūtra)。契經と譯す、十二分教の一、前說。
【優波提舍】ウパデーシャ(Upadeśa)論議と譯す。前說。

羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を念じ、皆得、皆念ず。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若を離れたる心に、色の內空、乃至無法有法空を觀じ、受想行識の內空、乃至無法有法空を觀じ、眼の內空、乃至無法有法空、乃至意觸因緣生の受の內空、乃至無法有法空を觀じ、諸法空に於て、所念有り、所得有り。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるとき薩婆若を離れたる心に、四念處を修し、亦念じ、亦得。乃至十八不共法を修し、亦念じ、亦得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるとき、方便無きを以ての故に、是般若波羅蜜を聞き、驚き畏れ怖く。』須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩、惡知識に隨つて、般若波羅蜜を聞き、驚き畏れ怖くや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の惡知識、般若波羅蜜を離れ、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を離るるを教ふ。須菩提、是を菩薩摩訶薩の惡知識と名く。須菩提、菩薩摩訶薩、復惡知識有り、魔事を說かず、魔罪を說かず、是言を作さず。惡魔、佛の形像を作し、來りて菩薩に六波羅蜜を離るるを教ふ。菩薩に語りて言はく、「善男子、般若波羅蜜を修するを用て爲し、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を修するを用て爲すありや」と。當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の惡知識なり。復次に須菩提、惡魔復佛の形像を作し、菩薩の所に到り、爲に聲聞經、若は修妬路、乃至優波提舍を說き、是の如き經を教詔し、分別し演說するは、魔事魔罪なりと說くことを爲さず。當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の惡知識なり。復次

【和上】和尙に同じ。梵にウパドヤーヤ(Upadhyāya)といひ親教師と譯す。

【阿闍梨】アーチヤールヤ(Ācārya)軌範師、正行などと譯す。威儀の軌範となる師。

に須菩提、惡魔、佛の形像を作し、菩薩の所に到りて是語を作さく「善男子、汝眞の菩薩心無し、亦阿惟越致地に非ず、汝亦阿耨多羅三藐三菩提を得る能はず。」是の如きは魔事魔罪なりと說くことを爲さず、當に知るべし、是れ菩薩の惡知識なり。復次に須菩提、惡魔、佛の形像を作し、菩薩の所に到り、菩薩に語りて言はく「善男子、色空にして我無く、我所無し。受想行識空にして我無く、我所無し。眼空にして我無く、我所無し。乃至意觸因緣生の受空にして我無く、我所無し。檀那波羅蜜空、乃至般若波羅蜜空、四念處空、乃至十八不共法空なり。汝阿耨多羅三藐三菩提を用て爲すありや」と、是の如きは魔事魔罪なりと說かず、敎へず、當に知るべし、是れ菩薩の惡知識なり。復次に須菩提、惡魔、辟支佛身を作し、菩薩の所に到り、菩薩に語りて言はく「善男子、十方皆空にして、是中佛無く、菩薩無く、聲聞無し」と、是の如きは魔事魔罪なりと說かず、敎へず。當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の惡知識なり。復次に須菩提、惡魔、和上阿闍梨の身と作り、來つて菩薩の所に到り、菩薩道を離るるを敎へ、一切種智を離るるを敎へ、四念處乃至八聖道分を離るるを敎へ、檀那波羅蜜を離るるを敎へ、乃至十八不共法を離るるを敎へ、空無相無作に入るを敎へ、是言を作さく「善男子、汝是諸法を修念し、聲聞證を得よ。阿耨多羅三藐三菩提を用て爲さんや。」是の如きは魔事、魔罪なりと說かず、敎へず、當に知るべし、是れ菩薩の惡知識なり。復次に須菩提、惡魔、父母の形像を作し、菩薩の所に到りて菩薩に語つて言はく「子、汝須陀洹果の證の爲の故に、懃めて精進し、乃至阿羅漢果の證の故

【當に之を遠離すべし】惡知識は慧命を害し佛寶を奪ふ故に身心遠離せよ。

【句義品】句義を說きて般若を示す。句義とは梵にパダールタ(Padartha)といひ定義條件なり。

【一】無義無所有を義とするを說く

【義處有る無く】依止處なし、法空をいふ。

【我無し】已我の自體なし。

に、懃めて精進せよ。汝阿耨多羅三藐三菩提を用て爲さんや。阿耨多羅三藐三菩提を求めば、當に無量阿僧祇劫の生死を受け、手を截ち、足を截ち、諸の苦痛を受くべし。」是の如きは魔事、魔罪なりと說かず、敎へず、當に知るべし、是れ菩薩の惡知識なり。復次に須菩提、惡魔、比丘の形像を作し、菩薩の所に到りて菩薩に語りて言はく、「眼の無常は可得の法なり。乃至意の無常も可得の法なり。」眼の苦、眼の無我、眼の空、無相、無作、寂滅、離も可得の法なりと說き、乃至意も亦是の如しとす、有所得の法を用て四念處を說き、乃至有所得の法を用て十八不共法を說く。須菩提、是の如きは魔事、魔罪なりと說かず、敎へず、當に知るべし、是れ菩薩の惡知識なり。知り已りて、當に之を遠離すべし。』

句義品第十二

(一)爾時、須菩提、佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩の句義と爲す。』佛須菩提に告げたまはく、『句義無きは、是れ菩薩の句義なり。何を以ての故に。阿耨多羅三藐三菩提義處有る無く、亦我無し。是を以ての故に、句義無きは是れ菩薩の句義なり。須菩提、譬へば鳥虛空を飛んで、跡有る無きが如し。菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば夢中見る所、處所無きが如し。菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば幻、

【多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀】多陀阿伽度はタターガタ(Tathagata)如來の義、阿羅訶はアルハン(Arhan)即ち羅漢の義、三藐三佛陀はサミヤクサンブッダ(Samyaksambuddha)佛のさとりのこと何れも如來をあらはす。

實義有る無きが如く、焰の如く、響の如く、影の如く、佛の所化の如く、實義有る無し。菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば如、法性、法相、法位、實際の義有る無きが如く、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば幻人の色、義有る無く、幻人の受想行識、義有る無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、幻人の眼、義有る無く、乃至意、義有る無きが如く、須菩提、幻人の色、義有る無く、乃至法、義有る無く、眼觸因緣生の受、乃至意觸因緣生の受、義有る無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、幻人、內空を行ずる時、義有る無く、乃至無法有法空を行ずるに、義有る無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、幻人、四念處、乃至十八不共法を行ずるに義有る無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀の色、義有る無きが如く、是色有る無きが故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀の受想行識、義有る無きが如く、是識有る無きが故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、佛眼に處所無く、乃至意に處所無く、色乃至法に處所無く、眼觸乃至意觸因緣生の受に處所無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、佛の內空に處所無く、乃至無法有

【不作等】空法は因緣の所起作にあらず、因によらず、不出なり、不作不出なれば不得、空の故に垢淨なし。
【二】無義は諸法皆然るを說く。
【入界】十二處十八界。
【淨義】四念處等に著することなければ、淨なく不淨なし。
【淨中我】我相不可得なるをいふ。

法空に處所無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、佛の四念處に處所無く、乃至十八不共法に處所無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、有爲性の中に無爲性の義無く、無爲性の中に有爲性の義無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、不生不滅の義、處所無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、不作、不出、不得、不垢、不淨、處所無きが如く、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。』

(三)須菩提佛に白して言さく、『何の法か不生不滅の故に、處所無く、何の法か不作、不出、不得、不垢、不淨の故に、處所無きや。』佛須菩提に告げたまはく、『色、不生不滅の故に處所無く、受想行識、不生不滅の故に處所無く、乃至不垢不淨も亦是の如し。入界、不生不滅の故に處所無く、乃至不垢不淨も亦是の如し。四念處、不生不滅の故に處所無く、乃至不垢不淨も亦是の如し。乃至十八不共法、不生不滅の故に處所無く、乃至不垢不淨も亦是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、四念處の淨義、畢竟不可得なるが如く、須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、四正勤乃至十八不共法の淨義、畢竟不可得なるが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、淨の中の我不可得の如く、我所有無きが故に、乃至淨の中の知者、見者不

【劫燒く】世界滅盡の時大火一切を燒盡するをいふ。

【色無く等】質礙形相相對なしこれ無相なり、故に無閡なり。

【三】一切法を總擧す。

【善不善無記】三性法なり。無記は善惡に屬せざるもの。

【世間出世間】俗諦と第一義諦となり。

可得なり。知見所有無きが故に。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば日出づる時、黑闇有る無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば劫燒くる時、一切の物無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、佛戒の中破戒無し。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、佛定中亂心無く、佛慧中愚癡無く、佛解脱中不解脱無く、佛解脱知見中不解脱知見無きが如く、須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば佛光中日月の光現せず、佛光中四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵衆天、乃至阿迦尼陀天の光現ぜざるが如く、須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。何を以ての故に。是の阿耨多羅三藐三菩提、菩薩、菩薩の句義、是一切法は皆合せず、散ぜず、色無く、形無く、對無く、一相所謂無相なり。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩、一切法、無閡の相の中に、應に學すべく、亦應に知るべし。』

(三)須菩提佛に白して言さく「世尊、何等か是れ一切法、云何が一切法の中に、無閡の相當に學すべく、當に知るべきや。」佛須菩提に告げたまはく「一切法とは善法、不善法、記法、無記法、世間法、出世間法、有漏法、無漏法、有爲法、無爲法、共法、不共法なり。須菩提、是を一切法と名く。菩薩摩訶薩、是一切法、無閡の相の中に學すべく知るべし。』

【四】善法を說く
【沙門婆羅門】出家人を沙門といひ在家人を婆羅門といふ。
【方便生福德】懺悔等空を行じて空に著するなく修する諸善。
【念佛等】十念。
【念安般】念入出息梵。にアーナーパーナスムリチ(Anapanasmṛti)といひ、入出息を念ずる數息觀なり。
【五】不善法を說く。
【奪他命】殺生
【不與取】偸盜
【非時語】綺語
【記法】善惡性の記別せらるるなり
【世間法】世人所行の法。
【六】出世間法を說く。
【明解脫】明は三明、解脫は有爲、無爲解脫なり。
【念慧】十念十一智。

(四)須菩提佛に白して言さく『世尊、何等をか世間の善法と名くるや。』佛、須菩提に告げたまはく『世間の善法とは、父母に孝順し、沙門婆羅門に供養し、尊長に敬事し、布施福處、持戒福處、修禪福處、勸導福事、方便生福德、世間の十善道、九相、脹相、血相、壞相、膿爛相、青相、噉相、散相、骨相、燒相、四禪、四無量心、四無色定、念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念善、念安般、念身、念死、是を世間の善法と名く。』

(五)『何等か不善法なるや。』『奪他命、不與取、邪婬、妄語、兩舌、惡口、非時語、貪、惱害、邪見、是十不善道等、是を不善法と名く。』『何等か記法なるや。』『若は善法、若は不善法、是を記法と名く。』『何等か無記法なるや。』『無記の身業、口業、意業、無記の四大、無記の五陰、十二入、十八界無記の報、是を無記法と名く。』『何等をか世間法と名くるや。』『世間法とは五陰、十二入、十八界、十善道、四禪、四無量心、四無色定、是を世間法と名く。』

(六)『何等をか出世間法と名くるや。』『四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空解脫門、無相解脫門、無作解脫門、三無漏根、未知欲知根、知根、知已根、三三昧、有覺有觀三昧、無覺有觀三昧、無覺無觀三昧、明解脫、念慧、正憶、八背捨。』『何等か八なるや。』『色に色を觀る、是れ初背捨。內色相無く、外色を觀る、是れ二背捨。淨背捨の身によりて證を作す、是れ三背捨。一切の色相を過ぐるが故に、有對の相を滅するが故に、一切異相念ぜざるが故に、無邊虛空處に入る、是れ四背捨。一切無邊虛空處を過ぎて、一切無邊識處に入る、是れ五背捨。一切無邊識處を過ぎて、無所有處に入る、是れ六背捨。

【正憶】諸法實相に隨つて觀ず。
【離生喜樂】五欲を離れたる淨念所生の喜樂なり。眞理を樂むの類。
【定生喜樂】三昧安住の喜樂。美に沒するの類。
【捨を行じ】捨に住するの意、心平等にして只德に勵むの類なり。
【捨念淨く】平等正念淸淨究竟せるなり。
【異相念ず】種々の相の作意。
【七】漏無漏、爲無爲、共不共について述ぶ。
【六種】地水火風空識の六大。
【六觸】眼耳鼻舌身意の六。
【六受】眼觸受乃至意觸受、即ち六識が六境に對して起す苦樂捨の三受のこと。
【生住滅】有爲の三相。

一切無所有處を過ぎて、非有想非無想處に入る、是れ七背捨。一切非有想非無想處を過ぎて、滅受想定に入る、是れ八背捨、九次第定なり。』『何等か九なるや。』『欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀にして離生喜樂ありて、初禪に入る。諸の覺觀を滅して、內清淨なるが故に、一心にして覺無く、觀無く、定生喜樂ありて、第二禪に入る。喜を離るるが故に、捨を行じ、身樂を受く。聖人能く說き、能く念を捨し樂を行じ、第三禪に入る。苦樂を斷ずるが故に、先に憂喜を滅するが故に、苦ならず、樂ならず、捨念淨く、第四禪に入る。一切の色相を過ぐるが故に、有對相を滅するが故に、一切の異相念ぜざるが故に、無邊虛空處に入る。一切の無邊虛空處を過ぎて、無邊識處に入る。一切の無邊識處を過ぎて、無所有處に入る。一切の無所有處を過ぎて、非有想非無想處に入る。一切の非有想非無想處を過ぎて、滅受想定に入る復出世間の法有り。內空、乃至無法有法空、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、一切智、是を出世間の法と名く。』

『(七)何等をか有漏法と爲す。』『五受陰、十二入、十八界、六種、六觸、六受、四禪、乃至四無色定、是を有漏法と名く。』『何等をか無漏法と爲す。』『四念處、乃至十八不共法、及び一切智、是を無漏法と名く。』『何等をか有爲法と爲す。』『若し法の生、住、滅。欲界、色界、無色界。五陰、乃至意觸因緣生の受、四念處、乃至十八不共法、及び一切智、是を有爲法と名く。』『何等をか無爲法と爲す。』『不生、不住、不滅、若は染盡、瞋盡、癡盡、如、不異、法相、法性、法位、實際是を無爲法と名く。』『何等をか共法と爲す。』『四禪、四無量心、四無色定、是

の如き等、是を共法と名く。』『何等をか不共法と名くるや。』『四念處、乃至十八不共法是を不共法と名く、菩薩摩訶薩、是自相空の法の中に於て、著すべからず動ぜざるが故に。菩薩亦一應に切法不二の相を知るべし、動ぜざるが故に。是を菩薩の義と名く。』

金剛品第十三

(一)爾時、須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何を以ての故に、名けて摩訶薩と爲すや。』佛須菩提に告げたまはく、『是れ菩薩必定衆の中に於て上首と爲る、是故に摩訶薩と名く。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等をか必定衆と爲して、是菩薩摩訶薩、而も上首と爲るや。』佛須菩提に告げたまはく、『必定衆とは性地人、八人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、初發心の菩薩、乃至阿惟越致地までの菩薩なり。須菩提、是を必定衆と爲す。菩薩は上首たり、菩薩摩訶薩、是中に於て大心を生じ、壞すべからざること金剛の如く、當に必定衆の爲に上首と作るべし。』『須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩大心を生じ、壞すべからざること金剛の如きや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、是の如きの心を生ずべし。我れ當に無量生死の中に於て、大誓をもつて莊嚴すべし。我れ應に一切所有を捨つべし。我れ應に心を一切衆生に等うすべし。我れ應に三乘を以て一切衆生を度脱し、無餘涅槃に入らしむべし。我れ一切衆生を度し已りて、乃至一

【不生不住不滅】有爲の三相に對して無爲を略說するものなり。

【作盡等】三毒の滅盡に名く。

【共法】自他或は聖凡に通ずるもの。

【自相空】一切諸法の總別二相何れからするも空なること。是れ不著なり、不動なり。

【金剛品】大心を發し金剛の如く壞すべからずば有情の上首、即ち摩訶薩たり。

【　】上首の大心として十大誓願を明す。

【摩訶薩】マハーサットヷ(Mahāsattva)大有情と譯す。菩薩の行を行じて一切衆生を濟度する人、

【必定衆】三乘中の正定衆、必ず涅槃に入るべきもの衆は佛以外の一切賢聖。

【性地人】聖人性

【八人】の中に生れしもの八忍を得たる人。見道の位。

【初發心の菩薩】無生法忍を得たる菩薩。

【大心】一切法を知り一切衆生を度せんとする心。

【大誓】菩薩の弘誓願。以下十願を擧ぐ。

【涅槃に入るもの等】衆生を度して度せりとせず、功なきも心に悔あらざるをいふ。

【一相智門】諸法畢竟空なり。

【無量相】諸法の無量なる相をいふ。

【二】更に大快心等の諸心を述べて大士たるを明にす。

【大快心】牢固心更に大快を加ふ。

【染心】染れたる心。惡心と有覆無記心をいふ。

【瞋恚心】三毒の一。己が心に逆ふものに對して忿怒すること。

人も涅槃に入る者有ること無けん。我れ應に一切諸法、不生の相を解すべし。我れ應に純ら薩婆若心を以て、六波羅蜜を行ずべし。我れ應に智慧を學し、一切法を了達すべし。我れ當に諸法一相智門を了達すべし。我れ當に乃至無量相智門を了達すべし。須菩提、是を菩薩摩訶薩大心を生じ、壞すべからざること金剛の如しと名く。是菩薩摩訶薩、是心中に住せば、諸の必定衆に於て、而も上首と爲る。是法、所得無きを用ての故に。須菩提、菩薩摩訶薩、應に是の如きの心を生ずべし。我れ當に十方一切の衆生、若は地獄の衆生、若は畜生の衆生、若は餓鬼の衆生に代つて苦痛を受け、一一の衆生の爲に無量百千億劫、代つて地獄の中の苦を受け、乃ち是衆生、無餘涅槃に入るに至るべし。是法を以ての故に、是衆生の爲に、諸の懃苦を受く。是衆生、無餘涅槃に入り已つて、然る後、自ら善根を種ゑ、無量百千萬億阿僧祇劫に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提、是を菩薩摩訶薩大心を生じ、壞すべからざること金剛の如く、是心中に住し、必定衆の爲に、上首と作ると爲す。

(二)復次に須菩提、菩薩摩訶薩、大快心を生じ、是大快心の中に住し、必定衆の爲に上首と作る。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の大快心なるや。」佛言はく、「菩薩摩訶薩、初發意より、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、染心、瞋恚心、愚癡心を生ぜず、慢心を生ぜず。聲聞、辟支佛心を生ぜず。是を菩薩摩訶薩の大快心と名く。是心中に住し、必定衆の爲に上首と作り、亦是心有るを念ぜず。復次に須菩提、菩薩摩訶

薩、應に不動心を生ずべし。』須菩提佛に白して言さく、『云何が不動心と名くるや。』佛言はく『常に一切種智心を念じ、亦是心有るを念ぜず。是を菩薩摩訶薩の不動心と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、一切衆生の中に於て、應に利益安樂心を生ずべし。』『云何が利益安樂心と名くるや。』『一切衆生を救濟し、一切衆生を捨てず。是事あるも、亦是心有るを念はず。是を菩薩摩訶薩、一切衆生の中に於て、利益安樂心を生ずと名く。是の如く須菩提、是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、必定衆の中に於て、最も上首たりと爲す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、應に欲法、喜法、樂法心を行ずべし。』『何等か是れ法なるや。』『所謂、諸法の實相を破らざる、是を名けて法と爲す。』『何等をか欲法、喜法と名くるや。』『法を信じ、法を忍び、法を受くる、是を欲法、喜法と名く。』『何等をか樂法と名くるや。』『常に是法を修行す、是を樂法と名く。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、必定衆の中に於て能く上首と爲る。是法、所得無きを用ての故に。

(三)復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、内空、乃至無法有法空に住し、能く必定衆の爲に上首と作る、是法、所得無きを用ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、四念處の中に住し、乃至十八不共法の中に住し、能く必定衆の爲に上首と作る。是法、所得無きを用ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、如金剛三昧に住し乃至離著虛空不染三昧の中に住し、必定衆に於て上首と作る。是法所得無きを用ての故に。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、是諸法の中に住し、能く必定

【愚癡心】三毒の一。事に惑ひ理を辨へざること。
【慢心】他人に對して心を高貴ならしむること。
【聲聞辟支佛心を生ぜず】衆生を捨てず。佛道を貴ぶが故に。
【不動心】金剛心に更に動搖なき心に名く。
【三】以下十八空三十七道品、諸三昧に住して不可得なる故に上首たるを明す。

衆の爲に上首と作る。是因緣を以ての故に、名けて摩訶薩と爲す。』

樂說品第十四

(一)爾時、慧命舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、我も亦摩訶薩たる所以を說かんと欲す。』佛舍利弗に告げたまはく、『便ち說け。』舍利弗言さく、『我見、衆生見、壽見、命見、生見、養育見、衆數見、人見、作見、使作見、起見、使起見、受見、使受見、知者見、見者見、斷見、常見、有見、無見、陰見、入見、界見、諦見、因緣見、四念處見、乃至十八不共法見、佛道見、成就衆生見、淨佛國土見、佛見、轉法輪見、是の如き諸見を斷ずる爲の故に、而も爲に法を說く。是を摩訶薩と名く。』須菩提舍利弗に語つて言はく、『何の因緣の故に色見是れ妄見なる、何の因緣の故に、受想行識、乃至轉法輪見、是を名けて妄見と爲すや。』舍利弗須菩提に語らく、『菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、方便無きが故に色を得て見を生ず、有所得を用ての故に。受想行識、乃至轉法輪に於て見を生ず、有所得を以ての故に。是中の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、諸見の網を斷ずるが故に、而も爲に法を說く、無所得を以ての故なり。』

(二)爾時、須菩提、佛に白して言さく、『世尊、我れ亦摩訶薩たる所以を說かんと欲す。』佛言はく、『便ち說け。』須菩提言さく、『世尊、是れ阿耨多羅三藐三菩提心、無等等心、不共聲聞

【樂說品】舍利弗等衆生利益の爲に說く。
【一】舍利弗說。諸見を斷ずるが爲に摩訶薩なりと。
【我見等】我衆生等を實有なりと執する見解。
【斷見等】邪見。
【陰見等】法見。
【佛見】人見。
【諸見】總じては人法邪見、別しては無量。
【法を說く】無所得に住して法を說くなり。
【方便なき】色に實あり等と執著すること。
【色を得て】色に有所得と觀ず。
【二】須菩提說。無等等心の故に摩訶薩なりと。
【無等等心】佛心
【不共聲聞辟支佛心】二乘を超越せる菩薩心。

【一切智心】内外一切の法相及び言教に了達したる心ここにては一切智に相應せる心なり【無漏】煩惱を增上せしめざるもの【不繫】繫縛或は繫屬なきこと。【著せず】諸法本來等しく無漏不繫なればし著するものなし、只凡夫の有著するありて有漏有繫となる。【三】以下舍利弗の難意は一切智心無漏不繫なる如く凡夫人心も亦然れば菩薩自ら高うすべからずとの意。

辟支佛心あればなり。何を以ての故に。是れ一切智心、無漏不繫の故に、是一切智心、無漏不繫の中にも亦著せず、是因緣を以ての故に、摩訶薩と名く。」舍利弗須菩提に語らく、『何等をか菩薩摩訶薩無等等心、不共聲聞辟支佛心と爲すや。』須菩提言はく、『菩薩摩訶薩、初發意より以來、終に法に、生有り、滅有り、增有り、減有り、垢有り、淨有るを見ず。舍利弗、若し法、生無く、滅無く、乃至垢無く、淨無く、是中聲聞心無く、辟支佛心無く、阿耨多羅三藐三菩提心無く、佛心無し。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の無等等心、不共聲聞辟支佛心と名く。』舍利弗須菩提に語らく、

『(三)須菩提の說くが如く、「一切智心、無漏心不繫心中にも著せず、須菩提、色にも亦著せず、受想行識にも亦著せず、四念處にも亦著せず、乃至十八不共法にも亦著せず、何を以て但だ是心にのみ著せずと說くや。』須菩提言はく、『是の如く、是の如し。舍利弗、色にも亦著せず、乃至十八不共法にも亦、著せざるなり。』舍利弗須菩提に語らく、『凡夫人の心も亦無漏不繫なるべし、性空の故に。諸聲聞、辟支佛心、諸佛心も亦無漏不繫なるべし、性空の故に。』須菩提言はく、『是の如し、舍利弗。』舍利弗須菩提に言はく、『若し色も亦無漏不繫なるべし、性空の故に。受想行識も亦無漏不繫なるべし、性空の故に。乃至意觸因緣生の受も亦無漏不繫なるべし、性空の故に。』須菩提言はく、『爾り。』舍利弗言はく、『四念處も亦無漏不繫なるべし、性空の故に。乃至十八不共法も亦無漏不繫なるべし、性空の故に。』須菩提言はく、『爾り。』舍利弗言ふ所の如く、凡夫人の心も亦無漏不繫なり、性空の故に。乃至十八

不共法も亦無漏不繫なり、性空の故に。」舍利弗須菩提に語らく、「須菩提說く所の如く、空無心の故に、是心に著せず。須菩提、色無の故に色に著せず。受想行識、乃至意觸因緣生の受無の故に受に著せず。四念處無の故に四念處に著せず。乃至十八不共法無の故に十八不共法に著せざるべし。」須菩提言はく、「是の如く舍利弗、色無の故に色中に著せず。乃至十八不共法無の故に十八不共法中に著せず。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、阿耨多羅三藐三菩提心、無等等心、不共聲聞辟支佛心を以て、是心有るを念ぜず、亦是心に著せず、一切法無所有を用ての故に。是を以ての故に、摩訶薩と名く。」

辯才品第十五

(一)爾時、富樓那彌多羅尼子、佛に白して言さく、「世尊、我も亦摩訶薩たる所以を說かんことを樂ふ。」佛言はく、「便ち說け。」富樓那彌多羅尼子言さく、「是菩薩大誓莊嚴す。是菩薩大乘に發趣す。是菩薩大乘に乘ず。是を以ての故に、是菩薩を摩訶薩と名く。」

(二)舍利弗富樓那に語つて言はく、「云何が菩薩摩訶薩の大誓莊嚴と名くるや。」富樓那舍利弗に語らく、「菩薩摩訶薩、分別して爾所の人の爲の故に、檀那波羅蜜に住し、檀那波羅蜜を行ずるにあらず。一切衆生の爲の故に、檀那波羅蜜に住し、檀那波羅蜜を行ず。爾所の人の爲の故に、尸羅波羅蜜に住し、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を

【辯才品】富樓那品ともいふ。富樓那の辯才を顯はす。【一】富樓那說法の要目を示す。【富樓那彌多羅尼子】プールナマイトラーヤニープトラ(Pūrṇamaitrāyaṇīputra)滿慈子或は滿願子と譯す。說法第一の佛弟子と稱せらる。【大誓莊嚴】今品前半に之說す、廣く布施を行ずるも未だ二空に達せず

【大乘に發趣す】・今品の後半に說くところ。大莊嚴より進みて人空に入る。

【大乘に乘ず】次品に廣說。人空より法空にすゝむ。

【二】大誓莊嚴は自他一切衆生のために六度を行ずるものなるを說く。

【脩所の人】某々の人。

【三】六度各々に六度相應の大誓莊嚴を說く。一に布施。

行ぜず。一切衆生の爲の故に、般若波羅蜜に住し、般若波羅蜜を行ず。菩薩摩訶薩の大誓莊嚴は、衆生を齊限して、我れ若干人を度すべく、餘人を度せずとせず。我れ若干人をして阿耨多羅三藐三菩提に至らしめ、餘人は至らざらしめんと言はず。是菩薩摩訶薩は、普く一切衆生の爲の故に大誓莊嚴す。復是念を作す、我れ當に自ら檀那波羅蜜を具足し、亦一切衆生をして檀那波羅蜜を行ぜしめ、自ら尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を具足し、自ら般若波羅蜜を具足し、亦一切衆生をして般若波羅蜜を行ぜしむべし。

(三)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を行ずる時、有ゆる布施、薩婆若に應ずる心にて、一切衆生と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。舍利弗、是を菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を行ずる時の檀那波羅蜜大誓莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて布施し、聲聞辟支佛地に向はず。舍利弗、是を菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を行ずる時の尸羅波羅蜜大誓莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて布施し、是諸の施法に於て、信忍欲する、是を檀那波羅蜜を行ずる時の羼提波羅蜜大誓莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて布施し、懃修して息まず。是を檀那波羅蜜を行ずる時の毘梨耶波羅蜜大誓莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて布施し、心を攝して聲聞辟支佛意を起さず。是を檀那波羅蜜を行

【四】行戒。

【五】忍辱。

する時の禪那波羅蜜大誓莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて布施し、諸法を觀ずる幻の如く、施者を得ず、所施物を得ず、受者を得ず、是を檀那波羅蜜を行ずる時の般若波羅蜜大誓莊嚴と名く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心にて、諸の波羅蜜の相を取らず得ずば、當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の大誓莊嚴なりと。

(四)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて布施し、一切衆生と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩摩訶薩尸羅波羅蜜を行ずる時の檀那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時、是諸法に於て信忍欲する、是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時の羼提波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時、勤修して息まず。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時の毘梨耶波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時、聲聞辟支佛心を受けず。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時の禪那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時、一切法を觀ずる幻の如く、亦是戒行るを念ぜず、無所得を用ての故に。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時の般若波羅蜜と名く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時、諸波羅蜜を攝す。是を以ての故に大誓莊嚴と名く。

(五)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて布施し、一

【呵罵割截】呵責罵辱し、肉體を截斷す。

【六】精進。

切衆生と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時の檀那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時、聲聞辟支佛の心を受けず、但だ薩婆若心のみを受く。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時の尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、身心精進にして、休息せず。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時の毘梨耶波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時、心を一處に攝し苦事有りと雖も、心散亂せず。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時の禪那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、諸法は空にして、作者も無く、受者も無しと觀じ、若し呵罵割截する者有るも、心幻の如く、夢の如し。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行ずる時の般若波羅蜜と名く。

(六)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて布施し、時に身心をして懈怠せしめず。是を菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時の檀那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、始終具足し清淨に持戒す。是を菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時の尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて忍辱を修行す。是を菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時の羼提波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、心を攝し、欲を離れて、諸の

【七】禪定。

【八】般若。

禪定に入る。是を菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時の禪那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、一切諸法の相を取らず、不取相に於ても亦著せず。是を菩薩摩訶薩、毘利耶波羅蜜を行ずる時の般若波羅蜜と名く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行ずる時、諸波羅蜜を攝す。

(七)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、定心に布施し、心をして亂れしめず。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の檀那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて持戒し、禪定力の故に破戒の諸法入るを得しめず。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、慈悲定の故に諸の惱害を忍ぶ。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の羼提波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、禪に於て味せず著せず、常に增進を求め、一禪より一禪に至る。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の毘梨耶波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、一切法に於て依止する所無く、亦禪に隨て生ぜず。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の般若波羅蜜と名く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時、諸波羅蜜を攝す。

(八)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて內外の所有

【九】發趣大乘を辯ず。
【一〇】先づ禪を說き、禪を行じて慈無量なる時、大莊嚴破らるることなしとす。

を布施して、愛惜する所無く、與者受者及び財物を見ず。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時の檀那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、持戒、破戒二事見ざるが故に、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時の尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、訶者を見ず、罵者、打者、殺者も亦見ず。是空を用て、能く忍辱す。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時の羼提波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて、諸法畢竟空を觀じ、大悲心を以ての故に諸の善法を行ず。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時の毘梨耶波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心にて禪定に入り、諸禪の離相、空相、無相相、無作相を觀ず。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時の禪那波羅蜜と名く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、諸波羅蜜を攝す。舍利弗、是の如きを名けて菩薩摩訶薩の大誓莊嚴と爲す。是大誓莊嚴の菩薩をば、十方の諸佛歡喜し、大衆の中に於て稱名讃歎すらく「某の國土、某の菩薩摩訶薩、大誓莊嚴し、衆生を成就し、佛國土を淨む」と。』

(九)慧命舍利弗、富樓那彌多羅尼子に問はく「云何が菩薩摩訶薩、大乘に發趣するや。」富樓那舍利弗に語らく『菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行ずる時、

(一〇)諸の欲を離れ、諸の惡不善法を離れ、有覺有觀にして、離生喜樂ありて、初禪に入り

【怨恨無く】一切衆生の苦を拔く故怨憎するところなし、皆愛子たり。

【無惱の心】衆生を惱害せざる慈悲の心。

【支】派生せる諸定心。

【二】無量心と六度とを辨ず。

乃至第四禪の中に入る。慈廣大無二無量にして、怨恨無く、無惱の心を以て行ず、一方二三四方、四維上下に徧滿し一切世間に徧ず。悲喜捨心も亦是の如し。是菩薩禪に入る時、起つ時、諸禪無量心及び支、一切衆生と共に薩婆若に廻向す。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜に於て大乘に發趣すと名く。是菩薩摩訶薩、禪無量心に住し、是念を作さく「我れ當に一切種智を得べし、一切衆生の煩惱を斷ずる爲の故に當に法を說くべし。」是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の檀那波羅蜜と名く。若し菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心にて、初禪を修し、初禪に住す、二三四禪も亦是の如し。餘心、所謂聲聞辟支佛心を受けず。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の尸羅波羅蜜と名く。若し菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心にて、諸禪に入り、是念を作さく「我れ一切衆生の煩惱を斷ずる爲の故に當に法を說くべし、此諸心に欲樂忍す。」是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の羼提波羅蜜と名く。若し菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心にて、諸禪に入り、諸善根皆薩婆若に廻向し、懃修して息まず。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の毘梨耶波羅蜜と名く。若し菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心にて、四禪及び支に入り、無常相、苦相、無我相、空相、無相相、無作相を觀じ、一切衆生と共に、薩婆若に廻向す。是を菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜を行ずる時の般若波羅蜜と名く。舍利弗、是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く。

〔二〕復次に、菩薩摩訶薩、大乘に發趣し、慈心を行じ、是念を作さく「我れ當に一切衆生を安樂にすべし。悲心に入り、我れ當に一切衆生を救濟すべし。喜心に入り、我れ當に一切衆

【諸漏盡】漏は煩惱、一切煩惱の滅盡。

【一二】種々の發趣大乘相を說き、人空無所得の進むところを示す。

生を度すべし。捨心に入り、我れ當に一切衆生をして諸漏盡を得しむべし」と。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の檀那波羅蜜と名く。復次に菩薩摩訶薩、是諸禪無量心、聲聞辟支佛地に向はず、但だ薩婆若に廻向す。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、四無量心を行じ、聲聞辟支佛地に貪せず、但だ薩婆若に忍樂欲す。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の羼提波羅蜜と名く。若し菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心にて、四無量心を行じ、但だ清淨行を行ず。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の毘梨耶波羅蜜と名く。復次に菩薩摩訶薩、禪に入り無量心に入る時、亦禪無量心に隨て生ぜず。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の方便般若波羅蜜と名く。舍利弗、是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。

(一二)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、大乘に發趣し、一切種四念處を修し、乃至一切種、八聖道分を修し、一切種三解脫門、乃至十八不共法を修す。是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、內空の中の智慧、無所得を用ての故に。乃至無法有法空の中の智慧、無所得を用ての故に。是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、一切法の中に、亂ならず、定ならざるの智慧、是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、大乘に發趣す。常に非ず、無常に非ざるの智慧、樂に非ず、苦に非ず、實に非ず、空に非ず、我に非ず、無我に非ざるの智慧、是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く、無所得を用ての故に。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の智、過去

世に行ぜず、未來世に行ぜず、現在世に行ぜず、亦三世を知らざるに非ず。是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く、無所得を用ての故に。復次に、菩薩摩訶薩、大乘智に發趣す、欲界に行ぜず、色界に行ぜず、無色界に行ぜず、亦欲界、色界、無色界を知らざるに非ず、無所得を用ての故に。舍利弗、是を菩薩、摩訶薩大乘に發趣すと名く。復次に、菩薩摩訶薩、大乘智に發趣す。世間法を行ぜず、出世間法を行ぜず、有爲法を行ぜず、無爲法を行ぜず、有漏法を行ぜず、無漏法を行ぜず、亦世間法、出世間法、有爲無爲法、有漏無漏法を知らざるに非ず、無所得を用ての故に。舍利弗、是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く。』

乘乘品第十六

(一)爾時、慧命舍利弗富樓那に問はく、『云何が菩薩摩訶薩、大乘に乘ずと名くるや。』富樓那舍利弗に答へて言はく、『菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、檀那波羅蜜に乘ずるも、亦檀那波羅蜜を得ず、亦菩薩を得ず、亦受者を得ず、是法無所得を用ての故に、是を菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜に乘ずと名く。菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜に乘じ、般若波羅蜜に乘ずるも、亦般若波羅蜜を得ず、亦菩薩を得ず、是法無所得を用ての故に、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜に乘ずと爲す。是

【乘乘品】乘大乘品ともいふ。この乘大乘を分別するにより、富樓那三事を以て、大乘を說くうち、二空を乘ずるなり。大論四十六。
【一】六度等一切不可得なりと觀ずるが大乘に乘ずる意なるをいふ。
【是法】前の品の智に對し今法の無所得を說く。
【摩訶衍】マハーヤーナ(Mahāyāna)大乘と譯す。

【二】菩薩大乘を辨ず。

の如く舍利弗、是を菩薩摩訶薩、大乘に乘ずと爲す。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、摩訶衍の一心薩婆若に應じ、四念處法を修す、法壞するが故に。乃至一心薩婆若に應じ、十八不共法を修す、法壞するが故に、是亦得べからず。是の如く舍利弗、是を菩薩摩訶薩、大乘に乘ずと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、是念を作さく、「菩薩但だ名字のみ有り、衆生得べからざるが故に。」是を菩薩摩訶薩大乘に乘ずと名く。復次に舍利弗、若し菩薩摩訶薩、是念を作さく、「色但だ名字のみ有り、色得べからざるが故に。受想行識但だ名字のみ有り、識得べからざるが故に。眼但だ名字のみ有り、眼得べからざるが故に。乃至意も亦是の如し。四念處但だ名字のみ有り、四念處得べからざるが故に。乃至八聖道分但だ名字のみ有り、八聖道分得べからざるが故に。內空但だ名字のみ有り、內空得べからざるが故に。乃至無法有法空但だ名字のみ有り、無法有法空得べからざるが故に。乃至十八不共法但だ名字のみ有り、十八不共法得べからざるが故に。諸法如但だ名字のみ有り、如得べからざるが故に。法相、法性、法位、實際も但だ名字のみ有り、實際得べからざるが故に。阿耨多羅三藐三菩提、及び佛但だ名字のみ有り、佛得べからざるが故に。」是の如く舍利弗、是を菩薩摩訶薩、大乘に乘ずと名く。

(三)復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、初發意より以來、菩薩の神通を具足し、衆生を成就し、一佛國より一佛國に至り、諸佛を恭敬し供養し、尊重し讚歎し、諸佛より法教を聽受す、所謂菩薩の大乘なり。是菩薩此大乘に乘じ、一佛國より一佛國に至り、佛國土を淨め、衆生

を成就す。初めより佛國の想無く、亦衆生の想無し。此人不二法の中に住し、衆生の爲に身を受け、其所應に隨って、自ら其形を變じて之を教化す。乃至一切智まで終に菩薩乘を離れず。是を菩薩乘と名く。是乘、一切種智を得已りて法輪を轉ず。聲聞辟支佛及び天龍、鬼神、阿修羅、世間人民の轉ずる能はざる所なり。爾時、十方如恆河沙等の諸佛、皆歡喜し、稱名し、讃歎し、是言を作したまはく「某の方、某の國、某の菩薩摩訶薩、大乘に乘じ一切種智を得、法輪を轉ず」と。舍利弗、是を菩薩摩訶薩大乘に乘ずと名く。』

摩訶般若波羅蜜經　卷第五

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

莊嚴品第十七

（一）爾時、須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩の大莊嚴、何等か是大莊嚴、何等か菩薩能く大莊嚴するや。』佛須菩提に語りたまはく、『菩薩摩訶薩、摩訶衍をもて大莊嚴とす。所謂檀那波羅蜜、乃至般若波羅蜜を莊嚴とし、四念處を莊嚴とし、乃至八聖道分、內空を莊嚴とし、乃至無法有法空、十力乃至十八不共法、及び一切種智を莊嚴とす。身を變ずる、佛の莊嚴の如く、光明徧く三千大千國土を照し、亦東方如恆河沙等の國土を照す。南西北方、四維上下も亦復是の如し。三千大千國土、六種に震動す。亦東方如恆河沙等の諸の國土を動かす。南西北方、四維上下も亦復是の如し。是菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜摩訶衍大莊嚴に住すれば、是三千大千國土を變じて瑠璃と爲し、化して轉輪聖王と作り、食を須てば食を與へ、飮を須てば飮を與へ、衣服、臥具、華香、瓔珞、搗香、澤香、房舍、燈燭、醫藥、種種須つ所、盡く之を給與し、與へ已りて爲に法を說く。所謂六波羅蜜に應ず。衆生是法を聞く者、遂に六波羅蜜を離れず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る。是の如く須菩提、是を菩

【莊嚴品】須菩提大莊嚴につきて佛に決を求む。佛即ち此品にて大莊嚴を說く。
【一】布施大莊嚴を說く。

【身を變ず等】度生のために佛身を化作す。

【化して轉輪聖王と作り】在家にしては轉輪聖王となる。
【搗香】乾餠香料。
【澤香】香水。

【前に於て】すぐ前での意。

【二】戒等五度大莊嚴を說く。

薩摩訶薩の摩訶衍大莊嚴と名く。須菩提、譬へば工なる幻師、若は幻師の弟子の四衢道中に於て大衆を化作し、前に於て食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、乃至種種の須つ所盡く之を給與するが如し。須菩提の意に於て云何、是幻師、實に衆生有りて與ふる所有りや不や。』『須菩提言さく、『不、世尊。』』『須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く轉輪聖王を化作し種種具足す。食を須てば食を與へ飲を須てば飲を與へ、乃至種種須つ所盡く之を給與す。施す所有りと雖も、實に與ふる所無し。何を以ての故に。須菩提、諸法相幻の如きが故に。

〔二〕復次に須菩提、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜に住し、現に轉輪聖王の家に生じ、十善道を以て衆生を教化す。四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至十八不共法を以て、衆生を教化する有り。衆生是法を聞く者は、阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に是法を離れず。譬へば幻師、若は幻師の弟子の四衢道中に於て、大衆を化作し、十善道を以て教化して行はしめ、又四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至十八不共法を以て教化して行はしむるが如し。須菩提、汝の意に於て云何、是幻師實に衆生有て教へて十善道を行ひ、乃至十八不共法を行はしむるや不や。』『須菩提言さく『不、世尊。』』『須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く、十善道を以て衆生を教化して乃至十八不共法を行はしむ。實に衆生十善道、乃至十八不共法を行ふこと無し。何を以ての故に、諸法の相幻の如きが故に。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜に住し、衆生を教化して羼提波羅蜜を行はしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜に住し、衆生を教化

【一念】罵詈者等を怨む心。

【等の中】諸法無性なれば平等なり。

して羼提波羅蜜を行はしむるや。須菩提、菩薩摩訶薩、初發意より以來、是の如き大莊嚴あり、若し一切衆生の罵詈し、刀杖をもて傷害するも、菩薩摩訶薩、此中に於て一念を起さず、亦一切衆生を教へて此忍辱を行はしむ。譬へば幻師、若は幻師の弟子の四衢道中に於て、大衆を化作し、忍辱を行はしむるが如し。餘は上說の如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜に住し、一切衆生を教へて、毘梨耶波羅蜜を行はしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜に住し、一切衆生を教へて、毘梨耶波羅蜜を行はしむるや。須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心に、身心精進にして衆生を教化す。譬へば幻師、若は幻師の弟子の四衢道中に於て、大衆を化作し、教へて身心精進を行はしむるが如し。餘は上說の如し。是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜に住し、一切衆生を教へて、禪那波羅蜜を行はしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜に住し、一切衆生を教へて、禪那波羅蜜を行はしむるや。須菩提、菩薩摩訶薩、諸法等の中に住し、法の若は亂、若は定を見ず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、禪那波羅蜜に住し、一切衆生を教へて、禪那波羅蜜を行はしむ。乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に禪那波羅蜜を離れず。譬へば工なる幻師、若は幻師の弟子の四衢道中に於て大衆を化作し、教へて禪那波羅蜜を行はしむるが如し。餘は上說の如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜に住し、一切衆生を教へて、般若波羅蜜を行はしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、

【此岸彼岸】迷と悟。

【三】十方衆生通じて六度を行ふを明す。

【四】一切平等の度生が大莊嚴たるを明す。

般若波羅蜜に住し、一切衆生を敎へて、般若波羅蜜を行はしむるや。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、法の此岸、彼岸を得る有る無し。是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜の中に住し、一切衆生を敎へて、般若波羅蜜を行はしむ。譬へば工なる幻師、若は幻師の弟子の四衢道中に於て、大衆を化作し、敎へて般若波羅蜜を行はしむるが如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

(三)復次に、須菩提、菩薩摩訶薩の大莊嚴は、十方如恆河沙等の國土の中の衆生、其所應に隨て、自ら其身を變じ、檀那波羅蜜、乃至般若波羅蜜に住し、亦衆生を敎へて、檀那波羅蜜、乃至般若波羅蜜を行はしむ。是衆生是法を行ひ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に是法を離れず。須菩提、譬へば工なる幻師若は幻師の弟子の四衢道中に於て、衆生を化作し、敎へて六波羅蜜を行はしむるが如し。餘は上說の如し。是の如く須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

(四)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の大莊嚴は、薩婆若に應ずる心にて、是念を生ぜず。我れ若干人に敎へて、檀那波羅蜜に住せしめ、若干人に敎へて、檀那波羅蜜に住せしめずと。乃至般若波羅蜜も亦是の如し。是念を生ぜず。我れ若干人に敎へて、四念處に住せしめ、若干人に敎へて、四念處に住せしめずと。乃至十八不共法も亦是の如し。亦是念を生ぜず。我れ若干人に敎へて、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、一切種智を得しめ、亦若干人に敎へて、須陀洹果乃至一切種智を得しめずと。是念を生ぜず。我れ當に

【五】空の故に無莊嚴の莊嚴たるを明し、以て大莊嚴の行じ易きを示す。

【六】諸作法に非ざるが故に莊嚴を說く。

【作法】特別の因緣によつて生起するものをいふ。

無量無邊阿僧祇の衆生をして、檀那波羅蜜、乃至般若波羅蜜に住せしめ、衆生をして四念處、乃至十八不共法に立たしめ、無量無邊阿僧祇の衆生をして、須陀洹果乃至一切種智を得しむべしと。譬へば工なる幻師、若は幻師の弟子の四衢道中に於て、大衆を化作し、教へて六波羅蜜を行じ、乃至一切種智を得しむるが如し。餘は上說の如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。』

(五)爾時、須菩提佛に白して言さく『世尊、我れ佛に從て聞く所の義の如くんば、菩薩摩訶薩、大莊嚴無きを大莊嚴と爲す、諸法自相空の故に。所謂色、色相空なり。受想行識、識相空なり。眼眼相空、乃至意意相も空なり。色色相空、乃至法法相も空、眼識眼識相空、乃至意識、意識の相も空、眼觸、眼觸相空、乃至意觸、意觸相も空、眼觸因緣生の受、受相空、乃至意觸因緣生の受、受相も空なり。世尊、檀那波羅蜜、檀那波羅蜜相空、乃至般若波羅蜜、般若波羅蜜相も空、內空內空相空、乃至無法有法空、無法有法空相も空、四念處、四念處相空、乃至十八不共法、十八不共法相も空、菩薩、菩薩相も空なり。世尊、是因緣を以ての故に、當に知るべし、菩薩摩訶薩、大莊嚴無きをば大莊嚴と爲すと。』

(六)佛須菩提に告げたまはく『是の如く、是の如し、汝が言ふ所の如し。須菩提、薩婆若は作法に非ず、衆生も亦作法に非ずして、菩薩、是衆生の爲に大莊嚴す。』と。須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何の因緣の故に、薩婆若は作法に非ず、是衆生も亦作法に非ずして、菩薩、是衆生の爲に大莊嚴するや。』佛須菩提に語りたまはく、『作者得べからざるが故

【起法】作法といふが如し。
【作に非ず、不作に非ず】他により作られたるものに非ず、本有のものにも非ず。
【内空等】色等不可得なるが如く、内空乃至眞如も不可得なるを明す。
【七】無縛無脱を説く。

に、薩婆若作に非ず、起法に非ず。是の諸の衆生も亦作に非ず、起法に非ず。何を以ての故に、須菩提、色は作に非ず、不作に非ず。受想行識も作に非ず、不作に非ず。眼は作に非ず、不作に非ず、乃至意も作に非ず、不作に非ず。色乃至法、眼識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受乃至意觸因縁生の受も作に非ず、不作に非ず。須菩提、我は作に非ず、不作に非ず、乃至知者見者も作に非ず、不作に非ず。何を以ての故に、是諸法畢竟得べからざるが故に。須菩提、夢は作に非ず、不作に非ず。何を以ての故に、畢竟得べからざるが故に。幻響影燄化も作に非ず、不作に非ず。何を以ての故に、畢竟得べからざるが故に。須菩提、内空は作に非ず、不作に非ず。畢竟得べからざるが故に。乃至無法有法空も作に非ず、不作に非ず。畢竟得べからざるが故に。須菩提、四念處は作に非ず、不作に非ず。畢竟得べからざるが故に。乃至十八不共法も作に非ず。不作に非ず、何を以ての故に、是法皆畢竟得べからざるが故に。須菩提、諸法の如、法相、法性、法住、法位、實際は作に非ず、不作に非ず。畢竟得べからざるが故に。須菩提、菩薩は作に非ず、不作に非ず。畢竟得べからざるが故に。薩婆若及び一切種智は作に非ず、不作に非ず。畢竟得べからざるが故に。是因縁を以ての故に、須菩提、薩婆若は作に非ず、起法に非ず。是衆生も亦作に非ず、起法に非ずして、菩薩是衆生の爲に大莊嚴するなり。』

(七)爾時、須菩提佛に白して言さく、『我れ佛の所説の義を觀ずる如くば、色縛無く、脱無し。受想行識縛無く、脱無し。』

【離、寂滅等】皆無所有のこと。

爾時、富樓那彌多羅尼子須菩提に語らく、『色は是れ縛無く、脫無し。受想行識は是れ縛なく、脫無しといふや。』須菩提言はく、『是の如く是の如し。色は是れ縛無く、脫無し。受想行識は是れ縛無く、脫無し。』

富樓那須菩提に問はく、『何等か色縛無く、脫無きや。何等か受想行識縛無く、脫無きや。』須菩提言はく、『夢の如き色は縛無く、脫無し。夢の如き受想行識は縛無く、脫無し。響の如く、影の如く、焰の如く、化の如き色受想行識は縛無く、脫無し。富樓那彌多羅尼子、過去の色は縛無く、脫無し。過去の受想行識は縛無く、脫無し。未來の色は縛無く、脫無し。未來の受想行識は縛無く脫無し。現在の色は縛無く、脫無し。現在の受想行識は縛無く、脫無し。何を以ての故に、縛無く脫無きや。是色所有無きが故に、縛無く脫無し。受想行識所有無きが故に、縛無く脫無し。離の故に、寂滅の故に、不生の故に縛無く、脫無し。富樓那、善の色受想行識も亦縛無く、脫無し。不善の色受想行識縛無く、脫無し。無記の色縛無く、脫無し。無記の受想行識縛無く、脫無し。世間出世間、有漏無漏の色縛無く、脫無し。受想行識も亦縛無く、脫無し。何を以ての故に、所有無きが故に。離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛無く、脫無し。富樓那、一切法も亦縛無く、脫無し。所有無きが故に、離の故に。寂滅の故に、不生の故に、縛無く、脫無し。富樓那、檀那波羅蜜は縛無く、脫無し。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毗梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜は縛無く、脫無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に縛無く、脫無し。富

【菩薩縛無く脱無し】煩惱に縛せられて墮するにも非ず、無漏法あつて煩惱を破りて解脱するにも非ず。

【無縛無脱にして衆生を成就し等】縛脱に縛脱なしと認めうれば度生等を眞に成就することを得るなり。

樓那、内空も亦縛無く、脱無し。乃至無法有法空も亦縛無く、脱無し。四念處縛無く、脱無し。乃至十八不共法も縛無く、脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に縛無く、脱無し、阿耨多羅三藐三菩提縛無く、脱無し。一切智、一切種智縛無く、脱無し。菩薩縛無く、脱無し。佛も亦縛無く、脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に縛無く、脱無し。富樓那、諸法の如、法相、法性、法住、法位、實際、無爲法縛無く、脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛無く、脱無し。富樓那、是を菩薩摩訶薩の無縛無脱と名く。檀那波羅蜜、乃至般若波羅蜜、四念處、乃至一切種智縛無く、脱無し。是菩薩摩訶薩、無縛無脱の檀那波羅蜜の中に住し、乃至無縛無脱の般若波羅蜜の中に住し、無縛無脱の四念處に住し、乃至無縛無脱の一切種智に住し、無縛無脱にして衆生を成就し、無縛無脱にして佛國土を淨め、無縛無脱にして諸佛を供養すべく、無縛無脱にして法を聽くべく、無縛無脱にして諸佛終に離れず、無縛無脱にして諸神通終に離れず、無縛無脱にして五眼終に離れず、無縛無脱にして陀羅尼門終に離れず。無縛無脱にして諸三昧門終に離れず、無縛無脱にして道種智を生ずべく、無縛無脱にして一切種智を得べく、無縛無脱にして法輪を轉じ、無縛無脱にして衆生、三乘に安立す。是の如く、富樓那、菩薩摩訶薩は、無縛無脱の六波羅蜜を行ず。當に知るべし、一切法縛無く、脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に。富樓那、是を菩薩摩訶薩無縛無脱の大莊嚴と名く。』

【問乘品】摩訶衍品ともいふ。大乘の法相法位法住等を明す。大乘即般若なり。

【一】六度即ち大乘なるを明す。

【何等か是れ等】この問の意は、大乘の法法相法位法住等を問ふにあり。

【六波羅蜜】大乘の體として六度は一切を攝する故。

【十善道】戒は無量なるも總相戒として今玆にいふ。

【五波羅蜜】精進によつて成ぜらるる施戒忍定慧の五。

問乘品第十八

(一)爾時、須菩提佛に白して言さく「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩摩訶衍なる。云何が當に知るべき、菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと。是乘何の處に發し、是乘何の處に至り、何の處に住すべき。誰か當に是乘に乘じて出づべき者ぞ。」佛須菩提に告げたまはく「汝、何等か是れ菩薩摩訶薩摩訶衍なりやと問ふ。須菩提、六波羅蜜、是れ菩薩摩訶薩摩訶衍なり。何等か六なるや。檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毗梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜なり。云何が檀那波羅蜜と名くるや。須菩提菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずるの心を以て、內外有ゆる布施、一切衆生と共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、無所得を用ての故に。須菩提、是を菩薩摩訶薩の檀那波羅蜜と名く。云何が尸羅波羅蜜と名くるや。須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心を以て、自ら十善道を行ひ、亦他をして十善道を行はしむ、無所得を以ての故に。是を菩薩摩訶薩の尸羅波羅蜜と名く。云何が羼提波羅蜜と名くるや。須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心を以て、自ら忍辱を具足し、亦他をして忍辱を行はしむ、無所得を以ての故に。是を菩薩摩訶薩の羼提波羅蜜と名く。云何が毘梨耶波羅蜜と名くるや。須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心を以て、五波羅蜜を行じ、懃修息まず、亦一切衆生を五波羅蜜に安立す。無所得を以ての故に。是を菩薩摩訶薩の毘

【方便】度生のための力。
【禪に隨って生ぜず】禪定のためにその果報を受くることなし。
【二】十八空即ち大乘たるを說く。
【常に非ず等】斷見常見の二邊を離れて中に處するをいふ。
【性として自ら爾る】本來自ら中に處るをいふ。

梨耶波羅蜜と名く。云何が禪那波羅蜜と名くるや。須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心を以て、自ら方便を以て諸禪に入り、禪に隨って生ぜず、又他を敎へて諸禪に入らしむ、無所得を以ての故に。是を菩薩摩訶薩の禪那波羅蜜と名く。云何が般若波羅蜜と名くるや。須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心を以て、一切法に著せず、亦一切法性を觀ず、無所得を以ての故に。亦他をして一切法に著せず、亦一切法性を觀ぜしむ、無所得を以ての故に。是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と爲す。

〔二〕復次に須菩提、菩薩摩訶薩、復摩訶衍有り。所謂內空、外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空なり。』

須菩提佛に白して言さく、『何等をか內空と爲す。』佛言はく、『內法は眼耳鼻舌身意に名く。眼の眼とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。耳の耳とするは空なり、鼻の鼻とするは空なり、舌の舌とするは空なり、身の身とするは空なり、意の意とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を內空と名く。何等をか外空と爲す。外法は色聲香味觸法に名く。色の色とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。聲の聲とするは空なり、香の香とするは空なり、味の味とするは空なり、觸の觸とするは空なり、法の法とするは空なり、常に非らず、滅に非ざるが

故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を外空と名く。何等をか內外空と爲す。內外法は內六入、外六入に名く。內法の內法とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。外法の外法とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に、何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を內外空と名く。何等をか空空と爲す。一切の法は空にして、是空も亦空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に、何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を空空と名く。何等をか大空と爲す。東方の東方とする相は空なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。南西北方四維上下の南西北方四維上下とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を大空と名く。何等をか第一義空と爲す。第一義とは涅槃に名く。涅槃の涅槃とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を第一義空と名く。何等をか有爲空と爲す。有爲法とは欲界、色界、無色界に名く。欲界の欲界とするは空なり、色界の色界とするは空なり、無色界の無色界とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を有爲空と名く。何等をか無爲空と爲す。無爲法とは名けて若し無生相、無住相、無滅相とす。無爲法の無爲法とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を無爲空と爲す。何等をか畢竟空と爲す。畢竟とは諸法の畢竟不可得なるに名く、常に

【內六入外六入】內は眼乃至意、外は色乃至法。

【涅槃】梵にニルヴーナ(Nirvana)滅度寂滅等と譯す。迷妄を脫し眞理をきはめて、寂滅、無爲の法性に至り、不生不滅の法身を眞證するをいふ。卽ち佛のさとりなり。

【有爲法】衆緣の合離によりて生滅する法。今色心三科の諸法中、三界を擧ぐ。

【無爲法】本來常住にして生滅を離れ他によりて造作せられざる法。無生相等は有爲法の生住滅三相に對して無爲法を說くに用ゐらる。

【取相】像を取るを想の相とするをいふ。

非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を畢竟空と名く。何等をか無始空と爲す。若し法初來の處不可得なるなり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を無始空と名く。何等をか散空と爲す。散とは諸法無滅に名く、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を散空と爲す。何等をか性空と爲す。一切法性、若は有爲法性、若は無爲法性、是性聲聞辟支佛の所作に非ず、佛の所作に非ず、亦餘人の所作に非ず、是性の性とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を性空と名く。何等をか自相空と爲す。自相とは色の壞相、受の受相、想の取相、行の作相、識の識相に名く。是の如き等の有爲無爲法は各各自相空なり、常に非らず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を自相空と名く。何等をか諸法空と爲す。諸法とは色受想行識、眼耳鼻舌身意、色聲香味觸法、眼界色界眼識界、乃至意界法界意識界に名く。是諸法の諸法とするは空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を諸法空と爲す。何等をか不可得空と爲す。諸法を求むるに得べからず、是不可得は空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を不可得空と名く。何等をか無法空と爲す。若は法の無なる是れ亦空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を無法空と名く。何等をか

【自性相】我は我たり等本來あるがままの性と相。

【三】更に四空を説く。

【法法相空】法中に法なく又法相もなし。

【無法】無爲の無相なるを今無法といふ。

【若は佛等】佛出世するとせざるとに拘らず諸法は常に空なり。

【此を過ぐる等】法住乃至實際に執することなきの法。

【四】以下百八三昧を擧げ、三昧即ち大乘なるを説く。

有法空と爲す。有法とは諸法和合の中、自性相有るに名く。是有法は空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を有法空と名く。何等をか無法有法空と爲す。諸法の中法なきと、諸法和合の中自性相有ると、是無法有法は空なり、常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に、性として自ら爾ればなり。是を無法有法空と名く。

(三)復次に須菩提、法の法相とするは空なり、無法の無法相とするは空なり、自法の自法相とするは空なり、他法の他法相とするは空なり。何等をか法の法相とするは空なりと名くるや。法とは五陰に名く、五陰空なる是を法の法相空と名く。何等をか無法の無法相空と名くるや。無法は無爲法に名く、是を無法の無法空と名く。何等をか自法の自法空と名くるや。諸法自法空なり、是空、知の作に非ず、見の作に非ず、是を自法の自法空と名く。何等をか他法の他法空と名くるや。若は佛出で、若は佛出でず、法住、法相、法位、法性、如、實際、此を過ぐる諸法空なり、是を他法の他法空と名く。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

(四)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂首楞嚴三昧、寶印三昧、師子遊戯三昧、妙月三昧、月幢相三昧、出諸法三昧、觀頂三昧、畢法性三昧、畢幢相三昧、金剛三昧、入法印三昧、三昧王安立三昧、放光三昧、力進三昧、高出三昧、必入辯才三昧、釋名字三昧、觀方三昧、陀羅尼印三昧、無誑三昧、攝諸法海三昧、徧覆虛空三昧、金剛輪三昧、

【五】以下百八三昧を釋す。【首楞嚴】梵にシユーラガマ（Śūraṅgama）といひ勇健と譯す。分別して諸三昧の行相の多少淺深を知ること。

寶斷三昧、能照三昧、不求三昧、無住三昧、無心三昧、淨燈三昧、無邊明三昧、能作明三昧、普照明三昧、堅淨諸三昧三昧、無垢明三昧、歡喜三昧、電光三昧、無盡三昧、威德三昧、離盡三昧、不動三昧、不退三昧、日燈三昧、月淨三昧、淨明三昧、能作明三昧、作行三昧、知相三昧、如金剛三昧、心住三昧、普明三昧、安立三昧、寶聚三昧、妙法印三昧、法等三昧、斷喜三昧、到法頂三昧、能散三昧、分別諸法句三昧、字等相三昧、離字三昧、斷緣三昧、不壞三昧、無種相三昧、無處行三昧、離矇昧三昧、無去三昧、不變異三昧、度緣三昧、集諸功德三昧、住無心三昧、淨妙華三昧、覺意三昧、無量辯三昧、無等等三昧、度諸法三昧、分別諸法三昧、散疑三昧、無處三昧、一莊嚴三昧、生行三昧、一行三昧、不一行三昧、妙行三昧、達一切有底散三昧、入名語三昧、離音聲字語三昧、然炬三昧、淨相三昧、破相三昧、一切種妙足三昧、不喜苦樂三昧、無盡相三昧、陀羅尼三昧、攝諸邪正相三昧、滅憎愛三昧、逆順三昧、淨光三昧、堅固三昧、滿月淨光三昧、大莊嚴三昧、能照一切世三昧、三昧等三昧、攝一切有諍無諍三昧、不樂一切住處三昧、如住定三昧、壞身衰三昧、壞語如虛空三昧、離著虛空不染三昧に名く。

（五）云何が首楞嚴三昧と名くるや、諸三昧の行處を知る、是を首楞嚴三昧と名く。云何が寶印三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧に印す、是を寶印三昧と名く。云何が師子遊戲三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の中に遊戲する師子の如し、是を師子遊戲三昧と名く。云何が妙月三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧を照す、淨月の

【寶印】法寶三解脫門三法印般若を寶としこれに相應するをいふ。

【師子遊戲】諸三昧の出入或は析伏自由自在なるをいふ。

【妙月】淨滿月の闇を除くが如し。

【月幢相】軍將の幢、寶を以て月像を作る將士これに隨ふ。諸法に通達して無礙なるをいふ。

【出諸法三昧】三昧を增長せしむること。

【觀頂】山頂よく諸方を觀る如し。

【畢法性】神足の虛空に處しうるが如く、無量無二の法性を任持す。

【畢幢相】最勝三昧に入ること軍將幢を以て大相を表する如し。

【金剛】諸法に通じて三昧の妙用ある金剛の硬さを穿つるが如し。

如し、是を妙月三昧と名く。云何が月幢相三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の相を持す、是を月幢相三昧と名く。云何が出諸法三昧三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧を出生す、是を出諸法三昧三昧と名く。云何が觀頂三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の頂を觀ず、是を觀頂三昧と名く。云何が畢法性三昧と名くるや。是三昧に住し、決定して法性を知る、是を畢法性三昧と名く。云何が畢幢相三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧幢を持す、是を畢幢相三昧と名く。云何が金剛三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧を持す、是を金剛三昧と名く。云何が入法印三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法印に入る、是を入法印三昧と名く。云何が三昧王安立三昧と名くるや。是三昧に住し、一切諸三昧中安立して住する王の如し、是を三昧王安立三昧と名く。云何が放光三昧と名くるや。是三昧に住し、能く光を放つて諸三昧を照す、是を放光三昧と名く。云何が力進三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧に於て能く勢力を作す、是を力進三昧と名く。云何が高出三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧を增長す、是を高出三昧と名く。云何が必入辯才三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧を辯說す、是を必入辯才三昧と名く。云何が釋名字三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の名字を釋す、是を釋名字三昧と名く。云何が觀方三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の方を觀ず、是を觀方三昧と名く。云何が陀羅尼印三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の印を持す、是を陀羅尼印三昧と名く。云何が無誑三昧と名くるや。是三昧

【入法印】印信ありて入或する如く諸法實相は畢竟空に入る。

【三昧王安立】王に群臣の朝する如くこの定に安住すれば十方悉く集るをいふ。

【放光】火遍諸定により神力を得て種種色光を放ち冷熱他の意に隨ふ。

【力進】諸法に五力を得て三昧自在なり、定中能く衆生を化す。

【高出】福德智慧悉く增長し諸三昧心に從ひて出づ。

【必入辯才】辭辯相應して衆生の語言等を分別して無礙なり。

【釋名字】法空に住し名字を以て法義を釋すること。

【觀方】十方衆生を觀るに平等慈悲を以てす。

【陀羅尼印】諸三昧を分別して陀羅尼あるをいふ。

に住し、諸三昧に於て掛諍せず、是を無諍三昧と名く。云何が攝諸法海三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧を攝する大海水の如し、是を攝諸法海三昧と名く。云何が徧覆虛空三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧を徧覆する虛空の如し、是を徧覆虛空三昧と名く。云何が金剛輪三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の分を持す、是を金剛輪三昧と名く。云何が斷寶三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の煩惱垢を斷ず、是を斷寶三昧と名く。云何が能照三昧と名くるや。是三昧に住し、能く光明を以て諸三昧を顯照す、是を能照三昧と名く。云何が不求三昧と名くるや。是三昧に住し、法として求むべき無し、是を不求三昧と名く。云何が無住三昧と名くるや。是三昧の中に住し、一切法の住するを見ず、是を無住三昧と名く。云何が無心三昧と名くるや。是三昧に住し、心心數法行ぜず、是を無心三昧と名く。云何が淨燈三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の中に於て明を作す燈の如し、是を淨燈三昧と名く。云何が無邊明三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧と無邊明を作す、是を無邊明三昧と名く。云何が能作明三昧と名くるや。是三昧に住し、即時に能く諸三昧の爲に明を作す、是を能作明三昧と名く。云何が普照明三昧と名くるや。是三昧に住し、即ち能く諸三昧門を照す、是を普照明三昧と名く。云何が堅淨諸三昧三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の相を堅淨す、是を堅淨諸三昧三昧と名く。云何が無垢明三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の垢を除き、亦能く一切の三昧を照す、是を無垢明三昧と名く。云何が歡喜三昧と名くるや。是三昧に住し、

【無誑】三毒なく錯誤なし。
【攝諸法海】衆流海に入る如く三乘の諸三昧この中に入る。
【徧覆虛空】虛空に光明等充滿す。
【金剛輪】諸法の無礙なるに喩ふ。
【斷貪】諸三昧能く煩惱の苦を除くに喩ふ。
【能照】能く諸方を照らす。
【不求】諸法幻の如しと觀て所求なし。
【無住】諸法無常にして止る時なし。
【無心】心心所の作用なし。
【淨燈】智慧の光かがやきて垢れなし。
【無邊明】能く十方の諸法を照す。
【能作明】諸三昧のために能く明となる。
【普照明】普く三昧を照らす。

能く諸三昧の喜を受く、是を歡喜三昧と名く。云何が電光三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧を照す電光の如し、是を電光三昧と名く。云何が無盡三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧に於て盡くるを見ず、是を無盡三昧と名く。云何が威德三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧に於て威德照然たり、是を威德三昧と名く。云何が離盡三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の盡くるを見ず、是を離盡三昧と名く。云何が不動三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧をして動かず戲れざらしむ、是を不動三昧と名く。云何が不退三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の退くを見ず、是を不退三昧と名く。云何が日燈三昧と名くるや。是三昧に住し、光を放つて諸三昧門を照す、是を日燈三昧と名く。云何が月淨三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧の闇を除く、是を月淨三昧と名く。云何が淨明三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧に於て四無閡智を得、是を淨明三昧と名く。云何が能作明三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧門に於て能く明を作す、是を能作明三昧と名く。云何が作行三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧をして各所作有らしむ、是を作行三昧と名く。云何が知相三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の知相を見る、是を知相三昧と名く。云何が如金剛三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸法に貫達し亦達するを見ず、是を如金剛三昧と名く。云何が心住三昧と名くるや。是三昧に住し、心動ぜず、轉ぜず、惱せず、亦是心有るを念ぜず、是を心住三昧と名く。云何が普明三昧と名くるや。是三昧に住し、普く諸三昧の明を見る、是を普明三昧と名く。云

何が安立三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧に於て安立して動ぜず、是を安立三昧と名く。云何が寶聚三昧と名くるや。是三昧に住し、普く諸三昧を見ること寶聚を見るが如し、是を寶聚三昧と名く。云何が妙法印三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧に印す、無印を以て印するが故に、是を妙法印三昧と名く。云何が法等三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法等しくして法の等しからざる無きを觀ず、是を法等三昧と名く。云何が斷喜三昧と名くるや。是三昧に住し、一切法中の喜を斷ず、是を斷喜三昧と名く。云何が到法頂三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法の闇を滅し、亦諸三昧の上に在り、是を到法頂三昧と名く。云何が能散三昧と名くるや。是三昧中に住し、能く諸法を破散す、是を能散三昧と名く。云何が分別諸法句三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧諸法句を分別す、是を分別諸法句三昧と名く。云何が字等相三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の字等を得、是を字等相三昧と名く。云何が離字三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧中乃至一字を見ず、是を離字三昧と名く。云何が斷緣三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の緣を斷ず、是を斷緣三昧と名く。云何が不壞三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法の變異を得ず、是を不壞三昧と名く。云何が無種相三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法の種種を見ず、是を無種相三昧と名く。云何が無處行三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧處を見ず、是を無處行三昧と名く。云何が離曚昧三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の微闇を離る、是を離曚昧三昧と名く。云何が無去三昧と名くるや。是三昧に住し、一切三

【堅淨】堅牢にしし垢汗を離る。
【無垢明】諸三昧の垢を除き一切を照らす。
【歡喜】諸三昧の喜を受けしむ。
【電光】無始の失道をうること電の路をうるが如し。
【無盡】不生不滅にして盡くるなし。
【離盡】過去の善本功德必ず果報ありて失はれず。
【不動】一切諸法の動轉なきをいふ。
【成德】是の三昧をえて成德莊嚴たり。
【戲れ】戲論。
【不退】阿惟越致の智慧に相應する三昧にして、又不退とは頂に墮せざる義ともいふ。
【日燈】日出でて一切世界を照らすが如く、能く一切諸法種種門及諸三昧を照らす。

【月淨】月の一日より十五日に至りて漸漸増長して光明清淨なる如く、菩薩この三昧によつて善根増長し、法忍をえ衆生を利益し、又諸三昧中の無明を破す。
【淨明】明は慧、諸三昧に於て障礙なし。
【能作明】明は智慧。諸智慧中般若の智慧第一なり。若即ち般若相應の三昧なり。
【作行】能く先に所得の三昧を發起す。
【知相】これにより諸三昧中に智慧實相あるを見る。
【如金剛】これにより智慧を以て一切法に通達し、又無所得の故に通達せず。
【心住】心相は輕疾にしてとらへ難きも、この三昧により能く攝して住せしむることを得

昧の去相を見ず、是を無去三昧と名く。云何が不變異三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の變異相を見ず、是を不變異三昧と名く。云何が度緣三昧と名くるや。是三昧に住し、一切三昧の緣境界を度す、是を度緣三昧と名く。云何が集諸功德三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の功德を集む、是を集諸功德三昧と名く。云何が住無心三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧に於て心入らず、是を住無心三昧と名く。云何が淨妙華三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧をして淨妙、華の如くなるを得しむ、是を淨妙華三昧と名く。云何が覺意三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の中七覺分を得、是を覺意三昧と名く。云何が無量辯三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法の中に於て無量辯を得、是を無量辯三昧と名く。云何が無等等三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の中無等等の相を得、是を無等等三昧と名く。云何が度諸法三昧と名くるや。是三昧に住し、一切三界を度す、是を度諸法三昧と名く。云何が分別諸法三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧及び諸法分別見をなす、是を分別諸法三昧と名く。云何が散疑三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法の疑を散ずるを得、是を散疑三昧と名く。云何が無住處三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法の住處を見ず、是を無住處三昧と名く。云何が一莊嚴三昧と名くるや。是三昧に住し、終に諸法の二相を見ず、是を一莊嚴三昧と名く。云何が生行三昧と名くるや。是三昧に住し、諸行生を見ず、是を生行三昧と名く。云何が一行三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の此岸彼岸を見ず、是を一行三昧と名く。云何が不一行三昧と名くるや。是三

【普明】これにより一切法に光明相を見、心中無礙にして天眼慧眼を成就す。【安立】これにより一切善法中に牢固として安立不動なるを得。【寶聚】これにより所有る國土七寶を成ず。【妙法印】妙法とは諸佛菩薩の功德智慧。これによりこの妙法を得。【法等】法等相應の三昧。【斷喜】これにより諸法の無常等を觀じ心に厭離を生じ、一切世間不可樂想相應の三昧なり。【到法頂】法は菩薩法。般若波羅蜜中に到つて方便力をうれば、法の山頂に住して諸の煩惱のために動搖せらるることなし。【能散】これにより能く諸法を破散

味に住し、諸三昧の一相を見ず、是を不一行三昧と名く。云何が妙行三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の二相を見ず、是を妙行三昧と名く。云何が達一切有底散三昧と名くるや。是三昧に住し、一切有に入り、一切三昧智慧通達し、亦所達無し、是を達一切有底散三昧と名く。云何が入名語三昧と名くるや。是三昧に住し、一切三昧の名語に入る、是を入名語三昧と名く。云何が離音聲字語三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の音聲字語を見ず、是を離音聲字語三昧と名く。云何が然炬三昧と名くるや。是三昧に住し、威德照明炬の如し、是を然炬三昧と名く。云何が淨相三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の相を淨む、是を淨相三昧と名く。云何が破相三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の相を見ず、是を破相三昧と名く。云何が一切種妙足三昧と名くるや。是三昧に住し、一切諸三昧種皆具足す、是を一切種妙足三昧と名く。云何が不喜苦樂三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の苦樂を見ず、是を不喜苦樂三昧と名く。云何が無盡相三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧盡くるを見ず。是無盡相三昧と名く。云何が多陀羅尼三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧を持す、是を多陀羅尼三昧と名く。云何が攝諸邪正相三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧に於て邪正の相を見ず、是を攝諸邪正相三昧と名く。云何が滅憎愛三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の憎愛を見ず、是を滅憎愛三昧と名く。云何が逆順三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法諸三昧の逆順を見ず、是を逆順三昧と名く。云何が淨光三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の明垢を得ず、是を淨

光三昧と名く。云何が堅固三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の堅固ならざるを得ず、是を堅固三昧と名く。云何が滿月淨光三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の滿足なること月の十五日の如し、是を滿月淨光三昧と名く。云何が大莊嚴三昧と名くるや。是三昧に住し、大莊嚴し、諸三昧を成就す、是を大莊嚴三昧と名く。云何が能照一切世三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧、及び一切法能く照す、是を能照一切世三昧と名く。云何が三昧等三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧に於て定亂の相を得ず、是を三昧等三昧と名く。云何が攝一切有諍無諍三昧と名くるや。是三昧に住し、能く諸三昧をして有諍無諍を分別せざらしむ、是を攝一切有諍無諍三昧と名く。云何が不樂一切住處三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の依處を見ず、是を不樂一切住處三昧と名く。云何が如住定三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧如相を過ぎず、是を如住定三昧と名く。云何が壞身衰三昧と名くるや。是三昧に住し、身相を得ず、是を壞身衰三昧と名く。云何が壞語如虛空三昧と名くるや。是三昧に住し、諸三昧の語業を見ざる虛空の如し、是を壞語如虛空三昧と名く。云何が離著虛空不染三昧と名くるや。是三昧に住し、諸法虛空の如く礙無きを見、亦是三昧に染まず、是を離著虛空不染三昧と名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。」

す。

【分別諸法句】これにより能く一切諸法の語言字句を分別する樂說相應の三昧なり。

【字等相】諸字語悉く平等にして皆愛あることなし。

【離字】字の義中にあるを見ず、義の字中にあるを見ず。

【斷緣】三受を遠離して著するなし、心滅して亦緣も斷ず。

【不壞】法性畢竟空相應三昧を緣じ、戲論も破る能はず、無常も轉ずる能はず。

【無種相】諸法種種相を見ず、但だ無相を見るのみ。

【無處行】三毒の火三界を然す故心依止せず、涅槃畢竟空の故に亦依止せず。

【離朦昧】諸三昧中に於て無明等悉く除盡す。

【廣乘品】四念處品ともいふ。四念處について大乘を辨じ、次に他の道品等に就て述ぶ。【一】四念處身受心法の内、外、内外の十二種觀を列ぬ。【内身】自身を内、とせば他身は外、九受入は内、九不受入は外、眼等五情は内、色等五塵は外。【循身觀】順次觀察してその不淨衰老等を知る。【身覺なし】身の一異相を取り淨不淨等の種種覺を生ぜず。【外身等】身體或は財貨に著する等三種邪行に對して内、外、内外を觀ず。【勤めて精進し】自ら其心を離るるは難き等の故に勤精進といふ。【貪憂】通じては五蓋を除くも根本の故に貪を擧ぐ。

摩訶般若波羅蜜經　巻第六

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

廣乘品第十九

(一)佛須菩提に告げたまはく、(二)菩薩摩訶薩摩訶衍とは、所謂四念處なり。何等をか四となす。須菩提、菩薩摩訶薩内身中循身觀亦身覺無し、不可得を以ての故に。外身中、内外身中循身觀亦身覺無し、不可得を以ての故に。勤めて精進し、一心に世間の貪憂を除く。内受、内心、内法、外受、外心、外法、内外受、内外心、内外法、循法觀亦法覺無し、不可得を以ての故に、勤めて精進し、一心に世間の貪憂を除く。

(三)須菩提、菩薩摩訶薩、云何が内身中循身觀なるや。須菩提、若し菩薩摩訶薩行ずる時行を知り、住する時住を知り、坐する時坐を知り、臥する時臥を知り、身の行ずる所を知れば是の如く知る。須菩提、菩薩摩訶薩、是の如く内身中循身觀し、勤めて精進し、一心に世間の貪憂を除く、不可得を以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若は來り、若は去り、視瞻一心、屈申俯仰、僧伽梨を服し、衣鉢を執持し、飲食、臥息、坐立、睡覺、語默、禪定に入出す。亦常に一心に、是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、

【二】內身觀を述ぶ。
【僧伽梨】サンガーティー(Saṅghāti)重複衣と譯す。袈裟のこと。
【三】數息觀。
【鏇師】轆業師の如きもの。
【四】次に四大觀
【五】身分三十六物等の不淨を觀ず
【脬】膀胱。
【肪䏶】脂肪。

內身中循身觀す、不可得を以ての故に。

(三)復次に須菩提、菩薩摩訶薩、內身中循身觀の時、一心に念じ、入息の時入息を知り、出息の時出息を知り、入息長き時入息の長きを知り、出息長き時出息の長きを知り、入息短き時入息の短きを知り、出息短き時出息の短きを知る。譬へば鏇師、若は鏇師の弟子の、繩長き時長きを知り、繩短き時短きを知るが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、一心入息の時入息を知り、出息の時出息を知り、入息長き時入息の長きを知り、出息長き時出息の長きを知り、入息短き時入息の短きを知り、出息短き時出息の短きを知る。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、內心中循身觀し、懃めて精進し、一心に世間の貪憂を除く、不可得を以ての故に。

(四)復次に須菩提、菩薩摩訶薩、身の四大を觀ず。是念を作さく、「身中地大水大火大風大有り。」譬へば屠牛師、若は屠牛弟子の刀を以て牛を殺し、分つて四分と作す、四分と作し已りて若は立ち、若は坐し、此四分を觀ずるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、般若波羅蜜を行ずる時、種種身の四大、地大水大火大風大を觀ず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩內身中循身觀す、不可得を以ての故に。

(五)復次に須菩提、菩薩摩訶薩、內身を觀じ、足より頂に至るまで薄皮を周帀し、種種の不淨身中に充滿す、此念を作さく、「身中髮毛、爪齒、薄皮、厚皮、筋肉、骨髓、脾腎、心膽、肝肺、小腸、大腸、胃脬、屎尿、垢汗、淚涕、涎唾、膿血、黃白痰癊、肪䏶、腦膜有り。」譬へば田夫の倉中、隔てて雜穀を盛り、種種の稻麻黍粟豆麥を充滿するに、明眼の人、倉を開け

【六八】死人壞相不淨を觀ず。

ば、卽ち是は稻、是は麻、是は黍、是は粟、是は豆、是は麥なるを知り、分別して悉く知るが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く是身を觀じ、足より頂に至るまで薄皮を周市し、種種の不淨心中に充滿す、髮毛、爪齒、乃至腦膜なりと。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、內身を觀じ、懃めて精進し、一心に世間の貪憂を除く、不可得を以ての故に。

(六八)復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し棄死人の身を見るに、一日二日五日に至り、膖脹青瘀膿汁流出す。自ら我身を念ふも亦是の如き相、是の如き法あり、未だ此法を脫せずと。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、內身中循身觀し、懃めて精進し、一心に世間の貪憂を除く。不可得を以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し是棄死人の身を見るに、若は六日、若は七日、烏鵄鵰鷲、豺狼狐狗、是の如き等の種種の禽獸、攫裂して之を食ふ。自ら我身を念ふに、是の如きの相、是の如きの法あり、未だ此法を脫せず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、內心中循身觀し、懃めて精進し、一心に世間の貪憂を除く、不可得を以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し是棄死人の身を見るに種種の禽獸食ひ已りて不淨爛臭なり。自ら我身を念ふに、是の如き相、是の如き法あり、未だ此法を脫せず、乃至世間の貪憂を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し是棄死人の身を見るに、骨璅血肉塗染し、筋骨相連る。自ら我身を念ふに、是の如き相、是の如き法あり、未だ此法を脫せず、乃至世間の貪憂を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し是棄死人の身を見るに、骨璅血肉已に離れ、筋骨相連る。自ら我身を念ふに、是の如き相、是の如き法あり、未だ此法を脫せず、

【七】四正懃これ大乘。慧多き故四會處といひ、精進多き故四正懃といひ、定多き故四如意足といふも、四位は皆四念處中にあり。

乃至世間の貪憂を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し是棄死人の身を見るに、骨璅已に散じて地に在り。自ら我身を念ふに、是の如き相、是の如き法あり、未だ此法を脱せず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、內身を觀じ、乃至世間の貪憂を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し是棄死人の身を見るに、骨散じて地に在り、脚骨處を異にし、蹲骨、脛骨、腰骨、肋骨、脊骨、手骨、項骨、髑髏各各處を異にす。自ら我身を念ふに、是の如き相、是の如き法あり、未だ此法を脱せず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、內身を觀じ、乃至世間の貪憂を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し是棄死人を見るに、骨地に在る歲久しく風吹き日曝し、色白くして貝の如し。自ら我身を念ふに、是の如き相、是の如き法あり、未だ此法を脱せず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、內身を觀じ、乃至世間の貪憂を除く、不可得を以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し是棄死人を見るに、骨地に在る歲久しく、其色鴿の如く、腐朽爛壞、土と共に合す。自ら我身を念ふに、是の如き相、是の如き法あり、未だ此法を脱せずと。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、內身中循身觀し、懃めて精進し、一心に世間の貪憂を除く、不可得を以ての故に。外身、內外身も亦是の如し。受念處、心念處、法念處も亦是の如く廣く說くべし。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

(七)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂四正懃なり。何等をか四となす。須菩提菩薩摩訶薩未だ生ぜざる諸惡不善法は不生の爲の故に。欲生ぜば懃めて精進し、心を攝し

て道を行じ、已に生じたる諸惡不善法は斷の爲の故に、欲生ぜば懃めて精進し、心を攝して道を行じ、未だ生ぜざる諸善法は生の爲の故に、欲生ぜば懃めて精進し、心を攝して道を行じ、已に生じたる諸善法は、住して失はず、修滿增廣の爲の故に。欲生せば懃めて精進し、心を攝して道を行ず。不可得を以ての故に。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

(八)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂四如意分なり。何等をか四となす。欲定をもて斷行如意分を成就し修し、心定をもて斷行如意分を成就し修し、精進定をもて斷行如意分を成就し修し、思惟定をもて斷行如意分を成就し修す。不可得を以ての故に。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

(九)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂五根なり。何等をか五となす。信根、精進根、念根、定根、慧根なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

(一〇)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂五力なり。何等をか五となす。信力、精進力、念力、定力、慧力なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

(一一)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所覺七覺分なり。何等をか七となす。菩薩摩訶薩、念覺分を修すれば、離に依り無染に依り涅槃に向ふ。擇法覺分、精進覺分、喜覺分除覺分、定覺分、捨覺分、離に依り、無染に依り涅槃に向ふ。不可得を以ての故に。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

【八】四如意分これ大乘、正懃を意の如く辨ずるに名く。分或は足といふ。如意因緣に名くればなり。
【思惟定】觀三昧
【九】五根これ大乘。
【信根】正道助道を信じて一切無漏の禪定解脫を生ずるをいふ。
【精進】善行をつとめ勵みて息まず
【念】曾て經驗したる事に對し記憶して忘れざる作用。
【定】心を一境に止めて散ぜしめざること。
【慧】對境に向つて善惡等を簡別する作用。
【一〇】五力これ大乘。根は鈍根に名け、根增長して力用ある利根に力と名く。
【一一】七覺分これ大乘、事を辨じて思惟修行する故覺と名く。

【擇法】法の眞僞を簡び、眞につき僞を捨つること。
【喜】眞の法喜に住すること。
【除】虚僞を除斷して眞の善根を增長すること。
【捨】外境にかかはる心を捨てて平安にかへること。
【三】八聖道分これ大乘。
【正見】四諦の理を正しく見ること。
【正思惟】四諦の理を正しく思惟觀察すること。
【正語】不實の語を離ること。
【正業】身の三過を離ること。
【正命】五種邪命を離れ無漏慧に應ず。
【正精進】戒定慧の道に一心に精進すること。
【正念】正法を思念すること、定根と同じ。
【正定】身心寂靜にして亂想を離る

(一二)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂八聖道分なり。何等をか八となす。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

(一三)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂三三昧なり。何等をか三となす。空、無相、無作三昧なり。空三昧とは諸法の自相空なるに名く、是を空解脫門と爲す。無相とは諸法の相を壞し、憶せず、念ぜざるに名く、是を無相解脫門と名く。無作とは諸法の中に願を作さざるに名く、是を無作解脫門と爲す。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

(一四)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智法智、比智、世智、他心智、如實智なり。云何が苦智と名くるや、苦生ぜずと知る、是を苦智と名く。云何が集智と名くるや、集斷ずべしと知る、是を集智と名く。云何が滅智と名くるや、苦滅すと知る、是を滅智と名く。云何が道智と名くるや、八聖道分を知る、是を道智と名く。云何が盡智と名くるや、諸の婬恚癡盡くと知る、是を盡智と名く。云何が無生智と名くるや、諸有中生無しと知る、是を無生智と名く。云何が法智と名くるや、五陰本事を知る、是を法智と名く。云何が比智と名くるや、眼無常、乃至意觸因緣生の受無常と知る、是を比智と名く。云何が世智と名くるや、因緣の名字を知る、是を世智と名く。云何が他心智と名くるや、他の衆生の心を知る、是を他心智と名く。云何が如實智と名く

るや、諸佛の一切種智、是を如實智と名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

（一五）復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂三根未知欲知根、知根、智者根なり。云何が未知欲知根と名くるや。諸學人の未だ果を得ざる信根、精進根、念根、定根、慧根、是を未知欲知根と名く。云何が知根と名くるや。諸學人の果を得る信根、乃至慧根、是を知根と名く。云何が智者根と名くるや。諸無學人、若は阿羅漢、若は辟支佛、諸佛の信根乃至慧根、是を智者根と名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

（一六）復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂三三昧なり。何等をか三となす、有覺有觀三昧、無覺有觀三昧、無覺無觀三昧なり。云何が有覺有觀三昧と名くるや。諸欲を離れ惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪に入る、是を有覺有觀三昧と名く。云何が無覺有觀三昧と名くるや。初禪、二禪の中間、是を無覺有觀三昧と名く。云何が無覺無觀三昧と名くるや。二禪より乃至非有想非無想定、是を無覺無觀三昧と名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

（一七）復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂十念なり。何等をか十となす。念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念善、念出入息、念身、念死なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

ること。

【一三】三解脱門これ大乘。

【願を作さず】無作無願等といふ故

【一四】十一智これ大乘。

【苦生ぜず】諸法苦樂あるは實生に執する故、これなければ苦生ぜず。

【集】原因なり。

【五陰本事】色等苦因惑業をいふ。

諸法分別。

【一五】三根これ大乘。

【諸無學人】學地を超越せる聖者即ち羅漢等なり。

【一六】三三昧これ大乘。

【一七】十念これ大乘。

【一八】四禪乃至九次第定これ大乘。
【一九】佛の十力これ大乘。

（一八）復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂四禪、四無量心、四無色定、八背捨、九次第定なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

（一九）復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂佛の十力なり。何等をか十となす。佛、如實に、一切法是處、不是處の相を知る、一力なり。如實に、他の衆生の過去、未來、現在の諸業、諸受の法を知り、造業處を知り、因緣を知り、報を知る、二力なり。如實に、諸禪解脫三昧定垢淨分別の相を知る、三力なり。如實に、他の衆生の諸根上下の相を知る、四力なり。如實に、他の衆生の種種の欲解を知る、五力なり。如實に、世間の種種無數の性を知る、六力なり。如實に、一切至處道を知る、七力なり。種種の宿命相有り、因緣有り、一世、二世、乃至百千世、劫初劫盡我れ彼の衆生の中に在りて生ず、是の如き姓、是の如き名、是の如き飲食、苦樂、壽命長短にして、彼の中に死し、是間に生じ、是間に死し、還て是間に生ず、此間に生じて、名姓、飲食、苦樂、壽命長短も、亦是の如しと知る、八力なり。佛の天眼淨、諸天眼に過ぎ、衆生の死時生時、端正と醜陋とを見る、若は大、若は小、若は惡道に墮し、若は善道に墮す、是の如き業因緣の受報として、是諸の衆生惡身業成就し、惡口業成就し、惡意業成就し、聖人を謗毀す、邪見業因緣を受くるが故に、身壞し死する時惡道に入り、地獄の中に生ず。是諸の衆生善身業成就し、善口業成就し、善意業成就し、聖人を謗毀せず、正見因緣を受くるが故に、身壞し、死する時善道に入り、天上に生ずと見る、九力なり。佛、如實に、諸漏盡くるを知るが故

【二〇】四無畏これ大乘。佛一切正智、漏盡、說障法、說盡苦道の四において畏なし。

に、無漏心解脫し、無漏慧解脫す、現在法の中、自證して是法に入るを知る、所謂我が生已に盡き、梵行已に作し、今世より復後世を見ざるは、十力なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

(二〇)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂四無所畏なり。何等をか四となす。佛誠言を作さく「我は是れ一切正智人なり」と。若は沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて、如實に難じて言はく、「是法知らず」と。乃至是微畏相を見ず。是を以ての故に我れ安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて師子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆實に轉ずる能はず、一の無畏なり。佛誠言を作さく「我は一切漏盡す」と。若は沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は復餘衆有りて、如實に難じて言はく、「是れ漏盡きず」と。乃至是微畏相を見ず。是を以ての故に、我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて師子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆實に轉ずる能はず、二の無畏なり。佛誠言を作さく「我は障法を說く」と。若は沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて、如實に難じて言はく、「是法を受くるも道を障へず」と。乃至是微畏相を見ず。是を以ての故に、我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて師子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆實に轉ずる能はず、三の無畏なり。佛誠言を作さく「我が說く所、聖道にして能く

【二〇】四無閡智これ大乘。
【義等】義は法の相狀內容、法は體性言語、辭は名稱、樂說は文句說明。
【二一】十八不共法これ大乘。
【異相なし】衆生に遠近親疎等の分別なし。
【不知已捨】知らずして捨することなし。
【欲減】善欲の減衰なり。
【二二】字門これ大乘。
【字等語等】この陀羅尼は諸字に於て平等にして愛憎あることなき故。
【諸字入門】字は字母、語は字に因りて語、語に因りて名、名に因りて義あり故に字を聞いて乃至その義を了す。故に門といふ、今一切字の根本として阿乃至荼の四十二字を擧ぐ。

世間を出づ、是行に隨つて能く苦を盡す」と。若は沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて如實に難じて言はく「是道を行じ、世間を出づる能はず、苦を盡す能はず」と。乃至是微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて師子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆實に轉ずる能はず、四の無畏なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

(二〇)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂四無閡智なり。何等をか四となす、義無閡、法無閡、辭無閡、樂說無閡なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

(二一)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂十八不共法なり。何等をか十八となす。一に諸佛身に失無し、二に口に失無し、三に念に失無し、四に異相無し、五に不定の心無し、六に不知已捨の心無し、七に欲減無し、八に精進減無し、九に念減無し、十に慧減無し、十一に解脫減無し、十二に解脫知見減無し、十三に一切身業智慧に隨て行ず、十四に一切口業智慧に隨て行ず、十五に一切意業智慧に隨て行ず、十六に智慧過去世を知見して無閡無障なり、十七に智慧未來世を知見して無閡無障なり、十八に智慧現在世を知見して無閡無障なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得を以ての故に。

(二二)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂字等、語等、諸字入門なり。何等をか字

【阿】阿提は初、阿耨波多は不生。【垢】羅闍を垢と譯す。羅字をきけば一切法の離垢相を知る。【波】これをきけば一切法第一義中に入るを知る、第一義は波羅木陀の譯。【遮】これを聞きて即時に一切諸行皆非行を知る。行は遮梨夜の譯。【那】一切法不得不失不去不來と知る、不は那の譯。【邏】一切法輕重相を離るるを知る。邏は邏求の譯。【陀】一切法の善相を知る。善は陀摩の譯。【婆】一切法無縛無觧と知る。縛は婆陀の譯。【茶】諸法の不熱相を知る。不熱は茶闍他の譯。【沙】人身の六種相を知る。沙は六と譯す。

等、語等、諸字入門と爲す。阿字門、一切法初めより生ぜざるが故に。羅字門、一切法垢を離るるが故に。波字門、一切法第一義の故に。遮字門、一切法終に得べからざるが故に。諸法終らず、生ぜざるが故に。那字門、諸法名を離れ、性相得ず失はざるが故に。邏字門、諸法世間を度するが故に、亦愛支因緣滅するが故に。陀字門、諸法善心生ずるが故に、亦施相の故に。婆字門、諸法婆字離るるが故に。茶字門、諸法茶字淨きが故に。沙字門、諸法六自在王性淸淨の故に。和字門、諸法語言道斷に入るが故に。多字門、諸法如相不動に入るが故に。夜字門、諸法如實不生に入るが故に。吒字門、諸法折伏不可得に入るが故に。迦字門、諸法作者不可得に入るが故に。娑字門、諸法時不可得に入るが故に。諸法時來轉ずるが故に。磨字門、諸法我所不可得に入るが故に。伽字門、諸法去者不可得に入るが故に。他字門、諸法處不可得に入るが故に。闍字門、諸法生不可得に入るが故に。簸字門、諸法簸字不可得に入るが故に。駄字門、諸法性不可得に入るが故に。賒字門、諸法定不可得に入るが故に。呿字門、諸法虛空不可得に入るが故に。叉字門、諸法盡不可得に入るか故に。哆字門、諸法有不可得に入るが故に。若字門、諸法智不可得に入るが故に。侘字門、諸法拕字不可得に入るが故に。婆字門、諸法破壞不可得に入るが故に。車字門、諸法欲不可得に入るが故に。影の如く五陰も亦不可得の故に。摩字門、諸法摩字不可得に入るが故に。火字門、諸法喚不可得に入るが故に。嗟字門、諸法嗟字不可得に入るが故に。伽字門、諸法厚不可得に入るが故に。他字門、諸法處不可得に入るが故に、拏字門、諸法不來、不去、

【和】一切法語言相を離ると知る。語言は和波多の譯。

【多】諸法如中にありて不動なりと知る。如は多他の譯。

【夜】諸法の實相中に入り不生不滅と知る。實は夜他跋の譯。

【吒】一切法の無障礙相を知る。障礙は吒婆の譯。

【迦】諸法中に作者あることなし。作者は迦羅迦の譯。

【娑】一切法一切種不可得と知る。一切は娑(薩)婆の譯。

【磨】一切法、我所を離ると知る。我所は磨迦羅の譯

【伽】一切法底不可得と知る。底は伽陀の譯。

【他】四句如去不可得と知る。如去は多他阿伽陀の譯

【闍】諸法の生老不可得と知る。生死は闍提闍の譯。

不立、不坐、不臥に入るが故に。頗字門、諸法邊不可得に入るが故に。歌字門、諸法聚不可得に入るが故に。醝字門、諸法醝字不可得に入るが故に。遮字門、諸法行不可得に入るが故に。吒字門、諸法傴不可得に入るが故に。茶字門、諸法邊竟處に入るが故に、終らず、生ぜず。茶を過ぎて字の說くべき無し。何を以ての故に、更に字無きが故に、諸字無礙、無名、亦滅、說く可らず、示す可らず、見る可らず、書す可らず。須菩提、當に知るべし、一切諸法虛空の如し。

(一三)須菩提、是を陀羅尼門と名く。所謂阿字の義、若は菩薩摩訶薩、是れ諸字門印、阿字印、若は聞き、若は受け、若は誦し、若は讀み、若は持し、若は他の爲に說く。是の如く知らば二十功德を得べし。何等をか二十となす。强識念を得、慚愧を得、堅固心を得、經の旨趣を得、智慧を得、樂說無礙を得、諸餘陀羅尼門を得易し、疑悔無き心を得、善を聞き喜ばず、惡を聞きて怒らざることを得、高からず下からず住し、心增無く減無きを得、善巧に衆生の語を知ることを得、巧に五陰、十二入、十八界、十二因緣、四緣、四諦を分別することを得、巧に衆生の諸根利鈍を分別することを得、巧に他心を知ることを得、巧に日月歲節を分別することを得、巧に天耳通を分別することを得、巧に宿命通を分別することを得、巧に生死通を分別することを得、能く巧に是處非處を說くことを得、巧に往來坐起等の身の威儀を知ることを得。須菩提、是れ陀羅尼門、字門、阿字門等なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。」

發趣品第二十

(一)佛須菩提に告げたまはく、『汝問はく「云何が菩薩摩訶薩大乘に發趣するや」と。若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行ずる時、一地より一地に至る、是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩、一地より一地に至るや。』佛言はく、菩薩摩訶薩、一切法來去の相無く、亦法若は來、若は去、若は至、若は不至有る無きを知る、諸法の相滅せざるが故に。菩薩摩訶薩、諸地に於て念ぜず、思惟せず、而も地業を修治し、亦地を見ず。何等か菩薩摩訶薩地業を治むるや。菩薩摩訶薩初地に住する時、十事を行ず。一には深心堅固、無所得を用ての故に。二には一切衆生の中に於て等心なり、衆生不可得の故に。三には布施、施者受者不可得の故に。四には善知識に親近し、亦自ら高うせず。五には法を求む、一切法不可得の故に。六には常に出家す、家不可得の故に。七には佛身を愛樂す、相好不可得の故に。八には法教を演出す、諸法の分別不可得の故に。九には憍慢を破す、法生慧不可得の故に。十には實語、諸語不可得の故に。菩薩摩訶薩、是の如く初地の中に住し、十事を修治し、地業を治む。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、二地の中に住し、常に八法を念ず。何等をか八となす。一には戒清淨、二には恩を知り恩を報ず、三には忍辱力に住す、四には歡喜を受く、五には一切衆生を捨てず、六には大悲心

【簸】濕波なり。一切法不可得と知る。義のうべきなきを以て釋せず。
【馱】一切法中法性不可得と知る。法は馱摩の譯。
【賒】諸相寂滅相を知る。寂滅は賒多の譯。
【呿】一切法虛空不可得と知る。虛空は呿伽の譯。
【叉】一切法盡く不可得と知る。盡は叉耶の譯。
【哆】諸法邊の不可得を知る。阿利迦哆度求那を是事邊得何利と譯す。
【若】一切法中に智相なしと知る。智は若那の譯。
【拕】一切法の義不可得と知る。義は阿拕の譯。
【婆】一切法不可破と知る。破は婆伽の譯。
【車】一切法無所去と知る。去は伽車提の譯。欲は車

陀の譯。影は車耶の譯。
【摩】諸法牢堅金剛の如しと知る。石は阿濕摩の譯。
【火】一切法の無音聲相を知る。喚來は火夜の譯。
【嗟】一切法の無慳無施相を知る。慳は末嗟羅の譯。
【伽】諸法の不厚不薄を知る。厚は伽那の譯、
【他】諸法の無住處たるを知る。處は他那の譯。
【拏】一切法及衆生不來不去不坐不臥不立不起と知る。衆生空法空の故。不は拏の譯。
【頗】一切法の因果空なるを知る。果は頗羅の譯。
【歌】一切法五衆不可得と知る。衆或は聚は歌大の譯。
【嗟】醝字空諸法亦爾るを知る。
【遮】・一切法の不

に入る、七には師を信じ恭敬し、諮受す、八には諸波羅蜜を勤求す。須菩提、是を菩薩摩訶薩、二地の中に住し、滿足すべき八法と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、三地の中に住して五法を行ず。何等をか五となす。一には多く學問して厭足無し、二には法施を淨め亦自ら高くせず、三には佛國土を淨め亦自ら高くせず、四には世間の無量懃苦を受けて、以て厭ふことを爲さず、五には慚愧の處に住す。須菩提、是を菩薩摩訶薩三地の中に住し滿足すべき五法と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩四地の中に住し、行を受け、十法を捨てざるべし。何等をか十となす。一には阿蘭若住處を捨てず、二には少欲、三には知足、四には頭陀の功德を捨てず、五には戒を捨てず、六には諸欲を穢惡とす、七には世間心を厭ひ、涅槃心に順ふ、八には一切の所有を捨つ、九には心沒せず、十には一切の物を惜まず。須菩提、是を菩薩摩訶薩四地の中に住し、十法を捨てずと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩五地の中に住し、十二法を遠離す。何等をか十二となす。一には親白衣を遠離す、二には比丘尼を遠離す、三には他家を慳惜することを遠離す、四には無益の談說を遠離す、五には瞋恚を遠離す、六には自大を遠離す、七には蔑人を遠離す、八には十不善道を遠離す、九には大慢を遠離す、十には自用を遠離す、十一には顚倒を遠離す、十二には婬怒癡を遠離す。須菩提、是を菩薩摩訶薩五地の中に住し、十二事を遠離すと爲す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩六地の中に住し、當に六法を具足すべし。何等をか六となす。所謂六波羅蜜なり。復六法有り、爲すべからざる所なり。何等をか六となす。一には聲聞辟支佛の

動相を知る。動は遮羅地の譯。【咤】一切法の此彼岸不可得と知る。此岸は咤羅の譯。【荼】一切法必ず不可得と知る。必は波荼の譯。以上字門の解は大論四十八による。大解し難きもの二三あり。大正藏經XXV[408—409]參照。【字の說く等】四十二字以外にあらば支派なりといふ。【無礙等】字一切語に入る故に無礙、無一の定名なき故無名、聞き已りて便ち盡くる故滅なり。【三】陀羅尼門二十功德を辨ず。【強識念を得】此の陀羅尼を得れば常に諸字相を觀じ修習憶念する故に。【慚愧を得】諸善法を集めて諸惡法を厭ふ故。

意を作さず、二には布施に憂心を生ずべからず、三には索むる所有るを見ては心沒せず、四には所有の物は布施す、五には布施の後心悔いず、六には深法を疑はず。須菩提、是を菩薩摩訶薩六地の中に住し、六法を滿具し、六法を遠離すべしと名く。須菩提、菩薩摩訶薩七地の中に住し、二十法を遠離すべし、著すべからざる所なり。何等をか二十となす。一には我に著せず、二には衆生に著せず、三には壽命に著せず、四には衆數、乃至知者見者に著せず、五には斷見に著せず、六には常見に著せず、七には相を作すべからず、八には因見を作すべからず、九には名色に著せず、十には五陰に著せず、十一には十八界に著せず、十二には十二入に著せず、十三には三界に著せず、十四には著處を作さず、十五には所期處を作さず、十六には依處を作さず、十七には佛に依る見に著せず、十八には法に依る見に著せず、十九には僧に依る見に著せず、二十には戒に依る見に著せず。是二十法著すべからざる所なり。復二十法の具足し滿ずべき有り。何等をか二十となす。一には空を具足す、二には無相を證す、三には無作を知る、四には三分淸淨、五には一切衆生の中に慈悲智具足す、六には一切の衆生を念ぜず、七には一切法等しく觀じ、是中にも亦著せず、八には諸法實相を知り、是事も亦念ぜず、九には無生忍法、十には無生智、十一には諸法一相を說く、十二には分別の相を破す、十三には憶想を轉ず、十四には見を轉ず、十五には煩惱を轉ず、十六には等定慧地、十七には意を調ふ、十八には心寂滅、十九には無閡智、二十には愛に染まず。須菩提、是を菩薩摩訶薩七地の中に住し、具足すべき二十

【堅固心を得】諸福德智慧を集むる故。

【經の旨趣を得】佛の五種方便を知りて說法する故。五種とは諸法と何の爲と方便と理趣と大悲となり。

【智慧を得】陀羅尼により乃至畢竟空を得、即ち是般若波羅蜜の智慧なり。

【樂說】無礙智慧を得しを以て、本願の大悲心を以て衆生を度す故。

【諸餘の陀羅尼等】既に文字陀羅尼を得れば諸陀羅尼自然に得らるること竹の初節を破れば餘者皆破り易きが如し。

【疑悔無き等】諸法實相中に入り一切智をえざるも、一切深法中に於いて疑なく悔なし。

【善を聞き等】各各諸字を分別して讃毀無きが故に。

法と爲す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩八地の中に住し、五法を具足すべし。何等をか五となす。衆生心に順入し、諸神通に遊戲し、諸佛の國を見る、見る所の佛國の如く自ら佛國を莊嚴す、如實に佛身を觀じ、自ら佛身を莊嚴す。是を五法具足し滿ずと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩八地の中に住し、復五法を具足す。何等をか五となす。上下の諸根を知り、佛國土を淨め、如幻三昧に入り、常に三昧に入り、衆生所應の善根に隨って身を受く。是を菩薩摩訶薩八地の中に住し、五法を具足すと爲す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩九地の中に住し、十二法を具足すべし。何等をか十二となす。無邊の世界、度する所の分を受け菩薩所願の如きを得、諸天龍、夜叉揵闥婆の語を知りて說法を爲す、處胎成就し、家成就し、所生成就し、姓成就し、眷屬成就し、出生成就し、出家成就し、莊嚴佛樹成就し、一切諸善功德成滿し具足す。須菩提、是を菩薩摩訶薩九地の中に住し、十二法を具足すべしと名く。須菩提、十地の菩薩當に知るべし、佛の如しと。』

(二)爾時、慧命須菩提佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩、深心に地業を治むとするや。』佛言はく『菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心に一切の善根を集む。是を菩薩摩訶薩深心に地業を治むと名く。』『云何が菩薩、一切衆生の中に於て等心なりとするや。』佛言はく『若し菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心に四無量心を生ず。所謂慈悲喜捨なり。是を一切衆生の中に於て等心なりと名く。』『云何が菩薩、布施を修すとするや。』佛言はく『菩薩一切衆生に施與し、分別する所無し。是を布施を修すと名く。』『云何が菩薩、善知識に親近す

【高からず等】憎愛斷の故。
【善巧に衆生の等】一切衆生の語言三昧を解するを得る故。
【發趣品】須菩提の問へる發趣大乘に佛答へ給ふ。發趣とは大乘の向上して初地より二地に向ふをいふ。
【二】十地の地業を列ぬ。
【一地】大乘は即ち地。地に十分あり。これに二種ある中共地とは乾慧地乃至佛地をいひ、菩薩地とは歡喜、離垢、有光、增曜、難勝、現在、深入、不動、善根、法雲の十地。
【生慧】衆生と智慧、これ不可得なれば何ぞ己が持戒斷惑に憍らんや。
【阿蘭若】アーランヤカ(Aranyaka)遠離處等と譯す。比丘の住處、清閑にして修行に適す。

とするや。』佛言はく、『能く人をして薩婆若の中に入りて住せしむ、是の如く善知識に親近し、諮受し、恭敬し、供養す。是を善知識に親近すと名く。』『云何が菩薩法を求むとするや。』佛言はく、『菩薩、薩婆若に應ずる心に法を求め、聲聞辟支佛地に墮せず。是を法を求むと名く。』『云何が菩薩常に出家し、地業を治むとするや。』佛言はく、『菩薩世世雜心に出家せず、佛法中に出家し、能く障閡する者無し。是を常に出家し地業を治むと名く。』『云何が菩薩、佛身を愛樂し、地業を治むとするや。』佛言はく、『若し菩薩、佛の身相を見、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に念佛を離れず。是を佛身を愛樂し、地業を治むと名く。』『云何が菩薩、法教を演出し、地業を治むとするや。』佛言はく、『若しは佛現在し若は佛滅度の後、衆生の爲に說法し、初も中も後も善く、妙義好語、淨潔、純具、所謂修多羅、乃至優波提舍なる、是を法教を演出して地業を治むと名く。』『云何が菩薩、憍慢を破り、地業を治むとするや。』佛言はく、『菩薩、是憍慢を破るが故に、終に下賤の家に生ぜず。是を憍慢を破り地業を治むと名く。』『云何が菩薩實語に地業を治むとするや。』佛言はく、『菩薩所說の如く行ず。是を實語に地業を治むと名く。是を菩薩摩訶薩初住地の中に十事を修行し、地業を治むと爲す。』

(三)『云何が菩薩、戒清淨なりとするや。』『若し菩薩摩訶薩、聲聞辟支佛心、及び諸の破戒、佛道を障ふる法を念ぜず。是を戒淸淨と名く。』『云何が菩薩、恩を知り恩を報ずとするや。』『若し菩薩摩訶薩、菩薩道を行じ、乃至小恩すら尙忘れず、何に況んや多をや。

るところ。

【頭陀】ヅータ(Dhūta)修治、陶汰等と譯す。煩惱の塵垢を拂ひ去りて佛道を求むること。修行と同義。

【白衣】世俗に親近執著すること。

【夜叉】ヤクシヤ(Yakṣa)苦活或は捷疾と譯す、八部衆なり。

【犍闥婆】ガンダルヷ(Gandharva)食香と譯す。八部衆なり。

【二】初地の業十地を釋す。

【薩婆若に應ずる心】一切智に相應する心、即ち未來作佛を願ふ。所作一切の功德を今世後世の福樂壽命安隱のためにせずただ薩婆若のためにす。

【一切衆生の中に於て等心】深心を得たるを以て怨親平等に之を視て二なし。

是を知恩報恩と名く。』『云何が菩薩、忍辱力に住すとするや。』『若し菩薩、一切衆生に於て瞋無く、惱無し。是を住忍辱力と名く。』『云何が菩薩、歡喜を受くとするや。』『所謂衆生を成就し、此を以て喜と爲す。是を受歡喜と名く。』『云何が菩薩、一切衆生を捨てずとするや。』『若し菩薩の念、一切衆生を救はんと欲するが故に。是を不捨一切衆生と名く。』『云何が菩薩、大悲心に入るとするや。』『若し菩薩、是の如く「我れ一一の衆生の爲の故に、如恒河沙等の劫、地獄の中に懃苦を受け、乃ち是人佛道を得て、涅槃に入るに至るべし」と念ずれば、是の如きを名けて、一切十方衆生の爲に苦を忍ぶと爲す。是を入大悲心と名く。』『云何が菩薩、師を信じ恭敬し、諮受すとするや。』『若し菩薩、諸師に於て世尊の如く想ふ。是を信師恭敬諮受と名く。』『云何が菩薩、諸波羅蜜を懃求すとするや。』『若し菩薩、一心に諸波羅蜜を求めて異事無し。是を懃求諸波羅蜜と名く。是を菩薩摩訶薩、二地の中に住し、八法を滿足すと爲す。』

(四)『云何が菩薩摩訶薩、多く學問し厭足無しとするや。』『諸佛諸說の法、若は此間の世界、若は十方の世界の諸佛所說の法、盡く聞持せんと欲す。是を多學問無厭足と名く。』『云何が菩薩、法施を淨むとするや。』『法施する所有り、乃ち阿耨多羅三藐三菩提をも求めざるに至る、何に況んや餘事をや。是を不求名利法施と名く。』『云何が菩薩、佛國土を淨むとするや。』『諸善根を以て廻向して佛國土を淨む。是を淨佛國土と名く。』『云何が菩薩、世間無量の懃苦を受けて、以て厭ふことを爲さずとするや。』『諸の善根備具するが故に、能

【四無量心】慈悲喜捨是れ等心なり衆にの受樂を見て慈喜心をえて佛樂を得しめんとし、受苦を見ては悲心を生じ一切苦を抜かんとし、不苦不樂を見ては捨心を生じ愛憎心を捨せしめんとす。捨に捨財行施と捨結得道の二あり。

【分別する所無し】施者受者所施の三に於て分別憶想なきは出世間の大施なり。

【法を求む】法に無上法たる涅槃、得涅槃方便は八聖道、八聖道を助くる一切の尊語實語即ち八萬四千の法の三あり。求むとは、書寫誦讀正憶念し解説教化するなり。

【雜心に出家せず】九十六種外道中に出家せず、但佛道中に於て出家す。

【念佛】佛を見、

く衆生を成就し、亦佛土を莊嚴し、乃ち薩婆若を具足するに至るまで、終に疲厭せず。是を受無量懃苦不以爲厭と名く。』『云何が菩薩、慚愧處に住すとするや。』『諸の聲聞辟支佛の意を恥づ。是を住慚愧處と名く。是を菩薩摩訶薩、三地の中に住し、五法を滿足すと爲す。』

『(五)云何が菩薩、阿練若住處を捨てずとするや。』『能く聲聞辟支佛地を過ぐ、是を不捨阿練若住處と名く。』『云何が菩薩、欲少しとするや。』『乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るも尚欲せず、何に況んや餘欲をや。是を少欲と名く。』『云何が菩薩、足るを知るとするや。』『一切種智を得るのみ。是を知足と名く。』『云何が菩薩、頭陀の功德を捨てずとするや。』『諸の深法忍を觀ず。是を不捨頭陀功德と名く。』『云何が菩薩、戒を捨てずとするや。』『戒相を取らざる、是を不捨戒と名く。』『云何が菩薩、諸欲を穢惡とするや。』『欲心生ぜざるが故に、是を穢惡諸欲と名く。』『云何が菩薩、世間心を厭ひ涅槃心に順ふとするや。』『一切法を知りて作さざるが故に、是を厭世間心順涅槃心と名く。』『云何が菩薩一切所有を捨つるとするや。』『內外の諸法を惜まざるが故に、是を捨一切所有と名く。』『云何が菩薩、心沒せずとするや。』『二種識處に心生ぜざるが故に、是を心不沒と名く。』『云何が菩薩、一切物を惜まずとするや。』『一切物に於て著せず、念ぜず。是を不惜一切物と名く。』是を菩薩四地の中に於て、十法を捨てずと爲す。』

『(六)云何が菩薩、親白衣を遠離すとするや。』『菩薩出家生ずる所、一佛國より一佛國に至り、

佛德を念じ佛行を行ふ。

【初中後】道を讃ずる故初、戒を數ずるは中、此の二の果として諸佛國或は天に生ずるは後。三界五受を厭ふは初、出家は中、離惑は後。聲聞乘は初、辟支佛乘は中、宜暢大乘は後。

【妙義好語】三種語復辭妙と雖も義味淺薄なり、義理深妙と雖も辭具足せざる故之を說くなり。

【淨潔】三垢を離れて但正法のみを說く。

【純具】八正道六度を具足す。

【破憍慢】出家持戒者が或時自ら恃んで憍慢を生ずる時、自心に憍慢の過罪を知つて之を破し、不退轉を求むる故尊貴に生ずることを得るなり。

【實語】諸善の本生天の因緣にして

常に出家し、頭を剃り染衣を著す。是を遠離親白衣と名く。』『云何が菩薩、比丘尼を遠離すとするや。』『比丘尼と共に住せず、乃至彈指の頃も亦念を生ぜず。是を遠離比丘尼と名く。』『云何が菩薩、他家を慳惜することを遠離すとするや。』『菩薩是の如く思惟す。我れ衆生を安樂にすべし、他今我を助け安樂なり、云何が慳を生ぜん。是を遠離慳惜他家と名く。』『云何が菩薩無益談處を遠離すとするや。』『若し談處有り或は聲聞辟支佛心を生ぜば、我れ當に遠離すべし。是を遠離無益談處と名く。』『云何が菩薩、瞋恚を遠離すとするや。』『瞋心、惱心、鬪心をして入るを得しめず。是を遠離瞋恚と名く。』『云何が菩薩、自大を遠離すとするや。』『所謂內法を見ざるが故に、是を遠離自大と名く。』『云何が菩薩、蔑人を遠離すとするや。』『所謂外法を見ざるが故に。是を遠離蔑人と名く。』『云何が菩薩、十不善道を遠離すとするや。』『是十不善道能く八聖道を障ふ、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。是を遠離十不善道と名く。』『云何が菩薩、大慢を遠離すとするや。』『是菩薩、法の大慢を作すべき者を見ず。是を遠離大慢と名く。』『云何が菩薩、自用を遠離すとするや。』『是菩薩、是法の自ら用ふべき者を見ず。是を遠離自用と名く。』『云何が菩薩、顛倒を遠離すとするや。』『顛倒處得べからざるが故に、是を遠離顛倒と名く。』『云何が菩薩、婬怒癡を遠離すとするや。』『婬怒癡處見るべからざるが故に、是を遠離婬怒癡と名く。是を菩薩、五地の中に住し、十二法を遠離すと爲す。』

〔七〕『云何が菩薩、六地の中に住し、六法、所謂六波羅蜜を具足すとするや。』『諸佛及び聲聞

之を行ずる者は布施持戒等を假らず但實語を修するのみにて無量福を得るなり。
【三】二地の八法を釋す。
【戒淸淨】初地中多く布施を行じ次に持戒の之に勝れたるを知る。何者、持戒は一切衆生を攝すればなり。又凡て佛道を破ることを破戒といふ。この垢を離るるに名けて淸淨といふ。
【四】三地中の五法を釋す。
【五】四地中十法を釋す。
【知足】唯一切種智にのみ滿足して他を求めず。
【深法忍】諸法無生に通達す。
【戒相を取らず】諸法實相を知る故に持戒を見ず、況や破戒をや。
【六】五地中の十二法を釋す。
【他今我を助け】

辟支佛、六波羅蜜の中に住し、能く彼岸に度る、是を六法を具足すと名く。』『云何が菩薩、聲聞辟支佛意を作さずとするや。』『是念を作す。聲聞辟支佛意は、阿耨多羅三藐三菩提道に非らずと。』『云何が菩薩、布施に憂心を生ぜずとするや。』『是念を作さく、此れ阿耨多羅三藐三菩提道に非ずと。』『云何が菩薩、索むる所有るを見て心沒せずとするや。』『是念を作さく、「此れ阿耨多羅三藐三菩提道に非ず」と。』『云何が菩薩、所有の物は布施すとするや。』『菩薩初發心の時、布施するに、是れ與ふべきか、是れ與ふべからざるかを言はず。』『云何が菩薩、布施の後心悔いずとするや。』『慈悲力の故に。』『云何が菩薩、深法を疑はずとするや。』『功德力を信ずる故に。是を菩薩、六地の中に住し、六法を遠離すと爲す。』

〔八〕『云何が菩薩我に著せずとするや。』『畢竟無我の故に。』『云何が菩薩衆生に著せず、壽命に著せず、衆數乃至知者見者に著せずとするや。』『是諸法畢竟得べからざるが故に。』『云何が菩薩斷見に著せずとするや。』『法斷有る無く、諸法畢竟不生の故に。』『云何が菩薩常見に著せずとするや。』『若し法生ぜずば常と作さざればなり。』『云何が菩薩相を取べからずとするや。』『諸の煩惱無きが故に。』『云何が菩薩因見を作すべからずとするや。』『諸見見るべからざるが故に。』『云何が菩薩名色に著せずとするや。』『名色處相無きが故に。』『云何が菩薩五陰に著せず、十八界に著せず、十二入に著せずとするや。』『是諸法性無きが故に。』『云何が菩薩三界に著せずとするや。』『三界性無きが故に。』『云何が菩薩著心を作す

自ら家を捨てて貪惜せず、況んや他をや。他を助けざるをも等視すれば況や他を助くるをや。

【無益談處】此是綺語なり。

【瞋心等】初めに生ずる反心、瞋心増長して打殺するを惱心、惡口譏謗するを訴心、若し殺害打縛する等を鬪心と名く。

【自大】憍心自ら高うするは身心ありとすればなり。

【蔑人】人を無視する慢心も他法別存すとすればなり。

【大慢】劣を勝として我に執す。十八空を行ずる時諸法定んで大小相有るを見ず。

【遠離自用】七種憍慢の根本を拔き深く善法を樂ふが故。

【遠離顚倒】一切法中常樂我淨不可得の故。

べからずとするや。云何が菩薩願を作すべからずとするや。云何が菩薩依止を作すべからずとするや。』『是諸法性無きが故に。』『云何が菩薩佛に依るの見に著せずとするや。』『依見を作せば佛を見ざるが故に。』『云何が菩薩法に依るの見に著せずとするや。』『法見るべからざるが故に。』『云何が菩薩僧に依るの見に著せずとするや。』『僧相無爲にして依るべからざるが故に。』『云何が菩薩戒に依るの見に著せずとするや。』『罪無罪著せざるが故に。是を菩薩七地の中に住し、二十法著すべからざる所と爲す。』『云何が菩薩空を具足すべしとするや。』『諸法自相空を具足するが故に。』『云何が菩薩無相を證すとするや。』『諸相を念せざるが故に。』『云何が菩薩無作を知るとするや。』『三界の中に於て作さざるが故に。』『云何が菩薩三分清淨とするや。』『十善道具足するが故に。』『云何が菩薩一切衆生の中、慈悲智具足すとするや。』『大悲を得るが故に。』『云何が菩薩一切衆生を念せずとするや。』『國土を淨め具足するが故に。』『云何が菩薩一切法等しく觀ずとするや。』『諸法に於て損益せざるが故に。』『云何が菩薩諸法の實相を知るとするや。』『諸法實相知る無きが故に。』『云何が菩薩無生忍とするや。』『諸法、不生不滅不作の爲の故に。』『云何が菩薩無生智とするや。』『名色不生を知るが故に。』『云何が菩薩諸法一相を說くとするや。』『心二相を行ぜざるが故に。』『云何が菩薩分別相を破すとするや。』『一切法分別せざるが故に。』『云何が菩薩憶想を轉ずとするや。』『小大無量想轉ずるが故に。』『云何が菩薩見を轉ずとするや。』『聲聞辟支佛地に於て見を轉ずるが故に。』『云何が菩薩煩惱を轉ずとするや。』『諸の煩惱

【七】六地の六地を得す。
【心沒す】悲惱憂苦するなり。
【功徳力を信ず】福徳力の故に信力も亦大なり。以上大論四十九。
【八】七地の二十法を釋す。
【因見】一切有爲法は展轉して因果をなす。是法中に著し、心に相を取り見を生ずるをいふ。
【空を具足】十八空を行じ或は衆生空法空を行じ、或は畢竟空を行じて著せざるをいふ。
【自相空】三種具足空皆これ自相空なり。七地中相空を以て具足空となす。
【無相證】無相即是れ涅槃、證すべく、修知分別具足すべからず。
【三分清淨】所謂十善業道これ三分にして、この三業清淨にして著を離るる故。

を斷ずるが故に。』『云何が菩薩等定慧地とするや。』『所謂一切種智を得るが故に。』『云何が菩薩、意を調ふとするや。』『三界に於て動ぜざるが故に。』『云何が菩薩心寂滅なりとするや。』『六根を制するが故に。』『云何が菩薩、無閡智なりとするや。』『佛眼を得るが故に。』『云何が菩薩、愛に染まずとするや。』『六塵を捨つるが故に。是を菩薩七地の中に住し、二十法を具足すと爲す。』

(九)『云何が菩薩、衆生心に順入すとするや。』『菩薩一心を以て、一切衆生の心及び心數法を知る。』『云何が菩薩、諸神通に遊戲すとするや。』『是神通を以て一佛國より一佛國に至り、亦佛國の想を作さゞるなり。』『云何が菩薩、諸佛國を觀ずとするや。』『自ら其國に住し、無量の諸佛國を見る、亦佛國の想無し。』『云何が菩薩、見る所の佛國の如く、自ら其國を莊嚴すとするや。』『轉輪聖王の地に住し、徧く三千大千世界に至り、以て自ら莊嚴す。』『云何が菩薩、如實に佛身を觀ずとするや。』『如實に法身を觀ずるが故に。是を菩薩、八地の中に住し、五法を具足すと爲す。』『云何が菩薩上下諸根を知るとするや。』『菩薩、佛の十力に住し、一切衆生の上下諸根を知る。』『云何が菩薩、佛國土を淨むとするや。』『衆生を淨むるが故に。』『云何が菩薩如幻三昧とするや。』『是三昧に住し、能く一切事を成辦し、亦心相を生ぜざるが故に。』『云何が菩薩、常に三昧に入るとするや。』『菩薩報生三昧を得るが故に。』『云何が菩薩、衆生所應の善根に隨て身を受くとするや。』『菩薩衆生の善根を生ずべき所を知りて、爲に身を受けて衆生を成就するが故に。是を菩薩、八地の中に住

し、五法を具足すと爲す。』
(一〇)『云何が菩薩、無邊の世界、度する所の分を受くとするや。』『十方無量世界の中の衆生、諸佛法度すべき所の者の如く、而も之を度脱す。』『云何が菩薩、所願の如きを得とするや。』『六波羅蜜を具足することを得るが故に。』『云何が菩薩、諸天龍、夜叉、揵闥婆の語を知るとするや。』『辭辯力の故に。』『云何が菩薩、胎生成就すとするや。』『菩薩世世常に化生するが故に。』『云何が菩薩家成就すとするや。』『常に大家に在りて生ずるが故に。』『云何が菩薩所生成就すとするや。』『若は刹利の家に生じ、若は婆羅門の家に生ずるが故に。』『云何が菩薩、姓成就すとするや。』『過去の菩薩所生の姓の如く、此中より生ずるが故に。』『云何が菩薩、眷屬成就すとするや。』『純ら諸の菩薩摩訶薩、眷屬たるが故に。』『云何が菩薩、出生成就すとするや。』『生ずる時、光明徧く無量無邊の世界を照し、亦相を取らざるが故に。』『云何が菩薩、出家成就すとするや。』『出家の時、無量百千億の諸天侍從出家す、是一切衆生必ず三乘に至る。』『云何が菩薩、莊嚴佛樹成就すとするや。』『是菩提樹黄金を以て根と爲し、七寶を莖節枝葉と爲し、莖節枝葉の光明、徧く十方阿僧祇三千大千世界を照す。』『云何が菩薩、一切の諸善功德成滿具足すとするや。』『菩薩衆生清淨なれば、佛國も亦淨きことを得。是を菩薩。九地の中に住し、十二法を具足すと爲す。』
(一一)『云何が菩薩、十地の中に住し、當に知るべし、佛の如しといふや。』『若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜、四念處、乃至十八不共法を具足し、一切種智具足し滿じて、一切煩惱及び習を

【大悲】悲に衆生縁法縁無縁の三ある中無縁の大悲を說くを具足といふ所謂法性空乃至實相空これなり。

【無生忍】無生滅の諸法實相に於て信受通達無礙不退なるをいふ。

【無生智】初を忍と名け後を智といふ。

【憶想を轉ず】内心の憶想を破りて諸法を分別す。

【見を轉ず】先に我見邊見等を轉じて後道に入り、法見涅槃見を轉ず。而して二乘見を轉じて佛道に趣くなり。

【煩惱を轉ず】福德持戒力を以て麁煩惱を折伏するも愛等の細煩惱あるを離るるなり。即ち實智慧を以て煩惱即實相と觀ず。

【定慧地】初三地は慧多く定少く、後三地は定多く慧

斷ず。是を菩薩摩訶薩、十地の中に住し、當に知るべし、佛の如しと爲す。須菩提、菩薩摩訶薩、是十地の中に住し、方便力を以ての故に、六波羅蜜を行じ、四念處、乃至十八不共法を行じ、乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支佛地、菩薩地を過ぎ、是空地を過ぎ、佛地に住す。是を菩薩の十地と爲す。是の如く須菩提、是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。』

出到品第二十一

〔一〕佛須菩提に告げたまはく『汝が問ふ所、是乘何處に出で、何處に至て住するかとは。佛言はく、「是乘三界の中より出で薩婆若の中に至て住す、不二の法を以ての故に。何を以ての故に、摩訶衍と薩婆若と是二法倶に合せず散せず、色無く、形無く、對無く、一相所謂無相なればなり。若し人實際をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人如、法性、不可思議性をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人色空をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人受想行識空をして出でしめんと欲せば、是人無想法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、須菩提、色空の相三界を出でず、亦薩婆若に住せず。受想行識空の相三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。色色相

少し。故に菩薩に入らず、今二空位による定慧等しき故に安隱に菩薩道を行じ、阿惟越致地より漸次に一切種智を得。

【心寂滅】涅槃の爲の故に先づ五欲の中にて五情を制し、今七地に住して意情寂滅なり。

【六塵を捨つ】六塵中捨心を以て好惡相を取らず。

【九】八地中の五法を釋す。

【心數法】心所法即ち心王に附隨して起る種種の精神作用。

【如實に佛身を觀ず】諸佛の身を觀ずること幻化の如く五衆十二入等の攝に非ず、若は長若は短等衆生先世の業因緣に隨ふ。

【法身を觀ず】是れ佛を見るとなす法身とは不可得法空なり。諸因緣邊生の故に。

【佛國土を淨む】淨に二種あり。一に菩薩自ら其身を淨め、二は衆生心を淨めて清淨道を行ぜしむ。【如幻三昧】幻人一處に住して所作し、幻事世界に遍滿するが如く、菩薩この三昧中に住して十方に變化し布施教化す。【報生三昧】果報得の定なれば色を見るも心力を用ゐざるが如し。【十二】九地の十二法を釋す。【諸天龍乃至語言を知る】富德智慧具足して所願意の如き故他人の種種語を知る、又宿命智清淨の故に乃至佛の四無礙智を學する故に衆生の語言音聲を知るなり、【姓成就】七佛中初三は憍陳如を姓とし乃至釋迦は瞿曇を姓とする中に生ずるの類。

空、受想行識識相空の故に。若し人眼空をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人耳鼻舌身意空をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、乃至意觸因緣生の受空をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、須菩提、眼空三界を出でず亦薩婆若に住せず、乃至意觸因緣生の受空三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。眼眼相空、乃至意觸因緣生の受、意觸因緣生の受相空の故に。若し人夢をして出でしめんと欲せば、是人無想法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、幻鏡響影化をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、須菩提、夢相三界を出でず、亦薩婆若に住せず。幻鏡響影化相も亦三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。須菩提、若し人、檀那波羅蜜をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、檀那波羅蜜相三界を出でず、亦薩婆若に住せず。尸羅波羅蜜乃至般若波羅蜜三界を出でず、亦薩婆若に住せず。所以は何ぞや。檀那波羅蜜檀那波羅蜜相空、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜般若波羅蜜相空の故に。若し人內空をして出で、乃至無法有法空をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、須菩提、內空相乃至無法有法空相三界を出でず、

【二】十地の功德を釋す。

【習】煩惱の餘習。

【乾慧地】共の十地なり。前說。

【出到品】前第十八品の問に答へて何處に出、何處にて到るかを示す。

【一】出到を辨じ三界を出で一切智に到るとす。而も空無相なれば實には出到の相を取るべきものなきを明す。

【合せず散せず等】大乘薩婆若の二法は不一の故合せず、不異の故散ぜず、六情の所知は畢く虛妄の故無色無形無對一相なり。

【無相法等】無相法に出入なし、是を出でしめんとするは狂想なり。

【不可思議性】法性實際なり。又實際涅槃を過ぎて諸法の實を求め有無を思議すべからざるをいひ、又一切佛法ともいふ。

亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。內空、內空性空、乃至無法有法空、無法有法空性空の故に。若し人四念處をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、四念處性三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。四念處性、四念處性空の故に。若し人四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、八聖道分性三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。八聖道分、八聖道分性空の故に。乃至十八不共法も亦是の如し。須菩提、若し人阿羅漢をして生處を出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人辟支佛をして生處を出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀をして生處を出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、阿羅漢性、辟支佛性、佛性三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所何は何ぞや。阿羅漢性、阿羅漢性空、辟支佛性、辟支佛性空、佛性、佛性空の故に。若し須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、佛道、一切種智をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。上に說くが如し。若し人名字假名施設相、但だ語言有りて出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、名字空三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。名字相、名字相空の故に。乃至施設も亦是の如し。是人不生不滅法、不垢

【内空性空】内法の空なりとする性も亦空なり。

【二】大乘は無住の住たるを明す。一切智に至り住すといふも定住なければなり。

【三】十八品に問へる能乘者に答へ實に乘者なきを述ぶ。

【是の乘等】乘は六度、法は慈悲方便等、出は菩薩、是の三法皆空なり。

【畢竟淨】性空の故に畢竟清淨なり。

不淨無作法をして出でしめんと欲せば、是人無相法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、不生乃至無作法性三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。不生性乃至無作性性空の故に。須菩提、是因緣を以ての故に、摩訶衍三界の中より出でゝ、薩婆若の中に至つて住す、不動の故に。

(二)須菩提、汝が所問、是乘何處に住すとは、須菩提、是大乘住處無し。何を以ての故に、一切法住相無きが故に。是乘若し住するも法住に住せず。須菩提、譬へば法性の生ならず、滅ならず、垢ならず、淨ならず、相無く、作無く、住に非ず、不住に非ざるが如く、須菩提、是乘も亦是の如し。住に非ず、不住に非ず。何を以ての故に、法性の相、住に非らず、不住に非ざればなり。所以は何ぞや。法性、相性、空の故に、乃至無作性、無作性空の故に。諸餘の法も亦是の如し。須菩提、是因緣を以ての故に、是乘住處無し、不住法、不動法を以ての故に。

(三)須菩提、汝が問ふ所、誰か當に是乘に乘じて出づべき者ぞとは、人是乘に乘じて出づる者有る無し。何を以ての故に、是乘及び出づる者、用ふる所の法、及び出づる時、是一切法皆所有無し。若し一切法所有無くんば、何等の法を用て出づべけん。何を以ての故に、我れ得べからず、乃至知者見者得べからず、畢竟淨の故に。不可思議性得べからず、畢竟淨の故に。陰入界得べからず、畢竟淨の故に。檀那波羅蜜得べからず、畢竟淨の故に。乃至般若波羅蜜も得べからず、畢竟淨の故に。内空得べからず、畢竟淨の故に。

【得べからざるが故に等】不可得法あり智少き故得る能はざると、大得智推求あつて得る能はざるとの二種あり。今法無の故に不可得なり。

乃至無法有法空も得べからず、畢竟淨の故に。四念處得べからず、乃至十八不共法も得べからず、畢竟淨の故に。須陀洹得べからず、乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛も得べからず、畢竟淨の故に。不生不滅不垢不淨無起無作得べからず、畢竟淨の故に。過去世未來世現在世、生住滅得べからず、畢竟淨の故に。増減得べからず、畢竟淨の故に。何の法得べからざるが故に得べからずとするか、法性得べからざるが故に得べからずとす。如、實際、不可思議性、法性、法位、檀那波羅蜜得べからざるが故に得べからずとし、乃至般若波羅蜜も得べからざるが故に得べからずとす。內空得べからざるが故に得べからずとし、乃至無法有法空も得べからざるが故に得べからずとす。四念處得べからざるが故に得べからずとし、乃至十八不共法も得べからざるが故に得べからずとす。須陀洹得べからざるが故に、乃至佛も得べからざるが故に得べからずとし、須陀洹果得べからざるが故に得べからずとし、乃至佛道も得べからざるが故に得べからずとす。不生不滅、乃至不起、不作も得べからざるが故に得べからずとす。復次に須菩提、初地得べからざるが故に得べからずとし、乃至第十地も得べからざるが故に得べからずとす、畢竟淨の故に。云何が初地乃至十地と爲す。所謂乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支佛地、菩薩地、佛地なり。內空の中初地得べからず、乃至無法有法空の中、初地得べからず、乃至無法有法空の中、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十地得べからず、

何を以ての故に、須菩提、初地得に非ず、不得に非ず、乃至十地得に非らず、不得に非ず、畢竟淨の故に。內空乃至無法有法空の中、成就衆生得べからず、畢竟淨の故に。內空乃至無法有法空の中、淨佛國土得べからず、畢竟淨の故に。內空乃至無法有法空の中、五眼得べからず、畢竟淨の故に。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、一切諸法不可得なるを以ての故に、是摩訶衍に乘じて、三界を出で薩婆若に住す。」

【勝出品】大乘の一切世間等に勝出することを明す。

【一】須菩提先きに五事を以て大乘を問ひ佛答を得、今大乘の力勢廣大を讃歎す。佛更に大乘義を說き給ふ。

勝出品第二十二

（一）慧命須菩提佛に白して言さく「世尊、摩訶衍、摩訶衍とは一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。世尊、是摩訶衍、虛空と等し、虛空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くる如く、摩訶衍も亦是の如く無量無邊阿僧祇の衆生を受く。世尊、是摩訶衍、來處を見ず、去處を見ず、住處を見ず。是摩訶衍、前際も得べからず、後際も得べからず、中際も得べからず、三世等しく是れ摩訶衍なり。世尊、是を以ての故に、是乘を摩訶衍と名く。」佛須菩提に告げたまはく「是の如く是の如し、菩薩摩訶薩摩訶衍とは、謂ゆる六波羅蜜にして、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜なり。是を菩薩摩訶薩摩訶衍と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩摩訶衍とは、一切陀羅尼門、一切三昧門なり。謂ゆる首楞嚴三昧乃至離著虛空不染三昧なり。是を菩薩摩訶薩摩訶衍と名く。復次

【二】諸法無常なるを以て大乘の勝出せるを說く。

に須菩提、菩薩摩訶薩摩訶衍とは、謂ゆる內空乃至無法有法空なり。是を菩薩摩訶薩摩訶衍と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩摩訶衍とは、謂ゆる四念處乃至十八不共法なり。是を菩薩摩訶薩摩訶衍と名く。

(三)須菩提、言ふ所の如く、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し欲界に實、不虛妄、不異諦、不顚倒有るべく、常、不壞相、非無法有るべくんば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。須菩提、欲界は虛妄憶想分別和合名字等に一切無常想無法有るを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、色界無色界、若し實、不虛妄、不異諦、不顚倒有るべく、常、不壞相、非無法有るべくんば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。須菩提、色界無色界は虛妄憶想分別和合名字等に一切無常破壞相無法有るを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し色に實、不虛妄、不異諦、不顚倒有るべく、常、不壞相、非無法有るべくんば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。須菩提、色は虛妄憶想分別和合名字等に一切無常破壞相無法有るを以て、是を以ての故に是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。受想行識も亦是の如し。須菩提、若し眼乃至意、色乃至法、眼識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因緣生の受乃至意觸因緣生の受、若し實、不虛妄、不異諦、不顚倒有るべく常、不壞相、非無法有るべくんば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能

【三】現象法のみならず、法性等も法の有とすべきなれば、これを無しとすれば、大乗勝れたるを說く。【無爲】無爲空の故に無と無といふ。

はざるなり。須菩提、眼乃至意觸因緣生の受は虛妄憶想分別和合名字等に一切無常破壞相無法有るを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。

(三)須菩提、若し法性、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。須菩提、法性法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し如、實際、不可思議性、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。須菩提、如、實際、不可思議性法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し檀那波羅蜜、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。檀那波羅蜜法非法無きを以て是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。若し尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。尸羅波羅蜜乃至般若波羅蜜法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提若し內空乃至無法有法空、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。內空乃至無法有法空、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し四念處乃至十八不共法、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざ

【性人法】性地の人法を云ふ。先きに一般に人空に就て說く。
【八人法等】第三八忍地以下の諸地をいふ。
【道場】成等正覺をいふ。

るなり。四念處乃至十八不共法、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し性人法、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。性人法、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し八人法、須陀洹法、斯陀含法、阿那含法、阿羅漢法、辟支佛法、佛法、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。八人法乃至佛法、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し性地人、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。性地人、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し八人法須陀洹乃至佛、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。八人乃至佛法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し一切世間及び諸天人阿修羅、是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。一切世間及び諸天人阿修羅、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し菩薩摩訶薩、初發心從り乃至道場まで、其中間の諸心に於て、若し是れ有法にして無法に非ずば、是摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。菩薩初發心より乃至道場まで

【金剛の如き慧】菩薩最後心の勝慧。根本我を破摧するもの。

【六十種の莊嚴音聲】寶積、秘密大乘等の諸經に潤澤、柔軟、悅意、乃至諸相具足の妙音六十ありといふ。

其中間の諸心に於て、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し菩薩摩訶薩、金剛の如き慧、是れ有法にして無法に非ずば、是菩薩摩訶薩、一切の結使及び習、法非法無きを知り、一切種智を得る能はざるなり。須菩提、菩薩摩訶薩、金剛の如き慧は法非法無きを以て、是故に菩薩は、一切の結使及び習、法非法無く、一切種智を得るを知る。是を以ての故に摩訶衍は一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し諸佛の三十二相、是れ有法にして無法に非ずば、諸佛の威德照然、一切世間及び諸天人阿修羅に勝出する能はざるなり。須菩提、諸佛の三十二相は法非法無きを以て、是を以ての故に諸佛の威德照然、一切世間及び諸天人阿修羅に勝出す。須菩提、若し諸佛の光明、是れ有法にして無法に非ずば、諸佛の光明は普く如恒河沙等の國土を照すこと能はざるなり。須菩提、諸佛の光明は法非法無きを以て、是を以ての故に諸佛は能く光明を以て普く如恒河沙等の國土を照す。須菩提、若し諸佛の六十種の莊嚴音聲、是れ有法にして無法に非ずば、諸佛六十種の莊嚴音聲を以て、徧く十方無量阿僧祇の國土に至ること能はざるなり。須菩提、諸佛の六十種の莊嚴音聲、法非法無きを以て、是を以ての故に諸佛は能く六十種の莊嚴音聲を以て、徧く十方無量阿僧祇の國土に至る。須菩提、諸佛の法輪、若し是れ有法にして無法に非ざるべくば、諸佛は法輪を轉ずること能はざるべく、諸の沙門婆羅門、若は天若は魔、若は梵及び世間の餘衆、法の如く轉ずること能はざる所の者ならんや。須菩提、諸佛の法輪法非法無きを以て、是を

以ての故に諸佛は法輪を轉ず、諸の沙門婆羅門、若は天若は魔、若は梵及び世間の餘衆は法の如く轉ずること能はざる所の者なり。須菩提、諸佛は衆生の爲に法輪を轉ず、是衆生若し實に有法にして無法に非ずば、是衆生をして無餘涅槃に於て般涅槃せしむる能はざるなり。須菩提、諸佛衆生の爲に法輪を轉ずるに、是衆生法非法無きを以て、是を以ての故に能く衆生をして無餘涅槃の中に於て、已に滅し、今滅し當に滅すべからしむ。」

【等空品】大論に含受品といふ。大乘虚空に等しきを說くにより等空と名く。
【一】前品に須菩提大乘虚空に等しと說くを印可し廣く說す。
【衍】摩訶衍の略。

等空品第二十三

(一)佛須菩提に告げたまはく「汝が言ふ所の衍と空と等しきこと、是の如く、是の如し。須菩提、摩訶衍は虚空と等し。須菩提、虚空に東方無く南方西方北方四維上下無きが如く、須菩提、摩訶衍も亦是の如く、東方無く南方西方北方四維上下無し。須菩提、虚空の長に非ず短に非ず方に非ず圓に非ざるが如く、須菩提、摩訶衍も亦是の如く、長に非ず短に非ず方に非ず圓に非ず。須菩提虚空の青に非ず黄に非ず赤に非ず白に非ず黑に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、青に非ず黄に非ず赤に非ず白に非ず黑に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、虚空の過去に非ず未來に非ず現在に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、過去に非ず未來に非ず現在に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、虚空の增せず減せざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、亦增せず亦減せず。

【已辨地】已作地に同じ。十地の第七地。三界見思の惑を斷じて、斷惑すでに成じたるに名く。

【乾慧地】十地の第一位。四念處を修して智深けれど、未だ法性の理を證得せざるに名く。

須菩提、虛空の垢無く淨無きが如く、摩訶衍も亦是の如く、垢無く淨無し。須菩提、虛空の生無く滅無く、住無く異無きが如く、摩訶衍も亦是の如く、生無く滅無く、住無く異無し。須菩提、虛空の善に非ず不善に非ず、記に非ず無記に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、善に非ず不善に非ず、記に非ず無記に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。虛空の見無く聞無く、覺無く識無きが如く、摩訶衍も亦是の如く、見無く聞無く、覺無く識無し。虛空の知る可からず識る可からず、見る可からず斷つ可からず、證す可からず修す可からざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、知る可からず識る可からず、見る可からず斷つ可からず、證す可からず修す可からず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。虛空の染相に非ず離相に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、染相に非ず離相に非ず。虛空の欲界に繫せず、色界に繫せず無色界に繫せざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、欲界に繫せず色界に繫せず無色界に繫せず。虛空の初發心無く、亦二三四五六七八九第十心無きが如く、摩訶衍も亦是の如く、初發心無く乃至第十心無し。虛空の乾慧地、性人地、八人地、見地、薄地、離欲地、已作地無きが如く、摩訶衍も亦是の如く、乾慧地、乃至已辨地無し。虛空の須陀洹果無く、斯陀含果無く、阿那含果無く、阿羅漢果無きが如く、摩訶衍も亦是の如く、須陀洹果無く、乃至阿羅漢果無し。虛空の聲聞地無く、辟支佛地無く、佛地無きが如く、摩訶衍も亦是の如く、聲聞地無く、乃至佛地無し。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。虛空の色に非ず無色に非ず、可見に非ず不可見に非ず、有對に非

【性人地】十地中第二位。少しく法性の理を得て見惑思惑を伏する故に名く。

【八人地】十地の第三位。三界の見惑は本來空なりと證り、八忍を具足したる位。

【見地】十地の第四位。三界の見惑を斷盡し、明に無生の四諦の理を見る位。

【薄地】十地中第五位。欲界九品の思惑中前六品を斷じて、殘りの三品薄少なるに名く。

【離欲地】十地の第六位。欲界九品の惑を斷じ盡す。

【二】第廿品に須菩提の云へる大空の含受する如く大乘亦然ることを印可し廣說す。

ず無對に非ず、合に非ず散に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、色に非ず無色に非ず、可見に非ず不可見に非ず、有對に非ず無對に非ず、合に非ず散に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、虛空の常に非ず無常に非ず、樂に非ず苦に非ず、我に非ず無我に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、常に非ず無常に非ず、樂に非ず苦に非ず、我に非ず無我に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、虛空の空に非ず不空に非ず、相に非ず無相に非ず、作に非ず無作に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、空に非ず不空に非ず、相に非ず無相に非ず、作に非ず無作に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、虛空の寂滅に非ず不寂滅に非ず、離に非ず不離に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、寂滅に非ず不寂滅に非ず、離に非ず不離に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、虛空の闇に非ず明に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、闇に非ず明に非ず。是を以ての故に。摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、虛空の可得に非ず不可得に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、可得に非ず不可得に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、虛空の可說に非ず不可說に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如く、可說に非ず不可說に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說く。須菩提、是諸の因緣を以ての故に、摩訶衍と空と等しと說くなり。

(二)須菩提、汝が言ふ所の如く、虛空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、摩訶衍も亦無量無邊阿僧祇の衆生を受くること、是の如く是の如し。須菩提、衆生有ること無きが故

に、當に知るべし虛空有ること無しと。虛空有ること無きが故に、當に知るべし摩訶衍も亦有ること無しと。是因緣を以ての故に、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、是衆生、虛空、摩訶衍、是法は皆不可得の故に。復次に須菩提、摩訶衍所有無きが故に、當に知るべし阿僧祇所有無しと。阿僧祇所有無きが故に。當に知るべし無量所有無しと。無量所有無きが故に、當に知るべし無邊所有無しと。無邊所有無きが故に、當に知るべし一切諸法所有無しと。是因緣を以ての故に、須菩提、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、是衆生、虛空、摩訶衍、阿僧祇、無量、無邊、是一切法不可得の故に。復次に須菩提、我、所有無く、乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし如、法性、實際、所有無しと。如、法性、實際、所有無きが故に、當に知るべし乃至無量無邊阿僧祇所有無しと。無量無邊阿僧祇所有無きが故に、當に知るべし一切法所有無しと。是因緣を以ての故に、須菩提、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、是衆生、乃至知者見者、實際乃至無量無邊阿僧祇、是一切法不可得の故に。復次に須菩提、我所有無く、乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし不可思議性所有無しと。不可思議性所有無きが故に、當に知るべし色受想行識所有無しと。色受想行識所有無きが故に、當に知るべし虛空所有無しと。虛空所有無きが故に、當に知るべし摩訶衍所有無しと。摩訶衍所有無きが故に、當に知るべし阿僧祇所有無しと。阿僧祇所有無きが故に、當に知るべし無量所有無しと。無量所有無きが故に、當に知るべし無邊所有無しと。無邊所有無きが故に、

當に知るべし一切諸法所有無しと。是因緣を以ての故に、須菩提、當に知るべし是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受くと。何を以ての故に、須菩提、我乃至知所見者等の一切法皆不可得の故に。復次に須菩提、我所有無く、乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし眼所有無く、耳鼻舌身意所有無し。眼乃至意所有無きが故に、當に知るべし虛空所有無しと。虛空所有無きが故に、當に知るべし摩訶衍所有無しと。摩訶衍所有無きが故に、當に知るべし阿僧祇所有無しと。阿僧祇所有無きが故に、當に知るべし無量所有無しと。無量所有無きが故に當に知るべし無邊所有無しと。無邊所有無きが故に、當に知るべし一切諸法所有無しと。是因緣を以ての故に、須菩提、我乃至一切諸法、皆不可得の故に。復次に須菩提、我所有無く、乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし檀那波羅蜜所有無く、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜所有無しと。般若波羅蜜所有無きが故に、當に知るべし虛空所有無しと。虛空所有無きが故に、當に知るべし摩訶衍所有無しと。摩訶衍所有無きが故に、當に知るべし無量無邊阿僧祇所有無しと。是因緣を以ての故に、須菩提、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、我衆生乃至一切諸法、皆不可得の故に。復次に須菩提、我所有無く、乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし內空所有無く、乃至無法有法空所有無しと。無法有法空所有無きが故に、當に知るべし虛空所有無しと。虛空所有無きが故に、當に知るべし摩訶衍所有無しと。摩訶衍所有無きが故に、當に知るべし阿僧祇無量無邊所有無しと。阿僧祇無量無邊所有無きが

故に、當に知るべし一切諸法所有無しと。是因緣を以ての故に、須菩提、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の業生を受く。何を以ての故に、我業生乃至一切諸法、皆不可得の故に。復次に須菩提、我業生乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし四念處所有無しと。四念處所有無きが故に、乃至十八不共法所有無し。十八不共法所有無きが故に、當に知るべし虛空所有無しと。虛空所有無きが故に、當に知るべし摩訶衍所有無しと。摩訶衍所有無きが故に、當に知るべし阿僧祇無量無邊所有無しと。阿僧祇無量無邊所有無きが故に、當に知るべし一切諸法所有無しと。是因緣を以ての故に、須菩提、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の業生を受く。何を以ての故に、我業生乃至一切諸法皆不可得の故に。復次に須菩提、我業生所有無く乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし性地所有無く、乃至已作地所有無しと。已作地所有無きが故に、當に知るべし虛空所有無しと。虛空所有無きが故に、當に知るべし摩訶衍所有無しと、摩訶衍所有無きが故に、當に知るべし阿僧祇無量無邊所有無しと、阿僧祇無量無邊所有無きが故に、當に知るべし一切諸法所有無しと。是因緣を以ての故に、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の業生を受く。何を以ての故に、我業生乃至一切諸法皆不可得の故に。復次に須菩提、我業生乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし須陀洹所有無しと。須陀洹所有無きが故に、當に知るべし斯陀含所有無しと。斯陀含所有無きが故に、當に知るべし阿那含所有無しと。阿那含所有無きが故に、當に知るべし阿羅漢所有無しと。阿羅漢所有無きが故に、當に知るべし乃至一切諸法所有無しと。是因緣を以て

【三】第廿二品に須菩提のいへる來處を見ず等の說を印可して更に廣說す。

の故に、須菩提、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、須菩提、我乃至一切諸法皆不可得の故に。復次に須菩提、我乃至知者見者所有無きが故に、當に知るべし聲聞乘所有無しと。聲聞乘所有無きが故に、當に知るべし辟支佛乘所有無しと。辟支佛乘所有無きが故に、當に知るべし佛乘所有無しと。佛乘所有無きが故に、當に知るべし聲聞人所有無しと。聲聞人所有無きが故に、當に知るべし須陀洹所有無しと。須陀洹所有無きが故に、乃至佛所有無しと。佛所有無きが故に、當に知るべし一切種智所有無しと。一切種智所有無きが故に、當に知るべし虛空所有無しと。虛空所有無きが故に、當に知るべし摩訶衍所有無しと。摩訶衍所有無きが故に、當に知るべし乃至一切諸法所有無しと。是因緣を以ての故に、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、我乃至一切諸法皆不可得の故に。須菩提、譬へば涅槃性中に無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、是摩訶衍も亦無量無邊阿僧祇の衆生を受く。是因緣を以ての故に、須菩提、虛空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、是摩訶衍も亦是の如く、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。

(三)須菩提、汝が言ふ所の是摩訶衍來處を見ず、去處を見ず、住處を見ずとのこと、是の如く是の如し。須菩提、是摩訶衍來處を見ず、去處を見ず、住處を見ず。何を以ての故に、須菩提、一切諸法不動相なるが故に。是法來處無く、去處無く、住處無し。何を以ての故に。須菩提、色從來する所無く、亦去る處無く、亦住する所も無し。受想行識從來する所

【一切諸法不動相】一切法は來無く去なく住なく、實相不動の故に。廣說せば一切佛法中に我無く衆生無く乃至知者見者無し故に來者去者なく、これ無き故來去の相もなく、復三世中に去相を求むるも不可得なり。何者、已法の中に去なく未去の中にも去なく、已去未已を離るる去時に亦去なければなり。

無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、色法從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し、受想行識法從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、色如從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。受想行識如從來する所無く、去る所無く、住する所も無し。須菩提、色性從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。受想行識性從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、色相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。受想行識相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、眼、眼法、眼如、眼性、眼相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。耳鼻舌身意、意法、意如、意性、意相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。色聲香味觸法も亦是の如し、須菩提、地種、地種法、地種如、地種性、地種相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し、水火風空識種、識種法、識種如、識種性、識種相も亦是の如し。須菩提、如、如法、如如、如性、如相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、實際、實際法、實際如、實際性、實際相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、不可思議、不可思議法、不可思議如、不可思議性、不可思議相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、檀那波羅蜜、檀那波羅蜜法、檀那波羅蜜如、檀那波羅蜜性、檀那波羅蜜相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、般若波羅蜜法、般若波羅蜜如、般若波羅蜜性、般若

【四】第廿二品須菩提の前後中の三際得べからずとの說を印可し廣說す【三世等等】三世平等を大乘とするも平等も亦空となり不可得なり。

波羅蜜相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、四念處、四念處法、四念處如、四念處性、四念處相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。乃至十八不共法も亦是の如し。須菩提、菩薩、菩薩法、菩薩如、菩薩性、菩薩相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。佛、佛法、佛如、佛性、佛相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提の法と如と性と相と從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、有爲法、有爲法法、有爲法如、有爲法性、有爲法相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。須菩提、無爲法、無爲法法、無爲法如、無爲法性、無爲法相從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所も無し。是因緣を以ての故に、須菩提、是摩訶衍の來處を見ず、去處を見ず、住處を見ず。

(四)須菩提、汝が言ふ所の是摩訶衍前際得べからず、後際得べからず、中際得べからず、是衍三世等しと名く、是を以ての故に、說て摩訶衍と名くとのこと、是の如く是の如し。須菩提、是摩訶衍前際得べからず、後際得べからず、中際得べからず、是衍三世等しと名く、是を以ての故に、說て摩訶衍と名く。何を以ての故に、須菩提、過去世は過去世空なり、未來世は未來世空なり、現在世は現在世空なり、三世等は三世等空なり、摩訶衍は摩訶衍空なり。菩薩は菩薩空なり。何を以ての故に、須菩提、是空は一に非ず二に非ず三に非ず四に非ず五に非ず異に非ず。是を以ての故に、說て三世等と名く。是れ菩薩摩訶薩の摩訶

【度欲界】色界を超越して色界を得たるに名く。【度色界】色界を超越し無色界をえたるに名く。【度無色界】三界の繫縛を離れ解脫せるをいふ。

衍なり。是衍の中に等不等の相不可得なるが故に、染不染不可得、瞋不瞋不可得、癡不癡不可得、慢不慢不可得、乃至一切善法不善法不可得なり。是衍の中に常不可得無常不可得、樂不可得苦不可得、實不可得空不可得、我不可得無我不可得、欲界不可得、色界不可得、無色界不可得、度欲界不可得、度色界不可得、度無色界不可得なり。何を以ての故に、是摩訶衍は自法不可得なるが故に。須菩提、過去の色は過去の色空、未來現在の色は未來現在の色空なり。過去の受想行識は過去の受想行識空、未來現在の受想行識は未來現在の受想行識空なり。空の中の過去の色不可得なり。何を以ての故に、空の中の空も亦不可得なり、何に況んや空の中の過去の色得べけんや。空の中の未來現在の色不可得なり。何を以ての故に、空の中の空も亦不可得なり、何に況んや空の中の未來現在の色得べけんや。空の中の過去の受想行識不可得なり。何を以ての故に、空の中の空も亦不可得なり、何に況んや空の中の過去の受想行識得べけんや。空の中の未來現在の受想行識不可得なり、何を以ての故に、空の中の空も亦不可得なり、何に況んや空の中の未來現在の受想行識得べけんや。須菩提、過去の檀那波羅蜜不可得、未來の檀那波羅蜜不可得、現在の檀那波羅蜜不可得なり、三世の等の中の檀那波羅蜜も亦不可得なり、何を以ての故に、等の中の過去世不可得、未來世不可得、現在世不可得なり、等の中の等も亦不可得なり、何に況んや等の中の過去世未來世現在世得べけんや。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜も亦是の如し。復次に須菩提、過去世の中の四念處不可得なり、乃至過去

世の中の十八不共法不可得なり。未來世現在世も亦是の如し。復次に須菩提、三世の等の中の四念處不可得、三世の等の中の乃至十八不共法も亦不可得なり。何を以ての故に、等の中の過去世の四念處不可得、等の中の未來世の四念處不可得、等の中の現在世の四念所不可得なり、乃至十八不共法も亦是の如し、等の中の等も亦不可得なり、何に況んや等の中の過去世の四念處、未來世現在世の四念處得べけんや。等の中の等も亦不可得なり。何に況んや等の中の過去世乃至十八不共法得べけんや。未來現在世乃至十八不共法も亦是の如し。復次に須菩提、過去世の凡夫人不可得、未來世現在世の中の凡夫人不可得なり、三世の等の中の凡夫人も亦不可得なり。何を以ての故に、衆生不可得、乃至知者見者不可得なるが故に、過去世の中の聲聞辟支佛菩薩佛不可得、未來世現在世の聲聞辟支佛菩薩佛不可得、三世の等の中の聲聞辟支佛菩薩佛不可得なり。何を以ての故に、衆生不可得乃至知者見者不可得なるが故に。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に住し、三世の等の相を學し、當に一切種智を具足すべし。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。謂ゆる三世の等の相の菩薩摩訶薩は是衍の中に住し、一切世間及び諸天人阿修羅に勝り、薩婆若を成就す。「爾時、須菩提、佛に白して言さく『世尊、善い哉善い哉、是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。何を以ての故に、過去の諸の菩薩摩訶薩は是衍の中に學して一切種智を得たり、未來の諸の菩薩摩訶薩も亦是衍の中に學し、當に一切種智を得べし。世尊、今十方無量阿僧祇國土の中の諸の菩薩摩訶薩も亦是衍の中に學して一切種智を得、是を以て

【如是、如是等】この印可の意は有るは因緣に染垢穢なしといひ、有るは好醜等は自ら時節至れば得といひ、有るは福德成就の故に佛道を得といひ、有るは淸淨實智慧を得れば佛道を得といひ、須菩提は是等を少因緣非因緣或は不具足の因緣として捨し具足の因緣を說き三世菩薩皆大乘を學して佛道を成ずとするを讚ずるにあり。

の故に、世尊、是衍は實に是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。』佛須菩提に告たまはく、『是の如く是の如し、過去未來現在の諸佛は、是摩訶衍の中に學し、已に一切種智を得、當に得べく、今得たり。』

【會宗品】十八品以來廣く大乘を說く、般若波羅蜜と名異に義一なるを示すを會宗といふ。

【一】富樓那は第十五品以下菩薩莊嚴を說く大乘と般若と一致することを疑はざるも、新學鈍根のために疑なからしめんとして問ひ、佛之を決す。

【二】佛答の意は須菩提の問に對し、その失なく般若に隨順せるをいひ、爲に隨順因緣を說くなり。卽ち三乘所攝の一切善法は皆合して般若波羅蜜の中にあり。何者一切三乘善法は皆涅槃たる故なればなり。

摩訶般若波羅蜜經　卷第七

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

會宗品第二十四

(一)爾時、慧命富樓那彌多羅尼子佛に白して言さく、『世尊、佛は須菩提をして諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說かしむ、今乃ち摩訶衍を說くことを爲すや。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、我れ摩訶衍を說き、將に般若波羅蜜を離るる無からんとせんや。』佛言はく、(二)『不、須菩提、汝摩訶衍を說く、般若波羅蜜に隨て般若波羅蜜を離れず。何を以ての故に、一切所有の善法、助道法、若は聲聞法、若は辟支佛法、若は菩薩法、若は佛法、是一切法皆般若波羅蜜の中に攝入すればなり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等か諸の善法助道法聲聞法辟支佛法菩薩法佛法、皆般若波羅蜜の中に攝入するや。』佛須菩提に告たまはく、『謂ゆる檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分、空無相無作解脫門、佛十力四無所畏四無閡智大慈大悲十八不共法、錯謬無く相常捨行なり。須菩提、是諸の餘の善法助道法、若は聲聞法、若は辟支佛法、若は菩薩法、若は佛法も皆般若波羅蜜の中に攝入す。

【一切所有】一切三乘の諸法をいふ。

【檀那波羅蜜等】檀那等六度は菩薩法、四念處三十七道品三解脫門は三乘共法、十力乃至常捨行は佛法なり。

【相常捨行】或は恒住捨性といふ、或は一心恒に法を失はざるなり。

【十無品】上に菩薩人も菩薩名字も不可得とするも、今十種廣く分別して、菩薩不可得を明す、故に十無といふ。

須菩提、若は菩薩摩訶薩の摩訶衍、若は般若波羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜、若は色受想行識、眼色眼識、眼觸眼觸因緣生の諸受、乃至意法意識、意觸意觸因緣生の諸受、地種乃至識種、四念處乃至八聖道分、空無相無作解脫門及び諸〻の善法、若は有漏若は無漏、若は有爲若は無爲、若は苦諦集諦滅諦道諦、若は欲界若は色界若は無色界、若は內空乃至無法有法空、諸三昧門、諸陀羅尼門、佛十力乃至十八不共法、若は佛法、佛法性、如、實際、不可思議性、涅槃、是一切諸法皆合せず散ぜず、色無く形無く、對無く閡無く等無く一相謂ゆる無相なり。須菩提、此因緣を以ての故に、汝の說く所の摩訶衍は般若波羅蜜に隨順す。何を以ての故に、須菩提、摩訶衍は般若波羅蜜に異ならず、般若波羅蜜は摩訶衍に異ならず、般若波羅蜜と摩訶衍とは二無く別無し。檀那波羅蜜は摩訶衍に異ならず、摩訶衍は檀那波羅蜜に異ならず、檀那波羅蜜と摩訶衍とは二無く別無し。乃至禪那波羅蜜も亦是の如し。須菩提、四念處は摩訶衍に異ならず、摩訶衍は四念處に異ならず、四念處と摩訶衍とは二無く別無し。乃至十八不共法も摩訶衍に異ならず、摩訶衍は十八不共法に異ならず、十八不共法と摩訶衍とは二無く別無し。此因緣を以ての故に、須菩提、汝の摩訶衍を說くは即ち是れ般若波羅蜜を說くなり。」

十無品第二十五

【一】菩薩無邊不可得なれば爲に說くべき菩薩なきを示すに三際不可得等の十を以てす。

【一切種】一門乃至無量門一切の法差別なり。

【何等の色】一切の諸色法。

【二】舍利弗十種分別の因緣を問ふ。

〔一〕慧命須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩前際得べからず、後際得べからず、中際得べからざるなり。色無邊の故に、當に知るべし菩薩摩訶薩も亦無邊なりと。受想行識無邊の故に、當に知るべし菩薩摩訶薩も亦無邊なりと。色は是れ菩薩摩訶薩、是も亦得べからず。受想行識は是れ菩薩摩訶薩、是も亦得べからず。是の如く世尊、一切種一切處に於て、菩薩を求むるも得べからず。世尊、我れ當に何等の菩薩摩訶薩に般若波羅蜜を敎ふべきか。世尊、菩薩摩訶薩は但だ名字あるのみ、我の名字を說くも我は畢竟生ぜざるが如く、我の如く、諸法も亦是の如く自性無し。何等の色も畢竟生ぜず、何等の受想行識も畢竟生ぜず。世尊、是れ畢竟生ぜずば、名けて色と爲さず。是れ畢竟生ぜずば、名けて受想行識と爲さず。世尊、若し畢竟不生の法ならば、當に是般若波羅蜜を敎ふべけんや。畢竟不生を離れて亦菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行ずる無し。若し菩薩是說を作すを聞き、心沒せず悔いず驚かず怖かず畏れずば、當に知るべし是菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜を行じたりと。』

〔二〕舍利弗須菩提に問はく、『何の因緣の故に、菩薩摩訶薩の前際得べからず、後際得べからず、中際得べからずと言ふや。須菩提、何の因緣の故に、色無邊の故に、當に知るべし菩薩も亦無邊なり。受想行識無邊の故に、當に知るべし菩薩も亦無邊なりと言ふや。須菩提、何の因緣の故に、色は是れ菩薩、是も亦得べからず、受想行識は是れ菩薩、是も亦得べからずと言ふや。須菩提、何の因緣の故に、一切種一切處に於て、菩薩得べからず、當に何等

【三】須菩提十種分別中、第一、三際不可得を明す。

の菩薩に般若波羅蜜を教ふべきと言ふや。須菩提、何の因緣の故に、菩薩摩訶薩は但だ名字あるのみと言ふや。須菩提、何の因緣の故に、我の名字を說くも我は畢竟生ぜざるが如く、我の如く諸法も亦是の如く自性無し、何等の色か畢竟生ぜず、何等の受想行識も畢竟生ぜずと言ふや。須菩提何の因緣の故に、畢竟生ぜずば名けて色と爲さず、畢竟生ぜずば名けて受想行識と爲さずと言ふや。須菩提、何の因緣の故に、若し畢竟不生の法ならば、當に是般若波羅蜜を教ふべけんやと言ふや。須菩提、何の因緣の故に、畢竟不生を離れて亦菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行ずること無しと言ふや。須菩提、何の因緣の故に、若し菩薩是說を作すを聞きて心沒せず悔いず驚かず怖かず畏れず、若し能く是の如く行ぜば、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行じたりと名くと言ふや。」

(三)爾時、須菩提舍利弗に報じて言はく、『衆生有ること無きが故に、菩薩の前際得べからず。衆生空の故に、菩薩の前際得べからず。衆生離の故に、菩薩の前際得べからず。舍利弗、色有ること無きが故に、菩薩の前際得べからず。受想行識有ること無きが故に、菩薩の前際得べからず。色空の故に、菩薩の前際得べからず。受想行識空の故に、菩薩の前際得べからず。色離の故に、菩薩の前際得べからず。受想行識離の故に、菩薩の前際得べからず。舍利弗、色の性無きが故に、菩薩の前際得べからず。受想行識の性無きが故に、菩薩の前際得べからず。舍利弗、檀那波羅蜜有ること無きが故に、菩薩の前際得べからず。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜有ること無きが故に、菩薩の

前際得べからず。何を以ての故に、舍利弗、空の中に前際得べからず、後際得べからず。中際得べからず。空は菩薩に異ならず、菩薩は前際に異ならず。舍利弗、空と菩薩と前際と是諸法二無く別無し。是因緣を以ての故に、舍利弗菩薩の前際得べからず。舍利弗、檀那波羅蜜空の故に、檀那波羅蜜離の故に、檀那波羅蜜性無きが故に、菩薩の前際得べからず。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜空の故に、般若波羅蜜離の故に、般若波羅蜜性無きが故に、菩薩の前際得べからず。何を以ての故に、舍利弗、空の中に前際得べからず、後際得べからず、中際得べからず。空は菩薩に異ならず、亦前際に異ならず。舍利弗、空と菩薩と前際と二無く別無し。是因緣を以ての故に、舍利弗、菩薩の前際得べからず。復次に舍利弗、內空所有無きが故に、菩薩の前際得べからず。乃至無法有法空も所有無きが故に、菩薩の前際得べからず。內空空の故に、內空離の故に、內空性無きが故に、乃至無法有法空も空の故に、離の故に、性無きが故に、菩薩の前際得べからず。餘は上に說ける如し。復次に舍利弗、四念處所有無きが故に、菩薩の前際得べからず。四念處空の故に、離の故に、性無きが故に、菩薩の前際得べからず。乃至十八不共法も所有無きが故に、菩薩の前際得べからず。十八不共法空の故に、離の故に、性無きが故に、菩薩の前際得べからず。餘は上に說ける如し。是因緣を以ての故に、舍利弗、菩薩の前際得べからず。復次に舍利弗、一切三昧門一切陀羅尼門有ること無きが故に、菩薩の前際得べからず、三昧門陀羅尼門空の故に、離の故に、性無きが故に、菩薩の前際得べ

【四】十分別の第二色等諸法無邊にして菩薩も無邊なれば邊中不可得なるを明す。

からず。餘は上に說ける如し。復次に舍利弗、法性有ること無きが故に、菩薩の前際得べからず、法性空の故に、離の故に、性無きが故に、菩薩の前際得べからず。餘は上に說ける如し。復次に舍利弗、如有ること無きが故に、空の故に、離の故に性無きが故に、實際有ること無きが故に、空の故に、離の故に性無きが故に、不可思議性有ること無きが故に、空の故に、離の故に性無きが故に、菩薩の前際得べからず。餘は上に說ける如し。復次に舍利弗、聲聞有ること無きが故に、菩薩の前際得べからず。聲聞空の故に、離の故に性無きが故に、菩薩の前際得べからず。辟支佛有ること無きが故に、空の故に離の故に性無きが故に、菩薩の前際得べからず。佛有ること無きが故に、空の故に離の故に性無きが故に、菩薩の前際得べからず。阿耨多羅三藐三菩提有ること無きが故に、乃至性無きが故に、菩薩の前際得べからず。復次に、一切種智有ること無きが故に、乃至性無きが故に、菩薩の前際得べからず。何を以ての故に、舍利弗、空の前際得べからず、後際得べからず、中際得べからず、菩薩得べからず。舍利弗、空は菩薩に異ならず、菩薩は前際に異ならず、空と菩薩と前際と是諸法二無く別無し。是因緣を以ての故に、舍利弗、菩薩の前際得べからず、後際中際も亦是の如し。

(四)舍利弗の言ふ如く、色無邊の故に、當に知るべし菩薩も亦無邊なりと。受想行識無邊の故に、當に知るべし菩薩も亦無邊なりと。舍利弗、色は虛空の如く、受想行識は虛空の如し。何を以ての故に、舍利弗、虛空の邊得べからず、中得べからず、邊無く中無きが故に、

【五】十分別中第三、五蘊等常體菩薩にして而も諸法の體相不可得なり菩薩不可得なるを説く。

【六】十分別中の第四、菩薩不可得の故に般若の所化とすべきもののなきを示す。

但だ説きて虚空と名くるのみなるが如く、是の如く舍利弗、色の邊得べからず、中得べからず、是れ色空の故に、空の中に亦邊無く亦中無し。受想行識の邊得べからず、中得べからず、識空の故に、空の中に亦邊無く亦中無し。是因緣を以ての故に、舍利弗、色無邊の故に、當に知るべし菩薩も亦無邊なりと。受相行識無邊の故に、當に知るべし菩薩も亦無邊なりと。乃至十八不共法も亦是の如し。

(五)舍利弗の言ふ如く、色は是れ菩薩、是も亦得べからず、受想行識は是れ菩薩、是も亦得べからずとは、舍利弗、色、色相空、受想行識、識相空、檀那波羅蜜、檀那波羅蜜相空なり。乃至、般若波羅蜜も亦是の如し。內空、內空相空、乃至無法有法空、無法有法空相空、四念處、四念處相空、乃至十八不共法、十八不共法相空、如法性實際不可思議性、不可思議性相空、三昧門、三昧門相空、陀羅尼門、陀羅尼門相空、一切智、一切智相空、道智、道智相空、一切種智、一切種智相空、聲聞乘、聲聞乘相空、辟支佛乘、辟支佛乘相空、佛乘、佛乘相空、聲聞人、聲聞人相空、辟支佛人、辟支佛人相空、佛、佛相空、空の中に色得べからず。受想行識得べからず。是因緣を以ての故に、舍利弗、色は是れ菩薩、是も亦得べからず。受想行識は是れ菩薩、是も亦得べからざるなり。

(六)舍利弗言ふ如く、何の因緣の故に一切種一切處に於て菩薩得べからず、當に何等の菩薩に般若波羅蜜を教ふべきやとは、舍利弗、色は色の中に得べからず、色は受の中に得べからず、受は受の中に得べからず、受は色の中に得べからず、受は想の中に得べからず、想

【七】十分別中の第五、菩薩を教ふとは假名施設に過ぎざるを説く。

は想の中に得べからず、想は色受の中に得べからず、想は行の中に得べからず、行は行の中に得べからず、行は色受想の中に得べからず、行は識の中に得べからず、識は識の中に得べからず、識は色受想行の中に得べからず。舎利弗、眼は眼の中に得べからず、眼は耳の中に得べからず、耳は耳の中に得べからず、耳は眼の中に得べからず、耳は鼻の中に得べからず、鼻は鼻の中に得べからず、鼻は眼耳の中に得べからず、鼻は舌の中に得べからず、舌は舌の中に得べからず、舌は眼耳鼻の中に得べからず、舌は身の中に得べからず、身は身の中に得べからず、身は眼耳鼻舌の中に得べからず、身は意の中に得べからず、意は意の中に得べからず、意は眼耳鼻舌身の中に得べからず。六入六識六觸、六觸因縁生の受も亦是の如し。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、性法乃至辟支佛法、初地乃至十地、一切智道種智一切種智も亦是の如し。須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛も亦是の如し。菩薩は菩薩の中に得べからず、菩薩は般若波羅蜜の中に得べからず、般若波羅蜜は般若波羅蜜の中に得べからず、般若波羅蜜は菩薩の中に得べからず、般若波羅蜜の中に教化所有無く得べからず、教化の中に教化所有無く得べからず、教化の中に菩薩及び般若波羅蜜所有無く得べからず。舎利弗、是の如く一切法所有無く得べからず。是因縁を以ての故に、一切種一切處に於て菩薩得べからず。當に何等の菩薩に般若波羅蜜を教ふべきやと云ふ。

〔七〕舎利弗の言ふ如く、何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は但だ假名有るのみと説くやとは、舎

【假名】 菩薩五蘊等の名を假設する名字。

【但だ名字有るのみ】 五衆は破散すれば虛空の如く異りなし。是の菩薩も但だ名字のみある幻化人の如し。假名中更に立てて名をなすのみなり。

【八】 十分別中第六、名字空なるが如く人法畢竟不生なるを明す。

利弗、色は是れ假名、受想行識は是れ假名、色の名は色に非ず、受想行識の名は識に非ず。何を以ての故に、名の名相空なればなり。若し空なれば則ち菩薩に非ず。是因縁を以ての故に、舍利弗、菩薩は但だ假名有るのみ。復次に舍利弗、檀那波羅蜜は但だ名字有るのみ、名字の中に檀那波羅蜜有るに非ず、檀那波羅蜜の中に名字有るに非ず。是因縁を以ての故に、菩薩は但だ假名有るのみ。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜は但だ名字有るのみ、名字の中に般若波羅蜜有ること無く、般若波羅蜜の中に名字有ること無し。是因縁を以ての故に、菩薩は但だ假名有るのみ。舍利弗、內空は但だ名字有るのみ、乃至無法有法空も但だ名字有るのみ、名字の中に內空無し、內空の中に名字無し。何を以ての故に、名字內空倶に得べからざればなり。乃至無法有法空も亦是の如し。是因縁を以ての故に、舍利弗、菩薩は但だ假名有るのみ。舍利弗、四念處は但だ名字有るのみ、乃至十八不共法も但だ名字有るのみ、一切三昧門一切陀羅尼門乃至一切種智も亦是の如し。是因縁を以ての故に、舍利弗、我れ菩薩は但だ假名有るのみと說く。

(八)舍利弗言ふ所の如く、何の因縁の故に、我の名字を說くも我畢竟生ぜずとは、舍利弗、我は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。乃至知者見者は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。舍利弗、色は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。受想行識は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。眼は畢竟得べからず、乃至意觸因緣生の受は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。檀那波羅蜜は畢竟得べからず、乃至般若波羅蜜は畢竟得

【和合生】衆縁の相應不相應によりて和合するために差別諸法となるを云ふ。

【有記法】善性又は惡性の法、この法は善又は惡なりと記別し得らるるが故に有記と名く。

【作法】造作せらるるもの、即ち有爲法なり。

べからず、云何が當に生有るべき。内空は畢竟得べからず、乃至無法有法空は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。四念處は畢竟得べからず、乃至十八不共法は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。諸三昧門諸陀羅尼門は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。聲聞乃至佛は畢竟得べからず、云何が當に生有るべき。是因縁を以ての故に、舍利弗、我れ我の名字の如く、我も亦畢竟生ぜずと說く。舍利弗言ふ所の如く、我の如く諸法も亦是の如く自性無しとは、舍利弗、諸法は和合生の故に自性無し。舍利弗、何等か和合生にして自性無きや。舍利弗、色は和合生にして自性無し、受想行識は和合生にして自性無し。眼は和合生にして自性無し、乃至意も和合生にして自性無し。色乃至法、眼界乃至法界、地種乃至識種、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受も和合生にして自性無し。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜も和合生にして自性無し。四念處乃至十八不共法も和合生にして自性無し。復次に舍利弗、一切法は常無く亦失せず。「舍利弗須菩提に問はく、「何等の法か、常無く亦失せざるや。「須菩提言はく、「色は常無く亦失せず、受想行識は常無く亦失せず。何を以ての故に、法若し常無ければ即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。是因縁を以ての故に、舍利弗、一切有爲法は常無く亦失せず。復次に舍利弗、若は有漏法若は無漏法、若は有記法若は無記法。何を以ての故に、若し法常無ければ、即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。是因縁を以ての故に、舍利弗、一切作法は常無く亦失せざるなり。復次に舍利弗、一切法は常に非ず滅に非ず。「舍利弗言はく、「何等の法か常に非ず滅に非ざるや。「須菩

【性自ら爾り】本然自性の存在にして、今無性の性をいふ。

【九】十分別中第七、畢竟不生なれば名けて五蘊等とすべきものなきを明す。

【一〇】十分別中第八、般若を教ふる者なきを説く。

【般若を敎ふ等】畢竟不生は卽ち諸

提言はく『色は常に非ず滅に非ず、何を以ての故に、性自ら爾るのみ。受想行識は常に非ず滅に非ず、何を以ての故に、性自ら爾るのみ。乃至意觸因緣生の受は常に非ず、滅に非ず、何を以ての故に、性自ら爾るのみ。是因緣を以ての故に、舍利弗、諸法は和合生にして自性無し。舍利弗言ふ所の如く、何の因緣の故に、色畢竟生ぜず、受想行識畢竟生ぜずとは。』須菩提言はく『色は作法に非ず、受想行識は作法に非ず。何を以ての故に、作者得べからざるが故に。舍利弗、眼は作法に非ず、何を以ての故に、作者得べからざるが故に。乃至意も亦是の如し。眼界乃至意觸因緣生の受も亦是の如し。復次に舍利弗、一切諸法は皆起に非ず作に非ず、何を以ての故に、作者得べからざるが故に。是因緣を以ての故に、舍利弗、色は畢竟生ぜず、受想行識は畢竟生ぜざるなり。

(九)舍利弗言ふ所の如く、何の因緣の故に、畢竟生ぜずば、是を名けて色と爲さず、畢竟生ぜずば、是を名けて受想行識と名けざるやとは、』須菩提曰はく『色の性空、是空生無く滅無く、住異無し。受想行識の性空、是空生無く滅無く、住異無し。眼乃至一切有爲法の性も空、是空生無く滅無く、住異無し。是因緣を以ての故に、舍利弗、畢竟生ぜずば是を色と名けず、畢竟生ぜずば是を受想行識と名けざるなり。』

(一〇)舍利弗言ふ所の如く、何の因緣の故に、畢竟不生の法ならば、常に是般若波羅蜜を敎ふべけんやとは、』須菩提言はく『畢竟不生卽ち是れ般若波羅蜜、般若波羅蜜卽ち是れ畢竟不生、般若波羅蜜と畢竟不生とは二無く別無し。是因緣を以ての故に。舍利弗、我れ、畢

法實相、諸法實相とは即ち般若波羅蜜なり。云何んが般若を以て般若を教ふべけんや。若しこの畢竟不生を離れての菩薩あらば般若を教ふべし。この菩薩般若と畢竟不二無別なれば、云何んが教ふべき。

【二】十分別中の第九、畢竟不生を離れて菩提を行ずるなきを說く。

【三】十分別中第十、菩薩なく、菩提行なしとて驚怖せざるを明す。

【心沒せず等】一切法中に於て我衆生乃至知者見者を見ず、亦說者なく、聽者なく、邪說なく、正說なく、亦無說者なし。一切法は因緣和合の故に生じ、諸緣離るる故に滅し、起者、滅者あることなきを知る故に沒せず乃至畏れざるなり。

竟不生ならば當に是般若波羅蜜を教ふべけんやと說く」。

(一二)「舍利弗言ふ所の如く、何の因緣の故に、畢竟不生を離れて、菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行ずる無しとは、「須菩提言はく、『菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、畢竟不生の般若波羅蜜に異るを見ず、亦畢竟不生の菩薩に異るを見ず、畢竟不生及び菩薩は二無く別無し。畢竟不生の色に異るを見ず、何を以ての故に、是れ畢竟不生及び色は二無く別無ければなり。畢竟不生の受想行識に異るを見ず、何を以ての故に、畢竟不生と受想行識とは二無く別無ければなり。乃至一切種智も亦是の如し。是因緣を以ての故に、舍利弗、畢竟不生を離れて、菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行ずる無しとす」。

(一三)「舍利弗言ふ所の如く、何の因緣の故に、菩薩は是說を作すを聞きて心沒せず悔いず驚かず怖かず畏れず、是を菩薩の般若波羅蜜を行ずと名くるやとは、「須菩提言はく、『菩薩摩訶薩は諸法覺知相有りと見ず、一切諸法を見るに、夢の如く響の如く幻の如く燄の如く影の如く化の如し。舍利弗、是因緣を以ての故に、菩薩は是說を作すを聞きて、心沒せず悔いず驚かず怖かず畏れざるなり」。「須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、是の如く諸法を觀ず。是時菩薩摩訶薩色を受けず、色を示さず、色に住せず、色に著せず、亦是色を言はず。受想行識も亦受けず、示さず住せず著せず、亦是受想行識を言はず。眼受けず、示さず住せず著せず、亦是眼を言はず。耳鼻舌身意受けず、示さず住せず著せず、亦是意を言はず。檀那波羅蜜受けず、示さず住せず著せず、亦是檀那波羅

【色を受けず等】五種の正觀行を明す。無常の火あつて心を燒く故に受けず、五蘊空と觀て相を取らざる故示さず、五衆に依止せず、諸煩惱の賊來るを畏るる故に住せず、身に飢渴病[illegible]等あり、心に憂愁瞋恚等ありて後世に三惡道に墮し、一切は無常にして自在を得ず、故に著せず、邪見を以て色の常無常等を說かざる故に言はざるなり。

【一に非ず等】諸法無生一相の故に一に非ず乃至異に非ず。卽ち決定相なし。

蜜を言はず。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜受けず、示さず住せず著せず、亦是般若波羅蜜を言はず。內空受けず、示さず住せず著せず、亦是內空を言はず。乃至無法有法も亦是の如し。復次に世尊、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、四念處受けず、示さず住せず著せず、亦是四念處を言はず、乃至十八不共法受けず、示さず住せず著せず、亦是十八不共法を言はず、一切三昧門一切陀羅尼門、乃至一切種智受けず、示さず住せず著せず。亦是一切種智を言はず。復次に世尊、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、色を見ず乃至一切種智を見ず。何を以ての故に、色不生是れ色に非ず、受想行識不生是れ識に非ず、眼不生是れ眼に非ず、耳鼻舌身意不生是れ意に非ず、檀那波羅蜜不生是れ檀那波羅蜜に非ず、乃至般若波羅蜜不生是れ般若波羅蜜に非ざればなり。何を以ての故に、色と不生とは二ならず別ならず、乃至般若波羅蜜と不生とは二ならず別ならざればなり。內空不生是れ內空に非ず、乃至無法有法空不生是れ無法有法空に非ず。何を以ての故に、內空乃至無法有法空と不生とは二ならず別ならざればなり。世尊、四念處不生、四念處に非ず。何を以ての故に、四念處と不生とは二ならず別ならざればなり。何を以ての故に、世尊、是不生法は一に非ず二に非ず三に非ず異に非ず、是を以ての故に、四念處と不生とは二ならず別ならず。乃至十八不共法不生、十八不共法に非ず。何を以ての故に、十八不共法と不生とは二ならず別ならざればなり。何を以ての故に、世尊、是不生法は一に非ず二に非ず三に非ず異に非ず、是を以ての故に、十八不共法不生、十八不共法に

【色無二の法數】未だ色を破らざればば愛等の結使を生じ是の色等に著す。又色を破れば邪見を生じて色空等に著す。今色等の空智慧を用ての故に皆空不二相なり。是の諸法は虚誑にして不實なり。內外入の攝するところ故二と名く。色等乃至一切種智はこの二を離れて不二と名くるなり。

【無生品】菩薩般若義實に無量なるを以て重ねて不二無生に就て說く。故に此品の名あり。

非ざるなり。世尊、如不生、是れ如に非ず、乃至不可思議性不生、是れ不可思議性に非ず。世尊、是阿耨多羅三藐三菩提不生、一切智一切種智不生、是れ一切種智に非ず。何を以ての故に、是れ阿耨多羅三藐三菩提乃至一切種智と不生とは二ならず別ならざればなり。何を以ての故に、世尊、是不生は一に非ず二に非ず三に非ず異に非ず、是を以ての故に、乃至一切種智不生、一切種智に非ず。世尊、色不滅の相是れ色に非ず。何を以ての故に、色及び不滅の相二ならず別ならざればなり。何を以ての故に、世尊、是不滅の法は一に非ず二に非ず三に非ず異に非ず、是を以ての故に、色不滅の相是れ色に非ず。受想行識不滅の相是れ識に非ず。何を以ての故に、識及び不滅は二ならず別ならざればなり。何を以ての故に、世尊、是不滅法は一に非ず二に非ず三に非ず異に非ず。是を以ての故に、識不滅是れ識に非ず。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法も亦是の如し。世尊、是を以ての故に、色無二の法數に入り、受想行識無二の法數に入る、乃至一切種智も無二の法數に入る。』

無生品第二十六

(一)爾時、慧命舍利弗、須菩提に語らく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ諸法を觀ず。何等か是れ菩薩、何等か是れ般若波羅蜜、何等か是れ觀とする。』須菩提舍利弗に語らく、『汝

【一】菩薩般若の觀行、一切を知り一切を遠離するにあるを明す。

【菩薩】菩提に阿羅漢、辟支佛、佛の三種菩提あり、無學智慧清淨の故に菩提と名く。菩薩は大智あるも諸煩惱習未盡の故菩提と名けず。此中佛菩提の一種を說くのみ。薩埵とは衆生といひ、此の衆生は無上道のために發心修行す、又薩埵を大心と名く。是人大心を發して無上菩提を求むるも得ざる故に菩薩といふ。

【遠離】空の別名。般若を得れば一切法の罪過を見る故にここに於て心皆遠離す。

が問ふ所、何等か是れ菩薩とは、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、是人大心を發す、是を以ての故に、名けて菩薩と爲す。亦一切法、一切種相を知り、是中亦著せず、色相を知り、亦著せず、乃至十八不共法相を知り、亦著せず。』舍利弗須菩提に問はく、『何等をか一切法相と爲すか。』須菩提言はく、『若し名字因緣和合等を以て諸法を知り、是れ色、是れ聲香味觸法、是れ內是れ外、是れ有爲法是れ無爲法とせば、是名字相の語言を以て諸法相を知る、是を諸法相を知ると名く。舍利弗問ふ所の如く、何等か是れ般若波羅蜜とは、遠離の故に、是を般若波羅蜜と名く。何等の法か遠離なるや。陰界入を遠離し、檀那波羅蜜乃至禪那波羅蜜を遠離し內空乃至無法有法空を遠離す。是を以ての故に、遠離を般若波羅蜜と名く。復次に四念處を遠離し、乃至十八不共法を遠離し、一切智を遠離す。是因緣を以ての故に、遠離を般若波羅蜜と名く。舍利弗問ふ所の如く、何等か是れ觀とするとは、舍利弗、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、色を觀ずるに常に非ず無常に非ず、樂に非ず苦に非ず、我に非ず無我に非ず、空に非ず不空に非ず、相に非ず無相に非ず、作に非ず無作に非ず、寂滅に非ず不寂滅に非ず、離に非ず不離に非ずと。受想行識も亦是の如し。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、乃至一切種智、常に非ず無常に非ず、樂に非ず苦に非ず、我に非ず無我に非ず、空に非ず不空に非ず、相に非ず無相に非ず、作に非ず無作に非ず、寂滅に非ず不寂滅に非ず、離に非ず不離に非ずと觀ず。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、諸法を觀ずと

【二】前品に說ける色不生是れ色に非ず等の文に就て問答說明す。無生觀により因中有果無果初生後生一異等を破す。自相空なり。

【三】次に不二を說く。【不二】眼色有無等諸二を破する故不二と名く。行者或は先に無生觀門に入り、後に不二に入り、或は之に及するあり、觀義一と雖も行者は分別す。即ち色二を

名く。

(二)舍利弗須菩提に問はく『何の因緣の故に、色不生是れ色に非ず、受想行識不生是れ識に非ず、乃至一切種智不生是れ一切種智に非ざるや。』須菩提言はく『色の色相空なり、色空の中色無く生無し、是因緣を以ての故に、色不生是れ色に非ず、受想行識の識相空なり、識空の中識無く生無し、是因緣を以ての故に。受想行識不生是れ受想行識に非ず。舍利弗、檀那波羅蜜の檀那波羅蜜相空なり檀那波羅蜜空の中檀那波羅蜜無く生無し、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜の般若波羅蜜相空なり、般若波羅蜜空の中に般若波羅蜜無く生無し。是因緣を以ての故に舍利弗、般若波羅蜜不生是れ般若波羅蜜に非ず、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切種智も亦是の如し。是因緣を以ての故に、內空不生是れ內空に非ず、乃至一切種智不生是れ一切種智に非ざるなり。』

舍利弗須菩提に問はく、

(三)『汝何の因緣の故に、色不二是れ色に非ず、受想行識不二是れ識に非ず、乃至一切種智不二是れ一切種智に非ずと言ふや。』須菩提答へて言はく『所有る色の所有は不二、所有る受想行識の所有は不二なり是れ一切法は皆合せず散せず、色無く形無く對無く、一相にして謂ゆる無相なり、眼乃至一切種智も亦是の如し。是因緣を以ての故に、舍利弗、色不二是れ色に非ず、受想行識不二是れ識に非ず、乃至一切種智不二是れ一切種智に非ずとす。』舍利弗須菩提に問はく『何の因緣の故に色無二の法數に入り、受想行識無二の法數に入る、乃

破する故不二といひ、色生を破する故無生といふ。無生の因縁は自相空、不二の因縁は不合不散の一相にして無相等なり。自相空は是散空なり。

【色無二法數に入る】色破、散すれば卽ち無生、色を離れて更に生あることを得ず。又色破散すれば無生の故に更に無生あるを得ず。ここを以て無二法數に入るといふ。

【四】須菩提舍利弗と問答終りて佛の證知を求む。

【畢竟淨】無生觀に柔順忍觀と無生忍觀とある小、先にいふ無生は柔順忍觀にして畢竟淨ならず、漸次に柔順觀を修して無生忍を得れば畢竟淨なり。

【五】諸法不生にして得道有りや無

至一切種智も無二の法數に入ると言ふや。』須菩提答へて言はく、『色は無生に異ならず、無生は色に異ならず、色卽ち是れ無生、無生卽ち是れ色なり。受想行識は無生に異ならず、無生は識に異ならず、識卽ち是れ無生、無生卽ち是れ識なり。是因緣を以ての故に、舍利弗、色無二の法數に入り、受想行識無二の法數に入る、乃至、一切種智も亦是の如し。』

(四)爾時、須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、是の如く諸法を觀ずれば、是時に色無生を見る、畢竟淨の故に。受想行識無生を見る、畢竟淨の故に。我無生乃至知者見者無生を見る、畢竟淨の故に。檀那波羅蜜無生乃至般若波羅蜜無生を見る、畢竟淨の故に。內外空無生乃至無法有法空無生を見る、畢竟淨の故に。四念處無生乃至十八不共法無生を見る、畢竟淨の故に。一切三昧一切陀羅尼無生を見る、畢竟淨の故に。乃至一切種智無生を見る、畢竟淨の故に。凡人凡人法無生を見る、畢竟淨の故に。須陀洹須陀洹法、斯陀含斯陀含法、阿那含阿那含法、阿羅漢阿羅漢法、辟支佛辟支佛法、菩薩菩薩法、佛佛法無生を見る、畢竟淨の故に。』

(五)舍利弗須菩提に語らく、『我れ聞くが如くんば、須菩提の說く所の義、色は是れ不生、受想行識は是れ不生、乃至佛佛法は是れ不生なりと。若し爾らば、今須陀洹須陀洹果、斯陀含斯陀含果、阿那含阿那含果、阿羅漢阿羅漢果、辟支佛辟支佛道を得べからず、菩薩摩訶薩は一切種智を得べからず、亦六道別異無く、亦菩薩摩訶薩五種菩提を得ず。須菩提、若し一切法不生相ならば、何を以ての故に、須陀洹は三結を斷ずる爲の故に道を修し、斯陀

きやを辨ず。

【五種菩提】一に柔順忍、無生忍、及三種菩提の五、又一に發心菩提、無量生死中發心して成佛心を起す。二に伏心菩提、諸煩惱を折り其心を降伏し諸度を行ず。三に明菩提、三世諸法を觀じ諸法實相を得、般若波羅蜜相なり。四に出到菩提、般若中方便力を得見佛して無生忍を得薩婆若に至る。五に無上菩提、煩惱習を斷じて成佛を得。

【三結】身見、戒見、疑使。

【五下分結】身見、戒取、疑、貪、瞋。

【五上分結】掉擧、慢、無明、色愛、無色愛。

【辟支佛法】聲聞法と異りなきも福德利根にして、少しく諸法實相に入る。

含は婬恚癡を薄くする爲の故に道を修し、阿那含は五下分結を斷ずる爲の故に道を修し、阿羅漢は五上分結を斷ずる爲の故に道を修し、辟支佛は辟支佛法の爲の故に道を修するや。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は難行を作し、衆生の爲に種種の苦を受くるや。何を以ての故に、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得るや。何を以ての故に、佛は法輪を轉ずるや。」須菩提、舍利弗に語らく、「我れ無生法をして所得有らしめんと欲せず、我れ亦無生法の中に、須陀洹須陀洹果を得しめんと欲せず、乃至無生法の中に、阿羅漢阿羅漢果、辟支佛辟支佛道を得しめんと欲せず、我れ亦無生法の中に菩薩をして難行を作し、衆生の爲に種種の苦を受けしめんと欲せず、菩薩も亦難行の心を以て道を行ぜず。何を以ての故に、舍利弗、難心苦心を生ぜば、無量阿僧祇の衆生を利益すること能はず。舍利弗、今菩薩は衆生を憐愍し、衆生に於て父母兄弟の想の如く、兒子及び己身の想の如く、是の如くして能く無量阿僧祇の衆生を利益す。無所得を用ての故に。所以は何ん、菩薩摩訶薩は是の如きの心を生ずべし、我の一切處一切種に不可得なるが如く、内外法も亦是の如しと。若し是の如きの想を生ずれば、則ち難心苦心無し。何を以ての故に、是菩薩は一切處一切種一切法に於て受けざるが故に。舍利弗、我れ亦無生法の中に、佛をして阿耨多羅三藐三菩提を得しめんと欲せず、亦無生法の中に法輪を轉ぜしめんと欲せず、亦無生法を以て道を得しめんと欲せず。」

(六)舍利弗、須菩提に語らく、「今生法を以て道を得、無生法を以て道を得しめんと欲する

【難行】今これを云ふは菩薩に諸行あるも難行苦行は希有にして衆生感じ易ければなり。
【難心苦心】事を苦として難ずる心、これあらば小事も成ぜず況や佛道をや。
【父母己身の想】無理の愛に非ずして自然の愛なり。菩薩の大悲亦是の如し。
【六】諸法無生ならばこれを證するは生法なりや、無生法なりやを辨ず。生法は有爲、無生法は無爲なり。
【知有り得有り】得道果の別名。これあるも生法不生法の二法によらず。

や。』須菩提、舎利弗に語らく、『我れ生法を以て道を得しめんと欲せず。』舎利弗言はく、『今須菩提、無生法を以て道を得しめんと欲するや。』須菩提言はく、『我れ亦無生法を以て道を得しめんと欲せず。』舎利弗言はく、『須菩提説く所の如くば、知無く得無きや。』須菩提言はく、『知有り得有るも二法を以てせず、今世間の名字を以ての故に知有り得有り、世間の名字の故に須陀洹乃至阿羅漢辟支佛諸佛有り、第一實義の中には知無く得無く、須陀洹無く乃至佛無し。』『須菩提、若し世間の名字の故に知有り得有らば、六道別異も亦世間の名字の故に有らん、第一實義を以てするに非ざらん。』須菩提言はく、『是の如く是の如し、舎利弗、世間の名字の故に知有り得有るが如く、六道の別異も亦世間の名字の故に有り、第一實義を以てするに非ず。何を以ての故に、舎利弗、第一實義の中業無く報無く、生無く滅無く、常無く苦無ければなり。』舎利弗須菩提に語らく、『不生法より生ずるか、生法より生ずるか。』須菩提言はく、『我れ不生法をして生ぜしめんと欲せず、亦生法をして生ぜしめんと欲せず。』舎利弗言はく、『何等の不生法をか生ぜしめんと欲せざるや。』須菩提言はく、『色は是れ不生法自性空、生ぜしめんと欲せず、受想行識は是れ不生法自性空、生ぜしめんと欲せず、乃至阿耨多羅三藐三菩提は是れ不生法自性空、生ぜしめんと欲せず。』舎利弗、須菩提に語らく、『生より生ずるや、不生より生ずるや。』須菩提言はく、『生より生ずるに非ず、不生より生ずるに非ず。何を以ての故に、舎利弗、生不生、是二法は合せず散ぜず、色無く形無く對無く、一相謂ゆる無相なり。舎利弗、是因縁を以ての故に、生より生ずる

【七】無生を說く語言も無生相なるを說く。

【八】無所依清淨なるを說く、

【說法人の中に於て第一】富樓那は佛弟子中說法第一なるも、空相法門を樂說する點に於て須菩提第一と讚ずるなり。

【内に依らず等】内法空の故に色内に依止せず、外法空の故に色外に依止せず、中間無所有の故に色中間にも依止せず、故に所依なし。

にも非ず、亦不生より生ずるにも非ざるなり。」

(七)爾時、舍利弗、須菩提に語らく、「須菩提、無生法及び無生相を樂說するか。」須菩提、舍利弗に語らく、「我れ無生法を樂說し、亦無生相を樂說す。何を以ての故に、諸の無生法無生相、及び樂說の語言、是一切法皆合せず散せず、色無く形無く對無く、一相謂ゆる無相なればなり。」舍利弗、須菩提に語らく、「汝は不生法を樂說し、亦不生相を樂說す、是樂說の語言も亦生ぜざるや。」須菩提言はく、「是の如く是の如し、舍利弗、何を以ての故に、舍利弗、色生ぜず受想行識生ぜず、眼生ぜず乃至意生ぜず、地種生ぜず乃至識種生ぜず、身行生ぜず口行生ぜず意行生ぜず、檀那波羅蜜生ぜず乃至一切種智生ぜず。是因緣を以ての故に、舍利弗、我れ無生法を樂說し、亦無生相を樂說す、是樂說の語言も亦生ずる無し。」

(八)爾時、舍利弗、須菩提に語らく、「須菩提、說法人の中に於て最も上に在るべし。何を以ての故に、須菩提、問ふ所に隨ひて皆能く答ふるや。」須菩提言はく、「諸法所依無きが故に。」舍利弗、須菩提に語らく、「云何が諸法所依無きや。」須菩提言はく、「色の性常に空にして内に依らず外に依らず兩の中間に依らず、受想行識の性常に空にして内に依らず外に依らず兩の中間に依らず、眼耳鼻舌身意の性常に空にして内に依らず外に依らず兩の中間に依らず、色の性常に空、乃至法の性常に空にして内に依らず外に依らず兩の中間に依らず、檀那波羅蜜の性常に空、乃至般若波羅蜜の性常に空にして内に依らず外に依らず兩の中間

【淨む】能く色を畢竟空ならしむるをいふ。

【九】六度淨を別說す。

【法を得し】この施事功德を成就すとす。

に依らず、內空の性常に空、乃至無法有法空の性常に空にして內に依らず外に依らず兩の中間に依らず。舍利弗、四念處の性常に空、乃至一切種智の性常に空にして內に依らず外に依らず兩の中間に依らず。是因緣を以ての故に。舍利弗、一切諸法は所依無し、性常に空の故に。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、色受想行識を淨むべし、乃至一切種智を淨むべし。」

(九)舍利弗須菩提に問はく、「菩薩摩訶薩云何が六波羅蜜を行ずる時に菩薩道を淨むるや。」須菩提言はく、「世間檀那波羅蜜有り、出世間檀那波羅蜜有り、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、世間有り出世間有り。」舍利弗須菩提に問はく、「云何が世間檀那波羅蜜、云何が出世間檀那波羅蜜なるや。」須菩提言はく、「若し菩薩摩訶薩施主と作りて能く沙門婆羅門貧窮乞人に施し、食を須つには食を與へ、飲を須つには飲を與へ、衣を須つには衣を與へ、臥具床榻房舍香華瓔珞醫藥種種須つ所の資生の物、若は妻子國土頭目手足支節等內外の物、盡く以て給施す。施す時に是念を作さく、「我れ與へ彼れ取る、我れ慳貪ならず、我れ施主と爲り、我れ能く一切を捨つ、我れ佛の敎に隨ひて施し、我れ檀那波羅蜜を行ず」と。是施を作し已り、用て法を得し、一切衆生とこれを共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、念言すらく、「是布施の因緣をもて衆生をして今世の樂を得しめ、後涅槃の樂に入ることを得しむべし」と。是人布施に三礙有り。何をか三とする、我相と他相と施相となり。是三相に著する布施、是を世間檀那波羅蜜と名く。何の因緣の故に世間と名くる

【三分清淨】我相他相施相の三礙なきに云ふ。

【能く動き等】動とは柔順忍、出とは無生法忍を成ずるなり。

【四念處等】三十七道品三解脫門等乃至大慈大悲は畢竟清淨にして菩提に近し。

【阿耨多羅三藐三菩提】初發意より金剛三昧に至る中間になす菩提菩薩行。

【一〇】須菩提を讚じ併せて般若の妙力を明かにす。

や。世間の中に於て動かず出でず、是を世間檀那波羅蜜と名く。云何が出世間檀那波羅蜜と名くるや。謂ゆる三分清淨なり。何等をか三となす、菩薩摩訶薩の布施する時、我れ得べからず、受者見ず、施物得べからず、亦報を望まず、是を菩薩摩訶薩の三分清淨檀那波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の布施する時、一切衆生に施與するも、衆生も亦得べからず。此布施を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、乃至微細の法相をも見ず。舍利弗、是を出世間檀那波羅蜜と名く。何を以ての故に名けて出世間と爲すや。世間の中に於て能く動き能く出づ、是故に出世間檀那波羅蜜と名く。尸羅波羅蜜、所依有る是を世間尸羅波羅蜜と爲し、所依無き是を出世間尸羅波羅蜜と爲す。餘は檀那波羅蜜に說ける如し。羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、所依有る是を世間と名け、所依無き是を出世間と名く。餘は亦檀那波羅蜜に說けるが如し。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時に菩薩道を淨む。』舍利弗須菩提に問はく『云何が菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提道と爲すや。』須菩提言はく『四念處、是れ菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提道と爲す、乃至八聖道分、空解脫門無相解脫門無作解脫門、內空乃至無法有法空、一切三昧門一切陀羅尼門、佛十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲、舍利弗、是を名けて菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提道と爲す。』

【一〇】爾時、舍利弗須菩提を讚じて言はく『善い哉善い哉、何等の波羅蜜力なりや。』須菩提言はく『是れ般若波羅蜜力なり。所以は何ん、般若波羅蜜は能く一切諸善法、若は聲聞法、辟

【大悲念】衆生縁、法縁無縁の三悲、無縁悲は畢竟空より生ず。

支佛法菩薩法佛法を生ずるが故に。舍利弗、般若波羅蜜は能く一切諸善法、聲聞法辟支佛法菩薩法佛法を受くるがゆゑに、舍利弗、過去の諸佛は般若波羅蜜を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得、未來の諸佛も亦般若波羅蜜を行じて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、今現在十方諸佛國土の中の諸佛も亦是般若波羅蜜を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得。舍利弗、若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を說くを聞く時に疑はず難ぜざる、當に知るべし是菩薩摩訶薩は菩薩道を行じたりと。菩薩道を行ずる者は一切衆生を救ふが故に、心一切衆生を捨てず、無所得を以ての故に。是菩薩は常に是念謂ゆる大悲念を離れざるべし。』舍利弗復問はく、『菩薩摩訶薩をして常に是念謂ゆる大悲念を離れざらしめんと欲す、若し菩薩摩訶薩常に大悲念を離れずば、一切衆生をして皆當に菩薩と作らしめん。何を以ての故に、須菩提、一切衆生も亦諸念を離れざるが故に。』須菩提言はく、『善い哉善い哉、舍利弗、汝我を難じて我が義を成ぜんと欲す。何を以ての故に、衆生無きが故に、念も亦無し、衆生の性無きが故に、念の性も亦無し、衆生の法無きが故に、念の法も亦無し、衆生離の故に、念も亦離なり、衆生空の故に、念も亦空なり、衆生知るべからざるが故に、念も亦知るべからず。舍利弗、色無きが故に、念も亦無し、色の性無きが故に、念の性も亦無し、色の法無きが故に、念の法も亦無し、色離の故に、念も亦離なり、色空の故に、念も亦空なり、色知るべからざるが故に、念も亦知るべからず、受想行識も亦是の如し。眼乃至意、色乃至法、地種乃至識種、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八

【問住品】四天王梵釋諸天來會し帝釋等般若に住するを問ふ品なり。【一】諸天來集を明す。

不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、一切智一切種智、乃至阿耨多羅三藐三菩提知るべからざるが故に、念も亦知るべからず。舍利弗、菩薩摩訶薩は是道を行じ、我れ是念謂ゆる大悲念を離れざらしめんと欲す。』爾時、佛須菩提を讃じて言はく『善い哉善い哉、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり、其れ說くこと有る者は亦是の如く說くべし。汝が說く所の般若波羅蜜は皆是れ佛意を承くるが故に、菩薩摩訶薩にして般若波羅蜜を學するもの、應に汝が所說の如く學すべし。』須菩提の是般若波羅蜜品を說く時、三千大千國土六種に震動し、東に踊り西に沒し西に踊り東に沒し、南に踊り北に沒し北に踊り南に沒し、中に踊り邊に沒し邊に踊り中に沒す。爾時佛微笑したまふ。須菩提佛に白して言さく『佛何の因緣の故に微笑したまふや。』佛須菩提に告たまはく『我れ此國土に於て般若波羅蜜を說くが如く、東方無量阿僧祇國土の中の諸佛も、亦諸々の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說き、南西北方四維上下も亦是般若波羅蜜を說く。是般若波羅蜜品を說く時、十二那由他の諸々の天人無生法忍を得、十方の諸佛の是般若波羅蜜を說く時、無量阿僧祇の衆生も亦阿耨多羅三藐三菩提心を發す。』

問住品第二十七

（一）爾時、三千大千世界の諸々の四天王天等、各無數百千億の諸天と倶に來りて會中に在り、

【四天王】東方提多羅吒(持國)、南方毘流離(增長)、西方毘流波叉(雜語)、北方鞞沙門(多聞)
【釋提桓因】シャクローデーヷーンドラ(Sakrodevendra)能天主、帝釋と譯す。
【忉利】トラーヤストリンシャ(Trayastriṁśa)三十三天。
【須夜摩天】スヤーマデーヷ(Suyāmadeva)妙天と譯す。
【夜摩】ヤーマー(Yama)時分と譯す。
【兜率陀】ツシタ(Tuṣita)妙足と譯す。
【須涅蜜陀】スニルマーナラティデーヷ(Sunirmāṇaratideva)化樂と譯す
【婆舍跋提】ヷシヤヷルチナ(Vaśavartina)他化自在天といふ。

三千大千世界の諸の釋提桓因等諸の忉利天、須夜摩天王等の諸の夜摩天、兜率陀天王等の諸の兜率陀天、須涅蜜陀天王等の諸の妙化天婆舍跋提天王等の諸の自在行天、各無數百千億の諸天と倶に來りて會中に在り、三千大千世界の諸の梵天王等、乃至首陀婆諸天等、各無數百千億の諸天と倶に來りて會中に在り、是諸の四天王天乃至首陀婆諸天、業報生身の光明、佛の常光に於て百分千分千萬億分の一にも及ぶこと能はず、乃至算數譬喩を以て比を爲すべからず、世尊の光明は最勝最妙最上第一なり、諸天業報の光明は佛光の邊に在りては照さず現れず、譬へば燋柱を閻浮檀金に比するが如し。

(二)爾時、釋提桓因大德須菩提に白さく「是三千大千世界の諸の四天王天乃至首陀婆諸天、一切和合して須菩提の般若波羅蜜の義を説くを聽かんと欲す。須菩提、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜の中に住すべきや、何等か是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なるや、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずべきや。「須菩提釋提桓因に語て言はく「憍尸迦、我れ今佛意に承順し、佛神力を承け、諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を説き、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜の中に住すべき所の如くすべし。諸天子、今阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる者は、應に發心すべし。諸天子、若し聲聞の正位に入らば、是人は阿耨多羅三藐三菩提心を發す能はず。何を以ての故に、生死と障隔を作すが故に。是人若し阿耨多羅三藐三菩提心を發せば、我れも亦隨喜せん。所以は何ん、上人は更に上法を求むべく、我れ終に其功德を斷たず。憍尸迦、何等か是れ般若波羅蜜なりやとは、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心

に、色無常を念じ、色苦を念じ、色空を念じ、色無我を念じ、色病の如く、敗瘡の如く、箭の身に入れば痛惱衰壞憂畏安からざるが如く念ず、無所得を以ての故に。受想行識も亦是の如し。眼耳鼻舌身意、地種水火風空識種、無常乃至憂畏不安を觀ず、是も亦無所得の故に。色寂滅を觀じ、不生不滅不垢不淨を離る。受想行識も亦是の如し。地種乃至識種寂滅を觀じ、不生不滅不垢不淨を離る。亦無所得の故に。復次に憍尸迦、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心に、無明の緣によりて諸行あり、乃至老死の因緣によりて大苦聚集ありと觀ず、亦無所得の故に。無明滅するが故に諸行滅す、乃至、生滅するが故に老死滅す、老死滅するが故に憂悲苦惱大苦聚滅するを觀ず、無所得を以ての故に。復次に憍尸迦、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心に、四念處を修す、無所得を以ての故に。乃至、佛に十力十八不共法を修す、無所得を以ての故に。復次に憍尸迦、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心に、檀那波羅蜜を行ず、無所得を以ての故に、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を行ず、無所得を以ての故に。復次に憍尸迦、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時に是觀を作す、但だ諸法は諸法と共相因緣し、潤益增長し分別校計す。是中に我無く我所無し。

(三)菩薩の廻向心は阿耨多羅三藐三菩提心の中に在らず、阿耨多羅三藐三菩提心は廻向心の中に在らず、廻向心は阿耨多羅三藐三菩提心の中に於て得べからず、阿耨多羅三藐三菩提心は廻向心の中に於て得べからず。菩薩は一切法を觀ずと雖も、亦法として得べき無し、

【首陀婆】シュッダーヴーサー(Śuddhāvāsa) 淨居と譯す。
【業報生身】布施持戒等勝德の果報として得たる天人の身。
【常光】佛身として常に具ふる光、面各一丈。
【燋炷】松明の火。
【二】帝釋の問に對へて般若波羅蜜を說く。
【云何が般若…住】深入究住を問ふ。
【何等か是れ…般若】般若の體を問ふ。
【云何…般若行】初入方便行を問ふ。
【憍尸迦】カウシカ(Kauśika) 帝釋の別名。
【正位】小乘四果の如き已に聖道に入るもの。
【生死と障隔】漏盡力により後生なしとする故に。

【收癰疽】大論疽癰疽として前後に五蘊の十五惡を擧ぐるものとす。

【三】廻向義を分別す。

【恩を報ず】般若を說くを得るは三寶の恩なり。恩を報じて示教すべしとなり。

【示教利喜】說法の四示。示は善惡應不應を分別す、教は捨惡行善せしむ、利は得ざるを得しめ退沒を引導す、喜は獎歡讚歎するなり。

【四】般若の住すべきところを示す。

【色の色空】色の色とすべき相空なり。

是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く。釋提桓因大德須菩提に問はく、「云何が菩薩の廻向心は阿耨多羅三藐三菩提心の中に在らざる、云何が阿耨多羅三藐三菩提心は廻向心の中に在らざる、云何が廻向心は阿耨多羅三藐三菩提心の中に於て得べからざる、云何が阿耨多羅三藐三菩提心は廻向心の中に於て得べからざるや。」須菩提釋提桓因に語て言はく、「憍尸迦廻向心、阿耨多羅三藐三菩提心は心に非ず、是れ心相に非ず、非心相の中に廻向すべからず、是非心相は常に非心相、不可思議相は常に不可思議相なり、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く。」爾時、佛須菩提を讃じて言はく、「善い哉善い哉、須菩提、汝諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說き、諸の菩薩摩訶薩の心を安慰す。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、我れ恩を報ずべし、恩を報ぜざるべからず、過去の諸佛及び諸の弟子は、諸の菩薩の爲に六波羅蜜を說きて示教利喜し、世尊も爾時亦中に在りて學し、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり、我れも今亦諸の菩薩の爲に六波羅蜜を說きて示教利喜し、阿耨多羅三藐三菩提を得しむべし。」

(四)爾時、須菩提釋提桓因に語て言はく、「憍尸迦、汝今當に聽くべし、菩薩摩訶薩般若波羅蜜の中に住すべき所、住すべからざる所の如く。憍尸迦、色の色空、受想行識の受想行識空、菩薩の菩薩空、是色空と菩薩空とは二ならず別ならず、受想行識空と菩薩空とは二ならず、別ならず。憍尸迦、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に是の如く住すべし。復次に眼の眼空、乃至意の意空、菩薩の菩薩空、眼空乃至菩薩空は二ならず別ならず、六塵も亦是の

【五】一切有所得に住すべからざるを明す。
【色中等】色に住せばこれ實有とする有所得なり、般若に合せず。

如し。地種の地種空の乃至識種、識種空、菩薩の菩薩空、憍尸迦、地種空乃至識種空、菩薩空は二ならず別ならず。憍尸迦、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に是の如く住すべし。無明の無明空、乃至老死の老死空、無明滅の無明滅空、乃至老死滅の老死滅空、菩薩の菩薩空、憍尸迦、無明空乃至老死空、無明滅空乃至老死滅空、菩薩空は二ならず別ならず。憍尸迦、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に是の如く住すべし。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切三昧門一切陀羅尼門、聲聞乘辟支佛乘佛乘、聲聞辟支佛菩薩佛も亦是の如し。一切種智の一切種智空、菩薩の菩薩空、一切種智空、菩薩空は二ならず別ならず。憍尸迦、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に是の如く住すべし。」

(五)爾時、釋提桓因須菩提に問はく、「云何が般若波羅蜜の中に住すべからざる所ぞ」と。須菩提言はく、「憍尸迦、菩薩摩訶薩は色の中に住すべからず、有所得を以ての故に。受想行識の中に住すべからず、有所得を以ての故に。眼の中に住すべからず、乃至意の中に住すべからず、色の中に住すべからず、乃至法の中に住すべからず、眼識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受乃至意觸因縁生の受の中に住すべからず、有所得を以ての故に。地種乃至識種の中に住すべからず、有所得を以ての故に。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至十八不共法の中に住すべからず、有所得を以ての故に。須陀洹果の中に住すべからず、有所得を以ての故に。乃至阿羅漢果辟支佛道菩薩佛道一切種智の中に住すべからず、

【須陀洹果無爲相】須陀洹等の果無爲ならば著なく住すべからず、有爲ならば虚誑にして實なく亦住すべからず。

【須陀洹福田】福田量なければ果報亦量無し、菩薩之をききて須陀洹を作さんと欲する故、須陀洹福田に住せんとすべからず。

有所得を以ての故に。復次に憍尸迦、菩薩摩訶薩、色は是れ常として住すべからず、色は是れ無常として住すべからず、受想行識も亦是の如し。色は若は樂若は苦、若は淨若は不淨、若は我若は無我、若は空若は不空、若は寂滅若は不寂滅、若は離若は不離として住すべからず。有所得を以ての故に。受想行識も亦是の如し。復次に憍尸迦、菩薩摩訶薩は須陀洹果無爲相、斯陀含果無爲相、阿那含果無爲相、阿羅漢果無爲相に住すべからず、辟支佛道無爲相、佛道無爲相に住すべからず。須陀洹福田に住すべからず、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、佛福田に住すべからず。復次に憍尸迦、菩薩摩訶薩は初地の中に住すべからず、有所得を以ての故に。乃至十地の中に住すべからず、有所得を以ての故に。復次に、菩薩摩訶薩は初發心の中に住し、我れ當に檀那波羅蜜を具足すべくも住すべからず、乃至我れ當に般若波羅蜜を具足すべくも住すべからず。六波羅蜜を具足して當に菩薩位に入るべくも住すべからず、菩薩位に入り已りて當に阿惟越致地に住すべくも住すべからず。菩薩は當に五神通を具足すべくも住すべからず、有所得を以ての故に。菩薩は五神通に住し已りて、我れ當に無量阿僧祇の佛國土に遊び、諸佛を禮敬し供養し法を聽き、法を聽き已りて他人の爲に說くべし、菩薩摩訶薩は是の如きも住すべからず、有所得を以ての故に。衆生を成就し佛道に入らしむるも住すべからず、無量阿僧祇の佛土の諸佛の所に至りて尊重愛敬供養し、香華瓔珞澤香搗香幢幡華蓋百千億種の寶衣を以て諸佛を供養するも住すべからず、有所得を以ての故に。我れ當に無量阿僧祇の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を

【八人】見諦道、八忍地。
【信行法行】預流の初位に隨信と隨法の二あり、隨信は鈍根にして他教を信じ行じ、隨法は自から法教を觀て行ず。
【七世】九品の思惑七生を潤すをいひ初果の最長七世生とす。
【家家】三世生已りて涅槃に入るをいふ。
【命終等】今世に漏盡羅漢を得るなり。
【中間涅槃】現世に涅槃を得るものを除き、他は中間に涅槃に入るとす。

發さしむべし、是の如きも菩薩は住すべからず、我れ當に五眼肉眼天眼慧眼法眼佛眼を生ずべくも住すべからず、我れ當に一切三昧門を生ずべくも住すべからず、欲する所に隨て諸三昧に遊戲するも住すべからず、我れ一切陀羅尼門を生ずべくも住すべからず、我れ當に佛の十力を得べくも住すべからず、我れ當に四無所畏四無礙智十八不共法を得べくも住すべからず、我れ當に大慈大悲を具足すべくも住すべからず、我れ當に三十二相を具足すべくも住すべからず、我れ當に八十隨形好を具足すべくも住すべからず、有所得を以ての故に。是れ八人、是れ信行の人、是れ法行の人、是の如きも住すべからず、須陀洹七世の生を極むるも住すべからず、家家住すべからず、須陀洹命終り垢盡くるも住すべからず、須陀洹中間涅槃に入るも住すべからず、是人斯陀含果證に向ふも住すべからず、是人斯陀含一來涅槃に入るも住すべからず、是人阿那含果證に向ふも住すべからず、斯陀含一種にも住すべからず、是人阿那含彼間涅槃に入るも住すべからず、是人阿羅漢果證に向ふも住すべからず、是人阿羅漢今世無餘涅槃に入るも住すべからず、是辟支佛にも住すべからず、聲聞辟支佛地を過ぎ、我れ當に菩薩地に住すべくも住すべからず、道種智の中に住すべからず、有所得を以ての故に。一切種一切法を知り已りて諸の煩惱及び習を斷ずるも住すべからず、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得て當に法輪を轉ずべくも住すべからず、佛事を作し無量阿僧祇の衆生を度し涅槃に入るも住すべからず、四如意足の中に住すべからず、是三昧に入り住すること如恒河沙等の劫壽なるも住すべからず、我れ當に壽命無央數劫なるを得

【斯陀含一來等】欲界の六種結を斷じて天上に生じまた人間に來生し涅槃に入るを斯陀含といひ、人間に來りて涅槃に入るを一來といふ。【阿那含等】欲界の第七結を斷ずるを向阿那含といふ。【一種】第八結を斷ずるを一種子といふ。【阿那含】此間に死して色無色界に生じ涅槃に入り、復更に來生せず。【彼間涅槃】七種不還あり、中般は欲色の中有に涅槃し、生般は色界の初生に、有行般は色界に生じ加行せる後に、無行般は色界生後多功行なくして、上流般は色界に二生已上を受けて後に、無色般は欲界より直ちに無色に生じて般涅槃し、現般は欲

べくも住すべからず、三十二相一一相百福を以て莊嚴するも住すべからず、我が一世界十方恒河沙等の世界の如きも住すべからず、我が三千大千世界純ら是れ金剛なるも住すべからず、我が菩提樹是の如きの香を出すべく、衆生聞く者淫欲瞋恚愚癡有ること無く、亦聲聞辟支佛心も無く、是一切の人は必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、若し衆生是香を聞く者は、身病意病皆悉く除盡するも住すべからず、我が世界の中に色受想行識の名字有ること無からしむべくも住すべからず、我が世界の中に檀那波羅蜜の名字有ること無く、乃至般若波羅蜜の名字有ること無からしむべく、我が世界の中に四念處の名字有ること無く、乃至十八不共法の名字有ること無く、亦須陀洹の名字無く乃至佛の名字有ること無からしむべくも住すべからず、有所得を以ての故に。何を以ての故に、諸佛は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、一切諸法無所得の故に。是の如く憍尸迦、菩薩は般若波羅蜜の中に於て住すべからず、有所得を以ての故に。」

(六)爾時、舍利弗心に念ずらく「菩薩今云何が般若波羅蜜の中に住すべきや。」と、須菩提、舍利弗の心の所念を知り、舍利弗に語りて曰はく「汝が意に於て云何、諸佛何れの所に住するや。」舍利弗、須菩提に語らく「諸の佛法住處有ること無し、諸佛は色の中に住せず、受想行識の中に住せず、有爲性の中に住せず、無爲性の中に住せず、四念處の中に住せず、乃至十八不共法の中に住せず、一切種智の中に住せず。」「舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に是の如く住すべし、諸佛の諸法の中に住するが如く、住に非ず、不住に非ず。舍

界現身に般涅槃す。前六を彼間涅槃といふ。
【阿羅漢に向ふ】無色界に生じ身證を得涅槃に入るをいふ。
【無餘涅槃に入る】漏盡捨身の時をいふ。
【是三昧】四如意三昧をいふ。
【六】無所住の住たる、諸佛の如くなるを明す。
【七】說法の執ずべきなきを示す。
【語言等】言說平易なるも皆趣幽玄にして了知し難し。

利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に是の如く學すべし。我れ當に不住法に住すべきが故に。』

（七）爾時、會中に諸天子有りて是念を作さく、「諸夜叉の語言字句所說尙ほ了知すべし、須菩提の說く所の語言論議解釋般若波羅蜜は了かに知るべからず。」と。須菩提、諸天子の心に念ずる所を知りて、諸天子に語らく、『解せず知らずや。』諸天子言はく、『大德、解せず知らず。』と。須菩提、諸天子に語らく、『汝等法を知らざるべく、我れ論說する所無く、乃至我れ一字をも說かず、亦聽者も無し。何を以ての故に、諸字は般若波羅蜜に非ず、般若波羅蜜の中に聽者無し、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提に字無く說無し。諸天子、佛化人を化作し、是化人復四部衆、比丘比丘尼優婆塞優婆夷を化作し、化人は四部衆の中に於て說法するが如き、汝が意に於て云何、是中に說者有り、聽者有り、知者有りや否や。』諸天子言はく、『不、大德。』須菩提言はく、『一切法は皆化の如く、此中に說者無く聽者無く、知者無し。諸天子、譬へば人夢中に佛の說法を見るが如し。汝が意に於て云何、是中に說者有り、聽者有り、知者有りや不や。』諸天子曰はく、『不、大德。』須菩提、諸天子に語らく、『一切の諸法皆夢の如くして說く無く、聽く無く知者無し。諸天子、譬へば二人大深澗に在り、各一面に住して佛法衆を讚ずるに、二響有りて出づるが如し。諸天子の意に於て云何、是二響展轉相解するや不や。』諸天子言はく、『不、大德。』須菩提、諸天子に語らく、『一切法も亦是の如く說く無く、聽く無く知者無し。諸天子、譬へば工なる幻師の四衢道中に於て佛及

【是忍】説聴なく法の住すべきもののなしとするを云ふ

び四部衆を化作し、中に於て法を說くが如し。諸天子の意に於て云何、是中に說者有り、聽者有り、知者有りや不や。」諸天子言はく、「不、大德。」須菩提、諸天子に語らく、「一切諸法は幻の如く、說者無く、聽者無く知者無し。」爾時、諸天子心に念ずらく、「須菩提の說く所解し易からしめんと欲して、深を轉じ妙を轉ず。」と。須菩提諸天子の心に念ずる所を知り、諸天子に語て言はく、「色は深に非ず妙に非ず、受想行識は深に非ず妙に非ず。色の性は深に非ず妙に非ず、受想行識の性は深に非ず妙に非ず。眼の性乃至意の性、色の性乃至法の性、眼界の性乃至意界の性、眼識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因緣生の受乃至意觸因緣生の受、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切諸三昧門一切諸陀羅尼門、乃至一切種智一切種智の性は深に非ず妙に非ず。」諸天子復是念を作さく、「是所說の法の中に色を說かず、受想行識を說かず、眼乃至意觸因緣生の受を說かず、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を說かず、內空乃至無法有法空を說かず、四念處乃至十八不共法を說かず、陀羅尼門三昧門乃至一切種智を說かず、須陀洹果乃至阿羅漢果を說かず、辟支佛道を說かず、阿耨多羅三藐三菩提道を說かず、是法の中に名字語言を說かず。」と。須菩提諸天子の心に念ずる所を知り、諸天子に語て言はく、「是の如く是の如し、諸天子、是法の中に諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は不可說の相なり、是中に說者無く聽者無く知者無し、是を以ての故に、諸天子、善男子善女人は須陀洹果に住せんと欲し、須陀洹果を證せんと欲する者、是人は是忍を離れず。斯陀含阿那含阿羅漢果辟

【是の如く住す】一切法說聽なく諸觀滅し、語言斷ずる故に不可說不可聽不可知にして一切法に受なく著なし。法則ち涅槃に入る。

支佛道に住せんと欲し、證せんと欲するも、是忍を離れず。是の如く諸天子、菩薩摩訶薩は初發心より般若波羅蜜の中に是の如く住することを作すべし、說く無く聽く無きを以ての故に。』

【幻聽品】般若無著を知れば聽者も無し、幻人の如きを再說し、これを問法に堪ふる機とす。【一】衆生も諸法も聖果も幻夢の如くなるを說く。

摩訶般若波羅蜜經　卷第八

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

幻聽品第二十八

(一)爾時、諸天子心に念ずらく「何等の人を用ひて須菩提の所說法を聽かしむべきか」と。須菩提諸天子の心に念ずる所を知り、諸天子に語りて言はく「幻化人の法を聽くが如く、我れ是の如きの人を用ふべし。何を以ての故に、是の如き人は聞く無く、聽く無く、知る無く、證する無きが故に。」諸天子須菩提に語らく、「是衆生幻の如く、聽法者も亦幻の如く、衆生化の如く、聽法者も亦化の如くなるや。」「是の如く是の如し、諸天子、衆生幻の如く、聽法者も亦幻の如し、衆生化の如く、聽法者も亦化の如し。諸天子、我は幻の如く夢の如し、衆生乃至知者見者も亦幻の如く夢の如し。諸天子、色は幻の如く夢の如く、受想行識は幻の如く夢の如し、眼乃至意觸因緣生の受は幻の如く夢の如く、內空乃至無法有法空、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜は幻の如く夢の如し。諸天子、四念處乃至十八不共法は幻の如く夢の如く、須陀洹果は幻の如く夢の如く、斯陀含果阿那含果阿羅漢果、辟支佛道は幻の如く夢の如し。諸天子、佛道は幻の如く夢の如し。」

【法の涅槃に勝る】涅槃とは一切の苦盡き畢竟常樂にして一切の所歸處、是に勝るものなし今こゝにいふは假に說し、因緣に隨つて說くなり。

【二】深般若を受くるもの四人あるを說き終に受者も不可得なるを示す。

【摩訶拘絺羅】マハーカウシチイラ(Mahakausthila)舍利弗の舅、弟子中問答第一と稱せらる。

【迦旃延】カートヤーヤナ(Katyayana)佛弟子中論議第一と稱せらる。

【甚深等】諸法無定相を以て甚深といひ、思惟觀行滅するを難見といひ、般若に著せざる故難知難解といふ。

【寂滅微妙】三毒戲論を滅する故寂滅といひ、智慧妙味を得て常に滿足する故微妙といふ。

爾時、諸天子須菩提に問はく、「汝佛道を說く幻の如く夢の如くならば、汝涅槃を說くも亦幻の如く夢の如くなりや。」須菩提諸天子に語らく、「我れ佛道を幻の如く夢の如しと說く、我れ涅槃も亦幻の如く夢の如しと說く。若し法の涅槃に勝る者ありとも、我れ亦復幻の如く夢の如しと說くべし。何を以ての故に。諸天子、是れ幻夢と涅槃とは二ならず別ならざればなり。」

(二)爾時、慧命舍利弗、摩訶目揵連、摩訶拘絺羅、摩訶迦旃延、富樓那彌多羅尼子、摩訶迦葉及び無數千菩薩須菩提に問はく、「般若波羅蜜は是の如く甚深にして、見難く解し難く知り難く寂滅微妙なり。誰か當に受くべき者ぞ。」爾時、阿難、諸の大弟子及び諸の菩薩に語らく、「阿惟越致の諸の菩薩摩訶薩は、能く是甚深にして見難く解し難く知り難き、寂滅微妙の般若波羅蜜を受く。正見成就の人、漏盡の阿羅漢、所願已に滿じたるものも亦能く信受す。復次に善男子善女人多く佛を見たてまつり、諸佛の所に於て多く供養し、善根を種ゑ、善知識に親近して利根行り、是人能く受け、是法非法なりと言はず。」須菩提言はく、「空を以て色を分別せず、色を以て空を分別せず、受想行識も亦是の如し。無相無作を以て色を分別せず、色を以て無相無作を分別せず、受想行識も亦是の如し。無生無滅寂滅離を以て色を分別せず、色を以て無生無滅寂滅離を分別せず、受想行識も亦是の如し。眼乃至意觸因緣生の受も亦是の如し。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切三昧門一切陀羅尼門、須陀洹乃至阿羅漢辟支佛、一切智、

【阿惟越致の等】受者に四種人あるを明す。一、不退の菩薩一切法の不生滅を知り取著なき故。二、漏盡阿羅漢漏盡の故に所著なく無爲最上法を得て常に三三昧に住し般若に隨順する故、三、三種學人正見成就せる者、漏未盡なるも四信力の故。四、不退を得ざるも福德智慧利根清淨にして常に善知識に隨ふ菩薩

【護持】般若を以て利益し增長を得しむるをいふ。

【化生】說般若行の報として受くる生。

【捷疾辯】一切法を辯じて無礙なるをいふ。

【利辯】深く實相に入り鈍ならず。

【不盡辯】實相を辯じ無邊無盡の故

【不可斷辯】般若中戲論なき故問難斷絕なし。

空を以て一切智を分別せず、一切智を以て空を分別せず。空を以て一切種智を分別せず、一切種智を以て空を分別せず。無相無作無生無滅寂滅離も亦是の如し。』須菩提諸天子に語りて言はく『是般若波羅蜜の中に法として示す可き無く、法として說く可き無し。若し法として示す可き無く、法として說く可き無くんば、受人も亦得べからざるなり。』爾時、舍利弗須菩提に語りて言はく『般若波羅蜜の中には廣く三乘の教及び菩薩を護持するの教、初發意地より乃至十地、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至十八不共法、菩薩を護持するの教を說く。菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜を行じ、常に化生して神通を失せず、諸佛の國に遊びて善根を具足し、其欲する所に隨ひて諸佛を供養し、即ち願の如くなることを得。諸佛の所に從ひて法教を聽受し、乃至薩婆若にいたるまで初めより斷絕せず。未だ曾て三昧を離れざるの時、當に捷疾辯利辯不盡辯不可斷辯隨應辯義辯一切世間最上辯を得べし。』須菩提言はく『是の如く是の如し、舍利弗の言ふが如く、般若波羅蜜には廣く三乘の教、及び菩薩を護持するの教を說き、乃至菩薩摩訶薩は一切世間最上辯を得。不可得なるが故に。我乃至知者見者も不可得、色受想行識、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜も不可得、內空乃至無法有法空も不可得、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智も不可得なるが故に。』舍利弗須菩提に語らく、『何の因緣の故に、般若波羅蜜の中に廣く三乘を說きて而も不可得なるや。何の因緣の故に、般若波羅蜜の中に菩薩を護持し、何の因緣の故に、菩薩摩訶薩の捷疾辯乃至一切世間最上辯を得るも不可得なるが故

なりとするや。』須菩提舍利弗に語りて言はく、『內空を以ての故に、般若波羅蜜は廣く三乘を說きて不可得とし、外空乃至無法有法空の故に、廣く三乘を說きて不可得とす。內空の故に菩薩を護持し、乃至一切世間最上辯不可得なるが故なりとし、外空乃至無法有法空の故に菩薩を護持し、乃至一切世間最上辯不可得なるが故なりとす。』

散華品第二十九

(一)爾時、釋提桓因及び三千大千世界の中の四天王天乃至阿迦尼吒諸天是念を作さく、『是慧命須菩提法雨を雨さんとす、我等は寧ろ華を化作し、佛菩薩摩訶薩比丘僧、須菩提及び般若波羅蜜の上に散ずべし』と。即時に釋提桓因及び三千大千世界の中の諸天華を化作し、佛菩薩摩訶薩比丘僧及び須菩提の上に散じ、亦般若波羅蜜に供養す。是時三千大千世界の華悉く虛空の中に周徧し、化して華臺と成り、端嚴殊妙なり。須菩提心に念ずらく、『是諸天子の散ずる所の華、天上に曾て是の如きの華是に比する華を見ず、是化華は樹生の華に非ず、是れ諸天子の散ずる所の華は心樹より生じ、樹生の華に非ず』と。釋提桓因は須菩提の心に念ずる所を知り、須菩提に語りて言はく、『大德、是華は生華に非ず、亦意樹より生じたるに非ず。』須菩提釋提桓因に語りて言はく、『憍尸迦、汝是華は生華に非ず、亦意樹より生じたるに非ずと言ふか。憍尸迦、是華若し生法に非ずば名けて華と爲さず。』

【隨應辯】法愛なき故衆生の所應に隨つて法を說く。
【義辯】涅槃に趣く利益のことを說く。
【一切世間最上辯】一切世間第一のこと即ち大乘を說く。
【散華品】諸天供養の散華に因みて不生假名を說く。
【一】華の不生なるが如く諸法不生なるを說く。
【阿迦尼吒】アカニシュター（Akaniṣṭha）色究竟と譯す。
【樹生の華に非ず】諸法無生空寂の故に無生の化華を供養するなり。
【意樹】天樹なり意の所欲に隨つて得る故に。

【二】不壊假名諸法實相を説き般若の學を明かにす。
【假名】五蘊等因緣和合の法に名字を假説するは俗諦實相は第一義諦なり。

釋提桓因須菩提に語りて言はく、『大德、但だ是華生ぜざるや、色も亦生ぜず、受想行識も亦生ぜざるや。』須菩提言はく、『憍尸迦、但だ是華の生ぜざるのみに非ず、色も亦生ぜず、若し生ぜずば是れ名けて色と爲さず。受想行識も亦生ぜず、若し生ぜずば是れ名けて識と爲さず。六入六識六觸因緣生の諸受も亦是の如し。檀那波羅蜜生ぜず、若し生ぜずば是れ檀那波羅蜜と名けず。乃至般若波羅蜜も生ぜず、若し生ぜずば是れ般若波羅蜜と名けず。内空生ぜず、若し生ぜずば是れ内空と名けず。乃至無法有法空も生ぜず、若し生ぜずば是れ無法有法空と名けず。四念處生ぜず、若し生ぜずば是れ四念處と名けず。乃至十八不共法も生ぜず、若し生ぜずば是れ十八不共法と名けず。乃至一切種智も生ぜず、若し生ぜずば是れ一切種智と名けず。』

(一二)爾時、釋提桓因心に是を念ず『慧命須菩提は、其智甚深にして假名を壊せずして、而も諸法の相を説く』と。佛、釋提桓因の心に念ずる所を知り、釋提桓因に語りて言はく『是の如く、是の如し、憍尸迦、須菩提其智甚深にして假名を壊せずして諸法の相を説く。』釋提桓因佛に白して言さく『世尊、大德須菩提は云何が假名を壊せずして諸法の相を説くや。』佛釋提桓因に告げたまはく『色は但だ假名なり、須菩提も亦假名を壊せずして諸法の相を説く。受想行識は但だ假名なり、須菩提も亦假名を壊せずして諸法の相を説く。所以は何かん、是れ諸法の相は壊不壊無きが故に、須菩提の説く所も亦壊不壊無し。眼乃至意觸因緣生の諸受も亦是の如し。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、内空乃至無法有法空、四

【色を學せず】色空なれば自ら色空を學する能はず、諸法に他相を行じ自相を行ぜざるを以ての故に。

念處乃至十八不共法も亦是の如し、須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、菩薩道、佛道、一切智、一切種智も亦是の如し。須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、佛は是れ但だ假名なり、須菩提は假名を壞せずして諸法の相を說く。何を以ての故に、是諸法の相は壞不壞無きが故に、須菩提の說く所も亦壞不壞無し。是の如く、憍尸迦、須菩提は假名を壞せずして諸法の相を說く。」須菩提釋提桓因に語りて言はく「是の如し是の如し、憍尸迦、佛の說きたまふ所の如く諸法は但だ假名なり。菩薩摩訶薩は當に是知を作すべし、諸法は但だ假名なり。是の如く般若波羅蜜を學すべし。憍尸迦、菩薩摩訶薩の是の如く學を作すをば、色を學せず、受想行識を學せずと爲す。何を以ての故に、色の當に學すべき者を見ず、受想行識の當に學すべき者を見ざればなり。菩薩摩訶薩の是の如く學するをば、檀那波羅蜜を學せずと爲す。何を以ての故に、檀那波羅蜜の當に學すべき者を見ざればなり。乃至般若波羅蜜を學せず。何を以ての故に、般若波羅蜜の當に學す可き者を見ざればなり。是の如く學するをば、內空乃至無法有法空を學せずと爲す。何を以ての故に、內空乃至無法有法空の當に學すべき者を見ざればなり。是の如く學するをば、四念處乃至十八不共法を學せずと爲す。何を以ての故に、四念處乃至十八不共法の當に學すべき者を見ざればなり。是の如く學するをば、須陀洹果乃至一切種智を學せずと爲す。何を以ての故に、須陀洹果乃至一切種智の當に學すべき者を見ざればなり。」爾時、釋提桓因須菩提に語りて言はく「菩薩摩訶薩は何の因緣の故に色を見ず、乃至一切種智を見ざるや。」須菩提言はく「色は色空、乃

【無量無邊阿僧祇の佛法】一切種智を謂ずるなり。

【色の爲に學を增さず】若四大所造の和合身を見れば、著を生ぜざるも、是身中に男女等の相を起せば染著心の生ずるなり。是を增といひ、若し色を破りて空ならしめ心是の空に著するを減といふ。

至一切種智は一切種智空なり。憍尸迦、色空は色空を學せず、乃至一切種智空は一切種智空を學せず。憍尸迦、若し是の如く空を學せずば、是を空を學すと名く。不二を以ての故に、是菩薩摩訶薩は、色空を學す、不二を以ての故に、乃至一切種智空を學す。不二を以ての故に、若し色空を學せば、不二の故に、乃至一切種智空を學す。不二の故に、是菩薩摩訶薩は、能く檀那波羅蜜を學す。不二の故に、乃至能く般若波羅蜜を學す。不二の故に、能く四念處を學す。不二の故に、乃至能く十八不共法を學す。不二の故に、能く須陀洹果を學す。不二の故に、乃至能く一切種智を學す。不二の故に、是菩薩は、能く無量無邊阿僧祇の佛法を學す。若し能く無量無邊阿僧祇の佛法を學せば、是菩薩は、色の爲に學を增さず、色の爲に學を減ぜず、乃至一切種智の爲に學を增さず、一切種智の爲に學を減せず。若し色の爲に學を增減せず、乃至一切種智の爲に學を增減せずんば、是菩薩は、色の爲に學を受けず、色の爲に學を滅せず、亦受想行識の爲に學を受けず、亦爲に學を滅せず、乃至一切種智も亦爲に學を受けず、亦爲に學を滅せず。」舍利弗須菩提に語らく、「菩薩摩訶薩は、是の如く學して、色を受くるが爲に學せず、色を滅するが爲に學せず、乃至一切種智も、亦受くるが爲に學せず、亦滅するが爲に學せざるや。須菩提、何の因緣の故に、菩薩摩訶薩は色を受くるが爲に學せず、色を滅するが爲に學せず、乃至一切種智も、亦受くるが爲に學せず、亦滅するが爲に學せざるや。」須菩提言はく、「是れ色は受くべからず、亦色を受くる者も無し、乃至一切種智は受くべからず、亦受くる者も無し、內外空の故に。

【受けず滅せず】空の故に業果を受けず、因緣相續の故に滅せず。
【生ぜず滅せず】一切法の生相を破する故生ぜず、一切法の無常相を破する故滅せず。
【受けず捨てず】一切法の種種過罪を觀る故受けず、一切法の種種利益を觀る故捨てず。
【垢ならず淨ならず】諸法淸淨の故に垢ならず、諸法能く著心を生ずる故に淨ならず。

是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は、一切法を受けざるが故に、能く一切種智に到る。是時、舍利弗、須菩提に語らく『菩薩摩訶薩は、是の如く、般若波羅蜜を學して、能く一切種智に到るや。』須菩提言はく『菩薩摩訶薩は、是の如く般若波羅蜜を學して、能く一切種智に到る、一切法を受けざるが故に。』舍利弗、須菩提に語らく『若し菩薩摩訶薩、一切法に於て學を受けず滅せずして學ばば、菩薩摩訶薩は、云何が能く一切種智に到らんや。』須菩提言はく『菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるや、色の生ずることを見ず、色の滅することを見ず、色の受くることを見ず、色の受けざることを見ず、色の垢なることを見ず、色の淨なることを見ず、色の增すことを見ず、色の減ずることを見ず。何を以ての故に。舍利弗、色の色性、空なるが故に。受想行識も亦生ずることを見ず、亦滅することを見ず、亦受くることを見ず。亦受けざることを見ず、亦垢なることを見ず、亦淨なることを見ず、亦增すことを見ず、亦減ずることを見ず。何を以ての故に、識の識性、空なるが故に。乃至、一切種智も亦生ずることを見ず、亦滅することを見ず、亦受くることを見ず、亦受けざることを見ず、亦垢なることを見ず、亦淨なることを見ず、亦增すことを見ず、亦減ずることを見ず。何を以ての故に、一切種智の一切種智性、空なるが故に。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は、一切法生ぜず滅せず、受けず捨てず、垢ならず淨ならず、合せず散せず、增せず減ぜずと爲すが故に。般若波羅蜜を學して、能く一切種智に到る。學する所無く、到る所無きが故に。』

【三】須菩提の說法も佛力に由る、これ無所受なるが爲なるを說く。
【須菩提品中】須菩提は好んで空を說き修習する故、舍利弗智慧第一と雖も法愛を斷ずる故、須菩提品等といふなり。
【佛の神力】諸法不可得に立つ說法故須菩提の自力にあらずして佛力なりとす。
【受處】受相ある定法。
【合せず散ぜず】五衆の如を除きて如來なし。即ち是一相にして所謂無相なり。何者、一法無合無散の故に。五衆法相を離るるも亦無合無散なるり。

(三)爾時、釋提桓因、舍利弗に語らく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を何處に於て求むべきや。』舍利弗言はく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を當に須菩提品の中に於て求むべし。』釋提桓因、須菩提に語らく、『是れ汝が神力、舍利弗をして言はしむ。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を當に須菩提品の中に於て求むべしと。』須菩提、釋提桓因に語らく、『我が神力に非ず。』釋提桓因、須菩提に語らく、『是れ誰れの神力なりや。』須菩提言はく、『是れ佛の神力なり。』釋提桓因言はく、『一切法皆受處無し。何を以ての故に、是れ佛の神力なりと言ふや、無受處の相を離れて如來得べからず、如を離れて如來亦得べからざればなり。』須菩提、釋提桓因に語りて言はく、『是の如く是の如し、憍尸迦、無受處相を離れて如來得べからず、如を離れて如來亦得べからず、無受處相の中に如來得べからず、如の中に如來得べからず、色如の中に如來如得べからず、如來如の中に色如得べからず、色法相の中に如來法相得べからず、如來法相の中に色法相得べからず、受想行識法相の中、乃至一切種智如法も亦是の如し。憍尸迦、如來は色如の中に合せず散ぜず、受想行識如の中に合せず散ぜず。如來は色如を離れて合せず散ぜず、受想行識如を離れて合せず散ぜず。乃至一切種智も亦是の如し。如來は色法相の中に合せず散ぜず、受想行識法相の中に合せず散ぜず、如來は離色法相の中に合せず散ぜず、離受想行識法相の中に合せず散ぜず。乃至一切種智も亦是の如し。憍尸迦、是の如き等の一切法の中に合せず散ぜざる、是れ佛神力の用、受くる所の法無きが故に。

【四】以下般若は一法の中にも一法を離れても求むべからざるを明す。
【何處に等】先に舍利弗は須菩提品中にといへるが、今須菩提は義を以て說明す。

「(四)憍尸迦の言ふが如く、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を當に何處に於て求むべきやとは、憍尸迦、色の中に般若波羅蜜を求むべからず、亦色を離れて般若波羅蜜を求むべからず、受想行識の中に求むべからず、亦受想行識を離れて求むべからず。何を以ての故に、是れ般若波羅蜜、色受想行識、是一切の法は、皆合せず散ぜず、色無く形無く、對無く一相、謂ゆる無相なればなり。乃至一切種智の中に般若波羅蜜を求むべからず、亦一切種智を離れて般若波羅蜜を求むべからず。何を以ての故に、是れ般若波羅蜜、一切種智、是一切の法は皆合せず散ぜず、色無く形無く、對無く一相、謂ゆる無相なればなり。何を以ての故に、般若波羅蜜は色に非ず、亦色を離るるに非ず、受想行識に非ず、亦受想行識を離るるに非ず、乃至一切種智に非ず、亦一切種智を離るるに非ず。般若波羅蜜は色如に非ず、亦色如を離るるに非ず、受想行識如に非ず、亦受想行識如を離るるに非ず。般若波羅蜜は色法に非ず、亦色法を離るるに非ず、受想行識法に非ず、亦受想行識法を離るるに非ず。乃至一切種智如に非ず、亦一切種智如を離るるに非ず。般若波羅蜜は一切種智法に非ず、亦一切種智法を離るるに非ず。何を以ての故に、憍尸迦、是一切法は、皆所有無く得べからざればなり。所有無く得べからざるを以ての故に、般若波羅蜜は色に非ず、亦色を離るるに非ず、色如に非ず、亦色如を離るるに非ず、色法に非ず、亦色法を離るるに非ず、乃至一切種智に非ず、亦一切種智を離るるに非ず、一切種智如に非ず、亦一切種智如を離るるに非ず、一切種智法に非ず、亦一切種智法を離るるに非されればなり。」

【五】帝釋般若の大無量無邊を讃ずるに對し須菩提之を廣說す。

【摩訶波羅蜜】マハーパーラミター(Mahaparamita)大度彼岸と譯す。

【色大等】三際不可得の故、又無量無邊を以ての故に大といふ。是の無量無邊の五衆を破り、一切衆生をして無餘涅槃に入らしむる故に般若波羅蜜大なり。

(五)釋提桓因、須菩提に語らく「是摩訶波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり、無量波羅蜜無邊波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。諸の須陀洹須陀洹果は是般若波羅蜜の中より學成す。乃至諸の阿羅漢阿羅漢果、諸の辟支佛辟支佛道、諸の菩薩摩訶薩は皆是般若波羅蜜の中より學成す。能く衆生を成就し、佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得る、皆是より學成す。」須菩提釋提桓因に語りて言はく「是の如く是の如し、憍尸迦、是摩訶波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり、無量波羅蜜無邊波羅蜜は、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり、是中より須陀洹果乃至阿羅漢果辟支佛道を學成す。諸の菩薩摩訶薩は是般若波羅蜜の中より學成し、能く衆生を成就し、佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得る、已に得たり、今得、當に得べし。憍尸迦、色大なるが故に。般若波羅蜜も亦大なり。何を以ての故に、是色の前際得べからず、後際得べからず、中際得べからざればなり。受想行識大なるが故に、般若波羅蜜も亦大なり。何を以ての故に。受想行識の前際得べからず、後際得べからず、中際得べからざればなり。乃至一切種智も亦是の如し。是因緣を以ての故に、憍尸迦、是摩訶波羅蜜は是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。憍尸迦、色無量なるが故に、般若波羅蜜無量なり。何を以ての故に、色の量得べからざるが故に。憍尸迦、譬へば虛空の量の得べからざるが如し、色も亦是の如く量得べからず。虛空無量なるが故に、色無量なり、色無量なるが故に、般若波羅蜜無量なり、受想行識、乃至一切種智無量なるが故に、般若波羅蜜無量なり。何を以ての故に、一切種智の量得べからざればな

【緣無邊】四緣法畢竟空の故に無邊なり、復如法性實際無邊の故に般若波羅蜜無邊なり。

【緣無邊如】如法性實際は自然無爲相の故に無量無邊なり。五衆無邊とは觀力の故に強ひて無邊となす。

【衆生無邊】衆生多きを以て無量阿僧祇三世十方の衆生、人その數を知り得ざる故無邊といふ。又衆生空を說く故無邊といふも強ひて名けたるのみ。

り。譬へば虛空の量の得べからざるが如く、一切種智も亦是の如く量得べからず。虛空無量なるが故に、一切種智無量なり。一切種智無量なるが故に般若波羅蜜無量なり。是因緣を以ての故に、憍尸迦、是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜無量なり。憍尸迦、色無邊なるが故に、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜無邊なり。何を以ての故に、憍尸迦、是色の前際得べからず、後際得べからず、中際得べからざればなり。受想行識無邊なるが故に、般若波羅蜜無邊なり。何を以ての故に、受想行識の前際後際中際皆得べからざるが故に。乃至一切種智無邊なるが故に、般若波羅蜜無邊なり。何を以ての故に、一切種智の前後中際皆得べからざるが故に。是因緣を以ての故に、憍尸迦、是般若波羅蜜無邊、色無邊、乃至一切種智無邊なり。復次に憍尸迦、緣無邊なるが故に、般若波羅蜜無邊なり。』『須菩提、云何が緣無邊なるが故に、般若波羅蜜無邊なるや。』『須菩提言はく、『一切無邊の法を緣ずるが故に、般若波羅蜜無邊なり。』『云何が一切無邊の法を緣ずるが故に、般若波羅蜜無邊なるや。』『須菩提言はく、『無邊法性を緣ずるが故に、般若波羅蜜無邊なり。』復次に憍尸迦、無邊如を緣ずるが故に、般若波羅蜜無邊なり。』『釋提桓因言はく、『云何が無邊如を緣ずるが故に、般若波羅蜜無邊なるや。』『須菩提言はく、『如無邊なるが故に、緣も亦無邊なり。緣無邊なるが故に、如も亦無邊なり。此因緣を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜無邊なり。復次に憍尸迦、衆生無邊なるが故に、般若波羅蜜無邊なり。』『釋提桓因須菩提に問はく、『云何が衆生無邊なるが故に、般若波羅蜜無邊なるや。』『須菩提言はく、『意に於て云何、何等の法

【所趣なし】衆生に定法の趣向すべきものあるなきを以ての故に。

【三歎品】佛普く在會の大衆諸天を觀察し給ふ故に又顧視品ともいふ。諸天三反稱歎する故此品の名あり。

【一】諸天須菩提所說の般若を讃じ行人を尊重すべきを說く。

【諸天王】四天王三十三天帝釋乃至梵天王。

【伊賒那】イーシヤーナ(Īśāna)自在主と譯す。大自在天王並にその眷屬。

をか衆生と名くるや。』釋提桓因言はく、『法の衆生と名くるもの有ること無し、假名の故に衆生と爲す。此名字本法有ること無く、亦所趣無きも、强ひて爲して名を作す。憍尸迦、汝が意に於て云何、是般若波羅蜜の中に衆生實に有りと說くや不や。』釋提桓因言はく、『無きなり。』『憍尸迦、若し般若波羅蜜の中に實に有ることを說かずば、衆生無邊も亦得べからざるなり。憍尸迦、汝が意に於て云何、諸佛は恆河沙の劫壽に、衆生と衆生の名字とを說くとも、頗る衆生法有り生有り滅有りや不や。』釋提桓因言はく、『不、何を以ての故に、衆生本より已來常に淸淨なるが故に。』是因緣を以ての故に、憍尸迦、衆生無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なりと。』

三歎品第三十

(一)爾時、諸天王及び諸天、諸梵王及び諸梵天、伊賒那天及び諸神仙並に諸天女同時に三反稱歎す、『快い哉快い哉、慧命須菩提の說く所の法は、皆是れ佛出世間の因緣、恩力もて是敎を演布す。若し菩薩摩訶薩有りて、是般若波羅蜜を行じて遠離せざれば、我が輩是人を視て佛の如くす。何を以ての故に、是般若波羅蜜の中に法の得べき無しと雖も、謂ゆる色受想行識乃至一切種智、而も三乘の敎、謂ゆる聲聞乘辟支佛乘佛乘有ればなり。』爾時、佛諸天子に告げたまはく、『是の如く是の如し、諸天子、汝が言ふ所の如く、是般若波

【神仙】天と人の二種あり。
【天女】帝釋夫人舍脂等諸天女。
【三反稱歎】歡喜の至りにて鄭重に稱讚するなり。
【佛出世間の因緣】佛は三界の迷流を斷たんが爲に出づ之を斷つは般若に因ればなり。
【恩力】慈悲の恩德力。
【佛の如くす】法を尊重する故に深法般若を行ずるものを佛と等しく供養す。
【是の般若等】般若空にして三乘ある故に斷ならず三乘あるを著せざれば常ならず、三乘の二事中、般若定相を取らざるなり
【我れ昔等】釋尊自己成佛の本事を引きて記す。
【然燈佛】梵にディーパンカラ(Dīpaṅkara)といふ本釋尊に授記の佛。

羅蜜の中に法の得べき無しと雖も、謂ゆる色受想行識乃至一切種智、而も三乘の教、謂ゆる聲聞乘辟支佛乘佛乘有り。諸天子、若し菩薩摩訶薩有りて、是般若波羅蜜を行じて遠離せざれば、是人を視るに當に佛の如くすべし、無所得を以ての故に。』『何を以ての故に、是般若波羅蜜の中に廣く三乘の教、謂ゆる聲聞辟支佛佛乘を說くや。檀那波羅蜜の中に佛得べからず、檀那波羅蜜を離れて佛亦得べからず。乃至般若波羅蜜の中にも佛得べからず、般若波羅蜜を離れて佛亦得べからず。內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法一切種智も亦是の如くなればなり。』佛諸天子に語りたまはく『菩薩摩訶薩、若し能く是一切法、謂ゆる檀那波羅蜜乃至一切種智を學せば、是事を以ての故に、當に是菩薩摩訶薩を視ること佛の如くすべし。諸天子、我れ昔然燈佛の時に於て、華嚴城內四衢道中に佛を見たてまつり法を聞きて、卽ち檀那波羅蜜行を離れず、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜行を離れず、內空乃至無法有法空四念處乃至八聖道分を離れず、四禪四無量心四無色定、一切三昧門一切陀羅尼門を離れず、四無所畏佛十力四無礙智十八不共法大慈大悲及び餘の無量諸佛法行を離れざることを得たり、無所得の故に。是時に然燈佛は我に記す、當來世一阿僧祇劫を過ぎて當に佛と作り、釋迦牟尼多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀毘侈遮羅那修伽度路伽憊無上士調御丈夫天人師佛世尊と號すべしと。』爾時、諸天子佛に白して言さく『世尊、甚だ稀有なり、是般若波羅蜜は能く諸の菩薩摩訶薩をして薩婆若を得しむ。色に於て取らず捨てざるが故に、受想行識に於て取らず捨てざ

【釋迦牟尼等】シヤーキヤムニ・タターガタ・アルハタン・サミヤクサンブツダ・ヴイドヤーチヤラナ・サンパンナ・スガタ・ローカヴイツト(Śakyamuni-tathāgata-arhan-samyaksambuddha-vidyācarana-sampanna-sugata-lokavit) 能仁寂默如來應供正徧智明行足善逝世間解と譯す。

【二】佛帝釋諸天に般若の功德を說く。

【四衆和合】比丘等僧俗男女の和合せる敎團。

【普觀】會中の衆生をして佛の願念を知らしめんとすれば、自輕ならずしてよく聽法に堪ふ。

【是般若】諸佛所說の語言名字書寫經卷にして、實相智慧を宣示するもの。

るが故に、乃至一切種智に於て取らず捨てざるが故に。』

(二)爾時、佛四衆和合の比丘比丘尼優婆塞優婆夷及び諸の菩薩摩訶薩、並に四天王天乃至阿迦尼吒諸天、皆會坐せるを觀じ、普く是を觀じ已りて佛釋提桓因に告げて言はく、『憍尸迦、若は菩薩摩訶薩、若は比丘若は比丘尼、若は優婆塞若は優婆夷、若は諸天子若は諸天女、是般若波羅蜜に於て、若し聽受し持し、親近し讀誦し、他の爲に說き、正憶念して薩婆若心を離れずば、諸天子、是人魔若は魔民、其便を得ること能はず。何を以ての故に是善男子善女人は諦かに色空を了知す、空は空の便を得ること能はず。無相は無相の便を得ること能はず、無作は無作の便を得ること能はず。諦かに受想行識空を了知す、空は空の便を得ること能はず、乃至無作は無作の便を得ること能はず。乃至諦かに一切種智空を了知す、空は空の便を得ること能はず、乃至無作は無作の便を得ること能はず。何を以ての故に、是諸法は自相性得べからず、事として便を得べき無し、誰か惱を受くる者ぞ。復次に憍尸迦、是善男子善女人は人非人、其便を得ること能はず。何を以ての故に、是善男子善女人は一切衆生の中に善く慈心悲喜捨心を修す、無所得を以ての故に。憍尸迦、是善男子善女人は終に横死せず。何を以ての故に、是善男子善女人は檀那波羅蜜を行じ、一切衆生に於て等心供給するが故に。復次に憍尸迦、三千大千世界の四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵天、光音天、徧淨天、廣果天、是諸天の中に阿耨多羅三藐三菩提心を發す者有り。未だ是般若波羅蜜を聞かず、受持し親近せざる是諸天

子、今應に聞きて受持し親近し讀誦し正憶念し、薩婆若心を離れざるべし。復次に憍尸迦、諸の善男子善女人、是般若波羅蜜を聞きて受持し親近し讀誦し正憶念し、薩婆若心を離れずば、是諸の善男子善女人、若は空舍に在り、若は曠野に、若は人住處に在りて、終に怖畏せず。何を以ての故に、是善男子善女人は內空に於て明かなり、無所得を以ての故に。外空乃至無法有法空に於て明かなり、無所得を以ての故に。』

(三)爾時、三千大千世界中の諸の四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天乃至首陀婆諸天、佛に白して言さく『世尊、是善男子善女人は能く般若波羅蜜を受持し、親近し讀誦し正憶念して、薩婆若心を離れずば、我等常に當に守護すべし。何を以ての故に、世尊、菩薩摩訶薩の因緣を以ての故に、三惡道を斷じ、天人貧を斷じ、諸の災患疾病飢餓を斷ず。菩薩摩訶薩の因緣を以ての故に、便ち十善道世間に現れ、四禪四無量心四無色定、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至一切種智有り。菩薩の因緣を以ての故に、世間便ち刹利大姓婆羅門大姓、居士大家諸王及び轉輪聖王、四天王天乃至阿迦尼吒天に生ずること有り菩薩の因緣を以ての故に、須陀洹須陀洹果、乃至阿羅漢阿羅漢果、辟支佛辟支佛道有り。菩薩の因緣を以ての故に、衆生を成就し佛國土を淨むる有り、便ち諸佛世に出現する有り便ち法輪を轉ずる有り、佛寶法寶比丘僧寶有ることを知る。世尊、是因緣を以ての故に、一切世間の諸天及び人阿修羅は、是菩薩摩訶薩を守護すべし。佛、釋提桓因に語りたまは

【魔】自在天主。廣くは煩惱、五蘊、死魔、天魔とあり、佛菩薩は三界を脫するを以て魔界を滅する怨敵とす。

【便り】菩薩道力少きが故に誘惑惱亂し恐怖し愛著せしむるをいふ。

【是善男子等】今菩薩とせず、善男子善女人とし、善持讀等の功德の及ぶ所を示すと倶に空觀によらずして四無量心を述ぶ、人非人の怨害小にして魔怨の如く大ならざればなり。

【三】諸天般若行者を守護すべきを說く。

【三惡道を斷じ等】能く衆生の十善を遮する故に。

【天人貧】人天の善道に於ても貧困なるをいふ。

【如かず】一に薩婆若心を用ひて般若を行ず、二に六度等の功德を離れ

ず三に三惡道を斷じ三乘を出生す。是れ菩薩初發心なるも二乘人にすぐるるなり。

【滅諍品】現世功德を說き般若の善惡諸法の諍亂を滅するに依るものとす。

【一】現世功德滅諍を說く。

く、『是の如く是の如し、憍尸迦、菩薩摩訶薩の因緣を以ての故に、三惡道を斷じ、乃至三寶世に出現す。是を以ての故に、諸天及び人阿修羅は、常に是菩薩摩訶薩を守護し、供養し恭敬し、尊重し讃歎すべし。憍尸迦、是菩薩摩訶薩を供養し恭敬し尊重し讃歎せば、卽ち是れ我を供養するなり。是を以ての故に、是諸の菩薩をば、摩訶薩諸天及び人阿修羅は常に守護し、供養し恭敬し、尊重し讃歎すべし。憍尸迦、若は三千大千世界の中に滿つる聲聞辟支佛、譬へば竹葦稻麻叢林の如くなるを、若し善男子善女人有りて、供養し恭敬し、尊重し讃歎するも、初發心の菩薩摩訶薩を供養し恭敬し、尊重し讃歎するに如かず、六波羅蜜所得の福德を離れず。何を以ての故に、聲聞辟支佛の因緣を以てせざるが故に、菩薩摩訶薩及び諸佛の世に出現する有り、菩薩摩訶薩の因緣有るを以ての故に、聲聞辟支佛諸佛の世に出現する有り、是を以ての故に、憍尸迦、是諸の菩薩摩訶薩をば、一切世間の諸天及び人阿修羅は常に守護し、供養し恭敬し、尊重し讃歎すべし。』

滅諍品第三十一

(一)爾時、釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、甚だ奇にして希有なり。諸の菩薩摩訶薩、是般若波羅蜜を若し聞き、受持し親近し讀誦し、他の爲に說き、正憶念する時には、是の如く今世に功德を得、亦衆生を成就し佛國土を嚴淨し、一佛國より一佛國に至りて諸佛を

【今世の功德】先にいひし現德を得る點を廣說す。
【梵志】一切出家の外道。其法に愛著し實相空法を聞くも信ぜず故に破壞せんと欲す。
【增上慢人】佛弟子中禪定を得るも聖道を得ず、實相空を聞きて愁惱する者。
【願に從はず】惡心滅し魔のために錯亂をなすに至らず。

供養するに、欲する所の供養の其意に隨て卽ち得、諸佛に從つて法を聞き、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで終に中忘せず、亦家成就し、母成就し、眷屬成就し、相成就し、光明成就し、眼成就し、耳成就し、三昧成就し、陀羅尼成就することを得。是菩薩方便力を以ての故に、身を變じて佛の如く一國より一國に至る、無佛の處に到りて檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を讚じ、四禪四無量心四無色定を讚じ、四念處乃至十八不共法を讚ず。方便力を以て、而して爲に法を說き、三乘法を以て衆生を度脫す、謂ゆる聲聞辟支佛乘なり。世尊、快い哉、希有なり。般若波羅蜜を受持すれば、已に五波羅蜜乃至十八不共法を總攝すと爲すや。亦須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道佛道一切智一切種智を攝するや。」佛釋提桓因に告げたまはく、「是の如く是の如し、憍尸迦、般若波羅蜜を持すれば、已に五波羅蜜乃至一切種智を總攝すと爲す。復次に憍尸迦、是般若波羅蜜を受持し、親近し讀誦し、他の爲に說き、正憶念せば、是善男子善女人の得る所の今世の功德、汝一心に諦に聽け。』釋提桓因言さく、『唯然り、世尊、教を受けん』佛釋提桓因に告げて言はく、『憍尸迦、若し外道諸梵志、若は魔、若は魔民、若は增上慢人有りて、菩薩の般若波羅蜜心を乖錯し破壞せんと欲し、是諸人適此心を生ずるも、卽時に滅し去りて終に願に從はず。何を以ての故に、憍尸迦、菩薩摩訶薩は長夜に檀那波羅蜜を行じ、尸羅羼提毘梨耶禪那般若波羅蜜を行ず。衆生長夜に貪諍するを以ての故に、菩薩は悉く內外の物を捨てて衆生を檀那波羅蜜の中に安立す。衆生長夜に破戒するを以ての故に、菩薩は悉く內外の

【摩祇】マガ(Magi)藥の名。
【蟲】蝦蟇と大論はいふ。

法を捨てて衆生を戒に安立す。衆生長夜に鬪諍するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて衆生を忍辱に安立す。衆生長夜に懈怠するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて衆生を精進に安立す。衆生長夜に亂心するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて衆生を禪那に安立す。衆生長夜に愚癡なるを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて衆生を般若波羅蜜に安立す。衆生長夜に愛結を爲すが故に生死に流轉す、是菩薩摩訶薩は方便力を以て衆生の愛結を斷じ、衆生を四禪四無量心四無色定、四念處乃至八聖道分、空無相無作三昧に安立し。衆生を須陀洹果乃至阿羅漢果辟支佛道佛道に安立す。憍尸迦、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行じ、現世の功徳と後世の功徳とを得と爲す。阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ、所願滿足して無餘涅槃に入る。憍尸迦、是を菩薩摩訶薩の後世の功徳と爲す。復次に憍尸迦、善男子善女人、是般若波羅蜜を若し聞き、受持し親近し讀誦し、他の爲に説き、正憶念せば、其所住處は魔若は魔民、若は外道梵志、增上慢人、般若波羅蜜を輕毀し難問し破壞せんと欲するも、終に成ずること能はず。其人の惡心轉た滅して功徳轉た增す、是般若波羅蜜を聞くが故に、漸く三乘道を以て衆苦を盡すことを得。憍尸迦、譬へば藥有り摩祇と名く、蛇有り飢て行きて食を求め、蟲を見て噉はんと欲するに蟲藥所に趣く、藥の氣力の故に、蛇は前むこと能はずして、即ち自ら還り去るが如し。何を以ての故に、是藥力能く毒に勝るを以ての故に。憍尸迦、摩祇の藥は是の如き力あり。若し善男子善女人、是般若波羅蜜を若し聞き、受持し親近し讀誦し、

【諸蓋結使纒】五蓋十結九十八使十纏等、何れも煩惱。
【慳貪乃至無智】六弊是れ六度に反す。

【二】諸天諸佛の擁護により善法轉增の功德を明す。

他の爲に說き正憶念せば、若し種種の鬪諍起り來りて破壞せんと欲する者有るも、般若波羅蜜の威力を以ての故に、所起の處に隨ひて卽ち疾く消滅し、其人は卽ち善心を生じて功德を增益す。何を以ての故に、是般若波羅蜜は能く諸法の諍亂を滅す。何等をか諸法とする。謂ゆる婬怒癡、無明乃至大苦聚、諸蓋結使纒、我見人見衆生見、斷見常見、垢見淨見、有見無見、是の如きの一切の諸見。慳貪犯戒瞋恚懈怠亂意無智、常想樂想淨想我想、是の如き等の愛行。色に著し、受想行識に著し、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜に著し、內空外空內外空乃至無法有法空に著し、四念處乃至十八不共法に著し、一切智一切種智に著し、涅槃に著するなり。是一切法の諍亂盡く能く消滅して增長せしめず。

(二)復次に憍尸迦、三千大千世界の中の諸の四天王天、諸の釋提桓因、諸の梵天王乃至阿迦尼吒天は、常に是善男子善女人の能く般若波羅蜜を聞き、受持し、供養し讀誦し、他の爲に說き、正憶念する者を守護す。十方現在の諸佛も亦共に、是善男子善女人の能く聞き、受持し供養し讀誦し、他の爲に說き、正に般若波羅蜜を憶念する者を擁護す。是善男子善女人は不善法を滅し、善法轉た增す、謂ゆる檀那波羅蜜轉た增す、無所得を以ての故に。乃至般若波羅蜜轉た增す、無所得を以ての故に。內空轉た增す、乃至無法有法空轉た增す、無所得を以ての故に。四念處乃至十八不共法轉た增す、無所得を以ての故に。諸三昧門諸陀羅尼門、一切智一切種智轉た增す、無所得を以ての故に。是善男子善女人の說く

所の人皆信受し、親友堅固にして無益の語を說かず、瞋恚の覆ふ所と爲らず、憍慢慳貪嫉妬の覆ふ所と爲らず。是人自ら殺生せず、人を敎へて不殺生ならしめ、不殺生の法を讃歎し、亦不殺生の者を歡喜し讃歎す。自ら不與取を遠離し、亦人を敎へて不與取を遠離せしめ、不與取を遠離する法を讃じ、亦不與取を遠離する者を歡喜し讃歎す。自ら邪婬せず、人を敎へて邪婬せしめず、不邪婬の法を讃じ、亦不邪婬の者を歡喜し讃歎す。自ら妄語せず、人を敎へて妄語せざらしめ、不妄語の法を讃じ、亦不妄語の者を歡喜し讃歎す。兩舌惡口、無利益語も亦是の如し、自ら貪らず、人を敎へて貪らざらしめ、不貪の法を讃じ、亦不貪の者を歡喜し讃歎す。不瞋惱不邪見も亦是の如し。自ら檀那波羅蜜を行じ、人を敎へて檀那波羅蜜を行ぜしめ、檀那波羅蜜の法を讃じ、亦檀那波羅蜜を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら尸羅波羅蜜を行じ、人を敎へて尸羅波羅蜜を行ぜしめ、尸羅波羅蜜の法を讃じ、亦尸羅波羅蜜を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら羼提波羅蜜を行じ、人を敎へて羼提波羅蜜を行ぜしめ、羼提波羅蜜の法を讃じ、亦羼提波羅蜜を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら毘梨耶波羅蜜を行じ、人を敎へて毘梨耶波羅蜜を行ぜしめ、毘梨耶波羅蜜の法を讃じ、亦毘梨耶波羅蜜を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら禪那波羅蜜を行じ、人を敎へて禪那波羅蜜を行ぜしめ、禪那波羅蜜の法を讃じ、亦禪那波羅蜜を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら般若波羅蜜を行じ、人を敎へて般若波羅蜜を行ぜしめ、般若波羅蜜の法を讃じ、亦般若波羅蜜を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら內空を修し、人を敎へて內空を修せしめ、內空の法を讃じ、

亦內空を修する者を歡喜し讚歎す。乃至自ら無法有法空を修し、人を敎へて無法有法空を修せしめ、無法有法空の法を讚じ、亦無法有法空を修する者を歡喜し讚歎す。自ら一切三昧の中に入り、人を敎へて一切三昧に入らしめ、一切三昧の法を讚じ、亦一切三昧を行ずる者を歡喜し讚歎す。自ら陀羅尼を得、人を敎へて陀羅尼を得しめ、陀羅尼の法を讚じ、亦陀羅尼を得る者を歡喜し讚歎す。自ら初禪に入り、人を敎へて初禪に入らしめ、初禪の法を讚じ、亦初禪に入る者を歡喜し讚歎す。二禪三禪四禪も亦是の如し。自ら慈心に入り、人を敎へて慈心に入らしめ、慈心に入る法を讚じ、亦慈心に入る者を歡喜し讚歎す。悲喜捨心も亦是の如し。自ら無邊空處に入り、人を敎へて無邊空處に入らしめ、無邊空處の法を讚じ、亦無邊空處に入る者を歡喜し讚歎す。無邊識處、無所有處、非有想非無想處も亦是の如し。自ら四念處を修し、人を敎へて四念處を修せしめ、四念處の法を讚じ、亦四念處を修する者を歡喜し讚歎す。四正勤、四如意足、五根五力、七覺分八聖道分も亦是の如し。自ら空無相無作三昧を修し、人を敎へて空無相無作三昧を修せしめ、空無相無作三昧の法を讚じ、亦空無相無作三昧を修する者を歡喜し讚歎す。自ら八背捨に入り、人を敎へて八背捨に入らしめ、八背捨の法を讚じ、亦八背捨に入る者を歡喜し讚歎す。自ら九次第定に入り、人を敎へて九次第定に入らしめ、九次第定の法を讚じ、亦九次第の定に入る者を歡喜し讚歎す。自ら佛の十力四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法を修するも亦是の如し。自ら無錯謬法を行じ、自ら常捨法を行じ、人を敎へて無錯謬法常捨法を

【是の如き思惟等】煩惱未斷の故に時に慳等の煩惱を起す、其時思惟して其心を省み、若し布施せずば、四事功德を失ふ、方便して布施を具足すべし等とすべし。

行ぜしめ、無錯謬法常捨法を讚じ、亦無錯謬法常捨法を行ずる者を歡喜し讚歎す。自ら一切種智を得、人を教へて一切種智を得しめ、一切種智の法を讚じ、亦一切種智を得る者を歡喜し讚歎す。是菩薩摩訶薩の六波羅蜜を行ずる時に、有らゆる布施を衆生と共に已に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、無所得を以ての故に。有らゆる持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を衆生と共に已に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、無所得を以ての故に。是善男子善女人、是の如く六波羅蜜を行ずる時に是念を作さく「我れ若し布施せずば、當に貧窮の家に生ずべく、衆生を成就し、佛國土を淨むること能はず、亦一切種智を得ること能はざるべし。我れ若し持戒せずば、當に三惡道の中に生ずべく、尚人身をも得ざるべし。況んや能く衆生を成就し、佛國土を淨め、一切種智を得んや。我れ若し忍辱を修せざれば、則ち當に諸根毀壞し、色具足せず、菩薩の具足せる色身ありて衆生見る者必ず阿耨多羅三藐三菩提に至ることを得る能はず、亦具足色身を以て衆生を成就し、佛國土を淨むることを得、一切種智を得ること能はず。我れ若し懈怠せば菩薩道を得ること能はず、亦衆生を成就し、佛國土を淨むること得、一切種智を得ること能はず。我れ若し亂心せば、諸の禪定を生ずることを得る能はず。此禪定を以て衆生を成就し、佛國土を淨め、一切種智を得ること能はず。我れ若し智無ければ、方便智を得、方便智を以て聲聞、辟支佛地を過ぎ、衆生を成就し、佛國土を淨め、一切種智を得ること能はず」と。是菩薩復是の如き思惟を作さく「我れ慳貪に隨ふが故に、檀那波羅蜜を具足せざることあるべからず。犯戒に隨ふが故に、尸羅波羅

蜜を具足せざることあるべからず。瞋恚に隨ふが故に、羼提波羅蜜を具足せざることあるべからず。懈怠に隨ふが故に、毘梨耶波羅蜜を具足せざることあるべからず。亂意に隨ふが故に。禪那波羅蜜を具足せざることあるべからず。癡心に隨ふが故に、般若波羅蜜を具足せざることあるべからず。若し檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足せずば、我れ終に一切種智を成就すること能はず」と。是の如きの善男子善女人、是般若波羅蜜を受持し、親近し讀誦し、他の爲に說き。正憶念して、亦薩婆若心を離れずば、是今世後世の功德を得。』釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、希有なり、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を薩婆若心に廻向することを爲すが故に、亦高心せざることを爲すが故に。』佛、釋提桓因に告げて言はく、『憍尸迦、云何ぞ菩薩摩訶薩は、薩婆若心に廻向することを爲すが故に、亦高心せざることを爲すが故にといふや。』釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩、若し世間の檀那波羅蜜を行じ、諸佛辟支佛聲聞、及び諸の貧窮乞匃行路人に布施するも、是菩薩方便無きが故に、高心を生ず。若し世間の尸羅波羅蜜を行ずるも、我れ尸羅波羅蜜を行じたり、我れ能く尸羅波羅蜜を具足したりと言はば、方便無きが故に高心を生ず。我れ羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を行じ、我れ般若波羅蜜を行ずるも、我れ般若波羅蜜を修したりと言はば、是れ世間の般若波羅蜜なるを以ての故に、方便無きが故に高心を生ず。世尊、菩薩は世間の四念處を修する時、自ら念言すらく、「我れ四念處を修す、我れ四念處を具足す」と、方便力無きが故に高心を生ず。

我れ四正勤四如意足、五根五力、七覺分八聖道分を修す、自ら念言すらく「我れ空無相無作三昧を修し、我れ一切三昧門を修し、當に一切陀羅尼門を得べし、我れ佛十力四無所畏十八不共法を修し、我れ當に衆生を成就すべし、我れ當に佛國土を淨むべし、我れ當に一切種智を得べし」と。吾我に著し方便力無きが故に高心を生ず。世尊、是の如きの菩薩摩訶薩は世間の善法を行じ、吾我に著するが故に高心を生ず。世尊、若し菩薩摩訶薩出世間の檀那波羅蜜を行ずれば、施者を得ず、受者を得ず、施物を得ず。是の如きの菩薩摩訶薩は出世間の檀那波羅蜜を行じて、薩婆若に廻向することを爲すが故に、亦高心を生ぜず。尸羅波羅蜜を行ずるも、尸羅得べからず。羼提波羅蜜を行ずるも、羼提得べからず。毘梨耶波羅蜜を行ずるも毘梨耶得べからず。禪那波羅蜜を行ずるも、禪那得べからず。般若波羅蜜を行ずるも、般若得べからず。四念處を修するも、四念處得べからず。乃至十八不共法を修するも、十八不共法得べからず。大慈大悲を修するも、大慈大悲得べからず。乃至一切種智を修するも、一切種智得べからず。世尊、是の如きの菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を薩婆若に廻向することを爲すが故にといふ」と。

【大明品】般若は大明呪にして持誦の功德大なることと寶塔建立の比にあらざるを述ぶ。

【一】般若受持の功德は、傷害を免れ煩惱を除くを述ぶ。

【命を失はず】必定報は免れ難きも不定報は免るべく不失命の益ありとす。

【纒垢】煩惱に名く。

【蠱道】左道なり呪咀厭勝の法にて調伏するなり。

摩訶般若波羅蜜經　卷第九

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

大明品第三十二

(一)爾時、佛釋提桓因に告げて言はく、『若し善男子善女人有りて是深般若波羅蜜を聞き、受持し親近し讀誦し正憶念し、薩婆若心と離れずば、兩陣戰ふ時、是善男子善女人は般若波羅蜜を誦するが故に、軍陣中に入るも終に命を失はず刀箭も傷けず。何を以ての故に、是善男子善女人は、長夜に六波羅蜜を行じ、自ら婬欲の刀箭を除き、亦他人の婬欲の刀箭をも除く、自ら瞋恚の刀箭を除き、亦他人の瞋恚の刀箭をも除く、自ら愚癡の刀箭を除き、亦他人の愚癡の刀箭をも除く、自ら邪見の刀箭を除き、亦他人の邪見の刀箭をも除く、自ら纒垢の刀箭を除き、亦他人の纒垢の刀箭をも除く、自ら諸結使の刀箭を除き、亦他人の結使の刀箭をも除く。憍尸迦、是因緣を以て、是善男子善女人は、刀箭の傷くる所と爲らず。復次に憍尸迦、是善男子善女人、是深般若波羅蜜を聞き、受持し、親近し、讀誦し、正憶念して、薩婆若心と離れずば、若は毒藥を以て熏ずるも、若は蠱道を以てするも、若は火坑を以てするも、若は深水を以てするも、若は刀殺せんと欲するも、若は其毒を與ふ

【大明呪】外道の呪を明呪といふに對し大明呪とし、諸佛成就の勝法なるを示す。

【所止】安置せらるること。

【菩提樹等】佛この樹の下に般若力を以て成佛せる力勢により威徳あるをいふ。

るも、是の如きの衆惡皆傷くること能はず。何を以ての故に、是般若波羅蜜は是れ大明呪、是れ無上明呪なればなり。若し善男子善女人、是明呪中に於て學べば、自ら身を惱まさず、亦他を惱まさず、亦兩つながら惱まさず。何を以ての故に、是善男子善女人は我を得ず、衆生を得ず、壽命を得ず、乃至知者見者皆得べからず、色受想行識得べからず、乃至一切種智も亦得べからず、得ざるを以ての故に、自ら身を惱まさず、亦他を惱まさず、亦兩つながら惱まさざるなり。是大明呪を學ぶが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切衆生の心を觀て、意に隨ひて説法す。何を以ての故に、過去の諸佛も、是大明呪を學びて阿耨多羅三藐三菩提を得たり、當來の諸佛も、是大明呪を學びて當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、今現在の諸佛も、是大明呪を學びて阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。復次に憍尸迦、般若波羅蜜、若し但だ經卷を書寫し、舍に於て供養するのみにして、受けず讀まず、誦せず説かず、正憶念せざる有るも、是處、若は人若は非人、其便を得ること能はず。何を以ての故に、是般若波羅蜜は三千世界中の諸の四天王天、乃至阿迦尼吒諸天子、及び十方無量阿僧祇世界中の諸の四天王諸天乃至阿迦尼吒諸天等の守護する所なるが故に、是般若波羅蜜の所止する處は、諸天皆來りて供養し恭敬し、尊重し讃歎し、禮拜し已りて去る。是善男子善女人は但だ般若波羅蜜經卷を書寫し、舍に於て供養するのみにして受けず讀まず、誦せず説かず正憶念せざるも、今世に是の如きの功徳を得。譬へば若は人若は畜生來りて菩提樹下に入るが如し、諸邊内外設ひ人非人有りて惡意を持て來たるも、其

便を得ること能はず。何を以ての故に、是處は過去の諸佛、中に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、未來の諸佛、現在の諸佛も亦中に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、佛を得已りて、一切衆生に無恐無畏を施し、無量阿僧祇の衆生をして天上人中の福樂を受けしめ、亦無量阿僧祇の衆生をして須陀洹果を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。般若波羅蜜力を以ての故に、是處だに恭敬し禮拜し、華香瓔珞擣香澤香幢蓋伎樂もて供養せらるるを得。」

〔一〕釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、若し善男子善女人、般若波羅蜜を書寫し、華香瓔珞乃至伎樂もて供養すると、若し人有りて佛の般涅槃の後、若は舍利を供養し、若は塔を起して供養し恭敬し尊重し讚歎し、華香瓔珞乃至伎樂もて供養すると、是二の何れの者か福を得ること多きや。」佛釋提桓因に告げたまはく、「我れ還て汝に問はん、意に隨つて我に答へよ、汝が意に於て云何。佛の一切種智を得、及び是身を得るが如きは、何れの道より學びて、是一切種智を得、是身を得たるや。」釋提桓因佛に白して言さく、「佛は般若波羅蜜中より學びて一切種智及び相好身を得たまへり。」佛釋提桓因に告げたまはく、「是の如く是の如し、憍尸迦、佛は般若波羅蜜中より學びて一切種智を得たり。憍尸迦、相好身を以て名けて佛と爲さず、一切種智を得るが故に名けて佛と爲す。憍尸迦、是佛の一切種智は般若波羅蜜中より生ず、是を以ての故に。憍尸迦、是佛身は一切種智所依の處にして、佛は是身に因て一切種智を得たり。善男子當に是思惟を作すべし、是身は一切種智所依の處なりと。是故に我れ涅槃の後に、舍利當に供養を得べし。復次に憍尸迦、善男子善女人、

【般若波羅蜜力】菩提樹尙功德あり、況や般若は諸佛の母なり心を盡して供養すべきなり。

【一】般若供養と舍利供養との功德を比較す。慧根多きは般若を、信根强きは舍利を供養すればなり。

【般涅槃】パリニルヴーナ（Parinirvāna）入滅と譯す。

【舍利等】遺身なり。滅後骨灰を安置し塔婆を建てて供養すること頗る盛なり。

【相好身】三十二相八十隨形好を具足せる佛身なり。

【三】般若を重んずる利益の多きを知るもの少きを說く。

若し是般若波羅蜜を聞き、書寫し受持し親近し讀誦し正憶念し、華香瓔珞擣香澤香幢蓋伎樂もて恭敬し供養し尊重し讃歎せば、是善男子善女人は則ち一切種智を供養すと爲す。是を以ての故に、憍尸迦、若し善男子善女人有りて、是般若波羅蜜を書し、若し受持し親近し讀誦し說き正憶念し、供養し恭敬し尊重し讃歎し、華香珞瓔乃至伎樂をもてすると、若し復善男子善女人有りて、佛の般涅槃の後に舍利を供養し、塔を起して恭敬し、尊重し讃歎し、華香乃至伎樂をもてすると、若し善男子善女人有りて、是般若波羅蜜を書持し、供養し恭敬し尊重し讃歎し、華香瓔珞乃至伎樂をもてするとは、是人福を得ること多し。何を以ての故に、是般若波羅蜜中に五波羅蜜を生じ、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法を生じ、一切三昧一切禪定一切陀羅尼門皆般若波羅蜜中より生じ、衆生を成就し佛國土を淨むる皆般若波羅蜜中より生じ菩薩家成就し、色成就し、資生の物成就し、眷屬成就し、大慈大悲成就する皆般若波羅蜜中より生じ、刹利大姓婆羅門大姓居士大家皆般若波羅蜜中より生じ、四天王天乃至阿迦尼吒天、須陀洹乃至阿羅漢辟支佛、諸の菩薩摩訶薩諸佛、諸佛の一切種智皆般若波羅蜜の中より生ずればなり。」

(三)爾時、釋提桓因佛に白して言さく「世尊、閻浮提人は是般若波羅蜜を供養せず恭敬せず尊重せず讃歎せず、供養せば利益する所多きことを知らずと爲すや。」佛釋提桓因に告げて言はく「憍尸迦、汝が意に於て云何、閻浮提中幾所の人か、佛を信じて壞せず、法を信じ、僧を信じて壞せざるや。幾所の人か佛に於て疑無く、法に於て疑無く、僧に於

て疑無きや。幾所の人か佛に於て決了し、法に於て決了し、僧に於て決了するや。釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、閻浮提の人は佛法僧に於て不壞信を得るもの少く、佛法僧に於て疑無く決了するもの亦少し。」「憍尸迦、汝が意に於て云何、閻浮提に幾所の人か、三十七品三解脫門八背捨九次第定四無礙智六神通を得るや。閻浮提に幾所の人か、三結を斷ずるが故に須陀洹道を得、幾所の人か三結を斷じ、亦婬瞋癡を薄くするが故に斯陀含道を得るや。幾所の人か五下分結を斷ずるが故に阿那含道を得るや。幾所の人か五上分結を斷ずるが故に阿羅漢道を得るや。閻浮提に幾所の人か辟支佛を求め、幾所の人か阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。」釋提桓因、佛に白して言さく、『世尊、閻浮提中の少所の人、三十七道品を得、乃至少所の人、阿耨多羅三藐三菩提心を發すのみ。』佛釋提桓因に告げて言はく、「是の如し是の如し、憍尸迦、少所の人、佛を信じて壞せず、法を信じて壞せず、僧を信じて壞せず。少所の人、佛に於て疑無く、法に於て疑無く、僧に於て疑無し。少所の人、佛に於て決了し、法に於て決了し、僧に於て決了す。憍尸迦、亦少所の人、三十七品三解脫門、八背捨九次第定四無礙智六神通を得。憍尸迦、亦少所の人、三結を斷じて須陀洹を得、三結を斷じ、亦婬瞋癡を薄くして斯陀含を得、五下分結を斷じて阿那含を得、五上分結を斷じて阿羅漢を得。少所の人、辟支佛を求め、是中に於て亦少所の人、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。發心中に於て亦少所の人、菩薩道を行ず。何を以ての故に、是衆生は前世に佛を見ず、法を聞かず、比丘僧を供養せず、布施せず持戒せず、忍

【說き】解說し勸修するなり。
【正憶念】理の如く正しく憶念思惟するなり。

辱せず、精進せず。禪定せず智慧無く、內空外空乃至無法有法空を聞かず、亦四念處乃至十八不共法を聞かず修せず、亦諸三昧門諸陀羅尼門を聞かず修せず、亦一切智一切種智を聞かず修せず。憍尸迦、是因緣を以ての故に、當に知るべし、少所の衆生は佛を信じて壞せず、法を信じて壞せず、僧を信じて壞せず、乃至少所の衆生は辟支佛道を求め、是中に於て少所の衆生は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、發心中に於て少所の衆生は菩薩道を行じ、是中に於て少所の衆生は阿耨多羅三藐三菩提を得と。憍尸迦、我れ佛眼を以て見るに、東方無量阿僧祇の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、菩薩道を行ず。是衆生は般若波羅蜜方便力を遠離するが故に、若は一、若は二、阿惟越致地に住し、多くは聲聞辟支佛地に墮す。南西北方四維上下も亦復是の如し。是を以ての故に、憍尸迦、善男子善女人の發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求むる者は、應に般若波羅蜜を聞き、受持し親近し讀誦し說き正憶念すべし。受持し親近し讀誦し說き正憶念し已らば、應に經卷を書し恭敬し供養し尊重し讚歎し、華香瓔珞乃至伎樂もてすべし。諸餘の善法もて般若波羅蜜中に入る者も亦聞きて受持し、乃至正憶念すべし。何等か是れ諸餘の善法なるや、謂ゆる檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、內空外空乃至無法有法空、諸三昧門諸陀羅尼門、四念處乃至十八不共法大慈大悲なり。是の如き等の無量の諸善法は皆般若波羅蜜中に入る、是も亦應に聞きて、受持し乃至正憶念すべし。何を以ての故に、是善男子善女人は當に是の如く念ずべければなり、佛本と菩薩たりし時に是の如く行じ是の如く學

【法印】佛法たる證據。

【四】寶塔の功德よりも般若の功德大なるを說く。

す、謂ゆる般若波羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜、内空乃至無法有法空、諸三昧門諸陀羅尼門、四念處乃至十八不共法大慈大悲なり。是の如き等の無量の諸佛法、我等も亦隨ひて學すべし。何を以ての故に、般若波羅蜜は是れ我等の尊ぶ所、禪那波羅蜜乃至無量諸餘の善法も亦是れ我等の尊ぶ所、此は是れ諸佛の法印、諸の辟支佛、阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹の法印なればなり。諸佛は是般若波羅蜜を學し、乃至一切種智をもて彼岸に度ることを得、諸の辟支佛阿羅漢阿那含斯陀含須陀洹も亦是般若波羅蜜を學し、乃至一切智もて彼岸に度ることを得たり。是を以ての故に、憍尸迦、若し善男子善女人、若は佛在世、若は般涅槃の後、應に般若波羅蜜に依止すべし、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜、乃至一切種智にも亦依止すべし。何を以ての故に、是般若波羅蜜乃至一切種智は、是れ諸の聲聞辟支佛菩薩摩訶薩及び一切世間の天人阿修羅の依止すべき所なればなり。

(四)憍尸迦、若し善男子善女人有りて、佛の般涅槃の後に、佛を供養せんが爲の故に、七寶の塔を作る、高さ一由旬なり、天香天華天瓔珞天擣香天澤香天衣天幢蓋天伎樂をもて供養し恭敬し、尊重し讚歎せば、憍尸迦、汝が意に於て云何、是善男子善女人は是因緣によりて福を得ること多きや不や。」釋提桓因佛に言さく「甚だ多く甚だ多し。」佛言はく「是善男子善女人、是般若波羅蜜を聞き、書寫し受持し親近し正憶念して、薩婆若心を離れず、亦恭敬し尊重し讚歎し、若は華香瓔珞擣香澤香幢蓋伎樂もて供養せんに、是善男子善女人

の福德多きには如かず。」佛憍尸迦に告げたまはく、『一七寶塔を置き、若し善男子善女人、佛を供養するが故に佛の般涅槃の後に、閻浮提に滿つる七寶の塔を起して、皆高さ一由旬ならしめ、恭敬し尊重し讚歎し、香華瓔珞幢蓋伎樂もて供養せば、憍尸迦、汝が意に於て云何。是善男子善女人は、福を得ること多きや不や。』釋提桓因言さく、『世尊、其福甚だ多し。』佛言はく、『是善男子善女人、前の如く般若波羅蜜を供養する、其福の甚だ多きには如かず。憍尸迦、復一閻浮提の中に滿つる七寶の塔を置き、善男子善女人有りて、佛を供養するが故に、佛の般涅槃の後に、四天下に滿つる七寶の塔を起して皆高さ一由旬ならしめ、供養すること前の如くせば、憍尸迦、汝が意に於て云何。是善男子善女人、其福多きや不や。』釋提桓因言さく、『甚だ多く、甚だ多し。』佛言はく、『是善男子善女人、般若波羅蜜を書持し、恭敬し尊重し讚歎し、華香乃至伎樂もて供養する、其福の甚だ多きには如かず。憍尸迦、復四天下の中に滿つる七寶の塔を置き、若し善男子善女人有りて、佛を供養するが故に、佛の般涅槃の後に、七寶の塔を起して小千國土に滿て、皆高さ一由旬ならしめ、供養すること前の如くせば、憍尸迦、汝が意に於て云何。是善男子善女人、其福多きや不や。』釋提桓因言さく、『甚だ多し。』佛言はく、『是善男子善女人、是般若波羅蜜を書し、受持し恭敬し尊重し讚歎し、華香乃至伎樂もて供養する、其福の甚だ多きには如かず。憍尸迦、復小千國土の中に滿つる七寶の塔を置き、若し善男子善女人有りて、佛を供養するが故に、佛の般涅槃の後に、七寶の塔を起して二千中國土に滿て、皆高さ一由旬ならし

め、供養するも前の如きの故に、般若波羅蜜を供養する、其福の甚だ多きには如かず。復二千中國土の七寶の塔を置き、若し善男子善女人有りて、佛を供養するが故に、佛の般涅槃の後に、七寶の塔を起して三千大千國土に滿て、皆高さ一由旬ならしめ、形壽を盡して供養し、天華天香天瓔珞、乃至天の伎樂もて供養せば、汝が意に於て云何。是善男子善女人は、福を得ること多きや不や。」釋提桓因言さく「世尊、甚だ多く、甚だ多し。」佛言はく「是善男子善女人、是般若波羅蜜を書し、受持し恭敬し尊重し讚歎し、華香乃至伎樂もて供養する、其福の甚だ多きには如かず。復三千大千國土の中の七寶の塔を置き、若し三千大千國土の中の衆生、一一の衆生佛を供養するが故に、佛の般涅槃の後に、各七寶の塔を起し、恭敬し尊重し讚歎し、華香乃至伎樂もて供養するも、若し善男子善女人有りて、般若波羅蜜を書持し乃至正憶念し、薩婆若心を離れず、亦恭敬し尊重し讚歎し、華香瓔珞乃至伎樂もて供養せば、是人の福を得ること甚だ多し。」釋提桓因佛に白して言さく「是の如く是の如し、世尊、若し人、是般若波羅蜜を供養し恭敬し尊重し讚歎せば、則ち過去未來現在の諸佛を供養すと爲す。世尊、若し十方如恆河沙等の國土の中の衆生、一一の衆生、佛を供養するが故に、佛の般涅槃の後に各七寶の塔を起し、高さ一由旬ならしめ、是人若は一劫、若は減一劫、恭敬し尊重し讚歎し、華香乃至伎樂もて供養せば、世尊、是善男子善女人の福を得ること多きや不や。」佛言はく「甚だ多し。」釋提桓因言さく「若し善男子善女人有りて、是般若波羅蜜を書持し、乃至正憶念し、亦恭敬し尊重し讚歎し、

【述成品】前に帝釋般若を供養する福德の大なるを說く、今佛印可して書寫受持して世に在らしむる功德を說く。

華香乃至伎樂もて供養せば、其福大に多し。何を以ての故に。世尊、一切の善法は皆般若波羅蜜中に入ればなり。謂ゆる十善道四禪四無量心四無色定、三十七品三解脫門空無相無作、四諦苦諦集諦滅諦道諦、六神通八背捨九次第定、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、諸三昧門諸陀羅尼門、佛の十力四無所畏四無礙智大慈大悲十八不共法、一切智道種智一切種智なり。世尊、是を一切諸佛法印と名く、是法中に一切の聲聞及び辟支佛過去未來現在の諸佛は、是法を學して彼岸に度ることを得。』

述成品第三十三

爾時、佛釋提桓因に告げて言はく、『是の如く是の如し、憍尸迦、是諸の善男子善女人は是般若波羅蜜、經卷を書持し、受學し親近し讀誦し說き正憶念し、加ふるに復華香瓔珞搗香澤香幢蓋伎樂を供養して、當に無量無數不可思議不可稱量無邊の福德を得べし。何を以ての故に、諸佛の一切智一切種智、皆般若波羅蜜の中より生じ、諸の菩薩摩訶薩の禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜も皆般若波羅蜜の中より生じ、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法も皆般若波羅蜜の中より生じ、諸佛の五眼も皆般若波羅蜜の中より生じ、衆生を成就し佛國土を淨むるも、道種智一切種智諸

【世に在れば】般若の體は有佛無佛を論ぜず常にあるも今は經卷受持の般若あるを云ふ。

【勸持品】諸天の讃説を擧げ、更に功德を述べ受持因緣を説く。

【一】諸天の讚説。

【阿修羅種減損】天力增せば善法增し、阿修羅の惡法減ず。

佛法も、皆般若波羅蜜の中より生じ、聲聞乘辟支佛乘佛乘も皆般若波羅蜜の中より生ず。是を以ての故に、憍尸迦、善男子善女人の是般若波羅蜜の經卷を書持し、親近し讀誦し説き正憶念し、加ふるに復華香乃至伎樂を供養するの、前の七寶の塔を供養するに過出すること、百分千分萬分百千萬分するも一にも及ばず、乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。何を以ての故に、憍尸迦、若し般若波羅蜜世に在れば、佛寶法寶比丘僧寶終に滅せず、若し般若波羅蜜世に在れば、十善道四禪四無量心四無色定、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至十八不共法、一切智一切種智皆世に現れ、若し般若波羅蜜世に在れば、世間便ち刹利大姓婆羅門大姓居士大家、四天王天乃至阿迦尼吒諸天、須陀洹果乃至阿羅漢果辟支佛道、菩薩摩訶薩無上佛道、法輪を轉じ、衆生を成就し佛國土を淨むること有ればなり。」

勸持品第三十四

(一)爾時、三千大千國土の有らゆる四天王天乃至阿迦尼吒天、釋提桓因諸天に語て言はく、「是般若波羅蜜を受くべし、持すべし、親近すべし、讀誦し説き正憶念すべし。何を以ての故に。般若波羅蜜を受持し乃至正憶念するが故に、一切修習する所の善法當に具足滿じ、諸天衆を增益し、阿修羅を減損すべし、諸天子、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念する

【佛種斷ぜず等】般若により三寶斷ぜざるなり。

【二】帝釋に受持因緣功德を示す。

【五死の相】諸天の命終らんとする時に現ずる相。一華鬘萎え、二腋下汗出で、三蠅來り身に著く、四他天己れが坐處に坐するを見、五自ら本坐を樂しまず。

【不如意處】惡處。

【無上明呪】諸呪中功德最大の故に大明呪といひ、無上といひ、無等等といふ。その功德は一功の不善を除き一切の善法を與ふるにあり。

が故に、佛種斷ぜず、法種、僧種斷ぜず。佛種法種僧種斷ぜざるが故に、便ち檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜有りて皆世に現はれ、四念處乃至十八不共法、菩薩道皆世に現はれ、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道佛道、須陀洹乃至佛皆世に現はるればなり。」

(二)爾時、佛釋提桓因に告げて言はく、「憍尸迦、汝當に是般若波羅蜜を受けて持し、讀誦し說き正憶念すべし。何を以ての故に、若し諸の阿修羅心に欲を生じて、三十三天と共に鬪へば、憍尸迦、汝爾時に當に般若波羅蜜を誦念すべし、諸の阿修羅の惡心即ち滅して、更に復生ぜざればなり。憍尸迦、若し諸の天子天女に五死の相現はるれば、時に當に不如意處に墮すべし、汝當に其前に於て般若波羅蜜を誦讀すべし、是諸の天子天女般若波羅蜜を聞く功德の故に還て本處に生ず。何を以ての故に、般若波羅蜜を聞くは大利益有るが故に。復次に憍尸迦、若は善男子善女人、若は諸の天子天女有りて、是般若波羅蜜經を聞くのみなるも是功德の故に、漸く當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。何を以ての故に。憍尸迦、過去の諸佛及び弟子、皆是般若波羅蜜を學して阿耨多羅三藐三菩提を得、無餘涅槃に入り、憍尸迦、未來世の諸佛、今現在十方の諸佛及び弟子も、皆是般若波羅蜜を學して阿耨多羅三藐三菩提を得、無餘涅槃に入ればなり。何を以ての故に。憍尸迦、是般若波羅蜜は一切の善法、若は聲聞法、若は辟支佛法、若は菩薩法、若は佛法を攝すればなり。」

釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、般若波羅蜜は是れ大明呪なり、無上明呪なり、無等

【菩薩摩訶薩の因縁】般若に因りて十善乃至諸佛を出す。般若は菩薩に屬する故に菩薩の因縁といふ。

等明呪なり。何を以ての故に。世尊、是般若波羅蜜は能く一切の不善法を除き、能く一切の善法を與ふればなり。』佛釋提桓因に語りて言はく、『是の如く是の如し、憍尸迦、般若波羅蜜は是れ大明呪なり、無上明呪なり、無等等明呪なり。何を以ての故に、憍尸迦、過去の諸佛は是明呪に因るが故に阿耨多羅三藐三菩提を得、未來世の諸佛、今現在十方の諸佛も亦是明呪に因りて阿耨多羅三藐三菩提を得、是明呪に因るが故に、世間便ち十善道有り、便ち四禪四無量心四無色定有り、便ち檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至十八不共法有り、便ち法性如法相法住法位實際有り、便ち五眼、須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道佛道、一切智一切種智有ればなり。憍尸迦、菩薩摩訶薩の因縁の故に、十善世間に出で、四禪四無量心乃至一切種智、須陀洹乃至諸佛世間に出づること、譬へば月滿照明すれば、星宿も亦能く照明するが如し。是の如く憍尸迦、一切世間の善法正法十善乃至一切種智、若し諸佛出でざる時は皆菩薩より生ず。是菩薩摩訶薩の方便力は皆般若波羅蜜より生ず。是菩薩摩訶薩は是方便力を以ての故に、檀那波羅蜜乃至禪那波羅蜜、内空乃至無法有法空の四念處乃至十八不共法を行じて、聲聞辟支佛地を證せず、亦能く衆生を成就し佛國土を淨め、壽命成就し國土成就し、菩薩の眷屬成就し一切種智を得る、皆般若波羅蜜より生ず。復次に憍尸迦、若し善男子善女人、般若波羅蜜を聞きて、受持し親近し乃至正憶念せば、是人、當に今世後世の功德成就することを得べし。』釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、何等をか是善男子善女人般若波羅蜜を受持し乃至正憶念せば、今世後世に得る功德と

【四百四病】四大身となり常に相侵害す、一一大中に百一病起る、冷病二百二あり水風起るが故に。熱病二百二あり地火起る故に。

【宿命業報を除く】一切法和合因縁生にして作者なければ必ず業報を受け佛も救ふ能はざる所。

【完具】人身として諸根完具せり。

【除厠人】卑賤の掃除人夫。

する。「佛釋提桓因に告げて言はく、『若し善男子善女人有りて、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念せば、終に毒に中りて死せず、兵刄も傷けず、水火も害せず、乃至四百四病も中ること能はざる所なり。其の宿命業報を除く。復次に憍尸迦、若し官事の起る有れば、是善男子善女人は是般若波羅蜜を讀誦するが故に、往いて官所に到るも能く譴責する者なし。何を以ての故に。是般若波羅蜜の威力の故に。若し善男子善女人、是般若波羅蜜を讀誦して王所若は太子大臣所に到れば、王及び太子大臣は皆歡喜し問訊し、和意もて共に語る。何を以ての故に。是諸の善男子善女人は、常に慈悲喜捨の心有りて衆生に向ふが故に。憍尸迦、若し善男子善女人、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念せば、是の如き等の種種今世の功德を得。憍尸迦、何等をか是善男子善女人後世に得る功德とするとは、是善男子善女人は、終に十善道四禪四無量心四無色定、六波羅蜜、四念處乃至十八不共法を離れず、是人終に三惡道に墮せずして、身を受くること完具なり、終に貧窮下賤工師除厠人擔死人の家に生ぜず、常に三十二相を得、常に化生することを得て諸の現在佛國に生じ、終に菩薩の神通を離れず、若し一佛國より一佛國に至りて諸佛を供養し諸佛の法を聽かんと欲すれば、即ち意に隨つて遊ぶ所の佛國を得、能く衆生を成就し佛國土を淨め、漸く阿耨多羅三藐三菩提を得。憍尸迦、是を後世の功德と名く。是を以ての故に、憍尸迦、善男子善女人は當に是般若波羅蜜を受持し、親近し讀誦し說き正憶念し、華香乃至伎樂もて供養し、常に薩婆若心を離れざるべし。是善男子善女人は乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至り、今世後世

【遣異品】異心の異道を遣去するを以て遣異といふ。

【二】外道惡魔の難ずる能はざるを說く。

【佛の短】相好說法等の短所。今は靈鷲山にありて諸法空をいふ般若の缺點なり。

【一念善心等】若し善心あらば度せらるべきも、惡心邪見のみありて定相を求むるが故に濟遣せらるる。

の功德成就することを得。』」

遣異品第三十五

【一】爾時、諸の外道異學梵志來りて佛所に向ひ、佛の短を求めんと欲す。是時、釋提桓因心に念ずらく『是諸の外道梵志來りて佛所に向ひ、佛の短を求めんと欲す。我れ今當に佛より受くる所の般若波羅蜜を誦念し、是諸の外道梵志等をして、終に中道にして疑斷を作すこと能はざらしめ、般若波羅蜜を說かしむべし。』と。釋提桓因は是念を作し已りて、即ち般若波羅蜜を誦す。是時に、諸の外道梵志は遙に佛を繞り、道を復して還去る。時に舍利弗心に念ずらく『是中何の因緣ありてか、諸の外道梵志は遙に佛を繞り道を復して還去るや。』と。佛舍利弗の心の念を知りて舍利弗に告げたまはく『是れ釋提桓因般若波羅蜜を誦念す、是因緣を以ての故に、諸の外道梵志は遙に佛を繞り道を復して還去る。舍利弗、是諸の外道梵志に我れ一念善心をも見ず、是諸の外道梵志は惡心を持ちて來れり、佛の短を索めんと欲す。舍利弗、我れ般若波羅蜜を說く時に、一切世間若は天、若は魔、若は梵、若は沙門婆羅門衆中に惡意を持ちて來り、能く短を得る者有るを見ず。何を以ての故に、舍利弗、是三千大千國土中の諸の四天王天乃至阿迦尼吒天、諸の聲聞辟支佛、諸の菩薩摩訶薩、是般若波羅蜜を守護すればなり。所以は何ん、是諸天人は皆般

【受記】成佛すとの記別。
【四種兵】象兵、馬兵、車兵、步兵。
【頻婆娑羅】ビンビサーラ(Bimbisara)影堅と譯す。當時摩伽陀の王。
【波斯匿】プラセーナジット(Prasenajit)勝軍と譯す。當時憍薩羅の王。
【諸釋子】北方印度の釋迦諸種族。
【梨昌】離車或は栗呫毗とも作る。リッチヤヸ(Licchavi)又は跋耆(Vajji)といふ。摩伽陀東北の國。
【二】諸天般若の久住を願ふ。
【所住の時】般若止住流布の間。

若波羅蜜中より生ずるが故に。復次に舍利弗、十方如恒河沙等の國土の中の諸佛、及び聲聞辟支佛菩薩摩訶薩諸天龍鬼神等、皆是般若波羅蜜を守護すればなり。所以は如何ん、是諸佛等は皆般若波羅蜜の中より生ずるが故に。』爾時、惡魔心に念ずらく、『今佛の四衆現前し集會し、亦欲界色界の諸天子有り、是中に必ず菩薩摩訶薩有りて受記し、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、我れ寧ろ佛所に至りて其意を破壞すべし。』と。是時に惡魔は四種兵を化作し來りて佛所に至る。爾時釋提桓因心に念ずらく、『是四種兵、或は是れ惡魔の化作して來り佛に向はんと欲するならん。何を以ての故に、是四種兵の嚴飾は頻婆娑羅王の四種兵も類せざる所、波斯匿王の四種兵も亦類せざる所、諸釋子の四種兵も亦類せざる所、諸梨昌の四種兵も皆亦類せざる所、此は是れ惡魔の化作せる四種兵なり。是惡魔は長夜に佛の便を索めて、衆生を惱まさんと欲す。我れ寧ろ般若波羅蜜を誦念すべし。』と。釋提桓因は卽時に般若波羅蜜を誦念す、惡魔は其誦する所を聞きて漸漸に道を復して還去る。

(二)爾時、會中の四天王諸天子乃至阿迦尼吒諸天子は、天華を虛空中に化作し、而して佛の上に散じて是言を作さく、『世尊、願くば般若波羅蜜をして閻浮提に久住せしめたまへ。所以は何ん、閻浮提の人般若波羅蜜を受持せば、所住の時に隨て、佛寶亦住して滅せず、法寶、僧寶も亦住して滅せざればなり。』爾時、十方如恒河沙等の世界の中の諸天も亦皆華を散じ、而して是言を作さく、『世尊、願くば般若波羅蜜をして、閻浮提に久住せしめたまへ。

【分別】般若法空清淨を明かにして菩薩の道も知らるべきなり。

若し般若波羅蜜久住せば、佛法僧も亦當に久住すべし、亦分別して菩薩摩訶薩道を知る。復次に所在の住處、善男子善女人有りて般若波羅蜜經卷を書持する有らば、是處は即ち照明と爲り已りて、諸冥を離るればなり。」佛、釋提桓因等の諸の天子に告げたまはく、「是の如く是の如し、憍尸迦及び諸天子、閻浮提の人、般若波羅蜜を受持し、所住の時に隨て佛寶是の如く住し、法寶、僧寶も亦是の如く住し、乃至所在の住處の善男子善女人、般若波羅蜜經卷を書持する有らば、是處は則ち照明と爲り、以て諸冥を離る。」爾時、諸天子は天華を化作して佛の上に散じて是言を爲さく、「世尊、若し善男子善女人有りて、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念せば、魔若は魔民は其便を得ること能はず。世尊、我等も亦當に是善男子善女人を擁護すべし。何を以ての故に。若し善男子善女人、般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念せば、我等は是人を視るに佛の如くし、若は佛に次ぐとすればなり。」是時釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、善男子善女人の般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念する者は當に知るべし、是人は先の世に佛所に於て功德を爲すこと多く、諸佛に親近し供養し、善知識の爲に護らる。世尊、諸佛の一切智は當に般若波羅蜜中より求むべく、般若波羅蜜も亦當に一切智中より求むべければなり。所以は何ん、般若波羅蜜は一切智に異ならず、一切智は般若波羅蜜に異ならず、般若波羅蜜と一切智とは、二ならず別ならざればなり。是故に、我等は是人を視るに、即ち是れ佛とし、若は佛に次ぐとす。」佛釋提桓因に告げて言はく、「是の如く是の如し、憍尸迦、諸佛の一切智は即ち是れ般若波羅蜜、般若波

【尊導品】初めに阿難般若を稱譽する所以を問ふ。佛は諸法の尊導たる故なりとするを以て名く。後段更に受持般若の功德盡きざるを明す。

【一】は般若を稱譽するは諸法の最尊なるによることを說く。

【尊導】第一の導師。般若は能く示導して三界を出でしめ三乘に到らしむればなり。

【薩婆若に廻向す】布施等の善法は不二にして畢竟空寂なるをいふ。

羅蜜は即ち是れ一切智なり。何を以ての故に。憍尸迦、諸佛の一切智は皆般若波羅蜜中より生じ、般若波羅蜜は一切智に異ならず、一切智は般若波羅蜜に異ならず、般若波羅蜜と一切智とは二ならず別ならざればなり。』

尊導品第三十六

（一）爾時、慧命阿難佛に白して言さく、『世尊、何を以て檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜乃至十八不共法を稱譽せずして、但だ般若波羅蜜のみを稱譽したまふや。』佛阿難に告げたまはく、『般若波羅蜜は五波羅蜜乃至十八不共法に於て尊導たり。阿難、汝が意に於て云何、薩婆若に廻向せざる布施は檀那波羅蜜と稱することを得るや不や。』『不、世尊。』『薩婆若に廻向せざる尸羅羼提毘梨耶禪那智慧は、是れ般若波羅蜜なりや不や。』『不、世尊。』『是を以ての故に知る、般若波羅蜜は五波羅蜜乃至十八不共法に於て尊導たり、是の故に稱譽す。』阿難佛に白して言さく、『世尊、云何が布施は薩婆若に廻向して檀那波羅蜜と作り、乃至般若波羅蜜と作るや。』佛阿難に告げたまはく、『無二法を以て布施、薩婆若に廻向せば、是を檀那波羅蜜と名け、不生不可得を以ての故に、薩婆若に廻向せば布施是を檀那波羅蜜と名く。乃至無二法を以て智慧、薩婆若に廻向せば、是を般若波羅蜜と名け、不生不可得を以ての故に、薩婆若に廻向せば、智慧是を般若波羅蜜と名く。』阿難佛に白して

【二】爾餘の功德を廣說す。
【功德盡きず】般若の德無量なればなり。

言さく、「世尊、云何が不二法を以て薩婆若に廻向せば、布施是を檀那波羅蜜と名け、乃至不二法を以て薩婆若に廻向せば、智慧是を般若波羅蜜と名くるや。」佛、阿難に告げたまはく、「色不二法なるを以ての故に、受想行識不二法なるが故に、乃至阿耨多羅三藐三菩提不二法なるが故に。」「世尊、云何が色不二法、乃至阿耨多羅三藐三菩提は不二法なるや。」佛言はく、「色色相空なり。何を以ての故に、檀那波羅蜜と色とは二ならず別ならず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提と檀那波羅蜜とは二ならず別ならざればなり。五波羅蜜も亦是の如し。是を以ての故に、阿難、但だ般若波羅蜜のみを稱譽す、五波羅蜜乃至一切種智に於て尊導たり。阿難、譬へば大地に種を以て中に散くに因緣の和合を得て便ち生ず、是の諸の種子は地に依て而して生ずるが如く、是の如く阿難、五波羅蜜は般若波羅蜜に依りて生ずることを得、四念處乃至一切種智も亦般若波羅蜜に依て生ずることを得。是を以ての故に、阿難、般若波羅蜜は五波羅蜜乃至十八不共法に於て尊導たり。」

〔二〕爾時、釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、佛の說きたまへる、善男子善女人の般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念する者の功德は未だ盡くさず。何を以ての故に、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念せば、卽ち三世諸佛の無上道を受くればなり。所以は何ん、薩婆若を得んと欲すれば、當に般若波羅蜜中より求むべく、般若波羅蜜を得んと欲すれば、當に薩婆若中より求むべければなり。世尊、般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念するが故に、十善道は世間に現はれ、四禪四無量心四無色定乃至十八不共法は世間に現はる。般若波羅蜜を受

【無量の戒衆】但名字よりすれば二百五十、略説すれば八萬四千、廣説すれば無量無邊なり。一日受より無餘涅槃に至るまで種種あるを無量戒衆と名く。

【心解脱す】生死煩惱の纏著を離るるも廣度衆生なきを大乘を求めずといふ。

【供養等】供養に効他供養と深心供養とあり。般若を供知るは深心供養の故に二世功徳をうべし。

【三】膽力增長等の功徳あるを説く。

持し乃至正憶念するが故に、世間便ち刹利大姓婆羅門大姓居士大家、四天王天乃至阿迦尼吒諸天有り。般若波羅蜜を受持し乃至正憶念するが故に、便ち須陀洹乃至阿羅漢辟支佛菩薩摩訶薩有り。般若波羅蜜を受持し乃至正憶念するが故に。諸佛は世間に出づ。爾時、佛釋提桓因に告げて言はく『憍尸迦、善男子善女人、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念せば、我れ但だ爾所の功徳有るのみと說かず。何を以ての故に、憍尸迦、是善男子善女人、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念し、薩婆若心を離れずば、無量の戒衆成就し、無量の定衆慧衆解脱衆解脱知見衆成就す。復次に憍尸迦、是善男子善女人、能く般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念し、薩婆若心を離れずば、當に知るべし、是人を佛の如しと爲す。復次に憍尸迦、一切聲聞辟支佛の有らゆる戒衆、定衆智衆解脱衆解脱知見衆は、是善男子善女人の戒衆乃至解脱知見衆に及ばざること、百分千分百千萬億分、乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。何を以ての故に、是善男子善女人は、聲聞辟支佛地中に於て、心解脱することを得て更に大乘法を求めざるが故に。復次に憍尸迦、若し善男子善女人有りて、般若波羅蜜經卷を書持し、供養し恭敬し尊重し、華香瓔珞乃至伎楽もて供養するも、亦今世後世の功徳を得。』爾時釋提桓因佛に白して言さく『世尊、是善男子善女人は、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念し、薩婆若心を離れずして、般若波羅蜜を供養し恭敬し尊重し、華香乃至伎楽もてせば、我れ常に當に是人を守護すべし。』

(三)佛釋提桓因に告げたまはく『憍尸迦、是善男子善女人、是般若波羅蜜を讀誦し說かん

と欲する時に、無量百千の諸天皆來りて法を聽く。是善男子善女人般若波羅蜜法を說くや、諸天子其膽力を益す。是諸の法師、若し疲極して法を說くことを欲せずば、諸天其膽力を益すが故に便ち能く更に說く。善男子善女人は是般若波羅蜜を受け、乃至正憶念し、華香乃至伎樂もて供養するが故に、亦是今世の功德を得。復次に憍尸迦、是善男子善女人は、四部衆の中に於て般若波羅蜜を說く時、心に怯弱無く、若し論難有らんも亦畏想無し。何を以ての故に、是善男子善女人は、般若波羅蜜の爲に護持せらるるが故に。般若波羅蜜の中に亦一切法を分別して、若は世間若は出世間、若は有漏若は無漏、若は善若は不善、若は有爲若は無爲、若は聲聞法、若は辟支佛法、若は菩薩法、若は佛法とす。善男子善女人は內空に住し、乃至無法有法空に住するが故に、能く般若波羅蜜を難ずる者有るを見ず、亦難を受くる者を見ず、亦般若波羅蜜をも見ざるなり。是の如きの善男子善女人は、般若波羅蜜の爲に擁護せらるゝが故に、能く難壞する者有ること無し。復次に善男子善女人は、般若波羅蜜を受持し乃至正憶念する時に、沒せず畏れず怖かず。何を以ての故に、是善男子善女人は、是法の沒する者、恐怖する者を見ざればなり。憍尸迦、善男子善女人、般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念し、華香供養し、乃至幡蓋もてせば、亦是現世の功德を得。復次に憍尸迦、善男子善女人、般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念し、經卷を書持し、華香供養し、乃至幡蓋もてせば、是人は父母の爲に愛せられ、宗親知識に念せられ、諸の沙門婆羅門に敬せられ、十方の諸佛及び菩薩摩訶薩、辟支佛阿羅漢乃至須陀洹に愛敬せられ、

【三十三天等】四天王天乃至他化自在天は六欲天、梵衆天以下は色界諸天、中に於て大梵天まで初禪、無量光天まで二禪、無量淨天まで三禪、以下四禪。

【淨居諸天】無誑天等を五淨居といふ、第四禪最上の妙果なり。

一切世間若は天若は魔若は梵及び阿修羅等皆亦愛敬す。是人檀那波羅蜜斷絶する時有ること無く、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜も亦斷絶する時有ること無し。內空を修して斷ぜず、乃至無法有法空を修して斷ぜず、四念處を修して斷ぜず、乃至十八不共法を修して斷ぜず、諸三昧門を修して斷ぜず、諸陀羅尼門を修して斷ぜず、諸の菩薩の神通を修して斷ぜず、衆生を成就し佛國土を淨めて斷ぜず、乃至一切種智を修して斷ぜず、是人亦能く難論毀謗を降伏す。善男子善女人、般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念し、薩婆若心を離れず、經卷を書持し、華香供養し、乃至幡蓋もてせば、亦是今世後世の功德を得、復次に憍尸迦、善男子善女人の經卷を書持せば、所住の處に在りて、三千大千世界の中の有ゆる諸の四天王天の阿耨多羅三藐三菩提心を發す者、皆是處に到來して般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き供養し禮拜して還去る。三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天梵衆天梵輔天梵會天大梵天光天少光天無量光天光音天淨天少淨天無量淨天徧淨天無蔭行天福德天廣果天の阿耨多羅三藐三菩提心を發す者、皆是處に來到して般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き供養し禮拜して還去る。淨居諸天謂ゆる無誑天無熱天妙見天喜見天色究竟天、皆是處に來到して是般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き供養し禮拜して還去る。復次に憍尸迦、十方世界の中の諸の四天王天、乃至廣果天の阿耨多羅三藐三菩提心を發すもの、及び淨居天並に餘の諸天、龍鬼神、揵闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽も亦來りて般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き供

【諸天等】天龍八部衆、揵闥婆（ガンダルヷ Gandharva）尋香と譯す。迦樓羅（ガルダ Garuda）金翅鳥といひ、緊那羅（キンナラ Kinnara）人非人と譯し、摩睺羅伽（マホーラガ Mahoraga）大腹行と譯す。

【諸惡】惡鬼惡緣疾疫災患等。

【四】諸天出現擁護する時を知覺すべき緣を述ぶ。

【大淨光明】住處淸淨の故に諸天來らば大光明あり異香薰ずべし。

【淨潔】淸淨潔齋にして住處衣服等を淨むるなり。

【小鬼】諸惡を事とする舊住の惡緣をいふ。

養し禮拜して還去る。是善男子善女人は應に是念を作すべし、「十方世界の中の諸の四天王天、乃至廣果天の阿耨多羅三藐三菩提心を發すもの、及び淨居天並に餘の諸天、龍鬼神揵闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽來りて般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き供養し禮拜す、我れ卽ち法を施し已ぬ。」と。憍尸迦、三千大千世界の中の有ゆる諸の四天王天乃至阿迦尼吒天及び十方世界の中の諸の四天王天乃至阿迦尼吒天の阿耨多羅三藐三菩提心を發す者は、是善男子善女人を擁護し、諸惡便を得ること能はず、其宿命重罪を除く。憍尸迦、是善男子善女人も亦是今世の功德を得。謂ゆる諸天子阿耨多羅三藐三菩提心を發して、皆是處に來到す。何を以ての故に、憍尸迦、諸天子は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、一切衆生を救護し、一切衆生を捨てず、一切衆生を安樂にせんと欲するが故に。」

（四）爾時、釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、善男子善女人は云何が當に知るべきや、諸の四天王天乃至阿迦尼吒天來り、及び十方國土の中の諸の四天王天乃至阿迦尼吒天來りて般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き供養し禮拜する時を。』佛釋提桓因に告げて言はく、「憍尸迦、若し善男子善女人、大淨光明を見ば、必ず大德諸天有りて來り、般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き、供養し禮拜する時と知らす。復次に憍尸迦、善男子善女人、若し異妙香を聞かば、必ず大德諸天有りて來り、般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き、供養し禮拜する時と知らん。復次に、憍尸迦、善男子善女人淨潔を行ずるが故に、諸天其處に來到し、般若波羅蜜を見、受けて讀誦し說き供養し歡喜し禮拜す。是中に小鬼の輩あれ

【大心】心の廣大清淨なること。
【臥覺安隱】内外惡緣を離るるが故に。
【夢中】惡夢なく善夢のみを見る。
【七寶の塔】滅後に供養すべき塔婆。
【四供養】飲食、衣服、臥具、湯藥。

ば即時に出去す、是れ大德諸天の威德に堪任すること能はざるが故に。是大德諸天來るを以ての故に、是善男子善女人は大心を生ず。是を以ての故に、般若波羅蜜所住の處には、四面諸の不淨有るべからずして、當に燈を然じ、香を燒き、衆の名華を散じ、衆香を地に塗り、衆の蓋幢幡もて種種に嚴飾すべし。復次に憍尸迦、善男子善女人は法を說く時、終に疲極すること無くして、自ら身輕く心の樂しきを覺え、法に隨ひて偃息し、臥覺安隱にして、諸の惡夢無く、夢中に諸佛の三十二相八十隨形好あり、比丘僧に恭敬し圍繞せられ、而して爲に法を說くを見、諸佛の邊に在りて法敎、謂ゆる六波羅蜜、四念處乃至十八不共法を聽受し、六波羅蜜義を分別し、四念處乃至十八不共法を分別し、亦其義を分別するを見る。亦菩提樹の莊嚴殊妙なるを見、諸の菩薩の菩提樹下に趣きて、阿耨多羅三藐三菩提を得ることを見、諸佛の成じ已て法輪を轉ずることを見、百千萬の菩薩共に集りて法を論議し、應に是の如く薩婆若を求むべく、應に是の如く衆生を成就すべく、應に是の如く佛國土を淨むべしとするを見る。亦十方無數百千萬億の諸佛を見、亦其名號を聞く、某の方、某の國、某の佛、若干百千萬の菩薩、若干百千萬の聲聞に恭敬し圍繞せられて說法するを見る。復十方無數百千萬億の諸佛の般涅槃を見、復無數百千萬億の諸佛の七寶の塔を見、諸塔を供養し恭敬し尊重し讚歎し、華香乃至幡蓋もてするを見る。憍尸迦、是善男子善女人は是の如きの善夢を見、臥して安く覺めて安く、諸天其氣力を益し、自ら身體輕便なるを覺え、大に飲食衣服臥具湯藥に貪著せず、四供養に於て其心の輕微なることは、

譬へば比丘坐禪し、坐禪より起つに、心定と合し飲食を貪著せずして、其心の輕微なるが如し。何を以ての故に、憍尸迦、諸の天法は應に諸味の精を以て其氣力を益すべきが故に、十方の諸佛及び龍鬼神阿修羅揵闥婆迦樓羅緊那羅摩睺羅伽、亦其氣力を益す。是の如く憍尸迦、善男子善女人今世に是の如きの功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を受持し、親近し讀誦し說き正憶念して、亦薩婆若心を離れざるべし。憍尸迦、善男子善女人、受持し乃至正憶念すること能はずと雖も、當に經卷を書持し恭敬し供養し尊重し讚歎し、華香瓔珞乃至幡蓋もてすべし。憍尸迦、若し善男子善女人、是般若波羅蜜を聞き、受持し讀誦し說き正憶念し、經卷を書寫して恭敬し供養し尊重し讚歎し、華香乃至幡蓋もてせば、是善男子善女人の功德甚だ多くして、十方の諸佛及び弟子衆を供養し恭敬し尊重し讚歎し、衣服飮食臥具湯藥もてし、諸佛及び弟子般涅槃の後に七寶の塔を起し、恭敬し供養し尊重し讚歎し、華香乃至幡蓋もてするに勝る。』

摩訶般若波羅蜜經　卷第十

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

法稱品第三十七

（一）佛、釋提桓因に告げて言はく、『憍尸迦、若し閻浮提に滿つる佛舍利を一分と作し、復人有りて般若波羅蜜經卷を書して一分と作さば、二分の中汝何所を取るや。』釋提桓因、佛に白して言さく、『世尊、若し閻浮提に滿つる佛舍利を一分と作し、般若波羅蜜經卷を一分と作さば、二分の中我れ寧ろ般若波羅蜜經卷を取らん。何を以ての故に、世尊、我れ佛舍利に於て恭敬せざるに非ず、尊重せざるに非ず、世尊、是舍利は般若波羅蜜の中より生じ、般若波羅蜜に修熏せらるるを以ての故に、是舍利は供養恭敬尊重讃歎を得ればなり。』爾時舍利弗、釋提桓因に問はく、『憍尸迦、是般若波羅蜜は取るべからず、色無く形無く對無く一相にして謂ゆる無相なり、汝云何が取らんと欲するや。』何を以ての故に、是般若波羅蜜は取ることを爲さざるが故に出で、捨つることを爲さざるが故に出で、增減聚散損益垢淨を爲さざるが故に出づ。是般若波羅蜜は諸佛法を與へず、凡人法を捨てず、辟支佛法阿羅漢法學法を與へず、凡人法を捨てず、無爲性を與へず、有爲性を捨てず、內空乃至無

【法稱品】舍利と般若經卷との比較を說き、般若法を稱揚す。

【一】般若經卷は不二を示す、舍利の尊ぶべきも般若に依るが故に、般若を重んずることを說く。

【修熏】修治熏染せらるるをいふ。

【取らんと】般若に取捨なきを舍利をおきて取るは何ぞや。唯帝釋は世諦に依て取捨するに過ぎざるを明かにせんとするなり

【諸佛法を與へず等】般若に依り佛法一を加へず凡愚法一を減ぜざるべし。

【法性の二相】法性實在し定性ありとするをいふ、これ法性に適せず般若に合せず。

【三】般若即ち佛として尊ぶべきを說く。

【善法堂】忉利天上說法の道場。

法有法空を與へず、四念處乃至一切種智を與へず、凡人法を捨てざるべければなり。」釋提桓因舍利弗に語らく、「是の如く是の如し、舍利弗、若し人有りて、是般若波羅蜜諸佛法を與へず、凡人法を捨てず、乃至一切種智を與へず、凡人法を捨てずと知らば、是菩薩摩訶薩能く般若波羅蜜を行じ、能く般若波羅蜜を修す。何を以ての故に、般若波羅蜜は二法相を行ぜざるが故に。不二法相は是れ般若波羅蜜なり。不二法相は是れ禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜なり。」爾時、佛、釋提桓因を讃じて言はく、「善い哉善い哉、憍尸迦、汝の說く所の如く、般若波羅蜜は二法相を行ぜざるが故に、不二法相は是れ般若波羅蜜なり、不二法相は是れ禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜なり。憍尸迦、若し人法性の二相を得んと欲する者は、是人般若波羅蜜の二相を得んと欲すと爲す。何を以ての故に、憍尸迦、法性と般若波羅蜜とは二無く別無く、乃至檀那波羅蜜も亦是の如し。若し人實際不可思議性の二相を得んと欲する者は、是人般若波羅蜜の二相を得んと欲すと爲す。何を以ての故に。般若波羅蜜と不可思議性とは二無く別無ければなり。」

(三)釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、一切世間人及び諸天阿修羅、應に般若波羅蜜を禮拜し供養すべし。何を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に學して阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。世尊、我れ常に善法堂上に在て坐す、若し我れ座に在らざる時は、諸の天子來りて我を供養するが故に、我が坐せる處たるが爲に禮を作し繞り竟て還去る。諸天子は是念を作す、釋提桓因は是處に在りて坐し、諸の三十三天の爲に法を說けるが

【樂具】福德のこと。

【住處の因緣】舍利は一切種智身の止住せるによつて尊ばるるのみ。

【心深く】無二法に住するなり、深心供養これなり。

【一切法相なく】般若有相ならば諸法無相を知らず乃至無相法輪を轉ずるを得ず。

故に。是の如く世尊、在所の處に是般若波羅蜜經卷を書し、受持し讀誦し、他の爲に演說せば、是處をば十方世界の中の諸天龍夜叉揵闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽皆來りて般若波羅蜜を禮拜し供養し已りて去る。何を以ての故に。是般若波羅蜜の中に諸佛を生じ、及び一切衆生の樂具を生ずるが故に。諸佛舍利も亦是一切種智の住處の因緣たるのみ。是を以ての故に、世尊、二分の中に我れ般若波羅蜜を取る。復次に世尊、我れ若し般若波羅蜜を受持し讀誦し、心深く法の中に入らば、我れ是時に怖畏相を見ず。何を以ての故に、世尊、是深般若波羅蜜は相無く貌無く言無く說無ければなり。世尊、相無く貌無く言無く說無きは是れ般若波羅蜜、乃至是れ一切種智なり。世尊、般若波羅蜜若し有相にして無相に非ざるものあるべくんば、諸佛は一切法相無く貌無く言無く說無しと知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、弟子の爲に、諸法も亦相無く貌無く言無く說無しと說くべからず。世尊、般若波羅蜜は實に是れ相無く貌無く言無く說無きを以ての故に、諸佛は一切諸法相無く貌無く言無く說無しと知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、弟子の爲に、諸法も亦相無く貌無く言無く說無しと說く。是を以ての故に、世尊、是般若波羅蜜をば一切世間諸天人阿修羅は應に恭敬し供養し、尊重し讚歎し、香華瓔珞乃至幡蓋を以てすべし。復次に世尊、若し人有りて般若波羅蜜を受持し、親近し讀誦し、說き、正憶念し及び書寫し、華香乃至幡蓋もて供養せば、是人は地獄畜生餓鬼道の中に墮せず、聲聞辟支佛地に墮せず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得て常に諸佛を見たてまつり、一佛國より一佛國に至りて諸佛を供養し

【故に等】分別は世諦上のことにして般若本なるを以てこれを取る。

【三】般若の誦説は諸佛の力に等しきを述べ、其條の功徳に及ぶ。

【三事の示現】神通、説法、教誡の三神變。

【十二部經】修多羅、祇夜、受記、伽陀、優陀那、因緣、阿波陀那、如是語、本生、方廣未曾有、論議の十二。

恭敬し尊重し讃歎し、華香乃至幡蓋を以てす。復次に世尊、三千大千世界に滿つる佛舍利を一分と作し、般若波羅蜜經卷を書して一分と作さば、是二分の中、我れ故に般若波羅蜜を取らん。何を以ての故に。世尊、是般若波羅蜜の中に諸佛舍利を生ず。是を以ての故に、舍利は供養恭敬尊重讃歎を得、是善男子善女人は、舍利を供養し恭敬するが故に、天上人中の福樂を受けて常に三惡道に墮せず、所願の如く漸く三乘法を以て涅槃に入る。是故に世尊、若は現在佛を見る有り、若は般若波羅蜜經卷を見るも等しくして異ること無し。何を以ての故に、世尊、是般若波羅蜜と佛とは二無く別無きが故に。

(三)復次に世尊、佛三事の示現に住し、十二部經修多羅祇夜乃至優波提舍を説きたまふが如く、復善男子善女人有りて、是般若波羅蜜を受持し誦説せんに、等しくして異ること無し。何を以ての故に。世尊、是般若波羅蜜の中に三事示現及び十二部經修多羅乃至優波提舍を生ずるが故に。復次に世尊、十方諸佛は三事の示現に住し、十二部經修多羅乃至優波提舍を説くと、復人有りて般若波羅蜜を受け、他人の爲に説くと、等しくして異りあること無し。何を以ての故に。般若波羅蜜の中に諸佛を生じ、亦十二部經修多羅乃至優波提舍を生ずればなり。復次に世尊、若し十方如恒河沙等の世界の中の諸佛を供養し、恭敬し尊重し讃歎し、華香乃至幡蓋を以てする有ると、復人の般若波羅蜜經卷を書し、恭敬し尊重し讃歎し、華香乃至幡蓋を以てする有ると、其福正に等し。何を以ての故に。十方の諸佛は皆般若波羅蜜の中より生ずればなり。復次に世尊、善男子善女人、是般若波羅蜜を聞き、

【四】般若あるところに功德あることと如意珠の如きを說く。

受持し讀誦し、正憶念し、亦他人の爲に說かば、是人は地獄道畜生餓鬼道に墮せず、亦聲聞辟支佛地に墮せず。何を以ての故に、當に知るべし、是善男子善女人は正に阿惟越致地の中に住するが故に、是般若波羅蜜は一切苦惱衰病を遠離すればなりと。復次に世尊、若し善男子善女人有りて是般若波羅蜜經卷を書し、受持し親近し供養し恭敬し尊重し讚歎せば、是人は諸の恐怖を離る。世尊、譬へば負債人の國王に親近し左右に供給せば、債主反て更に是人を供養し恭敬し、是人復畏怖せざるが如し。何を以ての故に、世尊、此人は王に依近し憑恃して力有るが故に。是の如く世尊、諸佛の舍利は般若波羅蜜に修熏せらるるが故に供養恭敬を得。世尊、當に知るべし、般若波羅蜜は王の如く、舍利は負債人の如しと。負債人は王に依るが故に供養を得、舍利も亦般若波羅蜜の修熏に依るが故に供養を得。世尊、當に知るべし、諸佛の一切種智も亦般若波羅蜜の修熏を以ての故に成就することを得と。是を以ての故に、世尊、二分の中に我れ般若波羅蜜を取る。何を以ての故に。世尊、般若波羅蜜の中に諸佛舍利三十二相を生じ、般若波羅蜜の中に亦佛の十力四無所畏四無礙智、十八不共法大慈大悲を生じ、世尊、般若波羅蜜の中に五波羅蜜を生じ、便ち波羅蜜の名字を得、般若波羅蜜の中に諸佛の一切種智を生ずればなり。

(四)復次に世尊、所在の三千大千世界の中に、若し般若波羅蜜を受持し供養し恭敬し尊重し讚歎する有らば、是處若は人若は非人其便を得る能はずして、是人漸漸に涅槃に入ることを得。世尊、般若波羅蜜は大利益を爲す、是の如く三千大千世界の中に於て能く佛事を作

【無價の摩尼】價の量られざる如意珠。

す。世尊、所住の處に在りて般若波羅蜜有れば則ち佛有りと爲す。世尊、譬へば無價の摩尼珠寶所住の處に在りては非人其便を得ざるが如し。若し男子女人熱病有りて是寶を以て身上に著くれば熱病卽時に除き愈ゆ、若は風熱有り、若は冷病有り、若は雜熱風鈴病有りて寶を以て身上に著くれば皆悉く除き愈ゆ。若し闇中に是寶あれば能く明かならしめ。熱き時は能く凉かならしめ、寒き時は能く溫かならしめ、寶の所在の處、其地は寒からず熱からず、時節和適す。其處亦諸餘の毒螫無し、若し男子女人、毒蛇の爲に螫さるるも寶を以て之を示せば毒卽ち除き滅す。復次に世尊、若し男子女人、眼痛膚翳盲瞽あるも寶を以て之を示せば卽時に除き愈ゆ、若し癩瘡惡腫有るも、寶を以て身上に著くれば病卽ち除き愈ゆ。復次に世尊、是摩尼寶所在の水中、水隨て一色を作す、世尊、是寶を若し青き物を以て裹て水中に著くれば、水の色則ち青と爲り、若し黃赤白紅縹の物をもて裹て水中に著くれば、水隨て黃赤白紅縹色と作る、是の如き等の種種の色の物をもて裹て水中に著くれば、水隨て種種の色と作る。世尊、若し水濁れるも寶を以て水中に著くれば水卽ち清らかと爲る。是寶其德是の如し。」爾時、阿難釋提桓因に問ひて言はく、「憍尸迦、是摩尼寶、是を天上の寶と爲んや、是を閻浮提の寶と爲んや。」釋提桓因阿難に語りて言はく、「是れ天上の寶なり、閻浮提の人も亦是寶有れども、但だ功德相少くして具足せず、天上の寶は淸淨輕妙にして譬喩を以て比を爲すべからず。復次に世尊、是摩尼寶、若し篋中に著くれば寶を擧げて出すも、其功德篋を熏ずるが故に人皆愛敬す、是の如く世尊、所

【五】更に舍利の般若修熏により供養さるべく、般若の大德を讚ず。

【斷一切結使及習】一切の煩惱並にその習氣をも除去するをいふ。

【常捨行】常に平等に捨德に住するなり。

住の處に在りて、般若波羅蜜經 卷を書する有れば、是處則ち衆惱の患無きこと、亦摩尼寶所著の處 則ち衆難無きが如し。

(五)世尊、佛般涅槃の後、舍利供養を得るは皆是般若波羅蜜の力、禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切智法相法住法位法性實際不可思議性一切種智、是諸の功德の力なり。善男子善女人是念を作さく「是佛舍利は一切智一切種智、大慈大悲、斷一切結使及び習、常捨行、不錯謬法等の諸佛功德の住處なり」と。是を以ての故に、舍利は供養を得。世尊、舍利は是れ諸功德寶波羅蜜の住處、不垢不淨波羅蜜の住處、不生不滅波羅蜜の住處、不入不出波羅蜜、不增不損波羅蜜、不來不去不住波羅蜜なり。是佛舍利は是れ諸法相波羅蜜の住處なり。是諸法相波羅蜜を以て熏修するが故に舍利は供養を得。復次に世尊、三千大千世界の中に滿つる舍利を置きて、如恒河沙等の諸の世界、其中に滿つる舍利を一分と作し、人有り般若波羅蜜經 卷を書して一分と作さば、二分の中、我れ般若波羅蜜を取らん。何を以ての故に。是般若波羅蜜の中に諸佛舍利を生じ、是般若波羅蜜に修熏せらるゝが故に舍利は供養を得ればなり。世尊、若し善男子善女人ありて、舍利を供養し恭敬し尊重し讚歎せば、其功德報、邊を得べからずして、人中天上の福樂を受く。謂ゆる刹利大姓婆羅門大姓居士大家、四天王天處乃至他化自在天中に福樂を受く、亦是福德の因緣を以ての故に、當に苦を盡すことを得べし。若し是般若波羅蜜を受けて讀誦し解說し、正憶念せば、是人は能く禪那波羅蜜を具足し、乃至能く檀那波羅

【法身色身】十八不共法等の諸佛德に法身といひ、三十二相等の相好身に色身と名く。

【念佛三昧】法身色身を觀念するなり。

【六】般若一切法を攝するを述ぶ。

【有爲諸法相等】十八空三十七道品乃至十八不共法を有爲法相といふ。この作相先無今有、已有還無の故に。之に反するを無爲法相といふ。

蜜を具足し、能く四念處を具足し、乃至能く十八不共法を具足し、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩地に住す、菩薩地に住し已りて菩薩の神通を得、一佛國より一佛國に至る。是菩薩は衆生の爲の故に身を受け、其所應に隨ひて衆生を成就す。若は轉輪聖王と作り、若は刹利大姓と作り、若は婆羅門大姓と作りて衆生を成就す。是を以ての故に、世尊、我れ輕慢を爲して恭敬せざるが故に舍利を取らざるにあらず。善男子善女人般若波羅蜜を供養せば、則ち舍利を供養することと爲るを以ての故のみ。復次に世尊、人有りて十方無量阿僧祇諸世界中、現在佛の法身色身を見んと欲せば、是人は應に般若波羅蜜を聞き、受持し讀誦し正憶念し、他人の爲に演說すべし。是の如きの善男子善女人は、當に十方無量阿僧祇世界の中の諸佛の法身色身を見るべし。是善男子善女人は、般若波羅蜜を行ずるも、亦應に法相を以て念佛三昧を修すべし。復次に善男子善女人、現在諸佛を見んと欲せば、當に是般若波羅蜜を受け、乃至正憶念すべし。

（六）復次に世尊、二種の法相あり、有爲の諸の法相と、無爲の諸の法相となり。云何が有爲の諸の法相なる。謂ゆる內空の中の智慧、乃至有法無法空の中の智慧、四念處の中の智慧、乃至八聖道分の中の智慧、佛の十力四無所畏四無礙智、十八不共法の中の智慧、善法の中不善法の中、有漏法の中無漏法の中、世間法の中出世間法の中の智慧、是を有爲の諸法の法相と名づく。云何が無爲の諸法の法相と名くる。若し法生無く滅無く住無く異無く垢無く淨無く增言く減無きは諸法の自性なり。云何が諸法の自性と名くる。諸法所有

【廣く三乘の義を說く等】般若中に廣く三乘を說くは、無相法を用ての故に、無生無滅等は世諦を以ての故に、この說をなす。第一義諦に非ざるなり。

の性無き是れ諸法の自性なり、是を無爲の諸の法相と名づく。』爾時、佛、釋提桓因に告げたまはく、『是の如く是の如し、憍尸迦、過去の諸佛は是般若波羅蜜に因て阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり、過去諸佛の弟子も亦般若波羅蜜に因て須陀洹道乃至阿羅漢辟支佛道を得たり、未來現在十方無量阿僧祇の諸佛も、是般若波羅蜜に因て阿耨多羅三藐三菩提を得ん、未來現在諸佛の弟子も亦是般若波羅蜜に因て須陀洹道乃至辟支佛道を得ん。何を以ての故に、般若波羅蜜の中に廣く三乘の義を說くや。無相法を以ての故に、無生無滅法の故に、無垢無淨法の故に、無作無起不入不出不增不損不取不捨法の故に、俗法を以ての故に、第一義に非ざればなり。何を以ての故に。是般若波羅蜜は此に非ず彼に非ず、高に非ず下に非ず、等に非ず不等に非ず、相に非ず無相に非ず、世間に非ず出世間に非ず、有漏に非ず無漏に非ず、有爲に非ず無爲に非ず、善に非ず不善に非ず、過去に非ず未來に非ず現在に非ず。何を以ての故に。憍尸迦、般若波羅蜜は聲聞辟支佛法を取らず、亦凡人法を捨てざればなり。』釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ一切衆生の心を知るも、亦衆生を得ず、乃至智者見者をも亦得ず。是菩薩色を得ず、受想行識を得ず、眼乃至意を得ず、色乃至法を得ず、眼觸因緣生の受乃至意觸因緣生の受を得ず、四念處乃至十八不共法を得ず、阿耨多羅三藐三菩提を得ず、諸佛法を得ず佛を得ず。何を以ての故に。般若波羅蜜は法を得ることを爲さざるが故に出づればなり。何を以ての故に。般若波羅蜜性所有無く得べからず、所用の法得べからず、處も亦得べからざればな

【七】般若を明導として六度を圓具すべきを述ぶ。

り。』佛、釋提桓因に告げたまはく、『是の如く是の如し、憍尸迦、汝の説く所の如し、菩薩摩訶薩は長夜に般若波羅蜜を行ずるに阿耨多羅三藐三菩提得べからず、何に況んや菩薩及び菩薩法をや。』

（七）爾時、釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は但だ般若波羅蜜のみを行じ、餘の波羅蜜を行ぜざるや。』佛、釋提桓因に告げて言はく、『憍尸迦、菩薩は盡く六波羅蜜法を行ず、無所得を以ての故に。檀那波羅蜜を行ずるも施者を得ず受者を得ず財物を得ず、尸羅波羅蜜を行ずるも戒を得ず持戒人を得ず破戒人を得ず、乃至般若波羅蜜を行ずるも智慧を得ず智慧人を得ず無智慧人を得ず。憍尸迦、菩薩摩訶薩の布施を行ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作り、能く檀那波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の持戒を行ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作り、能く尸羅波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の忍辱を行ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作り、能く羼提波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の精進を行ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作り、能く毘梨耶波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の禪那を行ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作り、能く禪那波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の諸法を觀ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作り、能く般若波羅蜜を具足す。一切法無所得を以ての故に、謂ゆる色乃至一切種智あり。憍尸迦、譬へば閻浮提の諸樹、種種の葉、種種の華、種種の果、種種の色、其蔭差別無きが如く、諸波羅蜜般若波羅蜜の中に入り、薩婆若に至れば差別無きこと亦是の如し、無所得を以ての故に。』

【八】般若の大功德は自行と他作と俱に無邊なるを說く。

【般若の所說を正憶念する等】偈行讀誦正憶念は難しと雖も我吾心あるを以ての故に功德少く經卷を書して他心に與ふるは大悲心ありて佛道の因緣となり、吾我心なきを以ての故に功德大なり。

【自ら舍利を供養す等】自ら舍利供養をなすより他人に舍利を與へて供養せしむるは吾我なし慈悲心の故に福多し、佛は福德を用てせざるも是の如く衆生を利益すること大なるを見るを以て、金剛三昧に入りて自ら其身を碎くなり。且つ信淨心は一に內に正憶念し、二に外に良福田あるの二因緣より生ずるものなれば、福

（八）釋提桓因佛に白して言さく『世尊、般若波羅蜜は大功德成就す。世尊、般若波羅蜜は一切功德成就す。世尊、般若波羅蜜は無量功德成就し、無邊功德成就し、無等功德成就す。世尊、若し善男子善女人有りて、是般若波羅蜜經卷を書し、恭敬し供養し尊重し讃歎し、華香乃至幡蓋を以てし、般若波羅蜜に說く所の如く正憶念すると、復善男子善女人有りて、般若波羅蜜經卷を書して他人に與ふると、其福何れか多しと爲すところぞ。』佛釋提桓因に告げたまはく『憍尸迦、我れ還て汝に問はん、汝が意に隨て我れに報へよ。若し善男子善女人有りて、諸佛舍利を供養し恭敬し尊重し讃歎し、華香乃至幡蓋を以てすると、若し復人有りて、舍利を分つこと芥子許の如くし、他人に與へて供養し恭敬し尊重し讃歎し、華香乃至幡蓋をもつてせしむると、其福何れか多しと爲すところぞ。』釋提桓因佛に白して言さく『世尊、我れ佛より聞ける法の中の義の如くば、善男子善女人有りて、自ら舍利を供養し乃至幡蓋をもつてするも、若し復人有りて、舍利を分つこと芥子許の如くし、他人に與へて供養せしむるも、其福德甚だ多し。世尊、佛は是福衆生を利するを見るが故に、金剛三昧の中に入りて、金剛身を碎きて末舍利と作す。何を以ての故に、人有り佛滅度の後、佛舍利の乃至芥子許の如くなるを供養するも、其福報邊無くして乃至苦を盡せばなり。』佛釋提桓因に告げて言はく『是の如く是の如し、憍尸迦、若し善男子善女人、般若波羅蜜經卷を書し、供養し恭敬し香華乃至幡蓋を以てするも、若し復人有りて般若波羅蜜經卷を書し、他人に與へて學せしむるも、是善男子善女人其福甚だ多し。復次に憍

徳心にあるも身を碎きて供養せしめ給ふなり。

尸迦、善男子善女人、般若波羅蜜の中の義の如く、他人の爲に說き開示し分別し解し易からしむれば、是善男子善女人は前の善男子善女人の功徳に勝る。從て聞く所の般若波羅蜜當に其人を視ること佛の如く、亦高勝梵行人の如くすべし。何を以ての故に。當に知るべし般若波羅蜜は即ち是れ佛なり、般若波羅蜜は佛と異ならず、佛は般若波羅蜜と異ならず、過去未來現在の諸佛は皆般若波羅蜜の中より學し、阿耨多羅三藐三菩提及び高勝梵行人を得、高勝梵行人とは謂ゆる阿惟越致なり。菩薩摩訶薩も亦是般若波羅蜜を學して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、聲聞人は是般若波羅蜜を學して阿羅漢道を得、辟支佛道を求むる人は是般若波羅蜜を學して辟支佛道を得、菩薩は是般若波羅蜜を學して菩薩位に入ることを得。是を以ての故に、憍尸迦、善男子善女人現在佛を供養し恭敬し尊重し讚歎し華香乃至幡蓋をもつてせんと欲せば、當に般若波羅蜜を供養すべし。我れ是利益を見る、初めて阿耨多羅三藐三菩提を得るの時是念を作さく、「誰か供養し恭敬し尊重し讚歎し、依止して住す可き者ある」と。憍尸迦、我れ一切世間の中に於て、若は天若は魔若は梵若は沙門婆羅門の中に於て我と等しき者を見ず、何に況んや勝る者有らんや。我又自ら思念すらく、「我が得る所の法、自ら作佛を致す、我れ是法を供養し、恭敬し尊重し讚歎し依止し住すべし。」と。何等か是法なる、謂ゆる般若波羅蜜なり。憍尸迦、我れ自ら是般若波羅蜜を供養し、恭敬し尊重し讚歎し已て依止し住せん。何に況んや善男子善女人阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲して、而も般若波羅蜜を供養し、恭敬し尊重し讚歎し華香瓔珞乃至幡蓋を

【法施品】十善道並に他の諸善法を施すよりも般若を施すの勝るを說く。

【一】十善を行ぜしむるより般若を受持するの功德勝るを說く。

【無漏法を說く】三十七道品十八不共法乃至無量の諸佛法は說きて般若の中にあり。

【正法位】無漏聖道の證悟に入るをいふ。

以てせざらんや。何を以ての故に。般若波羅蜜の中に諸の菩薩摩訶薩を生じ、諸の菩薩摩訶薩の中に諸佛を生ずればなり。是を以ての故に、憍尸迦、善男子善女人、若は佛道を求め、若は辟支佛道を求め、若は聲聞道を求めば、皆應に般若波羅蜜を供養し恭敬し、尊重し讃歎し、華香乃至幡蓋をもてすべし。」

法施品第三十八

(一)佛釋提桓因に告げて言はく、「憍尸迦、若し善男子善女人有りて、一閻浮提人を教へ十善道を行ぜしめば、汝が意に於て云何。是因緣を以ての故に福を得ること多きや不や。」答へて言さく、「甚だ多し、世尊。」佛言はく、「是善男子善女人般若波羅蜜經卷を書持し、他人に與へ讀誦し說かしむることの福を得ること多きに如かず。何を以ての故に、是般若波羅蜜の中に廣く諸の無漏法を說けばなり。善男子善女人は是中に從つて學する、已に學し今學し當に學すべし、正法位中に入る、已に入り今入り當に入るべし、須陀洹果を得る、已に得今得當に得べし、乃至阿羅漢果辟支佛道を求むるも亦是の如し。諸の菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を求めて正法位中に入る、已に入り今入り當に入るべし、阿耨多羅三藐三菩提を得る、已に得今得當に得べし。憍尸迦、何等か是れ無漏法なる。謂ゆる四念處乃至八聖道分四聖諦、內空乃至無法有法空、佛の十力乃至十八不共法なり。善男子善女人

は是法を學して阿耨多羅三藐三菩提を得る、已に得今得當に得べし。憍尸迦、若し善男子善女人有りて、一人に敎へて須陀洹果を得しめば、是人福德を得ること一閻浮提人に敎へて十善道を行ぜしむるに勝る。何を以ての故に、憍尸迦、一閻浮提人に敎へて十善道を行ぜしむるも、地獄畜生餓鬼の苦を離れず、憍尸迦、一人に敎へて須陀洹果を得しむれば、三惡道を離るる故に、乃至阿羅漢果辟支佛道も亦是の如し。憍尸迦、若し善男子善女人、一閻浮提の人に敎へて須陀洹果斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛道を得しむるも、善男子善女人一人に敎へて阿耨多羅三藐三菩提を得しむるの福を得ること多きに如かず。何を以ての故に、憍尸迦、菩薩の因緣を以ての故に、須陀洹乃至阿羅漢辟支佛を生じ、菩薩の因緣を以ての故に諸佛を生ず。是因緣を以ての故に、憍尸迦、當に知るべし、善男子善女人は般若波羅蜜經卷を書し、他人に與へて書持し讀誦し說かしめば福を得ること多し。何を以ての故に、是般若波羅蜜の中に廣く諸の善法を說き、是善法の中に學して、便ち刹利大姓婆羅門大姓居士大家、四天王天乃至非有想非無想天を出生す。便ち四念處乃至一切種智有り、便ち須陀洹乃至阿羅漢辟支佛有り、便ち諸佛有り。憍尸迦、一閻浮提の人を置き、若し善男子善女人有りて、四天下國土の中の衆生を敎へて十善道を行ぜしめば、汝が意に於て云何。是人、是因緣を以ての故に福を得ること多きや不や。答て言さく、「甚だ多し、世尊」。佛言はく、「善男子善女人、般若波羅蜜經卷を書し、他人に與へて書持し讀誦し說かしむるの福を得ること多きに如かず。餘は上に說けるが如し。憍尸迦、四天下國土の中

【二】四禪等を施すも般若を施すに如かず、更に正憶念を明す。

の衆生を置き、若し小千國土の中の衆生に敎へて十善道を行ぜしむるとも亦是の如し。憍尸迦、小千國土の中の衆生を置き、若し二千の中國土の中の衆生に敎へて十善道を行ぜしむるに、若し善男子善女人有りて、般若波羅蜜經卷を書し、他人に與へて書持し讀誦し說かしめば、是人福を得ること多し、餘は上に說けるが如し。憍尸迦、二千の中國土の中の衆生を置き、若し三千大千國土の中の有らゆる衆生に敎へて十善道を行ぜしむるに、復人有り、般若波羅蜜經卷を書し、他人に與へて書持し讀誦し說かしめば、是人福德多し。憍尸迦、三千大千國土の中の衆生を置き、若し如恒河沙等の國土の中の有らゆる衆生に敎へて十善道を行ぜしむるに、若し復人有り、般若波羅蜜經卷を書し、他人に與へて書持し讀誦せしめば其福多し、餘は上に說けるが如し。

(二)復次に憍尸迦、人有り、一閻浮提の衆生に敎へて四禪四無量心四無色定五神通に立たしめば、汝が意に於て云何。是善男子善女人は福德多きや不や。』釋提桓因言さく、『甚だ多し、世尊。』佛言はく、『是善男子善女人、般若波羅蜜經卷を書し、他人に與へて書持し讀誦し說かしむるの福を得ること多きに如かず。何を以ての故に。是般若波羅蜜の中に廣く諸の善法を說けばなり、餘は上に說けるが如し。憍尸迦、閻浮提の中の衆生を置き、復四天下國土の中の衆生、小千國土の中の衆生、二千の中國土の中の衆生、三千大千國土の中の衆生を置き、憍尸迦、若し人有りて十方如恒河沙等の國土の中の衆生に敎へて、四禪四無量心四無色定五神通に立たしめば、汝が意に於て云何。是人は福德多きや不や。』答へ

【正憶念等】受持等も福德多きも正憶念は能く福德智慧を具する故別說するなり。その相は所謂二に非ず不二に非ずして般若を行ずるなり。即ち初に經卷を書するを以て舍利に勝るとし、中に經卷を他人に與ふる十善等を行ずるに勝れたりとし、今受持等の中に正憶念最勝なるをいふなり。

【三】更に般若の義を分別することを自ら正憶念するに勝るを明す。

て言さく、「甚だ多し、世尊。」佛言はく、「是善男子善女人、般若波羅蜜經卷を書し、他人に與へて書持し讀誦し、說かしむるの福を得ること多きに如かず。何を以ての故に。是般若波羅蜜の中に廣く諸の善法を說けばなり、餘は上に說けるが如し。復次に憍尸迦、若し善男子善女人有りて、是般若波羅蜜を受け、持し讀誦し說き正憶念せば、是人の福德は、閻浮提の人に敎へて十善道を行ぜしめ、四禪四無量心四無色定五神通に立たしむるに勝る。正憶念とは般若波羅蜜を受持し、親近し乃至正憶念せんに、二法を以てせず、不二法を以てせず。禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を受持し、親近し乃至正憶念せんに、二法を以てせず、不二法を以てせず。阿耨多羅三藐三菩提の爲に正憶念し、內空乃至一切種智に二法を以てせず、不二法を以てせざるなり。

(三)復次に憍尸迦、若し善男子善女人有りて、他人の爲に種種の因緣をもて、般若波羅蜜の義を演說し、開示し分別して解し易からしむ。憍尸迦、何等か是れ般若波羅蜜の義なる。憍尸迦、般若波羅蜜の義とは二相を以て觀ずべからず、不二相を以て觀ずべからず、有相に非ず無相に非ず、入らず出でず、增せず損せず、垢ならず淨ならず、生ぜず滅せず、取らず捨てず、住に非ず不住に非ず、實に非ず虛に非ず、合に非ず散に非ず、著に非ず不著に非ず、因に非ず不因に非ず、法に非ず不法に非ず、如に非ず不如に非ず、實際に非ず不實際に非ず。憍尸迦、若し善男子善女人、能く是般若波羅蜜の義を以て、他人の爲に種種の因緣もて演說し、開示し分別して解し易からしめば、是善男子善女人の得る所の福德甚

【四】有所得に六度を具せざると具せるとを明す。

だ多し。自ら般若波羅蜜を受持し、親近し讀誦し說き正憶念するに勝る。復次に憍尸迦、善男子善女人、自ら般若波羅蜜を受持し、親近し讀誦し說き正憶念し、亦他人の爲に種種の因緣もて般若波羅蜜の義を演說し、開示し分別して解し易からしめば、是善男子善女人の得る所の功德甚だ多し。」釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、善男子善女人は是の如く般若波羅蜜の義を演說し、開示し分別して解し易からしむべし。」佛、釋提桓因に語りて言はく、「是の如し憍尸迦、是善男子善女人、是の如く般若波羅蜜の義を演說し、開示し分別して、解し易からしむべし。憍尸迦、善男子善女人、是の如く般若波羅蜜の義を演說し、開示し分別して解し易からしめば、無量無邊阿僧祇の福德を得。若し善男子善女人有りて、十方無量阿僧祇の諸佛を供養し、其壽命を盡して其所須に隨ひ、恭敬し尊重し讚歎し、華香乃至幡蓋もて供養するも、若し復善男子善女人有りて、種種因緣もて他人の爲に廣く般若波羅蜜の義を說き、開示し分別して解し易からしめば、是善男子善女人の功德甚だ多し。何を以ての故に、諸の過去未來現在の佛、皆是般若波羅蜜の中に於て學して阿耨多羅三藐三菩提を得、已に得今得當に得べければなり。復次に憍尸迦、若し善男子善女人、無量無邊阿僧祇劫に於て檀那波羅蜜を行ずるも、善男子善女人、般若波羅蜜を以て、他人の爲に其義を演說し、開示し分別して解し易からしむる、其福の甚だ多きに如かず、無所得を以ての故に。

(四)云何が有所得と名く。憍尸迦、若し菩薩摩訶薩有所得を用ての故に布施せば、布施の時に是念を作さく、「我れ與へ彼れ受く施す所の物あり」と、是を得檀那と名く、波羅蜜を得ず。

【有所得】我心を以て諸法中に於て相を取る。

【物あり】物の量の多少を定めて後分施すること。

【得檀那】檀那に執する有所得の檀那。以下得慧まで之に準ず。

【智を得ず】已が得たりとする慧をえざるなり。卽ち無所得を以て六度を行ずれば具足をうるなり。

「我れ持戒す、此れ是戒」と、是を得戒と名く、波羅蜜を得ず。「我れ忍辱し、是人の爲に忍辱す」と、是を得忍辱と名く、波羅蜜を得ず。「我れ精進し、是事の爲に勤めて精進す」と、是を得精進と名く、波羅蜜を得ず。「我れ禪那を修す、修する所は是れ禪那」と、是を得禪那と名く、波羅蜜を得ず。「我れ慧を修す、修する所は是れ慧」と、是を得慧と名く、波羅蜜を得ず。憍尸迦、是善男子善女人是の如く行ずれば、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足することを得ず。」釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は云何が修して、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足するや。」佛釋提桓因に告げて言はく、「菩薩摩訶薩の布施する時、與者を得ず、受者を得ず、施す所の物を得ず、是人は檀那波羅蜜を具足することを得。乃至般若波羅蜜を修する時、智を得ず、修する所の智を得ず、是人は般若波羅蜜を具足することを得。憍尸迦、是を菩薩摩訶薩の檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足すと爲す。善男子善女人、是の如く般若波羅蜜を行じ、當に他人の爲に其義を演說し、開示し分別して解し易からしめ、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜、其義を演說し開示し分別して解し易からしむべし。何を以ての故に、憍尸迦、未來世當に善男子善女人の般若波羅蜜を說かんと欲し、而して相似せる般若波羅蜜を說くこと有るべし。善男子善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發すも、是相似の般若波羅蜜を聞きて正道を失はん。善男子善女人應に是人の爲に具足して般若波羅蜜の義を演說し、開示し分別して解し易からし

【五】相似般若について。
【相似】名字語言同じく而も義異るもの。
【相似般若】正憶念を説くを聞きて正憶念するあり、心相取著して五衆等の無常乃至無滅を説くを相似般若といひ、この常顛倒を破して著心取相せず、無常に著せざるを眞實般若といふ。

むべし。』

（五）釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ相似の般若波羅蜜なる。』佛言はく、『善男子善女人、有所得の般若波羅蜜を説く、是を相似の般若波羅蜜と爲す。』釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、云何が善男子善女人、有所得の般若波羅蜜を説く、是を相似の般若波羅蜜と爲すや。』佛言はく、『善男子善女人、有所得の般若波羅蜜を説く、是を相似の般若波羅蜜と爲す。相似の般若波羅蜜とは色無常を説きて是言を作さく、「能く是の如く行ずれば是れ般若波羅蜜を行ず」と、行者色無常を求むる、是を相似の般若波羅蜜を行ずと爲す。受想行識無常を説きて是言を作さく「能く是の如く行ずれば是れ般若波羅蜜を行ず」と、行者受想行識無常を求むる、是を相似の般若波羅蜜を行ずと爲す。眼無常を説き乃至意無常を説き、色無常を説き乃至法無常を説き、眼界無常、色界眼識界無常を説き、乃至意界法界意識界無常を説き、地種無常を説き乃至識種無常を説き、眼識界無常を説き乃至意識界無常を説き、眼觸無常を説き乃至意觸無常を説き、眼觸因縁生の受無常を説き乃至意觸因縁生の受無常を説く。廣説すること五陰の如し。色苦を説き乃至意觸因縁生の受苦を説き、色無我を説き乃至意觸因縁生の受無我を説く、皆五陰に説くが如し。行者檀那波羅蜜を行ずる時、爲に色無常苦無我を説き、乃至意觸因縁生の受無常苦無我を説く。尸羅波羅蜜乃至般若波羅蜜のときも亦是の如し。四禪四無量心四無色定を行ずるに、爲に無常苦無我を説き、四念處を行ずるに、爲に無常苦無我を説き、乃至薩婆若を行ずる時、爲に無常苦無

【七八】眞實般若を說きて相似般若を說かざるを明す。

我を說く、是の如きの敎を作して、能く是の如く行ずる、是を般若波羅蜜を行ずと爲す。憍尸迦、是を相似の般若波羅蜜と名く。復次に憍尸迦、若し是善男子善女人、當來世に相似の般若波羅蜜を說き、是言を作さく、「汝善男子善女人、般若波羅蜜を修行す、汝般若波羅蜜を修行する時、當に初地を得べし、乃至當に十地を得べし。禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜も亦是の如し」と。行者相似有所得を以て、總相を以て、是般若波羅蜜を修す。憍尸迦、是を相似の般若波羅蜜と名く。復次に憍尸迦、善男子善女人は般若波羅蜜を說かんと欲して是言を作さく、「汝善男子善女人、般若波羅蜜を修行し已ぬ、當に聲聞辟支佛地を過ぐべし」と、是を相似の般若波羅蜜と名く。復次に憍尸迦、善男子善女人、佛道を求むる者の爲に是の如く說く、汝善男子善女人、般若波羅蜜を修行し已て、菩薩位に入り無生法忍を得、無生忍を得已て便ち菩薩神通に住し、一佛國より一佛國に至り、諸佛を供養し恭敬し尊重し讃歎すと。是の如く說く者、是を相似の般若波羅蜜と名く。復次に憍尸迦、善男子善女人佛道を求むる者の爲に是の如く說く、汝善男子善女人、是般若波羅蜜を學し、受持し讀誦し說き、正憶念せば、當に無量無邊阿僧祇の功德を得べしと。是の如く說く者、是を相似の般若波羅蜜と名く。復次に善男子善女人、佛道を求むる者の爲に是の如く說く、過去未來現在諸佛の功德善本の如きは、初發心より佛を成得するに至るまで都て合集し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと、是の如く說く者、是を相似の般若波羅蜜と名く。」

（六）釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、云何が善男子善女人、佛道を求むる者の爲に、相

【七】諸聖果をえしむるより般若を解義する功徳の大なるを明す。

似の般若波羅蜜を說かずとするや。』佛言はく、『若し善男子善女人、佛道を求むる者の爲に般若波羅蜜を說かば、善男子、汝般若波羅蜜を修行して色無常を觀ずること莫れ。何を以ての故に、色は色性空なり、是色性法、若し法に非ざるに非ず、即ち名けて般若波羅蜜と爲す、般若波羅蜜の中に色は常に非ず無常に非ず。何を以ての故に、是中色すら尚不可得なり、何に況んや常無常をや。憍尸迦、善男子善女人の是の如く說く者、是を相似の般若波羅蜜を說かずと名く。受想行識も亦是の如し。復次に憍尸迦、善男子善女人は佛道を求むる者の爲に說く、汝善男子般若波羅蜜を修行し、諸法に於て過ぐる所有ること莫く、住する所有ること莫れ。何を以ての故に、般若波羅蜜の中に法の過ぐ可く住す可きもの有ること無ければなり。所以は何ん、一切法自性空なり、自性空は是れ法、若し法に非ざるに非ず即ち是れ般若波羅蜜なり、般若波羅蜜の中に法の入る可く出づる可く、生ず可く滅す可きもの有ること無ければなり。憍尸迦、是善男子善女人是の如く說く、是を相似の般若波羅蜜を說かずと名く。廣說すること上の如く、相似と相違す。是を相似の般若波羅蜜を說かずと名く。是の如く憍尸迦、善男子善女人は應に是の如く般若波羅蜜の義を演說すべし。若し是の如く般若波羅蜜の義を說かば、得る所の功德前者に勝る。

(七)復次に憍尸迦、閻浮提の中の有らゆる衆生をして、皆教へて須陀洹を得しむ、汝が意に於て云何。是人福を得ること多きや不や。』答へて言さく、『甚だ多し、世尊。』佛言はく、『是善男子善女人は般若波羅蜜を以て他人の爲に種種因緣もて其義を演說し、開示し分別し

て解し易からしめ、是の如く言はんには如かず。善男子善女人、汝來りて是般若波羅蜜を受け、勤めて誦讀し說き正憶念し、般若波羅蜜の中の所說の如く行ぜよと。何を以ての故に、是般若波羅蜜の中に諸須陀洹を出生すればなり。憍尸迦、閻浮提の中の衆生を置き、復四天下の衆生、小千國土、二千中國土、三千大千國土の衆生を置きて、若し人有りて十方如恆河沙等の國土の中の衆生に教へて、盡く教へて須陀洹を得しめば、汝が意に於て云何、是人福を得ること多きや不や。」答て言さく、「甚だ多し、世尊。」佛言はく、「是善男子善女人は般若波羅蜜を以て、他人の爲に種種の因緣もて其義を演說し、開示し分別して解し易からしめ、是の如く言はんには如かず、「善男子善女人、汝來りて是般若波羅蜜を受け、勤めて讀誦し說き正憶念し、般若波羅蜜の中の所說の如く行ぜよ」と。何を以ての故に。是般若波羅蜜中に諸須陀洹を出生すればなり。復次に憍尸迦、若し善男子善女人有りて、閻浮提中の人に教へて斯陀含阿那含阿羅漢を得しめば、汝が意に於て云何。是人福を得ること多きや不や。」答て言さく、「甚だ多し、世尊。」佛言はく、「是善男子善女人は般若波羅蜜を以て、他人の爲に種種因緣もて其義を演說し、開示し分別して解し易からしめ、是の如く言はんには如かず、「善男子、汝來りて是般若波羅蜜を受け、勤めて讀誦し說き正憶念し、般若波羅蜜の中の所說の如く行ぜよ」と。何を以ての故に、般若波羅蜜の中に、諸の斯陀含阿那含阿羅漢を出生するが故に。乃至十方如恆河沙等の國土の中の衆生も亦是の如し。復次に憍尸迦、若し善男子善女人、一閻浮提中の衆生に教へて辟支佛道を得しめば、汝が意に

於て云何、是人福を得ること多きや不や。答へて言さく、甚だ多し、世尊。佛言はく、『是善男子善女人は般若波羅蜜を以て、他人の爲に種種因緣もて其義を演說し、開示し分別して解し易からしめ、是の如く言はんには如かず。「善男子汝來りて是般若波羅蜜を受け、勤めて讀誦し解說し正憶念し、般若波羅蜜の中の所說の如く行ぜよ」と。何を以ての故に、般若波羅蜜の中に諸の辟支佛道を出生するが故に。四天下乃至十方如恆河沙等の國土の中の衆生も亦是の如し。復次に憍尸迦、善男子善女人、一閻浮提中の衆生に敎へて、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめば、汝が意に於て云何、是人福を得ること多きや不や。答へて言さく、甚だ多し、世尊。佛言はく、『是善男子善女人は般若波羅蜜を以て、他人の爲に種種因緣もて其義を演說し、開示し分別して解し易からしめ、亦是の如く言はんには如かず。汝當に般若波羅蜜の中に隨て學すべし、當に一切智法を得べし。汝若し一切智法を得ば、汝便ち般若波羅蜜を修行し、增益し、具足することを得。若し般若波羅蜜を修行し、增益し、具足することを得ば、汝當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。何を以ての故に、憍尸迦、般若波羅蜜の中に諸の初發意の菩薩摩訶薩を生ずるが故に、乃至十方如恆河沙等の國土も亦是の如し。復次に憍尸迦、善男子善女人、一閻浮提中の衆生に敎へて、阿惟越致地に住せしめば、汝が意に於て云何、是人福德多きや不や。答へて言さく、甚だ多し、世尊。佛言はく、『是善男子善女人は般若波羅蜜を以て、他人の爲に種種因緣もて其義を演說し、開示し分別して解し易からしめ、是の如く言はんには如かず。汝來れ善男子、是般

若波羅蜜を受け、乃至般若波羅蜜の中の所說の如く行ぜば、汝便ち一切智法を得、一切智法を得已りて乃至便ち阿耨多羅三藐三菩提を得。何を以ての故に、般若波羅蜜の中に諸の菩薩摩訶薩の阿惟越致地を生ずるが故に、乃至十方如恆河沙等の國土も亦是の如し。復次に憍尸迦、一閻浮提中の衆生、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求めんに、若し善男子善女人有りて、是人の爲に廣く般若波羅蜜及び其義を說き、解し開示し分別して是の如く言ふ。汝來れ、善男子、是般若波羅蜜を受け、乃至般若波羅蜜の中の所說の如く行じ、學し已らば、汝當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復人有りて、一阿惟越致の菩薩の爲に般若波羅蜜及び其義を演說し、解し開示し分別して是の如く言ふ。汝來り、是般若波羅蜜を受け、乃至般若波羅蜜の中の所說の如く行じ、學し已らば、汝當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是善男子得る所の功德甚だ多し、乃至十方如恆河沙等の國土の中も亦是の如し。復次に憍尸迦、若し一閻浮提中の衆生有りて、皆阿惟越致阿耨多羅三藐三菩提を得んとするに、復善男子善女人有りて、般若波羅蜜を以て、是人の爲に其義を演說す。是中に於て一菩薩有り、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。若し善男子善女人有りて、此菩薩の爲に般若波羅蜜及び其義解を說かば、是人の功德最も多し。乃至十方如恆河沙等の國土も亦是の如し。「釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩、轉轉して阿耨多羅三藐三菩提に近づく者の如きは、是の如く轉轉して敎へて、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行ぜしむべし、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道

【法施等】六度を教ふる等を法施といひ、供養具衣食等を財施といふ。
【聖弟子】得道者なり、弟子聖ならば諸菩薩を安慰し勸進せしむべし。

分、佛の十力四無所畏、四無礙智十八不共法を教ふべし。亦應に衣服臥具飲食湯藥を供養し、其所須に隨ふべし。是善男子善女人法施財施をもて是菩薩に供養せば、得る所の功徳前者に勝る。何を以ての故に。世尊、是菩薩摩訶薩は疾く阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に。」爾時、慧命須菩提釋提桓因に語りて言はく「善い哉善い哉、憍尸迦、汝を聖弟子と爲す。諸の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を爲す者を安慰し、法施財施を以てせば、利益の法應に爾るべし。何を以ての故に、菩薩の中に諸佛聖衆を生ずればなり。若し菩薩にして阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる者は、是菩薩六波羅蜜乃至十八不共法を學すること能はず。若し六波羅蜜乃至十八不共法を學せずば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。若し阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざる者は、則ち聲聞辟支佛無し。是を以ての故に、憍尸迦、諸の菩薩摩訶薩は六波羅蜜乃至十八不共法を學す、六波羅蜜乃至十八不共法を學する時、阿耨多羅三藐三菩提を得、阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に、地獄畜生餓鬼道を斷ず、世間便ち刹利大姓婆羅門大姓居士大家四天王天乃至非有想非無想天有り、乃至檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、世に出現す、聲聞乘辟支佛乘佛乘皆世に現はる。」

摩訶般若波羅蜜經　卷第十一

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

隨喜品第三十九

【隨喜品】隨喜の功德を說く。

【一】不取相の隨喜功德を明す。

【隨喜福德】身口を勞せずして諸の功德をなし、但心の方便を以て他の修福を見て歡喜して俱行すること。

【共にし】隨喜俱行の全體を平等に共行す。

【廻向】自ら隨喜の善を廻らして佛に向はしむ。

【其福最上等】菩薩の隨喜福德は無異無悋に喜して衆生に施與して無所得の故に聲聞等の隨喜福德に比して最妙なり。

(一)爾時、彌勒菩薩摩訶薩は慧命須菩提に語らく、『菩薩摩訶薩有り、福德を隨喜して、一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、無所得を以ての故に。若は聲聞辟支佛の福德、若は一切衆生の福德、若は布施若は持戒若は修定若は隨喜よりも、是菩薩摩訶薩の福德を隨喜して、一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、其福最上第一、最妙無上にして與に等しきもの無し。何を以ての故に、聲聞辟支佛、及び一切衆生の布施持戒修定隨喜は、自調の爲、自淨の爲、自度の爲の故に起す、謂ゆる四念處乃至八聖道分空無相無作あり。菩薩、福德を隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、是功德を持て一切衆生を調へんが爲、一切衆生を淨めんが爲、一切衆生を度せんが爲の故に起せばなり。』爾時、慧命須菩提彌勒菩薩に白して言さく、『諸の菩薩摩訶薩は十方無量無邊阿僧祇の國土の中の無量無邊阿僧祇の諸の滅度せる佛を念じ、初發心より乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至り、無餘涅槃に入り乃ち法盡に至るまで、其中間に於ける諸善根六波羅

蜜に應じ、及び諸聲聞人の善根、若は布施福德、持戒修定福德、及び諸學人の無漏善根、無學人の無漏善根、諸佛戒衆、定衆慧衆解脫衆解脫知見衆、一切智大慈大悲、及び餘の無量阿僧祇の諸佛法、及び諸佛の說く所の法、是法の中に學びて須陀洹果を得。乃至阿羅漢果辟支佛道を得、菩薩摩訶薩の位に入り、及び餘の衆生の種うる諸善根、是諸善根一切の和合せる隨喜の福德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、最上第一最妙無上にして與に等しきもの無し。是の如く隨喜し已りて、是隨喜の福德を持て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。若し善男子有りて菩薩乘を行ずる者、是念を作す、我が是心阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是れ心緣事を生ず。若し善男子相を取て阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、所念の如く得べきや不や。』彌勒菩薩、須菩提に語らく、『是善男子菩薩乘を行じて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向する心は是れ緣事なり。若し善男子相を取らば所念の如きを得ず。』須菩提、彌勒菩薩に語らく、『若し諸緣諸事所有無くば、是善男子の菩薩乘を行ずる者、相を十方諸佛の諸善根、初發心より乃ち法盡に至るまで、及び聲聞の諸善根、學無學の善根に取り、一切の和合せる隨喜の功德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、相無きを以ての故に、是菩薩は將に顚倒たる無からんか、無常を常と謂ふは、想顚倒心顚倒見顚倒、不淨を淨と謂ひ、苦を謂ひて樂と爲し、無我を我と謂ふは、想顚倒心顚倒見顚倒なり。若は緣の如く、事の如く、阿耨多羅三藐三菩提と爲すも亦是の如く、廻向心も亦是の如く、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提毘梨耶禪那、般若波羅蜜、乃至十八不共法も亦是の如くならん。若し爾らば、何等か

【自調等】持戒は自調修、禪は自淨、智慧は自度、又自調とは正語正業正命、自淨とは正念正定、自度とは正見正思惟正方便、復布施の因緣の故に自調、持戒の因緣の故に自淨、修定の因緣の故に自度なり。

【謂ゆる等】四念處等の三十七道品三解脫門即ち無漏法を近緣とせるが修定なり。

【一切衆生を調ふ等】聲聞等の自調自度に反して菩薩の隨喜福德は廣く一切の衆生を度す。即ち衆生和合の因緣なきを以てなり。

【諸菩薩等】諸佛の福德を隨喜し無上道に廻向せんに所念過去の事なりや、を問へるに對し、彌勒は一に過去諸佛已に滅にして遺係なく、二に滅にし諸

佛功德は三界を出、戲論を斷ずるの故に、之を否定す。
【滅度せる佛を念ず】隨喜福德を起さんとして佛は福德の主なる故念ずるなり。又經書の名或は過去佛の名を聞くを以て廣く一切過去佛を念ずるなり。
【初發心より】發心より法盡まで皆佛身功德の和合。
【中間】六度を除く餘の菩薩の所行法。
【諸學人等】漏盡を名けて無學とし、漏未だ盡きざるを學となす。
【諸佛の說く所の等】佛の滅度後遺法中に得道するもの。
【及び餘の衆生等】佛在世及遺法中の天人乃至畜生。
【和合せる隨喜福德等】過去佛を念ずるは是れ念佛三

是れ緣、何等か是れ事、何等か是れ阿耨多羅三藐三菩提、何等か是れ善根、何等か是れ隨喜心廻向阿耨多羅三藐三菩提なるや。』

(二)彌勒菩薩須菩提に語らく、『若し諸の菩薩摩訶薩、久しく六波羅蜜を行じ、多く諸佛を供養し善根を種ゑ、善知識と相隨ひ、善く自相空法を學せば、是諸の菩薩是緣、是事、諸佛の諸善根隨喜の福德、相を取らずして阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、不二法を以てして不二法に非ず、相に非ず不相に非ず、可得法に非ず不可得法に非ず、淨に非ず垢に非ず、生に非ず滅に非ざる法、是を阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。若し諸の菩薩久しく六波羅蜜を行ぜず、多く諸佛を供養せず、善根を種ゑず、善知識と相隨せず、善く自相空法を學せずば、是諸菩薩、是諸緣是諸事、諸佛の諸善根隨喜の福德、諸心相を取りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是を廻向と名けず。須菩提、是の如きの般若波羅蜜の義乃至一切種智の義、謂ゆる內空乃至無法有法空は、新學の菩薩の爲に說くべからず。何を以ての故に、是菩薩所有の少許の信樂恭敬淸淨心、皆忘失すればなり。當に阿惟越致の菩薩摩訶薩の前に在りて說くべし、若は善知識の爲に護られ、若は久しく諸佛を供養し諸善根を種うる有り、是人の爲に是の如きの般若波羅蜜の義乃至一切種智の義、謂ゆる內空乃至無法有法空を說くべし、是人は是法を聞きて沒せず驚かず畏れず怖かざればなり。須菩提、菩薩摩訶薩は福德を隨喜して、應に是の如く阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし、謂ゆる菩薩は心を用て隨喜の福德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是心盡滅し變離す、是緣、是事、

是諸善根も亦盡滅し變離す。是中何等か是れ隨喜心、何等か是れ諸緣、何等か是れ諸事、何等か是れ諸善根ありて、阿耨多羅三藐三菩提に隨喜廻向せんや。二心俱ならず、是心性も亦廻向を得べからず。菩薩云何が隨喜心もて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんや。若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、是の如く是般若波羅蜜法有ること無く、乃至檀那波羅蜜も亦法有ること無く、色法有ること無く、受想行識乃至阿耨多羅三藐三菩提も法有ること無しと知る。菩薩摩訶薩は應に是の如く功德を隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。若し能く是の如く廻向する、是を功德を隨喜して阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。』

(三)爾時、釋提桓因須菩提に語りて言はく『新發意の菩薩、是事を聞き、將に驚懼怖畏する無からんや。須菩提、云何が新發意の菩薩、諸善根を作し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、復云何が福德を隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するや。』須菩提、釋提桓因に語らく、『若し新發意の菩薩、般若波羅蜜を行ずるも、是般若波羅蜜を受けず、無所得を以ての故に、無想の故に。乃至檀那波羅蜜も亦是の如し。多く內空を信解し、乃至多く無法有法空を信解し、多く四念處乃至十八不共法を信解し、常に善知識と相隨し、是善知識爲に六波羅蜜の義を說き、開示し分別し是の如く教授して、常に般若波羅蜜を離れざらしめ、乃ち菩薩法位に入ることを得るに至るまで、終に般若波羅蜜を離れず、乃至檀那波羅蜜を離れず、四念處乃至十八不共法を離れざらしめ、亦魔事を教語し、種種の魔事を聞き已りて增

味是六念の中故清淨戒を行じて定に入り畢竟智慧を起す。和合の故に能く正隨喜を起す是れ實法なり。

【是心】隨喜心なり。

【心緣事】緣とは隨喜心の所緣卽ち一切佛衆生の功德、事とは所緣の本卽ち福德の所住處たり。心は隨喜心。

【是菩薩等】諸事諸緣無所有なるに功德相を取るは顚倒ならん。

【無常等】常樂我淨の四顚倒の譬喩。

【想顚倒等】顚倒の三種分別なり。顚倒生ずる時は想より心、見となる。見道に見を、學地に心と想とを滅するなり。

【緣の如く等】諸緣事如實ならば畢竟空にして念も亦空、乃至隨喜心十

入不共法も空。若し諸法一相所謂無相ならば此中何等か是れ縁乃至心にして無上道に廻向するや。

【二】諸法空無相なり、不取相即ち不二非不二なりとして廻向を明す。

【久しく等】久しく六度を修せば諸功德厚き故能信能行にして諸佛を供養して善根を種うる故、功德積集して結使を斷じて其心を柔軟ならしむなり。

【善知識等】今世に得る好師好同學。

【所有の少許の】少福德ある者畢竟空を聞きて空に著して福德の要なしとして善業を忘失するをいふ。

【謂ゆる菩薩等】上來隨喜の義體を明し以下更に異門を以て上事を釋す。

せず滅せず。何を以ての故に、是菩薩摩訶薩は一切法を受けざるが故に。是菩薩、亦常に諸佛を離れず、乃至菩薩位を得、中に於て善根を種う。是善根を以ての故に、菩薩の家に生じ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、終に是善根を離れず。復次に新發意の菩薩摩訶薩は、過去十方無量阿僧祇の國土の中に於ける諸佛の生死道を斷じ、諸戲論道を斷じ、盡く重擔を棄て、聚落の刺を滅し、諸有結を斷じ、正智もて解脫せる、及び弟子所作の功德、是中に於て若は刹利大姓婆羅門大姓居士大家四天王天乃至淨居天の種うる所の善根、是一切を和合し稱量するに、隨喜心最上第一最妙無上にして與に等しきもの無きを以て、應に隨喜し、隨喜し已りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。」爾時、彌勒菩薩須菩提に語らく、「若し新發意の菩薩摩訶薩、諸佛及び弟子の諸善根を念じ隨喜せる功德は、最上第一最妙無上にして與に等しき無く、隨喜し已りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべくんば、云何が菩薩、想顚倒心顚倒見顚倒に墮せざるや。」須菩提言はく、「若し菩薩摩訶薩、諸佛及び僧を念ずれば、是中に於て佛想を生ぜず僧想を生ぜず善根想無し、是心を用て阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是心中亦心想を生ぜず。菩薩是の如く廻向せば想顚倒せず心顚倒せず見顚倒せず。若し菩薩摩訶薩、諸佛及び僧の善根を念じて相を取り、相を取り已りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、菩薩の是の如きを名けて想顚倒心顚倒見顚倒と爲す。若し菩薩摩訶薩、是心を用て諸佛及び僧の諸善根を念ぜば、是心念ずる時、即ち盡滅するを知る。若し盡滅せば是法廻向することを得べからず、所用の廻向心も亦是れ盡滅相、所

【盡滅等】是心は念念に盡滅し變離して住時あることなし。

【何等か是れ隨喜心等】諸佛等の諸緣事久しく已に滅し、又隨喜心も今滅し等しく過去世に入りて實相分別なし、若し能く是の如く廻向するを正廻向と名くるなり。

【二心俱ならず】一時に二心和合せず、隨喜心に菩提心なし。一切心相畢竟空なり。

【三】新學も學すべき眞の無上廻向を述ぶ。

【新發意の菩薩等】新學は久しく修行して諸佛を供養せざるも利根と善知識の因緣を以て正廻向に堪任するを說く。

【受けず】相を得ず所得なく著せず。

【多く內空を信解

廻向の處及び法も亦是相の如し。若し是相の如く廻向せば、是を正廻向と名け邪廻向に非ず。菩薩摩訶薩は應に是の如く阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。復次に若し菩薩摩訶薩、過去諸佛の善根及び弟子の善根、是中に凡夫人の法を聞きて種うる善根、若は諸天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽の法を聞きて種うる善根、若は刹利大姓婆羅門大姓居士大家四天王天乃至阿訶尼吒天の法を聞きて種うる善根、阿耨多羅三藐三菩提心を發すもの、是一切の福德を和合し稱量するに、隨喜せる功德は最上第一最妙無上にして與に等しき無く、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是時菩薩、若し是の如く是諸法盡滅し、所廻向の處及び法も亦自性空なりと知り、能く是の如く廻向せば、是を眞に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。復次に若し菩薩、是の如く法有ること無きを知らば能く法を廻向す。何を以ての故に。一切法自性空の故に。若し是の如く廻向せば、是を正しく阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜乃至檀那波羅蜜を行ずれば、想顚倒心顚倒見顚倒に墮せず。何を以ての故に。菩薩は是廻向に著せず、亦諸善根を以て菩提心に廻向する處を見ざればなり。是を菩薩摩訶薩の無上廻向と名く。

(四)復次に若し菩薩摩訶薩は、所作の福德、五陰十二入十八界を離るるを知り、亦般若波羅蜜も是れ離相、乃至檀那波羅蜜も是れ離相、乃至無法有法空も是れ離相、四念處乃至十八不共法も是れ離相なるを知らば、是の如く菩薩摩訶薩隨喜心もて福德を起し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。復次に若し菩薩摩訶薩、隨喜の福德には隨喜福德の自性離るる

す】常に内空三昧を修觀する故に信解す。

【菩薩法位】 菩薩の正性離性。

【明き已りて増せず】知識の隨事を說くを聞くも善く諸法實相を修習するを以て空の破せらるるなく不増不減なり。

【菩薩の家】 善根を離れずして無上道に至る處。

【生死道を斷じ】無餘涅槃に入る。

【諸戲論を斷じ】空空等三昧に住し八聖道分を捨す。

【五捨】 五蓋能く苦惱を生ずる故捨といふ。之を捨するに二あり、一は有餘涅槃中に五蓋因緣の諸煩惱を捨て、二には無餘涅槃に入りて五蘊の果を捨つるなり。

【聚落】 一切白衣の舍、剃とは五欲に名く。

を知り、亦諸佛も佛性を離れ、諸善根も亦善根性を離れ、菩提心の菩提心性も亦離れ、迴向の迴向性も亦離れ、菩薩の菩薩性も亦離れ、般若波羅蜜の般若波羅蜜性も亦離れ、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜の檀那波羅蜜性も亦離れ、乃至十八不共法の十八不共法性も亦離るゝを知る。菩薩摩訶薩は應に是の如く離相般若波羅蜜を行ぜば、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜の中に隨喜の福德を生ずと名く。復次に菩薩摩訶薩、過去滅度の諸佛の諸善根、若し迴向せんと欲せば、是の如く迴向して是念を作すべし、諸佛の滅度相の如く、諸善根相も亦是の如く滅度す、法相も亦是の如し、我れ心を用て迴向せば、是心相も亦是の如し。若し能く是の如く迴向せば、當に知るべし、是を阿耨多羅三藐三菩提に迴向すと。是の如く迴向せば、想顛倒心顛倒見顛倒に墮せず。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、諸佛の善根相を取りて阿耨多羅三藐三菩提に迴向せば、是を名けて迴向と爲さず。何を以ての故に。諸の過去佛及び善根は相緣に非ず無相緣に非ざればなり。若し菩薩摩訶薩、是の如く相を取ることを作さば、之を善根もて阿耨多羅三藐三菩提に迴向すと名けず。是の如きの菩薩摩訶薩は想顛倒心顛倒見顛倒に墮す。若し菩薩摩訶薩諸佛及び諸善根及び諸心相を取らざれば、是を諸善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に迴向すと名く。是の如きの菩薩摩訶薩は想顛倒心顛倒見顛倒に墮せず。爾時、彌勒菩薩須菩提に問はく、「云何が菩薩摩訶薩諸善根に於て相を取り、阿耨多羅三藐三菩提に迴向すること能はざるや。」須菩提言はく、「是事を以ての故に當に知るべし、菩薩摩訶薩の學ぶ所の般若波羅

【諸有結を斷じ】五欲訶を摧くを五下分結を斷ずといひ、諸有結を斷ずるを五上分結を斷ずるといふ。【正智】金剛三昧相應の智慧一切煩惱及習を斷ずる故正智得解脫といふ。【是法】前に云ふ心緣事功德。【所廻向處】無上道のこと。【四】現在徧業の空離相を說き、正廻向を辯ず。【般若是れ離相】般若等の諸法を行ずるも亦空にして相を離ると知るなり。【隨喜心等】如實に離相を了知せる隨喜心なり。【相緣無相緣】相無相は二邊にして之を離るるを中道と即ち諸佛の實相とし、この二相を斥くるなり。【般若波羅蜜方便力】般若無相は眞

蜜の中に、應に般若波羅蜜方便力有るべし、若し是福德、般若波羅蜜を離るれば阿耨多羅三藐三菩提に廻向することを得ずと。何を以ての故に。般若波羅蜜の中に諸佛得べからず、諸善根得べからず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向する心も亦得べからざればなり。是中に於て菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時に是の如く思惟すべし、過去の諸佛及び弟子の身皆滅す、諸善根も亦滅す、我れ今相を取りて諸佛の諸善根及び諸心を分別し、是取相を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは諸佛の許さざる所なりと。何を以ての故に。相を取るは所得有るが故に。謂ゆる過去諸佛に於て相を取り分別す、是故に菩薩摩訶薩諸善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんと欲するも、得有るべからず相を取るべからず、是の如く廻向す。若し取相を得ること有りて諸佛に廻向せば大利益有りと說かず。何を以ての故に、是廻向は毒を雜ふるが故に。譬へば美食に毒を雜ふるが如し、好色好香有りて人の貪る所と爲ると雖も、而も其中に毒を雜ふ、愚癡の人は之を食して歡喜し、其好色香美を貪りて口にす可きも、飯消せんと欲する時、若は死若は死に等しき苦を受く。若し善男子善女人諦に受せず諦に取相せず諦に讀誦せず中義を解せずば、是の如く他に教へて言はく、汝善男子、過去未來現在十方の諸佛、初發意より以來阿耨多羅三藐三菩提を得るに至り、無餘涅槃に入り乃至法盡まで、其中間に於て般若波羅蜜を行ずる時に作せる諸善根、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を行ずる時に作せる諸善根、四禪四無量心四無色定四念處乃至八聖道分、佛十力を修し乃至十八不共法を修する時に作せる

諸善根、佛國土を淨め衆生を成就するに作せる諸善根、及び諸佛の戒衆定衆慧衆解脱衆解脱知見衆、一切種智、無錯謬法、常捨行、及び諸弟子是中に種うる所の善根、及び諸佛に記せられ當に辟支佛と作るべきもの、是中に諸天龍阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽等の種うる所の善根、是の諸の福德を稱量和合し隨喜して阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是廻向は取相を以て法を得るが故に毒を雜ふる食の如し、法を得る者は終に正廻向無し。何を以ての故に。是得法毒を雜へ相有り動有り戲論有ればなり、若し是の如く廻向せば則ち佛を謗り、佛教に隨はず、法說に隨はずと爲す。是善男子善女人、佛道を求めんとせば應に是如く學すべし。過去未來現在の諸佛、初發意より乃至法盡まで、及び弟子の般若波羅蜜を行ずる時に作せる善根、乃至一切種智を修する、餘は上に說けるが如し。云何が諸善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは正廻向なりや。佛道を求むる善男子善女人有りて、般若波羅蜜を行じて諸佛を謗らんと欲せざる者は、諸の福德を、應に是の如く廻向すべし、諸佛の知る所の如く無上智慧を以て是諸善根相、是諸善根性を知り、我も亦是の如く隨喜し、諸佛の知る所の如く、我も亦是の如く阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、菩薩道を求むる善男子善女人は應に是の如く阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべしと。若し是の如く廻向せば則ち佛を謗らず、佛の所教の如く佛の法說の如しと爲す、是菩薩摩訶薩の廻向には則ち毒を雜ふること無し。

(五)復次に佛道を求むる善男子善女人の般若波羅蜜を行ずる時、諸善根を是の如く廻向すべ

實にして力あるを云ふ。

【美食等】食は隨喜福德、毒は取相、好色は人天の福樂、好香は名譽富貴勢力に喩ふ。

【愚癡人】新發意取相著心の菩薩。

【食ひて歡喜等】富樂福德の因緣の故に天人中にこれを受く。

【飯消せん】無常の破壞に喩ふ。

【諦に受せず】般若を受くるも義を取らずして語言に著す。

【諦に取相せず】如法に分別せず。

【諦に讀誦せず】句文を忘れ、自失し、受具足せず。

【中義を解せず】經意を正しく得ざるなり。

【諸善根相……性】一切智人中佛は最勝、佛の知る所の諸善根は必ず是れ實相なりとすること。

【五】諸法三界不繋の故に三世に攝せず、これを以て廻向するの眞廻向たるを說く。

【色生なし】色實相の初後生相不可得なること。

し、色、欲界に繋せず色界に繋せず無色界に繋せざるが如く、不繋法とは、過去に名けず未來に名けず現在に名けず。受想行識、欲界に繋せず色界に繋せず無色界に繋せざるが如く、不繋法とは、過去未來現在に名けず。十二入十八界も亦是の如し。般若波羅蜜、欲界に繋せず色界に繋せず無色界に繋せざるが如く、不繋法とは、過去未來現在に名けず。禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜も亦是の如く、內空乃至無法有法空も亦是の如し。四念處、欲界に繋せず色界に繋せず無色界に繋せざるが如く、不繋法とは、過去未來現在に名けず。乃至八聖道分も亦是の如く、佛の十力乃至十八不共法も亦是の如し。如如、法性法相法住法位實際、不可思議性、戒定慧解脫解脫知見衆、一切種智、無錯謬法、常捨行、欲界に繋せず色界に繋せず無色界に繋せざるが如く、不繋法とは、過去未來現在に名けず。是廻向所廻向處に行者の繋せざる皆亦是の如し、是諸佛も亦繋せず、諸善根も亦繋せず、是諸聲聞辟支佛の善根も亦繋せず、不繋法とは、過去未來現在に名けず。若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、是の如く色、三界に繋せず、不繋法とは、過去未來現在に名けずと知り、若し法、過去未來現在なれば、取相有所得法を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべからず。何を以ての故に。是色生無し、若し法生無ければ則ち法無く、無法の中に廻向すべからざればなり。受想行識も亦是の如し。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至無錯謬法、常捨行三界に繋せず、不繋法は、亦過去未來現在に非ず。若し過去未來現在法に非ざれば、取相有所得の法を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべからず。何を以ての故に。是法生無し、

【佛事を爲作し】佛の說法を助けて菩薩道を明く。

【所應の廻向】顚倒のなき隨喜廻向。

【無相】假名相法相無相相の三相あり、一は衆生の如く和合法無明力の故に有、法相とは蘊處界等の諸法の肉眼に觀る故に有、慧眼によらば無、この二を離るるは無相相、この三種相を離るるを無相と名く。

【六】廻向の福德甚大なるを述ぶ。

若し生無ければ則ち法無し、無法の中に廻向すべからざればなり。菩薩摩訶薩是の如く廻向せば則ち毒を雜ふる無きなり。若し佛道を求むる善男子善女人、取相を以て法を得、諸善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、是を邪廻向と名く。若し邪廻向せば諸佛の稱譽せざる所なり。是の邪廻向を用ては檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足すること能はず、四念處乃至八聖道分、内空乃至無法有法空、佛の十力乃至無錯謬法常捨行を具足すること能はず、淨佛國土成就衆生を具足すること能はず。若し佛國土を淨め衆生を成就すること能はざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。何を以ての故に。是の廻向は毒を雜ふるが故に。復次に菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、應に是の念を作すべし、諸佛所知の諸善根廻向、是れ眞廻向なるが如く、我も亦是の法相を以て廻向すべしと、是を正廻向と名く。爾の時、佛須菩提を讃じたまはく、「善い哉善い哉、汝の爲す所の如きは佛事を爲作し、諸の菩薩摩訶薩の爲に所應の廻向の法を說けり、無相無得無出無垢無淨、無法性自相空常自性空、如法性如實際なるを以ての故に。

(六)須菩提、若し三千大千國土の中の衆生、皆十善道四禪四無量心四無色定五神通を行ぜば、須菩提の意に於て云何、是の衆生の福を得ること多きや不や。」「甚だ多し、世尊。」佛言はく、「是の善男子善女人、諸善根に於て心著せず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんには如かず。須菩提、是の善男子善女人の福德は、最上第一最妙無上にして與に等しき無し。復次に須菩提、若は三千大千國土の中の衆生、皆須陀洹乃至阿羅漢辟支佛を得、若は善男子善女

【形有らば】福徳が形色等を有せばの意。

【無覺法】思作諸覺の分別なきこと

人有りて、形壽を盡して供養し恭敬し、尊重し讃歎し、衣服飲食臥具醫藥もて所須を供給せば、須菩提の意に於て云何。是善男子善女人は、是因緣の故に福徳を得ること多きや不や。』『甚だ多し、世尊。』佛言はく、『是善男子善女人、諸善根に於て心著せず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんには如かず、最上第一最妙無上にして與に等しき無し。』『復次に須菩提、若し三千大千國土の中の衆生、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、十方如恒河沙等の國土の中の一一の衆生、如恒河沙等の劫に是菩薩を恭敬し、尊重し讃歎し供養し、衣服飲食臥具醫藥もて所須を供給せば、須菩提の意に於て云何。是善男子善女人は、是因緣の故に福を得ること多きや不や。』『甚だ多し、世尊、無量無邊阿僧祇も譬喩を以て比を爲すべからず。世尊、若し是福徳、形有らば十方如恒河沙等の國土も受けざる所なり。』佛須菩提に告げたまはく、『善い哉善い哉、汝の言ふ所の如し、爾りと雖も善男子善女人、諸善根に於て心著せず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんには如かず、最上第一最妙無上にして與に等しき無し。是無著の廻向功徳を前の功徳に比するに、百倍千倍百千萬億倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。何を以ての故に。是善男子善女人、相を取り法を得て十善道四禪四無量心四無色定五神通を行じ、相を取り法を得て須陀洹を供養し恭敬し尊重し讃歎し、衣服飲食臥具醫藥もて所須を供給し、乃至相を取りて菩薩を供養するが故に。』爾時、四天王天二萬の諸天子と與に合掌し佛を禮して是言を作さく、『世尊、菩薩摩訶薩の最大廻向は方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相法を以ての故に、無覺法を以ての

故に、諸善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり。是の如き廻向は二法に墮せず。』爾時、釋提桓因も亦無數百千億三十三天及び餘の諸天子と與に、天華瓔珞搗香澤香天衣幡蓋鼓天伎樂を持て、以て佛を供養して是の如く言さく、『世尊、菩薩摩訶薩の最大廻向は方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相法を以ての故に、無覺法を以ての故に、諸善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり、是の如き廻向は二法に墮せず。』須夜摩天王千の天子と與に、珊兜率陀化樂他化自在諸天王各千の天子と倶に佛を供養し已りて是の如きの言を作さく、『世尊、菩薩摩訶薩の最大廻向は方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相法を以ての故に、無覺法を以ての故に、諸善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり、是の如き廻向は二法に墮せず。』爾時、諸の梵天無數百千那由他諸天と倶に佛所に詣り、頭面して佛足を禮し、大音聲を發して是の如く言さく、『未曾有なり、世尊、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の護る所と爲り、方便力を以ての故に、前の善男子善女人の取相有所得なる者に勝る。』光音天乃至阿迦尼吒天無數百千億那由他の諸天と倶に佛所に詣で、頭面して足を禮し、大音聲を發して是の如く言さく、『未曾有なり、世尊、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の護る所と爲り、方便力を以ての故に、前の善男子善女人の取相有所得なる者に勝る。』爾時、佛四天王天乃至阿迦尼吒諸天子に告げたまはく、『若し三千大千世界の中の有らゆる衆生、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發さば、是一切菩薩、過去未來現在の諸佛、及び聲聞辟支佛の諸善根、初發意より乃至法住まで、其中間に於ける有らゆる善根、幷に餘の一切衆生の有ら

【法住】法盡の意。

【七】隨喜廻向の最上無與等の大功德なるを明す。

【是諸法中等】一切法不可得不可念の故に取らず捨てず實相の中に入る故に。

ゆる善根、謂ゆる布施持戒忍辱精進一心智慧、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、戒衆定衆慧衆解脫衆解脫知見衆、是の如き等の諸餘無量の佛法を念じ、一切和合し隨喜し、隨喜し已りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、取相有所得を以ての故に、復善男子善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、過去未來現在の諸佛及び聲聞辟支佛、初發意より乃至法住まで、其中間に於ける有らゆる善根、幷に餘の一切衆生の有らゆる善根、謂ゆる布施持戒忍辱精進一心智慧、檀那波羅蜜乃至無量の諸佛法を念じ、一切和合し稱量す、無所得を以ての故に、無二法の故に、無有相法の故に、不著法の故に、無覺法の故に、是は最上の隨喜、第一最妙無上にして與に等しき無き隨喜なり。隨喜し已りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是善男子善女人の功德の前の善男子善女人の功德に勝ること、百倍千倍百千萬億倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。」

（七）爾時、須菩提佛に白して言さく、「世尊、世尊は善男子善女人の諸善根を和合し稱量し隨喜し廻向する、最上第一最妙無上與に等しき無しと說きたまふ。世尊、云何が隨喜を最上乃至與に等しき無しと名くるや。」佛言はく、「若し善男子善女人、過去未來現在の諸法に於て取らず捨てず、念ぜず念ぜざるに非ず、得ず得ざるに非ず、是諸法の中にも亦法の生ずる者滅する者、若は垢若は淨有ること無く、諸法は增せず減せず、來らず去らず、合せず散せず、入らず出でず、過去未來現在の諸法相、如如相、法性法住法位の如く、我も亦是の如く隨喜し、隨喜し已りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の如き廻向は最上第一

【是隨喜等】是は無量無壽にして作佛にいたり、餘は有量有壽にして生死に順ふ。

【解脱と等し】解脱に有爲無爲をいふも是內眼の所觀なればなり、若し慧眼によらば皆虛妄にして唯涅槃の寳あるのみなり。故に諸法解脱と等しといふ。

最妙無上にして與に等しき無し。須菩提、是隨喜の法は餘の隨喜に比するに、百倍千倍百千萬億倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。復次に須菩提、佛道を求むる善男子善女人過去未來現在の諸佛及び聲聞辟支佛に於て、初發心より乃至法住まで、其中間に於ける有らゆる善根、若は布施乃至智慧、檀那波羅蜜乃至無量の諸佛法、及び餘の一切衆生の有らゆる善根、若し隨喜せんと欲すれば是の如く隨喜し、是念を作すべし。布施は解脱と等し、戒忍精進禪智は解脱と等し、色は解脱と等し、受想行識も亦解脱と等し、內空は解脱と等し、乃至無法有法空も亦解脱と等し、四念處は解脱と等し、乃至八聖道分も亦解脱と等し、佛の十力は解脱と等し、乃至一切種智も亦解脱と等し、戒衆定衆慧衆解脱衆解脱知見衆も亦解脱と等し、隨喜は解脱と等し、過去未來現在の諸法は解脱と等し、十方の諸佛は解脱と等し、諸佛の廻向は解脱と等し、諸佛は解脱と等し、諸佛の滅度は解脱と等し、諸佛の弟子聲聞辟支佛は解脱と等し、諸佛の弟子の滅度は解脱と等し、諸佛の法相は解脱と等し、諸の聲聞辟支佛の法相は解脱と等し、一切の諸法相も亦解脱と等し、我れ是諸善根を以て、隨喜の功德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも亦解脱と等し、不生不滅の故に。須菩提、是を諸の菩薩摩訶薩の隨喜の功德は、最上第一最妙無上にして與に等しき無しと名く。須菩提、菩薩、是隨喜の功德を成就せば、當に疾く阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復次に須菩提、十方如恒河沙等の現在の諸佛及び諸の弟子、現在に若し佛道を求むる善男子善女人有りて、形壽を盡して、是諸佛及び弟子を供養し、一切の所須を供養し、

恭敬し尊重し讃歎し、衣服飲食臥具醫藥もてし、是諸佛滅度の後晝夜勤修し、供養し恭敬し尊重し讃歎し、華香乃至幡蓋伎樂もてす、取相有所得を以ての故に。持戒忍辱精進禪定智慧す、取相有所得を以ての故に。復善男子善女人有りて、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求め、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、相を取らざるを以て所得の法無く、方便力もて諸善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是福德最上第一最妙無上にして與に等しき無く、前の福德に勝ること百倍千倍百千萬億倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に諸善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし、相を取らざるを以て所得の法無きが故に。』

照明品第四十

【照明品】般若一切の能照の功德を讃ずるを明す。【一】般若を讃じて供養を明にし、般若の導者たることを明す。【是般若波羅蜜】舍利弗先に彌勒等に隨喜の義を說くをきき、般若の隨喜の義、甚深無量

（一）爾時、慧命舍利弗佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜。』佛言はく、『是般若波羅蜜。』『世尊、般若波羅蜜は能く一切法を照す、畢竟淨の故に。』『世尊、應に般若波羅蜜を禮すべし。世尊、般若波羅蜜は三界に著せず。世尊、般若波羅蜜は諸闇冥を除き、一切煩惱諸見を除くが故に。世尊、般若波羅蜜は一切助道法中最上なり。世尊、般若波羅蜜は安隱なり、能く一切の怖畏苦惱を斷ずるが故に。世尊、般若波羅蜜は能く光明を與ふ、五

眼を莊嚴するが故に、世尊、般若波羅蜜は能く邪道に墮する衆生を示導す、二邊を離るゝが故に。世尊、般若波羅蜜は是れ一切種智なり、一切の煩惱及び習を斷ずるが故に。世尊、般若波羅蜜は是れ諸の菩薩摩訶薩の母なり、能く諸佛法を生ずるが故に。世尊、般若波羅蜜は生ぜず滅せず、自相空の故に。世尊、般若波羅蜜は生死を遠離す、常に非ず滅に非ざるが故に。世尊、般若波羅蜜は救無き者の護と作る、一切珍寶を施すが故に。世尊、般若波羅蜜は力を具足す、能く破壞するもの無きが故に。世尊、般若波羅蜜は能く三轉十二行法輪を轉ず、一切諸法は轉ぜず還らざるが故に。世尊、般若波羅蜜は能く諸法の性を示す、無法有法空なるが故に。世尊、應に云何が般若波羅蜜を供養すべきや。」佛言はく、「當に世尊を供養する如くすべし、般若波羅蜜を禮すること當に世尊を禮するが如くすべし。何を以ての故に、世尊は般若波羅蜜に異ならず、般若波羅蜜は世尊に異ならず、世尊は即ち是れ般若波羅蜜、般若波羅蜜は即ち是れ世尊なり。是般若波羅蜜の中に諸佛菩薩辟支佛、阿羅漢阿那含斯陀含須陀洹を出生し、般若波羅蜜の中に十善道四禪四無量心四無色定五神通、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分を生じ、是般若波羅蜜の中に佛の十力十八不共法大慈大悲一切種智を生ずればなり。」爾時、釋提桓因心に念ずらく、「何の因緣の故に舍利弗是事を問ふや。」と、念じ已りて舍利弗に語らく、「何の因緣の故に、是事を問ふや。」と。舍利弗、釋提桓因に語りて言はく、「憍尸迦、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜に守護せられ、漚惒拘舍羅力を以ての故に、過去未來現在の諸佛に於て、初發心より乃

無邊にして大いに衆生を利益するを知りて、漏盡寂滅なるも歡喜して佛に能く隨喜を作し諸戯論を斷じ無量衆生を利益して佛道に入らしむるもの是の般若と言ふべし、佛は其言を可として是と云ひ給へるなり。

【一切法】過去未來現在無爲不可說の五種法藏。

【畢竟淨】諸法實相の中に戯論垢穢なき故に。

【能く禮す】菩薩を守護し、諸苦惱を救ひ、能く所願を滿じ三千大千世界を守護する故に禮す。

【三界に著せず】三界中の三毒泥淤に汚されざる故に。

【助道法中最上】智慧を本として四念處等三十七道品を分別する故に。

【衆生を示導す】

有邊無邊等の諸二邊を離るる故に。

【一切種智】金剛三昧に住し一切煩惱を斷じ微習も遺餘なからしめ無礙解脫を得る故に。又一切法の總相別相一切種智の因緣を知る故に。

【不生不滅】一切法中各各自相空の故に。

【生死を遠離す】斷常は諸見の本、諸見は結使の本、結使は一切生死苦の本なるが故に。

【三轉十二行法輪を轉ず】般若中に自性なき故に諸法不轉と說き、生死の中に還らずして涅槃に入る。不生の故に不轉、不滅の故不還なり。之を今いふ、轉法輪とは初中後に知斷修證を成就する說法相なり。

【何の因緣の故等】舍利弗は漏盡欲の人なるに般若を

至法住まで、其中間に於て作す所の善根、一切和合し隨喜して阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是因緣を以ての故に我れ是事を問ふ。憍尸迦、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜の檀那波羅蜜尸羅波羅蜜、羼提、毘梨耶、禪那波羅蜜に勝ること、譬へば生盲人若は百若は千若は百千あるも而も前導無ければ能く道に趣き城に入ること能はざるが如し。憍尸迦、五波羅蜜も亦是くの如し。般若波羅蜜を離るれば、盲の導き無くして道に趣くこと能はざるが如く、一切智を得ること能はず。憍尸迦、若し五波羅蜜般若波羅蜜の將導を得れば、是時五波羅蜜を名けて有眼と爲す。般若波羅蜜の將導、波羅蜜の名字を得。』釋提桓因、舍利弗に語らく、『言ふ所の如く、般若波羅蜜五波羅蜜を將導するが故に波羅蜜の名字を得とするも、舍利弗、若し檀那波羅蜜の助無くんば五波羅蜜は波羅蜜の名字を得ず、若し尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜無くんば五波羅蜜は波羅蜜の名字を得ず。若し爾らば何を以ての故に獨り般若波羅蜜のみを讃ずるや。』舍利弗言はく、『是の如く是の如し、憍尸迦、檀那波羅蜜無くんは五波羅蜜は波羅蜜の名字を得ず、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜無くんば五波羅蜜は波羅蜜の名字を得ず、但だ菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に住してのみ能く檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を具足す。是を以ての故に、憍尸迦、般若波羅蜜は五波羅蜜の中に於て、最上第一最妙無上にして與に等しき無し。』

(三)舍利弗佛に白して言さく、『世尊、云何が應に般若波羅蜜を生ずべきや。』佛舍利弗に告げ

讃嘆すること法に著するに似るが故に問を發するなり。【漚和拘舍羅】ウパーヤカウシャルヤ（Upāyakauśalya）方便善巧と譯す。【是因緣】菩薩は般若のために守護せられて能く隨喜福德に廻向して般若の相を破らず、このこと希有なるを因緣とす。【道等】道とは八聖道、城とは涅槃、又道とは菩薩の十地道、城とは一切種智等の諸佛法に喩ふ。【有眼】罪福あるを信じ邪見等の無明を破る故に能く布施するなり。然るに布施中智慧は客體として存するのみにして正體に非ず。客なければ無眼となるなり。【二】行者如何にして般若波羅蜜を生ずるやを明す。

たまはく、『色不生の故に般若波羅蜜生ず、受想行識不生の故に般若波羅蜜生ず、檀那波羅蜜不生の故に般若波羅蜜生ず、乃至禪那波羅蜜不生の故に般若波羅蜜生ず、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切智一切種智不生の故に般若波羅蜜生ず。是の如きの諸法不生の故に般若波羅蜜應に生ずべし。』舍利弗言さく、『世尊、云何が色不生の故に般若波羅蜜生じ、乃至一切の諸法不生の故に般若波羅蜜應に生ずべきや。』佛言はく、『色は不起不生不得不失の故に、乃至一切の諸法は不起不生不得不失の故に、般若波羅蜜を生ず。』舍利弗佛に白して言さく、『是の如く生ずる般若波羅蜜は、何等の法と合するや。』佛言はく、『與に合する所無し、是を以ての故に、般若波羅蜜と名くることを得。』『世尊、何等の法と合せざるや。』佛言はく、『不善法と合せず善法と合せず、世間法と合せず出世間法と合せず、有漏法と合せず無漏法と合せず、有罪法と合せず無罪法と合せず、有爲法と合せず無爲法と合せず。何を以ての故に。般若波羅蜜は、法を得ることを爲さざるが故に生ず、是を以ての故に、諸法に於て合する所無し。』と。爾時、釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜は亦薩婆若とも合せざるや。』佛言はく、『是の如し、憍尸迦、般若波羅蜜は亦薩婆若とも合せず、亦得ざるが故に。』釋提桓因言さく、『世尊、云何が般若波羅蜜、亦薩婆若に合せず、亦得ざるや。』佛言はく、『般若波羅蜜は名字の如くならず、相の如くならず、起作法合の如くならず。』釋提桓因言さく、『今云何が合するや。』佛言はく、『若し菩薩摩訶薩の不取不受不住不著不斷の如き、是の如きの合も亦合する所

【不起等】色等は因緣和合の故に起るも行者色の虛妄なるを知れば起らしめず、不起の故に不生なり、不生の故に不得、不得の故に不失、この故に般若生ず。【般若薩婆若と合せざるや】一切法無生の故に般若薩婆若と合せざるも帝釋は愛未だ斷ぜざるが故にこの疑あるなり。【不取等】一切法虛誑の故に相を取らず、一切法中に無常等の過咎ある故に受けず、吾我心世間を縛著して皆動相の故に不住、種々苦惱を生じて變化する故不著、世間顚倒の果報不實にて滅する所なき故不斷なり【般若を信ずれば等】般若不可得と信ずる故に定んで信ずべきものありと信ぜざるなり。

無し。是の如く、憍尸迦、般若波羅蜜は一切法と合するも亦合する所無し。』爾時、釋提桓因佛に白して言さく、『未曾有なり、世尊、是般若波羅蜜力は一切法不起不生不得不失の爲の故に生ずとは。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時に是念を作す、般若波羅蜜若は一切法と合し若は合せずと。是菩薩摩訶薩は則ち般若波羅蜜を捨て、般若波羅蜜を遠離す。』佛須菩提に告げたまはく、『復因緣有りて菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を捨て、般若波羅蜜を遠離す。若し菩薩摩訶薩是念を作す、是般若波羅蜜は所有無く空虛にして堅固ならずと。是菩薩摩訶薩は則ち般若波羅蜜を捨て般若波羅蜜を遠離す。須菩提、是因緣を以ての故に般若波羅蜜を捨離す。』須菩提佛に白して言さく、『世尊般若波羅蜜を信じて何法をか信ぜずと爲すや。』佛須菩提に告げたまはく、『般若波羅蜜を信ずれば則ち色を信ぜず、受想行識を信ぜず、眼乃至意を信ぜず、色乃至法を信ぜず、眼識界乃至意識界を信ぜず、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を信ぜず、內空乃至無法有法空を信ぜず、四處念乃至八聖道分を信ぜず、佛の十力乃至十八不共法を信ぜず、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を信ぜず、菩薩道を信ぜず、阿耨多羅三藐三菩提乃至一切種智を信ぜず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が般若波羅蜜を信ずる時、色乃至一切種智を信ぜざるや。』佛須菩提に告げたまはく、『色不可得の故に般若波羅蜜を信じて色を信ぜず、乃至一切種智不可得の故に般若波羅蜜を信じて一切種智を信ぜず、是を以ての故に、須菩提、般若波羅蜜を信ずる時、色を信ぜず、一切種智

を信せざるなり。』

〔三〕須菩提佛に白して言さく『世尊、是般若波羅蜜を名けて摩訶波羅蜜と爲す。』『須菩提、何の因縁の故に、是般若波羅蜜を名けて摩訶波羅蜜と爲すや。』須菩提言さく、『世尊、是般若波羅蜜は色大を作さず色小を作さず、受想行識大を作さず、小を作さず、眼乃至意、色乃至法、眼識界乃至意識界大を作さず小を作さず、檀那波羅蜜乃至禪那波羅蜜大を作さず小を作さず、内空乃至無法有法空大を作さず小を作さず、四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提大を作さず小を作さず、諸佛法大を作さず小を作さず、諸佛大を作さず小を作さず。是般若波羅蜜は色合を作さず色散を作さず、受想行識合を作さず散を作さず、乃至諸佛合を作さず散を作さず。色無量を作さず色非無量を作さず、乃至諸佛無量を作さず非無量を作さず。色廣を作さず色狹を作さず、乃至諸佛廣を作さず狹を作さず。色有力を作さず色無力を作さず、乃至諸佛有力を作さず無力を作さず。世尊、是因縁を以ての故に、是般若波羅蜜を摩訶波羅蜜と名く。世尊、若し新發意の菩薩摩訶薩若し般若波羅蜜を遠離せず、禪那波羅蜜を遠離せず、毘梨耶波羅蜜を遠離せず、羼提波羅蜜を遠離せず、尸羅波羅蜜を遠離せず、檀那波羅蜜を遠離せずして、是の如く念ず、是般若波羅蜜は色大を作さず、色小を作さず、乃至諸佛大を作さず小を作さず、色合を作さず散を作さず、色無量を作さず色非無量を作さず、色有力を作さず色無力を作さず、乃至諸佛有力を作さず無力を作さずと。世尊、菩薩摩訶薩若し是の如く知れば是を般若波羅蜜を行ぜずと爲す。何を以ての故に、

【三】般若の大度たる所以を明す。

【色大をなさず等】凡夫人の心諸法中に於て意に隨つて大小をなす、般若は色性に隨つて如實に觀じて大小をなさず。

【色合をなさず等】色に於て集散等をなさざること。

【般若を遠離せず等】但般若を行ずれば心散亂して調順ならず、多く疑悔邪見を生じて般若の相を失ふ。然し五度と和合して行ずれば調柔にして諸種を辨ず。

【是の如く念ず】六度を遠離せずといふも色不作等の想念を起す、是二の邊に墮するものにして不大等の空相にし著す。

【所得の相】六度に依止して色の小大をなさざると、作すと、六度に依止せずして色の大小をなさざると、作すと四者皆空有の所得相にして般若に應ぜず。

是般若波羅蜜は相に非ざればなり。謂ゆる色の大小を作し乃至諸佛の大小を作す、色の有力無力乃至諸佛の有力無力をなす。世尊、是菩薩摩訶薩は有所得を以ての故に大過失あり、謂ゆる般若波羅蜜を行ずる時に色大を作し色小を作し、乃至諸佛有力を作し無力を作す。何を以ての故に。所得の相有る者は阿耨多羅三藐三菩提無し。所以は何ん。衆生生ぜざるが故に般若波羅蜜生ぜず、色生ぜざるが故に般若波羅蜜生ぜず、乃至佛生ぜざるが故に般若波羅蜜生ぜず。衆生性無きが故に般若波羅蜜性無し、色性無きが故に般若波羅蜜性無し、乃至佛性無きが故に般若波羅蜜性無し、衆生は法に非ざるが故に般若波羅蜜は法に非ず、色は法に非ざるが故に般若波羅蜜は法に非ず、乃至佛は法に非ざるが故に般若波羅蜜は法に非ず。衆生空なるが故に般若波羅蜜空なり、色空なるが故に般若波羅蜜空なり、乃至佛空なるが故に般若波羅蜜空なり。衆生離なるが故に般若波羅蜜離なり、色離なるが故に般若波羅蜜離なり、乃至佛離なるが故に般若波羅蜜離なり。衆生有ること無きが故に般若波羅蜜有ること無し、色有ること無きが故に般若波羅蜜有ること無し、乃至佛有ること無きが故に般若波羅蜜有ること無し。衆生不可思議なるが故に般若波羅蜜不可思議なり、色不可思議なるが故に般若波羅蜜不可思議なり、乃至佛不可思議なるが故に般若波羅蜜不可思議なり、衆生滅せざるが故に般若波羅蜜滅せず。色滅せざるが故に般若波羅蜜滅せず、乃至佛滅せざるが故に般若波羅蜜滅せず。衆生知るべからざるが故に般若波羅蜜知るべからず、色知るべからざるが故に般若波羅蜜知るべからず、乃至佛知るべからざるが故に般

若波羅蜜知るべからず。衆生力成就せざるが故に般若波羅蜜力成就せず、色力成就せざるが故に般若波羅蜜力成就せず、乃至佛力成就せざるが故に般若波羅蜜力成就せざるなり。世尊、是因緣を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を名けて摩訶波羅蜜と爲す。』」

【信毀品】般若の信謗を明し、謗法墮獄を說く。

【一】無量劫來十方佛を供養せるもの般若を信ずる佛の如くなるを明す。

【能く隨順して等】諸法に於て相を取らず空に著せず、空行を行じて五度に和合し般若を行ず、大慈大悲を用て一切衆生のために般若を行ずる故に。

信毀品第四十一

(一)爾時、慧命舍利弗佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩有りて是般若波羅蜜を信解する者、何處より終り來りて是間に生じ、阿耨多羅三藐三菩提心を發し來ること幾時と爲すや、幾佛を供養すと爲すや、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ幾佛を供養し來り、幾時か能く隨順して深般若波羅蜜の義を解することを爲すや。』佛舍利弗に告げたまはく、『是菩薩摩訶薩は十方の諸佛を供養し、來りて是間に生ず。是菩薩阿耨多羅三藐三菩提心を發し、來ること無量無邊阿僧祇百千萬億劫なり。是菩薩摩訶薩は初發心より常に六波羅蜜を行じ、無量無邊不可思議阿僧祇諸佛を供養し、來りて是間に生ず。舍利弗、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を若は見若は聞きて是念を作さく、「我れ佛を見佛に從ひて法を聞く」と。舍利弗、是菩薩摩訶薩は能く隨順して深般若波羅蜜の義を解す、無相無二無所得を以ての故に。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜は聞くべく

【諸法鈍の故に】三界の凡夫是眼乃至聲と分別し六情は利、六塵は鈍、色等は鈍、慧等は利、而も法實に見聞なく利人に對していふのみ。

【初發意に等】菩薩新學なるも般若を深く信受するにあり。

【習行】一心に信受して常に行ずること。

【方便力の故】六度を行ずるも福德因緣を起して心諸法に著せず。

【破壞するところなし】菩薩信力智慧力大の故に大乘深法を聞くも聲聞法を聞くも信じ、又外道をも聞き、在家出家の法も亦破壞せず。

見るべきや。』佛須菩提に告げたまはく、『是般若波羅蜜は聞者有ること無く見者有ること無し、般若波羅蜜の聞く無く見る無きも諸法鈍の故に。禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜も聞く無く見る無し、諸法鈍の故に。內空も聞く無く見る無し、諸法鈍の故に。乃至無法有法空も聞く無く見る無し、諸法鈍の故に。四念處も聞く無く見る無し、諸法鈍の故に。乃至八聖道分も聞く無く見る無し、諸法鈍の故に。佛の十力乃至十八不共法も聞く無く見る無し、諸法鈍の故に。須菩提、佛及び佛道も聞く無く見る無し、諸法鈍の故に。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、是菩薩は幾時か佛道を行じ、能く是の如きの深般若波羅蜜を習行するや。』佛須菩提に告げたまはく、『是中應に分別して說くべし。須菩提、菩薩摩訶薩有り、初發意に深般若波羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を習行す、方便力を以ての故に、法に於て破壞する所無く、諸法の利益無き者を見ず、亦終に六波羅蜜を遠離せず、亦諸佛を遠離せず、一佛國より一佛國に至り、若し善根力を以て諸佛を供養せんと欲せば意に隨ひて卽ち得、終に母人の腹中に生ぜず、終に諸の神通を離れず、終に諸の煩惱及び聲聞辟支佛心を生ぜず、一佛國より一佛國に至りて衆生を成就し佛國土を淨む。須菩提、是の如き等の諸の菩薩摩訶薩は能く深般若波羅蜜を習行す。

(三)須菩提、菩薩摩訶薩有り、多く諸佛を見、若は無量百千萬億劫、諸佛に從ひて行ずる所の布施持戒忍辱精進一心智慧、皆有所得を以ての故に、是菩薩は深般若波羅蜜を說くを聞

【諸法の利益等】一福德具足の故に一法として無用なるものなし。

【二】他の菩薩は久しく佛行を行ずるも有所得にして般若に反し惡報を受く。

【大地獄】阿鼻即ち無間地獄をいふ。

【火劫】壞劫に大火世界を燒盡するをいふ。而も罪滅せざるものは他處の地獄に入る。

【生盲人】般若を見るを欲せざる故に生れながらの盲人。

【旃陀羅】チャンダーラ(Caṇḍāla)屠種と譯す。說法人を輕賤せし故乃至擔死人等の下賤種に生ず。

く時、便ち衆中より起ちて去り、深般若波羅蜜及び諸佛を恭敬せず。是菩薩は今此衆中に在りて坐し、此甚深の般若波羅蜜を聞くも、樂はざるが故に、便ち捨て去る。何を以ての故に、是善男子善女人等は先世に深般若波羅蜜を聞きし時棄捨して去り、今世に深般若波羅蜜を聞くも亦棄捨して去る、身心和せず是人愚癡因緣業を種う、是愚癡因緣罪を種うるが故に深般若波羅蜜を說くを聞きて呰毀す、深般若波羅蜜を呰毀するが故に即ち是れ過去未來現在諸佛の一切智一切種智を呰毀す、是人三世諸佛の一切智を呰毀するが故に破法業を起す、破法業の因緣集るが故に無量百千萬億歲大地獄の中に墮す、是破法人の輩は一大地獄より一大地獄に至り、若は火劫起る時は他方の大地獄の中に至り生じて彼の間に在り、一大地獄より一大地獄に至り、彼の間、若し火劫起る時は復他方の大地獄の中に至り生じて彼の間に在り、一大地獄より一大地獄に至る。是の如く十方に徧じ、彼の間若し火劫起るが故に、彼れより死するも、破法の業因緣未だ盡きざるが故に、還て是間の大地獄の中に來りて此間に生じ、亦一大地獄より一大地獄に至りて無量の苦を受く。此間火劫起る時は復十方の他の國土に生じ、畜生中に生じて破法罪業の苦を受く、地獄の中に說が如し。重罪轉た薄らぎて、或は人身を得るも盲人の家に生じ、旃陀羅の家に生じ、除厠擔死人種種下賤の家に生ず、若は無眼若は一眼、若は瞎眼無舌無耳無手なり、所生の處は佛無く法無く、佛弟子無きの處なり。何を以ての故に、破法業を種ゑて積集し厚重し具足するが故に是果報を受く。』爾時、舍利弗佛に白して言さく、『世尊、五逆罪と破法罪と相似なりや。』

佛舍利弗に告げたまはく「是甚深の般若波羅蜜を說くを聽く時、毀呰して般若波羅蜜を信ぜずして是言を作さく「是法を學すべからず、是は法に非ず善に非ず佛敎に非ず、諸佛は是語を說かず」と、是人は自ら般若波羅蜜を毀呰し、亦他人を敎へて般若波羅蜜を毀呰せしむ、自ら其身を壞し、亦他人の身を壞し、自ら毒を飮みて身を殺し、亦他人に毒を飮ましむ、自ら身を失ひ、亦他人の身を失ふ、自ら深般若波羅蜜を知らず、信ぜず、毀呰し、亦他人に敎へて、信ぜず知らざらしむ。舍利弗、是の如きの人は我れ其名字をも聽聞せず、何に況んや眼見共住をや。何を以ての故に、當に知るべし是人を名けて法を汚す人と爲す、衰濁に墮せる黑性と爲す。是の如きの人、若し其言を聽く有りて其語を信用せば、亦是の如きの苦を受く。舍利弗、若し人般若波羅蜜を破せば、當に知るべし是を名けて壞法人と爲す。」舍利弗佛に白して言さく「世尊、世尊は壞法の人の受くる所の重罪を說き、是人の受くる所の身體の大小を說きたまはざるや。」佛舍利弗に告げたまはく「是人の受身の大小を說くべからず。何を以ての故に、是壞法人、若し自の受くる所の身の大小を聞かば便ち當に熱血を吐き、若は死し若は死苦に近づくべし。若し是破法人是の如きの身是の如きの重罪あるを聞かば、是人便ち大に愁毒し、箭の心に入るが如く、漸漸乾枯して是念を作さく「破法罪の故に是の如きの大醜身を得、是の如きの無量の苦を受く」と。是を以ての故に、佛は舍利弗の是人の受くる所の身體の大小を問ふを聽さず。」舍利弗佛に白して言さく「願はくば佛之を說き、未來世の

【瞎眼】病によりて見る能はざるもの。

【無舌等】說法者を毀呰せし故無舌、聞くを欲せざる故無耳、摩手非撥の故に無手。此人佛を愛すと雖も愚癡無癡を以ての故に佛母を毀滅し、法藏を破壞し、法藏を破壞する故に無佛法處に生ずるなり。

【五逆罪】殺父、殺母、出佛身血、殺阿羅漢、破和合僧。

【相似せず】般若を毀呰するの罪五逆罪より遙に大なり。

【聽聞せず】般若を破する人其の名字を聽くを欲せざるなり。

【衰濁】好衣美食するも常に色力なく勸身作務するも財產日に耗するをいふ。

【黑性】惡性なり。善法の白に對す。
【乾枯】死に近く身の枯槁憔悴せるなり。
【白淨性】善根白性福德の人。
【依止】護持の意。
【三】三業を攝し謗法すべからざるを說く。

爲に明識を作し、破法業積集を知らしむるの故に、是の如きの大醜身を得、是の如きの苦を受くることを知らしめたまへ。」佛舍利弗に告げたまはく、「後世の人、若し是破法業積集し厚重し具足し、大地獄中に久久無量の苦を受くることを聞かば、是久久無量の苦を聞く時、未來世の爲に明識と作すに足る。」舍利弗佛に白して言さく、「世尊、若し白淨性の善男子善女人、是法を聞かば依止と作すに足る、寧ろ身命を失ふとも法を破らず。自ら念ずらく、「我れ若し法を破らば當に是の如きの苦を受くべし」と。」

(三)爾時須菩提佛に白して言さく、「世尊、善男子善女人は應に好で身口意業を攝し、是の如きの諸苦を受け、或は佛を見ず或は法を聞かず、或は僧に親近せず、或は無佛國土の中に生じ、或は人中に生じて貧窮の家に墮し、或は人共言を信受せざること無かるべし。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、積集口業を以ての故に是の如きの破法重罪有りや。」佛須菩提に告げたまはく、「積集口業を以ての故に是破法重罪あり。須菩提、是愚癡人は佛法中に在りて出家し受戒するも、深般若波羅蜜を破し毀呰して受けず。須菩提、若し般若波羅蜜を破し般若波羅蜜を毀呰せば、則ち十方諸佛の一切智を破すと爲す、一切智を破するが故に則ち佛寶を破すと爲す、佛寶を破するが故に法寶を破す、法寶を破するが故に僧寶を破す、三寶を破するが故に則ち世間の正見を破す、世間の正見を破するが故に則ち四念處を破し乃至一切種智法を破す、一切種智法を破するが故に則ち無量無邊阿僧祇の罪を得、無量無邊阿僧祇の罪を得已れば、則ち無量無邊阿僧祇の憂苦を受く。」須菩提佛に白して言さく、

【四因緣】後にいふ壞、不信、惡友、憍慢の四。

【四】般若の信解し難きを說く。

【不縛不緊】三毒は縛、三解脱門は解、是の三毒等は不實にして因緣和合より生ず。無自性の故に無縛なり。無縛の故に無解なり。即ち三毒を破する故に三解脱門亦空なり。

『世尊、是愚癡人は是深般若波羅蜜を毀呰し破壞するに幾の因緣有りや。』佛須菩提に告げたまはく、『四の因緣有りて、是愚癡人は是深般若波羅蜜を毀呰し破す。』須菩提言さく、『世尊、何等をか四とする。』佛言はく『是愚癡人は魔の使ふ所と爲るが故に深般若波羅蜜を毀呰し破壞せんと欲す、是を初因緣と名く。是愚癡人は深法を信ぜず、信ぜず解せざれば心清淨なることを得ず、是第二の因緣の故に、是愚癡人は深般若波羅蜜を毀呰し破壞せんと欲す。是愚癡人は惡知識と相隨し、心沒し懈怠し、堅く五受陰に著す、是第三の因緣の故に、是愚癡人は深般若波羅蜜を毀呰し破壞せんと欲す。是愚癡人は多く瞋恚を行じ、自ら高くして人を輕ず、是第四の因緣の故に、是愚癡人は深般若波羅蜜を毀呰し破壞せんと欲す。須菩提、是四の因緣を以ての故に、愚癡人は深般若波羅蜜を破壞せんと欲す。』

（四）須菩提佛に白して言さく『世尊、是深般若波羅蜜、勤めて精進せず、不善根を種ゑ、惡友相得る、此人は信じ難く解し難し。』佛言はく『是の如く是の如し、須菩提、是深般若波羅蜜、勤めて精進せず、不善根を種ゑ、惡友相得る、此人は信じ難く解し難し。』『須菩提佛に白して言さく『世尊、是般若波羅蜜は云何が甚深にして信じ難く解し難きや。』『須菩提、色は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ色なればなり。受想行識は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ受想行識なればなり。檀那波羅蜜は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ檀那波羅蜜なればなり。尸羅波羅蜜は不縛不解なり。何を

【無所有性】定實の性として有すべきものなし、故に解も縛も實ならず。

【巧便慧なし】精進足らず諸煩惱心を亂す故、諸法實相を求むるも諸法の好醜を分別するを知らず。

以ての故に。無所有性是れ尸羅波羅蜜なればなり。羼提波羅蜜は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ羼提波羅蜜なればなり。毘梨耶波羅蜜は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ毘梨耶波羅蜜なればなり。禪那波羅蜜は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ禪那波羅蜜なればなり。般若波羅蜜は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ般若波羅蜜なればなり。須菩提、內空は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ內空なればなり。乃至無法有法空は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ無法有法空なればなり。四念處は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ四念處なればなり。乃至一切智一切種智は不縛不解なり。何を以ての故に。無所有性是れ一切智一切種智なればなり。須菩提、色の本際は不縛不解なり。何を以ての故に。色の本際無所有性是れ色なればなり。受想行識乃至一切種智の本際は不縛不解なり。何を以ての故に。本際無所有性是れ一切種智なればなり。須菩提、色の後際は不縛不解なり。何を以ての故に。後際は無所有性是れ色なればなり。受想行識乃至一切種智の後際は不縛不解なり。何を以ての故に。後際無所有性是れ一切種智なればなり。須菩提、現在の色は不縛不解なり。何を以ての故に。現在無所有性是れ色なればなり。受想行識乃至現在一切種智は不縛不解なり。何を以ての故に。現在無所有性是れ一切種智なればなり。須菩提佛に白して言さく、「世尊、是般若波羅蜜、勤めて精進せず、善根を種ゑず、惡友相得、懈怠して進むこと少く、喜んで忘れ巧便慧無き、此の如き人は實に信じ難く解し難し。」佛言はく、「是の如く

是の如し、須菩提、是般若波羅蜜、勤めて精進せず、善根を種ゑず、惡友相得て魔に繋屬せられ、懈怠し進むこと少く、喜んで忘れ、巧便慧無き、此の如き人は實に信じ難く解し難し。何を以ての故に、色淨なれば果も亦淨、受想行識淨なれば果も亦淨、乃至阿耨多羅三藐三菩提淨なれば、果も亦淨なればなり。復次に須菩提、色淨なるが故に、即ち般若波羅蜜淨なり、般若波羅蜜淨なれば即ち色淨なり、受想行識淨なれば即ち般若波羅蜜淨なり、般若波羅蜜淨なれば即ち受想行識淨なり。乃至一切種智淨なれば即ち般若波羅蜜淨なり、般若波羅蜜淨なれば即ち一切種智淨なり。色淨なると般若波羅蜜淨なるとは、無二無別無斷無壞なり、乃至一切種智淨なると般若波羅蜜淨なるとは、無二無別無斷無壞なり。復次に須菩提、不二淨なるが故に色淨なり、不二淨なるが故に乃至一切種智淨なり。何を以ての故に。是不二淨、色淨乃至一切種智淨は無二無別なるが故に。我淨衆生淨乃至知者見者淨の故に、色淨受想行識淨乃至一切種智淨なり。色淨乃至一切種智淨の故に、我淨衆生乃至知者見者淨なり。何を以ての故に。是我衆生乃至知者見者淨と色淨乃至一切種智淨とは、不二不別無斷無壞なればなり。

(五)復次に須菩提、婬淨なるが故に、色淨乃至一切種智淨なり。何を以ての故に。婬淨と色淨乃至一切種智淨とは不二不別なればなり。瞋癡淨なるが故に、色淨乃至一切種智淨なり。何を以ての故に。瞋癡淨と色淨乃至一切種智淨とは不二不別なればなり。復次に須菩提、無明淨なるが故に諸行淨なり、諸行淨なるが故に識淨なり、識淨なるが故に名色淨

【色淨】不淨觀は初門にして實觀に非ず、故に十六聖行に入らず、般若は淨不淨等を越えて畢竟淨の故に果も亦淨といふ。

【無二等】實相に二なく別なければ無二無別といひ、不散不離の故に無斷無壞といふ。

【五】三毒雜染法等に就て淨を明す。

【婬淨】三毒垢穢なるも實性は清淨の故に名く。

【無明淨等】十二因緣を染法とするに對し今淨を云ふ。

【有爲淨等】諸法に於て常樂我淨を求めて實に不可得と知れば有爲法を知るとなす、即ち是れ無爲法なれば有爲淨の故に無爲淨といふなり。

なり、名色淨なるが故に六入淨なり、六入淨なるが故に觸淨なり、觸淨なるが故に受淨なり、受淨なるが故に愛淨なり、愛淨なるが故に取淨なり、取淨なるが故に有淨なり、有淨なるが故に生淨なり、生淨なるが故に老死淨なり、老死淨なるが故に般若波羅蜜淨なり、般若波羅蜜淨なるが故に乃至檀那波羅蜜淨なり、檀那波羅蜜淨なるが故に內空淨なり、內空淨なるが故に乃至無法有法空淨なり。無法有法空淨なるが故に四念處淨なり、四念處淨なるが故に乃至一切智淨なり、一切智淨なるが故に一切種智淨なり。何を以ての故に。是一切智淨と一切種智淨とは不二不別無斷無壞なればなり。復次に須菩提、般若波羅蜜淨なるが故に色淨なり、乃至般若波羅蜜淨なるが故に一切智淨なり、是般若波羅蜜淨と一切智淨とは不二不別なるが故に。須菩提、禪那波羅蜜淨なるが故に乃至一切智淨なり、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜淨なるが故に乃至一切智淨なり、內空淨なるが故に乃至一切智淨なり、四念處淨なるが故に乃至一切智淨なり。復次に須菩提、一切智淨なるが故に乃至般若波羅蜜淨なり。是の如く一一先に說けるが如し。復次に須菩提、有爲淨なるが故に無爲淨なり、何を以ての故に。有爲淨と無爲淨とは、不二不別無斷無壞なるが故に。復次に須菩提、過去淨なるが故に未來現在淨なり、未來淨なるが故に過去現在淨なり、現在淨なるが故に過去未來淨なり。何を以ての故に。現在淨と過去未來淨とは、不二不別無斷無壞なるが故に。」

【歎淨品】諸淨畢竟淨にして無礙なるべきことを歎說す。

【一】舍利弗と問答して諸法の甚深淨なるを明す。

【是淨甚深】淨に智慧淨と所緣法淨との二種あり。此の二淨は相待にして離智淨と無緣淨、離緣淨と無智淨となり。何者、一切心心數法は緣より生じ、若無緣なれば智生ぜず、有智の故に緣淨と知る。實相淨は智と緣とを離れ本來淸淨なり。是れ有佛無佛常住の不壞相にして誹謗すれば無量罪を得、信受すれば無上の果報を得。故に讚じて甚深といふなり。

【畢竟淨等】一切法中所著なく、乃至淨體亦不著なり。故に畢竟淨といふ。

【色淨】色等の法中に於て觀行斷ず

摩訶般若波羅蜜經　卷第十二

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

歎淨品第四十二

〔一〕爾時、舍利弗佛に白して言さく、『世尊、是淨甚深なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』舍利弗言さく、『何の法か淨なるが故に是淨甚深なりや。』佛言はく、『色淨なるが故に是淨甚深なり、受想行識淨なるが故に、四念處淨なるが故に、乃至八聖道分淨なるが故に、佛の十力淨なるが故に、乃至十八不共法淨なるが故に、菩薩淨佛淨なるが故に、一切智一切種智淨なるが故に是淨甚深なり。』『世尊、是淨明なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』舍利弗言さく、『何の法か淨なるが故に是淨明なりや。』佛言はく、『般若波羅蜜淨なるが故に是淨明なり、乃至檀那波羅蜜淨なるが故に是淨明なり、四念處乃至一切智淨なるが故に是淨明なり。』『世尊、是淨相續せざるや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』舍利弗言さく、『何の法か相續せざるが故に、是淨相續せざるや。』佛言はく、『色去らず相續せざるが故に是淨相續せず、乃至一切種智去らず相續せざるが故に是淨相續せず。』『世尊の淨無垢なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』舍利弗言さく、『何の法

る故に。

【浄明】一切法中ハ畝・無明を破り能く畢竟空と智慧光明を與ふ。六度の妙法を行ずる故に是の浄明を得、有餘涅槃を與ふる故に是浄明といふ。

【不相續】空等三三昧を以て諸善法を捨て、壽盡きて無餘涅槃に入らしむるをいふ。

【去らず】五蘊等の去るべきものなきをいふ。

【無垢】百八の諸煩惱浄を遮覆汚染する能はざるを以ての故に無垢といふ。

【無得無著】諸法實相不二道を行じて苦法忍より乃至十五心までを得といひ、第十六心に沙門果を得るを著といふ。次に六度を行じて柔順忍を生ずるを得、無生法忍を生じて菩薩位に住するを著と

か無垢なるが故に、是浄無垢なりや。』佛言はく、『色性常に浄なるが故に是浄無垢なり、乃至一切種智性常に浄なるが故に是浄無垢なり。』『世尊、是浄無得無著なりや。』佛言はく、『畢竟浄なるが故に。』舍利弗言さく、『何の法か無得無著なるが故に、是浄無得無著なりや。』佛言はく、『色無得無著なるが故に是浄無得無著なり、乃至一切種智無得無著なるが故に是浄無得無著なり。』『世尊、是浄無生なりや。』佛言はく、『畢竟浄なるが故に。』舍利弗言さく、『何の法か無生なるが故に是浄無生なるや。』佛言はく、『色無生なるが故に是浄無生なり、乃至一切種智無生なるが故に、是浄無生なり。』『世尊、是浄欲界中に生ぜざるや。』佛言はく、『畢竟浄なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が是浄欲界中に生ぜざるや。』佛言はく、『欲界性不可得なるが故に、是浄欲界中に生ぜず。』『世尊、是浄色界中に生ぜざるや。』佛言はく、『畢竟浄なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が是浄色界中に生ぜざるや。』佛言はく、『色界性不可得なるが故に、是浄色界中に生ぜず。』『世尊、是浄無色界中に生ぜざるや。』佛言はく、『畢竟浄なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が是浄無色界中に生ぜざるや。』佛言はく、『無色界性不可得なるが故に、是浄無色界中に生ぜず。』『世尊、是浄無知なりや。』佛言はく、『畢竟浄なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が是浄無知なりや。』佛言はく、『諸法鈍なるが故に是浄無知なり。』『世尊、無知にして是浄浄なりや。』佛言はく、『畢竟浄なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が色無知にして是浄浄なりや。』佛言はく、『色自性空なるが故に、色無知にして是浄浄なり。』『世尊、受想行識無知にして是

いふ。是の清淨法中無所得心を用て此の二事なき故無得無著と名くるなり。
【無生】一切空と知り、空の故に相を取らず、故に三種業を作さざれば三界に生ぜざるをいふ。
【欲界等】三界自性不可得の故に不生なるを明す。
【無知】無差別空に於て知あることなし。
【鈍なるが故に】法の分別を離るるが故に。
【無損無益】般若に貪著なく畢竟清淨の故に損益なし。
【所受なし】諸觀戲論を滅し語言道を斷ずる故に、般若清淨にして所受なし。
【二】須菩提淨相を說くを佛證し給ふ。
【我淨の故に五蘊淨】我畢竟空無所有不可得なる如く

淨淨なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が受想行識無知にして是淨淨なりや。』佛言はく、『受想行識自性空なるが故に、無知にして是淨淨なり。』『世尊、一切法淨なるが故に是淨淨なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が一切法淨なるが故に是淨淨なりや。』佛言はく、『一切法不可得なるが故に、一切法淨にして是淨淨なり。』『世尊、是般若波羅蜜薩婆若に於て無益無損なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が般若波羅蜜、薩婆若に於て無益無損なりや。』佛言はく、『法常住相なるが故に、般若波羅蜜薩婆若に於て無益無損なり。』『世尊、是般若波羅蜜の淨、諸法に於て所受無きや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』舍利弗言さく、『云何が般若波羅蜜の淨、諸法に於て所受無きや。』佛言はく、『法性不動なるが故に、是般若波羅蜜の淨諸法に於て所受無し。』

(二)爾時、慧命須菩提佛に白して言さく、『世尊、我淨なるが故に色淨なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』須菩提言さく、『何の因緣を以て、我淨なるが故に色淨、畢竟淨なるや。』佛言はく、『我所有無きが故に色所有無く畢竟淨なり。』『世尊、我淨なるが故に受想行識淨なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』須菩提言さく、『何の因緣の故に、我淨受想行識淨、畢竟淨なりや。』佛言はく、『我所有無きが故に受想行識所有なく畢竟淨なり。』『世尊、我淨なるが故に檀那波羅蜜淨、我淨なるが故に尸羅波羅蜜淨、我淨なるが故に羼提波羅蜜淨、我淨なるが故に毘梨耶波羅蜜淨、我淨なるが故に禪那波羅蜜淨なりや。』

五蘊亦然り。畢竟空ならば即ち我清淨なり、五蘊清淨にして我空解し易く、五蘊空は解し難し。故に易解を以て難解に喩ふ。六度乃至十八不共法、須陀洹果乃至佛道亦是の如し。我淨の故に法亦淨なり。

【自相空なるが故に】前に無所有といふも五蘊著處門緣の故に無所有といふ、須陀洹果等は無爲法なれば今自相空といふなり。所謂無生無滅無住無異の故に無所有といはざるなり。又邪行なき自相空といふ。

【無相】無相三昧無念とはこの三昧に於ても亦念ぜざるなり。菩薩の深著を除かんが爲に

【二淨】二法清淨と不二法清淨、前者は名字清淨、後者は眞實清淨なり。

世尊、我淨なるが故に四念處淨なりや。世尊、我淨なるが故に乃至八聖道分淨なりや。世尊、我淨なるが故に佛の十力淨なりや。世尊、我淨なるが故に乃至十八不共法淨なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』須菩提言さく、『何の因緣の故に、我淨にして檀那波羅蜜淨、我淨にして乃至十八不共法淨なりや。』佛言はく、『我所有無きが故に、檀那波羅蜜所有無きが故に淨、乃至十八不共法所有無きが故に淨なり。』『世尊、我淨なるが故に須陀洹果淨、我淨なるが故に斯陀含果淨、我淨なるが故に阿那含果淨、我淨なるが故に阿羅漢果淨、我淨なるが故に辟支佛道淨、我淨なるが故に佛道淨なりや。』佛言はく、『畢竟淨なればなり。』須菩提言さく、『何の因緣の故に、我淨にして須陀洹果淨、斯陀含果淨、阿那含果淨、阿羅漢果淨、辟支佛道淨、佛道淨なりや。』佛言はく、『自相空なるが故に。』『世尊、我淨なるが故に一切智淨なりや。』佛言はく、『畢竟淨なるが故に。』須菩提言さく、『何の因緣の故に、我淨なるが故に一切智淨なりや。』佛言はく、『無相無念なるが故に。』『世尊、二淨を以ての故に無得無著なりや。』佛言はく、『畢竟淨なればなり。』須菩提言さく、『何の因緣の故に、二淨を以ての故に無得無著、是淨畢竟淨なるや。』佛言はく、『無垢無淨なるが故に。』『世尊、我無邊なるが故に色淨受想行識淨なりや。』佛言はく、『畢竟淨なればなり。』須菩提言さく、『何の因緣の故に、我無邊なるが故に色淨受想行識淨なりや。』佛言はく、『畢竟空無始空なるが故に。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩能く是の如く知らば、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名くるや。』佛言はく、『畢竟淨な

【二法清淨】は分別ある故有得有著にして完全ならず。【五蘊清淨】我空なるが如く空の故に無邊、五蘊亦是の如し。【畢竟空】畢竟清淨のこと。此の中我無邊を說く、我は即ち衆生、衆生無始なるを以て無始空と說く。【是の如く知る】故に畢竟空と知る無知なり。無知即般若なるやと問ふ【道種】法眼を以て度生のために差別すること。衆生に畢竟空を得て著心を遠離せしめんために畢竟空を說く。畢竟空即ち道種智なり。【世尊若し等】生の方便により度外法畢竟空を觀ずるにあるやを述ぶ【方便力を以ての故に是念を作さず】外法空を觀ずるのみならず、內

るが故に。』須菩提言さく、『何の因緣の故に、菩薩摩訶薩能く是の如く知らば、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名くるや。』佛言はく、『道種を知るが故に。』『世尊、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるには、方便力を以ての故に是念を作すや、色、色を知らず、受想行識、識を知らず、過去法、過去法を知らず、未來法、未來法を知らず、現在法、現在法を知らずと。』佛言はく、『菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、方便力を以ての故に是念を作さず、我れ彼の人に施與す、我れ持戒すること是の如く持戒す、我れ忍を修すること是の如く忍を修す、我れ精進すること是の如く精進す、我れ入禪すること是の如く入禪す、我れ智慧を修すること是の如く智慧を修す、我れ福德を得ること是の如く福德を得、我れ當に菩薩法位中に入るべし、我れ當に佛國土を淨め衆生を成就すべし、我れ當に一切種智を得べしと。須菩提、是菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに、方便力を以ての故に、諸の憶想分別無し、內空外空內外空空空大空第一義空有爲空無爲空畢竟空無始空散空性空諸法空自相空なるが故に。須菩提、是を菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずるに方便力を以ての故に所礙無しと名く。』

(三)爾時、釋提桓因須菩提に問はく、『云何が是れ菩薩道を求むる善男子の礙法なりや。』須菩提釋提桓因に報へて言はく、『憍尸迦、菩薩道を求むる善男子善女人有り、心相を取る。謂ゆる檀那波羅蜜の相を取り、尸羅波羅蜜の相、羼提波羅蜜の相、毘梨耶波羅蜜の相、禪那波羅蜜の相、般若波羅蜜の相を取り、內空の相、外空內外空乃至無法有法空の相を取り、

心観も亦然るべきを說く。

【我れ彼人に等】施者受者施相を念ずる布施は所得あるを以て般若方便に非ず、持戒等亦然り。

【三】礙相を明して無礙の眞般若行を說く。

【心相を取る】慳心施心を分別し、慳心を捨て施心を取るをいふ、

【諸佛の相を取り等】隨喜品に述べりたる過去以來の諸佛を念じて種うる諸善を善として執す。

【是の法】取相の礙法をいふ。

【色相廻向すべからず】色相の如き、定法なくば廻向なしと思ふべきも、實は定法ならば更に廻向するも廻向とならざるなり。

【實相】諸憶想分別を滅したるをいふ。

四念處の相乃至八聖道分の相を取り、佛の十力の相乃至十八不共法の相を取り、諸佛の相を取り、諸佛に於て善根を種うる相を取り、是一切の福德の和合に相を取り、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。憍尸迦、是を菩薩道を求むる善男子善女人の礙法と名く。是法を用ての故に、礙無くして般若波羅蜜を行ずる能はず。何を以ての故に。憍尸迦、是色相廻向すべからず、受想行識相廻向すべからず、乃至一切種智相廻向すべからず。復次に憍尸迦、若し菩薩摩訶薩他人に阿耨多羅三藐三菩提を示敎し利喜せんとせば、應に一切諸法の實相を示敎し利喜すべし。若し菩薩道を求むる善男子善女人、檀那波羅蜜を行ずる時、應に是分別を作して言ふべからず、我れ施與す、我れ持戒す、我れ忍辱す、我れ精進す、我れ禪定に入る、我れ智慧を修す、我れ內空外空內外空を行ず、乃至我れ無法有法空を行ず、我れ四念處を修す、乃至我れ阿耨多羅三藐三菩提を行ずと。善男子善女人は應に是の如く他人に阿耨多羅三藐三菩提を示敎し利喜すべし。若し是の如く阿耨多羅三藐三菩提を示敎し利喜せば自ら錯謬無く、亦佛の所說の法の如く示敎し利喜して、是善男子善女人をして一切礙法を遠離せしむ。爾時、佛須菩提を讚じたまはく、善い哉善い哉。汝の諸の菩薩の爲に諸の礙法を說けるが如し。須菩提、汝今更に我が微細の礙相を說くを聞け、須菩提、汝、一心に好く聽け。佛須菩提に告げたまはく、善男子善女人あり、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、相を取りて諸佛を念ず、須菩提、有る可き所の相皆是れ礙相なり。又諸佛に於て初發意より乃至法住まで、其中間に於て有らゆる善根、相を取りて憶念し、相を取りて

【自ら錯謬等】是の如き教化に二種の利を得、一に自ら錯謬なく、二に佛の所得法の如く他人を化して佛法に契ふなり。【有るべき所の相等】有相は限りあつて儀毒なり、障礙なり、諸佛は無相般若より出でて又無相なり、相を取るべからず。【是般若は甚深】須菩提佛の所說深妙にして及ぶ能はざる故讚じて甚深といふなり。【常に離る】常に一切相を離る。【得る者なし】般若は無起無作の故に十方諸佛よく得る者なし。【一性】一性とは畢竟空、無二とは畢竟不畢竟無く一法性なり。即ち是れ無性畢竟空なり。【言ふ所の如く等】佛答の意は般若は須菩提のみならず

憶念し已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。須菩提、有るべき所の相皆是れ礙相なり。又諸佛及び弟子に於て有らゆる善根及び餘の衆生の善根、相を取りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。須菩提、有るべき所の相皆是れ礙相なり。何を以ての故に。應に相を取りて諸佛を憶念すべからず、亦應に相を取りて諸佛の善根を憶念すべからざるが故に。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜は甚深なり。』佛言はく、『一切法常に離るるが故に。』須菩提言さく、『世尊、我れ常に般若波羅蜜を禮すべし。』佛須菩提に告げたまはく、『是般若波羅蜜無起無作なるが故に能く得る者有ること無し。』須菩提言さく、『世尊、一切諸法も亦知るべからず、得べからざるや。』佛言はく、『一切法一性にして二性に非ず。須菩提、是一法性、是れも亦無性なり。是無性即ち是れ性なり。是性不起不滅なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、若し諸法一性、謂ゆる無性無起無作なることを知れば即ち一切の礙相を遠離す。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜は難知難解なり。』佛言はく、『言ふ所の如く、是般若波羅蜜は見る者無く聞く者無し、知る者無く識る者無く、得る者無し。』『世尊、是般若波羅蜜不可思議なり。』佛言はく、『言ふ所の如く、是般若波羅蜜は心より生ぜず、色受想行識より生ぜず。乃至十八不共法より生ぜず。』

無作品第四十三

（一）須菩提佛に白して言さく、『是般若波羅蜜無所作なりや。』佛言はく、『作者不可得なるが故に、色不可得、乃至一切法不可得なるが故に。』『世尊、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、應に云何が行ずべきや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、色を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。受想行識を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。乃至一切種智を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。色常無常を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。乃至一切種智、常無常を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。色若は苦若は樂を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。乃至一切種智若は苦若は樂を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。色是れ我非我なりと行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。乃至一切種智、是れ我非我なりと行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。色、淨不淨を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。乃至一切種智、淨不淨を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。何を以ての故に。是色所有性無し、云何ぞ常無常苦樂我無我淨不淨有らん。受想行識も亦所有性無し、云何ぞ常無常乃至淨不淨有らん。乃至一切種智も亦所有性無し、云何ぞ常無常乃至淨不淨有らん。復次に須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色不具足を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。受想行識不具足を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。乃至一切種智不具足を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。何を以ての故に。色不具足なる者、是を色と名けず、是の如く亦行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるとなす。受想行識不具足なる

一切衆生にも知見者なし、得者なしとなり。

【無作品】無作眞に般若を行ずることを明し、中に諸天上十方に各千佛を見ることを明す。

【一】無作の作行を疑ひて問ふに對し佛これを明す。

【無所作等】若し作ならば斷惡修善もなかるべし。

【作者】一切法不可得にして知者尚無し、況んや作者あらんや。

【行ぜんと欲せば等】作者なく所作なくば般若を云何が行じ云何が得べきやを問ふ。

【色を行ぜず】色を分別して常無常等の差別を見るべからず、この妄見なき故般若を行ずるなり。

【不具足】無常等の觀を以て常等を破するをいふ。

【色不具足等】具

足般若を行ずるなり。即ち不具足を離れたる實觀にして、常無常なるために非ず。

【二】不礙これ道なりとするを斥け不礙相を行ぜざるもの不礙を知るとす。

【色不礙を行ぜざる】礙は非道、不礙は道なりとすれば、心無礙相に偏す。是れを行ぜざる即ち般若を行ずるなり。

者、是を識と名けず、是の如く亦行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるとなす。乃至一切種智不具足なる者、是を一切種智と名けず、是の如く亦行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるとなす。〔一〕

〔二〕須菩提佛に白して言さく、「未曾有なり、世尊、善く菩薩道を求むる善男子善女人の礙不礙の相を說きたまふ。」佛言はく、「是の如く是の如し、須菩提、佛は善く菩薩道を求むる善男子善女人の礙不礙の相を說く。復次に須菩提、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。受想行識不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。眼不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり、耳鼻舌身不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。意不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。檀那波羅蜜不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。尸羅波羅蜜不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。羼提波羅蜜不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。毘梨耶波羅蜜不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。禪那波羅蜜不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。般若波羅蜜不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。乃至一切種智不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。須菩提、菩薩摩訶薩の是の如く般若波羅蜜を行ずる時、色は是れ不礙なりと知り、受想行識は是れ不礙なりと知り、乃至一切種智は是れ不礙なりと知り、須陀洹果不礙なりと知り、斯陀含果不礙なりと知り、阿那含果不礙なりと知り、阿羅漢果不礙なりと知り、辟支佛道不礙なりと知り、阿耨多羅

【三】說不說によりて般若に增減なきを示す。

【虛空】諸法實相の般若に喩ふ。

【幻人】般若の行者に喩ふ。

【甚だ難し】微細相もなくして能く善法を修集して無上道を得ることは信受し難し、況んや行ずるをや。

【大誓莊嚴等】菩薩は弘誓願によりてこの難事を爲す故之を禮拜せんとなり。

【衆生のために】智慧禪定等今世後世の樂を得しめ利益するをいふ。

【衆生を度せん】漏盡を得て三乘道を成じ無餘涅槃に入らしむることと虛空の無生滅無所有の如し。

三藐三菩提道不礙なりと知る。』

（三）爾時慧命須菩提佛に白して言さく『未曾有なり、世尊、是甚深の法、若し說くも亦不增不減なり、若し說かざるも亦不增不減なり。』佛須菩提に語たまはく『是の如く是の如し。譬へば佛形壽を盡して虛空を若は讃じ若は毀するに、讃ずる時も亦不增不減なり、毀する時も亦不增不減なるが如し。須菩提、幻人若し讃ずる時も不增不減なり、毀する時も亦不增不減なり。讃ずる時も喜ばず、毀する時も憂へざるが如し。須菩提、諸法の法相も亦是の如し。若し說くも亦本の如くにして異ならず、說かざるも亦本の如くにして異ならざるなり。』須菩提佛に白して言さく『世尊、諸の菩薩摩訶薩の爲す所甚だ難し。是般若波羅蜜を修行する時に憂へず喜ばず、而も能く般若波羅蜜を習し、阿耨多羅三藐三菩提に於ても亦轉還せず。何を以ての故に。世尊、般若波羅蜜を修すること虛空を修するが如く、虛空中般若波羅蜜無く禪那無く毘梨耶無く羼提無く尸羅無く檀那波羅蜜無きが如し。虛空中色無く受想行識なく、亦內空外空內外空乃至無法有法空無く、四念處無く乃至八聖道分無く、佛の十力無く乃至十八不共法無く、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果無く、辟支佛道無く、阿耨多羅三藐三菩提無きが如し。般若波羅蜜を修するも亦是の如し。世尊、應に是の諸の菩薩摩訶薩の能く大誓莊嚴することを禮すべし。世尊、是人衆生の爲に大誓莊嚴勤精進すると、虛空の爲に大誓莊嚴勤精進するが如し。世尊、是人衆生を度せんと欲するは、虛空

【衆生性等】假名衆生は定相なく増減なし、諸佛無量衆生を度して一衆を減ぜざるなり。

【一比丘あり】畢竟空を聞いて讃說するなり。

【四】般若行者の守護を辨ず。

を度せんと欲するが如し。世尊、是諸の菩薩摩訶薩の大誓莊嚴すること、虛空に等しき衆生の爲に大誓莊嚴するが如し。世尊、是人大誓莊嚴して衆生を度せんと欲するは虛空を擧ぐるが如しと爲す。世尊、諸の菩薩摩訶薩は大精進力を得て、衆生を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。世尊、諸の菩薩摩訶薩は大誓莊嚴して、衆生を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。世尊、諸の菩薩摩訶薩は大勇猛にして、虛空の如き等の衆生を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。何を以ての故に。世尊、若し三千大千世界の中に滿つる諸佛、譬へば竹葦甘蔗稻麻叢林の如くならん、諸佛、若は一劫若は減一劫常に法を說き、一一の佛無量無邊阿僧祇の衆生を度して涅槃に入らしめんに、世尊、是衆生性も亦不減亦不增なり。何を以ての故に。衆生所有無きが故に、衆生離るるが故に。乃至十方世界の中の諸佛の度する所の衆生も亦是の如し。世尊、是因緣を以ての故に我是の如く說く『是人、衆生を度せんと欲するが故に阿耨多羅三藐三菩提心を發すは、虛空を度せんと欲すと爲す』と。是時一比丘有り、是言を作さく『我れ當に般若波羅蜜を禮すべし、般若波羅蜜中、法生ずること無く、法滅すること無しと雖も、而も戒衆定衆慧衆解脫衆解脫知見衆有り、而も諸の須陀洹、諸の斯陀含、諸の阿那含、諸の阿羅漢、諸の辟支佛、諸の佛有り、而も佛寶法寶比丘僧寶有り、而も轉法輪有ればなり』と。

(四)爾時、釋提桓因、須菩提に語らく『若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を習せんとせば、爲に何の法を習するや』。須菩提、釋提桓因に語りて言はく『憍尸迦、是菩薩摩訶薩、般若波

羅蜜を習せんとせば、爲に空法を習す。釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、若し善男子善女人、是般若波羅蜜を受持し親近し讀誦し說き正憶念せば、我れ當に何等の護をか作すべき。」爾時、須菩提釋提桓因に語りて言はく、「汝頗し是法の守護すべき者を見るや不や。」釋提桓因言はく、「不、須菩提、我れ是法の守護すべき者を見ず。」須菩提言はく、「憍尸迦、若し善男子善女人、般若波羅蜜中の所說の如く行ずれば即ち是れ守護なり、謂ゆる所說の如き般若波羅蜜の行を常に遠離せず。是善男子善女人、若は人若は非人其便を得ず。當に知るべし是善男子善女人は般若波羅蜜を遠離せずと。憍尸迦、若し人般若波羅蜜を行ずる菩薩を護せんと欲せば、虛空を護せんと欲すと爲す。憍尸迦、汝が意に於て云何、汝能く夢燄影響幻化を護するや不や。」釋提桓因言はく、「護すること能はず。」「若し人般若波羅蜜を行ずる諸の菩薩摩訶薩を護せんと欲するも亦是の如し。但自ら疲苦するのみ。憍尸迦、汝が意に於て云何、能く佛の所化を護するや不や。」釋提桓因言はく、「護すること能はず。」「若し人般若波羅蜜を行ずる諸の菩薩摩訶薩を護せんと欲するも亦是の如し。憍尸迦、汝が意に於て云何、能く法性實際如不可思議性を護するや不や。」釋提桓因言はく、「護すること能はず。」「若し人般若波羅蜜を行ずる諸の菩薩摩訶薩を護せんと欲するも亦是の如し。」爾時、釋提桓因須菩提に問はく、「云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、諸法夢の如く燄の如く影の如く響の如く幻の如く化の如きを知見するや。諸の菩薩摩訶薩の知見する所の如きが故に夢を念ぜず是夢を念ぜず用夢を念ぜず我夢を念ぜ

【何等の護】帝釋歡喜して所須の守護を與へんとするなり。

【汝頗し是法等】般若無相空にして一法有つて守護せらるべきあると異るを明す。

【云何が菩薩般若を行じ等】五蘊を觀ずるに夢幻の如く實在の認むべきなし。然るに夢に著するものあり。故に此問となる。

【夢を念ぜず】凡夫人は夢法定んで有り睡眠時に生ずと執す。これを離るること即ち五蘊を離るるに喩ふ。

【是夢を念ず】夢の好惡を分別して夢に由ると執す。

【川夢を念ず】夢の好惡に喜憂する等をいひ、夢に屬すと執す。

【我夢を念ず】我れ夢に依て諸法の相を知る等といふ夢に依ると執す。

【五】諸天佛力に依て十方に千佛を見るを明し、未來彌勒會の說法を示す。
【是相等】諸佛について常釋問ひ須菩提答ふるなり。
【是處】耆闍崛山
【賢劫】現在千佛出世の時。
【何の相】非常非無常等の無相。
【何の因】畢竟清淨の故に因とし、清淨を義とす。

す、餤影響幻化も亦是の如くなるや。」須菩提言はく、「憍尸迦、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、色を念ぜず是色を念ぜず用色を念ぜず我色を念ぜずば、是菩薩摩訶薩も亦能く夢を念ぜず是夢を念ぜず用夢を念ぜず我夢を念ぜず、乃至化を亦化を念ぜず是化を念ぜず用化を念ぜず我化を念ぜず、受想行識も亦是の如し。乃至一切智も一切智を念ぜず是一切智を念ぜず用一切智を念ぜず我一切智を念ぜず。是菩薩摩訶薩も亦能く夢を念ぜず是夢を念ぜず用夢を念ぜず我夢を念ぜず、乃至化も亦是の如し。是の如きは、憍尸迦、菩薩摩訶薩の諸法夢の如く餤の如く影の如く響の如く幻の如く化の如きを知るとす。」

(五)爾時、佛の神力の故に、三千大千世界の中の諸の四天王天三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天、梵身天梵輔天梵衆天大梵天少光天乃至淨居天、是一切の諸天、天の旃檀華を以て遙に佛の上に散じ、來つて佛所に詣で頭面佛足を禮し卻いて一面に住す。爾時、四天王天釋提桓因及び三十三天梵天王乃至諸の淨居天、佛の神力の故に東方千佛の說法を見るに亦是相の如く是名字の如し。是般若波羅蜜品を說く諸の比丘を皆須菩提と字け、般若波羅蜜品を難問する者を皆釋提桓因と字く。南西北方四維上下も亦是の如く各各千佛現ず。爾時、佛須菩提に告げたまはく、「彌勒菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提を得る時も、亦當に是處に於て般若波羅蜜を說くべし。賢劫中の諸の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時も、亦當に是處に於て般若波羅蜜を說くべし。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、彌勒菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、何の相、何の因、何の義を用ひて是般若

【六】般若清淨の義を明す。

【般若清淨なりや】意、第一清淨を讃ずるにあり。

【色清淨等】色等法は業因緣を失はざる故に、諸法生相の定實をえざる故に不生不滅、諸法相常に汚染せざる故に不垢不淨といふ。

波羅蜜の義を說くや。佛須菩提に告げたまはく、「彌勒菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、色常に非ず無常に非ず、當に是の如く說法すべし。色苦に非ず樂に非ず、色我に非ず無我に非ず、色淨に非ず不淨に非ず、當に是の如く說法すべし。色縛に非ず解に非ず、當に是の如く說法すべし。受想行識常に非ず無常に非ず乃至縛に非ず解に非ず、當に是の如く說法すべし。色過去に非ず色未來に非ず色現在に非ず、當に是の如く說法すべし。受想行識も亦是の如し、色畢竟淨なり、當に是の如く說法すべし。受想行識畢竟淨なり、當に是の如く說法すべし。乃至一切智畢竟淨なり、當に是の如く說法すべし。」

(六)須菩提佛に白して言さく、「世尊、是般若波羅蜜清淨なりや。」佛言はく、「色清淨なるが故に般若波羅蜜清淨なり。受想行識清淨なるが故に般若波羅蜜清淨なり。」「世尊、云何が色清淨なるが故に般若波羅蜜清淨なるや。云何が受想行識清淨なるが故に般若波羅蜜清淨なるや。」佛言はく、「若し色不生不滅不垢不淨ならば、是を色清淨と名く。受想行識不生不滅不垢不淨ならば、是を受想行識清淨と名く。復次に須菩提、虛空清淨なるが故に般若波羅蜜清淨なり。」「世尊、云何が虛空清淨なるが故に般若波羅蜜清淨なるや。」佛言はく、「虛空不生不滅なるが故に清淨なり。般若波羅蜜も亦是の如し。復次に須菩提、色不汚なるが故に般若波羅蜜清淨なり。受想行識不汚なるが故に般若波羅蜜清淨なり。」「世尊、云何が色不汚なるが故に般若波羅蜜清淨なるや、受想行識不汚なるが故に般若波羅蜜清淨なるや。」佛言はく、「虛空汚すべからざるが故

に虚空清淨なるが如し。』『世尊、云何が虚空不可汚の故に虚空清淨なるが如くなるや。』佛言はく、『虚空不可取なるが故に虚空清淨なり、虚空清淨なるが故に般若波羅蜜清淨なり。復次に須菩提、虚空可說なるが故に般若波羅蜜清淨なり。』『世尊、云何が虚空可說なるが故に般若波羅蜜清淨なるや。』佛言はく、『虚空中に二聲出づるに因る。般若波羅蜜も亦虚空可說の如きが故に清淨なり。須菩提、虚空不可說なるが故に般若波羅蜜清淨なり。』『世尊、云何が虚空不可說なるが故に般若波羅蜜清淨なるや。』佛言はく、『虚空無可說の如きが故に般若波羅蜜清淨なり。復次に虚空不可得の如きが故に般若波羅蜜清淨なり。』『世尊、云何が虚空不可得の如きが故に般若波羅蜜清淨なるや。』佛言はく、『虚空所得の相無きが如く、般若波羅蜜も亦虚空無所得の如くなるが故に清淨なり。復次に須菩提、一切法不生不滅不垢不淨なるが故に般若波羅蜜清淨なり。』『世尊、云何が一切法不生不滅不垢不淨なるが故に般若波羅蜜清淨なるや。』佛言はく、『一切法畢竟清淨なるが故に般若波羅蜜清淨なり。』

(七)須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人是般若波羅蜜を受持し親近し正憶念する者、終に眼を病まず。耳鼻舌身も亦終に病まず、身形殘なく亦老衰せず、終に横死せず、無數百千萬諸天四天王天乃至淨居諸天皆悉く隨從して聽受す。六齋日、月の八日二十三日十四日二十九日十五日三十日諸天衆會す。善男子善女人の法師と爲る者、在所に般若波羅蜜を說く處に、皆悉く來集す。是善男子善女人は大衆中に在りて是般若波羅蜜を說

【不可取】無色無形にして取るべからざれば汚すべからず、般若も邪見汚す能はず、惡事壞する能はず。

【二聲】山谷の響と口中の聲倶に空より發す。二聲倶に實ならざるも聲を實とし響を虛となす。

【般若亦虛空可說等】十二部經廣說の如きをいふ。

【無可說】空無作にして一切の音響を離るるが如し。第一義畢竟空は言說を離る。

【七】受持般若の別益を明す。

【身形殘】根壞傷損せる不具。

【六齋日】月の六日、大論に是れ惡日にして人に衰凶あり受戒齋施せば惡鬼便をえずと。

【阿那婆迦】アナブラカー(Anabhraka)無雲と譯す、第四禪の初天。
【阿浮訶那】アヴリハー(Avrha)無煩と譯す、五淨居天の一。

き、無量無邊阿僧祇不可思議不可稱量の福德を得。」佛須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し。是善男子善女人、若し六齋日、月の八日二十三日十四日二十九日十五日三十日諸天衆の前に在りて是般若波羅蜜の義を說かば、是善男子善女人は無量無邊阿僧祇不可思議不可稱量の福德を得。何を以ての故に。須菩提、般若波羅蜜は是れ大珍寶なり。何等か是れ大珍寶なるや。是般若波羅蜜は能く地獄畜生餓鬼及び人中の貧窮を拔き、能く刹利大姓婆羅門大姓居士大家を與へ、能く四天王天處乃至非有想非無想處を與へ、能く須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道阿耨多羅三藐三菩提を與ふ。何を以ての故に、是般若波羅蜜の中に十善道四禪四無量心四無色定四念處乃至八聖道分檀那波羅蜜尸羅波羅蜜羼提波羅蜜毘梨耶波羅蜜禪那波羅蜜般若波羅蜜を廣說し、內空乃至無法有法空を廣說し、佛の十力乃至一切種智を廣說す。是中より學して刹利大姓婆羅門大姓居士大家に出生し、四天王天三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天梵身天梵輔天梵衆天大梵天光天少光天無量光天光音天淨天少淨天無量淨天徧淨天阿那婆迦天得福天廣果天無想天阿浮訶那天不熱天快見天妙見天阿迦尼吒天虛空無邊處天識無邊處天無所有處天非有想非無想處天に出生し、是法の中に學して須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果を得、辟支佛道を得、阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。是を以ての故に、須菩提、般若波羅蜜を名けて大珍寶と爲す。珍寶波羅蜜中、法の若は生若は滅、若は垢若は淨若は取、若は捨を得べき有る無し。珍寶波羅蜜も亦、法の若は善若は不善、若は世間若は出世間、若は有漏若は無漏、若は有

【是の如く知らず等】般若の相を取らず著せず分別せず、定相得べからざれば法愛なく、戯論を斷ずるをいふ。

【力有ることなく】定相の著すべきなければ力なく諸法實相をえて諸法無礙にし乃至降魔成佛すれば力に非ることなし。

【八】諸天讃じて第二法輪となし、無相に轉還なきを明す。

【漚鉢羅華】ウトパラ(Utpala)青蓮と譯す。波頭摩パドマ(Padma)蓮華、拘物頭クムダ(Kumuda)黄蓮、分陀利プンダリーカ(Pundarīka)白蓮と譯す。

【第二の法輪轉】鹿野苑の初轉法輪に對し般若の轉法に無量諸天無生忍を得たるをいふ。

爲若は無爲有る無し。是を以ての故に、須菩提、是を無所得珍寶波羅蜜と名く。須菩提、是珍寶波羅蜜法の能く染汚するもの有る無し。何を以ての故に。所用の染法不可得なるが故に。須菩提、是を以ての故に無染珍寶波羅蜜と名く。須菩提、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、亦是の如く知らず、亦是の如く分別せず、亦是の如く得べからず、亦是の如く戯論せず。是を能く般若波羅蜜を修行すと爲す。亦能く諸佛を禮觀して一佛國より一佛國に至り、諸佛を供養し恭敬し尊重し讃歎す。諸佛刹に遊びて衆生を成就し佛國土を淨む。須菩提、是般若波羅蜜諸法に於て力有ること無く力に非ざること無し。亦受無く亦與無く、不生不滅不垢不淨不增不減なり。是般若波羅蜜は亦過去に非ず未來に非ず現在に非ず、欲界を捨てず欲界に住せず、色界を捨てず色界に住せず、無色界を捨てず無色界に住せず、是般若波羅蜜は檀那波羅蜜を與へず亦捨てず、尸羅波羅蜜を與へず亦捨てず、羼提波羅蜜を與へず亦捨てず。毘梨耶波羅蜜を與へず亦捨てず、禪那波羅蜜を與へず亦捨てず、般若波羅蜜を與へず亦捨てず、內空を與へず亦捨てず、乃至無法有法空を與へず亦捨てず、四念處を與へず亦捨てず、乃至八聖道分を與へず亦捨てず、佛の十力を與へず亦捨てず、乃至十八不共法を與へず亦捨てず、須陀洹果を與へず亦捨てず、乃至阿羅漢果を與へず亦捨てず、辟支佛道を與へず亦捨てず、乃至一切智を與へず亦捨てず、是般若波羅蜜は阿羅漢法を與へず凡人法法を捨てず、辟支佛法を與へず阿羅漢法を捨てず、佛法を與へず辟支佛法を捨てず。是般若波羅蜜は亦無爲法を與へず有爲法を捨てず。何を以ての故に若は諸佛

【第一轉に非ず】轉法輪も果報涅槃も畢竟空なるが故に定實法輪の思想を破す。
【轉を爲さず還をなさず】世間の生法は轉滅法を還、無起無作の故に轉なく還なし。
【教照】智慧の明を以て照らして知らしむること。
【開示】般若の利門を開きて道非道の失等を示す。
【示現】種種法を說くに或時は善法を毀呰し或は不善法を出け衆生を解に導き、說者佛意を顯はして衆生をして輕重相を知らしむるなり。
【解釋】般若の義理を解釋す。
【淺易にし】甚深般若を言義方便力の故に種種に說きて解し易からしむ
【說者なく等】一義中實に所說なく畢竟空の故に說無

有るも若は諸佛無きも、是諸の法相常住にして不異なり、法相法住法位常住にして不謬不失なるが故に。」

（八）爾時、諸天子虛空中に立て大音聲を發し、踊躍歡喜し、漚鉢羅華波頭摩華拘物頭華分陀利華を以て、而して佛の上に散じ、是の如きの言を作さく、「我等閻浮提に於て第二の法輪轉を見る」と、是中に無量百千の天子無生法忍を得。佛須菩提に告げたまはく、「是法輪轉第一轉に非ず第二轉に非ず、是般若波羅蜜轉を爲さず還を爲さゝるが故に出づ。無法有法空なるが故に。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が無法有法空なるが故に、般若波羅蜜轉を爲さず還を爲さざるが故に出づるや。」佛言はく、「般若波羅蜜般若波羅蜜相空なり、乃至檀那波羅蜜檀那波羅蜜相空なり、內空內空相空なり、乃至無法有法空無法有法空相空なり、四念處四念處相空なり、乃至八聖道分八聖道分相空なり、佛の十力佛の十力相空なり、乃至十八不共法十八不共法相空なり。須陀洹果須陀洹果相空なり、斯陀含果斯陀含果相空なり、阿那含果阿那含果相空なり、阿羅漢果阿羅漢果相空なり、辟支佛道辟支佛道相空なり、一切種智一切種智相空なり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は、是れ摩訶波羅蜜なり。何を以ての故に。一切法自性空なりと雖も、而も諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜に因りて阿耨多羅三藐三菩提を得、亦法の轉法輪を得べきものなく、亦法の轉ず可きもの無く、亦法の還るべきもの無し、是般若波羅蜜中に、亦法の見るべきものも有ること無し。何を以ての故に、是法得べからず、若は轉若は還一切法畢竟不

生なるが故に。何を以ての故に。是空相轉ずること能はず還ること能はず、無相相轉ずること能はず還ること能はず、無作の相轉ずること能はず還ること能はず、若し能く是の如く般若波羅蜜を說き、教照し開示し分別し顯現し解釋し淺易にし、能く是の如く教ふる者有らば、是を清淨にして般若波羅蜜を說くと名く。亦說者無く亦受者無く亦證者無し、若し說無く受無く證無くば亦滅者無し、是說法中亦畢定福田無し。』

徧歎品第四十四

(一)爾時、慧命須菩提佛に白して言さく、『世尊、無邊波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『虛空の如く無邊なるが故に。』『世尊、等波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『諸法等しきが故に。』『世尊、離波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『畢竟空なるが故に。』『世尊、不壞波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不可得なるが故に。』『世尊、無彼岸波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『無名無身なるが故に。』『世尊、空種波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『入出息不可得なるが故に。』『世尊、不可說波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『覺觀不可得なるが故に。』『世尊、無名波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『受想行識不可得なるが故に。』『世尊、不去波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不來なるが故に。』『世尊、無移波羅蜜是れ般若波羅蜜な

說なれば受者なく、無受の故に無證、無證なれば煩惱滅する者なく、隨つて福田もなし。

【畢定福田】有餘涅槃なり。諸法無餘涅槃に同じきを畢定といふ。

【徧歎品】種種の法門より般若を觀て讚歎し、佛一一その義を示す。九十一の波羅蜜を載す。

【一】須菩提無邊等の義を讚ず。

【無邊】常無常等の邊を離れて虛空の無色無形なるが如く取處等無きに無邊といふ。

【等】法忍をえて一切法皆平等を觀ず。

【離】畢竟空の心を用て諸煩惱諸法を離る。

【不壞】定實の法相に於て心著せざる故に邪見も破壞する能はず。

【無彼岸】生死の此岸を離れて涅槃の彼岸に至らんと彼岸に著するあり故に般若は無彼岸をいふ。

【無名無身】涅槃の名色を離るるをいふ。

【空種】虛空あらば入出息あり、是れ虛誑業因縁の生、出出に非ず入入に非ず念念生滅不可得實相、息不可得故に一切法不可得の故に空種をいふ。

【不可說】法空寂なれば、覺觀なく言說なし、故に般若は語言道を斷ず。

【無名】名は色に對する心法、般若慧ならば名に屬すべきも色を離れて受想等不可得なれば無名とす。

【不去】一切法不去不來の故に。

【無移】般若は、三世十方佛の法藏、三法印を以て無天人を印し能く破す

り。」佛言はく、「一切法不可伏なるが故に。」『世尊、盡波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「一切法畢竟盡なるが故に。」『世尊、不生波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「一切法不滅なるが故に。」『世尊、不滅波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「一切法不生なるが故に。」『世尊、無作波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「作者不可得なるが故に。」『世尊、無知波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「知者不可得なるが故に。」『世尊、不到波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「生死不可得なるが故に。」『世尊、不失波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「一切法不失なるが故に。」

(三)『世尊、夢波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「乃至夢中所見不可得なるが故に。」『世尊、響波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「聞聲者不可得なるが故に。」『世尊、影波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「鏡面不可得なるが故に。」『世尊、焰波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「水流不可得なるが故に。」『世尊、幻波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「術事不可得なるが故に。」『世尊、不垢波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「諸の煩惱不可得なるが故に。」『世尊、無淨波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「煩惱虛誑なるが故に。」『世尊、不汚波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「處不可得なるが故に。」『世尊、不戲論波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「一切の戲論破るるが故に。」『世尊、不念波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「一切の念破るるが故に。」『世尊、不動波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、「法性常住なるが故に。」『世尊、無

る故無移といふ。【盡】諸の有爲法念念盡滅して住時なし、然らば三世は盡るなく、三世盡不可得なり、之を畢竟盡と名く。【不生】一切法三世中に生不可得の故に不生なり。【無作】作は衆生作と法作、衆生空の故に作者なく法は鈍にして作相なし、故に無作とす。【不到】空慧眼より見れば生死不可得にして後世到るところ無きをいふ。【不失】般若を離れて一切法皆失す一切法の實相を觀じて般若を得。【二】以下廿六多く染法の不實不可得に就て般若を明す。【聞聲者不可得】響を虛、聲を實とするも共に不可得にして本事は皆空なり。【鏡面】影は虛、

染波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法を知りて妄解なきが故に。』『世尊、不起波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法無分別なるが故に。』『世尊、寂滅波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法相不可得なるが故に。』『世尊、無欲波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『欲不可得なるが故に。』『世尊、無瞋波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『瞋恚不實なるが故に。』『世尊、無癡波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『無明黑闇滅なるが故に。』『世尊、無煩惱波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『分別憶想虛妄なるが故に。』『世尊、無衆生波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『衆生無所有なるが故に。』『世尊、無斷波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『諸法不起なるが故に。』『世尊、無二邊波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『離二邊なるが故に。』『世尊、不壞波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不相離なるが故に。』『世尊、不取波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『過聲聞辟支佛地なるが故に。』『世尊、不分別波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『諸の妄想不可得なるが故に。』『世尊、無量波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『諸の法量不可得なるが故に。』『世尊、虛空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法無所有なるが故に。』『(三)世尊、無常波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法破壞なるが故に。』『世尊、苦波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法苦惱相なるが故に。』『世尊、無我波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不著なるが故に。』『世尊、空波羅蜜是れ般若

面像と鏡とは實なりとするも、實は不可得。
【不垢】諸煩惱本來常無の故に不可得。
【無淨】煩惱なければ淫欲瞋恚等淨し。
【不汚】般若は一切垢法に汚されず、六情は是諸煩惱の處、この緣處住處不可得の故に。
【不戲論】般若により一切戲論憶想分別滅する故。
【不念】一切法空の故にして憶なく念想なきをいふ。
【不動】法性に住すれば、議論に動かされず、煩惱に覆はれず、一切法無常にして破壞心憂を生ぜざる等の因緣の故に不動。
【無染】愛染なきは妄解の一切法を離るるなり。
【不起】一切法に分別なければ惑業なく後世生起せざ

波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不可得なるが故に。』『世尊、無相波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不生なるが故に。』『世尊、內空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『內法不可得なるが故に。』『世尊、外空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『外法不可得なるが故に。』『世尊、內外空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『內外法不可得なるが故に。』『世尊、空空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『空空法不可得なるが故に。』『世尊、大空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不可得なるが故に。』『世尊、第一義空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『涅槃不可得なるが故に。』『世尊、有爲空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『有爲法不可得なるが故に。』『世尊、無爲空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『無爲法不可得なるが故に。』『世尊、畢竟空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『諸法畢竟不可得なるが故に。』『世尊、無始空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『諸法無始不可得なるが故に。』『世尊、散空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『散法不可得なるが故に。』『世尊、性空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『有爲無爲性不可得なるが故に。』『世尊、諸法空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不可得なるが故に。』『世尊、無所得空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『無所有なるが故に。』『世尊、自相空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『諸法自相離なるが故に。』『世尊、無法空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『無法不可得なるが故に。』『世尊、有法空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、

るをいふ。

【無欲】欲は本來不り得なれば、貪欲は虛誑なり、自性不可得の故に。

【無恚】恚の性畢竟無所有の故に。

【無癡】無明黒闇を破るが故に。

【無煩惱】無生忍を得る故に一切煩惱滅す。

【無衆生】般若能く無衆生中に衆生顚倒を破す。此衆生も本來不生無所有なり。

【無斷】般若能く一切有漏法を斷ずる故に斷といひ、諸法不起なれば自然に斷じ、斷ずべき斷なし。

【無二邊】我無我斷無斷等の無量の二邊般若の中に本來無し。

【不壞】先にあり今は不破の意、即ち一切法定異相なく不離、一切法の實相般若なれば不破とす。

『有法不可得なるが故に。』『世尊、無法有法空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『無法有法相不可得なるが故に。』『世尊、念處波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『身受心法不可得なるが故に。』『世尊、正勤波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『善不善法不可得なるが故に。』『世尊、如意足波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『四如意足不可得なるが故に。』『世尊、根波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『五根不可得なるが故に。』『世尊、力波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『五力不可得なるが故に。』『世尊、覺波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『七覺分不可得なるが故に。』『世尊、道波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『八聖道分不可得なるが故に。』『世尊、無作波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『無作不可得なるが故に。』『世尊、空波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『空相不可得なるが故に。』『世尊、無相波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『寂滅相不可得なるが故に。』『世尊、背捨波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『八背捨不可得なるが故に。』『世尊、定波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『九次第定不可得なるが故に。』『世尊、檀那波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『慳貪不可得なるが故に。』『世尊、尸羅波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『破戒不可得なるが故に。』『世尊、羼提波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『忍不忍不可得なるが故に。』『世尊、毘梨耶波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『懈怠精進不可得なるが故に。』『世尊、禪那波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『定亂不可得なるが故に。』『世尊、般若

【不取】一切法を取らざるが故に二乘解脫の淨法も超過して取らず。
【不分別】分別すべき妄想本來無なるをいふ。
【無量】色等一切法不可得の故に量も不可得なり。
【三】以下四十八は諸出間淨法に就て明す。
【無常】般若中に無常あるのみに非ず、一切法無常の故に、
【一切法破壞】有爲を離れて無爲なし一切破壞と說く
【念處波羅蜜】身受心法の四法縁處本來不可得の故に
【般若】般若を以て般若を貴ずるは般若に常住のものと五度と共行せるものとありて須善提は此般若が無明を破し智慧を與ふることを讃じ佛は常住に就て癡も慧も不可得なりとす

波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『癡慧不可得なるが故に。』『世尊、十力波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法不可伏なるが故に。』『世尊、四無所畏波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『道種智不沒なるが故に。』『世尊、無礙智波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切諸法無障無礙なるが故に。』『世尊、佛法波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『過一切法なるが故に。』『世尊、如實說波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切語如實なるが故に。』『世尊、自然波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『一切法中自在なるが故に。』『世尊、佛波羅蜜是れ般若波羅蜜なり。』佛言はく、『知一切法一切種智なるが故に。』

【十力】般若を行じて菩薩の十力、佛の十力を得るも、本來一切伏破されざるに十力と名く【道種智】衆生の涅槃を得る道を明かにする法眼、この慧増益して沒せざる故無畏なり。【無礙智】獨り四無礙智のみならず一切實相に合して無礙なるをいふ。【佛法】佛の十力乃至大慈大悲等をいふ。【如實說】多陀阿伽陀波羅蜜をいふ【自然】佛のこと後自然に作佛する故、卽ち佛は一切法中に自在力を得る故に名く。【知一切等】諸法の平等差別を知了するをいふ。【聞持品】般若を耳に聞くを得る者の前世の功德を明す。廣くは般若の聞持信行を明す。

摩訶般若波羅蜜經　巻第十三

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

聞持品第四十五

(一)爾時釋提桓因是念を作さく、『若し善男子善女人般若波羅蜜經を聞く耳を得たる者も、是人前世に佛に於て功德を作し、善知識と相隨ふ、何に況んや受持し親近し讀誦し正憶念し說の如く行ぜんをや。當に知るべし、是善男子善女人多く諸佛に親近し、能く聽受し親近し讀誦し、乃至正憶念し說の如く修行し、能く問ひ能く答ふることを得。當に知るべし、是善男子善女人前世に於て多く諸佛に供養し親近せるが故に、是深般若波羅蜜を聞きて驚かず怖かず畏れず。當に知るべし、是人亦無量億劫に於て檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜をも行ぜり』。(二)爾時舍利弗佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人有りて是深般若波羅蜜を聞きて驚かず怖かず畏れず、聞き已りて受持し親近し說の如く習行せば、當に知るべし、是善男子善女人は阿惟越致菩薩摩訶薩の如し。何を以ての故に。世尊、是般若波羅蜜甚深なればなり。若し先世に久しく檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行ぜざれば、終に深般若

【一】般若を聞持するとせざるとの禍罪を述べ、般若の禮すべき所以を說く。

【善知識等】今世に好師同學等に遇ふこと。

波羅蜜を信解すること能はず。世尊、若し善男子善女人有りて深般若波羅蜜を呰毀する者、當に知るべし、是人前世にも亦深般若波羅蜜を呰毀す。何を以ての故に。是善男子善女人深般若波羅蜜を說くを聞く時、信樂行ること無く心淸淨ならざればなり。是善男子善女人先世に諸佛及び弟子に、云何が應に檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行ずべきか、云何が應に內空を修すべきか、乃至云何が應に無法有法空を修すべきか、云何が應に四念處を修すべきか、乃至云何が應に八聖道分を修すべきか、云何が應に佛の十力を修すべきか、乃至云何が應に十八不共法を修すべきかを難ぜず問はず。[二]釋提桓因舍利弗に語らく、是深般若波羅蜜、若し善男子善女人有りて久しく檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行ぜず、內空外空乃至無法有法空を行ぜず、四禪四無量心四無色定を行ぜず、四念處乃至八聖道分を行ぜず、佛の十力乃至十八不共法を行ぜず。是の如きの人是般若波羅蜜を信解せざるも何の怪しむべきこと有らんや。大德舍利弗、我般若波羅蜜を禮す、般若波羅蜜を禮するは是れ一切智を禮するなり。[三]佛釋提桓因に告げて言はく、是の如く是の如し、憍尸迦、般若波羅蜜を禮するは是れ一切智を禮するなり。何を以ての故に。憍尸迦、諸佛の一切智は皆般若波羅蜜より生ず。一切智は即ち是れ般若波羅蜜なればなり。是を以ての故に、憍尸迦、善男子善女人一切智に住せんと欲せば當に般若波羅蜜に住すべし。若し善男子善女人道種智を生ぜんと欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし。一切の諸の結及び習を斷ぜんと欲せば當に般

【二】般若行者の住不住を明す。
【色中に住せず等】般若を習行する者は色の無常苦等の罪過を見る故色に住せず、凡夫は色を見、色に著する故顛倒煩惱を起して般若を失ふ。

若波羅蜜を習行すべし。善男子善女人法輪を轉ぜんと欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし。善男子善女人須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果を得んと欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし。辟支佛道を得んと欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし。衆生に教へて須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を得しめんと欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし。若し善男子善女人衆生に教へて阿耨多羅三藐三菩提を得しめんと欲し、若し比丘僧を總攝せんと欲せば當に般若波羅蜜を習行すべし。」

(二)釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ぜんと欲する時、云何が般若波羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜に住すと名くるや。云何が內空外空乃至無法有法空に住するや。云何が四禪四無量心四無色定五神通に住するや。云何が四念處乃至八聖道分に住するや。云何が佛の十力乃至十八不共法に住するや。世尊、菩薩摩訶薩云何が般若波羅蜜乃至檀那波羅蜜、內空乃至十八不共法を習行するや。」佛釋提桓因に語りて言はく、「善い哉善い哉、憍尸迦、汝能く樂みて是事を問ふ皆是れ佛神力なり。憍尸迦、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、若し色中に住せざるを般若波羅蜜を習行すと爲す。若し受想行識中に住せざるを般若波羅蜜を習行すと爲す。眼耳鼻舌身意色聲香味觸法眼界乃至意識界も亦是の如し。憍尸迦、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜中に住せざるを般若波羅蜜を習すと爲し、禪那波羅蜜中に住せざるを禪那波羅蜜を習すと爲し、毘梨耶波羅蜜中に住せざるを毘梨耶波羅蜜を習すと爲し、羼提波羅蜜中に住せざるを羼提

【色を習せず】色の過を見る故色中に住せず、又習せざれば色の相を取らざるをいふ。

【習せざれば等】色等諸法の散壞を觀じて相を取らざるを、色等の實相を習すと名く。

【色の前際等】三世の色等念念に滅して住せず、不可得にして住せずして習すべきものなし。

【三】般若を甚深とし、不退菩薩に深のみ說かるべきを明す。

【色如甚深等】眼見の色は甚深ならず般若を以て色を分別して如實に入る故甚深なり、般若の慧眼之を觀る故亦甚深なり。

波羅蜜を習すと爲し、尸羅波羅蜜中に住せざるを尸羅波羅蜜を習すと爲し、檀那波羅蜜中に住せざるを檀那波羅蜜を習すと爲す。是の如く憍尸迦、是れを菩薩摩訶薩般若波羅蜜中に住せざるを般若波羅蜜を習すと爲すと名く。憍尸迦、內空中に住せざるを內空を習すと爲し、乃至無法有法空中に住せざるを無法有法空を習すと爲し、四禪中に住せざるを四禪を習すと爲し、四無量心中に住せざるを四無量心を習すと爲し、四無色定中に住せざるを四無色定を習すと爲し、五神通中に住せざるを五神通を習すと爲し、四念處中に住せざるを四念處を習すと爲し、乃至八聖道分中に住せざるを八聖道分を習すと爲し、佛の十力中に住せざるを佛の十力を習すと爲し、乃至十八不共法中に住せざるを十八不共法を習すと爲す。何を以ての故に、憍尸迦、是菩薩色の住す可く習す可き處を得ず、乃至十八不共法に十八不共法の住す可く習す可き處を得ざればなり。復次に憍尸迦、菩薩摩訶薩色を習せず、若し色を習せざれば是を色を習すと名く。受想行識乃至十八不共法も亦是の如し。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩色の前際得可からず、中際得可からず、後際得可からざればなり。乃至十八不共法も亦是の如し。」

〔三〕舍利弗佛に白して言さく「世尊、是般若波羅蜜甚深なり。」佛言はく「色如甚深なるが故に般若波羅蜜甚深なり、受想行識如甚深なるが故に般若波羅蜜甚深なり、乃至十八不共法も亦是の如し。」舍利弗言さく「世尊、是般若波羅蜜測量す可きこと難し。」佛言はく「色測量す可きこと難きが故に般若波羅蜜測量す可きこと難し、受想行識乃至十八不共法測量

【測量すべきこと難し】甚深にしてその底を盡し難くて無量なり。

【色甚深を行ぜざる等】凡夫新學は般若に合せざる故に甚深に執するも久行の菩薩は更にこのことなし、是甚深を行ぜざるなり。

【色に非ず】色の種種相を以て分別せらるるは實相の色に非ず。

【行ぜざるを般若等】甚深なりと執して行ずべきものなきをいふ。

【甚深なり】舍利弗佛意趣を得る人のための故に甚深を説き、定心に說くに非ず。

す可きこと難きが故に般若波羅蜜測量す可きこと難し。『世尊、是般若波羅蜜無量なり。』佛言はく『色無量なるが故に般若波羅蜜無量なり、受想行識乃至十八不共法無量なるが故に般若波羅蜜無量なり。』佛舍利弗に告げたまはく『若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色甚深を行ぜざるを般若波羅蜜を行ずと爲す、受想行識を行ぜず、乃至十八不共法甚深を行ぜざるを般若波羅蜜を行ずと爲す。何を以ての故に。色甚深想を色に非ずと爲し、受想行識乃至十八不共法甚深相を十八不共法に非ずと爲せばなり。是の如く行ぜざるを般若波羅蜜を行ずと爲す。舍利弗、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色測量し難きを行ぜざるを般若波羅蜜を行ずと爲し、受想行識を行ぜず、乃至十八不共法測量し難きを行ぜざるを般若波羅蜜を行ずと爲す。何を以ての故に、色測量し難きの相を色に非ずと爲し、受想行識乃至十八不共法測量し難きの相を十八不共法に非ずと爲せばなり。舍利弗、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色無量を行ぜざるを般若波羅蜜を行ずと爲し、受想行識を行ぜず、乃至十八不共法無量を行ぜざるを般若波羅蜜を行ずと爲す。何を以ての故に、色是れ無量相を色に非ずと爲し、受想行識乃至十八不共法無量相を十八不共法に非ずと爲せばなり。』舍利弗佛に白して言さく『世尊、是般若波羅蜜甚深なり。甚深の相見難く解し難く思量す可からず、應に新發意の菩薩の前に在りて說くべからず。何を以ての故に。新發意の菩薩、是甚深般若波羅蜜を聞かば、或は當に驚怖し、心に疑悔を生じ、是甚深般若波羅蜜を信ぜず行ぜざるべければなり。當に阿惟越致の菩薩摩訶薩の前に在りて說くべし。

【呰毀】當初怖畏疑悔せしものが進みて毀呰するに至る。

【三惡道】先に地獄品に說くが如く果報として生死に久住すべし。

【四】受記せざる者にして般若に驚動せず信受するの類を明す。

【一佛等】能信者にして記を受けざるなし若し受記なるとするも一兩佛を經て受記せん。かかる行者は記なくも般若を聞きて怖畏せざる者なり。

【夢中等】眞心の所作に非るをいふ。

【菩提に近し】如夢相似の如き福德輕微なる行者すら無上道に近し。

【覺時】覺心の十分なる發心をいふ。

是菩薩是甚深般若波羅蜜を聞きて驚かず怖かず、心に疑悔せざれば則ち能く信行せん。」釋提桓因舍利弗に問はく、「若し新發意の菩薩摩訶薩の前に在りて是深般若波羅蜜を說かば、何等の過有りや。」舍利弗釋提桓因に報へて言はく、「憍尸迦、若し新發意の菩薩の前に在りて是深般若波羅蜜を說かば、或は當に驚怖し呰毀し信ぜざるべし。是新發意の菩薩或は是處に有らんに、若し新發意の菩薩是深般若波羅蜜を聞き、呰毀し信ぜざれば三惡道の業を種ゑ、是業の因緣の故に、久久に阿耨多羅三藐三菩提を得難からん。」

(四)釋提桓因舍利弗に問はく、「頗し未受記の菩薩摩訶薩是深般若波羅蜜を聞き驚かず怖かざる者有りや不や。」舍利弗言はく、「是の如し、憍尸迦、若し菩薩摩訶薩有りて是深般若波羅蜜を聞きて驚かず怖かざれば、當に知るべし、是菩薩阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを得ること久しからず、一佛兩佛を過ぎざらん。」佛舍利弗に告げたまはく、「是の如く是の如し、是菩薩摩訶薩久しく發意して六波羅蜜を行じ、多く諸佛を供養し、是深般若波羅蜜を聞き驚かず怖かず畏れず、聞きて卽ち受持し般若波羅蜜中の所說の如く行ず。」爾時舍利弗佛に白して言さく、「世尊、我譬喩を說かんと欲す。菩薩道を求むる善男子善女人、夢中に般若波羅蜜を修行し禪定に入り勤精進し忍辱を具足し戒を守護し布施を行じ、內空外空を修行し乃至道場に坐するが如くならんに、當に知るべし、是善男子善女人阿耨多羅三藐三菩提に近し。何に況んや菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲して覺時に般若波羅蜜を修行し禪定に入り勤精進し忍辱を具足し戒を守護し布施を行ぜんに、而も疾に阿耨多羅三

【百由旬等】色界、欲界、無色界、聲聞辟支佛道に喩ふ。
【險道】世間に喩ふ。
【諸相等】世間を脱し般若を信ずるに喩ふ。放牧者は能化の道人、疆界は三乘諸法の分別園林は佛道定慧の樂に、聚落は柔順忍、邑は無生忍、城は佛果に喩ふ。
【賊等】賊は六十二邪見、惡蟲は貪瞋煩惱、飢渇は眞慧と定解脱とを得ざるに喩ふ。
【大海】無上菩提佛果に喩ふ。
【樹相なく山相なき】般若經等に喩ふ。

藐三菩提を成じ道場に坐せざらんや。世尊、善男子善女人善根成就して般若波羅蜜を聞くことを得、受持し乃至說の如く修行せば、當に知るべし、是菩薩摩訶薩久しく發意し善根を種ゑ多く諸佛を供養し善知識と相隨ふ。是人能く般若波羅蜜を受持し、乃至正憶念せば、當に知るべし、是人近く阿耨多羅三藐三菩提の記を受くべし。當に知るべし、是善男子善女人、阿惟越致の菩薩摩訶薩の如く、阿耨多羅三藐三菩提に於て、動轉せず、能く深般若波羅蜜を得、得已りて能く受持し讀誦し乃至正憶念す。世尊、譬へば人の百由旬若は二百三百四百由旬の曠野險道を過ぎんと欲するが如し。先づ諸相若は放牧者若は疆界若は園林、是の如き等の諸の相を見るが故に城邑聚落に近きを知る。是人是相を見已りて是念を作さく「我が所見の相の如くならば、當に知るべし城邑聚落遠からず」心に安隱を得、賊難惡蟲飢渇を畏れず。世尊、菩薩摩訶薩も亦是の如し。若し是深般若波羅蜜を得、受持し讀誦し乃至正憶念せば、當に知るべし近く阿耨多羅三藐三菩提の記を受くること久しからず。當に知るべし、是菩薩摩訶薩應に聲聞辟支佛地に墮することを畏るべからず。是諸先相所謂甚深般若波羅蜜なり。聞くことを得、見ることを得、受持し乃至正憶念することを得るが故に。』佛舍利弗に告げたまはく、『是の如し、汝更に樂みて說く者ならば便ち說け。』『世尊、譬へば人大海を見んと欲し發心して往趣し、樹相を見ず山相を見ざるが如し。是人未だ大海を見ずと雖も大海遠からざるを知る。何を以ての故に。大海の處平かにして樹相無く山相無きが故に。是の如く世尊、菩薩摩訶薩是深般若波羅蜜を聞き受持し乃至正憶

【故葉已に墮つ】煩惱邪見滅す。
【新葉等】般若經に、華は不退位に、果は無上道に喩ふ。
【母人等】母人は行者、所姙は無上道、若重等は産相には、般若を習行する所には、般若を習行するの所を厭ふには、世欲に著せざるに喩ふ。

念する時、未だ佛前に劫數の記若しは百劫千劫百千萬億劫を受けずと雖も、是菩薩自ら近く阿耨多羅三藐三菩提の記を受くること久しからざるを知る。何を以ての故に。我れ是深般若波羅蜜を聞き受持し讀誦し乃至正憶念することを得るが故に。世尊、譬へば初春諸樹の故葉已に墮つるが如し。當に知るべし此樹新葉華果出在すること久しからず。何を以ての故に。是諸樹の先相を見るが故に、今久しからずして華葉果出づるを知る。是時閻浮提の人樹の先相を見て皆悉く歡喜す。世尊、菩薩摩訶薩是深般若波羅蜜を聞くことを得、受持し讀誦し乃至正憶念し說の如く行せば、當に知るべし、是菩薩善根成就し多く諸佛を供養す。是菩薩應に是念を作すべし、先世の善根の追ふ所、阿耨多羅三藐三菩提に趣く」と。是因緣を以ての故に、是深般若波羅蜜を見ることを得、聞くことを得、受持し讀誦し乃至正憶念し說の如く行せば、是中の諸天子曾て佛を見る者歡喜し踊躍して是念を作して言はく「先の諸の菩薩摩訶薩も亦是の如きの受記先相有り、今是菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるも亦久しからず。」世尊、譬へば母人懷姙するが如し。身體苦重にして行步便ならず、坐起安からず、眠食轉た少く語言を喜ばず、本習する所を厭ふ、苦痛を受くるが故に。異母人有り其先相を見て當に産生久しからざるを知るべし。菩薩摩訶薩も亦是の如し。善根を種ゑ多く諸佛を供養し、久しく六波羅蜜を行じ善知識と相隨ひ、善根成就し深般若波羅蜜を聞くことを得、受持し讀誦し乃至正憶念し說の如く行せば、諸人も亦是菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提の記を得ること久しからざるを知る。」佛舍利弗に告げ

て言はく、『善い哉善い哉、汝の樂說する所皆是れ佛力なり。』

(五)爾の時須菩提佛に白して言さく、『希有なり世尊、諸の多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀善く諸の菩薩摩訶薩事を付す。』佛須菩提に告げたまはく、『諸の菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提心を發し、多くの衆生を安隱にし、無量の衆生をして樂を得しめ、憐愍して諸の天人を饒益するが故に、是の諸の菩薩摩訶薩道を行ずる時、四事を以て無量百千の衆生を攝す。所謂布施愛語利益同事なり。亦十善道を以て衆生を成就す。自ら初禪を行じ、亦他人に教へて初禪を行ぜしめ、乃至自ら非有想非無想處を行じ、亦他人に教へて乃至非有想非無想處を行ぜしめ、自ら檀那波羅蜜を行じ、亦他人に教へて檀那波羅蜜を行ぜしめ、自ら尸羅波羅蜜を行じ、亦他人に教へて尸羅波薩蜜を行ぜしめ、自ら羼提波羅蜜を行じ、亦他人に教へて羼提波羅蜜を行ぜしめ、自ら毘梨耶波羅蜜を行じ、亦他人に教へて毘梨耶波羅蜜を行ぜしめ、自ら禪那波羅蜜を行じ、亦他人に教へて禪那波羅蜜を行ぜしめ、自ら般若波羅蜜を行し、亦他人に教へて般若波羅蜜を行ぜしめ、是菩薩般若波羅蜜を得て方便力を以て衆生に教へて須陀洹果を得しむ。自ら內に於て證せず、衆生に教へて斯陀含果阿那含果阿羅漢果を得しめ、自ら內に於て證せず、衆生に教へて辟支佛道を得しめ、自ら內に於て證せず、自ら六波羅蜜を行じ、亦無量百千萬の諸の菩薩に教へて六波羅蜜を行ぜしめ、自ら阿惟越致地に住し、亦他人をして阿惟越致地に住せしめ、自ら佛國土を淨め、又他人をして佛國土を淨めしめ、自ら衆生を成就し、亦他人をして衆生を成就せしめ、自ら菩薩の

【五】佛意よく菩薩事を付するを明す。

【菩薩事】慧道と福德道。

【多くの衆生等】衆生無量無邊にして得益者數ふべからざる故に多といひ、衆生常に著するには無常を教へ乃至我に著するには無我を教ふ等を安隱といふ。

【四事】四攝法にして布施等なり。

【布施等】布施は財施法施、愛記は隨意愛語と他の愛する所を說くとをいひ、利益は二世の利を與へ說法救濟し、過患を退治す、同事は他の所行に同じて善に導くをいふ。

【內に於て證せず】福慧力增長せるが故に自證に住せずして他を化す。

【色成就】色の差別を執せざる妙色具足なり。

【童眞地】初發心より婬欲を斷じて菩薩道を行ずるものなり。

【六】般若具足を明す。

【大功德】自ら行じ他人を敎ふる功德。

【色增相等】緣生畢竟空なれば諸法に生滅增減を見ず。

神通を得、亦他人をして菩薩の神通を得しめ、自ら陀羅尼門を淨め、亦他人をして陀羅尼門を淨めしめ、自ら樂說辯才を具足し、亦他人をして樂說辯才を具足せしめ、自ら色成就を受け、亦他人をして色成就を受けしめ、自ら三十二相を成就し、亦他人をして三十二相を成就せしめ、自ら童眞地を成就し、亦他人をして童眞地を成就せしめ、自ら佛の十力を成就し、亦他人をして佛の十力を成就せしめ、自ら四無所畏を行じ、亦他人をして四無所畏を行ぜしめ、自ら十八不共法を行じ、亦他人に敎へて十八不共法を行ぜしめ、自ら大慈大悲を行じ、亦他人をして大慈大悲を行ぜしめ、自ら一切種智を得、亦他人に敎へて一切種智を得しめ、自ら一切の結使及び習を離れ、亦他人に敎へて一切の結使及び習を離れしめ、自ら法輪を轉じ、亦他人をして法輪を轉ぜしむ。」

(六)須菩提佛に白して言さく、「希有なり世尊、諸の菩薩摩訶薩大功德を成就す。所謂一切衆生の爲に般若波羅蜜を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜を具足し修行するや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色增相を見ず亦減相を見ず、受想行識增相を見ず亦減相を見ず、乃至一切種智增相を見ず亦減相を見ず。諸の菩薩摩訶薩此時般若波羅蜜を具足す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、是れ法是れ非法を見ず、是れ過去法是れ未來現在法を見ず、是れ善法不善法有記法無記法を見ず、是れ有爲法無爲法を見ず、欲界色界無色界を見ず、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を見ず、乃至

【欺誑】諸法有相の眞實ならざるをいふ。

【堅固なるなく】無常無實なるをいふ。

【覺者なく】苦樂を受くる衆生なきをいふ。

【所說不可思議】五蘊等諸法不思議の故に。故に佛は不可思議相にも住すべからざるを說く。

【七】般若を信解する者を明す。

【色を分別せず】色の四大若くは四大所造色等を分別せざるなり。

【色相】可見可聞好醜長短常無常苦樂等。

【色性】色の常性地堅性等。

一切種智を見ず。是の如く菩薩摩訶薩般若波羅蜜を具足し修行す。何を以ての故に、諸法無相なるが故に。諸法空欺誑にして堅固なる無く覺者無く壽命者無し。』須菩提言さく、『世尊、世尊の所說不可思議なり。』佛須菩提に告げたまはく、『色不可思議なるが故に所說不可思議なり、受想行識不可思議なるが故に所說不可思議なり、六波羅蜜不可思議なるが故に所說不可思議なり、乃至一切種智不可思議なるが故に所說不可思議なり。須菩提、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、色は是れ不可思議、受想行識は是れ不可思議なりと知り、乃至一切種智は是れ不可思議なりと知らば、是菩薩則ち般若波羅蜜を具足すること能はず。』

(七)須菩提佛に白して言さく、『世尊、是深般若波羅蜜、誰か當に信解すべき者ぞ。』佛言はく、『若し菩薩摩訶薩有りて、久しく六波羅蜜を行じ善根を種ゑ、多く諸佛に親近し供養し善知識と相隨ふ。是菩薩能く深般若波羅蜜を信解す。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩久しく六波羅蜜を行じ善根を種ゑ、多く諸佛に親近し供養し善知識と相隨ふや。』佛言はく、『若し菩薩摩訶薩色を分別せず、色相を分別せず、色性を分別せず、受想行識を分別せず、識相を分別せず識性を分別せず、眼耳鼻舌身意、色聲香味觸法、眼界乃至意識界も亦是の如し。欲界色界無色界を分別せず、三界相性を分別せず、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至十八不共法を分別せず、檀乃至十八不共法相を分別せず、十八不共法性を分別せず、道種智を分別せず、

【珍寶】聖果のよく三結惡毒を滅し一切煩惱の習を滅し所願を滿足せしむる故に。【清淨】諸過患なく乃至畢竟空にも著せず、不可思議にも著せず、正行にして不邪名なるをいふ。【八】留難に妨げられざるため速に修行すべきを明す留難とは般若を障壊する邪魔のこと

道種智相性を分別せず、一切種智を分別せず、一切種智相を分別せず、一切種智性を分別せず。何を以ての故に。須菩提、色不可思議、受想行識不可思議、乃至一切種智不可思議なればなり。是の如く須菩提、是れを菩薩摩訶薩久しく六波羅蜜を行じ善根を種ゑ、多く諸佛に親近し供養し善知識と相隨ふと名く。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、色甚深なるが故に般若波羅蜜甚深なり、受想行識甚深乃至一切種智甚深なるが故に般若波羅蜜甚深なり。世尊、是般若波羅蜜は珍寶聚なり、須陀洹果寶有るが故に、斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道阿耨多羅三藐三菩提寶有るが故に、四禪四無量心四無色定五神通四念處乃至八聖道分、佛の十力四無所畏四無礙智大慈大悲十八不共法一切智一切種智寶有るが故に。世尊、是般若波羅蜜は清淨聚なり。色清淨なるが故に般若波羅蜜は清淨聚なり。受想行識清淨乃至一切種智清淨なるが故に般若波羅蜜は清淨聚なり。』

(八)須菩提言さく、『甚だ怪しむべし。是般若波羅蜜を說く時多く留難有り。』佛言はく、『是の如し、須菩提、是甚深般若波羅蜜多く留難有り。是事を以ての故に善男子善女人若し是般若波羅蜜を書せんと欲する時は應に疾に書すべし。若し讀誦し思惟し說き正憶念し修行する時も、亦應に疾に修行すべし。何を以ての故に。是甚深般若波羅蜜を、若し書し讀誦し思惟し說き正憶念し修行する時、諸難をして起らしめんと欲せざるが故に。善男子善女人、若し能く一月に書を成ぜんとせば當に勤めて書すべし。若は二月三月四月五月六月七月、若は一歲に書を成ぜんとせば、當に勤めて書すべし。讀誦思惟說正憶念修行を

【九】佛力により留難されざるを明す。

【佛力】現在釋尊の力。

【法應に爾るべく】諸佛は同道にして般若を母とす、般若行者を護るは當然なり。

ば、若し一月に成就することを得、乃至一歳に成就することを得んと欲せば、當に勤めて成就すべし。何を以ての故に。須菩提、此珍寶中多く難の起ることあるが故に。須菩提言さく「世尊、此甚深般若波羅蜜中、惡魔喜んで留難を爲すが故に書せしむることを得ず、讀誦し思惟し說き正憶念し修行せしむることを得ざるや。」佛須菩提に告げたまはく「惡魔は是深般若波羅蜜を留難し、書し讀誦し思惟し說き正憶念し修行することを得ざらしめんと欲すと雖も、亦是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を書し乃至修行することを破壞すること能はず。」

(九)爾時、舍利弗佛に白して言さく「世尊、誰の力の故に、惡魔をして菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜を書し、乃至修行するを留難すること能はざらしむるや。」佛言はく「佛力の故に惡魔は菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜を書し、乃至修行するを留難すること能はず。舍利弗、亦是十方國土現在の諸佛力の故なり。是諸佛は擁護して是菩薩を念ずるが故に、魔をして菩薩摩訶薩を留難し、般若波羅蜜を書成就し乃至修行せざらしむること能はざらしむ。何を以ての故に。十方國土中現在無量無邊阿僧祇の諸佛是菩薩の深般若波羅蜜を書し乃至修行するを擁護し念ずる。法應に爾るべく、亦能く留難を作すこと無ければなり。舍利弗、善男子善女人應に是念を作すべし、我れ是深般若波羅蜜を書し乃至修行するは、皆是れ十方諸佛の力なりと。」舍利弗言さく「世尊、若し善男子善女人有りて是深般若波羅蜜を書し乃至修行するは、皆是れ佛力の故に、當に是人は是れ諸佛の護る所なりと知るべきや。」佛

【佛眼】天眼に佛眼所攝と不攝ある中今佛眼所攝を指す。能く三世十方無量の衆生を見る。

【一〇】滅後般若の流通得益を明す。【南方等】佛東方に出で南西北方に次で行はるべしとす。恰も日月星宿の循行するが如く般若無著心の故に一處に住せず。

言はく、『是の如く是の如し。舍利弗、當に知るべし。若し善男子善女人有りて是深般若波羅蜜を書し乃至修行するは、皆是れ佛力の故に、當に知るべし亦是れ諸佛の護る所なりと。』舍利弗言さく、『世尊、十方現在無量無邊阿僧祇の諸佛皆識り、皆佛眼を以て是善男子善女人の深般若波羅蜜を書する時乃至修行する時を見る。』佛言はく、『是の如く是の如し。舍利弗、十方現在無量無邊阿僧祇の諸佛皆識り、皆佛眼を以て是善男子善女人の深般若波羅蜜を書する時乃至修行する時を見る。舍利弗、是中菩薩道を求むる善男子善女人、若し是深般若波羅蜜を書し受持し讀誦し正憶念し說の如く修行せば、當に知るべし是人は阿耨多羅三藐三菩提に近づくこと久しからずと。舍利弗、善男子善女人是深般若波羅蜜を書し受持し讀誦し乃至正憶念せば、是人は深般若波羅蜜に於て信解相多く、亦是深般若波羅蜜を供養し恭敬し尊重し讚歎し、香華瓔珞乃至幡蓋を以て供養す。舍利弗、諸佛皆識り、皆佛眼を以て是善男子善女人を見る。是善男子善女人の供養の功德、當に大利益大果報を得べし。舍利弗、是善男子善女人は是供養の功德因緣を以ての故に遂に惡道の中に墮せず、乃至阿惟越致地に至るまで終に諸佛を遠離せず。舍利弗、是善男子善女人は是善根の因緣の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで終に六波羅蜜を遠離せず、終に內空乃至無法有法空を遠離せず、終に四念處乃至八聖道分を遠離せず、終に佛の十力乃至阿耨多羅三藐三菩提を遠離せず。

（一〇）舍利弗、是深般若波羅蜜は佛の般涅槃の後、當に南方國土に至るべし。是中の比丘比丘

【佛事を作す】五百歲に至つて後事轉た難く、是時佛利根人は讀誦正憶念し、亦華香供養し、鈍根者は書寫華香等を供養す。其二種久しくして得度すべし。

【盛なる時】佛在時には能く衆疑を斷じて佛法興盛し、法滅を畏れず、滅後五百歲にして正法漸く滅す。

尼優婆塞優婆夷は、當に是深般若波羅蜜を書し、當に受持し讀誦し思惟し說き憶念し修行すべし。是善根の因緣を以ての故に、終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜を增益し、諸佛を供養し恭敬し尊重し讚歎す。漸く聲聞辟支佛乘を以て涅槃を得。舍利弗、是深般若波羅蜜は南方より當に轉じて西方に至るべし。所在の處是中の比丘比丘尼優婆塞優婆夷は、當に是深般若波羅蜜を書し、當に受持し讀誦し思惟し說き正憶念し修行すべし。是善根の因緣を以ての故に、終に惡道の中に墮せず。天上人中の樂を受け、六波羅蜜を增益し、諸佛を供養し恭敬し尊重し讚歎し、漸く聲聞辟支佛乘を以て而して涅槃を得。舍利弗、是深般若波羅蜜は西方より當に轉じて北方に至るべし。所在の處是中の比丘比丘尼優婆塞優婆夷は、當に是深般若波羅蜜を書し、當に受持し讀誦し思惟し說き正憶念し修行すべし。是善根の因緣を以ての故に終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜を增益し、諸佛を供養し恭敬し尊重し讚歎し、漸く聲聞辟支佛佛乘を以て而して涅槃を得。舍利弗、是深般若波羅蜜は是時北方に當に佛事を作すべし。何を以ての故に。舍利弗、我が法盛なる時滅相無し。舍利弗、我れ已に念ず是善男子善女人是深般若波羅蜜を受け乃至修行し、是善男子善女人能く是深般若波羅蜜を書し恭敬し供養し尊重し讚歎し華香乃至幡蓋もてせば、舍利弗、是善男子善女人は是善根の因緣を以ての故に終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜を增益し、諸佛を供養し恭敬し尊重し讚歎し、漸く聲聞辟支佛佛乘を以て而して涅槃を得。何を以ての故に、舍

【北方】北方廣大の故に、又雪山ありて冷の故に藥草能く毒を殺し、毒少ければ衆生柔軟にして信等の五根皆勢力を得、是等の因緣により北方に廣行すと大論はいふ。

【是人】少しく般若を信ずる人。

【薩婆若に應ずる法】大乘法なり。

【一心和合】煩惱薄く慳貪嫉妬瞋恚なき故に相讒謗せずして和合す。

利弗、我れ佛眼を以て是人を見、我れ亦稱譽し讃歎す。十方國土の中の無量無邊阿僧祇の諸佛も亦佛眼を以て是人を見、亦稱譽し讃歎すればなり。」舍利弗佛に白して言さく、「世尊、是深般若波羅蜜は後時當に北方に在りて廣く行はるべきや。」佛言はく、「是の如く是の如し。舍利弗、是深般若波羅蜜は後時北方に在りて當に廣く行はるべし。舍利弗、後時北方に於て、是善男子善女人、若は是深般若波羅蜜を聞き、若は書し受持し讀誦し思惟し說き正憶念し、說の如く修行せば、當に知るべし、是善男子善女人は久しく大乘心を發し、多く諸佛を供養し善根を種ゑ、久しく善知識と相隨ふ。」舍利弗佛に白して言さく、「世尊、後時北方に當に幾所の善男子善女人の佛道を求むる有りて、深般若波羅蜜を書し乃至說の如く修行すべきや。」佛舍利弗に告げたまはく、「後時北方に多く佛道を求むる善男子善女人有りと雖も、少く是深般若波羅蜜を聞きて、沒せず驚かず怖かず畏れざるもののあるのみ。何を以ての故に。是人は多く諸佛に親近に供養し、多く諸佛に諮問すればなり。是人は必ず能く般若波羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を具足し、四念處を具足し、乃至十八不共法を具足せん。舍利弗、是善男子善女人は善根純熟の故に能く多く阿耨多羅三藐三菩提を爲さん。何を以ての故に。我れ今是善男子善女人の爲に薩婆若に應ずる法を說く。過去の諸佛も亦是善男子善女人の爲に薩婆若に應ずる法を說けり。此因緣を以ての故に、是人は後に生るる時續いて阿耨多羅三藐三菩提心を得、亦他人の爲に阿耨多羅三藐三菩提の法を說く。是善男子善女人皆一心に和合す。魔若は魔民阿耨多羅

【大法喜法樂】無量世來佛法を愛し深く實法に著し、信慧力多きが故に般若をきき、大慈大悲を得。
【多人】多數衆生を敎化するをいふ。
【二】諸佛行者の立願を知見し給ふを明す。
【爲す所の心大】行者佛の知見を聞き過去來の誓願事を知り、信して精進を加へ福德を行ふこと。
【大施】疑悔なき大心を以て內外一切を施捨するをいふ。
【法如相】法性眞如實際の一切をいふ。
【衆生の行】諸衆生の心所行業果報因緣等。

三藐三菩提心を沮壞すること能はず。何に況んや惡行人深般若波羅蜜を行ずる者を毀呰し能く其阿耨多羅三藐三菩提心を壞せんや。舍利弗、是菩薩道を求むる諸の善男子善女人は是深般若波羅蜜を聞きて大法喜法樂を得、亦多人を善根に立て、阿耨多羅三藐三菩提を爲す。

（二）「是善男子善女人は我が前に於て誓願を立つ。我れ菩薩道を行ずる時、當に無數百千萬億の衆生を度し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、示敎利喜し乃至阿惟越致地に受記せしむべしと。我れ其心を知り、我れ亦隨喜す。是善男子善女人は亦過去諸佛の前に於ても誓願を立て、我が菩薩道を行ずる時、當に無數百千萬億の衆生を度し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、示敎利喜し乃至阿惟越致地に受記せしむべしと。諸の過去佛も亦其心を知り而して隨喜せり。舍利弗、是諸の善男子善女人爲す所の心大、受くる所の色聲香味觸法も亦大、亦能く大施し、能く大施し已りて大善根を種ゑ、大善根を種ゑ已りて大果報を得、衆生を攝せんが爲の故に身を受け、能く衆生中に於て內外所有の物を捨つ。是善根の因緣を以て發願して他方國土に生ぜんと欲す。現在の諸佛の深般若波羅蜜を說く處、諸佛の前に於て、是深般若波羅蜜を聞き已りて、亦彼に於て百千萬億の衆生を示敎し利喜し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。」舍利弗佛に白して言さく、「希有なり世尊、佛は過去未來現在法に於て法として知らざる無く、法如相として知らざる無く、衆生の行、事として知らざるなし。今佛は悉く過去の諸佛及び菩薩聲聞を知り、亦今現在十方諸佛國土の菩

【六波羅蜜に應ずる深經】般若經等

【魔事品】行者の被る留難を魔事といひ、之を細說するに名く。

【一】般若の解說書寫憶念等の態度に起る障難を明す。

【卽生】疾に說法を始むるなり、說かざれば聽者は法師の怖畏、不知若しくは過失とし、供養なき爲又は聽衆を輕侮するため等の因緣聽者の心を壞する故、樂說せざるを以て魔事となす。

薩及び聲聞をも知り、亦未來の諸佛及び菩薩聲聞をも知る。世尊、未來世に善男子善女人有りて勤めて六波羅蜜を求め、受持し讀誦し乃至修行せば、得有りや不得有りや。」佛舍利弗に告げたまはく「若し善男子善女人一心に精進して勤求せば、當に六波羅蜜に應ずる諸經を得べし。」舍利弗佛に白して言さく「善男子善女人の是の如く勤行する者、當に是れ六波羅蜜に應ずる深經を得べきや。」佛舍利弗に語りたまはく「是善男子善女人は、是六波羅蜜に應ずる深經を得。何を以ての故に。善男子善女人は阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、衆生の與めに、說法し示敎し利喜し六波羅蜜に住せしむ。是因緣を以ての故に、是善男子善女人は後身に轉生して、易く六波羅蜜に應ずる深經を得、得已りて六波羅蜜に說く所の如く修行し精勤して息まず、乃至佛國土を淨め衆生を成就して阿耨多羅三藐三菩提を得。」

魔事品第四十六

(一)爾時慧命須菩提佛に白して言さく「世尊、是善男子善女人は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、六波羅蜜を行じ、衆生を成就し佛國土を淨む。佛は已に讚歎して其功德を說く。世尊、云何が是善男子善女人は佛道を求めて諸の留難を生ずるや。」佛須菩提に告げたまはく「樂說辯卽生せざれば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり。」須菩提言さく「世尊、何の因緣の故に、樂說辯卽生せざれば是れ菩薩の魔事なりや。」佛言はく「菩薩摩訶薩有りて、

【魔事】魔は奪命の義、煩惱、五蘊、死、天子の四ありとす。
【卒に起る】濫說するは法に著し憍慢に基き法を輕んずるに至るを以て難とす。
【偃蹇】橫臥驕傲なり、我心憍慢心より法を敬はざるを云ふ。
【戲笑する】輕心瞋心により法を敬はざるを云ふ。
【亂心】散漫心にて心を一に攝せず
【和合せず】種種因緣不和合なり。
【轉相形笑】互に笑ふこと。

般若波羅蜜を行ずる時、六波羅蜜を具足することを難ず。是因緣を以ての故に、樂說辯卽生せざれば是れ菩薩の魔事なり。復次に須菩提、樂說辯卒に起らば、當に知るべし、亦是れ菩薩の魔事なり。」「世尊、何の因緣の故に、樂說辯卒に起らば、復是れ魔事なりや。」佛言はく、「菩薩摩訶薩、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を行じ、樂說法に著す。是因緣を以ての故に、樂說辯卒に起らば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり。復次に須菩提、是般若波羅蜜經を書する時、偃蹇傲慢なれば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり。復次に須菩提、是經を書する時、戲笑亂心せば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり。復次に須菩提、若し是經を書する時、輕笑して敬せざれば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり。復次に須菩提、若し是經を書する時、心亂れて定まらざれば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり。復次に須菩提、是經を書する時、各各和合せざれば、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。復次に須菩提、善男子善女人は是念を爲さく、「我れ是經中に滋味を得ざれば、便ち棄捨し去らん」當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。復次に須菩提、般若波羅蜜を受持し讀誦し說き、若は正憶念する時、偃蹇傲慢なれば、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。復次に須菩提、若し般若波羅蜜經を受持する時、親近し正憶念する時、轉相形笑せば、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。復次に須菩提、若し般若波羅蜜經を受持し讀誦し、正憶念し、修行する時、共に相輕蔑せば、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。若し般若波羅蜜を受持し讀誦し乃至正憶念する時、心を散亂せば、當に知るべし、是

【記無し】新學信薄きが故に佛記を與へざるを怒る。

【法位】慧眼無生忍を得るをいふ。

【名字なし】總じて成佛すると云はるるも何某として別說されざるなり

【念を起す所の時】般若に反する念を起す時の多少に從ひ一念に一劫その罪を償ふ。

【補めて】辛うじて人身を得るに至りての意。

を菩薩の魔事と爲す。若し般若波羅蜜を受持し讀誦し、乃至正憶念する時、心和合せざれば、當に知るべし、是れを菩薩の魔事と爲す。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、世尊は善男子善女人是念を作す、我れ經中に滋味を得ざれば便ち棄捨し去らん、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲すと說きたまふ。世尊、何の因緣の故に、菩薩は經中に滋味を得ざれば便ち棄捨し去るや。」佛言はく、「是菩薩摩訶薩は前世に久しく般若波羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を行ぜず。是人は是般若波羅蜜を說くを聞きて、便ち座より起ち、是念を作して言はく、『我れ般若波羅蜜の中に於て記無し』と、心淸淨ならず、便ち座より起ち去る。當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故に授記を與へざれば、是般若波羅蜜を說くを聞く時、便ち座より起ち去るや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し菩薩未だ法位の中に入らざれば、諸佛は阿耨多羅三藐三菩提の記を與授せず、復次に須菩提、般若波羅蜜を說くを聞く時、菩薩は是念を作す、我れ是中に名字無しと心淸淨ならず、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。」須菩提言さく、「何の因緣の故に、是深般若波羅蜜の中に、是菩薩の名字を說かざるや。」佛言はく、「未受記の菩薩は諸佛名字を記せず。復次に須菩提、是菩薩摩訶薩は是念を作す、『是般若波羅蜜の中に我が生處の名字、若は聚落城邑無し』と。是人は般若波羅蜜を聽聞することを欲せず、卽ち會中より起ち去る、是人念を起す所の時の如く、念念に一一劫を却き、補めて當に更に勤精進して阿耨多羅三藐三菩提を求むべし。

【二】般若を捨て小乘を取るの魔事たるを明す。

【餘經】小乘三藏等。

【四念處等】小乘所說の內容、三十七道品は般若にも說かるゝも、一切衆生の爲にす、然るに小乘は方便なく小乘證の爲の故にのみ說くなり。

【狗等】狗は主の爲に守る。主に食を求め客奴に求むべからず、世出世法を成就せんとせば般若に求むべし。狗今行者に喩ふ。

【黠】智慧聰明なり。

(二)復次に須菩提、菩薩餘經を學して般若波羅蜜經を棄捨せば、終に薩婆若に至ること能はず。善男子善女人は其根を捨てて、而かも枝葉に攀づと爲す。當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ餘經、善男子善女人の學する所、薩婆若に至ること能はざるや。』佛言はく、『是れ聲聞の應に行ずべき所の經、謂ゆる四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分空無相無作解脫門なり。善男子善女人は是中に住して、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果を得、是を聲聞の所行、薩婆若に至ること能はずと名く。是の如きの善男子善女人は、般若波羅蜜を捨てて是餘經に親近す。何を以ての故に。須菩提是般若波羅蜜の中、諸の菩薩摩訶薩を出生し、世間出世間法を成就すればなり。須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を學する時、亦世間出世間法をも學す。須菩提、譬へば狗の大家に從ひて食を求めず、反つて作務者に從ひて索むるが如し。是の如く須菩提、當來世に善男子善女人有りて、深般若波羅蜜を捨て而して枝葉に攀ぢ、聲聞辟支佛の應に行ずべき所の經を取る。當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。須菩提、譬へば人有りて、象を見ることを得んと欲し、見已りて反つて其跡を觀るが如し。須菩提、汝意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく、『不黠と爲す。』佛言はく、『諸の佛道を求むる善男子善女人も亦復是の如く、深般若波羅蜜を得て棄捨し去り、聲聞辟支佛の應に行ずべき所の經を取る。當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。須菩提、譬へば人の大海を見んと欲して、反つて牛跡の水を求め、是念を爲すが如し、「大海の水能

く此れと等しきや不や」と。須菩提、汝が意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく、『不黠と爲す。』佛言はく、『當來世に佛道を求むる善男子善女人有りて、亦是の如く深般若波羅蜜を得て棄捨し去り、聲聞辟支佛の應に行ずべき所の經を取る。當に知るべし、是も亦菩薩の魔事なり。須菩提、譬へば工匠、若は工匠の弟子、帝釋の勝殿を擬作せんと欲して、日月の宮殿を換則とするが如し。須菩提、汝が意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく、『不黠と爲す。』『是の如く須菩提、當來世に福德薄き善男子善女人の佛道を求むる者有りて、是深般若波羅蜜を得て便ち棄捨し去り、聲聞辟支佛の應に行ずべき所の經中に於て薩婆若を求む。須菩提、汝が意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく、『不黠と爲す。』佛言はく、『當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり。須菩提、譬へば人有りて轉輪聖王を見んと欲し、見て而して識らず、後に諸の小國王を見て、其相貌を取りて、是の如く轉輪聖王と此れと何ぞ異らんと言ふが如し。須菩提、汝が意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく、『不黠と爲す。』『須菩提、當來世に福德薄き善男子善女人の佛道を求むる者有りて、是深般若波羅蜜を得て棄捨し去り、聲聞辟支佛の應に行ずべき所の經を取り、持つて薩婆若を求む。須菩提、汝が意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく、『不黠と爲す。』『當に知るべし、是も亦菩薩の魔事なり。須菩提、譬へば飢人の百味の食を得て、棄捨し去りて、反つて六十日穀飯を食ふが如し、須菩提、汝が意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく、『不黠と爲す。』

【百味】上妙の美膳。

【六十日穀】六十日程にて早熟する米の一種にして味粗なり。

【三】般若書寫讀誦修行の魔事を明す。

【法事の如くならず】般若實相の如くならず、定相を執するをいふ。

佛言はく『當來世に佛道を求むる善男子善女人有りて、深般若波羅蜜を聞くことを得て棄捨し去り、聲聞辟支佛の應に行ずべき所の經を取り、持つて薩婆若を求む。汝が意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく『不黠と爲す。』『當に知るべし、是も亦菩薩の魔事なり。須菩提、譬へば人の、無價摩尼珠を得て、反りて持つて水精珠に比するが如し。須菩提、汝が意に於て云何、是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく『不黠と爲す。』佛言はく『當來世に佛道を求むる善男子善女人有りて、深般若波羅蜜を聞くことを得て棄捨し去り、聲聞辟支佛の應に行ずべき所の經を取りて、持つて薩婆若を求む。是人を黠と爲すや不や。』須菩提言さく『不黠と爲す。』『當に知るべし、是れも亦菩薩の魔事なり。』

(三)復次に須菩提、是佛道を求むる善男子善女人、是深般若波羅蜜を書する時、樂說することと法事の如くならずば、般若波羅蜜を書成することを得ず。所謂色聲香味觸法を樂說し、持戒禪定無色定を樂說し、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を樂說し、四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提を樂說す。何を以ての故に。須菩提、是般若波羅蜜の中に樂說相無ければなり。須菩提、般若波羅蜜は不可思議相なり、般若波羅蜜は不生不滅相なり。般若波羅蜜は不垢不淨相なり。般若波羅蜜は不亂不散相なり。般若波羅蜜は無說無示相なり。般若波羅蜜は無言無義相なり。般若波羅蜜は無所得相なり。何を以ての故に。須菩提、般若波羅蜜の中に是諸法無ければなり。須菩提、若し善男子善女人の菩薩道を求むる者有りて、是般若波

【諸法】前の色聲戒定、六度等の法をいふ。

【無法】定相なく書すべからざる無法の故に般若を書成すべし然るに無にして書成せざるを般若とせば無に滯る故魔事なり。

【國土の念】この國貧にして不安、彼の國土豐樂なりとする類。

【念】般若を捨てて師を助けんとする如きをいふ。

【旃陀羅】穢惡の賤民なり。

羅蜜經を書する時、是諸法を以て心を散亂せば、當に知るべし、是も亦菩薩の魔事なり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜は書す可きや。』佛言はく、『書す可からず、何を以ての故に。般若波羅蜜は自性無きが故に。禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜、乃至一切種智自性無きが故に、若し自性無ければ、是を名けて法と爲さず、無法、無法を書すること能はざるなり。須菩提、若し菩薩道を求むる善男子善女人、是念を作し、無法は是れ深般若波羅蜜なりとせば、當に知るべし、即ち是れ菩薩の魔事なり。』『世尊是菩薩道を求むる善男子善女人は、字を用て般若波羅蜜を書し、自ら我れ是般若波羅蜜を書すと念じ字を以て般若波羅蜜に著す。當に知るべし、亦是菩薩の魔事なり、何を以ての故に。世尊、是般若波羅蜜は文字無く、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜も文字有ること無し。世尊、色文字無し、受想行識文字無し、乃至一切種智も文字無ければなり。世尊、若し菩薩道を求むる善男子善女人、文字無くして般若波羅蜜に著し、乃至文字無くして一切種智に著せば、當に知るべし、是も亦菩薩の魔事なりと。讀誦し說き正憶念し、說の如く修行するも亦是の如し。復次に須菩提、佛道を求むる善男子善女人の是般若波羅蜜を書する時、國土の念起り、聚落の念起り、城邑の念起り、方の念起り、若は其師を誹毀するを聞きて念を起し、若は父母兄弟姉妹諸餘の親里を念じ、若は賊を念じ、若は旃陀羅を念じ、若は衆女を念じ、若は婬女を念ず、是の如き等の種種の諸餘の異念留難せば、惡魔復其念を益して、般若波羅蜜を書するを破壞し、

【諸餘の深經】聲聞經の類、先きに餘經といふ如し。

讀誦し說き正憶念し說の如く修行するを破壞す。須菩提、當に知るべし、是も亦菩薩の魔事なり。復次に須菩提、佛道を求むる善男子善女人、名譽恭敬布施供養、謂ゆる衣服飲食臥牀病藥種種の樂具を得て、善男子善女人は是般若波羅蜜經を書し、受し讀誦し乃至正憶念する時、是事に受着せば、般若波羅蜜を書成し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是も亦菩薩の魔事なり。復次に須菩提、佛道を求むる善男子善女人の般若波羅蜜を書し乃至說の如く修行する時、惡魔は方便もて諸餘の深經を持つて是菩薩摩訶薩に與ふ。方便力有る者は應に惡魔の與ふる所の諸餘の深經に貪着すべからず。何を以ての故に。是經は人をして薩婆若に至らしむること能はざるが故に。是中に方便無き菩薩摩訶薩は、是諸餘の深經を聞きて便ち深般若波羅蜜を捨す。須菩提、我れ是般若波羅蜜の中に於て、諸の菩薩摩訶薩の方便道を廣說す。諸の菩薩摩訶薩は當に是中より求むべし。須菩提、若し善男子善女人、菩薩道を求めて是深般若波羅蜜を捨し、魔の與ふる所の聲聞辟支佛の深經の中に於て方便道を求めば、當に知るべし、亦是れ菩薩の魔事なり。」

【兩過品】聽者說者の心和合せざる過失を魔事なりとす。

【一】說者聽者一致せざる相を明す。

【布施等】利養を重んずるをいふ。

【遠離】身空閑に住する最近三里、心五蓋五欲を離るるをいふ。

摩訶般若波羅蜜經　卷第十四

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

兩過品第四十七

（一）『復次に須菩提、聽法人般若波羅蜜を書持し、讀誦し問義し正憶念せんと欲するも、說法人懈惰して爲に說くことを欲せざれば、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。須菩提、說法の人、心懈惰せず、般若波羅蜜を書持せしめんと欲するも、聽法者之を受くることを欲せず、二心和せざれば、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、聽法人般若波羅蜜を書持し讀誦し乃至正憶念せんと欲するも、說法者他方に至らんと欲せば、當に知るべし、是を魔事と爲す。須菩提、說法人般若波羅蜜を書持せしめんと欲するも、聽法者他方に至らんと欲し、二心和せざれば、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法人布施、衣服、飮食、臥具、醫藥、資生の物を貴重し、聽法人少欲知足にして遠離を行じ、念を攝して精進一心智慧を行じ、兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜を書持し讀誦し問義し正憶念することを得ず、當に知るべし是を魔事と爲す。須菩提、說法人少欲知足にして遠離を行じ、念を攝して精進一心智慧を行じ、聽法者布施、衣服、飮食、臥具、醫藥、

【頭陀】修治と譯す。戒の莊嚴たるべき衣食住の條件。
【阿蘭若】寂靜處に住する身遠離行。
【納衣】糞掃衣を著するなり。
【一坐食】一日一齋食をなす。
【節量食】暴食せず行道を保つが故に食を節す。
【中後不飲漿】午后漿菓蜜等を飲用せざること。
【塚間住】塚間死尸散亂し悲泣の聲あり、無常觀じ易きを以て住す。
【樹下住】佛の誕生等皆樹下に在るを念じ、屋舍の欲を治するために樹下に住す。
【露地住】樹下にも雨漏鳥屎等あるを以て空曠の地に止住す。
【常坐不臥】坐は食の消化と氣臭の調和とによく睡魔

資生の物を貴重し、兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜を書持し、讀誦し問義し正憶念する事を得ず、當に知るべし是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者十二頭陀を受く、一には作阿蘭若、二には常乞食、三には納衣、四には一坐食、五には節量食、六には中後不飲漿、七には塚間住、八には樹下住、九には露地住、十には常坐不臥、十一には次第乞食、十二には但三衣なり、聽法人十二頭陀を受けず、阿蘭若を作さず乃至但三衣を受けず、兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜を書持し、讀誦し問義し正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。須菩提、聽法者十二頭陀を受け、阿蘭若を作し乃至但三衣を受くるも、說法人十二頭陀を受けず、阿蘭若を作さず乃至但三衣を受けず、兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜を書持し、讀誦し問義し正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。

(二〇)復次に須菩提、說法者信有り善有り、深般若波羅蜜を書し乃至正憶念せんと欲するも、聽法者信無く戒を破り惡行し、深般若波羅蜜を書受し乃至正憶念することを欲せざれば、當に知るべし、是を魔事と爲す、須菩提、聽法者信有り善有り持戒し、說法者信なく戒を破り惡行し、兩ながら和合せざれば當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者能く一切施し心、慳惜せざるも、聽法者慳惜して、捨てざれば當に知るべし、是を魔事と爲す。須菩提、聽法者一切能く施して、心慳惜せざるも、說法者法を慳みて施さず、兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜を書持し乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、

是を魔事と爲す。復次に須菩提、聽法者說法人に衣服、飲食、臥具、醫藥、資生の所須を供養せんと欲するも、說法者之を受くることを欲せざれば、當に知るべし、是を魔事と爲す。須菩提、說法者聽法人に衣服、乃至資生の所須を供給せんと欲するも、聽法者之を受くることを欲せず、兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜を書持し乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者悟易きも、聽法人闇鈍なれば、當に知るべし、是を魔事となす、須菩提、聽法者悟り易きも、說法人闇鈍にして、兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜を書持し乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者十二部經次第義、所謂修多羅乃至優婆提舍を知るも、聽法者十二部經次第義を知らざれば、當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法人十二部經次第義を知らず、說法人十二部經次第義を知らず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提說法者六波羅蜜を成就するも、聽法人六波羅蜜を成就せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す、聽法者六波羅蜜有るも、說法人六波羅蜜無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者六波羅蜜に於て方便力有るも、聽法人六波羅蜜に於て方便力無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法者六波羅蜜に於て

を去り心を攝して法を觀ずるに適す。

【次第乞食】貧富を選ばざるなり。

【但三衣】安陀會僧伽梨欝多羅僧の三衣を用ふるのみにして他の衣服を蓄へ、或はなきに異る。

【二】更に兩不和合の相を廣說す。

【說法人闇鈍】誦經師にして解義に堪能ならざるもの。

【貪欲等】五蓋のこと。

【掉】掉擧、散亂して治らざること。

【苦を盡して】三惡道を畏れてこれを解脫するをいふ、大乘を捨して小乘果を期するなり。

方便力有るも、說法人六波羅蜜に於て方便力無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者陀羅尼を得るも、聽法人陀羅尼無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法者陀羅尼を得るも、說法者陀羅尼無く、兩ながら和合せざれば深般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず、當に知るべし。是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者般若波羅蜜を書持し讀誦し、乃至正憶念せしめんと欲するも、聽法人般若波羅蜜を書持し讀誦し、乃至正憶念せんと欲せず、兩ながら和合せざれば般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法者般若波羅蜜を書し讀誦し、說かんと欲するも、說法者般若波羅蜜を書せしむることを欲せず、乃至說かしむることを欲せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者、貪欲瞋恚睡眠掉悔疑を離るるも、聽法人、貪欲瞋恚睡眠掉悔疑あらば、當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法者、貪欲瞋恚睡眠掉悔疑を離るるも、說法人、貪瞋恚睡眠掉悔疑ありて、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是れを魔事と爲す。復次に須菩提、是深般若波羅蜜を書し乃至正憶念する時、或は人有り、來りて三惡道中の苦劇を說く。「汝何ぞ是身に於て苦を盡して速に涅槃に入らざるや、何ぞ是阿耨多羅三藐三菩提を用ひんや。」と、爲に兩ながら和合せざれば、深

【是事も】諸天樂も盡變を免れざれば速に須陀洹等を得よとは又小果を期するなり。

【汝能く我意に隨はば】去住一切說者の意の趣くところに隨はしめんとす。

般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、是深般若波羅蜜を書し受持し讀誦し說き、正憶念する時、或は人有り、來りて四天王諸天を讚じ、三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他家自在天梵天乃至非有想非無想天を讚じ、初禪乃至非有想非無想定を讚じ、是言を爲さく「善男子、欲界中五欲快樂を受く、色界中禪を受け樂を生ず。無色界中寂滅樂を受く。是事も亦無常苦空無我變相盡相散相離相滅相なり。汝何ぞ是身中に於て、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を取らざるや、何ぞ是世間生死中種種の苦を受けて阿耨多羅三藐三菩提を求むることを用ゐんや。」と。爲に兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者一身に累無く、自在無礙なるも、聽法人多く人衆を將ゐ。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法者一身に累無く、自在無礙なるも、說法者多く人衆を率ゐ、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者是の如く言はく「汝能く我が意に隨はば、當に汝に般若波羅蜜を與へ、書し讀誦し說き正憶念せしむべし。若し我意に隨はざれば、則ち汝に與へず。」と。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し讀誦し說き、正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、聽法者追隨して其意の如きを得んと欲するも、說法者聽かず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正

【是因緣】財利の因緣。

憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者財利を得んと欲するが故に、般若波羅蜜を與へ、書持し乃至正憶念せしむるも、聽法者是因緣を以ての故に從ひ受くることを欲せず。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法者財利の爲の故に、般若波羅蜜を書し、讀誦し說かんと欲するも、說法者是因緣を以ての故に與ふることを欲せず。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し讀誦し說くことを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者他方危命の處に至らんと欲するも、聽法者隨ひ去ることを欲せず。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法者他方危命の處に至らんと欲するも、說法者去ることを欲せず。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者他方饑餓穀貴無水の處に至らんと欲するも、聽法者隨ひ去ることを欲せず。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。聽法者他方饑餓穀貴無水の處に至らんと欲するも、說法者去ることを欲せず。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者他方豐樂の處に至らんと欲し、聽法者隨從し去ることを欲するも、說法者言はく「善男子、汝利益の爲の故に我に追隨す。汝善く自ら思惟せよ。若は得若は不得、後悔せしむる

【賊怖等】遠國に至る途中の多難を擧ぐ。

【三】惡魔變化して妨礙するを說く。

【比丘の形像】大沙門の形を作して大重威德あり、多くの經卷を持ち來りて誘惑す。

【諸の比丘等】鈍根菩薩は邪見を生じ、利根未受記の菩薩は疑を生ず。

こと無かれ。」と。是少因緣を以ての故に、雨がなら和合せず、聽法者之を聞き心に厭ひ、是念を作さく、「是を拒逆と爲す、我と相隨ふことを欲せざるなり」と。便即ち止りて去らず。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者曠野賊怖旃陀羅怖獵師怖惡獸毒蛇怖を過ぎんと欲し、聽法者隨逐して去らんと欲するも、說法者言はく、「善男子、汝何を用て彼に到るや。彼の中に多く諸の怖、賊怖乃至毒蛇怖有り。」聽法者之を聞き、其般若波羅蜜を與へ書持し乃至正憶念することを欲せざるを知り、心に厭ひ追隨することを欲せず。是少因緣を以ての故に、兩ながら和合せざれば、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、說法者多く檀越有り、數往きて問訊す。是因緣を以ての故に聽法者に語る、「我因緣有り應に往きて彼に到るべし。」聽法人其意を知り便ち止りて去らず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。

(三)復次に須菩提、惡魔比丘の形像を作して來り、方便もて般若波羅蜜を破壞し、書持し讀誦し說き正憶念せしむることを得ず。「須菩提佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故に惡魔、比丘の形像を作して、方便もて般若波羅蜜を破壞し、書持し乃至正憶念せしむることを得ざるや。」佛言はく、「惡魔、比丘の形像を作して來り、善男子善女人の心を壞し、般若波羅蜜を遠離せしめ、是言を作さく、「我が說く所の如きの經は即ち是れ般若波羅蜜なり。此經は般若波羅蜜に非ず。」須菩提、是中諸の比丘を破壞する時、未受記の菩薩有り、便ち疑惑に

【般若に似たる等】六度に相似せるものを以て誘惑するをいふ。

【菩薩貪著】小菩薩は佛身を見るべからず、魔の佛妙身を化作するに著して眞道に遠ざかるなり。

墮す。疑惑に墮するが故に深般若波薩蜜を書するを得ず、受けず持せず乃至正憶念を作さず。兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜を書成し乃至正憶念することを得ず、當に知るべし。是を魔事と爲す。復次に須菩提。惡魔比丘身を作して菩薩の所に到り、是の如く言はく、「若し菩薩般若波羅蜜を行ぜんには、實際に於て證を作し、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を得よ。」と。是を以て和合せざれば、般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、是深般若波羅蜜を說く時、多く魔事有りて起り、般若波羅蜜を留難す。是を魔事と爲す。菩薩摩訶薩應に覺知し、知り已りて遠離すべし。須菩提言さく、「世尊、何等か是れ魔事、菩薩を留難し、應に覺知し、知り已りて遠離すべきや。」佛言はく、「般若波羅蜜に似たる諸の魔事起る。禪那波羅蜜に似、毘梨耶波羅蜜に似、羼提波羅蜜に似、尸羅波羅蜜に似、檀那波羅蜜に似たる魔事起る、菩薩當に覺知し、知り已りて遠離すべし。復次に須菩提、聲聞辟支佛の應に行ずべき所の經、是れ菩薩摩訶薩の魔事なり。應に覺知し、知り已りて之を遠離すべし。復次に須菩提、內空外空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、空無相無作解脫門、是法を用て須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を得。是の如き等の諸經を、惡魔比丘の形像を作して、方便もて菩薩摩訶薩に與ふ。是を以て和合せざるが故に、深般若波羅蜜を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復た次に須菩提、惡魔、佛身を作し金色の丈光もて、菩薩の所に至る。是菩薩貪著す。貪著の因緣の故に薩婆若を耗減す。

【四】般若尊勝なるが故に魔障留難起ることを譬説す。

是不和合を以ての故に、般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、惡魔佛身及び比丘僧と作りて菩薩の前に到る。是菩薩貪著の意を起し是念を作さく「我れ當來世に於ても亦た當に是の如く比丘僧に從ひ說法を爲すべし」と。是菩薩魔身に貪著するが故に、薩婆若を耗減し般若波羅蜜を書成することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲す。復次に須菩提、惡魔化して無數百千萬億の菩薩と作り、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、善男子善女人に指示す。善男子善女人見已りて貪著す。貪著するが故に薩婆若を耗減す。深般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲す、何を以ての故に、是深般若波羅蜜中色有ること無く、受想行識有ること無く、乃至阿耨多羅三藐三菩提無ければなり。須菩提、是般若波羅蜜若し色有ること無く、乃至阿耨多羅三藐三菩提無ければ、是中に佛無く聲聞無く辟支佛無く菩薩無し。何を以ての故に。一切諸法自性空なるが故に。

(四)復次に須菩提、善男子善女人、是深般若波羅蜜を書し受け讀誦し說き正憶念する時、多く留難の起るあり。須菩提、譬へば閻浮提中の珍寶金銀瑠璃硨磲碼碯珊瑚等難多く賊多きが如し。是の如く須菩提、善男子善女人、是深般若波羅蜜を書し乃至正憶念する時、多くの怨賊有り多く留難起る。須菩提佛に白して言さく、「是の如く世尊、閻浮提中の珍寶金銀瑠璃硨磲碼碯珊瑚等賊多く難多し。世尊、善男子善女人も亦是の如く、深般若波羅蜜を書し乃

至正憶念する時、多く留難起り、多く魔事行り、何を以ての故に。是愚癡人魔の使する所と爲り、善男子善女人、是深般若波羅蜜を書し乃至正憶念する時、破壞して遠離せしむ。世尊、是愚癡人智少く慧少し、是善男子善女人、深般若波羅蜜を書し乃至正憶念する時、破壞して遠離せしむ。是愚癡人心に大法を樂まず。是故に是深般若波羅蜜を書せず、受けず、讀まず、誦せず、正憶念せず、說の如く修行せず、亦他人を壞して、深般若波羅蜜を書し乃至說の如く修行することを得ざらしむ。」佛言はく、「是の如く是の如し。須菩提、新に大乘の意を發す善男子善女人、魔の使する所と爲り、善根を種ゑず、諸佛を供養せず、善知識に隨はざるが故に、深般若波羅蜜を書せず、乃至正憶念せず、而も留難を作す。是善男子善女人、智少く慧少く心に大法を樂まず。是故に深般若波羅蜜を書し乃至正憶念すること能はず。魔事起るが故に。須菩提、若し善男子善女人能く是深般若波羅蜜を書し乃至正憶念する時、魔事起らず、能く禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜を具足し能く四念處乃至一切種智を具足す。須菩提、當に知るべし、佛力の故に是善男子善女人能く是深般若波羅蜜を書し乃至正憶念し、亦た能く禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜を具足し、內空乃至無法有法空を具足し、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智を具足すと。須菩提、十方現在無量無邊阿僧祇の諸佛も亦た善男子善女人を助けて、是深般若波羅蜜を書し乃至正憶念することを得しむ。十方阿惟越致の諸菩薩摩訶薩も、亦た是善男子善女人の深般若波羅蜜を書し乃至正憶念するを擁護し祐助す。」

【佛母品】般若を母に喩へ、子の母の恩を思ふが如く般若諸佛の母なるが故に、佛は恩を知り慈悲の故に行者を守護することを明す。

【一】般若諸佛を生じ世間を示すが故に受持すべきを説く。

【虺】まむしの一種。

【佛眼を以て等】諸佛は寂滅相を行ずと雖も、衆生を憐愍する故に、恩分を知る故に、慈悲心を用て常に念じ、佛眼を用て常に見、般若行者を守護す。

佛母品第四十八

（一）佛須菩提に告げたまはく、「譬へば母人子有るが如し。若は五若は十若は二十若は三十若は四十若は五十若は百若は千、母中に病を得んに、諸子各各勤めて救療を求め、是念を爲さく、『我等云何が母をして安隱にして諸の患苦不樂の事無からしめん。風寒冷熱蚊虻蛇虺母身を侵犯す。是れ我等の憂へなり。』（一）其諸子等常に樂具を求めて其母を供養す。所以は何ん。我等を生育し我に世間を示せばなり。是の如く須菩提、佛常に佛眼を以て是深般若波羅蜜を視る。何を以ての故に。是深般若波羅蜜能く世間相を示せばなり。十方現在の諸佛も亦た佛眼を以て常に是深般若波羅蜜を視る。何を以ての故に。是深般若波羅蜜能く諸佛を生じ、能く諸佛に一切種智を與へ、能く世間相を示せばなり。是を以ての故に諸佛常に佛眼を以て是深般若波羅蜜を視、又般若波羅蜜を以て能く禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜を生じ、能く内空乃至無法有法空を生じ、能く四念處乃至八聖道分を生じ、能く佛の十力乃至一切種智を生ず。是の如く般若波羅蜜は能く須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛諸佛を生ず。須菩提、所有諸佛已に阿耨多羅三藐三菩提を得、今得、當に得べし。皆深般若波羅蜜の因縁に因るが故に得るなり。須菩提、若し佛道を求むる善男子善女人は、當に是深般若波羅蜜を書し乃至正憶念すべし、諸佛常に佛眼を以て是人を視る。須菩提、是菩薩道を求

【二】須菩提四問して佛その義を明す。

【是甚般若等以下】以下三答、第三般若より諸佛生ずるに答へざるは、般若諸佛を生ずると義同じき故なり。

【諸法の因緣】法性の性自性なく衆緣より生ずるを見る。

【五陰の破を示さず】五衆をいふは破壞生滅等の相を示すに非ずして、大乘法空にして破壞なきを示す。

むる善男子善女人をば、諸の十方佛常に守護して、阿耨多羅三藐三菩提を退せざらしむ。」

（二）須菩提佛に白して言さく「世尊の所說の如く般若波羅蜜能く諸佛を生じ能く世間相を示す。世尊、般若波羅蜜云何が能く諸佛を生じ、云何が能く世間相を示し、云何が諸佛般若波羅蜜より生じ、云何が諸佛世間相を說きたまふや。」佛須菩提に告げたまはく「是深般若波羅蜜中佛の十力乃至十八不共法一切種智を生ず。須菩提、是諸法の因緣を得るが故に名けて佛と爲す。須菩提、是を以ての故に深般若波羅蜜能く諸佛を生ず。須菩提、諸佛五陰を說く。是れ世間相なり。」須菩提言さく「世尊、云何が深般若波羅蜜中五陰相を說き、云何が深般若波羅蜜中五陰如を示すや。」「須菩提、般若波羅蜜五陰の破を示さず、五陰の壞を示さず、生を示さず、滅を示さず、垢を示さず、淨を示さず、增を示さず。減を示さず、入を示さず、出を示さず、過去を示さず、未來を示さず、現在を示さず。何を以ての故に。空相破せず壞せず、無相無作相破せず壞せず、不起法不生法無所行法性法破せず壞せず、相是の如く示す。是の如く須菩提、佛深般若波羅蜜を說きて能く世間相を示す。復た次に須菩提、諸佛般若波羅蜜に因りて悉く無量無邊阿僧祇の衆生の心に行ずる所を知る。須菩提、是深般若波羅蜜中衆生無く、衆生の名無く、色無く、色の名無く受想行識無く、受想行識の名無く、眼無く乃至意無く、眼識無く乃至意識無く、眼觸無く乃至意觸無く、乃至一切種智無く、一切種智の名無し。是の如く須菩提、是深般若波羅蜜は能く世間相を示す。須菩提、是深般若波羅蜜も亦た色を示さず、受想行識を示さず、乃至一切種智を示さ

ず。何を以ての故に。須菩提、是深般若波羅蜜中尙ほ般若波羅蜜無し。何に況んや色乃至一切種智をや。復次に須菩提、所有衆生の名數、若は有色若は無色、若は有想若は無想、若は非有想若は非無想、若は此間國土若は十方に徧する國土、是諸の衆生若は攝心し若は亂心せば、是攝心是亂心を佛如實に知る。須菩提、云何が佛衆生の攝心亂心相を知るや。法相を以ての故に知る。何等の法相を用ての故に知るや。須菩提是法相中尙ほ法相の相無し。何に況んや攝心亂心有らんや。須菩提、是法相を以ての故に佛衆生の攝心亂心を知る。復次に須菩提、佛衆生の攝心亂心を知る。云何が知るや。須菩提、盡相を以ての故に知る。無染相を以ての故に知る。滅相を以ての故に知る。斷相を以ての故に知る。寂相を以ての故に知る。離相を以ての故に知る。是の如く須菩提、佛般若波羅蜜に因りて衆生の攝心亂心を知る。復次に須菩提、佛般若波羅蜜に因りて衆生の染心を知る。如實に染心を知り、瞋心癡心、如實に瞋心癡心を知る。『須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が佛衆生の染心を知り、如實に染心を知り、瞋心癡心如實に瞋心癡心を知りたまふ。」佛須菩提に告げたまはく『染心如實相なれば則ち染心相無し。何を以ての故に、如實相中心心數法尙ほ得べからず。何に況んや當に染心不染心を得べけんや。須菩提、瞋心癡心如實相なれば則ち瞋心相無く癡心相無し。何を以ての故に。如實相中心心數法尙ほ得べからず、何に況んや當に瞋心不瞋心癡心不癡心を得べけんや。是の如く須菩提、佛、般若波羅蜜に因りて、衆生の染心を如實に染心と知り、瞋心癡心を如實に瞋心癡心と知る。復次に須菩

【盡相を以ての故に等】盡とは無常を觀ずる慧、無染とは世間一切の染を離る、滅とは結使を遮滅すること、斷とは無漏道を以て斷ずる故に、寂とは諸結使を斷じ已りて涅槃寂滅離相を觀るをいひ、離とは迷悟差別を離る。

【染心】一切法法性中に入れば皆清淨、是故に染心實相を說く、是中に染心なし、如實中には心心數法なければなり。瞋、癡心亦是の如し、

【無染相】此中に染心相あることなし、染心本來無く亦不染心もなし、無染心は是れ寂滅相にして分別するところなきが故に。

【二心倶ならざるが故】心念生滅して無染實相中に染心不染心あることなし。

【心相離るるが故】心法廣狹增減の相を離るるをいふ。

提、佛般若波羅蜜に因りて、衆生の無染心を如實に無染心と知り、無瞋心無癡心を如實に無瞋心無癡心と知る。』『須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が衆生の無染心を如實に無染心と知り、無瞋心を如實に無瞋心と知り、無癡心を如實に無癡心と知りたまふや。』佛須菩提に告げたまはく、『是心無染相中染相不染相得べからず。何を以ての故に。須菩提、二心倶ならざるが故に。是の如く須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、衆生の無染心を如實に無染心と知る。須菩提、是無瞋心無癡心相中癡心不癡心得べからず。何を以ての故に。二心倶ならざるが故に。是の如く須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、衆生の無瞋心無癡心を如實に知る。復次に須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、是衆生の廣心を如實に廣心と知る。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が佛般若波羅蜜に因りて、是衆生の廣心を如實に廣心と知りたまふや。』『須菩提、佛諸の衆生の心相不廣不狹不增不減不來不去なるを知る。心相離るるが故に、是心不廣不狹乃至不來不去なり。何を以ての故に。是心性無なるが故に。誰か廣を作し誰か狹を作し。乃至來去せん。是の如く須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、是衆生の廣心を如實に廣心と知る。復次に須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、是衆生の大心を如實に大心と知る。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が佛般若波羅蜜に因りて、是衆生の大心を如實に大心と知りたまふや。』佛須菩提に告げたまはく、『佛般若波羅蜜に因りて、衆生心の來相去相を見ず、衆生心の生相滅相住相異相を見ず。何を以ての故に。是諸の心性無きが故に。誰か來り誰か去り誰か生滅住異せんや。是の如く須菩提、佛般若

【無量心】廣大心をいふ。又無量衆生を緣じ、又涅槃無量法を緣ずるを以て、又心相不可取の故に無量といふ。

【不可見心】心或は骨相身體諸緣中に在りて見るべしといふも皆虚妄なれば見るべからず。

【三】如實に心法を知ることを明し、十四邪見を辨ず。

【出沒屈伸等】邪見煩惱に沒在するを怖畏し道を求めて出離するをいふ。

波羅蜜に因りて、是衆生の大心を如實に大心と知る。復次に須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、衆生の無量心を如實に無量心と知る。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、云何が佛般若波羅蜜に因りて、衆生の無量心を如實に無量心と知りたまふや。』佛須菩提に告げたまはく、『佛般若波羅蜜に因りて、是衆生心の住を見ず不住を見ざるを知る。何を以ての故に。是無量心相依止無きが故に。誰か住不住の處行らん。是の如く須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、衆生の無量心を如實に無量心と知る。復次に須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、衆生の不可見心を如實に不可見心と知る。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が佛般若波羅蜜に因りて、衆生の不可見心を如實に不可見心と知りたまふや。』佛須菩提に告げたまはく、『衆生心是れ無相、佛如實に無相と知る。自相空なるが故に。復次に須菩提、佛衆生心五眼見る能はざるを知る。是の如く須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、衆生の不可見心を如實に不可見心と知る。

(三)復次に須菩提、佛深般若波羅蜜に因りて、衆生の心數出沒し屈伸することを、如實に知る。』『世尊、云何が佛般若波羅蜜に因りて、衆生の心數出沒し屈伸することを如實に知りたまふや。』佛言はく、『一切衆生心數の出沒屈伸等皆色受想行識に依りて生ず。須菩提、佛是中に於て衆生心數の出沒屈伸するを知る。謂ゆる神及び世間常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。神及び世間無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。神及び世間常亦無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。神及び世間非常非無常なり、

【神及び世間】神とは凡夫が憶想分別し我心に墮つて相を取る故神ありと計するをいふ。神及び世間は三世間に通ずるも主として衆生世間をいふ。

【常】以下常、無常、常無常、非常非無常の四を擧ぐ。邊無邊の四見、身神同異死後有無四見と共に十四邪見を列ぬ。常我あり福德により果報あり、行道によりて解脫するを常見といふ。

【無常】今世の名利の爲に所作あり。常在なる心あることなし。

【常無常】神に細微常住と現に所作ありて死する時無常なるものありと說く。

【非常非無常】俱に罪福因果を能く說明し得ざる爲にいふ。

是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。神及び世間常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、受に依る。神及び世間無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、受に依る。神及び世間常亦無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、受に依る。神及び世間非常非無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、受に依る。神及び世間常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、想に依る。神及び世間無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、想に依る。神及び世間常亦無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、想に依る。神及び世間非常非無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、想に依る。神及び世間常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、行に依る。神及び世間無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、行に依る。神及び世間常亦た無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、行に依る。神及び世間非常非無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、行に依る。神及び世間常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、識に依る。神及び世間無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、識に依る。神及び世間常も亦無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、識に依る。神及び世間非常非無常なり、是事實、餘は妄語なり、是見、識に依る。世間有邊なり、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。世間無邊なり、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る、世間有邊無邊なり、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。世間非有邊非無邊なり、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。受想行識に依るも亦是の如し。神即ち是身なり、是見、色に依る。神異に身異なり、是見、色に依る。受想行識に依るも亦是の如し。死後去るが如き有り、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。死後去るが如き無し、是事實、餘は妄語なり、是見、色

に依る。死後或は去るが如き有り或は去るが如き無し、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。死後去るが如き有るに非ず去るが如き無きに非ず、是事實、餘は妄語なり、是見、色に依る。受想行識に依るも亦是の如し。是の如く須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、衆生の出沒屈伸を實の如く知る。

(四)復次に須菩提、佛色相を知る。云何が色相を知るや、色の如如相壞せず、分別無く、相無く憶無く、戲論無く得無しと知る、色相も亦是の如し。須菩提、佛受想行識相を知る。云何が受想行識相を知るや。識の如如相壞せず分別無く、相無く憶無く、戲論無く得無しと知る、受想行識相も亦是の如し。是の如く須菩提、佛衆生如相及び衆生心數出沒屈伸如相、五陰如相、諸行如相即ち一切法如相を知る。何等か是れ一切法如相なりや。謂ゆる六波羅蜜如相なり、六波羅蜜如相は即ち是れ三十七品如相、三十七品如相は即ち是れ十八空如相なり。十八空如相は即ち是れ八背捨如相なり。八背捨如相は即ち是れ九次第定如相なり。九次第定如相は即ち是れ佛の十力如相なり。佛の十力如相は即ち是れ四無所畏無礙智大慈大悲乃至十八不共法如相なり。十八不共法如相は即ち是れ一切種智如相なり。一切種智如相は即ち是れ善法不善法世間法出世間法有漏法無漏法如相なり。有漏法無漏法如相は即ち是れ過去未來現在諸法如相なり、過去未來現在諸法の如相は即ち是れ有爲法無爲法如相なり。有爲法無爲法如相は即ち是れ須陀洹果如相なり。須陀洹果如相は即ち是れ斯陀含果如相なり。斯陀含果如相は即ち是れ阿那含果如相なり。阿那含果如相は即ち是れ

【世間有邊】三世間中主として五陰國土の二世間に就て邊無邊の四見を明す。

【神卽是身】此身を分析して神を得ることなき故に身滅すれば神亦滅す、是れ同なり。

【神異に身異り】神微細の五情は得ざる所、亦凡夫の所見に非ず、心を攝し禪定を得し人は乃ち能く見る。

【死後去る如きあり】死後有無の四種邪見を述ぶ。

【是の如く等】上述の邪見は分別せらるるも但五陰に緣依するのみ、而も五陰空にして常無常等なし、是れ如實知なり。

【四】佛知の正見世間を說く。

阿羅漢果如相なり。阿羅漢果如相は卽ち是れ辟支佛道如相なり。辟支佛道如相は卽ち是れ阿耨多羅三藐三菩提如相なり。阿耨多羅三藐三菩提如相は卽ち是れ諸佛如相なり。諸佛如相は皆是れ一如相なり。不二不別不盡不壞、是れを一切諸法如相と名く。佛般若波羅蜜に因りて、是如相を得、是因緣を以ての故に、般若波羅蜜能く諸佛を生じ、能く世間相を示す。是の如く須菩提、佛一切法の如相非不如相、不異相を知る。是如相を得るが故に佛を如來と名く。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、是諸法如相非不如相不異相甚深なり、世尊、諸佛是の如きを用て、人の爲に阿耨多羅三藐三菩提を說く。世尊、誰か能く是を信解する者ぞ。唯阿惟越致菩薩及び具足正見人、漏盡阿羅漢有るのみ。何を以ての故に。佛是甚深如法を得て人の爲に說く故に。』佛須菩提に告げたまはく『是如無盡相の故に甚深なり。』須菩提言さく『何法か無盡相の故に甚深なりや。』佛言はく『一切法無盡の故に。是の如く須菩提、是一切諸法如を得已りて衆生の爲に說く。』

問相品第四十九

(一)爾時、三千大千世界中の、所有欲界の天子色界の天子、遙に華香を散じ來りて佛の所に至り、佛足を頂禮し、却きて一面に住し、佛に白して言さく、『世尊、所說の般若波羅蜜甚深なり。何等か是れ深般若波羅蜜相なりや。』佛欲界色界の諸天子に告げたまはく、『諸天子、

【佛】諸法如に隨順して相違せざるは諸佛如なり、故に諸佛は衆生のために如實の法を說く。

【阿惟越致菩薩】法忍位に入り受記せる者、能く信じて不退に近き者も攝す。

【具足正見人】三乘道にある人。

【漏盡阿羅漢】一切法不受の故に能く信ず。

【如無盡】一切法無盡なるが故に如も無盡なり。

【問相品】諸天深般若の相を問ふに答ふ。

【一】般若の空無相を明す。先に處處に之を說くも空といひ有といひて不定なる故、今定んで般若の相を問決するなり。

【空相】內外空等の諸の空。【無相】若し諸法空なれば男女長短等の相なきをいふ。後世に著せず所願なきを無作といひ、無作故に起らざるを無起といふ。【無相】前の無相は三解脫門、今は一切法相なきの空なり。【世間法】空は說くべからざるに說く所以を俗諦に於て示す佛憐愍の故にて。第一義は眞諦に於て示すもの。【一切世間破壞等】若しは是或は非、一切法同一相にして無分別なれば無所有にして虛空相の如く、一法としてこの相に入らざるもの無し故に一切世間能く破するものなしと說く。【相相を破せず】諸法定相なく所破なし。

空相是れ深般若波羅蜜相なり、無相無作無起無生無滅、無垢無淨、無所有法無相無所依止虛空相是れ深般若波羅蜜相なり。諸天子、是の如き等の相、是れ深般若波羅蜜相なり。佛衆生の爲めに世間法を用ての故に說く、第一義に非ず。諸天子、是諸相一切世間天人阿修羅破壞すること能はず。何を以ての故に。是一切世間天人阿修羅も亦是れ相なるが故に。諸天子、相相を破すること能はず、相相を知ること能はず、相無相を知ること能はず、無相相を知ること能はず、是相是無相、相無相皆所有無し。謂ゆる知相、知者知法皆不可得なるが故に。何を以ての故に、諸天子、是諸相色の作に非ず、受想行識の作に非ず、檀那波羅蜜の作に非ず、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜の作に非ず、內空の作に非ず、外空の作に非ず、內外空の作に非ず、無法空の作に非ず、有法空の作に非ず、有法無法空の作に非ず、四念處の作に非ず、乃至一切種智の作に非ず、諸天子、是相、人の所有に非ず、非人の所有に非ず、世間に非ず、出世間に非ず、有漏に非ず、無漏に非ず、有爲に非ず、無爲に非ず。佛復諸天子に告げたまはく、『譬へば人有りて、何等か是れ虛空の相なりやと問ふが如し、是人正問を爲すや否や。』諸天子言さく、『世尊、此れ正問ならず、何を以ての故に。世尊、此虛空は相の說く可きもの無く、虛空は無爲無起なるが故に。』佛欲界色界の諸天子に告げたまはく、『有佛無佛、相性常住にして、佛實の如く相性を得るが故に、名けて如來と爲す。』諸天子佛に白して言さく、『世尊、世尊の得たまふ所の諸相性甚深なり。是相を得たまへるが故に無礙智を得て是相中に住したまひ、般若波

【相無相を知らず】内に智慧あるも外空の故に知るべきなし外縁なければ如何が智慧生ぜん
【人非人】人は菩薩諸佛、非人は諸天等なり。
【相性常住】有佛無佛に拘らず此相は常住、佛は能く此相を知る。
【是相を得】諸法實相に住して通達無礙、能く諸法の別相を說く。
【惱壞】惱亂破壞にして色法の別相とするも相空無相を知ること完きを無相を得とし。眞に相を知るとす。
【取】取相にして想像すること。
【無熱惱】持戒淸涼安隱の德。
【二】般若は佛母にして諸佛の依止供養する所、能く世間相を示し、世間空を示すを辨ず。

羅蜜を以て諸法の自相を集めたまふ。』諸天子言さく、『希有なり世尊、是深般若波羅蜜は是れ諸佛の常に道を行ぜらるる處なり。是道を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、一切法相若は色相若は受想行識相乃至一切種智相に通達したまふ。』佛言はく、『是の如く是の如し。諸天子、惱壞相は是れ色相なり、佛是無相を得。覺は受相、取は想相、起作は行相、了別は識相なり、佛是無相を得。能捨は檀那波羅蜜相、無熱惱は尸羅波羅蜜相、不變異は羼提波羅蜜相、不可伏は毘梨耶波羅蜜相、攝心は禪那波羅蜜相、捨離は般若波羅蜜相なり、佛是無相を得。心嬈惱する所なきは是れ四禪四無量心四無色定の相なり、佛是無相を得。出世間は三十七品の相なり、佛是無相を得。苦は無作脫門の相、離は空脫門の相、寂滅は無相脫門の相なり、佛是無相を得。勝は十力の相、不恐怖は無所畏の相、徧知は四無礙智の相、餘人無得は十八不共法の相なり、佛是無相を得。愍念衆生は大慈大悲の相、實は無錯謬の相、無所取は常捨の相、現了知は一切種智の相なり、佛是無相を得。是の如く諸天子、佛一切諸法の無相を得。是因緣を以ての故に佛を無礙智と名く。』

(二)爾時、佛須菩提に告げたまはく、『般若波羅蜜は是れ諸佛の母なり。般若波羅蜜能く世間相を示す。是故に佛は是法に依止して行じ、是法を供養し恭敬し尊重し讚歎す。何等か是れ法なりや。謂ゆる般若波羅蜜なり。諸佛は般若波羅蜜に依止して住し、是般若波羅蜜を恭敬し供養し尊重し讚歎す。何を以ての故に。是般若波羅蜜諸佛を出生すればなり。佛

【作人を知る】他の恩を作すを知るをいふ。無作人とは一切法無作相と知るをいふ。

【世尊若し一切法等】問意は一切法鈍相にして知見なきに何ぞ般若獨り知見を得るやを問ふ。

【一切法空虛等】知見なきのみならず一切法は空に入るを以て無知無見なり。

【所繫なし】一切法實相にして繫せられず三界を超出す。

作人を知る。若し人正しく作人を知る者を問はば、正答佛に過ぐる無し。何を以ての故に。須菩提、佛作人を知るが故に佛の乘來する所の法、佛の從來する所の道、阿耨多羅三藐三菩提を得る是乘是道、佛還つて恭敬し供養し尊重し讃歎し受持し守護す。須菩提、是を佛作人を知ると名く。復次に須菩提、佛一切法無作相を知る。作者所有無きが故に。一切法無起相、形事不可得なるが故に、須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、一切法無作相を知る。亦是因緣を以ての故に、佛作人を知る、復次に須菩提、佛般若波羅蜜に因りて、一切法不生を得、無所得を以ての故に。是因緣を以ての故に、般若波羅蜜能く諸佛を生じ、能く世間相を示す。『須菩提言さく「世尊、若し一切法知る者無く見る者無くば、云何が般若波羅蜜能く諸佛を生じ、能く世間相を示すや。」佛須菩提に告げたまはく「是の如く是の如し、一切法實に知る者無く見る者無し。云何が知る者無く見る者無きや。一切法空虛誑不堅固なり。是故に一切法知る者無く見る者無し、復次に須菩提、一切法云何が知る者無く見る者無きや。一切法依止無く、所繫無し。是を以ての故に、一切法知る者なく見る者無し。是の如く須菩提、般若波羅蜜能く諸佛を生じ、能く世間相を示す。色を見ざるが故に世間相を示し、受想行識を見ざるが故に世間相を示し、乃至一切種智を見ざるが故に世間相を示す。是の如く須菩提、般若波羅蜜能く諸佛を生じ、能く世間相を示す。」『須菩提言さく「世尊、云何が色を見ざるが故に般若波羅蜜世間相を示し、受想行識乃至一切種智を見ざるが故に世間相を示すや。」佛須菩提に告げたまはく「若し色に緣りて識を生ぜざれば、

【色相を見ざるが故等】色は是惱壞相識に因ての故に分別す。識なければ惱壞相なし、卽ち色無相これ色を示すの意なり。

【世間空】五衆乃至一切種智空、衆生佛を疑ひ法に著するを以て、法常相に非ず、愛著すべからざるを示すなり。

【世間空を知り等】單に讀誦等に非ずして內心に覺知籌量思惟分別するをいふ。

【佛に世間空を示す】以下般若諸佛を生ずるを明す。

【不可思議】畢竟空にして心相の取著すべきものなし。

是を色相を見ざるが故に示すと名く。受想行識に縁りて識を生ぜず、乃至一切種智に縁りて識を生ぜざれば、是を一切種智相を見ざるが故に示すと名く。是の如く須菩提、是深般若波羅蜜、能く諸佛を生じ能く世間相を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜、云何が能く諸佛を生じ能く世間相を示すや。須菩提、般若波羅蜜は世間空を示す。云何が世間空を示すや。五陰世間空を示し、十二入世間空を示し、十八界世間空を示し、十二因緣世間空を示し、我見根本六十二見世間空を示し、十善道世間空を示し、四禪四無量心四無色定世間空を示し、三十七品世間空を示し、六波羅蜜世間空を示し、內空世間空を示し、外空世間空を示し、內外空世間空を示し、無法空世間空を示し、有法空世間空を示し、無法有法空世間空を示し、有爲空世間空を示し、無爲空世間空を示し、佛の十力世間空を示し、十八不共法世間空を示し、乃至一切種智世間空を示す。是の如く須菩提、般若波羅蜜、能く諸佛を生じ、能く世間相を示す。復次に須菩提、佛是般若波羅蜜に因りて、世間空を示し、世間空を知り、世間空を覺り、世間空を思惟し、世間空を分別す。是の如く須菩提、般若波羅蜜、能く諸佛を生じ、能く世間相を示す、復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間空を示す。云何が佛に世間空を示すや。五陰世間の空を示し乃至一切種智世間の空を示す。是の如く須菩提、般若波羅蜜、能く諸佛を生じ、能く世間相を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の不可思議を示す。云何が世間の不可思議を示すや。五陰世間の不可思議乃至一切種智世間の不可思議を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛の世間の離を示す。云

【離を示す】畢竟空を離と名け寂滅と名く、離は分散にして諸法、久しき後遺餘なく、又自らその性を離る、畢竟を知り、已れば心數法無く、語言なき故に、寂滅、畢竟空等と名くるなり。

【獨空】十八空は皆因緣相待にして、內空の如く內法に因つての故に內空と名く。若し內法無ければ內空なし。この獨空は因無く待無きに名く、又獨空とは虛空如法性實際涅槃の如し。

【今世後世相】邪見にして斷滅中に墮する外道は但今世後世を說き常見人は今世の神後世に入ると說く般若はこの二邊を離れ中道を說く故、空と雖も空に著せず空に於て無礙なり。

何が世間の離を示すや。五陰世間の離を示し、乃至一切種智世間の離を示す。是の如く須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の離を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の寂滅を示す。云何が世間の寂滅を示すや。五陰世間の寂滅を示し、乃至一切種智世間の寂滅を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の畢竟空を示す。云何が世間の畢竟空を示すや。五陰世間の畢竟空を示し、乃至一切種智世間の畢竟空を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の性空を示す。云何が世間の性空を示すや。五陰世間の性空を示し、乃至一切種智世間の性空を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の無法空を示す。云何が世間の無法空を示すや。五陰世間の無法空を示し、乃至一切種智世間の無法空を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の有法空を示す。云何が世間の有法空を示すや。五陰世間の有法空を示し、乃至一切種智世間の有法空を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の無法有法空を示す。云何が世間の無法有法空を示すや。五陰世間の無法有法空を示し、乃至一切種智世間の無法有法空を示す。復次に須菩提、般若波羅蜜は佛に世間の獨空を示す。云何が世間の獨空を示すや。五陰世間の獨空を示し、乃至一切種智世間の獨空を示す。是の如く須菩提、般若波羅蜜は能く諸佛を生じ、能く佛世間相を示す。須菩提、是深般若波羅蜜は世間相を示す。謂ゆる今世後世相を生ぜず。何を以ての故に。諸法用て今世後世相を生ずべきもの無きが故に。」

(三)須菩提佛に白して言さく、「世尊、是般若波羅蜜は大事の爲の故に起る。世尊、是般若波

羅蜜は不可思議事の爲の故に起る。世尊、是般若波羅蜜は不可稱事の爲の故に起る。世尊、是般若波羅蜜は無量事の爲の故に起る。世尊、是般若波羅蜜は無等等事の爲の故に起る。』佛言はく、『是の如く是の如し。須菩提、般若波羅蜜は大事の爲の故に起り、不可思議事の爲の故に起り、不可稱事の爲の故に起り、無量事の爲の故に起り、無等等事の爲の故に起る。須菩提、云何が是般若波羅蜜大事の爲の故に起るや。須菩提、諸佛の大事とは謂ゆる一切衆生を救ひ一切衆生を捨てざるなり。須菩提、云何が是般若波羅蜜不可思議事の爲の故に起るや。須菩提、不可思議の事とは謂ゆる諸佛法如來法自然人法一切智人法なり。是を以ての故に、須菩提、諸佛般若波羅蜜不可思議事の爲の故に起る。須菩提、云何が般若波羅蜜不可稱事の爲の故に起るや。須菩提、一切衆生中能く佛法如來法自然人法一切智人法を思惟し稱するもの有ること無し。是を以ての故に、須菩提、般若波羅蜜不可稱事の爲の故に起る。須菩提、云何が般若波羅蜜無量事の爲の故に起るや。須菩提、一切衆生中能く佛法如來法自然人法一切智人法を量るもの有ること無し。是を以ての故に須菩提、般若波羅蜜不可量事の爲の故に起る。須菩提、云何が般若波羅蜜無等等事の爲の故に起るや。須菩提、一切衆生中能く佛と等しき者有ること無し。何に況んや過ぐるをや。是を以ての故に、須菩提、般若波羅蜜無等等事の爲の故に起る。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、但佛法如來法自然人法一切智人法のみに不可思議不可稱無有量無等等事起るや。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、佛法如來法自然人法一切智人法、不可思議不可稱無有量無等

【三】般若大事等の爲に起るを說く
【大事】一切衆生の大苦惱を破し能く無上道を與ふるをいふ。
【不可稱】稱とは智慧、般若實相は重く智慧は輕き故稱する能はず。
【無量】取相を量といひ、般若相を取るべからざる故に無量といふ。
【無等等】無等とは涅槃、一切有爲法涅槃と等しきものなし、般若は能く大乘涅槃を與ふる故に無等なとり。
【諸佛法】一切無明睡眠等最初に覺るをいふ。
【如來法】過去諸佛の如く六變を行じて諸法の如相を得、佛道に來至すること今佛も亦然るをいふ。
【自然人法】聲聞の如く他より聞かず自覺自知なるをいふ。

【一切智人法】辟支佛自然得なるも他より聞かず一切智無し是故に佛を一切智人といふ。

【世尊但佛法等】四法のみ妙勝の故に不思議なるかの疑に對し、一切不可得の故に然るを明す。

【是義不可思議】不可思議とは思議相を過ぐる義趣に名け、亦不可得にして執すべからず。

等なれば、色も亦不可思議不可稱無有量無等等なり。受想行識も亦不可思議不可稱無有量無等等なり。乃至一切種智法性法相も不可思議不可稱無有量無等等なり。是中心心數法得べからず。復次に須菩提、色不可思議是も亦た不可得なり、乃至色無等等是も亦不可得なり、受想行識乃至一切種智無等等、是も亦不可得なり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何の因緣もて色不可思議乃至無等等是も亦不可得、受想行識乃至一切種智無等等是も亦不可得なりとするや。』佛須菩提に語りたまはく、『色の量不可得なるが故に、受想行識の量不可得なるが故に、乃至一切種智の量不可得なるが故に。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何の因緣もて色の量不可得、乃至一切種智の量不可得なりや。』佛須菩提に告げたまはく、『色不可思議なるが故に、乃至色無等等なるが故に量不可得なり。乃至一切種智不可思議なるが故に、乃至一切種智無等等なるが故に量得べからず。須菩提、汝が意に於て云何。不可思議乃至無等等寧ろ得べきや不や。色受想行識乃至一切種智は寧ろ得べきや不や。』須菩提言さく、『世尊、不可得なり。』『是を以ての故に、須菩提、一切法不可思議乃至無等等なり。亦是の如く須菩提、是諸佛法も不可思議不可稱無有量無等等なり。須菩提、是を諸佛法不可思議乃至無等等と名く。須菩提、是諸佛法不可思議、思議相に過ぐるが故に。不可稱、稱に過ぐるが故に。無有量、量に過ぐるが故に、無等等、等等に過ぐるが故に。須菩提、是因緣の故に一切法も亦不可思議乃至無等等なり。須菩提、不可思議は是義不可思議なるに名け、不可稱は是義不可稱なるに名け、無有量は是義不可量なるに名け、

無等等は是義無等等なるに名く。須菩提、是諸佛法不可思議乃至無等等なり。不可思議虚空の思議すべからざるが如く、不可稱虚空の稱すべからざるが如く無有量虚空の量有ること無きが如く、無等等虚空の無等等なるが如し。須菩提、是を諸佛法不可思議乃至無等等と名く。佛法是の如く無量なれば一切世間天人阿修羅能く思議し籌量する者無し。

(四)是諸佛法不可思議不可稱無有量無等等品を說く時、五百の比丘一切法不受の故に漏盡き心解脱を得、阿羅漢を得。二十比丘尼も亦た一切法を受けざるが故に漏盡き阿羅漢を得。六萬の優婆塞三萬の優婆夷、諸法中塵を遠け垢を離れ、諸法中法眼生ず。二十の菩薩摩訶薩無生法忍を得て、是賢劫中に於て當に受記すべし。』

【天人阿修羅】三善道尚量るべからず、況や三惡道をや。

【四】聞經の得益を明す。

【二十】兩ながら丹本二千と作る。

【塵を遠け】白衣は世事に貪著して智慧淺薄鈍根にして漏盡する能はず、信慧の諸根を増益して遠塵するなり。

【賢劫中】釋尊及後佛の授記するをいふ。

【成辨品】前に說く甚深般若の因緣を大事乃至無等等が爲とすることを重說し讃歎す。

【二】般若深甚たるは能く他の五度乃至一切法を包含し諸法を成辨するによるを明す。

【灌頂】卽位の時に海水を頂に灌ぎ祝意を表すること、王は佛、官事は衆生の濟度、大臣は般若に喩ふ。

【成辨】諸法般若に包含され和合し隨喜方便廻向せらるるが故に佛道に至るをいふ。

【二】不取不著の故含受し成辨するを明す、初染を取といひ、生愛を著といふ。

摩訶般若波羅蜜經　卷第十五

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

成辨品第五十

(一)爾時、須菩提、佛に白して言さく、『世尊、是深般若波羅蜜大事の爲の故に起る、不可思議事の故に起る、不可稱事の故に起る、無有量事の故に起る、無等等事の故に起る』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、是深般若波羅蜜大事の爲の故に起る、乃至無等等事の故に起る。何を以ての故に。般若波羅蜜の中、五波羅蜜を含受し、般若波羅蜜の中內空外空、乃至無法有法空を含受し、四念處乃至八聖道分を含受し、是深般若波羅蜜の中佛の十力、乃至一切種智を含受すればなり。譬へば灌頂せる王の國土中に尊く、諸の官事有るも皆大臣に委す、國王安樂無事にして自ら恣にするが如し。是の如く須菩提、有ゆる聲聞辟支佛法、若は菩薩法、若は佛法、一切皆般若波羅蜜の中に有れば、般若波羅蜜能く其事を成辨す。是を以ての故に、須菩提、般若波羅蜜大事の爲の故に起る、乃至無等等事の故に起る。

(二)復次に、須菩提、是般若波羅蜜、色を取らず、色に著せざるが故に能く成辨す。受想行

【三】諸天子、般若及び行者を讃ず

識取らず、著せざるが故に能く成辦す、乃至一切種智取らず、著せざるが故に能く成辦す。須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道、乃至阿耨多羅三藐三菩提、取らず、著せざるが故に能く成辦す。』須菩提、佛に白して言さく、『云何が色取らず著せざるが故に、般若波羅蜜能く成辦し、云何が受想行識、乃至阿耨多羅三藐三菩提取らず、著せざるが故に、般若波羅蜜能く成辦するや。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、頗し是色の取るべく著すべきを見るや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。』『須菩提汝が意に於て云何、頗し受想行識乃至阿耨多羅三藐三菩提取るべく著すべきを見るや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。』佛言はく『善い哉善い哉、須菩提、我も亦是色の取るべく著すべきを見ず、見ざるが故に取らず、取らざるが故に著せず。我も亦受想行識乃至阿耨多羅三藐三菩提、及び一切種智の取るべく著すべきを見ず、見ざるが故に取らず、取らざるが故に著せず。須菩提、我も亦佛法、如來法、自然人法、一切智人法取るべく著すべきを見ず、見ざるが故に取らず、取らざるが故に著せず。是を以ての故に、須菩提、諸の菩薩摩訶薩、色も亦取るべからず著すべからず。受想行識、乃至佛法、如來法、自然人法、一切智人法も亦取るべからず著すべからず。』

(三)爾時、欲色界の諸天子、佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜、甚深にして見難く、解し難く、思惟比類すべからず。微妙善巧智寂滅を知る者知るべし、能く是般若波羅蜜を信ずる者は當に知るべし、是菩薩多く諸佛に供養し、多く善根を種ゑ、善知識と相隨ひ、

【信行法行】入道者、鈍根を隨他信とし、利根を法行とし自ら法を見て解すとなす。

【智等】智は十智斷は有殘即ち學人の斷と、無殘即ち無學の斷との二に分つ。

【無生法忍なれば】如所緣同じければ、乃至實際亦同じ、利鈍の智慧を異となすのみ、又無量功德及大悲心あつて守護す、故に餘の種種義に勝るるなり。

【減一劫】一劫より少きの意、又一日に比して長時を示す。

【上妙の法】三乘の學して佛果に至るべき法。

能く深般若波羅蜜を信解す。世尊、若し三千大千世界中の有ゆる衆生、皆信行法行の人、八人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛の若は智、若は斷を作すも、是菩薩一日、深般若波羅蜜を行じ、忍欲し、思惟し、籌量するに如かず。何を以ての故に。是信行法行の人、八人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛の若は智、若は斷は即ち是れ菩薩摩訶薩の無生法忍なればなり。」佛、欲色界の諸天子に告げたまはく、「是の如し是の如し、諸天子、若し信行法行の人、八人、須陀洹、乃至阿羅漢、辟支佛は即ち是れ菩薩摩訶薩の無生法忍なり。諸天子、若し善男子善女人、是深般若波羅蜜を聞き、書持し、受け、讀誦し、說き正憶念せば是善男子善女人、疾に涅槃を得ること、聲聞辟支佛乘を求むる善男子善女人の深般若波羅蜜を遠離し、餘經を行ずる、若は一劫、若は減一劫なるに勝る。何を以ての故に。是深般若波羅蜜の中に廣く上妙の法を說く。是れ信行法行の人、八人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛の學ぶべき所、菩薩摩訶薩も亦學ぶべき所、學び已りて阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。」是時欲色界の諸天子俱に聲を發して言さく、「世尊、是般若波羅蜜を摩訶波羅蜜と名く。世尊、是般若波羅蜜を不可思議不可稱無有量無等等波羅蜜と名く。信行法行の人、八人、是深般若波羅蜜を學して、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛を成ずることを得。是深般若波羅蜜を學して、菩薩摩訶薩を成ずることを得。是深般若波羅蜜の中に學せば、阿耨多羅三藐三菩提を得。是深般若波羅蜜も亦增さず、亦減ぜず。」是時、欲色界の諸天子、佛足を頂禮し、佛を遶りて去る、是を去る

【四】深般若を信解する者の宿善を明す、是に上中下の三機あり。上機は前世に此人界若くは他佛世界に般若を聞解し修行せるものなり。

こと遠からずして忽然として現ぜず、各本處に還る。』

(四)須菩提、佛に白して言さく『世尊若し菩薩摩訶薩、是深般若波羅蜜を聞きて即時に信解する是、何處より終り來りて是間に生ずるや。』佛、須菩提に告げたまはく『若し菩薩摩訶薩、是深般若波羅蜜を聞きて即時に信解し、沒せず、却せず、難ぜず、疑はず、悔いず、歡喜し樂んで聽く、聽き已て憶念して是深般若波羅蜜を遠離せず。若は行、若は住、若は坐、若は臥、終に廢忘せず常に法師に隨ふ。譬へば新生の犢子其母を離れざるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、深般若波羅蜜を聞かんが爲の故に、終に法師に遠離せず、乃至是深般若波羅蜜を得て、口誦し、心解し、正見し、通達す。須菩提、當に知るべし、是菩薩人道中より終り、還て是間の人中に生ず。何を以ての故に。是佛道を求むる者、前世の時に深般若波羅蜜を聞き、書持し、恭敬し、尊重し、讃歎し、華香乃至幡蓋もて供養せり。是因緣を以ての故に、人中に命終りて還て人中に生じ、是深般若波羅蜜を聞き即時に信解す。』須菩提、佛に白して言さく『世尊、頗し菩薩摩訶薩有りて是の如きの功德成就し、他方國土に諸佛を供養し、彼に於て命終り來て是間に生じ、深般若波羅蜜を聞きて即時に信解し、書持し、讀誦し、正憶念す、是者有りや不や。』佛言はく『有り、菩薩是の如きの功德成就し、他方國土に諸佛を供養し、彼に於て命終り來りて是間に生じ、是深般若波羅蜜を聞きて即時に信解し、書持し、讀誦し、正憶念す。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩他方諸佛の所より、是深般若波羅蜜を聞き、信解し、書持し、讀誦し、說き正憶念し、彼の

【五】中、下の行人を明す、下は聞きて義を問はず、中は聞きて問ひて問ふも行ふ能はず。【中事】般若說法中の義理。

間に於て終り來りて此間に生ずればなり。當に知るべし、是人は是れ先世に功德成就せるなり。復次に、須菩提、菩薩有り、彌勒菩薩摩訶薩より、是深般若波羅蜜を聞き、是善根因緣を以ての故に來て此間に生ず。

(五)須菩提、復菩薩摩訶薩有り、前世の時に深般若波羅蜜を聞くと雖も、中事を問はざれば來りて人中に生じ、是深般若波羅蜜を聞くも、心に疑悔有りて悟り難し。須菩提、是の如きの菩薩當に知るべし、先世に是深般若波羅蜜を聞くと雖も、問はざるが故に今續いて疑悔し悟り難し。須菩提、若し菩薩先世に禪那波羅蜜を聞くと雖も、中事を問はざれば、今世に般若波羅蜜を聞く時、問はざるが故に續いて疑悔を生ず。須菩提、若し菩薩先世に毘梨耶波羅蜜を聞くと雖も、中事を問はざれば、今世に般若波羅蜜を聞くも、問はざるが故に續いて復疑悔す。須菩提、若し菩薩先世に羼提波羅蜜を聞くと雖も、中事を問はざれば、今世に般若波羅蜜を聞くも、問はざるが故に續いて復疑悔す。須菩提、若し菩薩先世に尸羅波羅蜜を聞くと雖も、中事を問はざれば、今世に般若波羅蜜を聞くも、問はざるが故に續いて復疑悔す。須菩提若し菩薩先世に檀那波羅蜜を聞くと雖も、中事を問はざれば、今世に般若波羅蜜を聞くも、問はざるが故に續いて復疑悔す。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩先世に內空、外空、內外空、乃至無法有法空を聞くと雖も、中事を問はざれば、來りて人中に生じ、是深般若波羅蜜を聞くも、問はざるが故に續いて復疑悔し悟り難し。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、先世に四念處乃至八聖道分、四禪、四無量心、四無色定、五神通、佛の十力、乃至一

【六】以下中人の聞解せるものを明す、この人信解あり。暫く堅固なるも後信樂することと能はず。

切種智を聞くと雖、中事を問はざれば、來りて人中に生じ、是深般若波羅蜜を聞くも、問はざるが故に續いて復疑悔し悟り難し。

(六)復次に、須菩提、菩薩摩訶薩先世に深般若波羅蜜を聞き、中事を問ひて而も行ぜざれば、捨身して生ずる時、是深般若波羅蜜を聞くこと、若は一日、二日、三日、四日、五日、其心堅固にして能く壞する者無きも、若し所聞を離るる時は便ち退失す。何を以ての故に。是人或る時は聞かんと欲し、或る時は聞かんと欲せず、心輕くして固からず、志亂れて定まらず。譬へば輕毛の風に隨て東し、西するが如し、須菩提、當に知るべし、是菩薩發意すること久しからず、善知識と相隨せず、多く諸佛を供養せず、先世に是深般若波羅蜜を書せず、讀せず、誦せず、正憶念せず、般若波羅蜜を學せず、禪那波羅蜜を學せず、毘梨耶波羅蜜を學せず、羼提波羅蜜を學せず、尸羅波羅蜜を學せず、檀那波羅蜜を學せず、內空乃至無法有法空を學せず、四念處乃至八聖道分を學せず、四禪、四無量心、五神通、佛の十力を學せず、乃至一切種智を學せず。是の如く須菩提、當に知るべし、是菩薩摩訶薩新に大乘意を發すも信少く、樂少きが故に、是深般若波羅蜜を書すること能はず、受持し、讀誦し、說き正憶念すること能はず。須菩提、若し佛道を求むる善男子善女人、是深般若波羅蜜を書せず、受持讀誦せず、說かず、正憶念せざれば、亦深般若波羅蜜の護る所と爲らず、乃至一切種智の護る所と爲らず。是人亦說の如く深般若波羅蜜を行ぜず。乃至說の如く一切

【譬喩品】前品にいふ中下人は般若に護られずして退轉す。今譬喩を以て般若の護持を要することを明す。
【一】船、瓶、老年等を譬說す。
【船等】船は行者の身に、浮囊等の物は般若の方便に喩ふ。

種智を行ぜず。是人或は二地、若は聲聞地、若は辟支佛地に墮す。何を以ての故に。是善男子善女人、是深般若波羅蜜を書せず、讀せず、誦せず、說かず、正憶念せざればなり。是人も亦深般若波羅蜜の護る所と爲らず、亦說の如く行ぜず。是を以ての故に是善男子善女人、二地の中に於て當に一地に墮すべし。」

譬喩品第五十一

（一）佛、須菩提に告げたまはく、「譬へば大海の中にて船破壞するが如し、其中の人若し木を取らず器物を取らず、浮囊を取らず、死尸を取らざれば、須菩提、當に知るべし、是人彼岸に到らず、海中に沒して死せん。須菩提、若し船破る時、其中の人木を取り、器物、浮囊、死尸を取らば、當に知るべし、是人終に沒死せず安隱無礙にして彼岸に到ることを得ん。須菩提、佛道を求むる善男子善女人も亦復是の如し。若し但だ信樂のみ有りて、深般若波羅蜜に依らず、書せず、讀せず、誦せず、正憶念せず、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜に依らず、書せず、讀まず、誦せず、正憶念せず。乃至一切種智に依らず、書せず、讀まず、誦せず、正憶念せざれば、須菩提、當に知るべし、是善男子中道にして衰耗す。是人未だ一切種智に到らず、聲聞辟支佛地に於て證を取る。須菩提、若し佛道を求むる善男子善女人有り、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、信有り、忍有り、淨

【信あり等】菩薩に諸法實相を得る者と未だ實相を得ざるも佛道に於て信乃至精進ある者とあり。次第の如く信とは罪福業の因緣果報を信じ六度を以て成佛すと信ず。忍は佛道を信じ思惟籌量すと雖も忍ぶ能はざる故に忍ありと説く。忍ぶと雖も邪疑未斷の故に心不淨なれば淨ありと説く。信忍淸淨と雖も淺深ある故に深心を説く。四事因緣の故に一心に無上道を得んと欲し餘事を欲せざる故に欲ありと説く。了了決定し無上道を知るを大事となし世間の餘事を小となす故に解ありと説く、欲界定心を以ての故に財を捨て及煩惱を捨つ是故に捨を説く捨の爲の故に常に能く精進するなり

心有り、深心有り、欲有り、解有り、捨有り、精進有り、是人深般若波羅蜜に依り、書持し、讀誦し、説き正憶念す。是善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、諸の信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進有り、深般若波羅蜜の護る所と爲り、乃至一切種智の護る所と爲る。深般若波羅蜜の爲に守護せらるるが故に、乃至一切種智の爲に守護せらるるが故に、終に中道にして衰耗せず。聲聞辟支佛地を過ぎて、能く佛國土を淨め、衆生を成就し、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提、譬へば男子女人坏瓶を持て、水を取るが如し、當に知るべし是瓶久しからずして爛壞せん。何を以ての故に。是瓶未熟なるが故に還て地に歸す。是の如く須菩提、善男子善女人阿耨多羅三藐三菩提心を爲す有り、信有り、忍有り、淨心有り、深心有り、欲有り、解有り、捨有り、精進有りと雖も、般若波羅蜜方便力の守護する所と爲らず。禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜の守護する所と爲らず、內空、乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智の守護する所と爲らず。須菩提當に知るべし、是人中道にして衰耗し、聲聞辟支佛地に墮す。須菩提、譬へば男子女人、熟瓶を持て水を若は河、若は井、若は池、若は泉より取るが如し。當に知るべし、是瓶水を持つこと安隱ならん。何を以ての故に。是瓶成熟せるが故に。是の如く須菩提、善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を求め、諸の信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進有れば、般若波羅蜜方便力の守護する所と爲る、禪定、精進、忍辱、持戒、布施、乃至一切種智の守護する所と爲るが故に。須菩提、當に知るべし、是人

【坏瓶】火にかけざる土瓶、菩薩道に喩ふ。火は般若方便、水は六度の功德に譬ふ。
【熟瓶】火にかけたる陶瓶、淨菩薩道に喩ふ。
【船未だ裝治せず】菩薩方便なきに喩ふ。
【財物】信等の功德に喩ふ。
【各一處】本願と乖異して或は人天の樂を受け或は二乘に墮す。
【老病人】信等功德ある菩薩六十二邪見等を斷ぜざるを老年とし、百八煩惱を斷ぜざるを病ありとす。
【床】病床のこと三界に喩ふ。

中道にして衰耗せず、聲聞辟支佛地を過ぎ、能く佛國土を淨め、衆生を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提、譬へば大海邊の船未だ裝治せず、便ち財物を持て上に著くるが如し、須菩提當に知るべし、是船中道にして壞沒し、人船財物各一處に在り、是賈客方便力無きが故に、其重寶を亡ふ。是の如く須菩提、是佛道を求むる善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提の爲にする心有り、信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進有りと雖も、般若波羅蜜方便力の守護する所と爲らず。乃至一切種智の守護する所と爲らざるが故に、當に知るべし是人中道にして衰耗して大珍寶を失ふ、大珍寶とは所謂一切種智なり、衰耗とは聲聞辟支佛地に墮するなり。須菩提、譬へば人智有り、方便して海邊に大船を裝治し、然る後水中に推著して、財物を持て上に著け、船に上りて去るが如し。當に知るべし、是船中道にして沒壞せず、必ず安隱にして所至の處に到ることを得ん。是の如く須菩提、善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、信、忍、淨心、深心、欲解、捨、精進有り、般若波羅蜜方便力の守護する所と爲り、禪定、精進、忍辱、持戒、布施、乃至一切種智の守護する所と爲るが故に、當に知るべし、是菩薩阿耨多羅三藐三菩提に到ることを得て、中道にして聲聞辟支佛地に墮せず。須菩提、譬へば人有り年百二十歲、年耆ひ根熟す、又風冷熱病、若は雜病有るが如し、須菩提、汝が意に於て云何、是人能く床より起つや不や。」須菩提言さく、「能はず。」佛言はく、「是人或は能く起つ者有りや云何。」須菩提言さく、「是人能く起つと雖、遠く若は十里、若は二十里に行くこと能はず、其老病を以ての故に、是の

【二】佛須菩提を印可して更に失行の因緣を說く。

【我我所心】我れ是れ施主なりとは我、是れ我が施なりとは我所なり。

如く須菩提、善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提の爲にする心有り、信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進有りと雖も、般若波羅蜜方便力の守護する所と爲らず、乃至一切種智の守護する所と爲らざるが故に、當に知るべし、是人中道にして聲聞辟支佛地に墮す。何を以ての故に。般若波羅蜜方便力の守護する所と爲らざるが故に。須菩提、老に向ふ人百二十歲年耆ひ根熟し、又風冷熱病、若は雜病有るが如し。是人而も起つて行かんことを欲す、兩の健人有り、各一腋に扶けて老人に語つて言はく「所難有ること莫れ、至らんと欲する所に隨て我等二人終に相捨てず」と。是の如く須菩提、若し善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進有り、般若波羅蜜方便力の護る所と爲り、乃至一切種智の護る所と爲るが故に、當に知るべし、是人中道にして聲聞辟支佛地に墮せず。能く是處、謂ゆる阿耨多羅三藐三菩提に到る。」

(二)爾時、佛復須菩提を讚じて言はく「善い哉善い哉、須菩提、汝諸の菩薩摩訶薩の爲に、佛に是事を問ふ。須菩提、若し佛道を求むる善男子善女人有り、初發意より已來、我我所心を以て布施し、持戒し、忍辱し、精進し、禪定し、智慧す。是善男子善女人、布施の時是念を作さく「我は是れ施主なり、我れ是人に施す、我れ是物を施す、我れ戒を持す我れ忍を修す、我れ精進す、我れ禪に入る、我れ智慧を修す」と。是善男子善女人、是施有り是れ我が施なりと念ず。乃至是慧有り是れ我が慧なりと念ず。何を以ての故に。檀那波羅蜜中是の如き分別無く、此彼岸を遠離するは是れ檀那波羅蜜相なればなり。尸羅波羅蜜、

【是人此岸を知らず等】是人方便なく內に我我所心あり、外に一切法空を觀ぜず取相するをいふ。

羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜中是の如きの分別無し。何を以ての故に、此彼岸を遠離するは、是れ般若波羅蜜相なればなり、是人此岸を知らず、彼岸を知らず、是人檀那波羅蜜を爲さず、乃至一切種智の護る所と爲らざるが故に、聲聞辟支佛地に墮し、薩婆若に到ること能はず。須菩提、云何が佛道を求むる人方便無きや。須菩提、佛道を求むる人初發心より以來、方便無く、布施、持戒、忍辱、精進、禪定を行ひ、智慧を修す。是人是の如きの念を作さく、「我れ布施す、是人に施す、是物を以て施す、我れ持戒し、忍辱を修し、勤精進し禪定に入り、智慧を修す、是の如く智慧を修す」と。是人是施有り、是れ我が施なりと念ず、是施を以て自ら高くす。是戒有り、是戒我が戒なりと念ず、是戒を以て自ら高くす、是忍有り、是れ我が忍なりと念ず、是忍を以て自ら高くす。是精進有り、是れ我が精進なりと念ず、是精進を以て自ら高くす。是禪定有り、是れ我が禪定なりと念ず、是禪定を以て自ら高くす。是慧有り、是れ我が慧なりと念ず、此慧を以て自ら高くす。何を以ての故に、檀那波羅蜜中是の如きの分別無ければなり。此彼岸を遠離するは、是れ檀那波羅蜜相なり。彼此岸を遠離するは、是れ尸羅波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ羼提波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ毘梨耶波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ禪那波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ般若波羅蜜相なり、何を以ての故に、般若波羅蜜中、是憶念分別無ければなり。是佛道を求むる善男子善女人此岸を知らず、彼岸を知らず。此人檀那波羅蜜の護る所と爲らず、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶

【守護】五波羅蜜邊に功德を得、般若この邊に智慧力を得この二因緣の故に道を失はざるをいふ。

【此岸を知り等】この菩薩方便ありて内に我我所心なく、外一切法空を觀じて取相せず、般若方便乃至一切種智に守護せらるをいふ。

波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜の護る所と爲らず、乃至一切種智の護る所と爲らざるが故に、或は聲聞道中に墮し、或は辟支佛道中に墮し、薩婆若に到ることを得ること能はず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜方便力の守護する所と爲らざるが故に、或は聲聞地に墮し、或は辟支佛道地に墮す。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜方便力の護る所と爲るが故に、聲聞辟支佛道中に墮せず、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得るや。須菩提、菩薩初めより已來、方便力を以て布施し、我我所心無くして布施し、乃至我我所心無くして智慧を修す、是人是念を作さず。我れ是施有り、是れ我が施なりと、我れ是施を以て自ら高くせず。乃至般若波羅蜜も亦是の如し。是菩薩我が布施を念ぜず、我れ是人に施し、是物を用て施すことを念ぜず。我れ持戒す、是戒有りと念ぜず。我れ忍辱す、是忍辱有りと念ぜず。我れ精進す、是精進有りと念ぜず。我れ禪定す、是禪定有りと念ぜず。我れ智慧を修す、是智慧有りと念ぜず。何を以ての故に。是檀那波羅蜜中是の如きの分別無ければなり。此彼岸を遠離するは、是れ檀那波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ尸羅波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ羼提波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ毘梨耶波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ禪那波羅蜜相なり。此彼岸を遠離するは、是れ般若波羅蜜相なり。何を以ての故に。是般若波羅蜜中是の如きの憶念分別無ければなり。是菩薩摩訶薩、此岸を知り、彼岸を知る。此人檀那波羅蜜の護る所と爲る、尸羅波羅蜜の護る所と爲る、羼提波羅蜜の護る所と爲る。毘梨耶波羅蜜の護る所と爲る、禪那波羅蜜の

護る所と爲る、般若波羅蜜の護る所と爲る、乃至一切種智の護る所と爲るが故に、聲聞辟支佛地に墮せず、薩婆若に到ることを得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜方便力の護る所と爲るが故に、聲聞辟支佛地に墮せず、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得。」

知識品第五十二

（一）爾時慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊、新學の菩薩摩訶薩、云何が般若波羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を學ぶべき。」佛、須菩提に告げたまはく、「新學の菩薩摩訶薩、若し般若波羅蜜、禪那、精進、忍辱、持戒、檀那波羅蜜を學せんと欲せば、先づ當に善知識の能く是深般若波羅蜜を說く者に親近し、供養すべし。是人是教を作す、汝善男子、有ゆる布施を一切阿耨多羅三藐三菩提に廻向せよ、善男子、有ゆる持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を一切阿耨多羅三藐三菩提に廻向せよ、汝色を是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと以ふこと莫れ、受想行識を是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと以ふこと莫れ。檀那波羅蜜、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと以ふこと莫れ、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと以ふこと莫れ。內空、乃至無法有法空、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと以ふこと莫れ、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと以ふこと莫れ、

【知識品】新學は般若に通ずる善知識に親近すべきを明し、知識の教說を示す。

【一】佛、善知識の教化を說く。

【新學等】新發意なるも亦般若の氣味をえて能く化を受け、施等の功德に著せざるものなり。

【是教】無上菩提に廻向して相を取るべからざるを教ふ。

【諸法性空の故】新學菩薩に敎ふるに法空不取不著を以てするは高きに過ぐるが如し。大論には諸法の性空に大菩薩の所得と小菩薩の所學の二ありとし、小菩薩は柔順忍を以て空を學するを云ふとせり。

【二】菩薩の性空を知り無上道の心を發すこと甚難希有なるを明す。

四禪、四無量心、四無色定、五神通、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと以ふこと莫れ、佛の十力、乃至十八不共法、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと以ふこと莫れ。所以は云何。色を取らざれば便ち阿耨多羅三藐三菩提を得、受想行識を取らざれば便ち阿耨多羅三藐三菩提を得。檀那波羅蜜、乃至般若波羅蜜を取らざれば便ち阿耨多羅三藐三菩提を得。內空、乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法を取らざれば、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。善男子、是深般若波羅蜜を行ずる時、色を貪ること莫れ。何を以ての故に。善男子、是れ色は貪るべき者に非ざればなり。受想行識を貪ること莫れ。何を以ての故に。受想行識は貪るべき者に非ざればなり。善男子、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を貪ること莫れ。內空、乃至無法有法空を貪ること莫れ。四念處、乃至八聖道分を貪ること莫れ。四禪、四無量心、四無色定、五神通を貪ること莫れ。佛の十力、乃至一切種智を貪ること莫れ。何を以ての故に。一切種智は貪るべき者に非ざればなり。善男子、須陀洹果、乃至阿羅漢果を貪ること莫れ、辟支佛道を貪ること莫れ、菩薩法位を貪ること莫れ、阿耨多羅三藐三菩提を貪ること莫れ。何を以ての故に。阿耨多羅三藐三菩提は貪るべき者に非ざればなり。所以は云何。諸法性空なるが故に。

（二）須菩提、佛に白して言さく、『世尊、諸菩薩摩訶薩能く難事を爲す、一切性空法中に於て阿耨多羅三藐三菩提を求め、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。』佛言はく、『是の如く是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩能く難事を爲す。一切性空法中に於て阿耨多羅三藐三菩提を求

【難事】煩惱を斷ぜず、大悲を具せず、不退を得ずして性空に住し、能く無上道心を發すこと甚だ難し。
【安隱】能く一切煩惱を破し究竟して實失せず道に勤むる故多世常に安きことを得。
【樂】安隱にして今世後世樂なるをいふ。涅槃の樂なり。
【救】惡罪諸煩惱の因緣及び魔民の逐ふ所なるを能く救ふをいふ。
【歸】房舍に歸する如く世間種種の邪見煩惱等身心內外の諸憂苦を除く。
【依處】依止に二あり、一には愛見等の諸煩惱を以て有爲法に依止すると、淸淨智慧を以て涅槃に依るとなり、煩惱見の故に無依止と說く、是れ依處なり。

め、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。須菩提、諸の菩薩摩訶薩、世間を安隱ならしめんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。世間を樂ましめんが爲の故に、世間を救はんが爲の故に、世間の歸の爲の故に、世間の依處の爲の故に、世間の洲の爲の故に、世間の將導の爲の故に、世間の究竟道の爲の故に、世間の趣の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、世間を安隱ならしめんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、六道の衆生を拔出して無畏の岸、涅槃の處に著せしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩、世間を安隱ならしめんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。云何が菩薩摩訶薩、世間を樂ましめんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生種々の憂苦愁惱を拔出して、無畏の岸、涅槃の處に著せしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩、世間を樂しめんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。云何が菩薩摩訶薩、世間を救はんが爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生を生死中の種種の苦より救ひ、亦是苦を斷ぜんが爲の故に、而も說法を爲す、衆生法を聞き、漸く三乘を以て度脫を得。須菩提、是を菩薩摩訶薩、衆生を救はんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。云何が菩薩摩訶薩、世間の歸の爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生生老病死相、憂悲愁惱法より拔出して、無畏の岸、涅

【洲】衆生四流中に沒在し、佛八聖道の船を以て涅槃の洲上に引著せしむ、前後際不可得に喩ふるものなり。
【將導】種種の因緣を以て衆生を接度するをいふ。
【究竟道】諸法實相畢竟空なり。
【趣】歸に同じ。
【無畏】一切智漏盡等四無畏の境なり。

槃の處に著せしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩、世間の歸の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。云何が菩薩摩訶薩、世間の依處の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に、一切法無依處なることを說く。須菩提、是を菩薩摩訶薩、世間の依處の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、云何が一切法無依處なりや。』佛言はく、『色相續せず、即ち是れ色無生なり、色無生なれば、即ち是れ色不滅なり、色不滅なれば、即ち是れ色無依處なり。受想行識、乃至一切種智も亦是の如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩、世間依處の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。云何が菩薩摩訶薩、世間究竟道の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に、是の如きの法を說く、色究竟相是れ色に非ず。受想行識、乃至一切種智究竟相、是れ一切種智に非ず、須菩提、究竟相の如く、一切法相も亦是の如し。』須菩提言さく、『世尊、若し一切法相究竟相の如くならば、云何ぞ諸菩薩摩訶薩、皆阿耨多羅三藐三菩提を得べき。何を以ての故に。世尊、色究竟相中分別有ること無く、受想行識究竟相中分別有ること無く、乃至一切種智究竟相中分別有ること無し。所謂是れ色、是れ受想行識、乃至是れ一切種智なりと。』佛、須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、色究竟相中分別有ること無く、受想行識、乃至一切種智究竟相中分別有ること無し。謂ゆる是れ色、乃至是れ一切種智なりと。須菩提、是を菩薩摩訶薩の難事と爲す。

【三】世間の趣を廣說す。趣は安隱と同義なるも上九事の會歸なるを以て今說くなり。

是の如く諸法寂滅相を觀じ、而も心沒せず、却せず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩、是念を作せばなり。「是諸深法我れ應に是の如く、阿耨多羅三藐三菩提を知得すべし。是の如き寂滅微妙法當に衆生の爲めに說くべし。」と、是を菩薩摩訶薩、世間究竟道の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。云何が菩薩摩訶薩、世間の洲の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、若し江河大海四邊水斷ぜば、是を名けて洲と爲す。須菩提、色も亦是の如く前後際斷ず、受想行識も前後際斷ず、乃至一切種智前後際斷ず。是前後際斷ずるを以ての故に一切法も亦斷ず。須菩提、是一切法前後際斷ずるが故に卽ち是れ寂滅、卽ち是れ妙寶なり、謂ゆる空無所得、愛盡無餘、離欲涅槃なり。須菩提、若し菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、寂滅微妙の法を以て衆生の爲に說かば、須菩提、是を菩薩摩訶薩、世間の洲の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。云何が菩薩摩訶薩、世間の將導の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に色不生、不滅、不垢、不淨を說き、受想行識不生、不滅、不垢、不淨を說き、十二入、十八界、四念處、乃至八聖道分、四禪、四無量心、四無色定、五神通不生、不滅、不垢、不淨を說き、須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道不生、不滅、不垢、不淨を說き、佛の十力、乃至一切種智不生、不滅、不垢、不淨を說く。須菩提、是を菩薩摩訶薩、世間の將導の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。

(三)云何が菩薩摩訶薩、世間の趣の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。須菩提、菩

【色趣空】諸法究竟相は必ず空にして色等の諸法も亦是の如し。

【非趣非不趣】常等の四顚倒不可得にして顚倒の故に色等の諸法亦是の如く假和合にして實ならざれば、趣不趣に依て空なり、有なるに非ず。

【一切法等】趣のために發心するは一切法趣空ならざるなきが故なり。

【是趣過ぎず】是空を出過する者なきも空は偏無に非ず、不可得なるをいふなり。

【無相等】以下空の如く無相無作も亦然るを明す。

【不與不取等】空等に趣き趣も不可得なるが如く與不擧等の到る相にありても皆然るを明す。

薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に色趣空を說き、受想行識趣空を說き、乃至一切種智趣空を說く。衆生の爲に色非趣非不趣を說く。何を以ての故に。是色空相、趣に非ず、不趣に非ざればなり。受想行識相、非趣非不趣を說く、何を以ての故に。是受想行識空相、趣に非ず、不趣に非ざればなり。乃至一切種智、趣に非ず。不趣に非ざればなり。何を以ての故に。是れ一切種智空相、趣に非ず、不趣に非ざればなり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩世間の趣の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。何を以ての故に。一切法空に趣けばなり。是趣過ぎず。何を以ての故に。空の中に趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法無相に趣き、是趣過ぎず、何を以ての故に。無相の中に趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法無作に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。無作の中に趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法無起に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。無起中趣不趣不可得なるが故に。須菩提一切法無所有、不生、不滅、不垢、不淨に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。無所有、不生、不滅、不垢、不淨中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法夢に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。夢中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法幻に趣き、響に趣き、影に趣き、化に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。是化等の中に趣不趣不可得なるが故に、須菩提、一切法無量無邊に趣き、是趣過ぎず、何を以ての故に。無量無邊中趣不趣不可得なるが故に。須菩提一切法不與不取に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。不與不取中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法不擧不下に趣き、

是趣過ぎず、何を以ての故に。不擧不下中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法不增不減に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。無增無減中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法不來不去に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。不來不去中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法不入不出、不合不散、不著不斷に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。不著不斷中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法我、衆生壽命、人、起使起、作使作、知者見者に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。我乃至知者見者畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法常に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。常畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法樂淨我に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。樂淨我畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提一切法無常苦不淨無我に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。無常苦不淨無我畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法欲事に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。欲事畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法瞋事癡事見事に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。瞋事癡事見事畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法如に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。如中無來無去なるが故に。須菩提、一切法法性、實際、不可思議性に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。法性實際不可思議性中無來無去なるが故に。須菩提、一切法平等に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。平等中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、

一切法不動相に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。不動相中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法色に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。色畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法受想行識に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に、受想行識畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。十二入十八界も亦是の如し。須菩提、一切法檀那波羅蜜に趣き、是趣過ぎず、何を以ての故に、檀那畢竟不可得なればなり。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法尸羅波羅蜜に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。尸羅畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法羼提波羅蜜に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。羼提畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法毘梨耶波羅蜜に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に、毘梨耶畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法禪那波羅蜜に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。禪那畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法般若波羅蜜に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。般若畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法內空に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。內空畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法外空に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。外空畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法內外空に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。內外空畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。乃至一切法無法有法空に趣き是趣過ぎず。何を以ての故に。無法有法空畢竟不可

【四】細深の般若を信ずるは久行純熟の三毒を斷離せるものなるを明す。

【斷離】斷に根本斷と薄少斷の二ある中今後者を説く。煩惱相顚倒不定の故に斷と煩惱とを分別せず、煩惱即斷なるを離といふ。

【趣智品】因果常住に對して前に非趣非不趣とせるも、今無著心を以て般若行者の一切智に趣くを明す。

得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法四念處、乃至八聖道分に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。四念處乃至八聖道分畢竟不可得の故に。云何が當に趣不趣有るべき。須菩提、一切法佛十力、乃至一切種智に趣き、是趣過ぎず、何を以ての故に、一切種智中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。須陀洹果、乃至辟支佛道中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法阿耨多羅三藐三菩提に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。阿耨多羅三藐三菩提中趣不趣不可得なるが故に。須菩提、一切法須陀洹、乃至佛に趣き、是趣過ぎず。何を以ての故に。須陀洹乃至佛中趣不趣不可得なるが故に。』

(四)須菩提、佛に白して言さく、『世尊、是深般若波羅蜜、誰か能く信解する者ぞ。』佛、須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩有り、先に諸佛の所に於て、久しく六波羅蜜を行じ、善根純熟して、無數百千萬億の諸佛と供養し、善知識と相隨す、是輩人能く是深般若波羅蜜を信解す。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、能く是深般若波羅蜜を信解する者、何等の性、何等の相、何等の貌有りや。』佛言はく、『欲瞋癡斷離す、是れ性相貌なり。是菩薩摩訶薩は即ち能く深般若波羅蜜を信解す。』

趣智品第五十三

【一】一切種智に趣く者所歸たり、壞修を受けざるを明す。

【一切種智に趣く】般若の行果をいふに非ずして、般若を修すれば、諸法に障礙なし、一切種智は無障解脫なれば、趣果の言を假りていふのみ。

【衆生の所歸】子苦惱のために父母に歸する如く般若を解する菩薩は、無生にして大悲ある故に所歸處となる。

【一切法を修す】一切諸法を解して、皆般若に入る、是の故に般若を修するは即ち一切法を修するなり。

【所修無】般若に定實法の得べきものなきが故に所修とすべきものなし。

【不受修】般若中一切諸觀行過ある故に觀ぜりと受けざるをいふ。

（一）須菩提、佛に白して言さく『世尊、是諸菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜を解する者、當に何所に趣くべき。』佛、須菩提に告げたまはく『是菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜を解し、當に一切種智に趣くべし。』須菩提、佛に白して言さく『世尊、是菩薩摩訶薩、能く一切種智に趣く者は、則ち一切衆生の歸趣する所と爲る、般若波羅蜜を修するが故に。世尊、般若波羅蜜を修するは、即ち是れ一切法を修するなり。世尊、所修無きは是れ般若波羅蜜を修するなり。不受修壞修は是れ般若波羅蜜を修するなり。』佛、須菩提に告げたまはく『何等の法壞するが故に、般若波羅蜜を壞修と爲すや。』『世尊、色壞するが故に、般若波羅蜜を壞修と爲す。受想行識、十二入、十八界壞するが故に、般若波羅蜜を壞修と爲す。我乃至知者見者壞するが故に、般若波羅蜜を壞修と爲す。世尊、檀那波羅蜜壞するが故に、般若波羅蜜を壞修と爲す。乃至般若波羅蜜壞するが故に般若波羅蜜を壞修と爲す。內空乃至無法有法空、四念處、乃至十八不共法、須陀洹果、乃至一切種智壞するが故に、般若波羅蜜を壞修と爲す。』佛言はく『是の如く是の如し、須菩提、色壞するが故に、般若波羅蜜を壞修と爲し、乃至一切種智壞するが故に、般若波羅蜜を壞修と爲す。』爾時、佛須菩提に告げたまはく『是深般若波羅蜜中、阿惟越致菩薩摩訶薩、應に驗知すべし。若し菩薩摩訶薩、是深般若波羅蜜の中に於て著せざれば、當に知るべし、是れ阿惟越致なり。禪那波羅蜜、乃至檀那波羅蜜中に著せず、四念處、乃至一切種智中に著せざれば、當に知るべし、是れ阿惟越致なり。

【壞修】一切法無常にして散壞の故に。
【色壞等】壞修の壞とするは染淨一切法なるを明す。
【應知すべし等】般若行者の不退なるを知るは不著にあるを明す。
【二】不退菩薩の般若に習熟せる相を明す。
【他語】在家人の五欲樂に著する人不淨語、出家外道、人の諸邪見不實語、皆諸法實相に反するをいふ。
【他の教行】有爲不實相をいふ。
【遠離せず】淨法果報を知りて愛樂すればなり。
【一切種智に隨順する心】未だ一切種智を得ざるも畢竟空に隨順する心をいふ。
【是の如く】空の如く無相無作虛空等亦然り。
【作法無く】色等

若し阿惟越致の菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜を行ずる時、他語を以て堅要と爲さず、亦他の教行に隨はざれば、阿惟越致の菩薩摩訶薩、欲心瞋心癡心の牽く所と爲らず。若し阿惟越致の菩薩摩訶薩、六波羅蜜を遠離せず、若しは阿惟越致の菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜を說くを聞く時、心驚かず、沒せず、怖かず、畏れず、悔いず、歡喜し、樂聞し、受持し、讀誦し、正憶念し、說の如く行ず。須菩提、當に知るべし、是菩薩先世に已に是深般若波羅蜜中の事を聞き已りて、受持し、讀誦し、說き正憶念す。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩、大威德有るが故に、是深般若波羅蜜を聞き、心驚かず、怖かず、畏れず、沒せず、悔いず、歡喜し、樂聞し、受持し、讀誦し、正憶念す。須菩提、佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜を聞きて驚かず、怖かず、乃至正憶念せば、世尊、是菩薩摩訶薩、云何が是般若波羅蜜を行ずるや。」佛言はく、「一切種智に隨順する心にて、是菩薩摩訶薩、應に是の如く般若波羅蜜を行ずべし。」「世尊、云何が一切種智に隨順する心と名け、是菩薩摩訶薩、應に是の如く般若波羅蜜を行ずべしとするや。」佛言はく、「空を以て隨順す。是を菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜を行ずと爲す。無相、無作、無所有、不生、不滅、不垢、不淨を以て隨順す。是菩薩摩訶薩、應に是の如く般若波羅蜜を行ずべし。夢、幻、焰、響、化の如きを以て隨順す。是れ般若波羅蜜を行ずるなり。」須菩提、佛に白して言さく、「佛、空を以て隨順し、乃至夢の如く、幻の如く隨順し、是般若波羅蜜を行ずべきことを說きたまふ。世尊、是菩薩摩訶薩は何の法を行ずるや。若は色、若は受想行識、乃至一切種智な

有爲作法は虚妄、一切種智は實法、實法の故に有爲法を過ぐ。無作の故に壞法なし。

【從來するところなし】無壞法は六度より來るにも非る故に。

【去る所なく】別に佛法中に向つて去入すとすべきものなし。

【色はこれ薩婆若】般若は一切法を行ずるを以て得ず、故に一切智ならざるなし。

【色如相等】色即薩婆若の所以を重ねて示す。色等諸法如即ち是れ菩薩の薩婆若、薩婆若如は即ち是れ色等諸法如、この故に是の如き如の無二無別なりと說く。

りや。」佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、色を行ぜず受想行識を行ぜず、乃至一切種智を行ぜず。何を以ての故に。是菩薩行ずる處作法無く、壞法無く、從來する所無く、亦去る所無く、住處無し。是法數ふべからず、量有る無く、若は無數無量なり。是法得べからず、色を以て得べからず、乃至一切種智を以て得べからず。何を以ての故に。色は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ色なり。乃至一切種智は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ一切種智なり。若は色如相、乃至一切種智如相、皆是れ一如にして無二、無別なり。色如相、薩婆若如相、一如にして無二、無別なり、乃至一切種智も亦是の如し。』

摩訶般若波羅蜜經 卷第十六

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

大如品第五十四

（一）爾時、欲界の諸天子、色界の諸天子、天の末栴檀香を以て、天の青蓮華赤蓮華紅蓮華白蓮華を以て、遙かに佛の上に散じ、來りて佛の所に至り、佛足を頂禮して一面に住し、佛に白して言さく「世尊、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は甚深にして見難く解し難く、思惟し知るべからず、微妙寂滅の智者は能く知るも一切世間の信ずること能はざる所なり。何を以ての故に。是深般若波羅蜜中に是の如く說けばなり。色は卽ち是れ薩婆若、薩婆若は卽ち是れ色なり。乃至一切種智は卽ち是れ薩婆若、薩婆若は卽ち是れ一切種智なり。色如相と薩婆若如相とは、是れ一如にして二無く別無し、乃至一切種智如相と薩婆若如相とは一如にして二無く別無しと。」佛欲色界の諸天子に告げたまはく「是の如く是の如し、諸天子、色は卽ち是れ薩婆若、薩婆若は卽ち是れ色なり。乃至一切種智は卽ち是れ薩婆若、薩婆若は卽ち是れ一切種智なり。色如相乃至一切種智如相は、一如にして二無く別無し。諸天子、是義を以ての故に、佛初め成道の時、心に樂んで默然として說法することを樂まず。何を

【大如品】大如一乘の甚深を說き、成佛と平等大慈の佛行と得益とを明す。

【一】前にいふ色卽薩婆若の難見難解なるを明し、この法取著を離るるを示す。

【諸佛の阿耨多羅三藐三菩提等】寂滅智者の知る阿耨多羅三藐三菩提とは卽ち般若にして但名字を異にするのみ。菩薩心中にありて般若となり、佛心中にありて無上道と名くるなり。

【一切世間】一切に名字一切と實一切とあり、今は前者について一切をいふなり。

【佛初め成道の時等】諸法如と薩婆若如とは無二無別なりとの義を以て、初成道時に默然を樂み、說法を樂しまず、甚深の法は凡夫人の悟り難きが故に。

【得る者等】成佛に人時處の區別なきをいふ。

【諸法甚深相】諸法無二無別なるが故に、成佛の眞實相なり。

【色を受くる等】受捨あるは般若功德を修する能はず。

【著行】取著し爲作すること、卽ち我我所とするなり。

以ての故に。是諸佛の阿耨多羅三藐三菩提法は甚深にして見難く、解し難く、思惟し知るべからず。微妙寂滅の智者は能く知るも一切世間の信ずること能はざる所なればなり。何を以ての故に。阿耨多羅三藐三菩提は得る者無く、得る處なく、得る時無ければなり。是を諸法甚深相と名く、謂ゆる二法行ること無し。諸天子、虛空の如く甚深なるが故に、是法甚深なり、如甚深なるが故に、是法甚深なり、法性甚深、實際甚深、不可思議無邊甚深なるが故に、是法甚深なり。無來無去甚深なるが故に、是法甚深なり。不生不滅無垢無淨無知無得甚深なるが故に、是法甚深なり。諸天子、我甚深、乃至知者見者甚深なるが故に、是法甚深なり。諸天子、色甚深、受想行識甚深なるが故に、是法甚深なり。檀那波羅蜜甚深、乃至般若波羅蜜甚深なるが故、是法甚深なり。內空乃至無法有法空甚深なるが故に、是法甚深なり。四念處甚深、乃至一切種智甚深なるが故に、是法甚深なり。爾時、欲色界の諸天子、佛に白して言さく、「世尊、是所說の法は一切世間の信ずること能はざる所なり。世尊、是甚深の法は色を受くるが爲の故に說かず、色を捨つるが爲の故に說かず、受想行識を受くるが爲の故に說かず、受想行識を捨つるが爲の故に說かず。須陀洹果を受くるが爲の故に說かず、須陀洹果を捨つるが爲の故に說かず。乃至一切種智を受くるが爲の故に說かず。一切種智を捨つるが爲の故に說かず。諸の世間は皆著行を受くと說く、謂ゆる色は是れ我、是れ我所、受想行識は是れ我、是れ我所、乃至十八不共法は是れ我、是れ我所、須陀洹果は是れ我、是れ我所、乃至一切種智は是れ我、是れ我所なりとこれなり。佛

【二】般若の一切法に隨順し無礙不生無處なるを明す。

【無處】一切法不可得の故に住處なし。

【三】須菩提の何ものなるかを明す。

【佛子】三種子あり一に不隨順生、二に隨順生、三に勝生是れなり。佛法中佛に勝るるものなき故に、惟隨順生を欲するのみ。佛子は皆佛口より生じ、法より生ずるものとす。

諸天子に告げたまはく『是の如く是の如し、諸天子、是法は色を受くるが爲の故に說くに非ず、色を捨つるが爲の故に說くに非ず。乃至一切種智を受くるが爲の故に說くに非ず、一切種智を捨つるが爲の故に說くに非ず。諸天子、若し菩薩有りて、色を受くるが爲の故に行じ、乃至一切種智を受くるが爲の故に行ぜば、是菩薩は般若波羅蜜を修すること能はず、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜を修すること能はず、檀那波羅蜜を修すること能はず、乃至一切種智を修すること能はず。』

(二)須菩提佛に白して言さく『世尊、是法は一切法に隨順す。云何が是法一切法に隨順するや。是法は般若波羅蜜に隨順し乃至檀那波羅蜜に隨順し、是法は內空に隨順し乃至無法有法空に隨順し、是法は四念處に隨順し乃至一切種智に隨順す。是法は無礙にして色を礙せず、受想行識を礙せず、乃至一切種智を礙せず。諸天子、是法を無礙相と名く、虛空の如く等しきが故に。如、法性、法住、實際、不可思議性等しきが故に。空、無相、無作等しきが故に。是法は不生相なり、色不生、不可得なるが故に、受想行識不生、不可得なるが故に、乃至一切種智不生、不可得なるが故に。是法無處なり、色處不可得なるが故に、受想行識處不可得なるが故に、乃至一切種智處不可得なるが故に。』

(三)是時、欲色界の諸天子、佛に白して言さく『世尊、須菩提は是れ佛子、佛口に隨つて生ず。何を以ての故に。須菩提の說く所、皆空と合すればなり。』爾時、須菩提諸天子に語らく『汝等、須菩提は是れ佛子、佛に隨つて生ずと言ふ。云何が佛に隨つて生ずと爲すや。

【須菩提の說く所等】諸漏盡者は是れ隨順生なり、須菩提は漏盡中に於て常に畢竟空を樂しむ、是れ隨順生なり。何者、所行法破壞すべからざること虛空の如きが故に。

【一切法の如相】一切法中に須菩提を攝する故に、以下須菩提の隨順生を明さんとして一切法等といふ。

【念無く別無し】憶想分別なきなり

【諸法の如相を遠離せず】正しく一切法を攝ずるを佛と名くれば、諸法は因緣、佛は果報にして、故に如來如と一切法如は離れざるなり。

【不如ならず】この如實なれば常に如にして如ならざる時なし。

【過去ならず等】如來如相は三世を出過する事を說く

諸天子、如相の故に、須菩提は佛に隨て生ず。何を以ての故に。如來の如相は不來不去なり、須菩提の如相も亦不來不去なり、是故に須菩提は佛に隨て生ず。復次に、須菩提は本より以來佛に隨て生ず。何を以ての故に。如來の如相は卽ち是れ一切法の如相なり、一切法の如相は卽ち是れ如來の如相なり、是如相中亦如相無し。是故に須菩提を佛に隨て生ずと爲す。復次に如來如は常住相なり、須菩提如も亦常住相なり、如來の如相は異無く別無し、須菩提の如相も亦是の如く異無く別無し、是故に須菩提を佛に隨て生ずと爲す。如來の如相は礙處有ること無く、一切法の如相も亦礙處無し、是如來の如相と一切法の如相とは一如にして二無く別無し、是如相無作にして終に不如ならず、是故に是如相は一如にして二無く別無し、是故に須菩提を佛に隨て生ずと爲す。如來の如相は一切處念無く別無し。須菩提の如相も亦是の如し。一切處念無く別なし、如來の如相は異ならず、別ならず、得べからず、須菩提の如相も亦是の如し。是を以ての故に。須菩提を佛に隨て生ずと爲す。如來の如相は諸法の如相を遠離せず、是如、終に不如ならず、是故に須菩提、如も異ならざるが故に、佛に隨て生ずと爲すも亦隨ふ所無し。復次に如來の如相は過去ならず、未來ならず、現在ならず、諸法の如相も亦過去ならず、未來ならず、現在ならず。是故に須菩提を佛に隨て生ずと爲す。復次に如來如は過去如の中に在らず、過去如は如來如の中に在らず、如來如は未來如の中に在らず、未來如は如來如の中に在らず、如來如は現在如の中に在らず、現在如は如來如の中に在らず、過去未來現在如と如來如とは

【四】如如の深法を說く故大地六種震動等のことあり、更に隨生の生とすべきもののなきを說く。

一如にして二無く別無し。色如、如來如、受想行識如、如來如、是色如と受想行識如と如來如とは一如にして二無く別無し。我如乃至知者見者如と如來如とは一如にして二無く別無し。檀那波羅蜜如乃至般若波羅蜜如、內空如乃至無法有法空如、四念處如乃至一切種智如と如來如とは一如にして二無く別無し。須菩提も菩薩摩訶薩も是如を得るが故に名けて如來と爲す。」

(四)是如相品を說く時、是三千大千世界の大地六種に震動す、東に踊り西に沒し、西に踊り東に沒し、南に踊り北に沒し、北に踊り南に沒し、中央に踊り四邊に沒し、四邊に踊り中央に沒す。是時諸の欲天子、諸の色天子は天の末栴檀香を以て佛の上に散じ、及び須菩提の上に散じ、佛に白して言さく、「未曾有なり、世尊、須菩提は如來如を以て佛に隨て生ず。」須菩提は復諸天子の爲に說いて言はく、「諸天子、須菩提は色中より佛に隨て生ぜず、亦色如中より佛に隨て生ぜず、色を離れ佛に隨て生ぜず、亦色如を離れ佛に隨て生ぜず。須菩提は受想行識中より佛に隨て生ぜず、亦受想行識如中より佛に隨て生ぜず、受想行識を離れ佛に隨て生ぜず、亦受想行識如を離れ佛に隨て生ぜず。乃至一切種智中より佛に隨て生ぜず、亦一切種智如中より佛に隨て生ぜず、一切種智中を離れ佛に隨て生ぜず、亦一切種智如中を離れ佛に隨て生ぜず。須菩提は無爲中より佛に隨て生ぜず、亦無爲如中より佛に隨て生ぜず、無爲中を離れ佛に隨て生ぜず、亦無爲如中を離れ佛に隨て生ぜず。何を以ての故に。是一切法皆所有無く得べからず、隨て

【五】舍利弗實相の諸法諸法如得べからざるを說くを印可して法爾を明かにす。

【色、色如】眼所見の法にして作法有爲虛誑にして顚倒より生ずるを色等の法とし、この法を如實不虛誑と知るを色如等とす。

【是六千等】佛より般若を聞き、深く世間を厭ふも、慈悲心薄きが故に、自利を求めて一切法を受けず、卽ち、羅漢を得るなり、但、般若の方便無き故、五度を行ずるもこの無分別法を得ざるなり。

生ずる者無く、隨て生ずる法無ければなり。」

(五)爾時、舍利弗佛に白して言さく「世尊、是如は實にして虛ならず、法相、法住、法位甚深なり。是中に色得べからず、色如得べからず。何を以ての故に。色尙得べからず、何に況んや色如當に得べけんや。受想行識得べからず、受想行識如得べからず。乃至一切種智得べからず、一切種智如得べからず。何を以ての故に。一切種智尙得べからず。何に況んや一切種智如得べけんや。」佛舍利弗に告げたまはく「是の如く是の如し、舍利弗、是如は實にして虛ならず、法相、法住、法位甚深なり、是中に色得べからず、色如得べからず。何を以ての故に。色尙得べからず、何に況んや色如當に得べけんや。乃至一切種智得べからず、一切種智如得べからず。何を以ての故に。一切種智尙得べからず、何に況んや一切種智如當に得べけんや。舍利弗、是如相を說く時、二百比丘は一切法を受けざるが故に、漏盡きて阿羅漢を得。五百比丘尼は塵を遠け垢を離れて諸法中に法眼を得、天人の中に生ず。五千菩薩摩訶薩は無生法忍を得、六千菩薩は諸法を受けざるが故に、漏盡き心に解脫を得、阿羅漢を成ず。舍利弗、是六千菩薩は先世に五百佛に値ひて親近し供養し、五百佛法中に於て布施持戒忍辱精進禪定を行じたるも、般若波羅蜜無く、方便力無きが故に、別異の相を行じ、是念を作せり、是れ布施なり、是れ持戒なり、是れ忍辱なり、是れ精進なり、是れ禪定なりと。般若波羅蜜無く、方便力無きが故に、布施持戒忍辱精進禪定に異別の相を

行ず、異別の相を行ずるが故に、異相無きことを得ず。異相無きことを得ざるが故に、菩薩の位に入ることを得ず。菩薩の位に入ることを得ざるが故に、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果を得、舍利弗、菩薩摩訶薩の道、若は空、若は無相、若は無作法有りと雖も、般若波羅蜜を遠離し、方便力無きが故に、便ち實際に於て證を作し、聲聞乘を取る。」

舍利弗佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故に、俱に空無相無作法を行ずるも、方便力を遠離すれば、實際に於て證を作し、聲聞乘を取り、菩薩摩訶薩も亦空無相無作法を修するも、方便力有るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得るや。」佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩有り、薩婆若心を遠離して、空無相無作法を修せば、方便力無きが故に聲聞乘を取る。舍利弗、復菩薩摩訶薩有りて、薩婆若心を遠離せず、空無相無作法を修せば、方便力有るが故に、菩薩位に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得。舍利弗、譬へば鳥有りて、身長百由旬、若は二百、三百由旬、而も翅有ること無く、三十三天より自ら閻浮提に投ずるが如し。舍利弗、汝が意に於て云何。是鳥、中道にして是念を作さく、「三十三天に還上せんと欲す」と。能く還ることを得るや不や。』『得ざるなり、世尊。』『舍利弗、是鳥復是願を作す、閻浮提に到て身をして痛まず、惱まざらしめんと欲すと。舍利弗、汝が意に於て云何。是鳥痛まず、惱まざることを得るや不や。』舍利弗言さく、「得ざるなり。世尊、是鳥地に到らば若は痛み、若は惱み、若は死し、若は死に等しく苦しまん。何を以ての故に。世尊、是鳥は身大にして翅無きが故に。」『舍利弗、菩薩摩訶薩も亦是の如し、如恒河沙等の

【實際に於て證を作し】般若方便なく五變を修集するも、分別を得ず、菩薩の五根を失ふ。故に般若を聞くも、菩薩の所聞の如きを得ず、卽ち實際に於て證を作すなり。

【六】行同じくして果別なる所以を譬喩を以て廣說す。

【鳥有りて等】鳥は菩薩、身大は世世五度の功德を集むるに、兩翅なしとは般若なく方便なきに、三十三天は無最佛法に、閻浮提は三界に喩ふ。

【還上せん】作佛心に喩ふ。

【若は死等】死は羅漢道、死に等しくは辟支佛道、痛惱は菩薩の本願功德を失ふに喩ふ。

劫に布施持戒忍辱精進禪定を修し、大事を發し、大心を生じ、阿耨多羅三藐三菩提を得るが爲の故に、無量願を受くと雖も、是菩薩は般若波羅蜜方便力を遠離するが故に、若は阿羅漢に墮し、若は辟支佛道に墮す。何を以ての故に。是菩薩は薩婆若心を遠離して、布施持戒忍辱精進禪定あるも、般若波羅蜜無く、方便力無きが故に、聲聞地若は辟支佛道中に墮す。舍利弗、若し菩薩摩訶薩、過去未來現在の諸佛を念ずと雖も、持戒禪定智慧解脱解脱智見に相を取て受持せば、是人は諸佛の戒定慧解脱解脱知見を知らず、解せず、但だ空無相無作の名字聲を聞くのみ、而して無作の名字聲を取て阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。菩薩摩訶薩、若し是の如く廻向せば、聲聞辟支佛地中に住して過ぐることを得る能はず。何を以ての故に。般若波羅蜜方便力を遠離して諸善根を持し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意より以來薩婆若心を遠離せず、布施持戒忍辱精進禪定を行じ、般若波羅蜜方便力を遠離せざるが故に相を取らず、過去未來現在の諸佛は戒定慧解脱解脱知見に於て、空解脱門相を取らず、無相無作解脱門相を取らず、舍利弗、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は聲聞辟支佛道に墮せず、直ちに阿耨多羅三藐三菩提に至る。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は初發意より以來、布施を行じて相を取らず、持戒し、忍辱し、精進し、禪定して相を取らず、過去未來現在の諸佛の戒定慧解脱、解脱知見に相を取らず。舍利弗、是を菩薩の方便力と名く。離相心を以て布施持戒忍辱精進禪定を行じ、乃至離相心をもて一切種智を行ず。」舍利弗佛に白して言さく、「世尊、我れ佛の

【七】佛果得難きを明し、得相なきの故とす、且つ得相なくば退還もなく得易しともいふべき得を示す。【是阿耨……菩提得易し】須菩提の説は一切法畢竟常空の故に無上道は得易しといふ。是中得る者無しとは得べき法なく、無障無礙無所斷無所修の故なればなり。

所說の義を解するが如く、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜方便力を遠離せざれば、當に知るべし、是菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に近づけりと。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は初發心より以來、法の若は色、若は受想行識乃至一切種智を知るべき無ければなり。世尊、菩薩道を求むる善男子善女人有り、般若波羅蜜及び方便力を遠離せば、當に知るべし、是人は阿耨多羅三藐三菩提に於て或は得、或は得ずと。何を以ての故に。世尊、是菩薩道を求むる善男子善女人の有ゆる布施皆相を取り、有ゆる持戒忍辱精進禪定皆相を取る。是を以ての故に、善男子善女人は阿耨多羅三藐三菩提に於て定まらず。世尊、是因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、般若波羅蜜方便力を遠離すべからず。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜方便力の中に住し、無得無相心を以て應に布施持戒忍辱精進禪定を修すべし、乃至無得無相心を以て應に一切種智を修すべし。』

（七）爾時、欲色界の諸天子佛に白して言さく『世尊、阿耨多羅三藐三菩提は得難し。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は應に一切諸法を知りるも、是法亦得べからざればなり。』佛言はく『是の如く是の如し、諸天子、阿耨多羅三藐三菩提は得難し、我も亦一切法一切種智を得已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得るも、亦得る所無く、能く知る無く、知る所無く、知る者無し。何を以ての故に。諸法畢竟淨なるが故に。』須菩提佛に白して言さく『世尊、佛の所說の如くば阿耨多羅三藐三菩提得難し。我れ佛の所說の義を解し、我が心に思惟するが如くば、是阿耨多羅三藐三菩提得易し。何を以ての故に。阿耨多羅三藐三菩提を得る

【舍利弗…語らく等】成佛得易しといふを難じ無量の菩薩佛道を求むるのなれば、若し一二の作佛者ありとするも餘は退還あるが故にといふなり。

【虛空等】空ならば發心なし、然るに發心あるを以て空ならざるべし。

【退還するや不や】須菩提諸法の退還なきを論ず。

【不】色等の法畢竟空なれば退還あることなし。

【不】色等を離れて更に法あることなし。

【不】色等の法如も二相なく分別なき故に退轉なし。

者有ること無く、亦得べき法無く、一切法一切法相空にして、法の得べきもの無く、能く得る者無ければなり。何を以ての故に。一切法空なるが故に亦法の增すべき無く、亦法の減ずべき無く、謂ゆる布施持戒忍辱精進禪定乃至一切種智、是法皆得べき者無く、能く得る者無ければなり。世尊、是因緣を以ての故に我れ意に謂へらく、『阿耨多羅三藐三菩提得易しと爲す』と。何を以ての故に。世尊、色色相空、受想行識識相空、乃至一切種智一切種智相空なればなり。』舍利弗須菩提に語らく、『若し一切法空にして虛空の如くば、虛空は是念を作さず、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。若し菩薩摩訶薩、一切諸法空なること虛空の如きを信解し、是阿耨多羅三藐三菩提得易き者ならば、今如恆河沙等の諸菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を求めて、何を以て退還するや。須菩提、是を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提の得易からざるを知る。』須菩提舍利弗に語らく、『意に於て云何、色は阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく、『不。』『受想行識は阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく、『不。』『乃至一切種智は阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく、『不。』『色を離れて法有り、阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく、『不。』『受想行識を離れて法有り、阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく、『不。』『乃至一切種智を離れて法有り、阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利非言はく、『不。』『舍利弗、意に於て云何、色如相は阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく、『不。』『受想行

【不】色等の法を破し已れば如亦自ら空なり。即ち退還なし。

【八】三乘不可得を論ず。

【是法忍中】法忍とは法門法修法行法にして、法門に須菩提所說の法門に入れば則ち退なく、この門を出づれば退あり。

【若し退還せざれば】深法忍中無退とするも佛說に反するを難ず、無退ならんに佛說の三乘あるべからざるべしとなり。

識如相、乃至一切種智如相は阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく『不。』『色如相を離れて法有り、阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく『不。』『受想行識如相を離れ、乃至一切種智如相を離れて法有り、阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく『不。』『舍利弗、意に於て云何、如は阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく『不。』『法性法住法位實際、不可思議性は阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく『不。』『舍利弗、意に於て云何、如を離れて法有り、阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく『不。』『法性法住法位實際、不可思議性を離れて法有り、阿耨多羅三藐三菩提に於て退還するや不や。』舍利弗言はく『不。』須菩提舍利弗に語らく、『若し諸法畢竟得べからざれば、何等の法か阿耨多羅三藐三菩提に於て退還せんや。』

(八)舍利弗須菩提に語らく『須菩提の所說の如くば、是法忍中菩薩の阿耨多羅三藐三菩提に於て退還する者有る無し。若し退還せざれば佛求道者三種有りと說く、阿羅漢道、辟支佛道、佛道なり。是三種無分別と爲る。須菩提の說の如くば、獨り一菩薩摩訶薩の佛道を求むるもの有るのみ。』是時、富樓那彌多羅尼子、舍利弗に語らく『應に須菩提に問ふべし、一菩薩乘有りと爲すや不や』と。爾時、舍利弗、須菩提に問はく『須菩提、一菩薩乘有りと說かんと欲することを爲すや不や。』須菩提、舍利弗に語らく『諸法如中に於て、三種乘、聲聞乘、辟支佛乘、佛乘有らしめんと欲するや。』舍利弗言はく『不。』『舍利弗、三乘分

別中、如中分別して、三乘有るを得べきや不や。』舍利弗言はく、『不。』『舍利弗、是如、若は一相、若は二相、若は三相有りや不や。』舍利弗言はく、『不。』『舍利弗、汝は如中に於て乃至一菩薩有ることを欲するや不や。』舍利弗言はく、『不。』『是の如く四種中に三乘人得べからず。舍利弗、云何が是念を作すや、是れ聲聞乘を求むる人、是れ辟支佛乘を求むる人、是れ佛乘を求むる人なりと。舍利弗、菩薩摩訶薩は是諸法の如相を聞きて心驚かず、沒せず、悔いず、疑はず、是を菩薩摩訶薩の能く阿耨多羅三藐三菩提を成就すと名く。』爾時、佛須菩提を讃じて言はく、『善い哉善い哉、須菩提、汝の所說は皆是れ佛力なり。須菩提、若し菩薩摩訶薩、是如、諸法別異有ること無きを說くを聞き、心驚かず、怖かず、畏れず、難からず、沒せず、悔いざれば、當に知るべし、是菩薩は能く阿耨多羅三藐三菩提を成就すと。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、何等の菩提を成就するや。』佛言はく、『佛の阿耨多羅三藐三菩提を成就す。』

(九)須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に云何が行ずべき。』佛言はく、『應に等心を起すべし、一切衆生に於て亦等心もて與に語り、偏黨有ること無く、一切衆生中に於て大慈心を起す。亦大慈心を以て與に語り、一切衆生中に於て下意す。亦下意を以て與に語り、一切衆生中に於て應に安隱心を生ずべし。亦安隱心を以て與に語り、一切衆生中に於て應に無礙心を生ずべし。亦無礙心を以て與に語り、一切衆生中に於て應に無惱心を生ずべし。亦無惱心を以て與に語り、一切

【富樓那云云】舍利弗の一乘なるべしと云ふより更に進みて一乘も無きを論ず。

【諸法如中に於て等】須菩提如相の四句を以て三乘を破す。

【佛須菩提を讃ず等】須菩提の佛力によりて大乘無上の成佛を說けるを佛讃じ給ふ。

【何等の菩提】三乘菩提の定相なきに今菩提を成就すとは何等の菩提を成ずるかを問ふ。

【佛の…菩提】若し畢竟空門に入れば一切法盡く一相なり。若し畢竟空を出づれば三乘則ち異あり。

【九】成佛の行を明す。

【等心】空慧眼による平等心なり。

【一切衆生】各分れて三、怨親中なり、怨心と中心を生ずるなく親愛想

あるを衆生に等心を以てすと云ふ。【與に語り】差別する事なしに平等に交際するをいふ。【大慈心】世間の愛憎を離れ、平等の上に一切に慈念を加へ慈愛心を行ず。等心は四無量に通じ慈心はその一たる慈無量なり【下意】無我の故に卑下自小し、侵害せらるるも瞋恚なく他を輕侮凌辱せず。【安隱心】今世後世に究竟樂を與ふる心なり。【無礙心】惡魔のために惱まさるることも、恩分を知らざる惡も、等心の故に通達して無礙なり。【無惱心】慈心安隱にて無礙なる故衆生に大罪大過ありと雖も惱心なし【愛敬心】孝子の父母を愛敬するが如く婬欲なきの心

衆生中に於て應に愛敬心を生ずべし、父の如く、母の如く、兄の如く、弟の如く、姉妹の如く、兒子の如く、親族の如く、知識の如く、亦愛敬心を以て與に語る。是菩薩摩訶薩は應に自ら殺生せず、亦人をして殺生せざらしめ、不殺生法を讚し、諸の不殺者を歡喜し讚歎す。乃至自ら邪見を行ぜず、亦他人をして邪見を行ぜざらしめ、不邪見法を讚歎し、不邪見者を歡喜し讚歎す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、當に是の如く行ずべし。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に自ら初禪を行じ、亦他人をして初禪を行ぜしめ、初禪を行ずる法を讚歎し、初禪を行ずる者を歡喜し讚歎すべし、二禪三禪四禪も亦是の如し。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に自ら慈心を行じ、亦人をして慈心を行ぜしめ、慈心を行ずる法を讚歎し、慈心を行ずる者を歡喜し讚歎すべし、悲喜捨心も亦是の如し。自ら虛空處を行じ、亦人をして虛空處を行ぜしめ、虛空處を行ずる法を讚歎し、虛空處を行ずる者を歡喜し讚歎す、識處無所有處非有想非無想處も亦是の如し。自ら檀那波羅蜜を具足し、亦人をして檀那波羅蜜を具足せしめ、檀那波羅蜜を具足する法を讚歎し、檀那波羅蜜を具足する者を歡喜し讚歎す。尸羅羼提毘梨耶禪那、般若波羅蜜も亦是の如し。復次に、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、自ら內空を行じ、亦人をして內空を行ぜしめ、內空を行ずる法を讚歎し、內空を行ずる者を歡喜し讚歎す、乃至無法有法空も亦是の如し。自ら四念處を行じ、亦人をして四念處を行ぜしめ、四

【父等】世人但所親を愛敬するのみなるも、菩薩は普く一切に及ぼす。
【愛敬心を以て共に語る】等　心乃至愛敬心を養へるを柔軟清淨好心を得といひ、衆生忍と名く。是れ法忍の初門なり。
【自ら殺生せず等】次に十善道を行ず十善各各不自行惡不教他行惡、讃不行惡法、讃不行惡者の四ありて四十種行とす。十善を行ずるは菩薩深く善法を念じ心に衆生を慈しむ故なり
【初禪を行じ等】次に離欲凡夫法十二事を明す。四禪四無量四無色各各自行教他等の四ありて四十八種行となる。十善道、離欲法共に有佛無佛の世間に常に在る善法教なり。
【檀那を具足し】六度乃至法住を列

念處を行ずる法を讃歎し、四念處を行ずる者を歡喜し讃歎す、乃至八聖道分も亦是の如し。自ら空三昧、無相、無作三昧を修し、亦人をして空、無相、無作三昧を修せしめ、空、無相、無作三昧を修する法を讃歎し、空、無相、無作三昧を修する者を歡喜し讃歎す。自ら八背捨を行じ、亦人をして八背捨を行ぜしめ、八背捨を行ずる法を讃歎し、八背捨を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら九次第定を行じ、亦人をして九次第定を行ぜしめ、九次第定を行ずる法を讃歎し、九次第定を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら佛十力を具足し、亦人をして佛十力を具足せしめ、佛十力を具足する法を讃歎し、佛十力を具足する者を歡喜し讃歎す。自ら四無所畏四無礙智、十八不共法大慈大悲を行じ、亦人をして四無所畏乃至大慈大悲を行ぜしめ、四無所畏乃至大慈大悲を行ずる法を讃歎し、四無所畏乃至大慈大悲を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら逆順に十二因緣を觀じ、亦人をして逆順に十二因緣を觀ぜしめ、逆順に十二因緣を觀ずる法を讃歎し、逆順に十二因緣を觀ずる者を歡喜し讃歎す。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に是の如く行ずべし。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、自ら應に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修すべし。亦人をして苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修せしめ、苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修する法を讃歎し、苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修する者を歡喜し讃歎す。自ら須陀洹果證智を生じ、亦實際を證せず、亦人をして須陀洹果中に著せしめ、須陀洹果法を讃歎し、須陀洹果を得る者を歡喜し

讚歎す。斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果も亦是の如し、自ら辟支佛道證智を生じ而も辟支佛道を證せず、亦人をして辟支佛道中に著せしめ、辟支佛道法を讚歎し、辟支佛道を得る者を歡喜し讚歎す。自ら菩薩位に入り、亦人をして菩薩位に入らしめ、菩薩位に入る法を讚歎し、菩薩位に入る者を歡喜し讚歎す。自ら佛國土を淨め、衆生を成就し、亦人をして佛國土を淨め、衆生を成就せしめ、佛國土を淨め、衆生を成就する法を讚歎し、佛國土を淨め、衆生を成就する者を歡喜し讚歎す。自ら菩薩の神通を起し、亦人をして菩薩の神通を起さしめ、菩薩の神通を起す法を讚歎し、菩薩の神通を起す者を歡喜し讚歎す。自ら一切種智を生じ、亦人をして一切種智を生ぜしめ、一切種智を生ずる法を讚歎し、一切種智を生ずる者を歡喜し讚歎す。自ら一切結使習を斷じ、亦人をして一切結使習を斷ぜしめ、一切結使習を斷ずる法を讚歎し、一切結使習を斷ずる者を歡喜し讚歎す。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に是の如く行ずべし。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、自ら壽命成就を取り、亦人をして壽命成就を取らしめ、壽命成就を取る法を讚歎し、壽命成就を取る者を歡喜し讚歎す。自ら法住を成就し、亦人をして法住を成就せしめ、法住を成就する法を讚歎し、法住を成就する者を歡喜し讚歎す。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に是の如く行ずべし、亦應に是の如く般若波羅蜜方便力を學すべし。是菩薩は是の如く學し、是の如く行ずる時、當に無礙色を得、無礙受想行識を得、乃至無礙法住を

ね各各四種行を明す。是れ客法にして佛有ての説なれば則ち菩薩行あり

【逆順に十二因縁を觀じ】無明、行の順に老死に至るを觀ずるを順觀といひ、老死より生乃至無明と觀ずるを逆觀といふ。

【聖智を生じ而も實際を證せず】聖果の斷惑智見あるもその果地に住せず小果に入らざるをいふ。

【著せしめ】到著の意。

【菩薩位】第九地をいふ。

【結使習】煩惱とその習氣、

【法住】一切諸法畢く實相の法位に住すること。

【應に…行ずべし等】上來佛行を明し菩法客法本末具身す今世に善法を得て智慧無礙なり身を捨して法身無礙なるを得、法意に無

得べし。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は本より以來色を受けず、受想行識を受けず、乃至一切種智を受けざればなり。何を以ての故に。色の受けざるは色に非ずと爲し、乃至一切種智の受けざるは一切種智に非ずと爲せばなり。是菩薩行品を說く時、二千の菩薩無生法忍を得。」

不退品第五十五

〔一〕須菩提佛に白して言さく、「世尊、何等の行、何等の類、何等の相貌を以て、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と知るや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、能く凡夫地聲聞地辟支佛地、是諸地の如相中二無く別無きを知り亦念ぜず亦分別せざれば、是如中に入り、是事を聞き、直に過ぎて疑無し。何を以ての故に。是如中一無く二相無きが故に。是菩薩摩訶薩は亦無益の語を作さず、但だ利益相應の語を說きて、他人の長短を視ず。須菩提、是行類相貌を以て、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と知る。」須菩提言さく、「世尊、復何の行類相貌を以て、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と知るや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、能く一切法行無く、類無く、相貌無しと觀ば、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し一切法、行無く、類無く、相貌無ければ、菩薩何等の法に於て轉ずるを不轉と名くるや。」佛言はく、「若し菩薩摩訶薩、色中に轉じ、

隨つて十方衆生を教化し得べし。

【無礙色】色の實相は無礙なり、本來不受なれば色の色とすべきものなきこれ無礙の色なり。

【無生法忍を得】この品は如の微妙深義を說き、亦善門智門二行具足を說く、但如法或は有法のみを說けば利少きも、今有無二法具足を說く故に無生法忍を得るなり。

【不退品】初に般若相、次に隨縁壞般若相として不退を認むべき行類相貌を廣說す。

【一】不退の相貌行類を說く。

【行】菩薩の三身は他人と異り、この行を以て阿惟越致甚深の智慧を表はす。

【[illegible]】分別して諸菩薩の退不退を知るべきもの。

【相貌】行類を除く餘の種種因緣、即ち不退を知りうるもの。
【如相】諸法實相。
【念ぜ、亦分別せず】凡夫二乘を賤しとせず佛地を貴しとなさず、諸法如に入るを以て分別取相することなし如平等とするなり
【直に過ぎて等】諸法の決定相を求め、諸佛の法藏に入りて疑なし。
【是菩薩等】是以上は不退の正體にして已下は盡く畢竟空の行果を示す。
【無益の語等】所說常に法にして非法に非ず、皆實にして妄語なし、所言柔軟にして時に隨ひ機に應じ方俗に順じ、常に口惡を遠離す。
【行なし等】衆生不退相に著するをえて凡夫より不退地に入らしめんと

受想行識中に轉ず、是を菩薩不轉と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、檀那波羅蜜中に轉じ、乃至般若波羅蜜中に轉じ、內空中乃至無法有法空中に轉じ、四念處中乃至十八不共法中に轉じ、聲聞辟支佛地中に轉じ、乃至阿耨多羅三藐三菩提中に轉ず、當に知るべし、是を菩薩摩訶薩不轉と名く。何を以ての故に。須菩提、色性無なり、是菩薩、何の所にか住せん。乃至阿耨多羅三藐三菩提性無なり、是菩薩何の所にか住せん。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は外道沙門婆羅門の面貌、言語を觀ぜず、是念を作さず、是諸の外道、若は沙門、若は婆羅門、實に知り、實に見、若は正見を說くと。是事有ること無し。復次に菩薩は疑を生ぜず、戒取に著せず、邪見に墮せず、亦世俗の吉事を求めて以て清淨と爲さず、華香瓔珞幡蓋伎樂を以て餘天を禮拜供養せず。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く復次に須菩提、阿惟越致菩薩摩訶薩は常に下賤の家に生ぜず、乃至八難の處に生ぜず、常に女人の身を受けず。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、是菩薩摩訶薩は常に十善道を行じ、自ら殺生せず、人をして殺生せしめず、不殺生法を讚歎し、殺生せざる者を歡喜し讚歎す。乃至自ら邪見せず、人をして邪見せしめず、邪見法を讚歎せず、邪見を行ずる者を歡喜し讚歎せず。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は乃至夢中にも亦十不善道を行ぜず、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は一切衆生を益するが

爲の故に、檀那波羅蜜を行じ、乃至一切衆生を益するが爲の故に、般若波羅蜜を行ず。須菩提、是行類相貌を以て當に知るべし、是を阿惟越地菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は有ゆる諸法を受け、讀誦し、說き正憶念す、謂ゆる修多羅乃至憂波提舍なり。是菩薩法施の時に是念を作す、是法施の因緣の故に一切衆生の願を滿じ、是法施の功德を以て一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は甚深法中に於て疑はず、悔いず。」須菩提言さく「世尊、菩薩は甚深法中に於て、何の因緣の故に疑はず、悔いざるや。」佛言はく「是阿惟越致菩薩は都て法の疑を生ずべき處有るを見ず。若は色受想行識乃至阿耨多羅三藐三菩提、是法疑悔を生ずべき處を見ざればなり。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の身口意業柔軟なり。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は慈を以て身口意業成就す。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は五蓋婬欲瞋恚睡眠掉悔疑と倶にせず。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は一切處に愛著する所無し。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は出入去來、坐臥行住、常に念ずること一心なり。出入去來、坐臥行住、擧足下足、安隱庠

する故に佛は無行無類無相貌を說き給ふなり。

【轉ずるを不轉と名く】普通には凡夫地より轉じ佛地に於て轉ぜず、若一切行類なければ轉不轉なかるべしと問ふに對し、諸法空を觀て著心を轉ずる故に不轉と名く。

【是事有ることなし】不退の菩薩は正位に入る故に心決定して疑はず故に實智あらば外道と名くる事なし。

【吉事を求めず】深く業因緣果報を信ずる故に吉事を求めず。

【下賤の家に生ぜず】道を求めて憍慢の根本を破する故に。

【八難處に生ぜず】八難とは地獄、餓鬼、畜生、長壽天、北倶盧洲に在る難、及び盲聾瘖瘂、世智辯聰、生佛前佛

序たり、常に念ずること一心に、地を視て行く。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の著する所の衣服及び諸の臥具、人惡穢とせず、好みて淨潔を樂しみ、疾病少し。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、常人の身中に、八萬の戸蟲有りて其身を唼食す、是阿惟越致菩薩摩訶薩は身に是蟲無し。何を以ての故に、是菩薩の功德、世間に出過す、是を以ての故に、是菩薩、是戸蟲無し。是菩薩の功德増益し、其功德に隨て身淸淨を得、心淸淨を得。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩、身淸淨を得、心淸淨を得るや。」佛言はく、「菩薩摩訶薩は其所得に隨て善根を增益し、心の曲心の邪を滅除す。須菩提、是を菩薩摩訶薩の身淸淨心淸淨と名く。是身心淸淨なるを以ての故に、能く聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位中に入る。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は利養を貴ばず、十二頭陀を行ずと雖も阿蘭若法を貴ばず、乃至但三衣法を貴ばず。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は常に慳貪心を生ぜず、破戒心、瞋動心、懈怠心、散亂心を生ぜず、愚癡心を生ぜず、嫉妬心を生ぜず。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は心住して動ぜず、智慧深入して一心に聽受す、從て聞く所の法及び世間の事皆般若波羅

後の難是れなり。他の功德を障へず常に勸助する故にこの裏に生ずることなし。

【女人の身を受けず】婬欲薄く諂媚心を遠離する故に

【疑はず】菩薩信等の五根利なるが故に未だ作佛せずと雖も諸法を能く信じて疑なきなり

【身口意業柔軟】慈悲心を行ずるが故に意業柔軟なり、に身口の慈業成就す。

【五蓋】婬欲等の五、心を覆うて智慧を耗減し、佛道を破して魔路を開くもの。俱にせずとは五欲を呵して五蓋を棄除するなり、

【常に念ずること一心なり】深く禪定に入る故、一切衆生を守護し、常に衆一心に念じて衆生を惱まさざるなり

蜜と合す。是菩薩摩訶薩は産業の事、法性に入らざる者を見ず、是事一切皆般若波羅蜜と合するを見る。是因縁を以ての故に、須菩提、是を阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致相と名く。

復次に須菩提、若は惡魔、阿惟越致菩薩の前に於て、八大地獄を化作し、一一の地獄中に千億萬の菩薩有り、皆燒煮せられ、諸の辛酸苦毒を受く、菩薩に語りて言はく「是諸の菩薩は皆是れ阿惟越致にして、佛大地獄中に墮すと授記する所なり。汝若し佛阿惟越致の記を授くと爲さば、當に是大地獄中に入るべし。佛、汝に地獄の記を授くることを爲せばなり。汝如かず還て菩薩心を捨て地獄に墮せざることを得、天上に生ずることを得べけんには」と。須菩提、若し是菩薩、是事を見、是事を聞き、心動かず、疑はず、驚かず、是念を作さく「阿惟越致菩薩、若し地獄畜生餓鬼の中に墮せば、終に是處無し」と。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、惡魔化して比丘と作り、服を被て來りて菩薩の所に至り、菩薩に語りて言はく「汝先きに是の如く六波羅蜜を淨修し、乃至是の如く得阿耨多羅三藐三菩提を淨修すべしと聞けり、是事を汝疾に悔いて捨てよ。汝は先きに過去未來現在の諸佛の所に於て、初發心より乃至法住まで、其中間に於て作す所の善根を隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せり、是事、汝亦疾に放捨せよ。若し汝疾に捨てば、我れ當に汝に眞の佛法を語るべし、汝の先きに聞く所は皆佛法に非ず、佛教に非ず、皆是れ文飾合集の作のみ、我が說く所は是れ眞の佛法なり」と。若し是菩薩、是說を作すを聞きて心驚き疑悔せば、當に知るべし、是菩薩は未だ

【八萬の戶蟲】體内にありて病痛等を來すもの。
【功德】諸法實相等の善根力の故なり。
【利養を貴ばず】佛道を貴ぶ故に。
【阿蘭若法等】十二頭陀行。この法は究竟道の因緣少分にして究竟道に非るを以てなり。
【智慧深入等】般若を積集する故に。
【皆般若と合す】自心妙の故に三乘法外道及世間法も般若と和合して法を破らざるなり。
【二】惡魔に誘惑せられざる不退相を明す。
【大地獄中に墮す】菩薩は一切衆生に代りて苦を受けんと欲する故に地獄記を受くといふなり。
【終に是處なし】不退は諸法實相を得る故に一切法に著するなく、乃至に

小罪をも生ぜず、況んや三惡道に隨するところあらんや。

【佛語すら…せず】實相に反する意味の佛語、是れ對機の假設なれば、直にとつて佛語として妄信せざるなり。

【苦盡證】自己生死解脫を證すること。

【似道法】學道に似て非なるもの。

【謂ゆる骨想】十六種不淨觀。

諸佛の授記を得ず、未だ阿惟越致性中に定住せずと。若し是菩薩、心動かず、驚かず、疑はず、悔いずば、無作無生法に隨順し依止し、他語を信ぜず、他行に隨はず、六波羅蜜を行ずる時も他語に隨はず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を行ずる時も亦他語に隨はず。須菩提、譬へば漏盡きたる阿羅漢の他語を信ぜず、他行に隨はず、現に諸法實相を見、惡魔の轉ずること能はざるが如くならん。是の如く須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩も亦是の如し、聲聞道辟支佛道を求むる人破壞すること能はず、其心を折伏すること能はず。須菩提、是菩薩摩訶薩は必定して阿惟越致地中に住し、他語に隨はず、乃至佛語すら直ちに信取せず、何に況んや聲聞辟支佛を求むる人、及び惡魔外道梵志の語をや、終に是處無し。何を以ての故に、是菩薩は法の隨ひ信ずべき者有るを見ず、謂ゆる若は色、若は受想行識、若は色如、乃至識如有るを見ず、乃至若は阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提如を見ざればなり。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、惡魔比丘身と作り來りて菩薩の所に到り、菩薩に語りて言はく、「汝の行ずる所の者は、是れ生死の法にして薩婆若道に非ず、汝今身に苦盡證を取れ」と。是時惡魔は菩薩の爲に、世間行を用て似道法を說く、是似道法は是れ三界の繫、謂ゆる骨想、若は初禪乃至非有想非無想なり。語らく、「善男子、是道を用ひ、是行を用て、當に須陀洹果を得べし、乃至當に阿羅漢果を得べし。汝是道を用て今世に苦盡く、汝生死中種種の苦惱を受ることを用ふることを爲んや。今是四大身すら尚受くるを用ひず、何に況んや更に來身を受

くべけんや」と。須菩提、若し是菩薩摩訶薩、心驚かず、疑はず、悔いず、是念を作さく、「是比丘は我を益すること少からず、我が爲に似道法を説く、是似道法を行じて須陀洹果證に至ることを得ず、阿羅漢辟支佛道證に至ることを得ず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提に至ることを得んや。」是菩薩摩訶薩は益〻復歡喜して是念を作さく、「是比丘は我を益する少からず、我が爲に遮道法を説く、我れ是遮道法と知れば、三乘道を學ぶことを遮せず」と。是時惡魔は菩薩の歡喜するを知りて是言を作さく、「善男子、汝是菩薩摩訶薩を見んと欲し、如恆河沙等の諸佛に衣被飲食、臥具醫藥、資生所須を供養し、亦如恆河沙等の諸佛の所に於て、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、亦如恆河沙等の諸佛に親近し、菩薩摩訶薩道を咨問す。世尊、菩薩摩訶薩は云何が菩薩摩訶薩乘に住し、云何が檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、四念處乃至大慈大悲を行ずるや」と。是菩薩摩訶薩は佛の教ふる所の如く、是の如く住し、是の如く行じ、是の如く修す。是菩薩摩訶薩は是の如く教へ、是の如く學ぶも尙阿耨多羅三藐三菩提を得ず、薩婆若を得ず、何に況んや汝阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや」と。若し菩薩摩訶薩、是事を聞き、心異ならず驚かず、益〻復歡喜して是念を作さく、「是比丘は我を益すること少からず、我が爲に遮道法を説く、是遮道法須陀洹道を得ず、乃至阿羅漢辟支佛道を得ず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得んや。」是時惡魔は是菩薩の心沒せず驚かざるを知り、卽ち是處に於て化して多比丘と作り、菩薩に語りて

言はく「此は皆是れ發意して佛道を求むる菩薩なり、今皆阿羅漢地に住す、是輩も尚阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、汝云何が能く得んや。」若し菩薩摩訶薩、即ち是念を作さく「此は是れ惡魔、相似道行を説く、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて阿耨多羅三藐三菩提心を轉ずべからず、亦聲聞辟支佛道中に墮すべからず。」復是念を作さく「檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、乃至一切種智を行ずるも阿耨多羅三藐三菩提を得ずとは、是處有ること無し。」須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は是念を作さく、「若し菩薩能く佛の所説の如く、般若波羅蜜心乃至一切種智を遠離せざれば、是菩薩終に阿耨多羅三藐三菩提を退せず。若し菩薩魔事を覺知するも亦阿耨多羅三藐三菩提を失はず」と。是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩相と名く。」須菩提佛に白して言さく「世尊、何の法に於て轉ずるを名けて不轉と爲すや。」佛言はく「色相に於て轉じ、受想行識相に於て轉じ、十二入相、十八界相、婬欲瞋恚愚癡相、邪見相、四念處相、乃至聲聞辟支佛相、乃至佛相に於て轉ず。是を以ての故に、名けて不退轉菩薩摩訶薩相と爲す。何を以ての故に、是阿惟越致菩薩摩訶薩は是自相空法を以て菩薩位に入り、無生法忍を得ればなり。何を以ての故に、無生法忍と名くるや。是中乃至少許法得べからず、得べからざるが故に作さず、作さざるが故に生ぜず、是を無生法忍と名く。菩薩摩訶薩、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致菩薩摩訶薩と名く。」

【堅固品】更に不退の行類相貌を說き、殊に菩薩心を堅固にして魔障に障へられざるを明し轉不轉の義を辯ず【一】主として菩薩の行事に就て不退の相を示す。【諸法】六度等薩婆若に趣く助道法【亦得ざる者有ることなし】無所有の故に力めて得んとせば得ざることなし。【皆是れ魔事】常に魔事を離るべきを教ふるも薩婆若即ち魔事なり、涅槃を捨てて生死を取るを以ての故に【是願】生死にありて薩婆若を得んとの願なり。【衆生は知らず】一切法空無所有なるも凡夫は顚倒覆心の故に知見せず故に說法度生あるべきなり。

摩訶般若波羅蜜經　卷第十七

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

堅固品第五十六

(一)「復次に須菩提、惡魔菩薩の所に到り、其心を壞せんとして是言を爲さく「薩婆若は虛空と等しく空にして所有の相無く、諸法も亦虛空と等しく空にして所有の相無し。是虛空等の諸法、空にして所有の相無ければ、中に阿耨多羅三藐三菩提を得る者有ること無く、亦得ざる者有ること無し。是諸法は皆虛空の所有の相無きが如し、汝唐に勤苦を受く、汝の聞く所の阿耨多羅三藐三菩提は、皆是れ魔事にして佛の所說に非ず、汝當に是願を放捨すべし、汝長夜に是不安隱憂苦を受け、惡道中に墮すること莫れ。」と。是の諸の善男子善女人は是語を聞く時に應に是の如く念ずべし「是惡魔事は我が阿耨多羅三藐三菩提心を壞す。諸法は虛空の如く所有無く、自相空なりと雖も、而も衆生は知らず、見ず、解せず、我も亦虛空等の如く、所有無く、自想空なるを以て、大誓莊嚴して一切種智を得、衆生の爲に法を說き、解脫を得て、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を得しむ」と。須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より已來、是の如きの法を聞き、其心を

【堅固】一切諸煩惱箭入らざるが故に。
【不動不轉】一切外道壞轉ずる能はざる故に不動といひ、無上道に於て退せざるを以て不轉といふ。
【菩薩位に入る】阿惟越致に名く。
【轉ずる故に等】不退は轉不轉のいづれなるかに答へて二種あり、二諦を以ての故に、卽ち世諦と第一義諦となり若し菩薩位に入れば二乘心を轉じて直に菩薩位に入る故轉ずといひ、不轉とは不退第一義諸法一相中に入れば、所謂無相にして一乘の定相もなきなり。卽ち所轉なき故不退と名く。
【若し初禪等】欲界法を行じて衆生を度すと雖も、禪定に於て出入自在なるをいふ。

堅固にして動ぜず轉ぜざるべし。菩薩摩訶薩は是堅固心不動不轉心を以て、六波羅蜜を行じ、當に菩薩位の中に入るべし。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、轉ぜざるが故に阿惟越致と名くるや、轉ずるが故に阿惟越致と名くるや。」佛言はく、「轉ぜざるが故に阿惟越致と名け、轉ずるが故に亦阿惟越致とも名く。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が轉ぜざるが故に阿惟越致と名け、轉ずるが故に亦阿惟越致とも名くるや。」佛須菩提に告げたまはく、「若は菩薩摩訶薩、聲聞辟支佛地に於て轉ぜず、是故に不轉と名け、若は菩薩摩訶薩、聲聞辟支佛地に於て轉ず、是故に亦不轉とも名く。須菩提、是行類相貌を以ての故に、當に知るべし、是を阿惟越致の菩薩摩訶薩相と名く。是行類相貌を以ての故に、惡魔は其意を壞して阿耨多羅三藐三菩提を離れしむること能はず。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩、若し初禪第二第三第四禪、乃至滅定禪に入らんと欲せば、卽ち入ることを得。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩、若し四念處乃至八聖道分、空無相無作三昧乃至五神通を修せんと欲せば、卽ち能く修す。是菩薩は四念處乃至五神通を修すと雖も、是人は四念處果を受けず、諸禪を修すと雖も、諸禪の果を受けず、乃至滅定禪の果を受けず、須陀洹果を證せず、乃至辟支佛道を證せず。是菩薩は衆生の爲の故に身を受け、其所應に隨ひて、而して之を利益す。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致の菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩は常に阿耨多羅三藐三菩提を憶念し、終に薩婆若心を遠離せず、薩婆若心を遠離せざるが故に、色を貴ばず、相を貴ばず、聲聞辟

【四念處等修すと雖も等】禪定に入るもその心清淨柔軟の故に長壽天の福を受けず、欲界に於て教化して四念處道法を修すと雖も、須陀洹果乃至辟支佛道を證せざるなり。

【常に…憶念し等】一心に深く念じ常に無上道を離れず餘事を貴ばずして但無上道のみを貴ぶなり。

【色、相】諸佛の三十二相金色身等

【聲聞…を貴ばず】本願を捨せず衆生を度せんとする故に。

【四種の身威儀】行住坐臥の四。

【自らの爲にせず】珍寶を雨らす等皆衆生攝取のためのの故にして自ら受けざるなり。

【常に梵行を修し】人五欲を受くれば心憍慢にして人を凌易するも、是人

支佛を貴ばず、檀那波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を貴ばず、四禪四無量心四無色定を貴ばず、五神通を貴ばず、四念處乃至八聖道分を貴ばず、佛の十力乃至十八不共法を貴ばず、淨佛國土を貴ばず、成就衆生を貴ばず、見佛を貴ばず、種善根を貴ばず。何を以ての故に。一切法の自相空にして、貴ぶべきの法、能く貴心を生ずる者を見ざればなり。何を以ての故に。是一切法は虚空と等しくして、所有無く自相空なればなり。須菩提、是阿惟越致の菩薩摩訶薩は是心を成就し、四種の身威儀中に於て、出入し來去し、坐臥し行住するも、一心にして亂れず。須菩提、是行類相貌を以て當に知るべし、是れ阿惟越致の菩薩摩訶薩なり。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩、若し家に在居せば、方便力を以て、衆生を利益せんが爲の故に、五欲を受け、衆生に布施す。食を須つに食を與へ、飲を須つに飲を與へ、衣服臥具、乃至資生の所須、盡く之を給與す。是菩薩は自ら檀那波羅蜜を行じ、人を教へて檀那を行ぜしめ、檀那を行ずる法を讃歎し、檀那波羅蜜を行ずる者を歡喜し讃歎す。尸羅波羅蜜乃至般若波羅蜜も亦是の如し。須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩は、家に在る時に能く閻浮提に滿つる珍寶を以て衆生に施與し、乃至三千大千世界の中に滿つる珍寶もて衆生に給與して、亦自らの爲にせず、常に梵行を修して、他人を凌易し虜掠し、其をして憂惱せしめず。須菩提、是行類相貌を以て當に知るべし、是を阿惟越致の菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩は執金剛神王常に隨逐して、是願を作さく、「是菩薩摩訶薩は、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、我

常に淫欲を斷ずる故憍慢を生ぜず衆生を凌易せず。

【執金剛神】金剛手、金剛力士、金剛密迹、仁王ともいふ。五百夜叉神を役して佛法を護る。

【五性執金剛神】金剛神王に隨ふ眷屬神なり。

【菩薩の五根】五根に二乘に屬するものと佛菩薩に屬するものとあり。二乘に屬する五根は深く涅槃を信じ能く智慧を以て世間の無常空、涅槃衰滅を知る、菩薩の五根は能く慈悲心を生じ怨惡衆生に於て諸法實相を觀る故に能く佛事を信受し、復菩薩根を以ての故に能見能聞能知あるなり。

【一心に等】元來上人相には三業に惡なく恩を知り恩を報じ、一切衆生の爲に捨身して衆

れ常に隨逐し、乃至五性執金剛神常に隨ひ守護せん」と。是を以ての故に、若は天、若は魔、若は梵、若は餘の世間の大力者も、破壞すること能はず。是を菩薩摩訶薩の薩婆若心乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ると名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の阿惟越致相と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は常に菩薩の五根、信根精進根念根定根慧根を具足す、是を阿惟越致相と名く。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩は上人と爲り、下人と爲らず。」須菩提佛に白して言さく「世尊、云何が上人と爲すや。」佛須菩提に告げたまはく「若し菩薩摩訶薩、一心に阿耨多羅三藐三菩提を行じて、心散亂せざれば、是を上人と名く、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致相と爲す。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩は一心に常に佛道を念じ、淨命を爲すが故に、呪術を作し、諸藥を合和せず、鬼神を呪し男女に著せしめ、其吉凶、男女の祿相、壽命の長短を問はず。何を以ての故に。須菩提、是菩薩摩訶薩は諸法の自相空なることを知り、諸法相を見ざるが故に、邪命を行ぜずして淨命を行ずればなり。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致の菩薩摩訶薩相と名く。

(一)復次に須菩提、今當に更に阿惟越致の菩薩摩訶薩の行類相貌を說くべし、一心に諦に聽け。」佛須菩提に告げたまはく「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、常に阿耨多羅三藐三菩提心を遠離せざるが故に、五陰事を說かず、十二入事を說かず、十八界事を說かず。何を以ての故に。常に五陰空相、十二入十八界空相を念觀するが故に。是菩薩摩訶薩は官事を

生を安樂にし果報を求めざるをいふ。も、今一心等といふは是れ諸善法をいふは擇するを以てなり。

【淨命】清淨持戒の故に邪命を行ぜず。

【呪術】身を翳し人に見せしめず、種種の變化をなすこと。合藥とは諸藥を合和として仙を求め名利を求むるなり。何れも邪命といふべし。

【鬼神を呪し等】未來の事を知らんとして鬼を呪し男女を著せしめ、その吉凶生男生女壽命等を判斷するなり。

【二】更に不退菩薩の細相を説く。

【五陰事を説かず】喜んで五陰の決定相を分別説せず。

【官事を説く等】外道出世を求めず心懈怠し俗に著し諸國事を説くを好む等。

説くことを好まず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は諸法空相中に住して法の若は貴き若は賤しきを見ざればなり。賊事を説くことを好まず、何を以ての故に。諸法の自相空なるが故に、若は得若は失ふことを見ざればなり。軍事を説くことを好まず、何を以ての故に。諸法の自相空なるが故に、若は多き若は少きを見ざればなり。鬪事を説くことを好まず、何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は諸法如中に住し、法の若は憎有り若は愛有るを見ざればなり。婦女の事を説くことを好まず、何を以ての故に。諸法空中に於て、好醜を見ざるが故に。聚落の事を説くを好まず。何を以ての故に。諸法の自相空なるが故に、法の若は合し若は散ずるを見ざればなり。城邑の事を説くを好まず、何を以ての故に諸法の實際中に住し、勝つ有り負くる有ることを見ざればなり。國事を説くことを好まず。何を以ての故に。實際中に住して法の所屬有り不屬有ることを見ざればなり。我事を説くことを好まず。何を以ての故に。法性中に住して法の是れ我有り我無しと見ず、乃至知者見者を見ざればなり。是の如き等の種種世間の事を説かず、但だ好みて般若波羅蜜を説き、薩婆若心を遠離せざるのみ。若し檀那波羅蜜を行ずる時に慳貪の事を爲さず、尸羅波羅蜜を行ずる時に破戒の事を爲さず、羼提波羅蜜を行ずる時に瞋諍の事を爲さず、毘梨耶波羅蜜を行ずる時に懈怠の事を爲さず、禪那波羅蜜を行ずる時に散亂の事を爲さず、般若波羅蜜を行ずる時に愚癡の事を爲さざれば、是菩薩は一切法空を行ずと雖も、而も法を愛樂す。是菩薩は法性を行ずと雖も、常に不壞法を讃じて善知識、謂ゆる諸佛及び菩薩聲聞辟支佛、諸の能く敎化

【中に在て生ず】功德智慧大の故に意の所住に隨ふ。

【自證地】自心中深く智慧に入る故一切法の轉不轉を見ず、疑を生ぜざるをいふ。

して阿耨多羅三藐三菩提に樂住せしむる者を愛樂す。是人常に願ず、諸佛を見たてまつり在所の處を聞き、佛國土中に現在佛行らば願に隨つて往生せんと欲す。是の如く心常に晝夜行ず、謂ゆる念佛心なり。是の如く須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩は、初禪乃至非有想非無想處を行じ、方便力を以ての故に欲界心を起し、若し衆生能く十善道を行ずる者、及び現在行佛の處には中に在て生ず、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致の菩薩摩訶薩と爲す。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時に、內空外空乃至無法有法空に住し、四念處乃至空無相無作解脫門に住し、自地中に於て了了にして、我は是れ阿惟越致非阿惟越致なるを疑はず。何を以ての故に、乃至少許も法の阿耨多羅三藐三菩提中に於て、若は轉じ若は轉ぜざるを見ざればなり。須菩提、譬へば人有り須陀洹果を得て須陀洹地中に住し、自ら了了として知り終に疑はず、悔いざるが如く、阿惟越致の菩薩摩訶薩も亦是の如く、阿惟越致地中に住して終に疑はず。是地中に住して佛國土を淨め、衆生を成就し、種種の魔事起らば卽ち時に覺知して、亦魔事に隨はず、魔事を破壞す。須菩提、譬へば人有り、五逆罪を作る、五逆罪心乃至死する時まで常に逐ひて捨てず、異心有りと雖も障隔すること能はざるが如く、須菩提、阿惟越致の菩薩も亦是の如く、自ら其地に住し、心常に動ぜず、一切世間天人阿修羅動轉すること能はず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は一切世間天人阿修羅の上に出で、正法位中に入り自證地中に住し、諸の菩薩の神通を具足し、能く佛國土を淨め衆生を成就し、一佛國より一佛國に至り

【身を轉ずるも亦疑はず】不退を得れば實相空を知り身心を轉ずるも亦二地に向はず、心自ら疑はず。

十方佛の所に於て諸の善根を植ゑ、諸佛に親近し諮問す。是菩薩は是の如く住し、種種の魔事起るも覺りて隨はず、方便力を以て魔事の著に處し、實際中、自證地中に疑はず悔いず。何を以ての故に。實際中に疑相無きが故に、是實際、一に非ず二に非ざるを知る。是因緣を以ての故に、是人は乃至身を轉じて、遂に聲聞辟支佛地に向はず。是菩薩摩訶薩は諸法の自相空中に、法の若は生じ若は滅し、若は垢なる若は淨なるを見ず。須菩提、是菩薩摩訶薩は乃至身を轉ずるも亦我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきや、若は得ざるや」と疑はず。何を以ての故に。須菩提、諸法の自相空、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なればなり。須菩提、是菩薩摩訶薩は自證地中に住し、他語に隨はざれば能く壞する者無し。何を以ての故に。是阿惟越致の菩薩摩訶薩は、不動の智慧を成就するが故に。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致の菩薩摩訶薩と名く。復次に須菩提、是菩薩摩訶薩、若し惡魔、佛身を作して來り、菩薩に語りて言はく「汝今是間に於て阿羅漢道を取れ、汝亦阿耨多羅三藐三菩提の記無く、汝亦無生法忍を得ず、汝亦是阿惟越致の行類相貌無く、是相阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得る無し」と。須菩提、若し菩薩摩訶薩是語を聞きて心異ならず、沒せず驚かず怖かず畏れざれば、是菩薩は應に自ら知るべし「我は必ず諸佛より阿耨多羅三藐三菩提の記を受けん。何を以ての故に。諸の菩薩は是法を以て記を受く、我も亦是法有りて記を受くることを得ん」と。須菩提、若は惡魔、若は魔の所使と爲りて、佛の形像を作して來り、菩薩と與に聲聞辟支佛の記を受く。須菩

【破壞して受けず】佛なく法無く罪福業因緣なく、亦修行精進得道果報もなしといふの類。
【身命を惜まず】無量世中煩惱邪見のために身を喪ふこと無數なり、今法のために死するは幸なり。

提、是菩薩は是念を作さく「是れ惡魔若は魔の所使の佛の形像を作して來れるなり。諸佛は菩薩を教へて阿耨多羅三藐三菩提を遠離せしめ、教へて聲聞辟支佛道に住せしむべからず」と。須菩提、是行類相貌を以て、當に知るべし、是を阿惟越致の相と名く。復次に須菩提、惡魔は復佛身を作し、菩薩の所に來到して是言を作さく「汝の學する所の經は、佛の所說に非ず、亦聲聞の說にも非ず、是は魔の所說なり」と。須菩提、是菩薩摩訶薩は當に是知を作すべし「是れ惡魔若は魔の所使の我をして阿耨多羅三藐三菩提を遠離せしむるなり」と。須菩提、當に知るべし、是菩薩は已に過去佛の授記する所と爲りて阿惟越致に住す、何を以ての故に。諸の菩薩所有の阿惟越致の行類相貌、是菩薩も亦是行類相貌を有すればなり、是を阿惟越致の菩薩相と名く。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時に、諸法を護持することを爲すが故に、身命をも惜まず、何に況んや餘の物をや。是菩薩は法を護持するが故に、是念を作さく「我れ一佛法を護持することを爲さずして、我れ三世十方の諸佛法を護持することを爲すが故に」と。須菩提、云何が菩薩摩訶薩は法を護持するが故に身命を惜まざるや。「須菩提、佛の所說の如く一切の諸法は眞空なり、是時に愚癡人の破壞して受けざる有りて是言を作さく「是れ法に非ず、善に非ず、世尊の教に非ず」と。須菩提、菩薩は是の如きの法を護持するが故に身命を惜まず、菩薩も亦是念を作すべし「未來世の諸佛、我も亦是數中に在り、中に在りて記を受く、是法も亦我が法なり、是を以ての故に、身命を惜まざるなり」と。須菩提、菩薩は是利益を見る

【陀羅尼を得る】信力の故に能く受け、聞持陀羅尼力の故に失はず、斷疑陀羅尼力の故に疑はず。

【是れ阿惟越致等】菩薩に生死肉身と法性生身とある中肉身の不退に二種あり佛前授記と滅後未得となり、若無生忍に隨順するも定なく疑著あるものは不退を得ず疑多信少の者は誦經に依て進み、信多疑少の者は禪定に依て柔順忍を得この忍増長せば法愛を斷じて無生忍を得菩薩位に入るこれ不退なり。

【深奥品】四無礙門を開き阿惟越致の深奥相を説く。

【一】不退菩薩の大功德を明す。

が故に法を護持して身命を惜まず。須菩提、是行類相貌を以て是を阿惟越致の相と知る。復次に須菩提、阿惟越致の菩薩摩訶薩は佛の説法を聞きて疑はず悔いず、聞き已りて受持し、終に忘失せず。何を以ての故に。陀羅尼を得るが故に。」須菩提言さく、「世尊、何等の陀羅尼を得ば、佛所説の諸經を聞きて忘失せざるや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩は聞持等の陀羅尼を得るが故に、佛説の諸經を聞きて忘れず失はず、疑はず悔いざるなり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、但だ佛の説法を聞きて忘れず失はず、疑はず悔いざるのみならず、聲聞辟支佛の説、天龍鬼神阿修羅緊那羅摩睺羅伽の説を聞くも、亦復忘れず失はず、疑はず悔いざるや。」佛須菩提に告げたまはく、「有らゆる言説衆事、陀羅尼を得て、菩薩は皆忘れず失はず、疑はず悔いざるなり。須菩提、是の如きの行類相貌を成就するが故に、當に知るべし、是れ阿惟越致の菩薩摩訶薩なり。」

深奥品第五十七

(一)須菩提佛に白して言さく、「世尊、是阿惟越致の菩薩摩訶薩は大功德を成就す。世尊、是阿惟越致の菩薩摩訶薩は無量功德を成就し、無邊功德を成就す。」佛須菩提に告げたまはく『是の如く是の如し、是阿惟越致の菩薩摩訶薩は大功德を成就す、是阿惟越致の菩薩摩訶薩は無量無邊の功德を成就す。何を以ての故に。是阿惟越致の菩薩摩訶薩の無量無邊の智慧

【四無閡智】既に義無礙智を知り已つて種種諸法名字を分別し爲に義を說くを法無礙といひ、この名字要ず語言に由る、故に種種の名字を出すを辭無礙といひ、法辭無礙なるを得て便ち諸法の實義を樂說するを樂說無礙といふ。

【佛は能く等】樂說盡くべからざるも阿惟越致相も亦盡すべからざるをいふ。

【色如】色の實相正觀せば定實の別法あるに非ず、これを色に非ず色を離るるに非ずと說くなり。

【微妙方便力】色等の諸法を離れて涅槃に處るも、涅槃に著せず世間に住せざるなり。

を得ること、一切の聲聞辟支佛と共ならざるが故に、阿惟越致の菩薩は是智慧中に住して四無閡智を生ず、是四無閡智を得るが故に、一切世間の天及び人、能く窮盡する無し。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、佛は能く如恆河沙等の劫を以て、阿惟越致の菩薩摩訶薩の行類相貌を歎說す。」須菩提言さく、「世尊、何等の深奧の處か、阿惟越致の菩薩摩訶薩は是中に住して、六波羅蜜を行ずる時に四念處を具足し、乃至一切種智を具足するや。」佛須菩提を讚じたまはく、「善い哉善い哉、須菩提、汝阿惟越致の菩薩摩訶薩の爲に是深奧の處を問ふ。須菩提、深奧の處とは空是れ其義なり。無相、無作、無起、無生、無染、離、寂滅、如、法性、實際、涅槃、須菩提、是の如き等の法時を深奧の義と爲す。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、但だ空乃至涅槃のみ是れ深奧にして、一切法深奧に非ざるや。」佛の言はく、「一切法も亦是れ深奧の義なり。須菩提、色も亦深奧、受想行識も亦深奧、眼も亦深奧、乃至意、色乃至法、眼界乃至意識界、檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦深奧なり。」「世尊、云何が色深奧乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦深奧なるや。」佛言はく、「色如深奧なるが故に色深奧なり、受想行識如乃至阿耨多羅三藐三菩提如深奧なるが故に、阿耨多羅三藐三菩提深奧なり。」「世尊、云何が色如深奧乃至阿耨多羅三藐三菩提如深奧なるや。」「須菩提、是色如は是れ色に非ず、色を離るるに非ず、乃至識如は是れ識に非ず、識を離るるに非ず、乃至是阿耨多羅三藐三菩提如は是れ阿耨多羅三藐三菩提に非ず、阿耨多羅三藐三菩提を離るるに非ざればなり。」須菩提佛に白して言さく、「希有なり、世尊、微

【二】菩薩の諸法實相を行ずる果報福德を讃ず。

【無量無邊阿僧祇の福德】實事に於ての錯謬すれば福德少く、正しく行ずれば福多し、畜生に施すすら百倍の福を得、聖人無量の福を得、況んや實相に入るの菩薩の福に於てをや。

【超越】五度行者は久しくして成佛するも般若の行者は疾に成佛を得るあり。

【劫數を超越す】劫數無量なるを心念無量によりて內觀せしむ。

妙方便力の故に。阿惟越致の菩薩をして色處涅槃を離れしめ、亦受想行識處涅槃を離れしめ、亦一切法、若は世間若は出世間、若は有諍若は無諍、若は有漏若は無漏法處涅槃を離れしむ。」佛言はく『是の如く是の如し、須菩提、佛は微妙方便力を以ての故に、阿惟越致の菩薩をして色處涅槃を離れしめ、乃至有漏無漏法處涅槃を離れしむ。

(三)復次に須菩提、若し菩薩摩訶薩、是の如き甚深の法と般若波羅蜜と相應し、觀察し籌量し思惟せば是念を作さん「我れ應に是の如く行じ、般若波羅蜜中に教ふる如くすべし。我れ應に是の如く學し、般若波羅蜜中に說く如くすべし」と。須菩提、若し是菩薩摩訶薩、能く說の如く行じ、說の如く學し、般若波羅蜜中に觀る如く、具足し勤精進せんと、一念生ずる時、當に無量無邊阿僧祇の福德を得べし。是菩薩摩訶薩は無量劫を超越して阿耨多羅三藐三菩提に近づく、何に況んや常に般若波羅蜜を行じ、阿耨多羅三藐三菩提に應ずる念あるをや。須菩提、譬へは婬欲多き人と端正淨潔の女人と共に期するが如し、此女人限閡ありて時に往くことを得ずば、須菩提の意に於て云何、是人の念ずる所は何處に在りと爲すや。」『世尊、是人の念念常に彼の女人の所に在り、恆に是念憶想を作す、當に來りて與に坐臥歡樂を共にすべしと。」『須菩提、是人一日一夜に幾く念有りて生ずと爲すや。』須菩提言さく、「世尊、是人一日一夜に其念甚だ多し。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を念じ、般若波羅蜜中に說くが如く是道を行じ、一念の頃に劫數を超越するも、亦彼人の一日一夜の心念の數の如し。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて衆罪を遠離

【三】更に離般若の功德と般若相應の功德とを比較し般若を遠離すべからざるを明す。

【漸漸】初めに般若を學ぶ時煩惱力強く般若力弱く、漸漸に般若力を得て諸煩惱を斷じ諸戲論を滅するなり

す、謂ゆる阿耨多羅三藐三菩提の罪を離る。是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行じて一日に得る所の善根功德は、假令如恆河沙等の三千大千世界の中に滿つるも、功德猶ほ亦滅せず、餘殘の功德に於て百分する一分にも及ばず、千分千億萬分乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。

〔三〕復次に須菩提、若し菩薩摩訶薩、般波若羅蜜を遠離して如恆河沙等の劫に、三寶、佛寶法寶比丘僧寶を布施せば、須菩提、汝が意に於て云何、是菩薩摩訶薩は是因緣を以ての故に福を得ること多きや不や。』須菩提言さく『世尊、甚だ多し、無量無邊阿僧祇なり。』佛須菩提に告げたまはく『菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜中に一日、說の如く修行して福を得ることの多きには如かず。何な以ての故に、般若波羅蜜は是れ諸の菩薩摩訶薩の道なり、是道に乘ぜば疾に阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。須菩提、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を遠離して、如恆河沙等の劫に須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛及び諸佛を供養せば、須菩提の意に於て云何、是菩薩摩訶薩は是因緣を以ての故に、福を得ること多きや不や。』須菩提言さく『世尊、甚だ多く甚だ多し。』佛言はく『是菩薩摩訶薩深般若波羅蜜を說の如く修行する一日にして、福を得ることの多きには如かず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩是般若波羅蜜を行ぜば、一切聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、漸漸に阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を遠離して、如恆河沙等の劫に布施持戒忍辱精進禪定智慧を行ぜば、汝が意に於て云何、是人は是因緣を以ての故に、

【菩薩の母】般若は佛母、菩薩は佛子なるが故に般若は菩薩の大母なり

福を得ること多きや不や。』須菩提言さく、『世尊、甚だ多く甚だ多し。』佛言はく、『是菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜を行じ、説の如く修行し、一日布施持戒忍辱精進禪定智慧の福を得ること多きに如かず。何を以ての故に。須菩提、般若波羅蜜は、是れ菩薩摩訶薩の母なるが故に、是般若波羅蜜は能く諸の菩薩摩訶薩を生じ、諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜中に住し、能く一切の佛法を具足するが故に。須菩提、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を遠離して、如恆河沙等の劫壽に法施を行ぜば、須菩提、汝が意に於て云何、是人は福を得ること多きや不や。』須菩提言さく、『世尊、甚だ多く甚だ多し。』佛言はく、『是善男子善女人は深般若波羅蜜を説の如く修行し、乃至一日法施するも、福を得ることの多きには如かず。何を以ての故に。須菩提、是菩薩摩訶薩般若波羅蜜を遠離せざれば則ち一切種智を遠離せず、一切種智を遠離せざれば則ち般若波羅蜜を遠離せず。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を遠離すべからず。須菩提、若し菩薩摩訶薩、如恆河沙等の劫に般若波羅蜜を遠離して、四念處乃至八聖道分、內空乃至一切種智を修行せば、須菩提、汝が意に於て云何、是善男子善女人は福を得ること多きや不や。』須菩提言さく、『世尊、甚だ多く甚だ多し。』佛言はく、『是善男子善女人は深般若波羅蜜を説の如くし、一日四念處乃至一切種智を修行して福を得ること多きに如かず。何を以ての故に。須菩提、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を遠離せずして、薩婆若に於て轉ずるは、是處有ること無し。須菩提、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を遠離し、薩婆若に

【四】般若功德廣大に就ての疑難を辨ず。

於て轉ずるは則ち是處有ればなり。須菩提、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は常に般若波羅蜜を遠離して行ずべからず。須菩提、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を遠離して、如恆河沙等の劫壽の財施法施及び禪定の福德を、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、汝が意に於て云何、是人は福を得ること多きや不や。』須菩提言さく『世尊、甚だ多し甚だ多く。』佛言はく『是善男子善女人は深般若波羅蜜を説の如く修行し、乃至一日の財施法施禪定の福德を、阿耨多羅三藐三菩提に廻向して福を得ること多きに如かず。何を以ての故に。是れ第一廻向、謂ゆる般若波羅蜜廻向なればなり。若し般若波羅蜜を遠離して廻向せば、是を廻向と名けず。須菩提、是を以ての故に、若し菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、應に方便もて般若波羅蜜廻向を學ぶべし。須菩提、若し善男子善女人、般若波羅蜜を遠離して、如恆河沙等の劫壽に、過去未來現在の諸佛、及び弟子の善根を和合し隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、須菩提、汝が意に於て云何。是人は福を得ること多きや不や。』須菩提言さく『世尊、甚だ多く甚だ多し。』佛言はく『是善男子善女人の深般若波羅蜜を説の如く修行し、乃至一日善根を隨喜して阿耨多羅三藐三菩提に廻向して福を得るの多きには如かず。須菩提、是を以ての故に、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、應に般若波羅蜜中に方便もて阿耨多羅三藐三菩提に廻向することを學ぶべし。』

(四)須菩提、佛に白して言さく『世尊、佛の所説の如く、因緣起の法は妄想より生じて實に

非ず、云何が善男子善女人は大福德を得るや。世尊、是因緣起の法を以ては、正見を得、法位に入るべからず、須陀洹果を得べからず、乃至阿耨多羅三藐三菩提果を得べからず。』佛須菩提に告げたまはく『是の如く是の如し。須菩提、是因緣起の法を以ては、正見を得、法位に入るべからず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得べからず、須菩提、般若波羅蜜を行ずる菩薩摩訶薩は、因緣起の法も、亦空にして堅固なる無く、虛誑にして不實なることを知る。何を以ての故に。須菩提、是菩薩摩訶薩は善く內空を學び、乃至善く無法有法空を學ぶが故に、是菩薩摩訶薩は是十八空に住し、種種法空を觀作し、即ち般若波羅蜜を遠離せず。若し菩薩摩訶薩、是の如く、漸漸に般若波羅蜜を遠離せざれば、漸漸に無數無量無邊の福德を得。』須菩提、佛に白して言さく『世尊、無數と無量と無邊と何等の異有りや。』『須菩提、無數とは數中若は有爲性中若は無爲性中に墮せざるに名く、無量とは量に若は過去若は未來若は現在を得べからざるなり。無邊とは諸法の邊得べからざるなり。』須菩提言さく『世尊、頗は色も亦無數無量無邊なる有り、頗は受想行識も亦無數無量無變なる有りや。』『須菩提、因緣有れば色も亦無數無量無邊なり、受想行識も亦無數無量無邊なり。』『世尊、何等の因緣の故に色も亦無數無量無邊、受想行識も亦無數無量無邊なるや。』佛須菩提に告げたまはく『色空の故に無數無量無邊、受想行識空の故に無數無量無邊なり。』『世尊、但だ色のみ空、受想行識のみ空にして、一切法は空に非ざるや。』『須菩提、我れ常に一切法空なりと說かずや。』『世尊、佛は一切法空なりと說きたまふ。世尊、諸法空なれば即ち

【不可盡】實相不生不作の故に。

【無著】實相法寂滅の故に。

【無染】能く三界染を斷ずる故に。

【不可說の義增無く等】法增減なきも無上道を得べきを明す。

是れ盡すべからず、數有ること無く無量無邊なり。世尊、空の中に數得べからず、量得べからず、邊得べからず。是を以ての故に、世尊、是不可盡、無數、無量、無邊の義は、是れ異なること有ること無し。』佛須菩提に告げたまはく『是の如く是の如し、是法の義は別異無し。須菩提、是法は說くべからず、佛は方便力を以ての故に分別して說く、謂ゆる不可盡、無數、無量、無邊、無著、空、無相、無作、無起、無生、無滅、無染、涅槃なりと。佛は種種因緣もて方便力を以て說く。』須菩提佛に白して言さく『希有なり、世尊、諸法の實相は說くべからず、而も佛は方便力を以ての故に說く、世尊、我が解するが如くんば、佛の說く所の義、一切法も亦說くべからずと。』佛言はく『是の如く是の如し、須菩提、一切法說くべからず、一切法不可說相卽ち是れ空なり、是空說くべからず。』『世尊、不可說の義は增有り減有りや不や。』佛言はく『不、須菩提、不可說の義は增無く減無し。』『世尊、不可說の義增無く減無ければ、檀那波羅蜜も亦當に增無く減無かるべし、乃至般若波羅蜜も亦當に增無く減無かるべし、四念處乃至八聖道分も亦當に增無く減無かるべし、四禪四無量心四無色定五神通八背捨八勝處九次第定、佛の十力四無所畏四無閡智十八不共法も亦當に增無く減無かるべし。世尊、若し菩薩摩訶薩の六波羅蜜增せず、乃至十八不共法增せざれば、云何が菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得るや。』佛言はく『是の如く是の如し、須菩提、不可說の義增無く減無ければ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を習行して、方便力有るが故に、是念を作さず「我れ般若波羅蜜を增し乃至檀那波羅蜜を增す」と。當

【五】般若功德成就の疑難を辨ず。

【初心等】如實正行を以て無上道を得るは唯佛のみ、菩薩は煩惱未斷の故に如實に行ぜざるべし、初心より後心まで相續和合せざれば、云何が善根を増益して無上道を得んやと疑ふなり。

【燃燈】燈は菩薩道に、炷は燈心にして無明煩惱に、焔は初地相應智慧乃至金剛三昧相應智慧に喩ふ。

【十地】三乘共通の十地を今いふ。

【乾慧地】聲聞菩薩の二種あり、聲聞人は獨り涅槃の爲の故に勤めて精進持戒し道を受け五停心觀を習ひ、智慧ありと雖も禪定水を得ざれば則ち道を得ざる故乾慧地と名く、菩薩は則ち初發心より順忍を得ざる間を

に是念を作すべし、「但だ名字のみの故に檀那波羅蜜と名く」と。是菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行ずる時、是心及び諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提相の如く廻向し、乃至般若波羅蜜を行ずる時、是心及び諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提相の如く廻向す。『須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何等をか是れ阿耨多羅三藐三菩提となすや。』佛言はく、『一切法如相、是を阿耨多羅三藐三菩提と名く。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等をか是れ一切如法相とし、是を阿耨多羅三藐三菩提とするや。』佛、須菩提に告げたまはく、『色如相、受想行識如相、乃至涅槃如相、是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。是如相も亦増せず減ぜず。須菩提、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を離れず、常に是如法を觀て、増有り減有ることを見ず。是因緣を以ての故に、須菩提、不可說の義は増無く減無く、檀那波羅蜜も亦増せず減ぜず、乃至十八不共法も亦増せず減ぜず。須菩提、菩薩摩訶薩は是不増不減の法を以ての故に、應に般若波羅蜜を行ずべし。』

(五)須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は初心を用て阿耨多羅三藐三菩提を得るや、後心を用て阿耨多羅三藐三菩提を得るや。世尊、是初心は後心に至らず、後心は初心に在らず。世尊、是の如く心心數法倶ならず、云何が善根増益し、若は善根増せざるや。云何が當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきや。』佛須菩提に告げたまはく、『我れ當に汝の爲に譬喩を說くべし、智者は譬喩を得れば則ち義に於て解し易し。須菩提、譬へば然燈の如し、初焔を用て炷を燋くと爲すや、後焔を用て炷を燋くと爲すや。』須菩提言さく、『世尊、初焔炷

いふ。

【性地】聲聞は煖法より世第一法の内菩薩は順忍を得て諸法實相に愛著して邪見を生ぜず禪定水を得。

【八人地】苦法忍より道比智忍に至る十五心、菩薩の無生法忍菩薩位に入るもの。

【見地】聖果則ち須陀洹果、菩薩の阿惟越致地。

【薄地】須陀洹或は斯陀含の欲界九種煩惱分斷、菩薩の不退をすぎ成佛を得ざる間、諸煩惱を斷じて習氣薄きもの。

【離欲地】欲界惑を離れたる阿那含菩薩の五神通を得たるもの。

【已作地】聲聞人の盡智無生智を得羅漢を得し者、菩薩の佛地を成就せるもの。

【辟支佛地】先世に辟支佛道の因緣

を燋くに非ず、亦初焰を離るるに非ず。世尊、後焰炷を燋くに非ず、亦後焰を離るるに非ず。』『須菩提、汝が意に於て云何、炷燋くるや不や。』『世尊、炷は實に燋く。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は是の如く初心を用て阿耨多羅三藐三菩提を得ず、亦初心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得ず、後心を用て阿耨多羅三藐三菩提を得ず、亦後心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得ず、而も阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。』須菩提、是中に菩薩摩訶薩は初發意より般若波羅蜜を行じ、十地を具足し、阿耨多羅三藐三菩提を得。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ十地、菩薩具足し已りて阿耨多羅三藐三菩提を得となすや。』佛言はく、『菩薩摩訶薩は乾慧地性地八人地見地薄地離欲地已作地辟支佛地菩薩地佛地を具足し、是地を具足して阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提、菩薩摩訶薩は是十地を學び已り、初心もて阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ず、亦初心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ず、後心もて阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ず、亦後心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ず、而も阿耨多羅三藐三菩提を得。』須菩提言さく、『世尊、是因緣法は甚深なり、謂ゆる初心に非ず、初心を離るるに非ず、後心に非ず、後心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ずして、而も阿耨多羅三藐三菩提を得。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、若し心滅し已らば、是心更に生ずるや不や。』『不、世尊。』『須菩提、汝が意に於て云何、心生是れ滅相なりや不や。』『世尊、是れ滅相なり。』『須菩提、汝が意に於て云何、心滅相是れ滅なりや不や。』『不、世尊。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に

を種ゑ、今世に少し因縁を得て出家し亦深く因縁法を觀じ道を成ずるを辟支佛といふ。

【菩薩地】乾慧地より離欲地、歡喜地より法雲地、又は初發心より金剛三昧に至るを皆云ふ。

【佛地】一切種智等の諸佛法。

【具足】自地中に於て行具足し他地中にて觀具足するをいふ。

【心滅し已らば等】諸法畢竟不生不滅と雖も衆生のために六情所見の生滅法を以ての故に問ふなり。須菩提之に答へて不といふは、若し心滅し已りて更に生ずれば常見に墮すべきを以てなり。

【滅相】生滅は相待法にして生あれば必ず滅あり。

【心滅相是滅なりや】若し滅相滅なり

於て云何、亦是の如く住するや不や。』須菩提言さく、『世尊、亦是の如く住し、如如に住す。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、若し是心如如に住せば、當に實際に證を作すべきや不や。』『不、世尊。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、是如は甚深なりや不や。』『世尊、甚深なり甚深なり。』『須菩提、汝が意に於て云何、但だ如のみ是れ心なりや不や。』『不、世尊。』『如を離るる是れ心なりや不や。』『不、世尊。』『須菩提、汝が意に於て云何、如は如を見るや不や。』『不、世尊。』『須菩提、汝が意に於て云何、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く行ずれば、深般若波羅蜜を行ずと爲すや不や。』須菩提言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く行ずれば、深般若波羅蜜を行ずと爲す。』『須菩提、汝の意に於て云何、若し菩薩摩訶薩、是の如く行ぜば、是れ何處に行ずるや。』須菩提言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、是の如きの行を作さば、無處所にして行ずと爲す。何を以ての故に。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて諸法如中に住せば、是の如きの念無く、念處無く、亦念者も無ければなり。』佛須菩提に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩、是の如く行ぜば、何處の行と爲すや。』須菩提言さく、『世尊、是菩薩摩訶薩は是の如きの行を第一義中の行と爲す、二行得べからざるが故に。』『須菩提、汝が意に於て云何、若し菩薩第一義無念中に行ぜば、行相と爲すや不や。』『不、世尊。』『汝が意に於て云何、是菩薩摩訶薩は相を壞するや不や。』『不、世尊。』佛須菩提に告げたまはく、『云何が不壞相と名くるや。』須菩提言さく、『世尊、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて是念を作さず、我れ當に諸法相を壞

すべし。世尊、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるも、未だ佛の十力四無所畏四無礙智大慈大悲十八不共法を具足せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ず。世尊、菩薩摩訶薩は方便力を以ての故に、諸法に於て亦相を取らず、亦相を壞せず。何を以ての故に。世尊、是菩薩摩訶薩は、一切諸法の自相空なることを知るが故に。菩薩摩訶薩は是自相空中に住し、衆生の爲の故に三三昧に入り、是三三昧を用て衆生を成就す。」須菩提言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩は三三昧に入て衆生を成就するや。」佛言はく、「菩薩は是三三昧に住し、衆生の作法中の行を見、菩薩は方便力を以て教へて無作を得しめ、衆生の我相中の行を見、方便力を以て教へて空を行ぜしめ、衆生の一切相中の行を見、方便力を以ての故に教へて無相を行ぜしむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて三三昧に入り、三三昧を以て衆生を成就す。」

夢行品第五十八

(一)爾時、舍利弗、須菩提に問はく、「若し菩薩摩訶薩、夢中に三三昧空無相無作三昧に入らば、寧ろ般若波羅蜜を益すること有りや不や。」須菩提舍利弗に報ふ、「若し菩薩晝日に三三昧に入らば、般若波羅蜜を益すること有り、夜、夢中も亦當に益有るべし。何を以ての故に。晝夜夢中等しくして異有ること無ければなり。舍利弗、若し菩薩摩訶薩、晝日に般

らば一心に生滅兩時あることとなる故に不と答ふ。

【實際に證をなすべきや】若し心相同じく如に住すとせば如は卽ち實際と若ししからば心實際を作すべきや不やとの意、須菩提の答意は心虛誑法なるに小乘には智慧力少きを以て觀ずる能はず、卽ち實際となす故に不と言ふなり。

【如を離る等】如は一相畢竟清淨の故に所知なし、心の覺知するあらば如を離る、而も一切法皆如あり、云何が如を離れて心あらんや。

【如を見るや】如は無二無分別無所知の故に何ぞ見るといはん。

【深般若を行ずとなす】自ら小乘の淺薄なるを觀じ、大乘法の深きを觀ずる故に是く答ふ

るなり。【是れ何處に行ずるや】未得無生忍の菩薩の大乘觀に於て心高ぶるを破して無處所行なりとす。【何處の行となすや】無處所行とするが故に斷滅中に墮するを救はんとして何處の行たるかを明にす。【第一義中の行】何處を明す、第一義とは無二無分別なり。【行相】行に取相分別するなり。【相を壞す】無相は別相を壞去して達すとするも實は然らず、相本來無顚倒を除くがために不壞法相なり。【相を取らず】是れ無法、方便力の故、取相は有法、この二邊を離れて中道を行ずるなり。【作法中の行】衆生の所作皆邪願なるをいふ。

若波羅蜜を行じて般若波羅蜜を益すること有らば、是菩薩夢中に般若波羅蜜を行ずるも亦益有るべし。』舍利弗、須菩提に問はく、『菩薩摩訶薩、若し夢中に作す所の業、是業集成有りや不や。佛の所說の如くんば、一切法夢の如し、是を以ての故に集成すべからず。何を以ての故に。夢中に法の集成するもの有ること無ければなり。若し覺むる時憶想分別せば、應に集成有るべし。』須菩提、舍利弗に語らく、『若し人夢中に衆生を殺さば、覺め已りて憶念し相を取りて我殺是快を分別せんや。舍利弗、是事云何。』舍利弗言はく、『無緣の業生ぜず、無緣の思生ぜず。有緣の業生じ、有緣の思生ず。』『舍利弗、是の如く是の如し、無緣の業生ぜず、無緣の思生ぜず、有緣の業生じ、有緣の思生ず、見聞覺知法中に於て心生じ、不見聞覺知法中より心生ぜず、是中の心淨なる有り垢なる有り。是を以ての故に、舍利弗、有緣の故に業生じ無緣より生ぜず、有緣の故に思生じ無緣より生ぜず。』舍利弗、須菩提に語らく、『佛說の如くんば、一切の諸業諸思自相離る、云何が有緣の故に業生じ無緣より生ぜず、有緣の故に思生じ無緣より生ぜずと言ふや。』須菩提舍利弗に語らく、『相を取るが故に、有緣の業生じ無緣より生ぜず、相を取るが故に、有緣の思生じ無緣より生ぜず。』舍利弗、須菩提に語らく、『若し菩薩摩訶薩、夢中に布施持戒忍辱精進禪定智慧行りて、是善根福德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、是れ實の廻向なりや不や。』須菩提、舍利弗に語らく、『彌勒菩薩今現に前に在ます、佛不退轉の記を授け、當に作佛すべし、當に彌勒に問ふべし、彌勒當に答ふべし。』舍利弗彌勒菩薩に白さく、『須菩提の言はく、彌勒菩

【我相中の行】人我我所を以てする邪行。【一切相】男女色聲香味好醜長短等【夢行品】三三昧の夢中所行に就て夢中所行の益あるを以て名とす後段には成就衆生の願行を叙す。【一】夢中三三昧の利益を辯ず。【夢中等】夢は狂癡の法又三性の別ある故、中に於て實法を行じて果報を得べからざるが故に問ふ。【益有るべし】晝日行に益あらば、諸夢中にも益あり、法の實相を以てすれば、晝日の所行も破す、況んや夢行をや。【業集成】業實に集りて能く果報を成ずるをいふ。【夢中に衆生を殺さば等】覺時集成すべしといふ故に夢中殺人も覺めて後の憶想分別によ

薩今現に前に在ます、佛不退轉の記を授け、當に作佛すべし、彌勒當に答ふべし、「彌勒菩薩、舍利弗に語らく、『當に彌勒の名を以て答ふべきや、若は色受想行識もて答へんや、若は色空もて答へんや、若は受想行識空もて答へんや。是れ色もて答ふること能はず、受想行識もて答ふること能はず、色空もて答ふること能はず、受想行識空もて答ふること能はず。我れ是法の答ふべきものを見ず、能く答ふる者を見ず、我れ是人の受記を見ず、亦法の受記すべき者を見ず、亦受記の處を見ず、是一切法は、皆二無く別無ければなり』」「舍利弗、彌勒菩薩に語らく、『仁者の所說の如くんば、是の如きは法の證を作すことを得と爲すや不や。』彌勒菩薩舍利弗に答ふらく、『我が所說の如くんば、法是の如きは證せず。』」爾時、舍利弗是念を作さく、「彌勒菩薩は智慧甚深にして、久しく檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、無所得を以ての故に、能く是の如く說く」と。爾時、佛舍利弗に告げたまはく、「汝が意に於て云何、汝是法を用て阿羅漢を得ば、是法を見るや不や。」「舍利弗言さく、『見ざるなり。』」「舍利弗、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるも亦是の如く、是念を作さず「是法當に受記を得べし、是法已に受記し、是法當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、我れ若は得若は得ざるかと疑はず、自ら實に阿耨多羅三藐三菩提を得と知る。」

(三)佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩行りて檀那波羅蜜を行ずる時、若し衆生の飢寒凍餓し、衣服弊壞せるを見れば、菩薩摩訶薩は當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ檀

るか、殺業は殺事に成るかを問ふ。【我殺是快】我れ彼を害して意に快なりとする如きも夢中既に成れり、覺後の憶想分別に成ると云ふべからず。

【業、思】業とは身口の業、思とは但意業、思是れ眞業なり。身口業は思の爲の故に業と名くるなり。

【相を取るが故に】諸法空遠離相と雖も凡夫取相の故に有緣業生ず、若し取相なくば生ぜず、この點に於て晝夜夢中異なきを示し夢中三昧も亦益ありとす。

【實の廻向】昔日の取相著心を廻向となさず、況や眠睡覆心をや。

【彌勒菩薩今、現に等】舍利弗の難深くして答へ難きが故に彌勒に決を求めしむ。

那波羅蜜を行じ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして是の如きの事無く、衣服飲食資生の具、當に四天王天三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天の如くならしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して能く檀那波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の尸羅波羅蜜を行ずる時、衆生の殺生じ乃至邪見、短命、多病、顏色好からざる、威德有ること無き、貧にして財物に乏しき、下賤の家に生じて形殘醜陋なるを見れば、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、尸羅波羅蜜を行じ、我れ佛を得る時、我が國土の衆生をして、是の如きの事無からしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して、能く尸羅波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は羼提波羅蜜を行ずる時、諸の衆生互に相瞋恚し罵詈し、刀杖瓦石もて共に相殘害し奪命するを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、羼提波羅蜜を行じ、我が國土の衆生をして是の如きの事無く、相視ること父の如く母の如く、兄の如く弟の如く、姉の如く妹の如く善知識の如く、皆慈悲を行ぜしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く羼提波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜を行ずる時、衆生の懈怠して勤精進ならず、三乘聲聞辟支佛佛乘を棄捨するを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、毘梨耶波羅蜜を行じ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして是の如きの事無く、一切衆生勤修し精進し、三乘道に於て各度脫することを得

【當に彌勒の名等】二人所執ありて空の義に通達せざるを知るが故に、直接問に答へずして空を説くなり。【證をなす】彌勒直答せざるを以て反問す、證すとせば何が證たりや、證せざれば何を以て之を説くやを難ぜんとす。【證せず】涅槃も空にして證すべきなく、證せりとせず。【汝が意に於て等】舍利弗彌勒を讃ずるも何通ぜざるあり、故に佛阿羅漢に就て教ふ。【二】菩薩の六度修行に伴ふ。選擇の願行を明す。菩薩の得忍受記は淨佛國土成就衆生を行ずるにあり、今淨土の因縁を説きて不淨を簡ぶなり。【爾所の時に隨ひ】今日より成佛に至るまで恒に遍く縁

しめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く毘梨耶波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は禪那波羅蜜を行ずる時、衆生五蓋の覆ふ所と爲り、婬欲、瞋恚、睡眠、掉悔、疑の爲に初禪乃至第四禪を失ひ、慈悲喜捨、虚空處、識處、無所有處、非有想非無想處を失へるを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ禪那波羅蜜を行じ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして是の如きの事無からしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く禪那波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生の愚癡にして世間出世間の正見を失ひ、或は業無く業因緣無きを説き、或は神常を説き、或は斷滅を説き、或は無所有を説くを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ般若波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして是の如きの事無からしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して能く般若波羅蜜を具足し、疾に一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生の三聚、一には必正聚、二には必邪聚、三には不定聚に住するを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛を得る時、我が國土の衆生をして邪聚無く乃至其名をも無からしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して能く六波羅蜜を具足し、疾に一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、地獄中の衆生、畜生餓鬼

に應ずるなり。

【檀那を行じ】福慧を充して財法無畏を施し、王天王等となりて衆生を導き倶に布施を行ずるなり。

【業無く】業惑流轉を否定するなり。

【神常】人我若くは眞我の常住を說く、數論派の如し。

【斷滅】順世に神無常といふ如し。

【四姓の衆生】刹帝利クシャトリヤ(Kṣatriya)婆羅門ブラーフマナ(Brāhmana)毗舍ヴイシャ(Vaiśya)首陀羅シュードラ(Śūdra)印度社會の階級。

中の衆生を見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛を得るの時、我が國土中乃至三惡道の名も無からしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、是大地の株杌荊棘山陵溝坑穢惡の處を見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土をして是の如きの惡地無く、平かなること掌の如くならしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、是大地の純土にして金銀珍寶有ること無きを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土をして黃金沙を以て地に布かしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生の戀著する所有るを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして戀著する所無からしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足して、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、四姓の衆生、刹帝利、婆羅門、毘舍、首陀羅を見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生

を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして四姓の名も無からしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に下中上下中上家有るを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして是の如きの優劣なからしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足して、一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生の種種別異色なるを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして種種別異色なること無からしめ、一切衆生をして皆端正淨潔妙色成就せしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足して、一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に主有るを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして主の名も有ること無く、乃至其形像も無からしめん、佛法王を除くと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に六道の別異あることを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして六道の名、是れ地獄、是れ畜

生、是れ餓鬼、是れ神、是れ天、是れ人なりといふこと無く、一切衆生皆同一業もて四念處乃至八聖道分を修せしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足して、疾に一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に四生、卵生、胎生、濕生、化生有るを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして三種の生無く等しく一化生ならしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に五神通無きことを見て、當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして一切皆五神通を得しめんと。乃至疾に一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に大小便の患有るを見て、當に是願を作すべし。我れ佛と作る時、我が國土中の衆生をして皆歡喜を以て食と爲し、便利の患有ること無からしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に光明有ること無きを見て、當に是願を作すべし。我れ佛と作る時、我が國土中の衆生をして皆光明有らしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、日月時節歳數有るを見て、當に是願を作すべし。我れ佛と作る時、我が國土中日月時節歳數の名も有ること無からしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六

【三種雜病】冷熱風の雜れる病症。
【三毒病】貪瞋癡の三毒を病とす。

波羅蜜を行ずる時、衆生の短命を見て、當に是願を作すべし。我れ佛となる時、我が國土中の衆生をして壽命無量劫ならしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に相好有ること無きを見て、當に是願を作すべし。我れ佛と作る時、我が國土中の衆生をして皆三十二相成就すること有らしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生の諸善根を離るるを見て、當に是願を作すべし。我れ佛と作る時、我が國土中の衆生をして諸善根成就し、是善根を以て能く諸佛を供養せしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に三毒四病有るを見て、當に是願を作すべし、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして四種病、冷熱風病、三種雜病及び三毒病無からしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に三乘有るを見て、當に是願を作すべし。我れ佛と作る時、我が國土中の衆生をして二乘の名も無く、純一大乘ならしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、衆生に增上慢有るを見て、當に是願を作すべし。我れ佛と作る時、我が國土中の衆生をして增上慢の名も無からしめんと。乃至一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、是願を作すに應じ、若し我が光明壽命量有り、僧數限有らば、當に是願を作すべし。我れ六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が光明壽命量無く、僧數限無からしめんと。乃至一切種智に近づく。

【正憶念すべし】如上の願無量劫に無量世界の衆生を度せんとするは疲厭退没の邪憶念生ずべきを以て、かく厭退すべからざるをいふ。

復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、是願を作すに應じ、若し我が國土量有らば當に是願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が一國土をして恒河沙等の諸佛の國土の如くならしめんと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、當に是念を作すべし。生死の道長く、衆生の性多しと雖も、爾時是の如く正憶念すべし、生死の邊は虚空の如く、衆生性の邊も亦虚空の如し、是中實に生死往來無く、亦解脱者も無しと。菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。」

【河天品】恆伽提婆品ともいふ、前品の淨佛國土の行を聞き、河天女の發願受記することを明す。

【恆伽提婆】ガンガーデーヴ(Gangādevā)河天と譯す。一長者の恆伽天に祈りてこの女を得たりとす。

【偏袒右肩】衣を左肩より纏ひ右肩を露出す。直に長者の命を奉ぜんとする敬事の法。

【右膝著地】恭敬奉事の相。

【深心の因緣】宿世福德の因緣により今世富豪の家に生れ、佛法を聞いて信樂する故供養發願するに至る。

摩訶般若波羅蜜經　卷第十八

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

河天品第五十九

爾時、一女人有り恆伽提婆と字け、衆中に在りて坐す。是女人座より起ち、偏袒右肩し右膝を地に著け、手を合せて佛に白して言さく、「世尊、我れ當に六波羅蜜を行じ、淨佛國土を取ること、佛の般若波羅蜜中に說きたまふ所の如くすべし、我れ盡く當に行ずべし」と。是時女人は金銀華及び水陸の生華、種種の莊嚴供養の具、金縷もて織成せる蓋兩張を以て佛上に散ず、散じ已りて佛の頂上虛空中に於て、化して四柱寶臺と成る、端正嚴好なり。是女人は是功德を持て一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。爾時、世尊は是女人の深心の因緣を知りたまひて即時に微笑し、諸佛の法の如く種種の色光口の中より出で、靑黃赤白紅縹偏く十方無量無邊の佛國を照し、還て佛を繞ること三匝して頂上より入る。爾時、阿難座より起ちて右膝を地に著け、手を合せて佛に白さく、「佛は何の因緣もて微笑したまふや、諸佛の法は因緣無くして笑ふことを以てせず」。佛阿難に告げたまはく、「是恆伽提婆姉は未來世中に當に佛と作るべし、劫を星宿と名け、佛を金

【阿鞞羅提】アヴィラティ（Avirati）妙樂と譯す。東方阿閦佛の淨土なり。

【然燈佛等】釋尊定光佛に記を受くる時、この女人金華を散じて釋尊成佛の後受記せんとするをいふ。

華と號す。阿難、是女人は女身を畢りて、男子の形を受け、當に阿閦佛の阿鞞羅提國土に生じ、彼に於て梵行を淨修すべし。阿難、是菩薩は彼の國土に在りても亦金華と號す、是金華菩薩は彼に於て壽終り復他方佛國に至る、一佛國より一佛國に至りて諸佛を離れず、譬へば轉輪聖王の一觀より一觀に至り、生より終に至るまで足地を蹈まざるが如し。阿難、是金華菩薩摩訶薩も亦是の如く、一佛國より一佛國に至り、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、未だ當に佛を見ずんばあらず。時に阿難是念を作して言さく、『是金華菩薩摩訶薩の後に佛と作る時、諸の菩薩摩訶薩會す、當に知るべし、佛會の如く爲らんと』佛阿難の意に念ずる所を知りて阿難に告げて言はく、『是の如く是の如し、金華佛たるの時に菩薩摩訶薩會す、當に知るべし、佛會の如く爲らん。阿難、是金華佛の比丘僧は無量無邊不可數不可稱、若干百千萬億那由他なり。阿難、是金華菩薩の佛と作る時、其國土に是諸の衆惡有ること無きこと上に說く所の如し。』阿難佛に白して言さく、『世尊、是女人は何處に從て德本を植ゑ、善根を種うるや。』佛阿難に告げたまはく、『是女人は然燈佛に從て善根を植ゑて、初めて阿耨多羅三藐三菩提心を發す。是功德を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。亦金華を以て然燈佛の上に散じて、阿耨多羅三藐三菩提を求む。阿難、我の如くす、爾時、五華を以て然燈佛の上に散じ、阿耨多羅三藐三菩提を求むるに、然燈佛我が善根の成就するを知りて、我に與へて阿耨多羅三藐三菩提の記を授く。是女人我が受記するを聞きて發心して言はく、「願くば、我も當來世に亦是菩薩の如く、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得

【不證品】般若を學する時は色空等を觀じて證をなさざるを明す。

【一】般若を行ぜんために三三昧三十七道品等を學することを明す。

【學】因は學空、果は入空、方便を學空といひ、得を入空に名く。

【餘あらず分あらず】色法中乃至微塵、餘の微細の色分も留遺せず、無色法中乃至一念をも留めず。

【觀空を具足せば等】具足とは深く入ること、深く入る故に證を作さず、深く空に入るる故に空亦空と知る。

ん」と。阿難、當に知るべし、是女人は然燈佛に於て初めて發心すと。」阿難、佛に白して言さく、『世尊、是女人は久しく阿耨多羅三藐三菩提を習行するや。』佛の言はく、『是の如く是の如し、是女人は久しく阿耨多羅三藐三菩提を習行す。』」

不證品第六十

(一)須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、云何が空三昧を學し、云何が空三昧に入り、云何が無相無作三昧を學し、云何が無相無作三昧に入り、云何が四念處を學し、云何が四念處を修し、乃至云何が八聖道分を學し、云何が八聖道分を修するや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、應に色空、受想行識空、十二入十八界空を觀ずべし。乃至應に欲色無色界空を觀ずべし。是の觀を作す時に心をして亂れしめず、是菩薩摩訶薩、若し心亂れざれば則ち是法を見ず、若し是法を見ざれば則ち證を作さず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は善く自相空を學するが故に、餘有らず分有らず、證法證者皆見るべからざればなり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、佛の說く所の如くんば、菩薩摩訶薩は空法もて證を作すべからず。世尊、云何が菩薩は空法中に住して而して證を作さざるや。』佛須菩提に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩觀空を具足せば、先づ是願を作さく、「我れ今空法もて證を作すべからず、我れ今は學ぶ時に

【緣中に繋在】專ら心空緣中に繋在せば則ち心柔軟にして空より出づる能はず。

【二】住して證せざるを譬喩に依て說明す。

【壯夫等】壯夫は菩薩に、器杖は菩薩の五神通等方便力に、安立不動は菩薩畢竟空に住するに喩ふ。

して是れ證する時に非ず。」と。菩薩摩訶薩は專ら心を攝して緣中に繋在せず。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提中に於て退せず、亦漏盡證を取らず。須菩提、若し菩薩摩訶薩、是の如きの大善妙法を成就せば、何を以ての故に、是空中に住して是念を作すや「我れ今は是れ學ぶ時にして是れ證する時に非ず」と。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く念ずべし「我は是れ檀那波羅蜜を學ぶ時にして是れ證する時に非ず。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を學ぶ時、四念處を修する時、乃至八聖道分を修する時にして是れ證する時に非ず。空三昧無相三昧無作三昧を修する時にして是れ證する時に非ず。佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲を修する時にして是れ證する時に非ず、我れ今は一切種智を學ぶ時にして是れ須陀洹果の證乃至阿羅漢果辟支佛道の證を得る時に非ず」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、空觀を學して空中に住し、無相無作觀を學して無相無作中に住し、四念處を修して四念處を證せず、乃至八聖道分を修して八聖道分を證せず、是菩薩は三十七品を學すと雖も、三十七品を行ずと雖も而も須陀洹果の證乃至辟支佛道を作さず。

(三)譬へば壯夫は勁勇猛健にして兵法六十四能を善くし、器仗を堅持し安立して動ぜず、諸の伎術を巧にし、端正淨潔にして人に愛敬せられ、少しく事業を修して報利を得ること多きが如し。是因緣を以ての故に、衆に恭敬し尊重し讚歎せられ、人の敬重するを見て、倍復歡喜す。少く因緣有りて當に他處に至るべきに老弱を扶將し、諸の險難恐怖の處を

【六十四能】六十四の數は漢に百といふが如し。

【險難處等】險難處は三界生死に、父母親族は是れ度せらるべき衆生、怨賊は魔煩惱に喩ふ。

【本處に還歸】菩薩所行の道に喩ふ。

【翼ありて等】空中無所有にして云何が行ずべきかを疑ふを以て鳥喩を說く。

【墮せず…證せず】鳥未だ所至に到らざれば終に中住せざるが如し。

【弓等】弓は菩薩の禪定、箭は智慧、虛空は三解脫門、地は涅槃、箭箭相拄は方便に比す。

過ぎ、父母を安慰し、妻子を曉喩し『恐懼有ること莫れ。我れ能く此を過ぐれば、必ず苦む所無からん』と。險難道中に多く怨賊有りて潛伏し劫害するも、其人智力具足するが故に、能く惡道を度りて本處に還歸し賊等に遇はず、歡喜し安樂す。須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く一切衆生中に於て慈悲喜捨心徧く滿足す。爾時、菩薩摩訶薩は四無量心に住し、六波羅蜜を具足して漏盡證を取らず、一切種智を學びて空無相無作解脫門に入る。是時菩薩は一切諸相に隨はざるも亦無相三昧を證せず、無相三昧を證せざるを以ての故に聲聞辟支佛地に墮せず、須菩提、譬へば翼有りて鳥の虛空に飛騰して墮墜せず、空中に在りと雖も、亦空に住せざるが如し。須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く空解脫門を學び、無相無作解脫門を學ぶも亦證を作さず、證を作さざるを以ての故に聲聞辟支佛地に墮せず、未だ佛の十力大慈大悲無量諸佛法一切種智を具足せずば、亦空無相無作解脫門を證せず。須菩提、譬へば健人諸の射法を學びて射術を善くするが如し。仰いで空中を射、復後箭を以て前箭を射、箭箭相拄へて前を墮せしめざること、隨意自在なり。若し墮せしめんと欲せば便ち後箭を止む、爾れば乃ち地に墮するが如し。須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、諸善根未だ具足せざれば、實際に於て證を作さず、若し善根成就せば是時便ち實際に於て證を作す。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時に、應に是の如く諸法の法相を觀ずべし。』

【三】空に處して墮せず能く生を度す。菩薩の難行は大悲本願に依ることを明す。

【方便力を成就すれば等】豫め衆生の苦を觀て度せんとするが故に智足らざるも慈大なるを以て空涅槃に墮せざるをいふ。

【四】衆生相に著するを斷ぜんが爲に證せず、善法を增益する觀智と利生とをなすべきを明す。

(三)須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩の爲す所は、甚だ難し。何を以ての故に。是れ諸法相を學し、實際を學し、如を學し、法性を學し、畢竟空を學し、乃至自相空及び三解脫門を學すと雖も、終に中道にして墮落せざればなり。世尊、是れ甚だ希有なり。』佛須菩提に告げたまはく、『是菩薩摩訶薩は一切衆生を捨てざるが故に、是の如きの願を作す。須菩提、若は是菩薩摩訶薩是念を作さく、「我れ一切衆生を捨つべからず、一切衆生は無所有法中に沒在す、我れ當に度すべし」と。爾時、即ち空解脫門無相解脫門無作解脫門に入る。須菩提、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は方便力を成就すれば、未だ一切種智を得ざるも、是解脫門を行じ、亦中道にして實際の證を取らず。

(四)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は是諸の甚深の法、謂ゆる內空乃至無法有法空、四念處乃至三解脫門を觀ぜんと欲す。爾時、菩薩摩訶薩は應に是の如きの心を生ずべし、是諸の衆生は長夜に我相乃至知者見者相を行じ、得法に著す、衆生是諸相を斷ぜんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、當に法を說くべしと。爾時、菩薩は空解脫門無相無作解脫門を行ずるも、亦實際の證を取るべからず。證せざるを以ての故に、須陀洹果乃至辟支佛道に墮せず。須菩提、是菩薩摩訶薩は、是心を以て善根を成就せんと欲するが故に、中道にして實際に證を作さず。四禪四無量心四無色定、四念處乃至八聖道分、空無相無作、佛の十力四無所畏四無礙智大慈大悲十八不共法を失はず。是時、菩薩摩訶薩は一切助道法乃至阿耨多羅三藐三菩提を成就し、終に耗減せず、是菩薩は方便力有るが故に常に善法を增益

【五】以下三解脱門について再説、初に無作、衆生の顛倒を見、之を破せんとする故に墮せず。

【六】次に空、得法を破せんとする故に、空觀も墮落とならず。

【七】次に無相について。

し、諸根の通利阿羅漢辟支佛の根に勝る。

(五)復次に須菩提、若は菩薩摩訶薩是念を作す、衆生長夜に四顛倒、常相樂相淨相我相に著す。是衆生の爲の故に薩婆若を求む、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得たる時、爲に無常法、苦、不淨、無我法を説くことを爲す。是菩薩は是心を成就し、方便力を以て般若波羅蜜を行ずれば、佛三昧を得ず、未だ佛の十力四無所畏四無礙智大慈大悲十八不共法を具足せざるも、亦實際に證を作さず。爾時、菩薩は無作解脱門を修し、未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ずと雖も、亦實際に證を作さず。

(六)復次に須菩提、若は菩薩摩訶薩是念を作す。衆生長夜に得法に著す、謂ゆる我衆生乃至知者見者、是れ色、是れ受想行識、是れ入、是れ界、是れ四禪四無量心四無色定とし、我れ是の如く行ずとす。我が如きは阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生をして是得法無からしめんと。菩薩は是心成就し、方便力を以て般若波羅蜜を行ずれば、未だ佛の十力四無所畏四無礙智大慈大悲十八不共法を具足せざるも、實際に於て證を作さず。爾時、菩薩は具足して空三昧を修す。

(七)復次に須菩提、若は菩薩摩訶薩是念を作さく、「衆生長夜に諸相を行じ、謂ゆる男相女相、色相無色相とし、我れ是の如く行ずとす。我が如きは阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生をして是諸相の過失無からしめん」と。是心成就し、方便力を以て般若波羅蜜を行ずれば、未だ佛の十力乃至十八不共法を具足せざるも、實際に於て證を作さず。爾時、菩薩摩訶薩

【八】未得道の菩薩能く空深を行ずる疑難を解く。
【但だ空を觀ず等】空を念じて一心に習行すべし、二乘法の如きは但だ學知するのみ。
【所學の相】方便學知の相。
【薄地】不退地に在りて煩惱薄きをいふ。
【若は聞く】但だ師より聞きて自ら未だ菩薩地を具足せず。
【若は聞かざる】自ら思惟正念にして無生忍を得ざるも能く諸の法相を求む。

は具足して無相三昧を修す。

(八)須菩提、若し菩薩摩訶薩六波羅蜜を學し、內空乃至無法有法空を學し、四念處乃至空無相無作解脫門を學し、佛の十力四無所畏四無礙智大慈大悲を學し、十八不共法を學し、是の如くして智慧成就するも、若は作法に著し、若は三界に住するは、是處有ること無し。是菩薩摩訶薩の助道法を學し、助道法を行ずる時、當に試問すべし「菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、云何が是法を學し、空を觀じて空の實際を證せず。證せざるを以ての故に、須陀洹果乃至辟支佛道に墮せず、無相無作無起無生無所有を觀ずるも、亦實際に證を取らずして般若波羅蜜を修行するや」と。是の如く問ふべし。須菩提、若し諸の菩薩摩訶薩若し試問する時に、是菩薩若は是の如く答へん「菩薩摩訶薩は但だ空を觀ずべきのみ、但だ無相無作無起無生無所有を觀ずべきのみ、是菩薩摩訶薩は空無相無作無起無生無所有を學すべからず、是助道法を學すべからず」と。須菩提、當に知るべし、是菩薩に諸佛未だ阿耨多羅三藐三菩提の記を授けず。何を以ての故に。是人は阿惟越致菩薩の所學の相を說くこと能はず、示すこと能はず、答ふること能はざればなり。若は是菩薩摩訶薩、阿惟越致所學の相を能く說き能く示し能く答ふれば、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は、已に菩薩道を習學して薄地に入ること、餘の阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致地の如し。」須菩提佛に白して言さく「世尊、頗し阿惟越致を得ざる菩薩、能く是の如く答ふるも有りや不や」。佛言はく「有り。須菩提、是菩薩摩訶薩六波羅蜜を若は聞くも若は聞か

ざるも、能く是の如く答ふること、阿惟越致の菩薩摩訶薩の如し。」須菩提言さく、「世尊、多く菩薩の佛道を求むる有り、少く菩薩能く是の如く答ふる有ること、阿惟越致菩薩摩訶薩の學道無學道中の如し。」佛須菩提に語りたまはく、「是の如く是の如し、是菩薩は甚だ少し。何を以ての故に、菩薩摩訶薩少く是の如く受記を得たる阿惟越致有るのみなればなり。慧地若し受記を得ること有れば、是人は能く是の如く答ふ、是人は善根明了にして諸天世人の壞すること能はざる所なり。」

夢誓品第六十一

（一）佛須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、乃至夢中にも聲聞辟支佛地を貪らず、亦三界を貪らず、諸法を觀るに夢の如く幻の如く響の如く焰の如く化の如しとして、亦證を作さず。須菩提、當に知るべし、是れ阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致相なり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は夢中に、佛の無數百千萬億の比丘比丘尼優婆塞優婆夷天龍鬼神緊那羅等の與に法を說くを見、佛に從ひて法を聞き、卽ち中義を解し、法に隨て行ず。須菩提、當に知るべし、是れ阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致相なり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は夢中に、佛三十二相八十隨形好より大光明を放ち、虛空に踊在し、大比丘僧中に於て法を說き、大神力を現して化人を化作し、他國土に到りて佛事を施作するを見る。須菩提、

【學道】未だ無生忍を得ざるをいひ、已に得たるを無學道といふ。

【夢誓品】夢中にも亦二乘法を證せざるを明す。不現前、授記の未具足因、授記因緣者の不退、相貌を明し、魔事、遠離法、善知識、般若の相を說く。

【一】晝日常に空を行ずる者の夢中の相による阿惟越致を明す。

【聲聞……貪らず】菩薩は世間樂に著すると、二乘を取るとの故に二處に退す、この菩薩堅

心にして深く空及び慈悲心に入るの故に乃至夢中にも亦三界二乘を貪らざるなり。

【緊那羅】キンナラ(Kinnara)人非人と譯す。

【今實に是者有り】夢中に地獄火を滅して不退相ならんに城火亦滅すべし。夢覺異りなきが故に。

當に知るべし、是れ阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致相なり。復次に須菩提、若は菩薩摩訶薩夢中に、兵起り、若は聚落を破し、若は城邑を破し、若は火を失するを見る時、若は虎狼師子猛害の獸を見、若は來りて其頭を斷ぜんと欲する者を見、若は父母喪亡し、兄弟姉妹及び親友知識の死する者を見、是の如き等の種種愁苦の事を見るも、而も驚かず怖れず、亦憂惱せず、夢より覺め已りて卽時に思惟すらく、「三界虛妄にして皆夢の如きのみ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時に、當に衆生の爲に三界は夢の如しと說くべし」。須菩提、當に知るべし、是れ阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致相なり。復次に須菩提、云何が當に是阿惟越致菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、國中に三惡道の無きことを知るや。須菩提、菩薩摩訶薩若し夢中に地獄畜生餓鬼を見ば是念を作さく、「我れ當に勤精進して、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國中一切三惡道無からしめん。」何を以ての故に。是夢と及び諸法とは二無く別無ければなり。須菩提、當に知るべし、是れ阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致相なり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は夢中に地獄の火の衆生を燒くを見て是誓を作さく、「若し我れ實に是れ阿惟越致ならば是火當に滅すべし。」是火卽ち滅す。若し地獄の火卽ち滅せば是れ阿惟越致相なり。復次に、若し菩薩晝日に城郭に火の起るを見て是念を作さく、「我れ夢中に阿惟越致の行類相貌を見るに、我れ今實に是者有り、自ら誓を立てて言はく、「是火は當に滅すべし」と。若し火滅すれば當に知るべし、是菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得て、阿惟越致地に住す。若し火滅せずして一家を燒きて一家

【一家を燒き】鬼神龍王等のこの火を助滅し難きは衆生の重罪なるによる、故に菩薩の福德智慧力も滅する能はざるなり。

【破法業】般若波羅蜜を破する重罪。

【二】惡魔非人の燒亂する不退相の魔事を細說す。

【深心】一心或は重心といふ。深く佛道を愛するなり。

を置き、一里を燒きて一里を置けば、須菩提、當に知るべし、燒かるる家は破法業の因緣厚集せり。是を以ての故に、一家を燒きて一家を置く。是の諸の衆生は、今世に破法の餘殃を受くるが故に燒かる。須菩提、是因緣を以ての故に當に知るべし、是れ阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致相なり。」

(二)佛須菩提に告げたまはく、「今當に更に汝の爲に阿惟越致の行類相貌を說くべし。須菩提、若は男子、若は女人、非人の持する所と爲る。是時菩薩摩訶薩は是念を作さく、『若し我れ過去諸佛の授記する所と爲り、我が心清淨にして阿耨多羅三藐三菩提を求め、清淨正道を行じ、聲聞辟支佛心を遠離し、聲聞辟支佛念を遠離せば、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし、我れ必ず阿耨多羅三藐三菩提を得、得ざるに非ず。十方國土中現在無量の諸佛は、知らざる所無く見ざる所無く、解せざる所無く證せざる所無し。諸佛は我が深心を知り、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきを審定したまはん。』と。是至誠の誓を以ての故に、是男子女人は非人の持する所と爲り、非人の惱ます所と爲るも、是非人當に遠く去るべし、須菩提、是菩薩摩訶薩是の如く誓ふも、若し非人去らざれば、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は未だ過去の諸佛より阿耨多羅三藐三菩提の記を受けず。須菩提、若し菩薩摩訶薩、是の如く誓ひて若し非人去らば、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は已に過去の諸佛より阿耨多羅三藐三菩提の記を受けたり。須菩提、是行類相貌を以て當に知るべし、是れ阿惟越致菩薩摩訶薩の阿惟越致相なり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、六波羅蜜及び方便力を遠離して、

久しく四念處を行ぜず、乃至久しく空無相無作三昧を行ぜず、未だ菩薩位に入らざれば、是菩薩は惡魔の嬈す所と爲る。菩薩是誓を爲さく「若し我れ實に諸佛より受記せば、是非人當に去るべし」と。是時に惡魔は卽ち方便を作して非人を勅めて去らしむ、惡魔は威力有りて諸の非人に勝るが故に非人卽ち去る。是時に菩薩は是念を作さく「我が誓力を以ての故に非人去れり」と。是れ惡魔の力たることを知らずして、是證を恃むが故に、諸餘の菩薩を輕弄し毀蔑して是言を作さく「我れ已に諸佛より受記す、汝等は未だ得ず」と、是空誓を用て方便力無きが故に增上慢を生ず。是事を以ての故に薩婆若を遠離し、阿耨多羅三藐三菩提を遠離す。須菩提、當に知るべし、是人は二地若は聲聞地若は辟支佛地に墮す。是誓の因緣を以ての故に魔事を起し、是人善知識に親近し依止せず。阿惟越致相を問はざるを以ての故に、魔の縛する所と爲ること益々復堅固なり。所以は何ん、是菩薩は久しく六波羅蜜を行ぜず、方便力無きが故なり。須菩提、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。

須菩提、云何が菩薩摩訶薩、久しく六波羅蜜を行ぜず、乃至未だ菩薩位に入らざれば、惡魔の嬈す所と爲るや。須菩提、惡魔變化して種種身と作り菩薩に語りて、言はく、「汝は諸佛の所に於て、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得、汝の字は某、汝の父の字は某、汝の母の字は某、汝の兄弟姉妹の字は某、汝の七世の父母の名字は是の如し、汝は某の方、某の國、某の城、某の聚落中に在りて生ず」と。若し菩薩の性、行、和柔なるを見れば、菩薩は語りて言はく、「汝は先世にも亦復和柔なり」と。若し急性卒暴なるを見れば、

【阿蘭若行】以下十二頭陀等の因縁を詐りて説くなり。
【納衣】著納衣のこと。
【死尸等】塚間住のこと。
【如敷坐】隨處住の意。
【不塗脚】香油を塗布せざるなり。
【比丘の被服】三衣被著の相。

便ち言はく「汝は先世にも亦爾り」と。若し菩薩の阿蘭若行を修するを見れば、語りて言はく「汝は先世にも亦阿蘭若行を修す」と。若し菩薩の乞食し納衣し、中後に飲漿せず、一坐食し、一鉢にして食し、死尸の間に住し露地に住し、樹下に止り、常に坐して臥せず、如敷坐し、但だ三衣を受け、若は少欲、若は知足、若は遠離住、若は不塗脚、若は少言語なるを見れば、便ち語りて言はく「汝は先世にも亦是行有り、何を以ての故に。汝今此頭陀の功徳有るは先世にも亦是功徳有りたればなり」と。是菩薩は是先世の事及び名姓を聞き、今頭陀の功徳を讃ずるを聞き、即ち歡喜して憍慢心を生ず。是時、惡魔菩薩に語りて言はく「汝は是の如きの功徳、是の如きの相有り、汝は實に諸佛より阿耨多羅三藐三菩提の記を受けたり。」と。須菩提、惡魔は或は比丘と作りて被服し、或は居士形と作り、或は父母身と作りて菩薩の所に來到し、是の如く言はく「汝は已に阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり。何を以ての故に。是阿惟越致の功徳相をば、汝盡く具足して之を有すればなり」と。須菩提、我が説く所の實の阿惟越致の行類相貌は是人永く無し。須菩提、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は魔の持する所と爲る。何を以ての故に。是阿惟越致の行類相貌は、是人永く無くして、是名字を聞くを以ての故に憍慢心を生じ、餘人を輕弄し毀蔑すればなり。須菩提、是を菩薩摩訶薩魔の持する所と爲ると名く。當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は久しく六波羅蜜を行ぜず、名字相を知らず、色相を知らず、受想行識相を知らざれば、惡魔來りて語で言はく「汝當來世に阿

【本念】先時行者の所念。

【四重禁法】殺盗婬妄の四は斷頭罪として比丘僧より斥けらる。

【三】遠離法の眞不眞を明す。

耨多羅三藐三菩提を得る時、是の如きの名字有り」と。其本念に隨ひて其名號を說く。是無智無方便の菩薩は是念を作さく「我れ先にも亦是成佛の名號有りて念ず、是人も我が所念の如く說く、是人の所說は我が本念に合す、我れ必ず諸佛の授記する所とならん」と。須菩提、我が說く所の阿惟越致の行類相貌は是人永く無し、但だ空名字を以て餘人を輕弄し毀蔑す。是事を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を遠離す。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を遠離して方便力無く、善知識を遠離して惡知識と相得るが故に、二地聲聞辟支佛地に墮す。若し即ち是身に過を悔ゆる有れば、久久生死中に往來し、然る後還て般若波羅蜜に依止す。若し善知識に值へば、常に隨逐し親近するが故に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是人は是身に於て若し即ち悔いざれば、當に二地若は阿羅漢地若は辟支佛地に墮すべし。須菩提、譬へば比丘四重禁法に於て若し一事をも犯さば、沙門に非ず釋子に非ずして、是人現身に四沙門果を得ざるが如し。須菩提、是菩薩は空名字の菩薩心に著するも亦是の如く、餘人を輕弄し毀蔑するが故に、當に知るべし、是罪は比丘の四禁よりも重し。須菩提、是重罪を置け、其罪五逆よりも過ぎたり。是名字を受くるを以ての故に高心を生じ、餘人を輕弄し毀蔑す、若し是心を生ぜば當に知るべし、其罪甚だ重し。是の如きの名字等の微細の魔事、菩薩は皆當に覺知すべし。

〔三〕復次に須菩提、菩薩空閑山澤曠遠の處に在れば、魔菩薩の所に來到し、遠離の法を讃歎して是言を作さく「善男子、汝の行ずる所の者は是れ佛の稱譽する所の遠離の法なり」と。

【城傍】都城の附近に親族同學と遠く離れざるをいふ。

須菩提、我は是遠離、謂ゆる但だ空閑山澤曠遠の處に在るのみを名けて遠離と爲して讃せず。「須菩提言さく、『世尊、若し空閑山澤曠遠の處、遠離の法に非ざれば、云何が更に異の遠離法有りや。』佛須菩提に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩、聲聞辟支佛心を遠離し、空閑山澤曠遠の處に住すれば、是れ佛の許す所の遠離法なり。須菩提、是の如きの遠離の法は、菩薩摩訶薩の應に修行すべき所なり。晝夜に是遠離法を行ずる、是を遠離行の菩薩と名く。須菩提、若し惡魔の說く所の遠離法なれば、空閑山澤曠遠の處なるも、是菩薩心憒閙に在り、謂ゆる聲聞辟支佛心を遠離せず。般若波羅蜜を勤修せざれば、是菩薩摩訶薩は一切種智を具足すること能はず。是菩薩は惡魔の說く所の遠離法を行じ心清淨ならず、而して餘の菩薩城傍に心淨にして聲聞辟支佛憒閙心無く、亦諸餘の雜惡心も無くして、禪定解脫智慧神通を具足する者を輕ず。是般若波羅蜜を離れて方便無き菩薩摩訶薩は、絕曠百由旬の外、禽獸鬼神羅刹所住の處に在りて、若は一歲百千萬億歲、若は萬億歲を過ぐると雖も、是菩薩の遠離法、謂ゆる諸の菩薩是遠離法を以て深心に阿耨多羅三藐三菩提を發し雜行せざるを知らず、是菩薩は憒閙行にして受くるに依り是遠離法に著す、是人の行ずる所は佛の許さざる所なり。須菩提、我が說く所の實の遠離法、是菩薩は是中に在らず、亦是遠離相を見ず。何を以ての故に。但だ是れ空遠離のみを行ずるが故に。爾時、惡魔來りて虛空中に在りて住し、讃じて言はく、『善い哉善い哉、善男子、此は是れ佛の說く所の眞の遠離法なり、汝是遠離を行ぜば疾に阿耨多羅三藐三菩提を得』と。是菩薩摩訶薩は是

【旃陀羅】チャンダーラ（Caṇḍāla）屠種と譯す。

【四】善知識を明す。

遠離に念著して、諸餘の佛道を求むる清淨の比丘を輕易し、以て憒鬧を爲す、憒鬧を以て不憒鬧と爲し、不憒鬧を以て憒鬧と爲し、恭敬すべきを而も恭敬せず、恭敬すべからざるを而も恭敬し、是菩薩是言を作さく「非人我を念じ、來りて我を稱讚す、我が所行は是れ眞の遠離なり」と、城傍に住する者誰れか當に稱美すべけんや。汝是因緣を以ての故に、餘の菩薩摩訶薩を輕ず。須菩提、當に知るべし、是を菩薩の旃陀羅と名け、諸の菩薩を汚染す。是人は菩薩を像るを以て、實に是れ天上人中の大賊、亦是れ沙門被服中の賊なり。是の如きの人は諸の佛道を求むる者の親近すべからず、供養し恭敬すべからざる所なり。何を以ての故に。須菩提、當に知るべし、是人は增上慢に墮すればなり。是を以ての故に、若し菩薩摩訶薩、一切智を捨てざらんと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲し、一心に阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲し、一切衆生を利益せんと欲せば、應に是人に親近し、恭敬し供養すべからず。菩薩摩訶薩の法は常に自利を勤求し、世間を厭患し、心に常に三界を遠離すべし。是人に於て當に慈悲喜捨の心を起すべし、我れ菩薩道を行じ、應に是の如きの過罪を生ずべからず。若し生ぜば當に疾に滅すべし。須菩提、菩薩摩訶薩は當に善く是事を覺り、是事中より善く自ら勉て出づべし。

(四)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は深心もて阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すれば、當に善知識に親近し恭敬し供養すべし。須菩提佛に白して言さく「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の善知識なりや。」佛須菩提に告げたまはく「諸佛は是れ菩薩摩訶薩の善知識なり、諸の菩薩

【六波羅蜜は是れ菩薩の世尊】六度と佛と異ならず、能く人を度し、壞すべからざるをいふ。
【道】この道を行ずれば無量佛法の中に入る故に、六度中所說人、籌量思惟分別修行せば大智慧を得、無明を破す故に大明、炬等といふなり。
【是れ父是れ母】般若は母、五度は父、和合の故に六度是れ父母といふなり。
【教に隨て任せず】自ら諸法實相を知るべきをいふ。
【所應學處】法相の日標にしてこれに異るは信せず隨はず。

摩訶薩も亦是れ菩薩の善知識なり。須菩提、阿羅漢も亦是れ菩薩の善知識なり、是を菩薩摩訶薩の善知識と爲す。復次に須菩提、六波羅蜜も亦是れ菩薩の善知識なり、四念處乃至十八不共法も亦是れ菩薩の善知識なり。須菩提、如實際法性も亦是れ菩薩の善知識なり。須菩提六波羅蜜は是れ菩薩の世尊、六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の道、六波羅蜜は是れ大明、六波羅蜜は是れ炬、六波羅蜜は是れ智、六波羅蜜は是れ慧、六波羅蜜は是れ救、六波羅蜜は是れ歸、六波羅蜜は是れ洲、六波羅蜜は是れ究竟道、六波羅蜜は是れ父、是れ母なり。四念處乃至一切種智も亦是の如し。何を以ての故に。六波羅蜜三十七道法も亦是れ過去諸佛の父母なり、六波羅蜜三十七道法も亦是れ未來現在十方の諸佛の父母なり。何を以ての故に。須菩提、六波羅蜜三十七道法中に過去未來現在十方の諸佛を生ずるが故に。是を以ての故に。須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得、佛國土を淨め衆生を成就せんと欲せば、當に六波羅蜜三十七道法及び四攝法を學して、衆生を攝取すべし。何等をか四となす、布施、愛語、利益、同事なり。須菩提、是利益を以ての故に、我れ六波羅蜜及び三十七道法は是れ諸の菩薩摩訶薩の世尊、是れ道、是れ大明、是れ炬、是れ智、是れ慧、是れ救、是れ歸、是れ洲、是れ究竟道、是れ父、是れ母なりと言ふ。須菩提、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は他人の教に隨て任せざらんと欲し、一切衆生の疑を斷ぜんと欲し、佛國土を淨め衆生を成就せんと欲せば、當に是般若波羅蜜を學ぶべし。所以は何ん、是般若波羅蜜の中に廣く諸法を說く、是れ菩薩摩訶薩の所應學處なればなり。」

【五】般若波羅蜜の理を說く。

(五)爾時、須菩提佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ般若波羅蜜相なるや。」佛須菩提に告げたまはく、「如虛空相は、是れ般若波羅蜜相なり、須菩提、般若波羅蜜は無所有相なり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、頗し因緣有り、般若波羅蜜相の如く、諸法の相も亦是の如くなりや。」佛須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、般若波羅蜜相の如く、諸法の相も亦是の如し、何を以ての故に、須菩提、一切法は離相空相なり、是因緣を以ての故に、須菩提、般若波羅蜜相の如く、諸法の相も亦是の如し、謂ゆる離相空相の故に。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し一切法一切法離、一切法一切法空ならば、云何が衆生の若は垢、若は淨なることを知るや。世尊、離相法は垢無く淨無く、空相法は垢無く淨無く、離相空相の法は阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、離相空相は法として得べきもの無ければなり、世尊、離相中空相中に、菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る者、有ること無し。世尊、我れ云何が當に佛の說く所の義を知るべきや。」佛須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何、是衆生は長夜に我我所心を行ずるや不や。」「是の如し、世尊、衆生長夜に我我所心を行ず。」「汝が意に於て云何、是我我所心は、離相なりや不や。空相なりや不や。」須菩提言さく、「世尊、我我所心は離相空相なり。」「汝が意に於て云何、此我我所心を以て衆生は生死中に往來するや不や。」「是の如し、世尊、此我我所心を以て衆生は生死中に往來す。」「是の如く須菩提、衆生生死中に往來するが故に垢惱有ることを知る、須菩提、若し衆生我我所心無く、著心無くんば、是衆生は復生死の中に往來せず。若し生死の中に往

來せざれば則ち垢惱無し。是の如く須菩提、衆生淨有り。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩の是の如く行ずるを、色を行ぜず、受想行識を行ぜずと爲し、四念處乃至八聖道分を行ぜずと爲し、內空乃至無法有法空を行ぜずと爲し、佛の十力乃至一切種智を行ぜずと爲す。何を以ての故に。是れ法は得べからず、亦行ずる者無く、亦行ずる處無く、亦行ずる法も無ければなり。世尊、菩薩摩訶薩は是の如く行ずれば、一切世間の諸の天人阿修羅も、是菩薩摩訶薩を降伏すること能はず、一切の聲聞辟支佛も及ぶこと能はざる所なり。何を以ての故に。所住の處、能く及ぶもの無きが故に。謂ゆる菩薩の位なり。世尊、是菩薩摩訶薩の行は、薩婆若心に應じ、能く及ぶ者無し。」「須菩提、菩薩摩訶薩は是の如く行じて疾に薩婆若に近づく。須菩提、汝が意に於て云何、若し閻浮提の衆生、盡く人身を得、人身を得已りて皆阿耨多羅三藐三菩提を得ば、若し善男子善女人有りて、其形壽を盡して供養し恭敬し尊重し讚歎し、是善根を持て阿耨多羅三藐三菩提に迴向せば、是人は是因緣を以て福を得ること多きや不や。」須菩提言さく、「甚だ多し、世尊。」佛言はく、「是善男子善女人、大衆中に於て是般若波羅蜜を說き、顯示し分別し照明し開演し、亦般若波羅蜜に應じて行じ正憶念す、其福の多からんには如かず。乃至三千大千世界の中の衆生も亦是の如し。」「須菩提、汝が意に於て云何、閻浮提中の衆生一時に皆人身を得、人身は得已りて若し善男子善女人、教へて十善道四禪四無量心四無色定を行ぜしめ、教へて須陀洹道乃至阿羅漢辟支佛道を得しめ、教へて阿耨多羅三藐三菩提を得しめ、是善根を以

【福田の邊】福田とは須陀洹より佛に至る、今その究竟するをいふ。
【何を以ての故に等】妙福田大勢力の因緣を明す、般若を行ずれば諸法平等忍を得、平等忍を得るが故に空を行ずるも四無量心を生ず、四無量心中大悲は是れ大乘の本なり。
【想と倶ならず】分別取相に伴はざる平等心なり。
【般若に應ずる念】卽ち般若心、賢聖默然として無所得なるものこれ。
【能く施主に報ゆ】般若心より出でて說法し、般若を說き已りて般若に還入して住するなり
【虛しく……食せざる】般若を學し施主道心を生ずるなり。

て阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、須菩提、汝が意に於て云何、是善男子善女人は、福を得ること多きや不や。「須菩提言さく、「甚だ多し、世尊。「佛言はく、「是善男子善女人、是甚深の般若波羅蜜を以て衆生の爲に說き、顯示し、分別し照明し開演し、亦薩婆若を離れざることの福を得るの多きには如かず。乃至三千大千世界も亦是の如し。是菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心を遠離せざれば、則ち一切福田の邊に到る。何を以ての故に。諸佛を除きて餘法の菩薩摩訶薩の勢力の如きもの有ること無ければなり。何を以ての故に。諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切衆生の中に於て大慈心を起し、諸の衆生の死地に趣くを見るが故に大悲を起し、是道を行ずる時歡悅して大喜を生じ、想と倶ならず、便ち大捨を得ればなり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大智光明と爲す、大智明とは謂ゆる六波羅蜜なり。須菩提、是諸の善男子善女人は、未だ作佛せずと雖も、能く一切衆生の爲に大福田と作り、阿耨多羅三藐三菩提に於ても亦轉ぜず、受くる所の供養の衣服飲食臥床疾藥、資生所須、般若波羅蜜に應ずる念を行じて、能く必ず施主の恩に報ひ、疾に薩婆若に近づく。是を以ての故に、須菩提、若し菩薩摩訶薩、虛しく國中の施を食せざらんと欲し、衆生に三乘道を示さんと欲し、衆生の爲に大明と作らんと欲し、三界の牢獄を拔出せんと欲し、一切衆生に眼を與へんと欲せば、應に常に般若波羅蜜を行ずべし。常に般若波羅蜜を行ずる時、若し說く所有らんことを欲せば、但だ般若波羅蜜のみを說く、般若波羅蜜を說き已りて常に般若波羅蜜を憶念す、常に般若波羅蜜を憶念し已りて常に般若波羅蜜を行

じ、餘念を生ずることを得しめず、晝夜に勤めて般若波羅蜜を行じ、相應の念息まず休まず。須菩提、譬へば士夫の未だ曾て摩尼珠を得ざるが如し。後時に得、得已りて大に歡喜し踊躍す。後復之を失ひて便ち大に憂愁し、常に是摩尼珠を憶念して是念を作さく、我れ奈何ぞ忽にして此大寶を亡ふやと。須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く、常に般若波羅蜜を憶念して薩婆若心を離れず。須菩提佛に白して言さく、世尊、一切念性自ら離れ、一切念性自ら空なり。云何ぞ菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、薩婆若に應ずる念を離れざるや。是れ遠離空法中には菩薩無く亦念も無く、薩婆若に應ずることも無ければなり。佛須菩提に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、是の如く一切法性自ら離れ、一切法性自ら空なるを知らば、聲聞辟支佛の作に非ず、亦佛の作に非ず、諸法の相は常に法相法住法位如實際に住す、是を菩薩の般若波羅蜜を行じ薩婆若を離れざる念と名く。何を以ての故に般若波羅蜜の性自離、性自空にして増せず減ぜざるが故に。須菩提佛に白して言さく、世尊、若し般若波羅蜜性自離性自空なれば、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜と等しく、阿耨多羅三藐三菩提を得るや。佛須菩提に告げたまはく、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜と等しく増せず減ぜず。何を以ての故に。如法性實際増せず減ぜざるが故に。所以は何ん、般若波羅蜜は一に非ず、異に非ざるが故に。若し菩薩是の如きの般若波羅蜜相を聞き、心驚かず沒せず畏れず怖かず疑はざれば、須菩提、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずと。當に知るべし、是菩薩摩訶薩は、必ず阿惟越致地中に住す。須菩提佛に白して言さ

く、『世尊、般若波羅蜜は空にして所有無く堅固ならずと、是れ般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、空を離れて更に法として行ずる般若波羅蜜行りや不や。』『不、須菩提。』『世尊、是般若波羅蜜は般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、般若波羅蜜を離れて般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、色は是れ般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、受想行識は是れ般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、六波羅蜜は是れ般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、四念處乃至十八不共法は是れ般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、色空相虛誑にして實ならず、所有無く、堅固相ならず、色如相、法相、法住、法位、實際は是れ般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、受想行識乃至十八不共法空相虛誑にして實ならず、所有無く、堅固相ならず、如相、法相、法住、法位、實際は是れ般若波羅蜜を行ずるや不や。』『不、須菩提。』『世尊、若し是諸法皆般若波羅蜜を行ぜざれば、云何なる行をか菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずと名くるや。』佛須菩提に告げたまはく『汝が意に於て云何、汝法として般若波羅蜜を行ずる者有るを見るや不や。』『不、世尊。』『須菩提、汝般若波羅蜜を菩薩摩訶薩の行ずべき處と見るや不や。』『不、世尊。』『須菩提、汝見ざる所の法、是法得べきや不や。』『不、世尊。』『須菩提、若し法得べからざれば、是法當に生ずべきや不や。』『不、世尊。』『須菩提、是を菩薩摩訶薩の無生法忍と名く。菩薩摩訶薩は是忍を成就して阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得。須菩提、是を諸佛の無

所畏無礙智と名く、菩薩摩訶薩は是法を行じ、勤精進して、若し大智一切種智を得ずば謂ゆる阿耨多羅三藐三菩提智、若し得ずとは、是處有ること無し。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は無生法忍を得るが故に、乃至阿耨多羅三藐三菩提は滅せず退せず。」須菩提佛に白して言さく『世尊、諸法は生相無し、此中に阿耨多羅三藐三菩提の記を得るや不や。』「不、須菩提。」『世尊、諸法の生相、此中に阿耨多羅三藐三菩提の記を得るや不や。』「不、須菩提。」『世尊、諸法無生相を生ず、此中に阿耨多羅三藐三菩提の記を得るや不や。』「不、須菩提。」『世尊、諸法は生に非ず不生相に非ず、此中に阿耨多羅三藐三菩提の記を得るや不や。』『不、須菩提。』『世尊、諸の菩薩摩訶薩は云何が諸法の阿耨多羅三藐三菩提の記を得ることを知るや。』佛須菩提に告げたまはく『汝法の阿耨多羅三藐三菩提の記を得るもの有るを見るや不や。』『不、世尊、我れ法の阿耨多羅三藐三菩提の記を得るもの有るを見ず、我れ亦法を得る者、得る處も有るを見ず。』佛言はく『是の如く是の如し、須菩提、若し菩薩摩訶薩一切法に於て所得無き時、時に是念を作さず、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。是事を用て阿耨多羅三藐三菩提を得、是を阿耨多羅三藐三菩提處と名く。何を以ての故に。諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、諸の億想分別無ければなり。所以は何ん、般若波羅蜜中には諸の分別億想無きが故に。』

摩訶般若波羅蜜經　卷第十九

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

魔愁品第六十二

【魔愁品】般若を持すれば諸佛の護念あるも亦魔緣あり、菩薩和合して共住同學すべきを明す。

【一】帝釋は般若功德の己れに勝り又諸天に超え、諸佛の護念あることを說く。

【餘心心數法を雜ふ】慳貪等六度を破る惡心、二乘心無記散亂心等をいふ。

【閻浮提の衆生の等】十善道等の功德大なるも諸法の實相を離るる故に虛妄にして牢固ならず、無常盡滅して多とするに足らざるなり。

(一)爾時、釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜甚深にして見難く、諸の憶想分別無し、畢竟離の故に。世尊、是衆生是般若波羅蜜を聞き、能く持し讀誦し說き正憶念し、親近し說の如く行じ、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで餘心心數法を雜へざる者、小功德より來らず。』佛言はく、『是の如く是の如し、是深般若波羅蜜を聞き、乃至餘心心數法を雜へざる者、小功德より來らず。憍尸迦、汝が意に於て云何、若し閻浮提の衆生、十善道四禪四無量心四無色定を成就するも、復善男子善女人有りて深般若波羅蜜を受持し、讀誦し親近し正憶念し、說の如く行ずれば、閻浮提の衆生の十善道乃至四無色定を成就するに勝ること、百倍千倍千萬億倍、乃至算數譬喩の能く及ばざる所なり。』爾時一比丘有り、釋提桓因に語りて言はく、『憍尸迦、是善男子善女人般若波羅蜜を行ずれば、功德仁者に勝る。』釋提桓因言はく、『是善男子善女人、一たび發心するだに我に勝る、何に況んや是般若波羅蜜を聞き、書持し讀誦し正憶念し、說の如く行ぜんをや。是善男子善女人、般若波羅蜜

【是の如く等】餘心なく方便心を以て般若を行ずるをいふ。

【佛の威神】甚深甚難の般若を佛前に說くは、佛光明威神を以てその身に入ればなり。

を行ずれば但に我に勝るのみに非ず、亦一切世間天及び人阿修羅に勝る。但に一切世間天及び人阿修羅に勝るのみに非ず、亦諸の須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛に勝る。但に是須陀洹乃至辟支佛に勝るのみに非ず、亦菩薩の五波羅蜜を行じ般若波羅蜜を遠離する者に勝る。但に菩薩の五波羅蜜を行じ般若波羅蜜を遠離する者に勝るのみに非ず、亦菩薩の般若波羅蜜を行じ方便力無き者に勝る。是菩薩摩訶薩說の如く般若波羅蜜を行じ、佛種を斷ぜず、常に諸佛を見、疾に道場に近づく。菩薩是の如く行ずるは、衆生の長流に沈沒する者を拔出せんと欲すと爲す。是菩薩是の如く學ぶは、聲聞辟支佛の學を學ばずと爲す。菩薩是の如く學すれば、四天王天來りて菩薩の所に至り是の如く言はく「善男子當に勤めて疾に學ぶべし。道場に坐し阿耨多羅三藐三菩提を成ずる時、過去の諸佛の受くる所の四鉢の如く、亦當に我當に持ち來りて菩薩に奉上すべきものを受くべし」と。及び諸の餘の天四天王天三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天梵天乃至首陀會天も亦當に供養すべし。十方の諸佛も亦常に是菩薩摩訶薩の說の如く、是深般若波羅蜜を行ずる者を念ずべし。是菩薩諸の有らゆる世間危難勤苦の事、永く復有ること無し。一切世間に四百四病有り、是菩薩の身中是諸の病無し。深般若波羅蜜を行ずるを以ての故に、是現世の功德を得。爾時、阿難是念を作さく、「釋提桓因自ら力を以て說くや、佛の神力を以て說くや。」釋提桓因阿難の意に念ずる所を知り、阿難に語りて言はく、「我の說く所皆佛の威神なり。」

【二】帝釋の說解も佛力に依るを示し、更に菩薩の魔に嬈亂せらるべき便あることを明す。

【魔都て諸の菩薩等】一切菩薩魔怨ありとするものあるを以て、嬈亂さるる菩薩あるかされざる菩薩あるかを明かにす。

【二地】聲聞辟支佛の二乘をいふ。

〔二〕佛阿難に告げたまはく、「是の如く是の如し、釋提桓因の說く所の如きは皆佛の威神なり。阿難、是菩薩摩訶薩の是般若波羅蜜を習學する時、三千大千世界の中の諸の惡魔皆狐疑を生ず、今是菩薩當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと爲んや、當に中道にして實際に於て證を作し、聲聞辟支佛地に墮すべきやと。復次に阿難、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を離れざる時、魔復大に愁毒すること箭の心に入るが如し。是時魔復大火を放ち、風四方に俱に起り、菩薩の心をして沒し恐怖し、薩婆若の中に懈怠し、乃至一亂念を起さしめんと欲す。」阿難佛に白して言さく、「世尊、魔都て諸の菩薩を嬈亂することを爲すや、嬈亂せざる者有りや。」佛阿難に告げたまはく、「嬈す者あり、嬈さざる者あり。」阿難佛に白して言さく、「世尊、何等の菩薩か惡魔の嬈す所となるや。」佛言はく、「菩薩摩訶薩ありて先世に是深般若波羅蜜を聞き、心に信解せず。是の如きの菩薩、魔其便を得。復次に阿難、菩薩是深般若波羅蜜を說くを聞く時、意に是般若波羅蜜を實有と爲んか實無と爲せんかを疑ふ。是の如きの菩薩、魔其便を得。復次に阿難、菩薩あり、善知識を遠離し、惡知識の攝する所と爲るが故に、深般若波羅蜜を聞かず、聞かざるが故に、云何が應に般若波羅蜜を行ずべく、云何が應に般若波羅蜜を修すべきやを知らず、見ず問はず、是菩薩、惡魔其便を得。復次に阿難、若し菩薩般若波羅蜜を遠離して惡法を受くれば、是菩薩、惡魔其便を得とす。魔是念を作さく、「是輩當に伴黨有るべし、當に我が願を滿すべし」と。是菩薩自ら二地に墮し、亦他人をして二地に墮せしむ。復次に阿難、若し菩薩深般若波羅蜜を說くを聞く時

【名姓多人知識】族姓の高貴、所緣眷屬の多きをいふ。

【宮殿空ならず】般若を輕賤する菩薩は魔怨を受け、その伴黨となりて魔宮を充たす。

【爾所の劫】それに相當する若干劫の意。

【出除】罪を除き脫出するをいふ。

他人に語りて言はく「是般若波羅蜜は甚深にして我れ尙底を得ること能はず、汝復是般若波羅蜜を聞くことを用い、學ぶことを用ひて爲んや」と。是の如きの菩薩魔其便を得。復次に阿難、若し菩薩餘の菩薩を輕んじて言はく「我れ般若波羅蜜を行じ、遠離空を行ず、汝是功德無し」と。是時惡魔大に歡喜し踊躍す。若し菩薩有りて自ら名姓多人知識を恃むが故に、餘の善を行ずる菩薩を輕んず。是人實の阿惟越致の行類相貌の功德無し、是功德無きが故に諸の煩惱を生じ、但に虛名に著するが故に餘人を輕賤して言はく「汝我が所得法の如き中に在らず」と。爾時惡魔是念を爲さく「今我が境界宮殿空ならず、三惡道を増益す」と。惡魔其威力を助け、餘人をして其語を信受せしむ。其語を信受するが故に其經を受行し、說の如く修學し、說の如く修學する時、諸の結使を増益す。是諸人心顚倒せるが故に、身口意業に作す所皆惡報を受く。是因緣を以て三惡道を増益し、魔の眷族宮殿益多し。阿難、魔是利を見るが故に、大に歡喜し踊躍す。阿難、若し菩薩道を行ずる者と聲聞道を求むる家と共に諍鬪すれば魔是念を作さく、「是れ薩婆若を遠離す」と。阿難、若し菩薩と菩薩と共に諍鬪し瞋恚し罵詈すれば、是時惡魔便ち大に歡喜し踊躍して言はく「兩ながら薩婆若を離るること遠し」と。復次に阿難、若し未だ記を受けざるの菩薩記を得たる菩薩に向ひて、惡心を生じ諍鬪し罵詈せば念を起す、多少劫に隨ひて、若干劫數、若し一切種智を捨せずば、然る後乃ち爾所の劫を補ひ大莊嚴す。「阿難佛に白して言さく、「世尊、是惡心乃ち爾所の劫數を經て、其中間に於て寧ろ出除することを得るや不や」と。佛阿難に告げ

【履踐】歩道に臥して踐ましむる供養。

【菩薩と菩薩と共に住するや】菩薩と共の共住同學を明す。

【一船等】船は六度、三界三漏を水となし、學とは六度等の同戒同見同道なり。

【等學品】菩薩の同學すべき眞實般若を明す。等法を學する故に等學と名く。

たまはく『我が菩薩道を求むるもの及び聲聞人出罪を得と說くと雖も、阿難、若し菩薩道を求むる人共に諍鬪し瞋恚し罵詈し恨を懷き、悔いず捨せざれば、我れ出づること有るを說かず、必ず當に爾所の劫數を更にすべし。若し一切種智を捨せざれば、然る後乃ち大莊嚴す。阿難、若し是菩薩鬪諍し瞋恚し罵詈せば、便ち自ら改悔して是念を作す、我れ大失を爲す、我れ當に一切衆生の爲に下屈し、今世後世皆和解せしむべし、我れ當に一切衆生の履踐を忍受すること橋梁の如く、聾の如く瘂の如くなるべし、云何が惡語を以て人に報ひんや。我れ應に是甚深阿耨多羅三藐三菩提心を壞すべからず、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、應に是一切苦惱の衆生を度すべし、云何が當に瞋恚を起すべけんや。』阿難佛に白して言さく『世尊、菩薩と菩薩と共に住するや云何。』佛阿難に告げたまはく『菩薩と菩薩と共に住し、相視ること當に世尊の如くすべし。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩應に是念を作すべし。是れ我の眞伴、共に一船に乘ず、彼の學し我が學する謂ゆる檀那波羅蜜乃至一切種智なり。若し是菩薩雜行して薩婆若心を離るれば、我れ是の如く學ぶべからず。若し是菩薩雜行せず、薩婆若心を離れざれば、我も亦應に是の如く學ぶべし。菩薩摩訶薩是の如く學ぶ者、是を同學と爲す。』

等學品第六十三

【一】菩薩の學すべき甚深同心の平等法を明す。先に衆生等忍を說き今品法等忍を說く。

【盡等】法本來不集不同合なるを盡といひ、離といひ滅といふ。

（一）須菩提佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の等法、菩薩應に學すべき所なりや。」「須菩提、內空是れ菩薩の等法、外空乃至無法有法空是れ菩薩の等法なり。須菩提、色色相空、受想行識識相空、乃至阿耨多羅三藐三菩提相空、須菩提、是を菩薩摩訶薩の等法と名く。是等法に住して阿耨多羅三藐三菩提を得。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩色盡の爲の故に學するを薩婆若を學すと爲す。色離の爲の故に學し、色滅の爲の故に學するを薩婆若を學すと爲す。色不生の爲の故に學するを薩婆若を學すと爲す。受想行識も亦是の如し。四念處乃至十八不共法を修行し盡離滅不生の故に學するを薩婆若を學すと爲す。」佛須菩提に告げたまはく、「須菩提の所說の如く、色盡離滅不生の爲の故に學するを薩婆若を學すと爲す、受想行識乃至十八不共法、盡離滅不生の故に學するを薩婆若を學すと爲す。」佛須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何、色如、受想行識如乃至阿耨多羅三藐三菩提如佛如、是の諸の如盡く滅斷するや不や。」須菩提言さく、「不、世尊。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、是の如く如を學するを薩婆若を學すと爲す。是如、證を作さず滅せず斷せず。須菩提、菩薩摩訶薩是の如く如を學するを薩婆若を學すと爲す。須菩提、菩薩摩訶薩是の如く學するを六波羅蜜を學すと爲し、四念處乃至十八不共法を學すと爲す。若は六波羅蜜乃至十八不共法を學するを薩婆若を學すと爲す。須菩提、是の如く學するを、諸の學邊を盡すと爲す、是の如く學せば魔若は魔天の壞すること能はざる所なり、是の如く學せば直に阿惟越致地に到る。是の如く學するを佛の所行の道を學すと爲

し、是の如く學するを擁護の法を得と爲し、大慈大悲を學すと爲し、淨佛國土成就衆生を學すと爲す。須菩提、是の如く學するを三轉十二行法輪を學すと爲す。是の如く學するを度衆生を學すと爲し、是の如く學するを不斷佛種を學すと爲す、是の如く學するを開甘露門を學すと爲す、是の如く學するを欲示無爲性を學すと爲す。須菩提、下劣の人は是學を作すこと能はず、是の如く學する者を生死に沈沒する衆生を拔かんと欲すと爲す。菩薩摩訶薩是の如く學せば、終に地獄餓鬼畜生中に墮せず、終に邊地に生ぜず、終に旃陀羅の家に生ぜず、終に聾盲瘖瘂拘躄とならず、諸根缺けず、眷屬成就して終に孤窮ならず。菩薩是の如く學せば、終に殺生せず、乃至終に邪見ならず。是の如く學せば、邪命活を作さず、惡人及び破戒者を攝せず、是の如く學せば、方便力を以ての故に長壽天に生ぜず。何等か是れ方便力なるや、般若波羅蜜品の中に說ける所の如し。菩薩摩訶薩方便力を以ての故に、四禪四無量心四無色定に入り、禪無量無色定に隨ひて生ぜず。須菩提、菩薩是の如く學せば、一切法中清淨、謂ゆる淨聲聞辟支佛心を得。』(二)須菩提佛に白して言さく『世尊、一切法本性清淨なり、云何が菩薩一切法中清淨を得と言ふや。』佛須菩提に告げたまはく『是の如く是の如し、一切諸法本性清淨なり。若し菩薩摩訶薩、是法中に於て心通達して沒せざれば、即ち是れ般若波羅蜜なり。是の如きの諸法一切凡夫人知らず見ず。菩薩摩訶薩は是衆生の爲の故に檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を行じ、四念處乃至一切種智を行ず。須菩提、菩薩是の如く學せば、一切法中に於て智力

【擁護の法】福德智慧具足して十方諸佛及び大菩薩諸天人等守護するをいふ。
【開甘露門】甘露とは無爲性、門とは三解脫門、之を說くを開くといふ。
【無爲性】如法性實際涅槃。
【下劣の人】懈怠放逸にして佛法を樂しまず、一心に道を行ぜずして罪福雜行するに名く。
【邪命活】俯仰方維の四邪生活。
【惡人】心惡なる者、破戒は身口非律にして惡なる者。
【淨】捨離無所有畢竟空なるに名く。
【二】般若の清淨通達を得るものを明す。

【慳貪心を生ぜず等】般若を學する故に諸煩惱を抑制し、煩惱未盡と雖も能く作すなし。【取色相心等】諸法虛誑不實と知る故に色乃至無上道相を取らず、即ち有無見中に墮せしめんと欲せざるが故に、直に中道を行じて菩薩行を集むるなり。【我見六十二見を攝す】我見は無明因緣にして斷常となり邪見となり五見となり、世間常無常前際後際等五十七見を生ずるなり。

を得、畏るゝ所無し。是の如く學するを一切衆生の心の趣向する所を了知すと爲す。譬へば大地少所の處金銀珍寶を出すが如し。須菩提、衆生も亦是の如く、少所の人能く般若波羅蜜を學し、多くは聲聞辟支佛地に墮す。須菩提、譬へば少所の人轉輪聖王の業を受行し、多くは小王の業を受行するが如し。是の如く須菩提、少所の衆生般若波羅蜜を行じ一切智を求め、多くは聲聞辟支佛道を行ず。須菩提、諸の菩薩摩訶薩發心して阿耨多羅三藐三菩提を求むる中に、少く說の如く行ずるものあり、多くは聲聞辟支佛地に住す。多く菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるものの有るも、方便力無きが故に、少所の人阿惟越致地に住す。須菩提、是を以ての故に、菩薩摩訶薩阿惟越致地に住せんと欲し、阿惟越致數中に住せんと欲せば、應に是深般若波羅蜜を學すべし。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は是般若波羅蜜を學する時慳貪心を生ぜず、破戒瞋恚懈怠散亂愚癡心を生ぜず、諸餘の過失心を生ぜず、取色相心、取受想行識相心を生ぜず、取四念處相心を生ぜず、乃至取阿耨多羅三藐三菩提相心を生ぜず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は是深般若波羅蜜を行ずるも、法の得べきもの有ること無ければなり。不可得を以ての故に、諸法に於て心取相を生ぜず、須菩提、菩薩摩訶薩是の如く深般若波羅蜜を學し、諸波羅蜜を總攝して、諸波羅蜜をして諸波羅蜜を增長し、悉く隨從せしむ。何を以ての故に。須菩提、是深般若波羅蜜は諸波羅蜜悉く中に入ればなり。須菩提、譬へば我見中に悉く六十二見を攝するが如し。是の如く須菩提、是深般若波羅蜜悉く諸波羅蜜を攝す。須菩提、譬へば人死すれば命根滅するが故

【三】希有最勝なる眞の般若行を說く。

に、餘根悉く隨て滅するが如し。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜を行ずる時、諸波羅蜜悉く隨從す。須菩提、菩薩摩訶薩諸波羅蜜をして彼岸に度せしめんと欲せば、應に深般若波羅蜜を學すべし。

（一）須菩提、菩薩摩訶薩の是深般若波羅蜜を學する者、一切衆生の上に出づ。須菩提、汝が意に於て云何、三千大千世界中の衆生多きや不や。」須菩提言さく、「一閻浮提中の衆生尙ほ多し、何に況んや三千大千世界をや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し三千大千世界中の衆生一時に皆人身を得、悉く阿耨多羅三藐三菩提を得たらんに、若し菩薩ありて形壽を盡し爾所の佛に衣服飮食臥具湯藥資生の所須を供養せば、須菩提、汝が意に於て云何、是人是因緣を以ての故に、福德を得ること多きや不や。」須菩提言さく、「甚だ多く甚だ多し。」佛言はく、「是善男子善女人、般若波羅蜜を學し、說の如く行じ、正憶念するの福を得ること多きには如かず。何を以ての故に、般若波羅蜜は勢力ありて、能く菩薩摩訶薩をして阿耨多羅三藐三菩提を得しむればなり。須菩提、是を以ての故に菩薩摩訶薩一切衆生の上に出でんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。救護無き衆生の爲に救護を作さんと欲し、歸依無き衆生の與に歸依を作さんと欲し、究竟道無き衆生の與に究竟道を作さんと欲し、盲者の爲に目を作さんと欲し、佛の功德を得んと欲し、諸佛の自在遊戲を作さんと欲し、諸佛の師子吼を作さんと欲し、佛の鐘鼓を撞擊せんと欲し、佛の貝を吹かんと欲し、佛の高座に昇りて法を說かんと欲し、一切衆生の疑を斷ぜんと欲せば、當に深般若波羅蜜を學

すべし。須菩提、菩薩摩訶薩若し深般若波羅蜜を學せば、諸の善功德事として得ざるもの無し。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、寧ろ復聲聞辟支佛の功德を得るや不や。」佛言はく、「聲聞辟支佛の功德も皆能く得、但中に於て住せざるのみ。智を以て觀じ已りて、直ちに過ぎて菩薩位中に入る。須菩提、菩薩摩訶薩是の如く學せば薩婆若に近づき、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提、菩薩摩訶薩是の如く學せば、一切世間の天及び人阿修羅の爲に福田を作す。須菩提、菩薩摩訶薩是の如く學せば、諸の聲聞辟支佛の福田の上を過ぎて、疾に薩婆若に近づく。須菩提、菩薩摩訶薩是の如く學す、是を般若波羅蜜を捨せず離せず、常に般若波羅蜜を行ずと名く。須菩提、菩薩摩訶薩是の如く深般若波羅蜜を學せば、當に知るべし是れ不退轉の菩薩なり、疾に薩婆若に近づき、聲聞辟支佛を遠離して、阿耨多羅三藐三菩提に近づくと。須菩提、是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、若し是念を作さく、「是れ般若波羅蜜なり、我れ是般若波羅蜜を以て一切種智を得」と、若し是の如く念ずるを般若波羅蜜を行ずと名けず。須菩提、若し是念を作さず、是れ般若波羅蜜なり、是人般若波羅蜜有り、是れ般若波羅蜜法なり、是人は是般若波羅蜜を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得と、是を般若波羅蜜を行ずと名く、須菩提、若し菩薩是念を作さく、「是般若波羅蜜無く、人の是般若波羅蜜行ずる無く、是般若波羅蜜を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得るもの有ること無し」と。何を以ての故に。一切法如法性實際常住の故に。是の如く行ずる、是を菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずと名く。」

【淨願品】隨喜の德を明し如幻無分別の成佛あるを示す。

【一】發心菩薩の勝德を隨喜することを明す。

【菩薩摩訶薩は等】諸度菩薩道を行ずるものの但だ發心するに勝ることを說く。

【是諸の衆生にして等】發心菩薩の未發心者に勝れたることを說く。

【壽命】二種命あり、一に命根、二に慧命なり、慧命をうるを慧命の最とす。

淨願品第六十四

(一)爾時、釋提桓因是念を作さく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜乃至十八不共法を行ずる時、一切衆生の上に出づ、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得る時をや。是の諸の衆生にして、是薩婆若を聞き信解する者は、人中の善利壽命中の最を得、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提の意を發すをや。是衆生能く阿耨多羅三藐三菩提の意を發せば、其餘の衆生應當に願樂すべし」と。爾時、釋提桓因は天の曼陀羅華を以て佛の上に散じ、是言を發す、「是福德を以て、若し阿耨多羅三藐三菩提を求むる者有れば、此人をして佛法を具足し、一切智を具足し、自然法を具足せしむ。若し聲聞を求むる者には聲聞法を具足せしむ。世尊、若し菩薩有りて阿耨多羅三藐三菩提の意を發せば、我れ終に一念を生じて其をして轉還せしめず、我れ亦一念を生じて其をして轉還し、聲聞辟支佛地に墮せしめず。世尊、我れ願くば諸の菩薩、倍復阿耨多羅三藐三菩提に於て精進し、衆生生死の中の種種の苦惱を見、一切世間の天及び人阿修羅を利益し安樂にせんと欲す、是心を以て是願を作す。我れ既に自ら度す、亦當に未だ度せざる者を度すべし。我れ既に自ら脫す、當に未だ脫せざる者を脫すべし。我れ既に安隱なり、當に未だ安らかならざる者を安んずべし。我れ既に滅度す、當に未だ滅度に入らざ

【諸心にして等】諸の隨喜せざる者の諸の惡心積集するをいふ。

【三尊】三世の諸尊、或は初發心、久發心、不退菩薩。

【不一不二】諸法に定相あり、因緣に屬せざるものを見ざる故に不一といひ、隨喜心廻向心を分別せざるが故に不二と名く。

る者をして滅度を得しむべし。世尊、善男子善女人は、初發意菩薩の功德を隨喜する心に於て、幾許の福德を得るや。久發意菩薩の功德を隨喜する心に於て、幾許の福德を得るや。阿惟越致菩薩の功德を隨喜する心に於て、幾許の福德を得るや。一生補處の菩薩の功德を隨喜する心に於て、幾許の福德を得るや。佛、釋提桓因に告げて言はく、「憍尸迦、四天下の國土は斤兩を稱知すべきも、是隨喜の福德は、稱量すべからず。復次に憍尸迦、是三千大千世界は皆斤兩を稱知すべきも、是隨喜心の福德は稱量すべからず。復次に憍尸迦、三千大千世界の中に滿つる海水、一髮を取り破して百分と爲し、一分の髮を以て海水を渧取するに、渧數を知るべきも、是隨喜心の福德は數を知るべからず。」釋提桓因佛に白して言さく、「世尊、若し衆生にして心に阿耨多羅三藐三菩提を隨喜せざる者は、皆是れ魔の眷屬なり。諸心にして隨喜せざる者は魔中より來り生ず。何を以ての故に。世尊、是諸の隨喜心を發せる菩薩は、魔の境界を破せんが爲の故に生ずればなり。是故に三尊を愛敬せんと欲する者は、應に隨喜心を生ずべし、隨喜し已て應に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし、不一不二相なるを以ての故に。」佛言はく、「是の如く是の如し、憍尸迦、若し人有り、菩薩に於て、心に能く是の如く隨喜し廻向せば、常に諸佛に値ひ、終に惡色を見ず、終に惡聲を聞かず、終に惡香を嗅がず、終に惡味を食はず、終に惡觸に觸れず、終に惡念に隨はず、終に諸佛を遠離せず、一佛土より一佛土に至り、諸佛に親近して善根を種う。何を以ての故に。善男子善女人は、無量阿僧祇の初發意の菩薩の爲に諸善根を隨喜し廻向

【二】如幻の心成佛することを明す

し、無量阿僧祇第二地第三地乃至第十地一生補處の諸の菩薩摩訶薩の爲に善根を隨喜して阿耨多羅三藐三菩提に廻向すればなり。是善根の因緣を以ての故に、疾に阿耨多羅三藐三菩提に近づく。是諸の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、無量無邊阿僧祇の衆生を度す。憍尸迦、是因緣を以ての故に、善男子善女人は、初發意菩薩の善根に於て應に隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべきも、心に非ず心を離るるに非ず。久發意阿惟越致一生補處の善根に於て隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、心に非ず心を離るるに非ず。」

(二)須菩提佛に白して言さく「世尊、是心は幻の如し、云何が能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや。」佛須菩提に告げたまはく「汝が意に於て云何、汝是心の幻の如くなるを見るや不や。」「不、世尊。我れ幻を見ず、亦心の幻の如くなるを見ず。」「須菩提、汝が意に於て云何、若し幻無く、亦心の幻の如くなる無くんば、汝是心を見るや不や。」「不、世尊。」「須菩提、汝が意に於て云何、幻を離れ、心の幻の如くなるを離れて、汝更に法の阿耨多羅三藐三菩提を得ること有るを見るや不や。」「不、世尊。我れ幻を離れ、心の幻の如くなるを離れて、更に法の阿耨多羅三藐三菩提を得ること有るを見ず。世尊、我れ更に法有るを見ず、何等の法か若は有なり若は無なりと說くべけんや、是法相畢竟離なるが故に、有に墮せず、無に墮せず。若し法の亦畢竟離なる者、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はずんば、無所有の法も亦阿耨多羅三藐三菩提を得べからず。何を以ての故に。

【二離】能得も所得もともに畢竟離なること。

【三】畢竟離を行ずる甚深なるを明す。

世尊、一切の法は無所有にして、是中に垢者無く淨者無ければなり。世尊、是を以ての故に、般若波羅蜜は畢竟離なり、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜も畢竟離なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦畢竟離なり、若法畢竟離なれば則ち修すべからず壞すべからず、般若波羅蜜を行ずるも亦法の得べきもの有ること無し、畢竟離なるが故に。世尊、若し般若波羅蜜畢竟離なれば、云何が般若波羅蜜に因て、阿耨多羅三藐三菩提を得るや。阿耨多羅三藐三菩提も亦畢竟離なり、二離の中云何が能く所得有らん。」佛須菩提に告げたまはく、「善い哉、善い哉、是般若波羅蜜は畢竟離なり、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜も畢竟離なり、乃至一切種智も畢竟離なり。須菩提、若し般若波羅蜜畢竟離、乃至一切種智畢竟離なれば、是を以ての故に、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提、若し般若波羅蜜畢竟離に非ず、乃至一切種智畢竟離に非ざれば、是を般若波羅蜜と名けず、禪那波羅蜜乃至一切種智と名けず。須菩提、若し般若波羅蜜畢竟離、乃至一切種智畢竟離なれば、是を以ての故に、須菩提、般若波羅蜜に因て阿耨多羅三藐三菩提を得ざるに非ざるも、亦離を以て離を得ず、而も阿耨多羅三藐三菩提を得るは、般若波羅蜜に因らざるに非ず。」

(三)須菩提佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩の行ずる所の義は甚深なり。」佛言はく、「是の如し、須菩提、菩薩摩訶薩の行ずる所の義は甚深なり。須菩提、諸の菩薩摩訶薩は能く難事を爲す、謂ゆる是深義を行じて、而して聲聞辟支佛地を證せず。」須菩提佛に白し

【難しと爲さず】第一義諦を以て說くなり。先に甚深難事といへるは俗諦に於てするなり。

【所因の者】鏡の前にありて影を映ずるものをいふ。

て言さく、「世尊、我が佛に從ひて聞く義の如くんば、菩薩摩訶薩の行ずる所難しと爲さず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は、是義を得て證を作すべからず、亦般若波羅蜜を得て證を作さず、亦證を作す者も無ければなり。若し一切法得べからざれば、何等か是義證を作す可く、何等か是般若波羅蜜證を作し、何等か是れ證を作す者にして、證を作し已て阿耨多羅三藐三菩提を得んや。世尊、是を菩薩摩訶薩の無所得行と名く。菩薩は是を行じて、一切法に於て皆明了なることを得。世尊、若し菩薩摩訶薩、是法を聞きて心驚かず、沒せず怖かず畏れざれば、是を名けて般若波羅蜜を行ずと爲す。是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、我れ般若波羅蜜を行ずるを見ず、亦是般若波羅蜜を見ず、亦我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得るを見ず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、是念を作さざればなり。聲聞辟支佛地は我を去ること遠く、薩婆若は我を去ること近しと。世尊、譬へば虛空の是念を作さざる如し、法有り我を去ること遠く、我を去ること近しと。何を以ての故に。世尊、虛空は分別無きが故に。世尊、般若波羅蜜を行ずる菩薩も亦是念を作さず、聲聞辟支佛地は我を去ること遠く、薩婆若は我を去ること近しと。何を以ての故に、般若波羅蜜の中には分別無きが故に。世尊、譬へば幻人の是念を作さざるが如し、幻師は我を去ること近く、觀人は我を去ること遠しと。何を以ての故に。幻人は分別無きが故に。般若波羅蜜を行ずる菩薩も是念を作さず、聲聞辟支佛地は我を去ること遠く、薩婆若は我を去ること近しと。世尊、譬へば鏡中の像の念を作さざるが如し、所因の者は我

【四】諸法無分別にして迷悟あるを明す。

を去ること近く、餘の者は我を去ること遠しと、何を以ての故に。像は分別無きが故に。般若波羅蜜を行ずる菩薩も亦是念を作さず、聲聞辟支佛地は我を去ること遠く、薩婆若は我を去ること近しと。何を以ての故に。般若波羅蜜の中には分別無きが故に。世尊、般若波羅蜜を行ずる菩薩は愛無く、憎無し。何を以ての故に。般若波羅蜜の自性得べからざるが故に。世尊、譬へば佛の愛無く憎無きが如く、般若波羅蜜を行ずる菩薩の愛無く、憎無きも亦是の如し。何を以ての故に。般若波羅蜜の中には憎無く愛無きが故に。世尊、譬へば佛の一切の分別想斷ずるが如く、般若波羅蜜を行ずる菩薩も、亦是の如く一切分別想斷ず、畢竟空なるが故に。世尊、譬へば佛所化の人の是念を作さざるが如し。聲聞辟支佛、我を去ること遠く、阿耨多羅三藐三菩提は我を去ること近しと。何を以ての故に。佛所化の人は分別無きが故に、般若波羅蜜を行ずる菩薩も亦是の如く是念を作さず、聲聞辟支佛は我を去ること遠く、阿耨多羅三藐三菩提は我を去ること近しと。世尊、譬へば所爲有るが故に化を作すも、化の所作の事分別無きが如く、世尊、般若波羅蜜も亦是の如く、所爲の事有りて、而して是事を修し成就す、而して般若波羅蜜も亦分別無し。世尊、譬へば工匠、若は工匠の弟子、所爲有るが故に、木人、若は男若は女、象馬牛羊を作る、是所作も亦能く所作有り、是牛馬も亦分別無きが如く、世尊、般若波羅蜜も亦是の如し、所爲有るが故に、是事を說き成就す、而して般若波羅蜜も分別無きなり。

(四)舍利弗須菩提に問はく、「但だ般若波羅蜜のみ分別無きや、禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜

【本業報】業に隨つて身を受く。業に著は貪欲を本とす。但だ欲のために逼られて著心を生するにして諸法に定相あることなし。

も亦分別無きや。」須菩提舍利弗に語らく、「禪那波羅蜜分別無し、乃至檀那波羅蜜も亦分別無し。」「舍利弗須菩提に問はく、「色分別無く、乃至識も亦分別無く、眼乃至意も分別無く、色乃至法も分別無く、眼識觸乃至意識觸も分別無く、眼觸因緣生の受、乃至意觸因緣生の受、四禪四無量心四無色定、四念處乃至八聖道分、空無相無作、佛の十力四無所畏四無礙智、大慈大悲十八不共法、阿耨多羅三藐三菩提、無爲性も亦分別無し。須菩提、若し色分別無く、乃至無爲性分別無く、若し一切法分別無ければ、云何が分別して六道生死有りや、是れ地獄、是れ餓鬼、是れ畜生、是れ天、是れ阿修羅なりと。云何が是れ須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、諸佛と分別するや。」須菩提舍利弗に報ふらく、「衆生顛倒の因緣の故に、身口意業を造作し、本業報に隨ひて六道身地獄餓鬼畜生人天阿修羅の身を受く。」「汝の言ふ如くんば、云何が分別して須陀洹乃至佛道有るや。」「舍利弗、須陀洹は即ち是れ分別無きが故に有り、須陀洹果も亦是れ分別無きが故に有り、乃至阿羅漢阿羅漢果、辟支佛辟支佛道、佛佛道も亦是れ分別無きが故に有り。舍利弗、過去の諸佛も亦是れ分別無く、分別を斷ずるが故に有り。是を以ての故に、舍利弗、當に知るべし、一切法分別有ること無しと、不壞相諸法如法性實際の故に。舍利弗、是の如く菩薩摩訶薩は、應に無分別般若波羅蜜を行じ、無分別般若波羅蜜を行じ已りて、便ち無分別阿耨多羅三藐三菩提を得べし。」」

【度空品】衆生なくして衆生を度すること虚空を度するが如きを初めに説き、次に魔能く壊せざる因縁を明し、諸天諸佛菩薩の稱揚を説く。【一】眞不眞うべからずして等法なり、衆生得べからずして能く衆生を度するは菩薩の難行たるを明す。【眞實法】決定して變異せず、取るべく著すべし、無眞實は虛誑妄語なり、眞不眞共に過あるを以て問ふ。【無眞實】般若空にして定相なく分別なきをいふ。

度空品第六十五

（一）舍利弗、須菩提に語らく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるを眞實法を行ずと爲すや、無眞實法を行ずと爲すや。」須菩提舍利弗に報ふらく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる、無眞實法を行ずと爲す。何を以ての故に。是般若波羅蜜は無眞實、乃至一切種智は無眞實なるが故に。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるも無眞實得べからず、何に況んや眞實をや。乃至一切種智を行ずるも無眞實法得べからず、何に況んや眞實法をや。」爾時、欲色界の諸天子是念を作さく、「諸の善男子善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提の意を發し、深般若波羅蜜に說く所の義の如く行じ、等法に於て實際證を作さず、聲聞辟支佛地に墮せず、應に當に爲に禮を作すべし」と。須菩提諸天子に語らく、「諸の菩薩摩訶薩は、等法に於て聲聞辟支佛地を證せざるを難しと爲さず。諸の菩薩摩訶薩は大莊嚴し、我れ當に無量無邊阿僧祇の衆生を度すべし、衆生の畢竟不可得なることを知て而も衆生を度す、是を乃ち難しと爲す。諸天子、諸の菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提心を發して是願を作す、我れ當に一切の衆生を度すべし、衆生實に得べからざれば、是人の衆生を度せんと欲するは、虚空を度せんと欲するが如し。何を以ての故に。虚空離なるが故に、當に知るべし、衆生も亦離なり。虚空空なるが故に、當に知るべし、衆生も亦空なり。虚空堅固なる無し、當に知る

【一】般若を行じて心沒せざる者は佛の如く敬禮せらるることを明す。

べし、衆生も亦堅固なること無し、虚空虚誑なり、當に知るべし、衆生も亦虚誑なればなり。諸天子、是因緣を以ての故に、當に知るべし、菩薩の作す所を難しと爲す。無所有の衆生を利益せんが爲の故に、而も大莊嚴すればなり。是人は衆生の爲に誓を結び、虚空と共に鬪はんと欲することを爲す。是菩薩は誓を結び已るも、亦衆生を得ず、而も衆生の爲に誓を結ぶ。何を以ての故に。衆生離なるが故に、當に知るべし、大誓も亦離なり、衆生虚誑なるが故に、當に知るべし、大誓も亦虚誑なればなり。若し菩薩摩訶薩、是深法を聞きて、心驚かず沒せざれば、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ず。何を以ての故に、色の離なる即ち是れ衆生の離なり、受想行識の離なる即ち是れ衆生の離なり、色の離なる即ち是れ六波羅蜜の離なり、乃至一切種智の離なる即ち是れ六波羅蜜の離なればなり。若し菩薩摩訶薩、是一切諸法の離相を聞きて、心驚かず沒せず怖かず畏れざれば、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ず。」

【一】佛、須菩提に告げたまはく、「何の因緣の故に、菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜の中に於て、心沒せざるや。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、般若波羅蜜無所有なるが故に沒せず、般若波羅蜜離なるが故に沒せず、般若波羅蜜寂滅なるが故に沒せず。世尊、是因緣を以ての故に、菩薩は深般若波羅蜜の中に於て、心沒せざるなり。何を以ての故に。是菩薩、沒者を得ず、沒事を得ず、沒處を得ず。是一切法皆得べからざるが故に。世尊、若し菩薩摩訶薩、是法を聞きて心驚かず、沒せず怖かず畏れざれば、當に知るべし、是菩薩は般若波羅蜜

【世界主天】欲界餘の天主、衆生多くこの天ありと信ず。

【三】魔の壞する能はざる因緣を明す。

【一切法空等】空慧は慧眼により、一切衆生を捨てざるは法眼による慈悲なり。これを慈空の二道ともいふ。

【所作言ふ所の如く】言行實なり、諸天神は妄語人を輕賤し、金剛神は捨離して守護せず。

【善男子、汝疾に等】諸天は授記の力なきも長壽により、諸佛の授記を知るを以てこの言をなす。

を行ずと爲す。何を以ての故に。沒者沒事沒處、是法皆得べからざるが故に。菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を行ずれば、諸天及び釋提桓因天、梵天王天及び世界主天皆爲に禮を作す。佛須菩提に告げたまはく、「但だ釋提桓因、諸天梵王及び諸天世界主、及び諸天是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるを禮するのみならず、是上を過ぎたる光音天遍淨天廣果天淨居天、皆是菩薩摩訶薩の爲に禮を作す。須菩提、今現に在ます十方無量の諸佛も亦是般若波羅蜜を行ずる菩薩摩訶薩を念ず。當に知るべし、是菩薩を佛の如しと爲す。須菩提、若し如恆河沙等の國土の中の衆生をして悉く魔と爲らしめ、是一一の魔、復魔を化作し、如恆河沙等の魔たりとも、是一切の魔も菩薩の般若波羅蜜を行ずるを留難することと能はず。

(三)須菩提、菩薩摩訶薩は二法を成就す、魔、壞すること能はず。何等か二なる。一切法空を觀ずると、一切衆生を捨てざるとなり。須菩提、菩薩此二法を成就し、魔壞すること能はざるなり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は復二法行りて成就す、魔壞すること能はず、何等か二なる。所作言ふ所の如くなると、亦諸佛の念ずる所たるとなり。菩薩此二法を成就し、魔壞すること能はず。須菩提、菩薩是の如く行ぜば、是諸天皆菩薩の所に來到して親近し、諮問し勸喩し、安慰して是言を作さく、「善男子、汝疾に阿耨多羅三藐三菩提を得る久しからず、善男子、汝常に當に是空無相無作の行を行ずべし。何を以ての故に。善男子、汝是行を行ぜば、無護の衆生の爲に汝護と作り、無依の衆生の爲に依と作り、無救

【寶相等】二菩薩稱揚の經論は滅後傳はらず、これ未得忍にして能く得忍に似、大悲深くして速疾作佛を期せざる大士なりと大論はいふ。

【尸棄】シキン(Sikhin)持髻と譯す。

の衆生の爲に救と作り、無究竟道の衆生の爲に究竟道と作り、無歸の衆生の爲に歸と作り、無洲の衆生の爲の洲と作り、冥者の爲に明と作り、盲者の爲に眼と作ればなり。」何を以ての故に、是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるに、十方現在の無量阿僧祇の諸佛大衆中に在まして法を說きたまふ時、自ら是菩薩摩訶薩の名性を讃歎し稱揚して言はく「某甲菩薩は般若波羅蜜の功德を成就す」と。須菩提、我れ今法を說く時、自ら寶相菩薩尸棄菩薩を稱揚するが如く、復諸の菩薩摩訶薩有り、阿閦佛國中に在りて般若波羅蜜を行じ梵行を淨修せば、我も亦是菩薩の名姓を稱揚す。須菩提、亦東方現在の諸佛の法を說く時、是中に菩薩摩訶薩有りて梵行を淨修せば、佛も亦歡喜して自ら是菩薩を稱揚し讃歎するが如く、南西北方四維上下も亦是の如し。復菩薩有りて初發意より佛道を具足し、乃至一切種智を得んと欲す。諸佛の法を說きたまふ時も亦歡喜して自ら是菩薩を稱揚し讃歎す。何を以ての故に、是諸の菩薩摩訶薩の行ずる所甚だ難くして、佛種行を斷ぜざればなり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、何等の菩薩摩訶薩か、諸佛の法を說きたまふ時、自ら讃歎し稱揚するや。」佛須菩提に告げたまはく、「阿惟越致の菩薩、諸佛の法を說きたまふ時、自ら讃歎し稱揚す。」須菩提言さく、「何等の阿惟越致の菩薩か、佛の讃する所と爲るや。」佛言はく、「阿閦佛の菩薩たりし時、行ぜられ學せられしが如く、諸の菩薩も亦是の如く學す。是諸の阿惟越致の菩薩、諸佛の法を說きたまふ時、歡喜し讃歎す。復次に須菩提、菩薩有りて般若波羅蜜を行じ、一切の法の無生なることを信解するも、未だ無生忍法を得ず。

【四】無所得にして一切智に住する義を明す。

一切の法の空なることを信解するも、未だ無生忍法を得ず。一切の法の虚誑不實無所有不堅固なることを信解するも、未だ無生忍法を得ず。須菩提、是の如き等の諸の菩薩摩訶薩諸佛の法を說きたまふ時、歡喜して自ら名字を讃歎し稱揚す。須菩提、若し諸の菩薩摩訶薩諸佛の法を說きたまふ時、歡喜して自ら讃歎せば、是菩薩は聲聞辟支佛地を滅し、當に阿耨多羅三藐三菩提の記を得べし。須菩提、若し菩薩摩訶薩、諸佛の法を說きたまふ時歡喜せば、是菩薩は當に阿惟越致地に住すべし。是地に住し已りて當に薩婆若を得べし。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は是深般若波羅蜜を聞く時、其心明利にして疑はず悔いず、是念を作さく『是事佛の說きたまふ所の如し』と。是菩薩も亦當に阿閦佛及び諸菩薩の所に於て、廣く是深般若波羅蜜を聞きて、亦信解すべし。信解し已りて佛の說きたまふ所の如く當に阿惟越致地に住すべし。是の如く須菩提、但だ般若波羅蜜を聞くのみにして大利益を得、何に況んや信解し、信解し已りて說の如く住し、說の如く行じ、說の如く住し說の如く行じ已りて、一切種智の中に住するをや。』

(四)須菩提佛に白して言さく『世尊、若し佛說の菩薩摩訶薩、所說の如く住し、所說の如く行じて薩婆若に住するも、若し菩薩摩訶薩、所得の法無ければ、云何が薩婆若に住するや。』佛須菩提に告げたまはく『菩薩摩訶薩は諸法如の中に住して薩婆若に住す。』須菩提言さく、『世尊、如を除きて更に法の得べき無し、誰か如の中に住し、如の中に住し已りて當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや、誰か如の中に住して當に說法すべけんや、如も尚得べから

ず、何に況んや如に住して阿耨多羅三藐三菩提を得るをや、誰か如の中に住して、而して法を說かん、是處有ること無し。』佛須菩提に告げたまはく、『汝の言ふ所の如く、如を除きて更に法無し、誰か如の中に住し已りて當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや、誰か如の中に住して當に法を說くべけんや、如も倘得べからず、何に況んや如に住して阿耨多羅三藐三菩提を得るをや、誰か如の中に住して而して法を說かんや、是處有ること無しとは。』佛言はく、『是の如く是の如し、須菩提、如を除きて更に法の得べきもの有ること無し、誰か如の中に住し、如の中に住し已りて當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや、誰か如の中に住して當に法を說くべけんや、如も倘得べからず、何に況んや如に住して阿耨多羅三藐三菩提を得るをや、誰か如の中に住して而して法を說かんや。何を以ての故に。是の如の生得べからず、滅得べからず住異得べからず。若し法、生滅住異得べからざれば、是の中誰か當に如に住し、誰か當に如に住し已りて阿耨多羅三藐三菩提を得、誰か當に如に住して而して法を說くべけんや。是處有ること無ければなり。』釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、諸の菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難くして、深般若波羅蜜の中に阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。何を以ての故に。世尊、如の中に住する者有ること無く、亦當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき者も無く、亦法を說く者無きも、菩薩摩訶薩は是處に於て心驚かず沒せず、怖かず畏れず、疑はず悔いざればなり。』爾時、須菩提釋提桓因に語らく、『汝憍尸迦、菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難く、是甚深法中に心驚かず沒せず、怖かず畏れ

【但だ空事】色等の餘事を說くも義皆空に歸す。
【罣礙する所無し】如何なる難問あるも礙を作す能はず。
【箭】矢盡き墮つるも空盡くるにあらず、須菩提說法因緣の事辨ずる故便ち止むのみ、法盡くるとなすに非ず。

ず、疑はず悔いずと說く。憍尸迦、諸法空の中、誰か驚き、誰か沒し、誰か怖き、誰か畏れ、誰か疑ひ、誰か悔ゆるや。』是時、釋提桓因須菩提に語らく、『須菩提の說く所但だ空事のみと爲し、罣礙する所無し。譬へば仰いで空中に射るに、箭去て礙ぐる無きが如し。須菩提の說法の無礙なることも亦是の如し。』

昭和三年九月五日印刷
昭和三年九月十五日發行

昭和新纂 國譯大藏經 經典部第三卷

不許複製

編纂者 昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者 東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者 東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

發行所 東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社 東方書院
電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

印刷所 西村由太郎 · 製本所 眞貝定次郎

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3886